ふりちりすべる

ぱじゃまくんくん男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふりちりすべる

【Ｎコード】
Ｎ４９６８Ｓ

【作者名】
ぱじゃまくんくん男

【あらすじ】
志摩の湯の因縁から、早八年。それは風があっという間に吹き抜けていったような歳月であった。
薄氷の上を進むようにして、地獄の淵をくぐり抜けてきた牛太郎。一方、遙かなる京を目前にしながら、天命に逆らえなかった山県三郎兵衛尉。因縁を越えて、二人が背負うものは、織田、武田、それぞれの天下への野望であった。「決戦」　今、築田出羽守政綱は、天下無双の山県赤備えを迎え撃つ。

キラメキ昇る

尾張国から美濃国にかけて、稲穂は見渡す限りに青々とうちなびいていた。

肥沃なこの土地において、朝日のようにきらめき昇り立った織田家。

その家中に簗田という家があった。

他の織田家臣団と同様、岐阜城のある稲葉山のふもとに、簗田家も屋敷を構えている。

空は暮れなずんでいた。森のひぐらしが、過ぎ去りつつある夏をしのぶかのように、寂しげに鳴いている。

しかし、簗田家の屋敷から飛び出してきた怒号に、ひぐらしの音はぴたりと止んだ。

「どうして、何も言わずに行方をくらますのじゃっ！　わらわがどれほど心配したことか、わかっておるのかあっ！」

この屋敷に住む女房の恐ろしさは、濃尾平野のはしにまで知れ渡っている。

「わかっておるのかと訊いておるのじゃっ！」

普段は美しい。肩にかかるかかからないかの黒髪は齢三十を越えても艶やかで、吊り上がりぎみの目尻は生娘のように澄んでいる。

実兄は重臣の柴田権六郎勝家。猛将の兄でさえ、この人の顔を真っ赤に染め上げての形相には震え上がる。

「は、はいっ。わ、わかっております」

と、この夫は当然ながら肥えた顔を青くさせ、大きな体を縮こまらせていた。

婚姻を上げてからどのくらいの歳月を経たであろう。いまだに頭が上がらない。いや、上がらないどころか、ときには踏み潰される。

実際、妻はおもむろに立ち上がった。ばちん、と、夫の頬を一度平手で打ったあと、右足で頭を容赦なく踏みつける。

「わかっておるのなら、なぜ、文の一通も寄越さんのじゃ！」

妻は梓という。夫は牛太郎という。

いや、牛太郎は簗田家の主なのである。どころか、左衛門尉という官位を朝廷から賜ってさえいる。

しかし、足の裏に屈している。

そもそも、牛太郎に弁解の余地はなかった。

二か月近く、誰に何を告げることもなく行方をくらまし、京にある相国寺で隠遁まがいの暮らしをひっそりと送っていたのだった。

家出である。

「摂津や堺にかかりきりである亭主殿をわらわが咎めたことがあったか！　わらわは亭主殿が文を送ってくれると信じておるから何も言わずにおったのだ！　それなのに、なんなのじゃ、この仕打ちは！」

「い、いや、でも、あっしは梓殿にちゃんと香炉を贈り、それで、その、梓殿のために――」

「言い訳にもならんわっ！」

顔面を思い切り蹴飛ばされた。

ここまでされるとは思いもしなかった。新婚当時は、何度か梓の折檻を受けた牛太郎であったが、お互いに夫婦の間での忍耐を重ね、ようやく愛を理解し合っていたはずであった。

だから、牛太郎は、養子の左衛門太郎に相国寺を突き止められても、のこのこと岐阜に帰ってきたのである。

「ううっ、太郎」

唇から血を、瞼から涙を流しながら、息子の左衛門太郎に救いの手を伸ばしたが、齢二十一の息子はしらりと見つめてくるだけである。

「常に文を寄越すという約束であったではないか！　しっかりと守られよ！」

「ふぁい」

牛太郎は、女中のお貞とおかつに両脇を支えられながら自室へと

退き、虫の息で布団の上に横になった。
お貞もおかつも、梓の実家の柴田家から来た女中であるから、梓の暴力は勝手知るところでもあり、被害者の治療も手慣れている。むしろ、これが毎日の作業かのように淡々とこなした。
「旦那様、どうして行方を知らせなかったのです。こうなるとわかっていたことではないですか」
年配のお貞が言うが、牛太郎は何も答えずにただ、ううう、ううう、と、牛のように呻く。
言えない。堺の屋敷を飛び出し、誰にも連絡をせずに相国寺に籠っていた理由など言えない。女たちの衣服を盗んで、その香りを楽しんでいるところを配下の者に見られ逃げ出したなど言えない。
女中たちが部屋を去り、ひぐらしが鳴き始めた。
牛太郎は瞼の裏に焼きついている梓の形相に恐怖しながらも、開け放たれた戸からすべり落ちてくる夕風と、わびしい虫の声に包まれながら、ようやく、ぼんやりと、明日からのことを見据え始めた。
きらめき昇る朝日のように進撃を続けていた織田家は、今、窮地を迎えている。
織田家存亡の戦いは、浅井備前守の裏切りから始まり、雌雄を決するときが近づいている。
織田家包囲網が組まれている。
やがて、秋の収穫期が過ぎれば、富士のふもとから武田騎馬隊がやって来るであろう。
織田は戦慄する。武田騎馬隊は日の本最強の武士団と言っていい。その強さは子供でも知っている。女でも知っている。
それに引き換え、織田の兵は弱い。驚くほど弱い。織田家がここまで勢力を拡張できたのは、兵の強さではなく、全軍を統べる織田上総介という男の才覚一つだけであった。
それでも、無類の智謀と創造性と強運を持つ上総介であっても、武田ばかりは恐れていた。武田を敵に回せばひとたまりもないことは重々承知していた。

しかし、牛太郎は前々から上総介に進言していた。
武田が西上を開始したそのとき、偉大なる戦国大名、徳栄軒信玄は死ぬと。
実は、牛太郎は未来からやってきた男であった。
この事実を知っている、あるいは信じている人間は、この世に二人しかいない。その一人が上総介である。
武田はよいのだ。織田家の喉元に刃を突きつけているのは武田ではない。
「父上、入りますよ」
左衛門太郎がやって来たので、牛太郎は考察をやめた。
「ひどいやられようですね」
でこぼこに腫れた牛太郎の顔を眺めて、息子は口許をほころばせる。
「何を笑っていやがる。どうして、止めてくれなかったんだ」
と、牛太郎は恨み節だが、息子は細い鼻をつんと突き上げた。
「何も言わずに家を出る父上が悪いのでは。母上がどれほど心配したのか考えもすれば、これぐらいで済んで良かったのではないですか」
これ以上やられたら死ぬだろうと言いたい。ただ、梓を心配させてしまったことには心苦しくもあるから、牛太郎は素直に黙った。
「近々、北近江の浅井を攻めます。今度のいくさは姉川以来の大いくさになるという話ですから、父上も召集されましょう。その間に傷を癒しておいてください」
「そんなことよりだな、太郎」
と、牛太郎は目玉だけを動かして、涼しげな顔つきの息子を見やった。
「赤ちゃんが産まれたんだろ。どこにいるんだ。連れてこい」
「それは無理です」
「どうして！」
うっかり声を大きくしてしまって、牛太郎は痛みに唸るが、左衛

門太郎はやはりしらりとした顔でさらりと言った。
「母上に見せるなと仰せつかっています」
「なんでだよ！」
そうして、また、うう、と痛みに耐えかねる。
「母上の言葉をそのまま申しますと、どうせ、孫見たさに帰ってくるのであろう。だから、見せぬ。許さぬ。反省に反省を重ねてもらわなければならぬ」
牛太郎は絶望的な悲しさに襲われた。血の繋がっていない初孫とはいえ、京から岐阜への帰路、それを楽しみにしていたのだ。玉のような男の子なのだろう。太郎や嫁のあいりに似て、利発そうな顔をしているのだろう。
ああ、とうとうおれも、おじいちゃんと言われる日が来たのか。
ふむふむ。
などという淡い夢は梓の怒りの前に霧となった。
「そんなことないって言ってくれよ。別におれは赤ちゃん見たさに帰ってきたわけじゃないんだからよ。あずにゃんが心配しているだろうから帰ってきたんだからよ」
「だったら、別によいではないですか、赤子を見ずとも」
「いや、でも、せっかくだから見せてくれよ」
左衛門太郎はすがりつく牛太郎に一瞬ためらいの表情を見せたが、すぐにぷいと顔を背けて、腰を上げてしまった。
「今回ばかりは拙者も母上の味方です。だいたい何度目のことか。拙者が小姓だったときも行方不明になりましたし、母上が嫁がれてまもないときも家を飛び出して、何度やれば気が済むのですか」
「もうしない」
「母上だけではありませんよ。あいりもお貞も、それに堺にいる早之介や四郎次郎だって、父上の身をどれだけ案じていたことか。それをおわかりなのですか。おわかりならば、せめてこの家の者たちに詫びの文でも書いてください。赤子はそれからです」
「わかった。わかったよ。そうするよ。そうするから、筆と紙を持

ってきてくれ。今すぐに書くから、持ってきてくれ」

初孫見たさに嘆願すると、一度部屋を出た左衛門太郎は筆と紙を用意してくれた。

だが、梓から受けた暴力の限りのおかげで、腰を上げることも筆を手に取ることもできず、牛太郎は枕に突っ伏して泣いた。

モノノフたちのおもい（前書き）

登場人物

・織田上総介信長（おだ　かずさのすけ　のぶなが）
織田信長。上総介は朝廷からの官位。

・浅井備前守長政（あざい　びぜんのかみ　ながまさ）
信長の妹、市の夫。浅井家当主。婚姻同盟を結んでいたが、協定を破って盟友朝倉家へ侵攻した織田家に背き、市を生かしながらも引き返さないまま、小谷城で奮戦している。

モノノフたちのおもい

梓の折檻による傷も癒えた頃、岐阜城下には軍勢が集結しつつあった。

「長いいくさになる」

岐阜城に召集された軍議にて、当主、織田上総介は居並ぶ諸将にそう睨みを与えた。

彼の眼差しには激しさがある。瞳の奥が黒々と燃えるさまは、彼の信念をほとばしらせているかのようで、それだけでも織田上総介という男の凄まじさがわかる。

彼をここまでさせたのは、天下布武への野心ではない。可愛がっていた妹を巻添えにしてまで裏切った、浅井備前守への怒り、憎しみ、そして悲しみ、それらの感情を超越した果ての激しさである。

「小谷攻めだ」

静かに、唸るように、短くそう言った上総介に、諸将は息を呑み、やはり牛太郎も震えた。

浅井備前守の裏切り以来、上総介のいくさは修羅道に徹している。比叡山延暦寺への焼き討ちが最たるものだった。死者は僧兵のみならず、学問に徹していた非武装の高僧から、老人、女子供まで、三千人超の虐殺劇であった。

破壊と暴虐の限りを尽くした織田の兵卒たち。牛太郎の脳裏にあの地獄の光景がまざまざと蘇ってくる。

あのときのようになってしまうのだろうか。

戦国の世にやって来てから十年以上の時を経ているが、この間、牛太郎は一人の人間も殺めたことがなければ、平和な時代の感覚が抜けきれず、人の死を簡単には受け入れられない武将であった。

比叡山は彼の心的外傷となっている。

また、小谷城攻めともなると、彼には後ろめたさが湧いた。

浅井備前守の妻、市のことである。この婚姻を上総介に進言した

のは他でもない牛太郎であった。

進言をしたころは、一人の女が戦国の掟に翻弄されることに何の感慨も覚えなかった。ただ、今の牛太郎には梓という妻がいて、起伏に富んだ梓との夫婦生活を送っているうちに、この時代の女の気丈さと、あわれさを知った。

――市は見ての通り幸せでございます。貴方が兄上に市の嫁ぎ先を浅井と進言したと聞いたときには、貴方を恨みはしましたが、しかし、浅井の家は、市を大切にしてくださいます。

麗しき市の微笑みが思い出される。その幸福を与えたのは牛太郎であったけれど、それの破壊に参加しようとしている自分もいる。

「小谷城は堅牢だ。これまでの攻城のように、一日二日で終わらせる攻城じゃねえ。周囲に砦を築き、浅井の者どもを根絶やしにしてやる」

上総介は家臣の女房を気遣うこともあれば、癇癪を起こしたりもする気難しい男なのだが、妹の市がいる小谷城を攻めなければならないという感傷を克服したと思われる。戦国の掟を貫く意志がはっきりと表明されており、だからこそ、織田の古くからの家臣は上総介のこの激しさに忠誠を誓っていた。

「出陣は明後日、横山にいるサル、五郎左と合流し、小谷城下を焼き払う。それと奇妙も連れていく。初陣だ」

なるほど、と、牛太郎は思った。当初から上総介の隣には奇妙丸が座っていたが、軍議に顔を出したことはかつてなかった。

つい先日に元服したばかりの勘九郎信忠の初陣と聞き、諸将は、おおっ、と歓声を上げる。

「ついに奇妙様の御出陣ですか！」

筆頭家老の佐久間右衛門尉が細長く伸びた口髭を震わせると、隣に座っている柴田権六郎も口を大きく開けた。

「これは是が非でも負けられぬいくさでありますな！」

「うつけが」

湧き上がった諸将に水を差すような睨みを、上総介は与えた。

「奇妙の出陣うんぬんで負けられぬいくさなのか。このいくさは当初から負けられぬいくさだ。今の我らに負けるいくさなど許されんわっ！」

しんと静まり返った場をよそに、上総介は腰を上げて広間をあとにしていった。

「気にするでない」

と、勘九郎は父親にまるで似ていない柔らかい微笑を浮かべた。

「父上は気が立っているだけだ。我はお主たちの意気を嬉しく思う。だが、我のためではなく、織田のために、この織田に住まう者どものために戦おうぞ」

まだ、齢十五である。諸将は少年らしからぬこの言葉に感服するかのように一斉に頭を下げた。

軍議は終わり、諸将はそれぞれ岐阜城を下りた。

「若様は見ない間にご立派になられましたね」

涼やかな風が吹き抜ける稲葉山の山道を下っていきながら、肩を並べる左衛門太郎は牛太郎に言った。

「おやかた様に逆らってばかりだという噂を聞いたこともありますけれど、実は、うつけと言われていたおやかた様に似ているのかもしれませんね」

「まあ、似ているかもな」

牛太郎は上総介の気難しさをよく知っている。嫡男の勘九郎とは一度しか面を合わせたことがないが、やはり気難しい少年だった。

「でも、初陣がこのいくさだとは、若様には酷ですね。姉川のような大きな野戦にはならないかもしれませんが、小谷城の抵抗は相当なもののはずです」

「馬鹿言うな」

牛太郎は足を止めると、頭上を仰いだ。緑がほのかに褪せ始めた木々の葉のすきま、高く突き上がった空に白雲がゆるりとたなびいている。

「抵抗しない人間が今までいたか」

稲葉山の裾野は、領内各地から集まって来た軍勢でひしめき合っている。圧倒的な数でもって勝利を目指す上総介のいくさは、いつもこうだ。城下は兵卒と馬でごった返す。しかし、この空はいつも穏やかである。

なるべくなら、いくさは避けたい。

「左様でありました」

と、左衛門太郎は、ひところの情けなさとはおもむきが変わりつつある養父の姿に口端を結び、同じ空を眺め上げた。

だが、戦い続けなければならないのも、この親子の現実である。

牛太郎と左衛門太郎は稲葉山を下りると、郊外の願福寺に足を運び、境内に駐屯している簗田家直属の軍団、尾張沓掛勢二百五十人と、尾張九之坪勢五十人に号令した。

「出陣は明後日だ。英気を養えよ」

侍大将の役を持つ左衛門太郎にしては、抱えている軍勢が三百人とはひどく少ない。同じく侍大将の木下藤吉郎などは四千人以上の軍勢を持っている。

ただ、沓掛勢は織田家でも類を見ない精強な兵卒集団だ。厳しい訓練が伝統的に行われており、数々の死闘をくぐり抜けてきてもいる。

一目見て、他の織田方の兵卒との違いが読みとれるのは、出陣の日取りを左衛門太郎から告げられても兵卒たちは顔色一つ変えず、眼差しだけを屹と据える。出陣ともなれば、彼らの目の前にあるのは決戦地だけでしかない。

牛太郎が沓掛城主となったころは、ごろつきの集団でしかなかった。それを思えば、牛太郎もなかなか感慨を深めた。

まあ、牛太郎がここまでの集団に仕立て上げたわけではないのだが。

「太郎殿」

と、牛太郎に匹敵する大男が甲冑を鳴らしながら歩み寄って来た。太い眉が鬼のように吊り上がっていて、分厚い唇はへの字に厳めし

い。

「この日のために九之坪の者たちを鍛えて参りましたぞ。しかと御覧くださされ」

佐久間玄蕃允盛政（げんばのじょう もりまさ）という。柴田権六郎の姉の子、梓の甥であるが、堺や摂津にかかりきりであった牛太郎はこの若者をよく知らない。

尾張九之坪は知行として簗田家に与えられたばかりの地であり、配下の与力が二人しかいない簗田家にとって、手が回らなかった。

まして、この二人は摂津調略に奔走していて、岐阜にすら戻ってこられない状況である。

そこで、左衛門太郎は沓掛の兵卒から誰か二三人を与力に上げようと考えていたのだが、適当な人材が見当たらず、見兼ねた梓が実家の柴田家に相談したところ、この若武者を貸し出してきた。

玄蕃允はすでに戦場に何度も出ているが、十七歳とまだ若い。大した広さでもない九之坪で経験を積ませるのは打ってつけであろう。

ただ、最近、岐阜に戻って来たばかりの牛太郎は事情すらよく知っていない。

玄蕃允の堂々たる体躯に眺め入り、太郎にしてはなかなかの男を与力にしたものだと勘違いした。

「それじゃあ、ここで立ち話もなんだから、おれの家で夕飯を馳走になれ」

と、牛太郎は居丈高に言い放ったが、玄蕃允は牛太郎に向けて眉根をしかめた。

「わしは兵どもと共におりまする」

なんだ、この若僧。睨みつけてきやがって。

いや、玄蕃允が睨みつけるのも無理はない。ぽっと出の簗田家とは違って、玄蕃允は佐久間一族である。

オミナエシ

牛太郎が屋敷の自室に戻ってくると、床の間に花が活けられてあった。

誰のしわざだろう。瓶から細い茎がすうっと伸びていて、頭には小ぶりの黄色い花が無数に集まり、ぼんぼりのようだ。

牛太郎は土色の素朴な花瓶を手に取り持ち上げてみて、花を嗅いでみた。

くさい。まったくもって野暮ったく、むわっとあつかましい香りで、すぐに戻した。

お貞だな、と、牛太郎は邪推した。こんなものを活けるとは、年寄りのお貞ぐらいしか考えられない。

気分が悪くなったので、匂い狂いの牛太郎は久々に香木を燻そうかと思ったが、あいにく、香炉も香木も梓が持っている。

あきらめて、机の前に座った。硯と紙を取り出し、筆を手に取る。堺に常駐している配下の者たちに近況を要求した。しかし、牛太郎は文面に悩んだ。着物を盗んでいたことを知られて以来、顔も合わせていなければ、文も届いていない。

自分の家出中、心配はしてくれていたらしいが。

こんこん、と、戸を叩く音がした。

「旦那様、よろしいですか」

あいりである。顔を見なくなって一年近い。岐阜に戻って来てからも、同じ屋敷に住んでいるというのに、梓の命令でなのか、それとも子供を産んだばかりで安静が必要なのか、見かけていなかった。

そもそも、牛太郎は食事をこの自室で一人きりで取らされている。主人も奉公人も身分に関わらず同じ部屋で食事を取るというのが、築田家のいつからかの習わしであるのだが、反省を促されている今時分は、牢屋に閉じ込められたような日々であった。

なので、牛太郎は目を輝かせて色めき立った。腰を上げると、自

ら戸を開けた。
そこには乳の身児を抱いたあいりが立っている。
「ああ、ああ」
と、牛太郎は何を言っていいのかわからないまま、あいりの腕の中ですやすやと眠る赤子を覗きこんだ。
「太郎殿が見せに行きなさいって」
「そうか、そうか」
牛太郎は何度も頷いた。
「可愛いなあ。可愛いなあ。まあ、入って入って」
あいりと赤子を招き入れると、今までそんなことをやったことがないくせに、押入れから座布団を取り出して来て、あいりに勧め、自分は床の上に正座した。
「よかったよかった。母子ともども健康そうでよかったよかった」
「おかげさまで安産でした」
あいりは腕の中の子をゆっくりと揺らしながら、母親の目で赤子を愛でる。
そうか、そうか。あいりんもお母さんか。しかも、我が嫁、我が孫。女中として健気に働いてきた姿を見ているだけあって、牛太郎の感慨もひとしおであった。
「これで簗田家も安泰だ。太郎もいるし、その子もいる。そうだ、なんなら、おれが育てよう。もう少し大きくなったら、もっと広い世界、京や堺に連れていってあげよう。なにしろ、いずれは簗田家の当主となるんだからな」
「はい？」
牛太郎の言葉に顔を上げると、あいりはぽかんと首を傾げた。
「ああ、いやいや、別にあいりんから奪い取ろうとかそんなんじゃなくて、一応、当主としてね、教育を施そうかとね、まあ、いずれの話だよ、うん」
「いえ、旦那様、当主と申されましても、この子はおなごですよ」
「えっ？」

「知らなかったのですか？」
牛太郎は思わず視線を斜めに逸らした。ぐう。そういえば、この子が男児であるとは、誰からか聞いたわけではない。かといって、男か女か、訊ねてもいない。
何を考えてか、早合点していただけである。
「申し訳ございません。男の子ではなくて」
「いやいやいやいや、そういうわけじゃなくてさ。いや、全然いいんだよ。男だろうが女だろうが。だって、女でも武将をやっている人間だって――」
ごほん、と、牛太郎は自分で言っておいて咳払いする。
「とにかく、あいりんも子供も元気そうでよかった。きっと、あいりんに似て可愛い女の子になるに違いない。それで、名前はなんて言うんだい」
「駒と申します」
コマだと……。
「誰が付けたんだ、その名前」
「おやかた様に頂戴しました。太郎殿がおやかた様に報告に上がったさい、おやかた様が下さったようです」
牛太郎は溜め息をつきかけたが、さすがに子を産んだあいりの前では憚られて、息を呑み込んだ。しかし、顔つきはぶすくれていた。
瓢箪から駒と言うが、それは子馬のことである。「牛太郎」の名も上総介に名付けられたのだ。由来は牛のような男だから。
おそらく、自分を牛と呼んでいるのに掛けて、上総介は駒と思いついたに違いない。絶対に思いつきだ。
もしくは、あだ名を好む上総介が、左衛門太郎をこましゃくれと呼んでいるから、「駒」なのかもしれない。
いずれにしろ、可愛い初孫にコマなどとはおもしろくない。しかし、主君がくれた名前にけちをつける訳にもいかない。
「こ、駒ちゃんね」
牛太郎は掌に乗りそうなほどに小さい顔を見つめた。か細い寝息。

ふむ。その名を声に出してみると、不思議と小さなこの子にはコマという語感が合う。

眺めているうちに、また、頬を緩めていく牛太郎の様子にあいりは笑った。

「旦那様、抱いてみますか」

あわてて牛太郎は両手を振る。

「いやっ、いいっ。落としたら大変だ」

「大丈夫ですよ」

「いやいや。せっかく眠っているのに、おれなんかに抱っこされたらびっくりしちゃうじゃんか」

牛太郎はあいりの前から逃げると、机の前に再び腰かけ、筆を手に取り、ごまかした。

「それはそうと、このくさい花はなんだ。お貞に言っておきなさい。こんなものを拾ってくるなって」

「その女郎花を積んだのは奥方様ですよ」

「あっ、そ、そうなんだ。ふーん、お、おみなえしって言うんだ。へえ。どおりで綺麗な花だと思ったよ」

「奥方様がお許しくだされたのでは」

「そ、そっかな」

あいりが部屋をあとにしていくと、しばらくしたのち、牛太郎はこそこそと左衛門太郎の部屋を訪ねた。

「どうかされましたか」

左衛門太郎もまた誰かしらに文を書いているところであった。牛太郎はそろりと戸を閉めると、梓が本当に許してくれているのか訊ねてみた。

「さあ」

と、首を傾げられる。

「そんなことより、拙者に堺の早之介から文が届きましたよ。父上を早急に堺に戻すようにとの催促ですが、出陣の下知のため、無理だと返答しておきますよ」

「ああ、そうしろ。あいつは早急だの危急だの、すぐにせかすからな。本当は急ぎでもないんだ。放っておけ」
　すると、左衛門太郎は目をしらりとさせる。
「なにゆえ、堺を飛び出したのです」
「お、おいっ！　今さら、そんなのはどうでもいいだろっ！　そんなことより、あずにゃんがまだ怒っているのかどうなのか確かめてこい！」
「拙者があらぬ詮索をすると、母上はまた怒りますよ」
　むう。言われてみればそうだ。牛太郎はあきらめて部屋をあとにしようとしたが、床の間に置かれてある女郎花に気付いた。
「あの花、どうしたんだ」
「母上が積んできたようです」
「なんだ、おれだけじゃないのか」
　牛太郎はぼそりと吐きながら戸を開いた。くさい匂いはともかく、自分のために積んできてくれたのだと一瞬でも思っていたから、なんだか寂しくなってしまった。
「父上の部屋にも活けられてあったのですか」
「まあな」
「それならば、お返しをすればよいではないですか。そうしたら、母上もきっと喜ばれますよ」
　ほう。牛太郎は戸を閉めて、息子の前に腰かけた。
「お返しってのはなんだ。そういう花の交換とかあるのか」
「そんなのは自分で考えてください。それが誠意ではないのですか」
「誠意ならあるだろ。ただ、その手段がわからないだけなんだから。花の交換とかしてみて、変な花とかあげちゃったら、どうすんだ。お前のせいだからな」
　牛太郎が一生懸命に唾を飛ばしてくるので、左衛門太郎は溜め息をつくと、億劫そうな声で言う。
「それならば、歌でも詠んで差し上げたらどうですか。女郎花の歌でも。堺や京の博識な人たちと仲の良い父上なら歌ぐらい作れるで

しょう」
「和歌のことか？　そんなのおれが作れるわけないだろ」
堺や京の文化人との交流がある牛太郎だが、歌合わせをしたことはない。文化的交流をしているのではなく、堺や京の文化人とは政治的な付き合いをしているだけなのだ。
「お前が考えろ」
「拙者だって、和歌など気恥かしくて作れませぬ。だいたい、歌を詠むなど、いくさ人のたしなみではありませぬ」
「お前が言ったんだろ、作れって」
突っ込まれた左衛門太郎は、しかめっ面で頭をかくと、机の下から書籍を取り出してきて、それを捲っていく。
「なんだよ、それ」
「万葉集です。文を書くときに参考にしているのです」
やがて、左衛門太郎はあるところで捲っていた手を止めると、書籍を見やりつつ、机の上の紙に筆をすらすらと入れていった。
「フン。いくさ人のたしなみじゃないなんて言っていたくせに、ちゃっかりそういう本を持っているじゃんか」
左衛門太郎は書き終えた紙を牛太郎にぐいと突き出してきて、むっとしていた。どうやら、左衛門太郎は万葉集を持っていたことが知られて恥ずかしいらしい。
牛太郎は息子の手から紙を奪い取ると、文面をしげしげと眺めた。タイムスリップしてきてから何年もの間はこの時代の書体を理解できなかったが、梓や文化人たちと文のやり取りをしているうちに、読めるようになった。
おみなへし　咲きたる野辺を　行きまわり　君を思ひ出　たもとほり来ぬ
「どういう意味だ」
「女郎花が咲いている野をめぐっているうちに、君を思い出して、回り道をしてやって来たのだという意です」
ほほう。梓に送るにはなんてふさわしい和歌だろう。堺や京をめ

ぐっているうちに、梓を思い出して、岐阜にやって来たのだと言えば、梓はきっと喜んでくれる。

背中を向けてしまっている息子をよそに、牛太郎は早速梓の部屋を訪ね、刺々しく迎え入れた梓に、女郎花のお礼に和歌を作ってみたと言って、あたかも自分が作った歌のように披露した。

「なんて、素晴らしい歌じゃ。亭主殿はやはり京や堺でそれ相応の人々と仲を深めているのじゃな」

梓が上機嫌になったところで、牛太郎は香木を燻そうと提案した。あわよくば、香りの染みついた衣服を梓から頂戴しようと企んだ。

タダより高いものはない（前書き）

登場人物

・木下藤吉郎秀吉（きのした　とうきちろう　ひでよし）
織田家侍大将。桶狭間、美濃、金ヶ崎、姉川と牛太郎とともにいくさ場を戦ってきた古い仲。お互いの弱味を握り合っていて、また、お互いに張り合っている。

・栗之介
簗田家の馬丁。牛太郎からはねじり鉢巻きと呼ばれている。

タダより高いものはない

簗田親子は、それぞれ一頭の馬を所有している。

牛太郎が跨るのは栗綱という栗毛が陽光に映える馬で、瞼を眠たげにさせながらおっとりと脚を進める。

鍛錬をまったくしないでいる牛太郎は、この穏やかな性格の栗綱にしか跨れない。

左衛門太郎が跨るのは、この栗綱の弟で、黒連雀と呼ばれている。光り輝く黒鹿毛の馬体もさることながら、兄とは対照的に凶暴であった。誰かが鞍の上に乗れば、鶴首になって常に頭を上下に振り乱し、疾走を乗り手に要求してくる。

この二頭の兄弟を育て、世話をしているのが、栗綱の口輪を取る栗之介であった。

「奥方には許してもらったのか？」

と、主人の牛太郎にこの口調である。人生の半分以上が馬のことばかりであるから、今さら、礼儀もへちまもないのだろう。

「許されるも何も、おれとあずにゃんは夫婦だ。喧嘩もするときだってあるんだ」

「喧嘩じゃないだろ。旦那が怒られていただけじゃねえか」

「お前は黙ってろ！」

兵卒を従えている手前、栗之介の口を封じ込めたものの、喧嘩ではなかったことは牛太郎もわかってはいる。一方的に殴られ、牢人まがいに閉じ込められ、歌を詠んでなんとか許しを得、どさくさに紛れて香りの染みついた衣服をねだった。

戦場にあっても、愛する妻の香りがする衣服を持ち歩いていたい、と、うまいこと言って。

「小袖など持ち歩いたらかさばるではないか」

と、梓は眉をしかめたが、牛太郎は熱く説いた。香りが残る衣服なら、常に梓が近くにいると思える。愛するがゆえん、供にいたい。

香りだけでも傍で感じていたい。
梓は了承した。
梓の匂いと香木の香りが染みついた小袖は、今、荷駄持ちの兵卒が担いでいる桐の箱にしまい込んである。
無論、左衛門太郎にはそんなものを戦場に持っていっているとは口が裂けても言えない。
昼過ぎに岐阜を出立した織田勢四万人余の大軍勢は、大垣に宿陣し、翌日、中山道を西上し、北近江の横山城に入った。
横山城は一昨年の姉川の戦いで浅井方からもぎ取った前線の拠点である。浅井攻略の事業本部と言っていい。
ここで横山城の守備と、浅井方の工作を任されていたのが、木下藤吉郎秀吉であった。
藤吉郎はこの二年間のうち、数々の武功と調略成果を上げている。南近江で蜂起した六角氏の残党から戦線を食い止め、岐阜と京を結ぶ街路を遮っていた佐和山城を調略によって投降させ、北近江での復権に兵を出してきた浅井方をわずか五百の寡兵で追い払った。
北近江戦線の指揮官が藤吉郎でなければ、今回の上総介の出陣は来年にも再来年にもなったであろう。
事実、他の戦線、伊勢長島や摂津などは、事情は違うとはいえ、活路を見出せていない。
摂津攻略を担当している牛太郎は、だいぶ水を開けられた。まあ、藤吉郎は四千の兵を常備しており、牛太郎は兵卒も従えず工作だけに従事しているので、仕方ない。事情もまるで違う。
ただ、藤吉郎は構いもしなかった。
「ありゃあ？　おみゃあは摂津の調略がどうにもならなくなって逃げ出したんじゃなかったきゃあ？」
軍議が終わるやいなや、退出していく牛太郎に藤吉郎は早速絡んでくる。有頂天だな、クソが。牛太郎は耳を傾けずに廊下を行くが、藤吉郎は飛び跳ねるようにしてくっついてくる。
「どうして、おみゃあも来たんだぎゃあ？　おみゃあは摂津に行っ

ていればいいだぎゃあろお。おみゃあが来たところで何にもならにゃあ」

「藤吉郎殿、それはあんまりじゃないですか」

見兼ねた左衛門太郎が睨みを与えた。

「父上は後ろ髪を引かれる思いでここに来たんですよ。そもそも、金ヶ崎の退却戦も姉川でのいくさも、父上あってこその藤吉郎殿ではなかったんじゃないですか」

「いんや、確かに沓掛勢あってこそだったけれど、おみゃあや沓掛勢あってこそで、牛殿あってこそじゃなきゃあ」

「沓掛勢の指揮官は父上です」

「にゃっはっは。沓掛勢の指揮官は太郎だぎゃあろう。牛殿はなーんもしてにゃあ」

「太郎」

我慢の限界に達していた牛太郎は息子の肩を掴み、

「先に戻っていろ」

と、左衛門太郎を立ち去らせた。姿が見えなくなったのを確かめると、牛太郎は藤吉郎の肩に腕を回し、耳元で囁く。

「お貸ししていた四百貫、いつ返してくれるんですかねえ」

「にゃっ？」

興醒めした藤吉郎。牛太郎は金の襟が贅沢な藤吉郎の陣羽織をひらひらと振るい、にたにたと笑みを浮かべる。

「いやあ、藤吉郎殿のお召し物はいつ見ても豪華だなあ。それに比べてあっしは鎧も着れず、相変わらず甲冑代わりに綱を巻いている状態」

「そ、そんなのは、おみゃあが甲冑を着られない大男だからにゃあか」

「そんなことないですよ。調度、あっしは甲冑を作ろうと思っていたんですよ。そうしたら、藤吉郎殿が金を貸してくれって泣きついてきたんで、あっしは渋々甲冑をあきらめたんです。あーあ、早く甲冑作りたいなあ。四百貫あればいつでも作れるんだけどなあ。利

子ももらっていないからなあ」
「おみゃあっ、声がでかいだぎゃあっ」
「ま、別にいいんですけどねえ。甲冑なんて。四百貫なんて。いつだっていいんですけどねえ」
「わかった。わかったぎゃあ。このいくさが終わったら返すだぎゃあ。もう少し待っていりゃれえ」
そう言い残し、藤吉郎は逃げていった。ざまあない。なんなら、一生、返してもらわなくてもいいぐらいだ。後の天下人を四百貫で手玉に取れるとは快活このうえない。牛太郎はほくそ笑みながら用意された部屋に戻り、梓の衣服を嗅いだ。
翌日、木下勢、丹羽勢と合流した織田の大軍は、小谷城近辺まで進軍した。
長いいくさになる。
と、上総介が言ったように、小谷城は連なる山々と天然の尾根を利用した一大城郭であり、力任せに押し潰せるような代物ではない。
昨夜の軍議で決定した通り、織田勢は小谷山南方に位置する標高二百米程度の低山、虎御前山と雲雀山に分かれて登り、それぞれ陣を張った。
「姉川のいくさのときはお見事でした」
と、玄蕃允が親子に歩み寄ってきてそう言った。
玄蕃允は姉川のとき柴田勢として参加していたが、大して活躍できなかった。
姉川の決戦前夜、虎御前山まで軍勢を進めた織田軍は、陣替えのために虎御前山を下りたのだが、浅井勢はここを急襲してきた。
このさい、しんがり役を務めたのが、黒母衣衆の佐々内蔵助と左衛門太郎である。軍勢を率いての本格的な野戦はこれが初めてであった左衛門太郎は、襲いくる浅井勢を虎御前山のふもとで食い止め、これを機に大いに名を上げた。
再び虎御前山に上がり、二年前、さほど武功を上げられなかった玄蕃允は、左衛門太郎の決死のいくさ振る舞いをも思い出し、期す

るものが湧いたのかもしれない。
「あのときとは違うだろ」
と、牛太郎は鼻の穴を膨らませている玄蕃允の若々しさに水を差す。
「あのときはもっとぎりぎりの戦いだった。今回は違う。余裕を持って戦えるだろ。そういういくさであんまりかっかすると、足元をすくわれるからな」
玄蕃允は牛太郎の言葉には何も反応せず、この太った凡将を忌々しそうに見つめる。
「父上のおっしゃる通りですよ、玄蕃殿。ただ、攻めるに当たってはかっかしなければならないときもあるでしょうから、そのときは槍を振るいましょうぞ」
「かしこまりました」
玄蕃允は左衛門太郎には素直に頭を下げたが、ずかずかと立ち去ろうとして、一度、牛太郎に振り返って睨みつけてきた。
「なんなんだ、あの野郎は。だいたい、なんで、おれの手下になる奴はどいつもこいつも、こう反抗的なんだ。腹立つな」
「仕方ありません。父上は年賀の挨拶に岐阜に戻っても来なければ、家出をしたりして、評判が悪いのですから」
「評判が悪いなんて、聞いたことねえぞ」
「岐阜にいない父上に代わって、拙者が叱られているからです」
息子のしらりとした目が牛太郎に突き刺さり、牛太郎はその場からそそくさと逃げた。
虎御前山には砦が築かれることになった。その間、北近江の工作に勤しんできた藤吉郎を筆頭に、小谷城近在の攻略が開始される。
「牛もサルに付いていけ」
上総介の命が下り、精強な簗田勢は木下勢とともに戦野を駆けることとなった。

のどもと過ぎれば熱さもわすれる

小谷城の包囲。

まず、周囲の砦や支城の陥落が目的である。

だが、上総介は全軍を投入するわけにはいかない。

包囲網を組まれている状況にあって、敵は浅井だけではなく、摂津の諸勢力、松永弾正、越前朝倉、武田、果ては越後の上杉と、織田は一時の猶予もなく飛びまわらなければならない。

それを考慮すれば、一兵たりとも失いたくないのが本音であった。

小谷城を大軍で圧迫しつつ、外堀を埋めていく。

遊撃部隊にはいくさに巧みな者が求められた。

虎御前山を下りた木下勢及び簗田勢は、琵琶湖の方角へ進軍する。

「山本山を落とせ」

上総介はそう命じたが、日暮れまでには虎御前山に戻ってこいとも付け足した。

「半日で落とせるわけがないだろ」

牛太郎は愚痴る。山本山は虎御前山と似たように、平地にぽこりと現れているなだらかな小山だが、柵や石垣、空堀などで城郭の様相を呈しているのが、虎御前山からでも見受けられた。

「本気でおやかた様が落とせと申していましょうか」

玄蕃允はそう言ったあと、フンと鼻を突き上げる。

「まあ、それでも、わしは落とすつもりでいますがな」

「何を言っているんだ。まあ、お前みたいな猪武者が真っ先に死ぬんだけどな」

「なんだと？」

びゅうっ、と、左衛門太郎の鞭がしなって、牛太郎と玄蕃允は鞍の上で体をのけ反らせた。

音に反応してしまった黒連雀を手綱でなだめながら、左衛門太郎は二人を厳しい視線を送る。

「ここは戦場ですぞ」
左衛門太郎の目が静かに鋭くなっていた。
木下勢の後ろに付いていっていた簗田勢だったが、山本山ふもとの集落を前にして、脚を止められる。
「どうするつもりなんだ」
「城下を焼き払うのです」
左衛門太郎が何でもないかのように言うので、牛太郎はあわてた。
「嘘だろ。信長様にそう命令されたのか」
「いえ、半兵衛様の案です」
「嘘だ」
竹中半兵衛がそのような立案をするなど牛太郎には信じ難かった。半兵衛は作戦立案にかけては天才かつ狂人であるが、民衆に戦火が及ぶことは嫌っている。
「大丈夫です、父上。火を放つ直前に、小一郎様たちが山本の住人たちに避難するよう知らせる手筈となっております」
偽りの焼き討ちを行うということらしかった。そうすれば、織田勢の残虐性を知っている山本山城の兵卒は、ふもとの織田勢を追い払うために山を下りてくる。
「四千の兵ではこの山城を落とせません。ならば、攻城せずに敵兵を討伐するというのが半兵衛様の案です」
木下勢の精鋭と簗田勢は下山してきた浅井勢の急襲であった。
「回りくどいことを」
玄蕃允が口端を歪めて笑う。
「どちらにせよ、ここを逃げのびた民衆たちは帰る場所もなくなるのだから、結託して一揆を起こすのが明白ではないでしょうかね」
「お前は何もわかっちゃいないな、イノシシ小僧」
「簗田殿こそいくさをわかっているとは思いませんがね」
「だったら、見せてみろ、このボンクラ。言っておくけどな、引き連れているのが五十人しかいなかったんでえ、なんてのは無しだからな」

「五十で結構。なんなら、わし一人でも十分ですが」
「言ったなっ！　泣きごとは許さねえからなっ！」
年甲斐もない牛太郎と、無礼な玄蕃允とが散らす火花を、もはや左衛門太郎は無視していた。
木下勢の放火が始まり、至る場所から煙が立ち昇る。
いくさは避けたいと考えていたはずの牛太郎だが、玄蕃允にからかわれてむきになっていた。何もしないでいくさを眺めるだけの当初の予定を変えて、一番槍を上げるつもりで山本山の動きを注視した。
ふざけやがって、若僧が。おれは摂津池田では一騎駆けをし、姉川ではカツオに銃弾を浴びせた男だぞ。
牛太郎が講談になってもおかしくない武勇を要所々々に上げているのは事実だ。ただ、武勇を上げたぶんだけ、そのいくさでは失態もおかしている。
摂津池田では一騎で敵本丸まで駆け上がったものの、独断で講和を結んでしまい、のち、上総介に折檻された。姉川では猛烈な突撃をかけてきていた磯野員昌に銃弾を撃ち込んだものの、弾は兜を割っただけであり、のち、勝手に軍勢を動かした軍紀違反により、勲功はかき消えた。
上っ面しか見ることのできないガキが。
牛太郎は栗綱の口輪を握る栗之介に顔を寄せると、声を小さくした。
「おい、例のやつやるぞ」
栗之介は首を傾げたが、牛太郎が顎をくいくいと動かして、栗之介が肩に担いでいる火縄銃を差す。
「旦那」
と、栗之介はしかめた眉で牛太郎を諫めるが、
「やるぞ」
牛太郎は聞かない。
悪い癖だった。臆病なくせに、興奮すると見境なく突っ込もうと

する。猪はむしろ牛太郎である。
それにこれまでの経験でずるくなっている。敵に突っ込み、命を失いかけても、城主の自分なら誰かが助けてくれると信じている。摂津池田でも姉川でも、敵兵にすんでのところまで殺されかけたが、息子の左衛門太郎に助けられた。
いや、他のいくさでも豪傑たちに助けられている。
だから、大丈夫。命を捨てるつもりで突っ込んでいっても大丈夫。名のある者を一撃で仕止める。
半ば捨て身で半ば他力本願。それが牛太郎のいくさの仕方である。
青々と抜けた空に黒煙がもうもうと上がる中、山本山の城郭を兵が蟻のようにあわただしく動き始めているのが確認できた。
「我らも動きましょう」
左衛門太郎がいきり立つ黒連雀をなだめつつ並足で進ませ、簗田勢は炎と喚声が覆う集落の中に入っていき、前もって竹中半兵衛に指示されていた配置に着陣した。
むう。
牛太郎が考えていたのとは違う。
周囲ではたいまつを手にした木下勢が散り散りに走り回り、家屋と家屋との間、簗田勢三百人がひしめき合う。
どうやら、暴虐を働いている木下勢の追討に下山してきたところを急襲するという作戦のようだが、牛太郎のいくさはまず栗綱の疾風たる突撃から始まる。
だが、このような狭い場所では栗綱が駆ける空間がない。
左衛門太郎が鞭は左手に、右手で槍をくるくると翻す。玄蕃允も目玉を剥きながら長い槍を握り締める。
まずい。これはおれの苦手な乱戦だ。
栗之介が勝手に火打ち石で火縄を点火させてしまう。
「消せっ！　消せっ！」
簗田勢の目の前を浅井勢がどっと横切っていった。
「者ども、行くぞ！」

左衛門太郎が掛け声とともに鞭を振るい、黒連雀が前脚を高々と掻き上げながらいななくと、簗田勢三百は一斉に鬨の声を上げ、

「旦那っ！」

と、栗之介が火縄銃を放り投げてくる。つい、火縄銃を両手に抱えてしまった牛太郎。

「く、くっそおっ！」

牛太郎は銃口を浅井勢の白い旗指し物に向けると、引き金を引いた。

くるしまぎれ

山本山麓での戦いは、木下・簗田勢が百にのぼる首を討ち取り、浅井勢を山本山に押し返し、その弱体化に成功した。

「あっぱれであった」

上総介にしては珍しい言葉だ。かがり火が闇を赤々と染める虎御前山の本陣にて、高笑いこそなかったが、その陰に笑みを浮かべた。

「恐れながら、おやかた様」

しかし、藤吉郎もまた珍しかった。普段なら猿回しのようにはしゃぎ上がっているはずだが、その表情は貪欲に次を見据えている。

「山本山城を攻め続けても埒が開かにゃあと半兵衛が申しておりますぎゃあ。それよりは、小谷の北東の木ノ本と裏手の草野を押さえて三方を囲み、山本山城には調略をかけてみてはいかぎゃあと」

「なら、そうしろ」

「有難き幸せっ！　ならば、早速、明日には木ノ本に出撃しますぎゃあ！」

「いや、待て」

上総介は平伏する藤吉郎及び左衛門太郎、それと牛太郎をじっと眺めた。

「明日はいい。休め。木ノ本には又左と内蔵助を差し向ける。お前らは明後日、草野を攻め入れ」

「あいや、でも、おりゃあらは休まなくても――」

「逆らうか、サル」

上総介に睨み下ろされた藤吉郎は、あわててかぶりを振って引き下がった。

「なんで、内蔵助なんだぎゃ。おりゃあはそういうつもりで言ったんじゃにゃあ」

上総介に対する不満はまったく口にしない藤吉郎だが、こと佐々内蔵助に話が及ぶと、顔を赤らめてしまう。

「あいつを手助けしたようなもんだぎゃ。おもしろくにゃあ」
「まあ、おやかた様は我らをねぎらって休息を与えてくださったんでしょうから」
左衛門太郎がなだめるが、
「おもしろくにゃあっ！」
と、藤吉郎は持ち場へと消えていってしまった。
「いつまで続くんでしょうかね、藤吉郎殿と内蔵助殿の争いは」
左衛門太郎が苦笑したが、牛太郎は何も答えず、持ち場に引き返す足取りは重い。
おもしろくないのは牛太郎も同じである。結局、火縄銃を撃った反動で鞍から落ちてしまい、簗田勢が無類の強さを誇るのを前に、尻もちをついているだけであった。
玄蕃允は自らの手で四つの首を討ち取っている。
「さすがは左衛門太郎殿ですな。黒連雀とともに立ち振る舞う無双ぶりは鮮やかでした。それに引き換え、オヤジ殿は――」
分厚い唇をにたにたとさせる玄蕃允。
「どこにいたんでしょうか」
「おれは指揮官だし……」
牛太郎がぼそっと呟くと、玄蕃允は虫の音をかき消してげらげらと笑った。
「そうでした！　オヤジ殿は大将でしたな！」
ぐぬぬ。
ここまでの扱いを受けたのは久方ぶりである。十年近く織田の将として生き抜いてきて、かつては牛太郎をあなどっていた者たち――藤吉郎や柴田権六郎など――もそれなりに評価するようになった。
ところが、このざまだ。とくに新しい世代からの蔑視がひどい。
まあ、牛太郎は綺麗に言えば外政官である。そこが織田家中でそれなりに評価されているところである。ただ、牛太郎自身が自分の立場を把握していないから、身の丈合わない猪武者になってしまって案の定失態をおかし、いくさにはやる若い玄蕃允などに小馬鹿に

されてしまう。
ただし、牛太郎は自分をわかっていないのだ。いや、馬鹿だ。どうにかして、玄蕃允を見返してやろうと考え、眠れない夜を明かした次の日、ひそかに木下勢の陣に出向いて、竹中半兵衛を外に連れ出した。
「おれを活躍させてくれ」
いくさから離れたときの半兵衛は晩秋の風のように優しげな表情を絶やさない。牛太郎の無理難題に呆れる様子もなく、ただただ頬を緩ませる。
「昨晩、殿にもそう言われましたよ」
「違う。藤吉郎殿は木下勢を活躍させろってことだろ。おれは違う。おれ個人を活躍させろ」
「何を言っているのですか。築田殿の活躍というのは築田殿の兵卒たちの活躍ではないですか。築田殿は何もせずに、ただ、馬の上に跨っていればよいのです」
「事情が違う」
牛太郎は、佐久間玄蕃允という若僧に小馬鹿にされていて、針の筵に座らされているような気持ちにさせられてしまっている。だから、玄蕃允を見返すために、何か策を立てろと一方的であった。
「物は考えようではございませんか。そうやって玄蕃允殿を奮い立たせて勝利をもたらせたと思えば、一軍を率いる将としてこれほどのことはないではありませんか」
駄目だ、こいつは。
牛太郎は半兵衛に背を向けて去った。
竹中半兵衛の言うことは重々承知している。しかし、これは大将だとか戦略だとか、そういうものとは別次元の、男としての話なのだ。
半兵衛は参謀としてそういうものを押し殺しているか、もしくは、消滅させてしまっている。そんな人間に打ち明けたところで無駄だということを牛太郎は気付いた。

かといって、半兵衛の他に相談する相手も見当たらず、牛太郎は砦の建設にせわしい虎御前山をうろうろと行き交う。

第二回戦は明日、草野である。

一応、牛太郎にしては珍しく戦地を聞き調べている。草野とは、小谷山の裏手、谷であった。藤吉郎及び半兵衛はここで蜂起している一揆衆の殲滅と支配を目論んでいる。

栗綱はあてにならない。牛太郎の「苦手」な乱戦である。

無理だ。

牛太郎はあきらめた。しかし、たたではあきらめないのもこの男であった。思い立って本陣に一人おもむき、上総介に目通りを願った。

「なんだ」

肌寒くなってきているというのに、上総介は羽織から片半身をはだけさせていて、隆々とした筋肉を惜しげもなく披露している。

「いや、あの、ちょっとお話しがありまして」

「なんだ。早く言え」

上総介は前線の情報収集に、砦の建設にと忙しい。まして、遠回しな発言は嫌う。平伏する牛太郎を前に、床几に腰かけた上総介は眉間に皺をたっぷりと寄せている。

「実は、その、摂津のほうが気掛かりでして……」

「だからなんだ」

「あ、いや、だから、その、ここは倅に任せて、あっしは摂津に行こうかなと」

上総介はじっと牛太郎を睨む。

「ま、まあ、その、あっしがいてもいなくても変わらないようなんで、ここは倅に任せて――」

「俺をおちょくっているのかあっ！」

おもむろに腰を上げた上総介は牛太郎の頬を殴りつけると、逃げる姿勢を見せた牛太郎をさんざんに足蹴にし、吠えた。

「雲隠れしておいて、ようやく出てきたと思ったらまた巣ごもりか

っ！　よくもそんなことを口にできるな、この鈍牛がっ！」
　牛太郎は丸まって亀になるしかない。ただ、梓のほうがひどかったので、頭を抱え込みながらも、この折檻がいつ終わるものかと、胸の内は呑気だ。
　暴力に慣れてしまっている牛太郎に、上総介は張り合いをなくしてしまったらしい。
　上総介は舌を打って床几に座り直し、震えもしないで丸まっている牛太郎の頭に一度脇差を投げつけたあと、周りを取り囲む小姓や従者を退かせ、二人きりにした。
「おおかた、恥をさらしたから、この場から逃げたいっていうのがテメーの思うところだろ。違うか。あ？」
「おっしゃる通りです」
「うつけがっ！」
　腰帯に差していた扇子を投げつけられて、頭を押さえる牛太郎。
「お前などにいくさ働きなど求めてねえ。恥をさらすことぐらい見通していたことだ」
「じゃあ、摂津に――」
「行かせるか！」
　牛太郎は子供のようにうなだれる。馬鹿だった。しかし、上総介は言った。
「浜松に行け」
　牛太郎は呑気に首を傾げる。
「ただでは摂津に向かわせん。お前はかつて武田のタヌキが上洛途上で死ぬとほざいたな。ならば、お前がタヌキ入道の首を討ち取ってきやがれ」

にぎりこぶし

言わずもがな、武田は浅井と連携している。

秋は日々色を濃くさせていき、蹄が大地を鳴らす音が遠く甲斐から聞こえてきた。

山県三郎兵衛尉昌景率いる赤備えの騎馬隊と五千の兵が信濃から南下してき、東三河の長篠城を攻めかかったという報が、織田に伝えられてきている。

さらに、武田徳栄軒率いる本隊、二万人余が甲府を出た。

小谷城攻めの上総介及び織田勢のほとんどが動けない。

三河殿を見殺しか――。

虎御前山の将たちにはそうした見方が固まりつつあり、また、今までさんざん織田のために身を粉にして働いてきた徳川三河守を哀れに思った。

しかし、おやかた様はどうされるおつもりなのか――。

誰がどう見たとしても、今、火急に立ち向かわなければならないのは浅井よりも武田である。まさか、自分たちの主君、上総介信長が事態を把握できないはずがない。

だが、上総介は動かない。

いや、たいがいの将たちにはわからなくなってきていた。動かないのか、動けないのか、判別できなかった。今や織田家臣団は、明日の敵に立ち向かうだけで精一杯なのだ。

そんな、悲愴ささえ漂い始めた諸将の中で、牛太郎だけは痣だらけの顔をにこにことさせている。

「いやあ、浜松城に行くことになっちゃったよ」

明日の草野攻めの準備に取り組んでいた左衛門太郎や玄蕃允の前で、牛太郎はなめらかな口調だった。

「ていうことで、おれは戦線離脱するわ。仕方ないね、信長様の命令だからさ」

今までのいくさの中でもっとも簡単ないくさだと牛太郎は考えていた。なぜなら、武田信玄が死ぬ。それで終わりなのだ。浜松城で高見の見物をしていればよいだけである。

だが、左衛門太郎は武田徳栄軒の死など夢にも思っていない。

「父上一人で行かせるわけにはいきません」

第一に危険である。次に三河守に顔が立たない。せめてもの軍勢を連れて行かなければ了承できないと左衛門太郎は言った。

だが、左衛門太郎は北近江の戦線から外れられない。

「ていうことで、一人で行くわ。あ、いや、ねじり鉢巻きと二人で」

「なりません」

一人で気ままに旅をしたい牛太郎と、その身を案じる左衛門太郎でおおいに揉めた。

「そんなのどうせたかだか百人そこらを連れていったって何の役にも立たねえだろうが」

と、牛太郎が言えば、

「じゃあ、もしも、決戦となったときに父上はどうするのですか。一人だから出陣しないなどと三河様におっしゃるつもりですか」

「そうだ」

「馬鹿げたことを！」

と、左衛門太郎は目玉を剥き出す。

「話になりませぬ。もうよいです。玄蕃殿、九之坪勢を連れて父上に供してくだされ」

「ええっ？」

あからさまに眉をしかめた玄蕃允。

「おいっ！　見ろ、この顔を！　こんな奴なんかと一緒に行けるか！」

「頼みましたぞ、玄蕃殿。拙者が代わりに柴田の叔父上に申してくるゆえ、頼みましたぞ」

左衛門太郎は両者の意見も聞かずに背中を返し、柴田権六郎のいる陣へと歩いていってしまった。

睨み合う牛太郎と玄蕃允。
誰がこんな奴なんかと。
昼過ぎ、牛太郎は栗綱に跨り、栗之介の誘導のもと、虎御前山を立ち、ひとまず岐阜を目指した。
牛太郎からやや距離を置いて、玄蕃允率いる九之坪勢があとを付いてくる。
牛太郎は栗綱を止めて、後ろを振り返ると言った。
「別にいいんだぞ。無理して付いてこなくたって。お前なんかいないほうがせいせいするしな！」
「わしこそそうしたいわ。しかし、左衛門太郎殿の命とあらば、従う他なかろうが。たとえ、オヤジ殿みたいな愚将の護衛だとしてもな！」
言葉はすっかり礼を失っている。牛太郎は腹に据えかねたが、ふと思った。どさくさに紛れて、玄蕃允を武田騎馬隊に葬らせよう、と。
途中に宿をとればいいものを、牛太郎は玄蕃允と一言も口をききたくないがために、その日に岐阜に戻った。
もう、夜は深くなっている。
玄蕃允と九之坪勢はいつのまにか背後から姿を消しており、おそらく、願福寺に向かったのだろう、牛太郎はそれこそせいせいしながら稲葉山の自宅の門をくぐった。
すでに簗田の屋敷は寝息を立てている。
栗之介が栗綱の世話にかまけ出し、牛太郎は自ら台所に立つが、炊事などできもしないので、鉄製のやかんで湯を沸かすと栗之介を呼んで、二人で湯漬けをかき込んだ。
「何者じゃっ！」
突如、梓の声が轟いてあわてて振り返ってみると、たすき掛けした梓が薙刀を振りかぶっている。
「あ、あ、あ、あっしです！　う、牛太郎ですっ！」
梓は構えを解いた。

「なぜに亭主殿がおるのじゃ」
湯漬けを平らげたあと、自室に招いた梓に牛太郎は事情を説明した。
「武田入道を相手にするとは、亭主殿は相変わらず難儀なもんじゃ」
梓は吐息をついた。
「もはや、ここでじっとしておるのも辛い。いつか亭主殿の悲報が寄越されるのではないかと思い、気が気ではない」
梓は長い睫毛を伏せて、見ようによっては今にも泣き出しそうだった。
すっかり寝ているはずの時間なのに、物音に気付いて薙刀を手にしてきたあたり、気が張っているのだろう。世間知らずの梓であっても、武田騎馬隊の出陣は耳にしているに違いない。この岐阜がいつ戦火に巻き込まれるか、織田は滅びてしまうのか、人一倍気性の強い梓だからこそ、張り詰めているのかもしれない。
「大丈夫です、梓殿」
牛太郎は梓の華奢な両肩を掴むと、潤んだ瞳をしっかと見つめる。
「あっしは死にませんし、岐阜を守るためにあっしは行くのです」
素晴らしい男気であった。頼れる者の顔であった。なにせ、武田徳栄軒の死を知っているからこそ、こんな顔つきをできる。普段の牛太郎だったら武田を恐れるあまり、家を出て逃亡だ。
無論、梓は牛太郎の茶番の真実を知らないから、唇をつぼみのように小さく開いて、すがりつくように、うっとりと牛太郎を見つめる。
「なにゆえ、そのような自信があるのじゃ」
「ここで死ぬぐらいなら、あっしは梓殿と一緒に暮らせていません。あっしと梓殿の縁は天が与えてくださった運命でございます。天があっしを見放すようなら、最初から梓殿はあっしのもとにおりません」
この時代の女性――、とくに武家の箱入り娘などは生と死のはかなさに日頃から直面しているせいで、散りゆく花のようなみやびさ

に一種の憧れを持っていた。
梓も例外ではなく、気取った場面の気取った言葉ほど胸を動かされるのだった。
「しかし、天はかようにもわらわと亭主殿を見ていてくれているのか。ときに天は罪のない者を見殺しにするではないか」
梓の声はすすり泣きのように震えている。
もしも、最初の妻が梓でなかったら、牛太郎は見事な女たらしになっていたかもしれない。
「殺し合いは人がするんです。人と人とが出会い、殺し合いをし、恋愛をするんです。でも、あっしと梓殿の馴れ初めは運命じゃないですか」
ただ、牛太郎も牛太郎で自分で言っているうちにその気になってくる。
「あっしは梓殿がいるかぎり死にません」
と、肩を掴む両手に力がこもった。
まあ、牛太郎も梓に惚れていた。梓と出会うまでは不遇な恋愛を辿ってきたため、たとえ殴られ蹴られようとも、自分をここまで愛してくれる人は初めてだったので、その有難さを無意識ながらも素直に幸福に思っていた。
「夢のようじゃ。亭主殿はまたずっと岐阜に戻られないかと思っていたというのに」
梓は牛太郎の胸にそっと頭を寄せる。
枕を一つにした月影の部屋で、梓は牛太郎の腕に甘えながら、いくさはどうだったのかと訊ねてきた。太郎は元気なのか、危ない目には合わなかったのか、牛太郎自身はどのような槍働きであったのか。
美しい妻との睦事のあと、闇にたゆたうような心地であった牛太郎の気分は、梓のその質問により、すっかり冷めた。
「太郎は元気ですし、危ない目にも合っていませんし、あっしもそれなりに活躍しましたが――」

おもしろくないことを思い出してしまった牛太郎は眉を八の字にして口を閉ざした。

あのゲジゲジ眉毛野郎が。と、玄蕃允の高笑いが聞こえてくるようで、唸るような吐息をついた。

「どうしたのじゃ」

さすがに、何度か寝夜を共にしているだけあって、梓は夫の胸の内がだいたい感ぜられるようになっている。

「何か、よからぬことがあったのか。何かあったなら、わらわに申してみよ。聞くことしかできぬかもしれぬが、わらわはいつでも亭主殿の味方じゃ」

牛太郎は再度溜め息をついた。

「実は、玄蕃允とかいう馬鹿が――」

と、牛太郎は愚痴った。ただの愚痴であって、これを言ったところで、どうにかなるとは思ってもいなかった。

そういうつもりではなかった。そういうつもりでは。

「なんじゃと！」

突如として梓は血相を変えて体を起こし、その細い眉は鬼のごとく吊り上がっていた。

「あやつがかような無礼を働いているというのかっ！　なんていうことじゃ。なんていう柴田の恥さらし者じゃ。叔父御にかような無礼を働くとはなんていうことじゃ」

あわわ……。

梓が握り拳を作ってわなわなと震えている。

とんだ跳ねっ返りじゃ

梓の恐ろしさを知らないはずないのだが、玄蕃允は高をくくっていたのであろう。

「叔母上に言われる筋合いはございませぬ」

とか、

「おなごに頼るとは、オヤジ殿も情けないですな」

とか、

「そもそもわしは佐久間の人間であって柴田の家の者ではござらん。とやかく言いたいのであれば、わしの母上に申してくだされ」

などと、若かった。

梓は木刀を手に取り、まるで炎を背負っているかのような形相で腰を上げる。

「馬鹿っ！　逃げろ！」

牛太郎が声を荒げたが、玄蕃允はすっくと立ち上がり、梓の前に仁王立ちした。

いつ、そのような鍛錬をしているのか知れない見事な捌きで梓の木刀が玄蕃允目掛けて振り抜かれた。が、玄蕃允は木刀を片手で受け止める。

「所詮、女のすることですわ、叔母上」

しかし、余裕を見せたのも束の間、「てやあっ！」という掛け声とともに梓の蹴りが玄蕃允の股間を打ち抜き、玄蕃允は目玉を剥き出しながら呻き上げ、腰を折った。

「そなたは何様じゃっ！　誰に物を言うておるんじゃっ！」

ここからは梓の独壇場である。白い右拳が玄蕃允の太い眉の間を貫き、さらに放たれた左拳がこめかみに打ちこまれる。床に落とした木刀を拾い上げると、それを脳天に叩き込む。

さすがの玄蕃允も表情を歪めながら膝をついた。

「生意気な口を叩けばどのようなことになるか思い知れいっ！」

梓は木刀を玄蕃允の体に何度も振り落とす。玄蕃允は頭を抱えてよたよたと逃げようとするが、襟首を掴まれて引き戻され、さらに木刀の餌食となる。

「叔母上！　申し訳ございません！　申し訳ございません！　堪忍してくだされ！」

「許されるかあっ！」

牛太郎は震える指先を噛みながら、鬼梓の所業を見ていることしかできない。やられているときよりも、見ているときのほうが恐ろしい。なぜ、自分の女房はこんなに喧嘩慣れしているのか。

梓がいる限り、岐阜は平和だろう。

息たえだえになるまで叩きのめされた玄蕃允は、例のように簗田家の女中、お貞とおかつに両脇を抱えられて運ばれていった。

「とんだ跳ねっ返りじゃ」

そう呟いたあと、梓は牛太郎をぎろりと睨む。

「亭主殿も亭主殿じゃ。まだ若いからと言って、亭主殿は甘いのじゃ。今、躾なければいつ躾るのじゃ」

「は、はいっ」

玄蕃允が重傷を負ったため、出立は三日伸びた。

その間、玄蕃允は簗田家で傷を癒していたが、四六時中、梓にこんこんと説教された。哀れに思った牛太郎は、玄蕃允の母、梓の姉を連れてきて、いつまでも怒りをおさめない梓をなだめさせた。

「これでお前も世の中の怖さってものがわかっただろう」

牛太郎はぐったりと横になる玄蕃允の枕元に座り、ちょっとした同情もこめてそう言った。

「嫁は、優しい子を貰うんだぞ」

玄蕃允はこくりと頷いた。

思わぬ休息を与えられた牛太郎は、京の相国寺の僧、承兌や、堺の茶人、田中宗易などに文をしたためた。

この手紙をお前らが読んでいるときには、おれは浜松城にいるだろう。武田信玄の出陣は噂話の好きなお前らなら知っているだろう

が、まあ、見ておけ。おれは生き残って、また、そっちに行くからよ。

そうして、堺に常駐している配下の者たちにも文をしたためようとしたが、やめた。

縁側に座り、赤い葉がひらひらと落ちる様子を眺めながら、いよいよ、武田との戦いかと牛太郎は感慨に耽った。

山県三郎兵衛尉が長篠城を攻めかかっているらしい。

彼は牛太郎が長年恨みを抱いてきた男である。

一度だけ顔を合わせたことがある。奇妙丸、今の勘九郎信忠と武田家の松姫との婚姻の謝礼にと、甲府に赴いたときであった。

三郎兵衛尉に殺されかけている。

いや、牛太郎は三郎兵衛尉以外の人間からも、命を狙われたことがあるが、三郎兵衛尉だけを長年恨んでいるのは、甲府には悪い印象しかないからである。

偉そうな奴等ばっかりだった。

その代表が牛太郎の中では山県三郎兵衛尉になっている。

牛太郎はほくそ笑った。ついにあの、真っ赤な鎧を着ている目立ちたがり屋の集団を殲滅するときがきた。今頃、あいつらは武田信玄の下で意気盛んに違いないだろうけれど、まさか、信玄が死んで、長篠で一網打尽にされるだなんて露とも思っていないだろうな。

中でも、牛太郎は山県三郎兵衛尉だけは自分のこの手で殺してやりたいと考えていた。

火縄銃だ。

牛太郎は腰を上げると、馬屋で休んでいる栗綱のもとに顔を出し、鼻面を寄せてくる栗綱を腕で抱きながら考えた。

栗綱から落ちてしまうから、発砲は一撃だけで終わってしまう。

反対に、反動で落ちなければ、何発でも銃弾を放つことができる。

一撃必中は難しいが、何発も撃てるようになれば、山県三郎兵衛尉を撃ち抜けるかもしれない。

牛太郎は鞍から落ちないようにするにはどうしたらよいか、その

工夫を必死に模索した。
「ははん。栗綱と言えば、鬼神のごとき軍馬かと聞いていましたけど、いくさを離れれば可愛いものですな」
聞き覚えのない声がして、牛太郎は声の主に視線を向けた。
筋骨隆々の若者、いや、つぶらな瞳を支える目元には、まだ幼さの面影が残っており、その少年は女のもののような唇をにたにたとほころばせている。
「聞きましたよ、簗田殿。なんでも、浜松城に出かけるとか。ただ、引き連れる軍勢はたったの五十人」
「誰だ、キミは。勝手に入ってきやがって」
「なんだ、覚えていないんですか。残念だなあ、森三左衛門の倅、勝蔵ですよ」
牛太郎はしばらく呆然とした。一度、目をこすって、再び顔を上げてみた。森三左衛門可成の息子のカツゾウなら知っている。しかし、目の前にいるのは、あの可愛らしい子供ではない。背が高く、肩はがっしりと盛り上がっていて、どことないふてぶてしさは、あのカツゾウではない。
「嘘だろ」
と、牛太郎は苦笑しながら勝蔵に歩み寄る。
「見違えたじゃないか」
「そりゃあ、まあ。なにしろ、簗田殿と最後にお会いしてから三年ぐらいは経っておりますゆえ」
たったそれだけで、こうも成長するものなのか。牛太郎は頬を緩ませながら、勝蔵の肩を叩き、
「そうかそうか。いやあ、立派になっちゃって。こんなところではなんだから、さあさあ、中に上がりなさい」
「いや、ここで良いです」
「そう、遠慮するなって」
「いや、実は簗田殿。頼みごとがあって参ったのです。ゆえ、簗田殿の家のお方に見られるわけにはいきませぬ」

「なんだよ。そんなさ、かしこまんなくたっていいんだから。おれが亡くなった三左衛門殿にえらい世話になったってことは、皆、知っていることなんだから」

「いや、誰にも知られたくないのです」

そう言って頑固に口端を結ぶ勝蔵に、牛太郎は首を傾げた。何かの相談か。とはいえ、勝蔵とはそこまでの縁でもない。

「そこまで言うんなら、ここでいいけど。なんなの」

不審がる牛太郎の足元に、突然、勝蔵は膝をついてひれ伏した。

「お、俺も、簗田殿と共に浜松に連れて行ってくだされ！　お頼み申す！」

りょうかい

父の三左衛門可成が戦死してからすぐに、森勝蔵長可は元服、家督を継いだのだが、それから二年、初陣はいまだ果たしていない。

「若様が御出陣されたというのに」

俺は岐阜で燻っているだけなのだと言いたいらしい。

「だから、築田殿、連れて行ってくだされ。名前も素性も伏せまするゆえ、俺をどうか男にさせてくだされ」

勝蔵の真っすぐな眼差しに牛太郎は頭をぼりぼりと掻き、

「いやあ、気持ちはわかるけどさあ」

と、なかなか辛いものがあった。

わずか十五歳である。それでいて、勝蔵は織田家の重臣である。牛太郎が「いやあ、気持ちはわかるけどさ」などと年配者の顔をするとはもっての他だ。

いにしえより続く源氏の系統であり、上総介の片腕として亡き三左衛門が盛り立てた森家。勝蔵は上総介の寵愛を受けているのもあって、そのすべてを受け継いだ。

しかし、勝蔵は少年であった。森家の棟梁とは名ばかりで、今は、若輩の勝蔵を支えるようにして、三左衛門のかつての配下の者たちが奮闘している。

勝蔵にとっては、それがいたたまれないのであろう。

だが、その若気を受け入れて浜松に連れて行き、万が一、武田とのいくさになって勝蔵が戦死してしまった場合、牛太郎には帰る場所がないし、あの世の三左衛門にも申し訳が立たない。

「無理だ。今はじっと我慢していなよ。そう、焦ったって仕方ないだろ」

「焦りまする！　だいたい、左衛門太郎殿は俺の年齢ぐらいのときにはすでにいくさ場に出ていたと言うじゃありませんか！」

「いや、太郎は馬廻衆だったから。それに、キミは信長様にも他の

家臣の人たちにも大事にされているんだから」
「ならば」
勝蔵は太刀をきらりと抜いて、切っ先を自らの腹に向けた。
「このような情けない日々を送っていても意味がありませぬ」
「ちょ、ちょっと！」
牛太郎はあわてて勝蔵の手を握り押さえつけようとするが、勝蔵の力はなかなか立派で、跳ね飛ばされてしまう。
「どこに行こうと、何をしようと、いつだって俺は三左の息子だと言われる始末。織田の危機に何もできずに女子供と同じ扱いを受けようとは、この上ない恥に他なりませぬ」
「わ、わかった。わかったから、そんな真似はよしてくれ。連れていくから！」
牛太郎が言うと、勝蔵は太刀を鞘におさめ、すっくと腰を上げた。
「かしこまりました。それでは支度をしてまいりまする」
勝蔵はさっさと庭先から姿を消していき、どこか、してやられたようだった。
まあいい。牛太郎は溜め息をつきながら縁側に腰かけた。武田信玄が死ぬまでは、万が一、そうなったとしてもいくさに出なければいい。信玄が死ねば、信長が大勢の鉄砲隊を引き連れてやって来る。そのとき、安全な戦いになったときに、勝蔵に華を持たせてやればいいことだ。
それにしても、玄蕃允といい勝蔵といい、一言目には左衛門太郎の名前だから、牛太郎にはちとおもしろくない。
左衛門太郎は若者たちにやたらと崇拝されているが、太郎を引き上げたのはおれだから。
とにもかくにも、牛太郎は九之坪勢と玄蕃允、それに森勝蔵を従えて岐阜を立った。
「なんだか、見たことのある小僧っ子がいるんだがな、オヤジ殿」
と、玄蕃允は岐阜を離れた途端、元の粗野な口調になったが、いまだ顔の腫れは引いていないので、牛太郎は大目に見てやった。

ただ、軽口を叩いた玄蕃允と、叩かれた勝蔵がお互いに馬上で睨み合っている。

「玄蕃、なんなんだ、その口の聞き方は」

勝蔵は森家の当主だけあって、つぶらな瞳にあどけなさを残しながらも、物言いはぴしゃりとしている。

ただ、太もものはいだてに入った森家の家紋でもある鶴丸紋、金色の鶴が翼を大きく広げているさまがあまりにきらびやかすぎる。亡き父の三左衛門の重厚な武者構えには金鶴も実に映えていたのだが、この少年とも青年とも定まらない勝蔵は、たとえその体躯が大人顔負けだったとしても、どこか金鶴を着せられている感が否めない。

「物見遊山ですか、森殿」

齢の近い玄蕃允だが、勝蔵と違うのはすでに数々の危うい戦場を経験している。少年の面影もなければ、実にふてぶてしい。

「貴様は何を言っているんだ？　俺は森なんかじゃない。簗田左衛門尉が配下、山田三郎だぞ」

「ならば、その足に飼っている鶴はなんでしょうかな」

「ただの飾りだ」

「なるほど。たいそうな飾りだ」

柴田権六郎の甥にして、佐久間一族の男子とはいえ、筆頭家老の佐久間右衛門尉は従兄弟叔父である。玄蕃允は嫡流ではない。森三左衛門の功績だけで重臣扱いを受けている勝蔵にこめた皮肉であろう。

「玄蕃、貴様は昔からそうだ。意地が汚く口も悪ければ、腕っ節だけに頼って、頭の中身は空虚。貴様のような猪武者はいつか無謀ないくさをし、哀れに死んでいくだろうな」

「おお、おお。オヤジ殿の配下の山田某とやらは口の聞き方をまるで知らないようだな。まるで、酒に酔って醜態をさらすどこぞの若君のようだ」

どうやら、玄蕃允と勝蔵は昔馴染みの知己で、相当な仲の悪さら

しい。岐阜から尾張清州までの道中、牛太郎の背後で、終始、盛りの烏のように言い争っていた。

かといって、玄蕃允としては、上席の森家の当主に手を出せるわけがなく、勝蔵としても正体を（建前として）忍んでいる以上、山田三郎に徹しているようで、どちらからも手は出なかった。

その分、やかましい。

「オヤジ殿、この者に酒を飲ませてはならぬぞ。きっと、城下の女を食い漁り、挙げ句には殺してしまうであろう。おそらく、この者はどこぞの若君と一緒で、女を抱くときには相手の首を締めてしまうという悪癖があるだろうからな」

「簗田殿、この者などいくさ場に出してはなりませぬぞ。手柄ほしさに軍紀を無視してまでいくさ場に突っ込む猪武者ですからな。――だいたい、なんなんだ、その呼び方は。たいがいにしろ」

「何を言うか。オヤジ殿はオヤジ殿ではないか。勇名馳せる左衛門太郎殿のおかげで家中に重きを成し、稲葉山に戻れば美しき奥方に頭の上がらぬ簗田家のオヤジ殿ではないか。それとも何か、お主はオヤジ殿という言葉を聞くと、感慨深いことでもあるのかな？」

「ずいぶん達者な口だな。貴様はそうだから佐久間の家でも相手にされないのだ。爪弾き者の世話をしてやっている柴田の家や簗田殿の気持ちにもなってみろ」

「いい加減、黙ってろっ！」

子供の喧嘩に口を挟みたくない牛太郎であったが、さすがにうるさすぎた。

「だいたいな、おれはお前らなんか連れていきたくないんだからなっ！　だったら、黙っていろっ！」

二人の子供は、フン、と、鼻を背け合う。

牛太郎は栗綱の馬上で吐息をついた。これじゃまるで、遠足の引率じゃんか。

九之坪勢は清州に一泊する。明日は沓掛に滞在し、明後日には三河に入る予定であった。

清州は懐かしい。何年振りだろうか。牛太郎はとある寺に九之坪勢を置いていくと、懐かしさに誘われて、栗之介と共に月夜の城下を回った。

「変わったな」

と、牛太郎は呟いた。牛太郎が上総介に仕えたころというのは、もう少し貧相な町並みで、足軽兵卒が往来する物々しさに家臣団の女子供たちが慎ましく華を添える片田舎の城下町であった。

上総介が居城を岐阜に移したことで、家臣団の家族も、大部分の軍勢もここから去った。ただ、日の出の勢いの織田家の領地だけあって、物々しさも晴れやかさもなくなったが、通りの軒先には行燈が並び、宿場として賑わっている。

彼の第二の人生はここから始まった。いや、今では織田の侍大将として頭角を現している藤吉郎も、かつてはかぶき者として名を馳せていた前田又左衛門も、ここで泥の中を這いつくばっていた。

懐かしい。月光の下をたゆたう晩秋の香りがはかとない寂しさを覚えさせる。あのころはあのころで苦労したが、今思えば、それなりに楽しい青春のひとときであったのかもしれない。

牛太郎は足のおもむくままに、昔、住んでいた界隈へと進んだ。

「あっ」

かつての住まいはなくなっていた。あの、つぎはぎだらけのぼろぼろの家は、跡かたもなく消えており、生い茂ったほうき草だけがゆるやかな風にたなびいている。

「まあな、旦那は今では岐阜の屋敷に奥方も孫もいるってことだろ。それだけやってきたってことだろ」

栗之介が柄にもなく慰めてくるが、牛太郎はすすきを指先に触り、月の光をまぶした穂をいつまでも眺めた。

物々しい気配

滞在の寺に戻ってきて、眠りにつこうとしていた牛太郎だが、なにやら外が騒がしい。

何事かと思って戸を開けてみると、調度、九之坪勢の足軽組長が甲冑を着込んだままの姿で駆けこんできた。

「殿様っ！　大変ですっ！」

まさか、武田が清州に攻めてきたのか――。

「玄蕃允様と森さ、いや、山田三郎様が喧嘩をしておりますっ！」

牛太郎は溜め息をついた。

「そんなの放っておけよ」

「しかしっ、山田三郎様はひどく泥酔しておりまして、お互いに抜き身をさらす始末で、どちらかが命を落とさない限り、喧嘩はおさまりそうもありません」

ひどく狼狽している足軽組長の様子を前にして、牛太郎はさすがに部屋を出た。

玄蕃允と勝蔵は境内で果たし合いをしているらしく、九之坪勢五十名がわらわらとしている中をかき分けていくと、羽織を剥いで上半身を裸にしている勝蔵と、胴鎧と兜だけを脱いで、着物の上に籠手だけを上半身に身につけている玄蕃允が、あろうことか鍔を競り合わせている。

かがり火がぱちぱちと立てる音を聞きながら、二人とも眉を吊り上げさせ、押しつ引きつつ、互いの目を合わせながら一進一退であった。

「何をやってんだっ！　この馬鹿どもっ！」

牛太郎は駆け寄ると、まず玄蕃允を、次に勝蔵を突き飛ばして、倒れ込んだ二人に怒鳴り散らした。

「お前らは木下藤吉郎と佐々内蔵助かっ！　仲間割れをしているなんて、あの馬鹿ども以来だぞっ！」

「なんだとお？」
と、左手に太刀を握り締めたまま、ゆらりと立ち上がった勝蔵。小首をかたむけ、鼻先を突き上げ、その目は据わっている。
「なら、俺はどちらだと言うのだ、あ？　サルか、内蔵助か、どちらだと言うのだ、あ？」
太刀の切っ先を牛太郎に向けてきて、炎を受け止める瞳はまったく狂気じみている。
「や、やめろっ。落ち着けって、落ち着けよ、な、カツゾウ君」
牛太郎は両手をかかげながらじりじりと後ずさり。酒乱だと聞いてはいたが、ここまでとは思いもしなかった。
「何がそんなに気に入らないのかわからないけどさ、ぼ、暴力はよくないよ、暴力は」
「あーっ？　何を訳のわからねえことを言っているんだ、この鈍牛」
途端、飛んできた玄蕃允の足が勝蔵の握る太刀を落とし、更に玄蕃允は勝蔵を地面に組み伏せると、そのまま滅多やたらに殴りつけた。
「身の程知らずのこのガキがっ！」
しかし、覆い被さられていた勝蔵も負けじと玄蕃允を両の足で蹴り飛ばし、よろめいた玄蕃允に拳で襲いかかる。
「なめてんのかっ、オラァっ！」
あわわ。互いの拳が両者の骨を軋ませて、二人の口や鼻から血が飛び散って、牛太郎はおろおろとうろたえた。
太刀を捨てた二人に九之坪勢が止めにかかったが、理性の糸が切れてしまっている二人は間に割って邪魔をしてくる兵卒たちを殴り飛ばし、投げ飛ばし、十人以上に抑え込まれてもなお、腕に噛みついたりと、収拾がつかない。
「やってやろうじゃねえか、コラァ！」
「ぶっ殺してやるっ！」
「旦那、ほら」
近寄ることもどうしようもできずにうろうろとしていた牛太郎の

もとに、栗之介が点火された火縄銃を持ってきた。
ふむ。いいアイデアだ。
牛太郎は夜空に向けて銃声を放った。境内に轟音が鳴り響き、連中の動きが止まった。
「いい加減にしろっ！　お前らは何をしに来たんだっ！　この馬鹿垂れっ！　喧嘩をするなら帰れっ！　岐阜に帰れっ！」
言うだけ言うと、火縄銃を栗之介に渡し、火の粉がこちらに飛び火する前に牛太郎はさっさと立ち去った。

牛太郎率いる九之坪勢は東海道をひたすら東進した。沓掛から三河へと入り、三日をかけてようやく遠江国浜松城に到着した。
「簗田殿！」
徳川三河守自らが大手門まで牛太郎を出迎えにやって来た。胴長短足、下膨れの頬を揺らしながらどたどたと歩み寄って来ると、物腰も低く牛太郎の手を取る。
「お久しぶりですなあ。お久しぶりですなあ。簗田殿が浜松までやって来てくれるとは、心強いことこの上ありません」
三河守は牛太郎の肩越しにちらりと九之坪勢を見やる。一瞬のうちだけ固まったあと、また、牛太郎に人懐っこい笑みを見せてきて、
「ささ、こんなところではなんですから、城内にてゆるりとメシでも食いましょう」
と、牛太郎を導いた。
浜松城は徳川三河守自らが二年前に築いた城で、曲輪と石垣が堅固に構えられている中に、屈強な徳川兵たちが詰めている。
キモブタめ、と、牛太郎は自分だけの三河守の蔑称を胸の内で呟きながら、胴長短足、ぎょろ目の男をやっかんだ。
大した奴でもないくせに、こんな城に住んでやがったのか。
ただ、べらべらと城郭の造りを説明している三河守の横顔を見つめながら、この男こそがのちの征夷大将軍なのだから、世の中わからないものだとも思う。

ゆるりとメシでも、という話だったが、牛太郎の到着を聞きつけた諸将が本丸御殿にぞろぞろと集まってきた、配下の者たちに詰め寄られて、三河守は渋々軍議を開いた。

「上総介殿の援軍はいつ来られるのですか！」

開口一番、徳川家の重臣酒井左衛門尉忠次がなじるように浴びせかけてくると、

「上総介殿は徳川を見殺しにされるおつもりか！」

「簗田殿はたかだか五十の兵を連れて一体何をしに来たのだ！」

などと、軍議というよりかは牛太郎を吊るし上げる場と化してしまい、よもや、このような非難を浴びるとは思ってもいなかった牛太郎は面食らい、いかつい三河武者たちの必死の形相にうろたえた。

三河守も三河守で、飛び交う罵倒に目をきょろきょろとさせて、何度か家臣団を止めようという姿勢を見せるが、諸将の圧力に手を引っ込めてしまう。

「長篠城は落城し、山県三郎兵衛尉の軍は、青崩峠を越えた武田本隊と合流の姿勢を見せております。簗田殿、一刻の猶予もござらん。至急、上総介殿の援軍を連れてきてくだされ」

無類の猛者である本多平八郎忠勝でさえ、口調は落ち着いているものの訴えてくる。

徳川は切迫している。それもそうだろう、織田の人間でさえ武田徳栄軒の出陣に戦々恐々としているのだ。前線の浜松がのんびりと構えているはずがない。

「ま、まあ、援軍を呼びたいのは山々ですが、なにしろ、信長様も動くに動けない状況で」

牛太郎は、徳川がここで武田に滅ぼされるとは万に一つも思っていない。だから、危機感はない。その様子がこの切迫している雰囲気には非常に浮ついており、牛太郎の言葉は火に油を注ぐようなものだった。

「動くに動けないとはなんなのですか！」

と、酒井左衛門尉が片膝を立てて起き上がり、

「我ら徳川はこれまでどれだけ上総介殿に尽くしてきたとお思いか！　南近江、金ヶ崎、姉川！　金ヶ崎ではおやかた様を見捨てられたというではないか！」

「左様！　それでも我らが上総介殿に不平不満を申し立てたことがあったか！　それなのに、上総介殿は我らの義理に見て見ぬ振りをし、見殺しにされるというのか！」

「いや、いや、まあ、まだ、負けるって決まったことではないですし」

どこまでも呑気な牛太郎に、諸将は閉口した。

噂に聞く簗田牛太郎とは、やはり愚将であったか――。

溜め息をつくと、がっかりと肩を落とし、悲愴な顔色で黙りこむ。

「簗田殿の言う通りではござらんか」

沈黙が続いた中、とある老人が頬を緩めた。

「簗田殿が来て下さったということは、いずれ上総介殿も援軍を寄越してくれるのでは。そもそも、簗田殿を責め立てて始まることでもありますまい」

ジジイ……。

「左様、左様」

と、三河守がこくりこくりと首を縦に振る。

「夏目の言う通り、やる前から負けいくさではいかん。ゆえに腹ごしらえをせねばな。腹が減ってはいくさはできぬ」

とにかく飯に有りつきたかったらしい。

語り継がれるひよっこ

三河守は牛太郎以下九之坪勢を浜松城内に留めさせようとしていたが、徳川諸将に責め立てられた肩身の狭さもあって、牛太郎は城下の寺を借り受けることとした。

牛太郎は書斎に入ると、ただちに書状をしたためる。上総介宛てだ。

三河武者が不満を増大させているから、せめてもの軍勢を派遣してくれ。たとえ、このいくさを凌いだとしても、徳川が織田に向ける意識が軽薄となってしまう。という内容である。

「天下に名だたる三河勢も、武田騎馬隊の前ではひよっこだな」

「ひよっこは貴様だろうが。よくも言えたものだな」

なぜ、玄蕃允と勝蔵はこの部屋にいるのだろうか。呼んでもいない。筆をすすめる牛太郎の背後で飽きずに言い争っている。

「しかし、どうするのだ、オヤジ殿。武田の本隊が浜松城まで迫ったさい、我らはたった五十の兵で加勢するつもりなのか」

「ははっ、臆しているのか、玄蕃」

「よく言うわ。お主はいくさ場に出たことがないからな。いくさのなんたるを知らない小僧っ子は気が楽であろう」

「もういい。黙れ」

牛太郎は玄蕃允に書状を突き出し、

「あとで早馬を出しておけ。それと、お前ら、どうしてここにいるんだ。ここは溜まり場じゃねえぞ」

「いざというときのことを決めておかなければならないだろ」

「戦術を立てておかなければなりますまい」

それぞれが言うと、玄蕃允と勝蔵は睨み合い、フン、と、鼻先を背ける。

清州での大喧嘩のあとも、懲りずに悪態を放ち合っているが、どうやら、勝蔵が酒さえ飲まなければ大ごとにはならないことに気付

き、牛太郎は勝蔵に禁酒を課した。
勝蔵は十五の小僧のくせにのんべえらしい。
「だいたい、進軍の途中で酒を飲む馬鹿がいるか」
と、沓掛でたしなめた。
「木下藤吉郎は二日酔いで信長様の前に姿を出して、ぼこぼこにされたんだぞ。せめて、いくさのときぐらいはやめろ」
以来、夜はおとなしくなっている。勝蔵はわりかし素直で、その辺りは幼いころと変わっていない。
とはいえ、それこそオヤジ代わりだと頭が痛い。
息子の左衛門太郎は、彼が八歳のころから小姓、のちに養子として傍に置いているが、太郎がどれだけ出来の良い子供か。
左衛門太郎は養父の牛太郎のあまりの情けなさに耐えかねて出しゃばる傾向があり、一時は牛太郎もその生意気さに腹を立てたりもしたが、この荒くれ者たちと比べてみると可愛いものだったようだ。
「だいたい、オヤジ殿はおやかた様に何を命じられて浜松までやって来たのだ。まさか、加勢をするためじゃないだろう」
「おいおい、玄蕃」
勝蔵は笑った。
「貴様、浜松に入って以来、ずっとその調子だな。貴様はどうやら勝ち戦に乗じることしかできぬつまらぬ将なのだな」
「勝ち戦に跨ってきたのはどっちか。お主のような七光りに言われたくないわ」
「もうやめろ。うるさい。とっとと自分の部屋に帰れ」
牛太郎はうんざりして寝転がり、背中を向けたが、玄蕃允も勝蔵も、今後どうするのか、作戦を立てないのか、と、食い下がってくる。
「今後も作戦もあるか。決めるのは家康殿だ」
そういうことでもないはずだが、牛太郎は武田徳栄軒の死だけにぶら下がっているので、何も考えていない。いくさがあろうがなかろうが、信玄は死ぬ。自分は信長に言われて来ただけ。おわり。

「お前らがうだうだと考えたって何もならねえだろ。だったら、おとなしく従っていろ」
だいたい、と、牛太郎は言いながら体を起こした。
「なんで、お前らが二人揃って仲良くここにいるんだ。喧嘩しているんじゃねえのか。喧嘩するんなら、顔を合わせないで寝てろよ」
すると、玄蕃允も勝蔵も、大きな態度に似合わず頬を膨らませて、なぜかふてくされる。
「ははあ」
牛太郎はにやりと笑んだ。
「お前ら、武田騎馬隊を恐れているんだな」
「な、何をっ！」
「お、恐れているのは玄蕃ではないですか！」
指摘にあわてふためく二人をよそに、牛太郎はうんうんと頷く。
「しょうがないしょうがない。お前らはまだ子供だからな。まあな、百戦練磨のおれに頼りたいっていう気持ちもわかるけど、もうちょっと、男らしくどしっと構えていろや」
玄蕃允が顔を真っ赤にしながら立ち上がった。
「お、オヤジ殿などに言われたくないわ！」
と、部屋を出て行ってしまい、勝蔵も、
「玄蕃などと一緒にしないでくだされ！」
と、戸をばちんと閉めていった。
くくっ。なかなか可愛げのある奴等じゃないか。牛太郎はにたにたと一人笑いながら荷駄の紐を解いていく。
百戦錬磨とは過大すぎるが、確かに牛太郎は数々の死地をくぐり抜けてきている。その点、若い玄蕃允と勝蔵は鼻息を荒くしてやって来たものの、切迫した浜松のこの雰囲気に飲まれてしまったのかもしれない。
桶狭間の戦いのときにはまだ幼かった十代の織田の将にとって、武田の進軍はかつてない経験だろう。
まして、織田のいくさは大軍を持って制する常勝戦略であり、寡

兵で挑んだことは桶狭間だけである。戦場を知っているとのたまうほど、玄蕃允はいくさを知らない。

牛太郎は活躍こそしていないが、織田勢の決戦のほとんどに参加しているし、織田家の危機が始まった金ヶ崎のしんがり戦では、死に直面している。

戦場だけではない。調略工作に明け暮れる日々の中で、常に緊迫感の伴った生活をしているから、前線の気配に怖じ気づくこともない。

「人生経験の差だな」

一人呟くほど、上機嫌であった。まあ、結局は武田の敗北を予見しているからこそであって、それがなかったら真っ先に震え上がっているのは牛太郎だろう。

ようやく一人きりになれた牛太郎は桐の箱を開けると、梓から貰い受けた花散らしの小袖を手に取り、匂いを嗅いだ。

友人（前書き）

＞i22625—2533＜
下手ですいません

友人

武田の強さというのは、武田徳栄軒信玄の強さに他ならない。甲斐の武田は昔から強いことは強かった。しかし、今ほど、全国の老若男女が知っているほどでもない。

徳栄軒が実父を追放して当主の座を乗っ取るまでは、武田家は一国の守護大名に留まっており、甲斐の国人や信濃の豪族、駿河守護の今川家、新興大名の北条家などと、地方の覇権を争う程度の勢力であった。

まさか、畿内の中央の舞台に躍り出るはずもない。

徳栄軒の登場が武田家を変える。まず、彼は争い続けていた今川、北条と婚姻同盟を結ぶと、甲斐領国の内政を確かなものにし、信濃の侵略に集中する。

山間の屈強な武者たちに苦戦しながらも、武田家は着々と信濃を蹂躙していき、知謀と武勇を兼ね備えた武田徳栄軒の名は知れ渡っていった。

しかし、とんでもない邪魔者が徳栄軒の前に立ちふさがった。越後の長尾景虎、今の上杉不識庵謙信である。

武田家の領土拡張はこの軍神に足止めされ、大決戦を五度に渡って繰り広げたが、雌雄を決することはできず、徳栄軒の野心は潰えたかに思われた。

しかし、情勢は変わっている。東海道の雄であった今川家が桶狭間の戦いで没落し、徳栄軒は機に乗じて領土を駿河へと拡大し、織田上総介の犬、徳川家と対峙することになる。

そして、諸大名の気運は反織田へと向いている。

不識庵との戦いにかまけて、織田の日の出の勢いに指をくわえているしかなかった徳栄軒は、今、万事を整えて上洛を果たそうとしていた。

今川の没落以降、背後の北条とは再び戦火を交えていたが和睦し、

越後上杉家とも停戦に持ち込でいる。念のため、遥か日本海に面する越中国で一揆を扇動させ、不識庵の目を信濃から逸らさせた。

武田の強さは徳栄軒のこうした外交努力と謀略による。

だが、それだけではない。甲府を出立した二万の軍勢は、上杉との度重なる戦闘の賜物か、幾度もの軍改革が施され、厳しい訓練と死闘の経験を備えた屈強の兵である。

総兵力では、織田・徳川にひけを取るが、織田は各地で起こった包囲網に苦戦しており、徳川だけの兵数は一万余だ。

広大に渡る織田領の喉元をえぐるように、武田勢は東海道を突き進む算段だ。

「大丈夫ッスよ」

牛太郎は呑気であった。脂の乗った戻り鰹の身に舌鼓を打ち、ここ最近、本丸御殿に呼ばれるたび、遠州灘に打ち上げられた季節の味に興じている。

「しかしですなあ、簗田殿のその根拠とはなんなんでしょうかな」

鰹の身をぺちゃぺちゃと食べ、吸い物をずるずると啜る三河守。こちらも言葉ほどの緊張感はない。

「だって、武田信玄なんてもういい年した老人でしょ。信玄さえいなければ、武田なんて百姓侍の寄せ集めじゃないですか」

「いやいや、簗田殿」

と、言いつつ、三河守は米を掻きこむ。途中、喉を詰まらせてごほごほとむせ返り、胸を叩いて落ち着いてから、ようやく続けた。

「泣く子も黙る天下の武田騎馬隊ですぞ。配下には歴戦の猛将も揃っておりますゆえ、百姓侍などとはいかがかと――」

ごほごほっ、と、米粒を飛ばし、湯を飲み干した。

「ああ、ああ、焦るから。家康殿、焦ったって仕方ありませんよ。動かざるごと山の如しですよ」

牛太郎がしたり顔で言うと、三河守は太ももをぽんと打った。

「なるほどっ。敵のお株を奪うということですなっ」

幼年時代のすべてが人質生活で、今は上総介の飼い犬と化してい

る三河守は忍耐強い。その一方で楽天家でもあった。忍耐とはじめじめとした暗闇の中でじっと時を待たなくてはならない。ゆえにたった一つのかすかな希望がなければ、耐え忍ぶことは人間として不衛生すぎる。

よもや、己がいずれ天下の覇権を握ろうとは、三河守は思いもしていないが、耐え忍べば何かがあることを、人質から脱却し、三河松平家の再興を果たした三河守は知っている。その何かを信じられるほどの楽天家である。

実際、牛太郎は三河守と時間を供にしていると、愉快であった。緊迫したこの情勢の中で、――もはや、徳川は終わりだという気配が漂う中で、三河守は人生を満喫している。こういった男と相対していると、こちらまで楽しくなってくるものだ。

もしかしたら、と、牛太郎は思う。この楽天家こそがやがては徳川幕府の総帥へと登っていくのだから、これこそ大将のあるべき姿なのかもしれない、と。

それにしても、

「それにしても、家康殿は太りすぎじゃないですかね。三河武者の主たる男がそれじゃあ、格好が悪いじゃないですか」

牛太郎は臆面もなく言うが、口を軽くさせてしまうのも三河守の人柄だろう。もっとも、牛太郎が三河守をどこかで侮っているというのもあるのだが。

「いやいや、簗田殿だって似たようなものじゃありませんか」

と、三河守はおどけて目を大きくする。

「そもそも、拙者はこう見えても若い時は痩せておったのですぞ。例えば、そう、いつぞや岐阜でお会いした簗田殿のご子息のような見映えのする武士だったのですから」

胸を突き出し、でっぷりとした腹をさすりながら、過ぎ去った己の姿を揚々と語った三河守に、牛太郎は蔑むような視線を送る。そもそも、三河守は「若い時」というほどの年齢ではない。おそらく三十になったかならぬかの齢である。

「それに拙者は太ってはいるものの、食っては寝て食っては寝ての暮らしをしているわけではございませぬ。山野を駆け廻り、川で水浴びをし、ただの太っちょではございませぬ」

「それって、あっしのことを遠回しにただの太った奴だと言っているようじゃないですか」

「い、いや、そ、そういうわけではございませぬが。そ、そうだっ。腹も膨れてしまったゆえ、食後の運動でもしましょうかな。うん、そうしよう。簗田殿も一緒にどうですか」

牛太郎はひそかに鼻で笑った。どんな醜態を晒してくれるか、見ものじゃないか。馬駆けならば牛太郎の栗綱に並ぶ馬はいないし、武芸をするにしても木刀を振り回しているだけだろう。

そういうことで、御殿の外に連れ出されたのだが、三河守が始めたのは鷹狩りであった。三河守の腕から放たれた鷹は勇壮に翼を広げ、獰猛な足で野鳥を捕獲する。

自分はまったく動いてねえじゃんか。

牛太郎は白々しい思いで三河守を眺めるが、当の三河守は澄み切った青空を旋回する鷹の姿に目を細めている。

「こんな時期に鷹狩りとは、おやかた様は肝が据わっておりますな」

背後から甲冑を着込んだ初老の男が歩み寄ってきた。吊るし上げの軍議で牛太郎に助け舟を出した夏目二郎左衛門である。皮肉とも取れる言葉であったが、顔の皺を緩めてにこにことしており、悪気はないのだろう。

「誰かと思えば夏目か。何事か起きたのか」

「いいえ。別段、これといった報せは受けておりませぬ。ただ、おやかた様が鷹狩りに興じており、これは一体どういうことなのか訊ねて参るよう皆々様から懇願されたゆえ」

「見ての通り、簗田殿と共に食後の運動だわい」

「なるほど」

「やることはやり、迎えるべき敵を迎え、臨むときが来れば臨む。今、むやみにうろたえたところで仕方ないであろう。皆の者にそう

伝えたまえ」
やはり、ただの楽天家ではないらしい。
捕獲して一休みしていた鷹を鷹匠が連れ戻してきて、三河守が巻く皮手袋の上に渡す。
「簗田殿は――」
と、夏目二郎左衛門が目尻に深い皺を刻んで訊ねてきた。
「なにゆえ、浜松に参られたのでしょう。このような情勢でわずか五十の手勢でやって来るとは奇特なお方としかいいようがありませんが」
「それはまあ」
牛太郎は空に目を移しながらもっともらしい答えを探した。上総介の命令であり、武田家の敗北という確固たる自信があってこそのことだが、それを言ってもおもしろくない。
「三河勢には今までさんざん世話になってきましたから。その義理を果たしに来たんでしょうかね」
まるで他人事のような物言いだったが、三河守や夏目二郎左衛門には牛太郎のそれが悠然かつ雄大な姿に見えたらしい。
「左様でございますか。簗田殿は金ヶ崎のいくさのとき、犠牲になった兵たちのために涙を流されたと我らが兵に聞きましたが、耳にした通り、戦国の世には珍しい御仁ですな」
「夏目。簗田殿はかくあるからこそ我が友人なのだ」
浜名湖のほとりの森は初冬の風に色褪せている。たなびく雲は遠州灘の遥か果ての空に吸い込まれていくように流れていく。
翌日、只来城・天方城・一宮城・飯田城・格和城・向笠城など、遠江の徳川支城はわずか一日のうちにことごとく落城する。

戦いの火蓋

天竜川以東に配された数々の支城は、浜松、三河への侵攻を防ぐための防衛線であった。

ところが、武田徳栄軒の前に何の役にも立っていない。赤子をひねるかのごとく、たったの一日で、防衛線は崩された。

この報を聞いたとき、浜松に在する誰もが徳栄軒の流言に違いないと期待した。だが、物見を走らせたところ、事実なのである。

愕然とした。予想以上に強すぎる。

本丸御殿に緊急招集された軍議に牛太郎も参加していたが、お通夜同然の暗澹たる雰囲気に、牛太郎は三河武者たちを哀れに思った。

もしも、武田信玄が死ななければ、こいつらは信長にいいように使われて終わったってことか。

「まさに風林火山だな」

三河守だけがどっしりと構えている。

「考えねばなるまい。どうしたら、日の本最強の武田に勝てるかを。のう、皆の者」

諸将は引き寄せられるようにして主の三河守に視線を上げた。三河守は口許を緩めている。

「そうじゃ」

夏目二郎左衛門が言った。

「考えねばなりますまい。いくさは始まったばかりですぞ」

諸将は静かに頷く。

ふーん。牛太郎は、徳川三河守が徳川家康たるゆえんを、ぼんやりとながら感じた。上総介信長はその激しさで道を切り開き、織田家臣団は上総介の激しさに突き動かされるように付いていっている。

対して、徳川家は別物のように違った。地縁の豪族がそのまま大きくなったような、さも家族や兄弟の縁で結ばれているような一つの集団であり、徳川家というよりかは、主従関係がひとくくりに三

河勢である。

徳川三河守家康はこの三河勢の中心に超然とした存在でいる。おそらく、三河守の代わりに三河勢の長となれる者はいない。

彼らは不思議な縁で結束している。

だが、それを強大にしたものが武田勢なのである。武田家臣団も三河勢のように結束しており、その中心は三河守などでは到底及びようもない武田徳栄軒信玄だ。

そんな隙のない敵をどう打ち崩すのか。

「今は持ちこたえるしかありません」

結論はそれしかない。絶望的で情けない限りではあるが、今は上総介の援軍を待つ他ない。

実際、織田の援軍が岐阜を出立したという報が牛太郎や三河勢に入ってきている。

ただし、

「岐阜からの援軍が到着するまでは早くても四日から五日」

「山県勢は長篠から東進しており、武田本隊と合流する構えです。おそらく、武田勢は二俣城の攻城にかかるでしょう」

諸将の言葉に、三河守はその丸い顔に初めて陰を落とした。

「二俣城を落とされては、掛川城、高天神城と、この浜松とが分断されてしまいます。さらに、浜松の防衛線はなくなります」

「天竜川を渡らせてしまったら、我らは終わりです」

酒井左衛門尉が言った。しかし、じゃあ、どうすればいい。場は水を打ったようにしんと静まり返る。

牛太郎は予想以上の絶望的状況に違和感を覚えた。本当に徳川は生き残れるのか、と。

後世からやって来た牛太郎には一つ気掛かりな点があった。その不安は普段は成りをひそめているが、時代の転換点に差し掛かったとき、常に顔を出してくる。

自分がいることによって、歴史が変わってしまっているんじゃないのか。

「二俣城に詰めるしかあるまいな」
と、三河守が沈黙を破って呟いた。
上総介の援軍が来るまで持ちこたえるためには、是が非でも天竜川を渡らせないことであった。
すぐに出陣となった。三河守自らが三千の兵を率いて、本多平八郎、内藤三左衛門、大久保治右衛門が三河守と共に浜松を出る。
牛太郎はというと、別段、九之坪勢を要請されたわけではないのだが、
「わしらも出るしかないだろ」
「簗田殿にあそこまで言われて、黙って指をくわえておられますか」
と、血気盛んな二人が詰め寄ってくる。
「馬鹿言え。今、どんな状況だかわかっているのか。間違いなく死ぬぞ」
牛太郎はすでに甲冑を着込んで準備万端の玄蕃允と勝蔵の前から逃げ去ろうとするが、勝蔵に腕を掴まれてしまう。
「ならば、簗田殿は何のために浜松までやって来たのですか。みすみす徳川殿を死地に見送るためだけに来たのですか」
「わしらは徳川殿の援軍ではないのか！　左衛門太郎殿はこういうときのために九之坪勢をオヤジ殿に付けたのではないか！」
牛太郎は今さら建前を並べ立てる玄蕃允を睨みつけた。
「お前らなあ、おれは援軍として信長様に派遣されたわけじゃねえんだぞ。お前らが勝手に付いてきただけだろうが」
「じゃあ、何をしに来たのです」
「何をしに来たのだ」
仲良く声を揃える玄蕃允と勝蔵に牛太郎は閉口してしまう。
「簗田殿！」
「オヤジ殿！」
何をしに来たのかと問われれば、何をしに来たのかは不明である。
上総介に何を命じられたかと言えば、タヌキ入道を殺してこい――。
牛太郎は首を横に振る。

振り返れば、そもそもの始まりは山本山城攻めの失態からであった。尻込みしてしまった牛太郎は戦線離脱を計ったのだが、魂胆を上総介に見抜かれて浜松に送られた。

何をしに来たのか、おそらく、名誉挽回のために来たのだろうが、この状況では非現実的すぎる。

武田徳栄軒の死なのだ。それまでは何がどうであれ動いてはならない。

「二万の軍勢に三千で立ち向かう気でいるんだぞ。二俣城には千人ちょっとっていう話だかんな。むやみに命を落としてどうするんだ。おれはいいけどな、お前らはまだ若い。死ぬのをわかっていて、突っ込ませるわけにはいかないだろうが」

牛太郎はもっともらしく諭したが、二人は聞かない。

「寡兵を持ってして大軍を破るのが武士の誉れではないですか」

「だいたい、一番怯えているのはオヤジ殿だろうが」

「馬鹿なこと言ってんな！　いくさはここだけじゃないんだ！　これからもずっとずっといくさはあるんだ！　こんなところで死んでたまるか！　ボケ！」

牛太郎は勝蔵の手を振り払うと、さっさと立ち去った。

が、

「我ら九之坪勢は徳川殿に加勢いたすぞ！　尾張武者の底意地、武田入道に思い知らせてやろうではないか！」

玄蕃允の声とともにうおーっという九之坪勢の鬨の声が上がり、牛太郎はあわてて駆け寄ろうとしたが、玄蕃允が馬を奮い立たせて走り出し、同じく馬上の勝蔵も、九之坪勢も玄蕃允に続いて境内の外へと駆け出してしまった。

「何をやってんだ、馬鹿あっ！」

悲痛に叫んだ牛太郎だが、土埃がもうもうと舞っているだけでもはや誰の姿もない。

「どうすんだ、旦那ぁ」

栗之介が栗綱を引いてきた。牛太郎は頭を抱える。

もしも、自分の出現がどうであろうと歴史通りに事が運ぶのであれば、徳川三河守は死なない。本多平八郎も死なない。だが、二俣城がどうなるかは知らない。自分たちがここで死なない保証はない。

しかし、佐久間玄蕃允はともかく、森勝蔵を殺してしまったら、たとえ、ここで自分が生き残っても、岐阜に帰れないのではないか。

いや、若い二人を殺しておいて、自分はのうのうと生きられるだろうか。

馬鹿でどうしようもない二人だが、世話が焼けるほど、太郎みたいなもんだ。

進むも地獄、退くも地獄、ならば進むしかないだろう。

「鉢巻き」

と、牛太郎は栗之介に視線を向けた。

「お前はここに残っていろ。もし、おれに何かあったら、あずにゃんと太郎に伝えておいてくれ――」

牛太郎は拳を握りしめ顔を伏せると、肩を震わせながら言葉を絞りだした。

「伝えておいてくれ。今までありがとうって」

「旦那」

栗之介は主人の普段にはない表情に唇を噛みしめた。

「でも、旦那は一人で乗れねえじゃねえか。無理しちゃいけねえ。ここで待っているべきだ。もし、行くんなら、俺も行くぞ」

「いや、いい。多分、クリツナだったら一人でも大丈夫だ。なあ、クリツナ」

栗綱はちらとだけつぶらな瞳を牛太郎に向けて、あとはのんびりとしている。

「あの馬鹿どもを死なせるわけには行かねえだろ」

牛太郎は鞍に手をかけると、栗之介が渋々出してきた掌に足をかけ、跨った。そして、馬上から栗之介に笑みを見せた。

「甲府での恨み、晴らしてきてやるよ」

意を決した牛太郎に栗之介はこくりと頷き、牛太郎の両足と鐙を

紐で縛り付けた。火縄銃と火打ち石を受け取った牛太郎は、火打ち石を懐に、火縄銃を背中の綱に挟み込んで、腰帯びの太刀と脇差をしっかりと押し込めると、手綱を振るった。

精神一到、何事か成らざらん

徳川勢の白の旗指し物には二通りがある。家紋の三つ葉葵を記したものと、浄土思想から来た言葉を記したもの、

厭離穢土欣求浄土――。

本来は、穢土を厭い離れるという厭離穢土と、浄土を願い求めるという欣求浄土の二つの言葉である。

この世は皆が己の欲求のためだけに働いて汚れきっている。ならば、一心に浄土を願い求めようではないか。

徳川勢三千は見附と呼ばれている地に着陣した。九之坪勢は遅れて合流する。

栗毛の艶やかな馬体が冬刺しの日差しを浴びながら首を大きく反らせて立ち止まったとき、極楽浄土の死地へと向かう兵卒たちは唖然とした。

栗綱号に跨っているのは勿論、簗田左衛門尉牛太郎である。

両脇を固める二人の若武者が見栄を切った。

「助太刀に参ったあ！」

「尾張武者の底意地、とくと見せてやろうぞ！」

だが、この二人、玄蕃允と勝蔵の表情はひきつっていた。瑞々しい唇が震えていた。世に知れた武者ならいざ知らず、昨日まで母御の乳房をくわえていたようなこの若僧どもの勇ましさときたらなんとも滑稽な――。

普段なら兵卒たちは笑っている。

しかし、この時間は非日常であった。どころか、悲愴さが輪をかけて悲愴を生みだしていく絶対的な悲愴の時間であった。

尋常な精神状態ではいられない。

うおおっと、徳川勢に歓声が湧いた。たった五十人の加勢なのに。

何かが変わるはずないのに。

今、彼らを高揚させているのは勝利への期待ではない。そのよう

なものはかほどもない。今、彼らにあるのは生きる喜びだけである。この一瞬の、死を目前にして、感じずにはいられない喜びである。

勝利も敗北も関係ないような軍人にしてみれば、いくさは祭りだ。その中にいて、一人、牛太郎は黙り込んでいた。彼は祭りに加わっていなかった。栗綱の馬上から、徳川勢、九之坪勢、それに玄蕃允と勝蔵が沸き立っているさまをじっと見据えていた。

軍を率いる将として、どんな敗北も許されないのである。牛太郎は軍人ではないぶんだけ、冷静でもあった。そして、数々の死地をくぐり抜けてきた男だけあって、どんないくさであろうとも、活路がどこかにはあることを知ってもいる。

彼は脳裏に、かつて、躑躅ヶ崎館で相まみえた武田徳栄軒の悠然たる姿を思い浮かべている。若者二人を生かし、なおかつ二万の軍勢を打ち負かすには、武田徳栄軒それだけを自らの手で討ち取るしかない。牛太郎は死に突き進もうとする連中を遠巻きにしながら、そう己に言い聞かせていた。

「簗田殿！」

兵卒たちをかきわけてきたのは鹿角脇立兜の本多平八郎であった。

「なにゆえ、参られたか！」

鹿の角をかたどった飾立て物は勇壮に天を突いており、その姿を雄大に見せていた。引き締まった頬と燃えるように吊り上げた眉尻は、三河武者の将として申し分ない厳めしさである。

玄蕃允と勝蔵は下馬すると、本多平八郎の足元で片膝をつき、色艶の豊かな頬を火照らせながら、あたかも師に懇願するような筋の通った眼差しで訴えた。

「我らは織田家中の者として、危機に直面している三河殿を見過ごすような心構えで浜松にやって来たのではございませぬ！」

玄蕃允が太い眉をそそり立たせながら言うと、勝蔵が面長の端正な顔を上げた。

「我ら尾張武者と三河武者は南近江のいくさから異体同心でございます」

本多平八郎は勝蔵の真っすぐな視線にたじろぐように唇を中に押し込めた。無理はない。六角攻めのときから織田と徳川は一つであると言っても、そのころから勝蔵のようなあどけなさ残る若武者がいくさに出ていたはずがない。

本多平八郎は若武者たちの真摯な姿勢に、おそらく耐えかねた。

「簗田殿！」

と、彼らを率いる牛太郎に答えを求めた。

だが、牛太郎は栗綱の馬上にじっと跨ったまま、前方だけを見据えている。

「簗田殿！　本気なのか！」

牛太郎はちらりと視線を向けると呟いた。

「陽気の発するところ、金石もまた透おる。精神一到、何事か成らざらん」

本多平八郎は声を失った。そうして、彼の黒々とみなぎった瞳は、瞼の中にゆっくりと浸っていくように落ち着いていき、一方でまた、降り注ぐ陽光を晴々と照らした。

「貴公こそ武士の誉れだ」

本多平八郎がにわかに頬を緩めたが、牛太郎は奥歯を噛み締め、思い出す。彼が放った言葉は岐阜の屋敷、左衛門太郎の部屋の床の間に掛けられてあった言葉なのだった。

なんなんだよ、お前の部屋は。殺風景だよな。あんな難しい文字を飾ってさ。

日々、自分に言い聞かせているのです。父上のようにつまらぬことばかり考えていてはいくさ人が務まりません。

お前なあ。なんなんだ、その言い草は。じゃあ、なんなんだよ、あれは。どういう意味なんだよ。

陽気が発していれば金や石も貫き通せるように、精神を集中して事に当たれば、どんなむずかしいことでも成し遂げられなくはないということです。

「本多殿。おれは死にに行くんじゃない。勝ちに行くんだ」

本当ならば行きたくない。しかし、行くことになってしまったら、やるしかない。

今までの牛太郎のいくさとは違った。今まで牛太郎を支えてきた左衛門太郎も、配下の者たちも、ここにはいない。

そして、行く手には九分九厘の死が待ち受けている。間違いなく全滅だろう。

だが、させない。玄蕃允も勝蔵も九之坪勢も、全員、岐阜に帰らせる。

「太郎――」

牛太郎は周囲の目も気にせずに一人呟きながら澄んだ冬空を仰いだ。

信玄をやっつけたらほめてくれよ。

一言坂

戦略の立てようのない絶望的状況の中で、ようやく見出した抵抗は武田本隊への威嚇攻撃であった。最後の防波堤である二俣城を死守したい徳川方は、織田援軍が来るまでの間まで武田本隊が足踏みしてくれることを期待――、いや、祈る思いで武田本隊への急襲を試みていた。

だが、見附に布陣する徳川本隊に先んじて出撃していた内藤三左衛門の部隊から一報が入る。

「木原にて敵方の強襲を受け、一転、退却しております！」

徳栄軒は三河守の出方を読んでいたのだ。威嚇をするはずが、逆に蹴散らされてしまっている。

見附の徳川勢はあわてた。二万の大軍がここぞとばかりに押し寄せて来ているのは明らかであった。

「オヤジ殿っ、武田はこちらに向かってきているそうだぞ」

玄蕃允の目が泳いでいた。

「だから、どうした」

牛太郎は顔色一つ変えなかった。

「どちらにしろ、いずれはやり合うんだ。やり合うなら、相手が勢いづいていたほうがいい。迎え撃つよりも、攻め込む側のほうが油断する」

牛太郎をそこまで冷静にさせているのはなんだったのだろう。いや、牛太郎自身も謎だった。怖いぐらいに感情が麻痺していた。自分が自分ではないような、何か偉大なものに身を委ねている人形のような心もちだった。

腕も足も指先も目玉も、自分のものじゃないようにじっとしている。聞こえてくる兵卒たちの喧騒はどこか遠い世界から聞こえてくるようでいて、冬の空気の冷たさも感じない。かといって、高揚感で体が火照っているわけでもない。

あまりにも冷静すぎる。何もかもが他人事のようだ。

どうやら、おれはふっきれたらしい。

牛太郎は、簗田牛太郎という自分自身から何かを感じ取れなくなっていた。体温はあるし、血は流れているし、確かに胸打つ鼓動は早い。ただ、それを感じられない。今の自分は自分という別人を冷めた目で眺めている。

まるで、自分が生への執着を放棄したかのようだ。

そこに梓がよぎる。左衛門太郎がよぎる。さゆりもよぎれば四郎次郎もよぎった。越前の土くれと化していった沓掛勢も、延暦寺の炎に消えていった人々も、あの日あのときの場面が、切り取った写真のように何度も何種も牛太郎の目の前に現れては消えて行った。牛太郎はそれをただ眺めている。

やがて、牛太郎は閃くようにしてはっきりとわかった。残念ながら、人は孤独らしい。

ところが、この孤独感は不思議と狂おしくなかった。すうっと受け入れた。昔から、自分が生まれたときからその事実を知っていたかのように、当然のごとく孤独を受け入れた。

牛太郎は視線の先を遥か遠くに見据え、実際には何も映っていない、何も感じていない中で、この世にたった一人で佇みながら微笑んだ。

自分に死はあるか。当然、あるに決まっているだろう。

やがて、風を感じた。痛いほどに澄み切った冬の風だった。風は栗綱のたてがみを揺らし、彼の頬を撫でていく。牛太郎は息を深く吸い込んだ。聞こえてくる。うねりが。

まがまがしい声、悲痛な足音、人々の鼓動。

生のうねりが聞こえてくる。そして、人はうねりの中でしか存在できなく、存在するための使命を果たさなくてはならない。

たとえ、人の営みのすえに死が絶対であっても、生きなくてはならないのだ。いや、生きようとしなければならないのだ。

生きようとしなければ存在の意義は見当たらない。生きようとす

ればそれだけで存在の意義がある。
「簡単なことだ」
と、牛太郎は再度、笑った。やがて、その笑いは高笑いに変わった。
「オヤジ殿……」
玄蕃允が絶句している。勝蔵が恐ろしいものでも見てしまったかのように唖然としながら呟く。
「気が触れてしまったのか……」
「お前らにもいずれわかる」
若い二人に向けた牛太郎の瞳は凛々と輝いていた。
徳川方は見附に火を放ち、迫りくる武田勢の行く手を遮る方針に変えた。
「ただの悪あがきだ」
後方に退く徳川勢とともに動きつつも、牛太郎は馬上で呟いた。
今、彼の頭の中は別人のようにさえざえとしている。いにしえの名軍師のごとく、戦況が手に取るように予見できた。
昨日からの動きを判断すると、武田本隊は常に徳川方の先手を打っており、また、機動力は迅速である。もしくは、武田勢を動かす指揮官の徳栄軒は、ひどくいくさ慣れしていて、あらゆる事象を想定している。
竹中半兵衛や小寺官兵衛の智謀を目の当たりにし、松永弾正忠や摂津の食わせ者たちと相対してきた牛太郎だからこそ、付け焼刃の戦術――、火を放って足止めさせようなどというその場しのぎの幼稚な考えは、徳栄軒にはまったく通用しないと見抜いていた。
徳栄軒は徳川方の動きが幼稚であればあるほど、容赦することもなく数倍にして智略を返してくるはずだ。
だが、状況が生き物のようにうごめく戦場という化け物は、簡単には勝者に勝利を与えない。
牛太郎はその瞬間だけを狙い撃つことだけに一世一代の勝負を懸けながら、九之坪勢を率いて見附から退く。

密かに企む牛太郎とは打って変わって、三河守はほうほうのていであった。武田勢の機動力、徳栄軒の戦術眼、自らの能力との違いに愕然としながらも、三千の兵を連れて必死に見附から逃れた。

三河守は決していくさ下手ではない。まだ、三河守が松平元康を名乗っていたころ、今川家の将として尾張織田に攻め入ったとき、彼は二十歳になるかならないかの齢ながら、三河勢を率いて織田の支城をことごとく落とした。

また、姉川の戦いでも、朝倉勢と正面から相対したときに、兵数は不利ながらも、これを打破し、織田の勝利に一役かった。

もしかしたら、三河守にはわずかながらの自信があったのかもしれない。そもそも、彼が率いる三河武者は屈強なのだ。

そんな三河守を武田徳栄軒はすべてにおいて上回っている。

見附を捨て去った徳川方は、一言坂の下りにて陣を整え直そうとする。なだらかな坂で、二万の大軍が翼を広げて展開するには不可能と見た。

包み込まれることはない。

が、武田勢は見附を早々と迂回し、徳川方に陣形を整える猶予も与えずに、武田菱の旗指物と「疾如風、徐如林、侵掠如火、不動如山」、いわゆる風林火山の旗指物を坂の上に翻えさせていた。

馬蹄が大地を揺り動かしている。一気に駆け下りてくるのは明らかだった。

三河守はあわてるしかない。どうしていいかわからない。迎え撃つのか、逃げるのか、判断することもできず、馬上にて軍配を手にしたまま瞳を瞼の中できょろきょろと転がすだけだった。

「おやかた様！　退きなされ！」

本多平八郎が槍先を陽光にきらめき照らしながら、三河守を促した。

「拙者が食い止めますゆえ！」

三河守は逃げた。いや、それしかなかった。

武田勢は一言坂を一気に駆け下り、手勢の本多隊に容赦なく突撃

した。先鋒は「不死身の馬場美濃」との異名を持つ馬場美濃守信春であった。彼は武田の数々のいくさで先鋒を何度も務めていて、武田軍でも精強の中の精強であった。

三河の猛将、本多平八郎は、槍を振るいつつも退き、退きつつも槍を構えてなんとか食い止め、時を稼ぐが、馬場美濃守の軍勢はしんがり隊の構えを一段、二段と破壊していき、さらに、武田勢は小杉左近隊をぬかりなくしんがり隊の退路に先回りさせ、火縄銃を撃ちかけた。

ばらばらと岩が砕けていくように本多隊の兵卒が倒れていく。

血と断末魔の叫びが跳ね上がる状況で、本多平八郎は獣のように雄叫びを上げた。そして、名槍・蜻蛉切の先端を小杉隊に振り下ろした。

「突っ込むぞおっ！」

このとき、本多隊の兵数は二百にも満たなかった。無謀であった。しかし、無謀すぎるゆえん、本多隊は人間の体を成していなかった。

本多平八郎自らが先頭に躍り出、一直線になって小杉隊に襲いかかる。その目は血走り、その口は声を飛ばし続けた。本多隊の兵卒も怒り狂った餓鬼のごとく、突き進む。

彼らはまさに死の先の極楽浄土に向かっているようであった。もはや、本多隊は生きることを諦めている。だが、戦うことはやめようとしない。

生きることを諦めてはいない小杉隊の兵卒は、狂ったように突っ込んでくる本多隊を前にわかに怯んだ。百戦錬磨の武田勢であっても、狂人と刃を交わしたことはない。小杉隊の兵たちは後ずさりした。

小杉左近が叫んだ。

「やり合うなっ！　道を開けろっ！」

将校の言葉に小杉隊の兵卒たちは突っ込んでくる本多隊から逃れるようにして、陣構えを割った。

突如として開けた道を本多隊が駆け抜けていく中、本多平八郎は

馬を止め、
「武士の情けを心得ている者とみた！　お名前を！」
「我が名は小杉左近！　気が変わらぬうちに早く行け！」
本多平八郎は視線だけを下げて謝辞すると、一言坂を抜けた。
そのころ、牛太郎は栗綱とともに、一人、天竜川沿いをさ迷っていた。

栗綱

徳川本隊と共に浜松城を目指していた牛太郎は天竜川に差し掛かった時、手綱を絞って栗綱を止めた。

「簗田殿！」

勝蔵の声を振り切って、牛太郎は栗綱を天竜川の上流へと駆け上がらせていった。

迂回し、単騎、武田勢の横を突いて、徳栄軒の首を討ち取ろうという安直な考えを起こした。

おれが武田信玄を殺して歴史を作る。

と、息巻いていたのは見事であったが、たった一人で迂回しようというのが無謀であったことに気付くまでに、大した時間は必要なかった。

土地勘がまったくないのである。

「やべ……」

栗綱を止まらせると、牛太郎は呆然とした。どこへ向かえばいいのか見当がつかない。

荒涼とした畑と磐田原台地に点在する森が、視界にうら淋しく広がっている。ぽつりぽつりと集落が見受けられるも陽の光に霞んでしまっていて、人の気配はまったくない。

栗之介を連れて来なかったばかりに……。

「どうしよう。なあ、クリツナ、どうしよう」

栗綱は遠くの空をぼんやりと見つめていたが、主人の訴えを理解したのか、鼻面を上げると風の匂いをすんすんと嗅ぎ始めた。

何かをしている。

やがて、栗綱は自らの意思で歩を進め始めた。もしやと思い、牛太郎は期待した。栗綱は稀に主人の心の機微を感じたような行動を取る。犬のように従順で、猫のように甘えてくることもあれば、猛獣のように敵兵を蹴り殺す名馬である。

おそらく、栗綱はいくさに生きる馬として、己の使命の向くままに歩みを進めているのかもしれない。栗綱は自分の思うところを受けて、武田信玄の居場所へ導いているのかもしれない。牛太郎は来るべき武田徳栄軒との一騎打ちに口許を引き締めた。

やがて、栗綱は畑の畔で立ち止った。そして、草を食み始めた。

「おいっ」

牛太郎は手綱をしごいた。栗綱はびくともせずにむしゃむしゃと草を食べている。

「おいっ！」

牛太郎は鐙に縛り付けた両足で栗綱の脇腹を何度も叩いたが、栗綱は頑として食事を止めようとしない。

「何やってんだよ、もう……」

牛太郎は栗綱の馬上でうなだれた。栗之介を連れて来なかったばかりに……。

本多平八郎が無事、しんがりの役目を果たしたのかどうか、牛太郎は把握していない。ただ、あの様子だと、徳川本隊も九之坪勢も、武田勢を振り切って天竜川を渡れたことだろう。

磐田原台地にそよぐ冬の風が牛太郎をやけに心細くさせる。一言坂からの退却から時間が経つに連れて、胸の内にめらめらと燃やしていた気概の火は小さくなっていった。

おれが武田信玄を殺すだなんて無茶じゃないのか。そもそも、二万の大軍の中を突っ込むだなんて、いくら栗綱と言えど無謀すぎじゃないか。

だいたい、武田信玄は死ぬのか？

いつ、このいくさは終わるんだ。

普段とは違う自分を作り上げていたぶんだけ、絶頂を過ぎたあとに襲いかかって来た不安は並々ならない。

激しい不安はあらゆる疑問を生じさせた。なぜ、自分は武田信玄を討ち取ろうとしたのか、なぜ、自分が歴史を作ろうとしていたのか、それは果たして簗田牛太郎がやるべきことなのか。

だいいち、
「どうして、おれはここにいるんだ」
太陽が西の空へと傾きかけている。陽光が見えない粒となって霧散している。
鳥が黒い影となって横切っていった。
牛太郎ははっとした。
たとえ、ここで武田徳栄軒を討ち取ったとしても、終わりはない。このいくさが牛太郎の知っている歴史通りになったとしても、摂津に戻らなければならない。
摂津の騒乱が治まったら、次は何が待ち受けているのか。
「本能寺だ」
やがては明智十兵衛と木下藤吉郎が戦い、藤吉郎と柴田権六郎が戦う。
織田家中の内部分裂。
そのとき、自分はどのような行動をとればいいのか判断がつかない。藤吉郎に付いていけばよいと考えていた過去とは話が違ってきている。
妻は柴田権六郎の末妹。
終わりが見えない。天下がいつまでも平定されないように、牛太郎の人生もいつまでも安定を迎えられそうもない。
牛太郎は見知らぬ地に一人佇みながら、いつしか、上総介が言った「戦い続けなければならない」という意味の重さを初めて知った。
食欲を満たして、ぼんやりと遠くの空を見つめている栗綱の首筋を、牛太郎は暗澹たる思いで眺めた。投げ出したくなってきた。好きで築田牛太郎をやっているわけじゃないんだ。
精神一到、何事か成らざらん。
牛太郎は唇をぎゅうっと噛みしめる。ここから再び足を踏み出すには苦渋すぎる。だが、堺から相国寺に逃げ出したようなことを再び犯すわけにもいかなかった。
梓に会いたい。今度、帰ったら、駒を抱き上げたい。牛太郎はう

つむきながら、手綱を持つ手を小刻みに震わせた。
そのとき、栗綱が尻尾を何回も上下に振った。
「お前……」
栗綱は前方を見据えたまま、傾きかけた日差しを浴びて金色に輝く尻尾を無邪気に振りしきる。
「お前、わかるのか」
牛太郎の問いかけに栗綱は尻尾を止めた。
もしかしたら、栗綱は死地に突っ込もうとしていた自分を思い留めさせるために動かなかったのかもしれない。
牛太郎はたてがみ越しに栗綱の首筋を撫でた。
「そうだな。死ぬわけにはいかないもんな」

牛太郎は浜松城に引き返そうと天竜川まで戻ってきたが、ここでも土地勘のなさが災いした。浜松城から一言坂に向かうさいに渡った場所は比較的浅瀬になっていたが、この地をまったく知らない牛太郎は渡河地点を知らない。
風雨の強い季節になれば、地元の人間には暴れ川と恐れられる河川であった。見た目では水量は大したことないが、どれだけの深さなのかは見当がつかない。馬で渡るのは危険すぎた。
下流にくだり、元来た道で浜松に戻ろうとも考えたが、武田勢の追撃が行われている恐れがある。
はやまったことをしたなあ、と、牛太郎は西日をきらめかせる川面を眺めながら、ほんのりと後悔した。
日没は間近である。夜になれば、いっそう迷ってしまう。牛太郎は渡河をあきらめ、上流へと向かった。
二俣城が天竜川を遡った丘陵にあることは、聞き知っていた。
信濃から遠江へと抜ける山間部の出入り口に位置する二俣城は、二俣川が天竜川と合流する場所にあり、せり出した台地に柵と石垣、曲輪を設け、北遠江の番人のように聳え立っている。
夜の闇が山々にひっそりと下りたころ、かがり火が焚かれた大手

口にて、牛太郎は番をしていた兵卒たちに、
「織田家の簗田左衛門尉だ」
と、伝えた。
あやしい。なぜ、簗田左衛門尉がたった一人でやって来ているのか。しかし、噂に聞く奇怪な綱巻き姿であることは間違いなかった。
牛太郎は鐙と足を巻き付けている縄を切りほどいてくれるよう兵卒に頼むと、馬上から下り、本丸へと兵卒に案内された。
二俣城の城主代理は中根平左衛門正照という牛太郎よりは若干年上の男で、小柄で痩せ身ながらも、太い顎と盛り上がった頬骨が武骨らしさを表していた。
中根平左衛門は南近江六角攻めに参戦していたそうで、牛太郎と栗綱を見かけたらしく、特に栗綱の見事な馬体が印象的だったそうで、言葉を交わしたことはなかったけれども、牛太郎をよく覚えていた。
「お一人で二俣に来られるとはどうしたことか」
中根平左衛門は甲冑の上に陣羽織を着込んでおり、当然、一言坂での競り合いは把握しているようであった。
牛太郎は隊列からはぐれてしまったとは答えず、
「おそらく、武田勢が次に狙うはこの二俣城と思って、馳せ参じた」
などと、胸を突き出し、大層な面構えで言った。
平左衛門は眉をしかめる。返答になっていないし、簗田牛太郎たった一人が加わったとしても、何かが変わるだろうか。
もちろん、牛太郎は歓迎されないことぐらい予測していたし、いくさ場における火は、いまだわずかながらも灯っていた。
「二俣城防衛の秘策があります」
大手口を通って本丸に入ってきたときに、牛太郎は閃いていた。

対　武田信玄（1）

まともに戦っては勝ち目がないし、まともに戦うこともさせてもくれない徳栄軒のいくささばきである。

機が訪れるまで、今は持ちこたえるしかない。

天竜川の渡河を睨むように聳え立つ二俣城は、徳川方の最後の要であるが、千人程度の兵卒しか詰めていない有様であった。

だが、防衛には十分な造りである。

大手口を柵で遮るよう、牛太郎は中根平左衛門に進言した。

金ヶ崎の退き口で織田勢がとった戦法を牛太郎は思い出したのだった。

二俣城にはこの大手口以外に侵入経路はなく、二万の大軍といえども、一斉に駆け上がってくるのは難儀と見た。

金ヶ崎と違うのは、二俣城が火縄銃をたいして備えていなかったことだった。このため、牛太郎は柵を三重に築かせ、足軽・弓兵を段構えに配置させるようにした。

更に、牛太郎は浅い知恵を絞りだした結果、天竜川の河原から岩や石を集めさせ、それらを飛び道具にさせようとした。

平左衛門は牛太郎の子供のような発想に訝ったが、

「石ころが降って来たらびっくりするでしょ」

と、牛太郎が自信満々に言うので、渋々、了承した。

かがり火を焚くのもやめさせた。

「何を考えているのか不気味に思うはず。奇襲をしてくるんじゃないかって余計な心配をするでしょ」

中根平左衛門は牛太郎の奇抜な発想に首を傾げっぱなしだったが、牛太郎は言った。

「守る側のことを考えるんじゃなく、攻める側のことを考えてみればいい」

牛太郎は今まで数々の攻城戦に参加してきた。そして、織田がも

っとも苦しんだのは稲葉山城攻めであった。

二俣城は稲葉山城ほどの防御力を持っていないだろうが、しかし、一致結束している三河勢なら、兵糧が尽きるまでは持ちこたえられると牛太郎は踏んでいた。

事実、防衛拠点の二俣城には千人の兵卒を向こう半年は養える備えがあった。

半年、持ちこたえられたら、信玄は死ぬ。いや、死ななかったとしても、織田の援軍が来る。いや、援軍さえなかったとしても、半農半兵の武田勢は甲斐に戻るしかない。

月がこうこうと照っている。なんか、妙だな。牛太郎は自分のさえざえとしている脳裏と、やけに逞しい自信を不思議に思った。

いくさが手に取るようにわかる。攻め手、守り手、両方に欠けているもの。それらを一つ一つすくい上げて、吟味し、解決していけば、戦略戦術がおのずと見出されていく。

しかし、何か、新しい能力を得たという実感もない。むしろ、簡単なことだと思えてくる。

今ある戦局を、徳川方からでもなく武田勢からでもなく、もっと広い観点から――、地上を眺める鳥のような目で大局を見渡せば、どう動くか、どう動くべきなのかは、はっきりと判別できる。

なるほど。牛太郎は思った。戦略とは王道なのだと。それは誰もが考えられることなのだが、迷うことなく遂行してこそ初めて戦略の体を成す。だからこそ、戦略とは立てるのが難しい。すべてが人間の行うことであって、それを遂行するにはどんな戦略でさえ勇気がいる。

ただ、偉大なる人物は戦略を遂行することに迷わない。上総介しかり、徳栄軒しかり、最初に決定したことをどんな状況にあっても成し遂げるという決意を持ったものでしか、戦略は扱えない。

ただ、戦略とは誰もが考えられることなのだ。敵方のそれを冷静に分析し、こちらがその戦略に対して迷うことなく戦略を立てられるかどうかが、大局の決め手となるんじゃないか。

「笑っちゃうな」

牛太郎は一人、自嘲するかのように呟いた。

織田は常に戦略を立て続けてきた。諸勢力とどう当たるか、軍をどう動かすか。破竹の勢いで領土を拡大した織田家だが、上総介は神経質である。むやみやたらに攻め込んだ結果の大勢力ではない。

そして、その勢力拡大の方策を牛太郎自身も何度か進言していたのである。

それだけじゃない。混乱している摂津を平定に導き出そうと、自分たちは一つの戦略に従って動いているじゃないか。

ただ、である。

戦略を遂行していく途上、状況の推移によってさまざまな障壁、難問と当たる。それを円滑に成し遂げるため、あるいは打破するのために行うのが戦闘戦術であるが、牛太郎はこれまでの武田の動きを振り返るにあたり、武田勢には竹中半兵衛や小寺官兵衛のような奇策をもちいる気配がないと感じていた。

あいつらみたいな危ない人間だったら、とっくに変な真似をしている。武田は王道に従っている、と、牛太郎は確固たる自信を持った。

しかし、武田勢の戦略を理解したところで何も始まらない。理解したうえで、こちらはどうするかが難問なのだった。

盤石であるからこそ王道なのである。この固い岩を打ち砕く術はあるのか。

牛太郎は知れば知るほど武田徳栄軒という男の恐ろしさが感じられた。

そもそも、このいくさは始まった時点で武田の勝利は約束されているようなものだ。

振り返ってみればわかる。浅井の裏切りは昨日今日起こったことではない。二年前のことだ。更に、その後、三好三人衆、本願寺が摂津で蜂起し、伊勢長島では一向一揆衆が立ち上がった。

その間、武田は何をしていたか。果たして、北条や上杉とのいく

さにかまけていただけであったのだろうか。攻めようと思えば、いつでも織田に宣戦を布告できる機会はあった。

つまり、徳栄軒は武田の勝利が絶対になるまで完璧な戦略を練っていた。

実際、徳川方にも織田にも、なすすべがない。

「いや、違う」

ある。なすすべはある。

今、戦っている相手は化け物ではない。人間だ。

「攻め手になって考えてみろ」

いくさが絶対ではないのは、人間が絶対ではないからだ。人間の行うことは絶対ではないことは誰もが知っている。ゆえ、果たして、どのような偉大な人物でも、

己ノ行イニ絶対の自信ヲ持テルデアロウカ――。

実は、その人物が冷静な人間で、智略に長けた人間であればあるほど、不安を抱くのではないだろうか。

仮に、牛太郎はもし徳栄軒が抱くとしたら不安はどこにあるだろうか考えた。

すぐに見出せる。

織田上総介信長が小谷攻めを終わらせ（もしくは中止して）、この遠江に軍勢を結集させることを武田徳栄軒は恐れている。

恐れているからこそ、徳栄軒は上総介がそれをできないような状況の中で出陣してきたのだ。

兵卒と兵卒の物質的な攻防には勝ち目がない。だが、心理には突け入る隙がある。

牛太郎はその日、寝ずに考えた。長期戦に持ち込むための揺さぶりを。

対　武田信玄（2）

翌日、武田本隊が全兵力を持ってして、二俣城を包囲した。
切りだした台地を取り囲む数々の旗指し物を二俣城本丸から眺めながら、牛太郎は傍らの中根平左衛門に告げた。
「信玄もわかっているんです。この城を簡単に落とせないことを」
そう。武田勢に攻城の気配はない。
「いや、落とそうと思えば二万の大軍を注ぎ込んで落とせますよ。ただ、信玄はここでなるたけ兵を失いたくないんです。あいつらはこれから、三河、尾張と攻め上がる気でいるんですから」
「確かにそうだが――」
平左衛門は大地を覆い尽くす武田勢にやや尻込みしているようであった。
「中根殿」
と、牛太郎はこの小背の城代に視線を据え下ろす。
「この城はこのときのためにあるんじゃないんスか」
平左衛門は色黒の肌の中のやけた瞳で牛太郎をじっと見つめる。
この綱巻きの奇怪な男は瞼に妙な涼しさをたたえていた。
「中根殿」
と、二人のもとに青木新五郎と松平善兵衛が甲冑を鳴らしながら歩み寄って来た。
青木新五郎は平左衛門とともに三河守から二俣城の守将として選ばれた男で、平左衛門の副将として従事している。牛太郎よりはやや若い。彼もまた三河武者独特の武骨な様相を骨太の輪郭に表している。
「武田が放ってきた矢にこんなものが付いてきましたぞ」
青木新五郎は一枚の紙を平左衛門に渡してきた。牛太郎も覗いてみる。降伏勧告であった。
「どんな罵声で返してやりましょうか」

そう言いながら、足軽大将の松平善兵衛が口端を歪めて笑う。彼は若い。瞳の潤いは二俣城に詰めている将の中にあってひときわ若い。おそらく、左衛門太郎よりも年下、玄蕃允や勝蔵と同じ齢だろう。

ただ、牛太郎の連れてきた小僧たちと違うのは、武田二万の軍に囲まれている状況で松平善兵衛の足はしっかりと地に着いている。

牛太郎はこの大人びた若者に興味を抱いて訊ねた。

「善兵衛殿はどんな文句がいいと思うんだ」

「笑止」

平左衛門と青木新五郎は吐息をついたが、牛太郎は笑った。実に清々しい。

「若さっていいもんですね、中根殿」

牛太郎は愉快さのあまり平左衛門の肩を抱いて、ぽんぽんと胸を叩いた。平左衛門の小さな体が、余計小さく感じてくるのは、平左衛門が臆している証拠である。

「簗田殿」

と、青木新五郎が眉を苦々しくひそめながら言う。

「大手口でいくら奮闘しようと、二万の大軍に攻め込まれてはひとたまりもありませんぞ。なら、ここで城を渡す代わりに城内の兵の命を保証させ、浜松のおやかた様と合流して後々の決戦に備えたほうが得策ではないのですか」

「まあ、それもそうッスけどね」

牛太郎は肥えた顔を平左衛門に寄せた。

「中根殿はどう思うんですか。決めるのは中根殿でしょ」

平左衛門は書状を両手で広げたまま、じっとうつむいている。

「わからん」

とだけ、言った。

浜松との連絡路を封鎖されている。三河守が右を向けと言えば右を向くが、今、二俣城の決定権は平左衛門に委ねられていた。

青木新五郎の言った通り、二俣城の兵をむやみに失うよりも、浜

松に引き返し、態勢を整え直すほうが得策だ。
だが、二俣城を失うということは、掛川城と高天神城との街路を遮断されることになり、なおかつ、武田勢に遠江、三河への進軍の補給拠点を与えてしまうことになる。
それに天竜川以西に敵兵の侵入を阻止するのは、今川家の領土を徳川と武田で奪い取ったころからの最大の戦略的要綱である。
牛太郎の言葉、二俣城はこのときのためにあるというのが、正論なのだ。
「おめおめと城を捨てるなど、拙者にはできませぬ。拙者は一人になっても戦いますぞ」
松平善兵衛が二人の中堅幹部に詰め寄った。
「お主は功を急いているだけだ」
と、青木新五郎が語気を切迫させながらも善兵衛の両肩を掴んだ。
「おやかた様に逆らって追放された一族の名誉を挽回したいという気持ちはわかる。だが、いくさはここだけではない。浜松も三河も残っているのだ」
「違う！」
善兵衛は新五郎の両手を振り払った。
「敵前逃亡などという恥をかきたくないだけのことです！　今、ここで二俣城を捨てたら、浜松の者どもに後ろ指を差されるのは明白じゃありませんか！」
「三河武者はそのような下衆いた連中ではない！」
「よせ！」
平左衛門が一喝し、まるで親子のように揉めていた二人は口を噤んだ。
平左衛門は吐息を一つ長々とつく。そうして、迷いと不安に螺旋した目を牛太郎に向けた。
「簗田殿はどうあるべきだとお思いか」
平左衛門が愚将の噂高い牛太郎などに答えを求めてきたのは謎である。おそらく、決められなかった。ゆえん、徳川家の盟友の（ほ

ぼ主家同然の）織田からやって来た客将にすがったのだろう。
牛太郎は広く渡った冬空の下に翻る、無数の武田の旗を眺めながら言った。
「二万の軍勢を持ってしても、どうして降伏勧告なんかを寄越してくるかを考えてみれば、信玄の思っているところを知るのは簡単じゃないですか」
牛太郎の冷たく澄んだ眼差しにつられ、三河勢の三人は揃って城下の武田勢に視線をやった。
「あっしは信長様と一緒に何度か城攻めをしたことがあるからわかりますけれど、こういうふうに上洛を狙うときや、敵が他にもいるときってのは、兵隊をあんまり失いたくない。一大決戦に向けて温存させておきたいもんです」
だから、力攻めをしてこないのだと牛太郎は言った。
「徳川を勝利に導くためには、織田の援軍が必要です。そのときまで、時間を稼ぐしかない。逆に、信玄は時間をかけたくない」
「だったら、これをはねつけた場合、武田は攻めかかってくるのではないか」
「そうッスね」
「そうですねって……」
牛太郎の軽薄ぶりに青木新五郎は唖然とした。しかし、牛太郎はにやりと笑みに陰をひそめた。
「あのタヌキ入道がなるたけ回避したいと思うってことは、逆を返せば二俣城がタヌキ入道も恐れるほど堅固だということでしょ。天下に名を馳せるあのタヌキオヤジがそう考えているんだ。もっと、自分たちに自信を持っていい。違いますか？」
青木新五郎も平左衛門も、吸い込まれるように牛太郎を見つめた。
「そうです。築田殿の言う通りです」
若い善兵衛がにわかに血気帯びたが、「まあまあ」と、牛太郎は善兵衛を制す。
「善兵衛殿、降伏勧告を突き返し、相手を挑発するのもありだけど、

逆にこちらを小さく見せて、相手を油断させるのもいいんじゃないのかな」

どういうことだ、と、平左衛門が問いかけてきたので、牛太郎は筆と紙を持ってきてくれるよう頼んだ。

従者に渡された筆で、牛太郎はすらすらと書いていく。

降伏勧告に従いたいのはやまやまだが、一度、浜松のおやかた様と相談したい。

実に情けない、実に優柔不断な守将であるのを見せかけた旨の返答をしたためると、善兵衛に渡した。

「もちろん、タヌキオヤジは家康殿と相談なんかさせないでしょう。どうせ、甘い言葉をかけてくるに違いない。でも、のらりくらりとやっているうちに、二俣城は大したことないと考えて力攻めを敢行してくるかもしれません。そのとき、兵も将も油断しているでしょうね」

「しかし――」

平左衛門があとの言葉を言い淀んだが、それを代弁するかのように新五郎が続けた。

「そのようにうまくいくか」

「うまくいくと信じなければ勝利はない。竹中半兵衛が金ヶ崎で言っていた言葉です」

「竹中半兵衛――」

「ちなみにあっしは昔、竹中半兵衛の家に一年間居候したことがありますけどね」

世に聞こえる参謀、竹中半兵衛の名が出た途端、平左衛門も新五郎も、牛太郎を見る目を変えた。

対　武田信玄（3）

心理戦が始まった。

高台を取り囲む武田勢目掛けて、書状を結んだ矢を放つ。しばらくの間を経て、武田勢から同じように放たれた一矢が二俣城の地面に突き刺さる。

――開城を受け入れれば二俣城の将兵、すべての命を保証する。

牛太郎は平左衛門の手から書状を奪い取ると、ぐしゃぐしゃに丸めて放り捨てた。

筆を取り、返答をしたためていく。

ならば、一度、包囲を解き、軍勢を十里後方に下げろ。その後、浜松のおやかた様と相談する。

牛太郎は松平善兵衛に書状を渡した。

「果たして乗ってくるだろうか」

平左衛門の問いに牛太郎は首を振った。

「乗ってきませんよ。軍勢を十里も下げるだなんて絶対にしない」

返答の矢を放ったあと、牛太郎は平左衛門に二俣城各所に配されている部隊長たちを集めさせた。

「実は武田信玄は病を患わせている」

牛太郎が言うと、部隊長たちはおろか、平左衛門や新五郎までもどよめいた。

「このいくさが始まる前から、武田に間者をひそませているんだけれど、そいつの話によると、余命いくばくもないってことだ」

「築田殿！　まことなのか！」

牛太郎は新五郎を睨みつけるようにして視線を置いたあと、さらに続けた。

「おれがのこのこと一人で二俣城にやって来た理由ってのはそれだ。織田の他の連中に手柄を取られないために、一人でやって来た。信玄が死ねば、武田の猛将たちの首が討ち取れるからな」

「だったら、勝ち目はあるんじゃ……」
と、一人の足軽組頭が呟くと、連中はにわかに勢いづき始めた。
「凌げば凌ぐほど、勝利は近づくんだ！　お前ら、ここは是が非でも凌ぐぞ！」
牛太郎の檄に連中は声をあげた。彼らは足取り勇ましく配所へと戻っていく。
「徳栄軒が患っておるなど、まことなのか、簗田殿」
平左衛門の熱を帯びた眼差しに、牛太郎は一瞬迷ったが、こくりとうなずいた。兵卒たちの士気を高めるだけに留まる考えであったが、それで気後れしていた平左衛門の迷いがなくなるのだったら越したことはない。
そのうち、信玄は死ぬんだし。
厚い雲が太陽を遮り始めた。冷たさをました風が、二俣城の木々に吹きつける。牛太郎は杭に留め置かれている栗綱に歩み寄る。栗綱は強くなってきた風を相手に無邪気に首を振って遊んでいたが、主人の姿に気付くと、首を振るのをやめ、歩み寄って来る牛太郎をつぶらなまなこでじっと見つめた。
「おれの家の馬鹿どもが一人もいないってのが残念だな」
牛太郎は栗綱の鼻面を撫でる。栗綱は瞼をうとうとさせた。
「せっかく、おれがあの武田信玄と勝負しているっていうのによ」
……。
このおれが武田信玄とやり合っている。
徳栄軒が牛太郎の思惑通りに動くかどうかはわからない。ただ、牛太郎の着眼点は良かった。
風林火山の文言を旗に記している徳栄軒は、「孫子」を好んでいると思われる。その「孫子」にはこうある。
最もすぐれた統帥は敵の計画をくじくことであり、
次にすぐれた統帥は敵の結集を防ぐことであり、
その次が敵を野戦で攻撃することである。

最も愚かな統帥は城攻めである。

牛太郎は「孫子」はおろか、軍略書など読んだためしがない。攻城戦に成果をあげてきた織田の将にあって、城攻めが愚かだという認識もない。

だが、牛太郎は今までの経験で、戦局を考察できるようになっていた。

それに、牛太郎が他の織田の将とは違って、もっとも運が良かったこと、それは、破竹の勢いで勢力を広げた織田の数々の戦闘で何度となく勝者となったというのに、常に手柄を上げられなかった。どころか、失態ばかりを犯していた。

しかし、失態を犯したからこそ、悔しさのあまり、経験したいくさの微細を忘れていない。

勝者は浮かれがちだ。浮かれるあまり、勝利の味だけを覚えていて、その勝利がどのような経緯で運ばれ、どのような手段でもぎとれたか、もっとも重要な部分が勝利の栄光にかすんでしまう。

平凡な成り上がり者が転落しやすいのに似ている。

その点、牛太郎は運が良かった。勝者の中にあって、いつでも敗者であった。

戦略の中心にいたというのに、敗者であったのだ。

武田勢から返答の矢文が届いた。

――今すぐに開城せよ。今すぐに開城した場合のみ、命は保証する。

「無視しましょう」

平左衛門にそう言うと、牛太郎は二俣城の各所を回った。守備兵の大半は大手口に詰めさせており、曲輪などには数十人の兵卒しかいない。それでも、先程の牛太郎の虚言が浸透したのか、兵卒たちの目にはたぎるものがあった。

牛太郎はその中で一人の中年の足軽兵を手招きした。駆け寄ってきた彼を人目のつかないところまで引き連れてき、耳元で囁く。

「日が暮れたら城を脱け出し、武田に投降しろ」
「えっ？」
「そうして、あいつらに言うんだ。二俣城内は開城派と籠城派に分かれて喧嘩しているって。兵隊たちもやる気がないし、兵糧も大してない。城内に残っても死ぬだけだから逃げ出してきたって言うんだ」
「で、でも、俺は最後まで戦いたいです」
「その気持ちはわかるけれど、戦いたいだけじゃ勝てないんだ。相手を油断させろ。お前にはその使命がある。油断させれば、負けるいくさも勝てるかもしれないんだ」
足軽兵は顔をうつむかせた。
「大丈夫。きっと、勝つ。あと、どさくさに紛れて武田から逃げることができたら、浜松の家康殿に伝えるんだ。二俣城で時間を稼いでいる間に、軍備を整えておけって」
牛太郎は足軽兵の腰をはたいた。
「頼むぞ。勝つも負けるもお前にかかっているんだ」
牛太郎はさらに十人ほどに声をかけ、それぞれの兵卒たちに偽りの投降をするよう促した。
本丸に戻り、平左衛門が構える陣内に入ると、床几に腰を下ろし、決して暑くないのに扇子で顔を仰いだ。
「明日か明後日には仕掛けてくるでしょう。平左衛門殿、岐阜への土産話として三河武者の武勇を見せてくださいよ」
中根平左衛門は唇を引き結びながら、こくりとうなずいた。

対　武田信玄（4）

武田徳栄軒は牛太郎のこざかしい策をどう受けていたのだろうか。降伏勧告に対しての優柔不断な返答、次々と投降してくる兵卒たち、かがり火のない暗闇の二俣城。

だが、二俣城の策がどうであれ、武田勢が悠長に構えていられないことははっきりとしている。

昼前、二俣城への攻城が始まった。

牛太郎は大手口の坂を抜けたところ、北曲輪の縁に立って、戦況を望む。

半鐘と太鼓の音が打ち響き、赤と紫の旗指し者が混ざり合いながら一気に大手口に詰めてくる。

しかし、幅の狭い坂を登ってくるのは二万の軍勢の中の一部である。

牛太郎は柴田権六郎ゆずりの太刀を抜き、その切っ先を大手口に詰めかける武田勢目掛けて振り下ろした。

「撃てええっつ！」

わずか二十丁弱の火縄銃が銃声を鳴らした。銃撃せしめたのはわずか一人か二人。竜のように駆けのぼる武田勢の勢いをそぐことはできない。

しかし、坂の中腹に築いた柵が武田勢の進路を阻んだ。それをよじ登ったり、あるいは力任せに押し倒そうと試みたりしているが、柵のきわに構えていた足軽兵たちの槍先によって、武田勢の兵卒は朽ちていく。

さらに無数の石が左右から武田勢の頭上に雨あられのごとく降ってきた。

突如の異変に武田勢の足が鈍った。

大手口前線で指揮を取る松平善兵衛の声で柵門が開かれ、足軽兵たちは錯乱している武田勢先鋒に突撃を開始した。

駆け上ってきた竜を押し返す滝水のように、三河勢は武田の兵卒たちを討ち取っていく。

「撃てえっつ！」

銃弾が放たれた。無数の石が放られた。すると、坂の脇から大木がめきめきと音を立てながら傾いていき、それに押し潰された者、それに進路を阻まれた者で、大手口の武田勢に怒号の渦が巻いた。

「引けえっ！　引けえっ！」

善兵衛は頃合いを計って足軽兵たちを柵の中に戻し、武者押しの声に押された武田勢が再び駆け上がってくる。

だが、柵のきわの槍の餌食にかかる。二段目の柵の向こうから放たれた弓矢が空を埋め尽くして降りかかる。

牛太郎の場からも、狼狽する武田勢の様子が見て取れた。

「武田の者ども、よく聞けいっ！」

三段目の柵の向こう、馬上の青木新五郎が高らかに声を上げた。

「お主ら甲斐の田舎者など、この二俣城には一兵たりとも入れさせんわ！」

新五郎の声とともに、左右から点火された藁が大手口の坂に放り込まれる。その火は大手口を一気に包み込み、紅蓮の炎の中に息絶えていく者もあれば、進軍とは逆行して逃げ出す者も現れた。

炎の中を駆け抜ける勇敢な兵卒もいた。しかし、三河勢は弓矢と石と銃弾を容赦なく浴びせかけ、柵門が開かれる。炎の中に戸惑う武田勢へと三河勢は一糸乱れぬ隊列で槍を突き刺していき、武田勢を後退させた。

「矢文を放てっ！」

牛太郎と同じく、北曲輪で戦況を眺めていた平左衛門が声を発すると、弓兵が冬晴れの空高く引き絞った弓は、放った矢に大きな弧を描かせて武田勢の本陣近くへと落ちていった。

文にはこう書いてある。

厭離穢土欣求浄土。

武田勢の最初の攻撃はそこで終わった。武田の旗指し物が引いて

いくのを見届けると、牛太郎は平左衛門とともに大手口まで下り、善戦した兵卒たちのねぎらいもそこそこに柵の破壊に取り掛からせた。

夕刻、武田勢は第二波の攻城戦を仕掛けてきた。牛太郎はやはり平左衛門とともに北曲輪の縁で、火の手が消えた坂を駆け上がってくる武田勢を見下ろしていた。

予想通り、武田勢は先鋒部隊に弓と火縄銃を備えてきている。

しかし、柵は消えている。

武田勢は戸惑った。が、勢いそのままに駆け上がった。石と矢と銃弾が雨あられに降り落ちるが、武田勢の波は留まらない。

が、大手口の坂を登り切ったところ、正面曲輪に三河勢の足軽兵すべてを結集させていた。息たえだえに上がりきった武田勢が光景を新たにしたのも束の間、

「殲滅しろおっ！」

松平善兵衛の掛け声とともに三河勢の槍が一斉に襲いかかり、弓を引き絞る間も、火縄に点火するひとときも許されないまま、武田の兵卒たちは土と化していく。

「押しきれえっつ！」

青木新五郎が手綱を振るって、馬を駆けさせた。足軽兵たちが武田の亡きがらを踏みつけながら、一段、また一段と大手口の坂まで押し返していく。

坂は武田勢で溢れていた。頂上で押し返されたせいで、一人、また一人と転げ落ちていき、それは雪崩が形成されていくように波及され、青木新五郎がそこに追い打ちをかける。

「押せえっ！　押せえっ！」

三河勢の目は血走っていた。鐘と太鼓の音が鼓動をたかぶらせ、高揚は頂点に達した。うおおっという雄叫びを誰もが自らで発していき、脳内の扉が殺戮の快楽を開放させた。自らの体中の全神経を一点に絞って、敵の喉元に槍を突き刺す。肩をぶつけ、敵を転げ倒し、太刀を頭部に振るう。

「引けえ！　引けえ！」

武田の将校が叫んだ。武田勢は我先にと坂を下りようとするが、大数が詰め寄っていたせいで、混乱した。

三河勢は背を向けた敵方をさらに追い込む。坂を駆け下りる三河勢は勢いを増した。

勝てる。

北曲輪から戦況を望んでいた牛太郎は、拳を握った。もちろん、武田勢二万を殲滅できるという思いではない。二俣城の最大の勝利は武田勢に攻城をあきらめさせることである。

牛太郎の瞳孔は開きっぱなしだった。たいして動いてもいないのに、大量の汗が頬をつたっていた。胸は打ちふるえていた。

篭絡策が成果に結びついたかどうかはわからない。だが、一つ一つの考案が紡ぎ合って、この大手口の坂へと結ばれたことは確かであり、もしも、考案の一つが欠けていたら、目の前の攻防はなかったかもしれない。

竹中半兵衛はいくさになると狂い出すが、その気持ちが牛太郎にもわからなくなかった。自分の思い通りに生死の行く末が運ばれる。こんな快感が、かつてあっただろうか。

その夜、かがり火が二俣城を闇の中にこうこうと浮かび上がらせた。

対　武田信玄（5）

二俣城攻防戦は続いた。

この攻防は常に大手口の坂で行われ、大木が進路を阻んでいたり、雨音にまぎれて柵をいつのまにか立てたり、武田の死体で塁を築いたりと、ありとあらゆる策をもちいては、武田勢を悩ませた。

二俣城内の兵卒に死傷者はほとんどない。逆に武田は見繕っただけでも二百は死んでいる。

ときに、大手口からの侵入をあきらめて、崖をよじ登ってくる部隊もあったが、そのほとんどは二俣城内に達する前に落下してしまい、城内に手をかけても、櫓から放たれた矢によって、侵入を拒まれた。

やがて、武田勢の攻城も、一日に一度であったのが、二日に一度、三日に一度と、回数を減らしていった。

むやみに攻めこめば余計な死傷者を出し、兵卒の士気も下がる。しかし、二俣城を落とさないわけにはいかない。だが、攻め側というのは野戦と大きく違って、戦術の手段が数限られていた。

あの武田徳栄軒に何もさせていない。

この事実が二俣城の将兵たちを勇気づけた。

牛太郎は栗綱の頬を両手で撫でまわしながら笑っていた。

「見たか。なあ、クリツナ。見たか。このおれのすさまじさを」

本当なら、簗田家の面々に見せてやりたい。しかし、いない。三河勢の前で高笑いするわけにもいかない。なので、牛太郎の自慢相手は栗綱だけだった。

「お前が喋れたらよお！」

嬉しさのあまり栗綱の顔を抱き寄せた。栗綱は牛太郎に頬ずりしてくる。

「そうか、そうか、お前も嬉しいか。だよな、そうだよな、おれが武田信玄に勝っているんだぜ。そりゃ、嬉しいわな」

「簗田殿」
松平善兵衛の声がして、牛太郎はあわてて振り返った。
「こ、これは善兵衛殿。ど、どうしましたかな？」
この半月の攻防戦の間、善兵衛は痩せた。頬骨が浮かび上がり、瞼の下にはくぼみがくっきりと縁どられている。
若々しさはなくなった。ただ、瞳のぎらつきは日々増していった。善兵衛のいくさぶりは、三河武者がどのようにして形成されていくかを表しているかのようだった。
「武田勢に赤備えが加わっているようですぞ」
山県勢であった。ようやく現れた宿敵に、牛太郎は表情を変えた。善兵衛とともに北曲輪までおもむき、いぜん、包囲体勢を敷く武田勢の中に山県三郎兵衛尉を探す。
ここからだと兵卒の顔形までは判別できない。ただ、赤と紫の旗指し物がひしめく中に、その存在をことさら強調している朱色の塊があった。
武田騎馬隊の精鋭たちである。
善兵衛が言った。
「武田は総力を集めましたな」
五年前、甲府で相対したときからその様相は何も変わっていない。湯村山の温泉で頭を湯に押し込んできた山県三郎兵衛尉が、五年のときを経て目と鼻の先にいる。
「善兵衛殿」
牛太郎は山県赤備えを静かな目で見つめながら言う。
「あっしと山県クソサブロウには浅からぬ因縁がありましてな」
牛太郎は五年前の事件を善兵衛に話した。襲撃されたことを知っている人間は織田家中の中でもわずかで、左衛門太郎でさえ知らない。そのときに甲府まで供してきた栗之介と四郎次郎だけである。
かつて、上洛を狙っていた上総介は背後を安定させるために武田徳栄軒に媚びていた。ゆえに、武田に命を狙われたなど大ごとに発展してしまうから、牛太郎は上総介に口止めされていたのである。

しかし、もはや、関係ないだろう。

「あっしの夢は山県クソサブロウをこの手で殺すことです」

善兵衛は牛太郎の横顔をじっと見つめた。

「ただ、今はそんな私情を捨て、二俣城を守ることだけに精神一到します。あっしのクソサブロウ殺したさのために、犠牲を払うわけにはいきませんから」

山県勢五千のうち、半数以上の足軽兵は大手口を突き破りにかかってくるだろうが、おそらく、騎馬に特化している赤備え隊は攻城戦に参加しないであろう。山県三郎兵衛尉も前面に出てくることはない。

今は山県への意欲をあきらめるしかない。

ふと、善兵衛が北曲輪に配されている鉄砲隊の一人に歩み寄り、火縄銃を受け取った。火縄に点火すると、銃口を赤備えに向け、一発、銃声を天高い空に鳴り響かせた。

無論、銃弾が届くはずもなかったのだが、善兵衛は火縄銃を鉄砲兵に返すと、曲輪の岸壁に仁王立ちし、小便した。

「赤備えよ、見ているかあっ！　我のいちもつは見ての通りしぼんでおらんぞ！」

兵卒たちが笑い上げた。どころか、善兵衛に感化されて、一人、また一人と善兵衛に並び立ち、小水を放った。

「武田の頭上に小便できるとは、なんとも心地よいもんじゃのう！」

「悠々と小便させてくれるとは、武田の奴等は情け深い者どもだわ！」

この光景を城下の武田勢は見て取れたのか、それとも善兵衛の放った銃声に対抗したのか、何発かの銃弾を浴びせてきた。もちろん、届くことはない。

げらげらと笑い上げる三河勢たち。

「簗田殿もしなされ！　愉快このうえありませんぞ！」

善兵衛に促されて、牛太郎は着物の裾をたくし上げた。山県の苦々しい表情が思い浮かばれる。牛太郎は高笑いしながら、小便した。

包囲されながらも、士気は逆に高まっていく三河勢を前に、武田勢は総力を結集させたものの、目立った攻城を仕掛けなくなった。あったとしても、様子見の小競り合い程度で、すぐに引き返して行く。

「援軍はまだなのか」

ただ、焦りの色を隠せない人間もいた。守将の中根平左衛門と副将の青木新五郎である。二俣城の兵卒たちが、天下の武田勢を小馬鹿にし始めたのが、不安をよぎらせる。

「徳栄軒がこのまま指をくわえて黙っているとは思えん」

「いや、手立てがないんですから、信玄は指をくわえているしかないんです」

牛太郎は平左衛門と新五郎をなだめるように言った。

「何かを企んでいたとしても、それはこの二俣城に対してではなく、浜松か、岐阜。家康殿をおびき出そうとするか、信長様がこちらに向かえないような謀略を仕掛けているかです。でも、家康殿も信長様も、信玄の危なさを知っているから、やすやすとは乗ってきません」

「しかし、援軍が来なければ埒が開きませんぞ」

「焦ってはいけません。こちらが埒を開けようとしてはいけません。戦略は気を長く、戦術は気を短く。竹中半兵衛の言葉です」

だが、さらに半月の膠着が続いたのち、事態は一転した。

二俣城の水が枯れた。

冷たい雨、再会

二俣城は終わった。

井戸のない二俣城は水源を天竜川に頼っていた。川の岸辺、断崖沿いに櫓を立てており、そこから瓶を吊り上げて水を汲んでいたのである。

武田勢は二俣城兵の目を盗んで、おそらく夜半、天竜川の激しい水流に足を取られながらも、どこかに攻め手がないか、詮索していたと思われる。

二俣城の造りをつぶさに知り得た徳栄軒は、水源の破壊を狙った。大量のいかだを作らせると、天竜川上流からそれを流し、いかだを櫓にぶつけさせた。

平左衛門や牛太郎らが徳栄軒の奇策に気付いたときには手遅れだった。無数のいかだが天竜川を埋め尽くしており、水流の暴れに乗ったいかだは櫓に次々と襲いかかった。

櫓は轟音を響かせて次々と崩れ落ちた。

兵糧はある。しかし、水がなくなった。

追い打ちをかけるように、武田から矢文が届いた。

――命の保証はする。早急に開城せよ。

いつのまにか、二俣城は徳栄軒の掌の中だった。櫓以外に水源がないことを聞いたとき、牛太郎は目の前が真っ暗になっていくようであった。唇を噛みしめる平左衛門の姿も、無念そうに瞼を閉じる新五郎も、発狂寸前の声をあげて悔しがる善兵衛も、牛太郎の視界にはあったが、何も見えなかった。

口髭の下で悠然と微笑を浮かべる徳栄軒の姿だけが見えていた。

兵は善戦している。むしろ、押し返している。でも、たったこれだけのこと――、水がなくなったっていうそれだけのことで、おれは負けちまうのかよ。

不甲斐ない。これほどまでに、自分の不甲斐なさを感じたことは

今までなかった。できることなら、腹を切って死んでしまいたい。それほど、悔しいし、恥ずかしい。

武田徳栄軒信玄と対等に渡り合えていると自惚れていた自分は、なんて滑稽だったことだろう。

「干からびるまで戦いましょうぞ！」

声を大きくした善兵衛だったが、顔つきは悲愴に満ちていた。

「中根殿！」

平左衛門は武田からの書状に目を落としたまま、動かない。

「青木殿！」

新五郎は首を振った。

「戦うも何も、相手が攻めてこなければ戦えまい。我らが開城しなければ、徳栄軒は我らが煮干しになるまで包囲するだけだ」

それが徳栄軒の狙いであった。水を失わせてもなお、命の保証をさせるということは、二俣城兵に唯一の逃げ道を与えている。徳栄軒は今後のことを考えて、二俣城兵が狂人の決死隊となって城から打って出てくるのを避けている。

一言坂の本多隊の例もある。負けはしないが、決死隊からの攻撃で与えられる死傷者と士気の減少を考えたら、たかだか千人余の兵など逃がしても構わない。

その辺り、徳栄軒は三河武者の気質を把握していたと思われる。

「そもそも、二俣城を失ったとしても、すべてが失われるわけではない。浜松のおやかた様に合流し、もう一度、一矢報いればいいではないか。なすすべもなく、むやみに兵を殺す必要がどこにあるだろうか」

「しかし！」

「申し訳ない」

と、口を閉ざしていた牛太郎が肩を震わせながら頭を下げた。

「あっしが浅はかであったばっかりに」

「何を言いますか、簗田殿」

平左衛門が武骨な顔に柔らかい笑みを浮かべながら牛太郎の肩に

手を置いた。

「一カ月以上も持ちこたえられたのは簗田殿のおかげです。我らがあの武田徳栄軒を苦しめたのは他でもない事実じゃ」

「申し訳ない。申し訳ない」

牛太郎は瞼から溢れ出そうな涙をこらえるのでせいいっぱいであった。水源のことが念頭にあったら、結果は違っていたはずだ。なのに、そこまで頭が回らなかった。知ったかぶりをしていただけだった。半兵衛なら、半兵衛なら、結果は違っていたはずだ。

自分は――、愚かすぎる。

「簗田殿！　簗田殿はそれでいいのですか！　簗田殿はここで退いてしまっていいのですか！」

食らいついてくる善兵衛に、牛太郎は真っ赤に充血した瞳を持ち上げた。

「二俣城兵、千人を虐殺するわけにはいきません」

善兵衛は言葉をなくした。

降伏を受け入れる矢文が放たれ、冷たい雨がぱらぱらと降ってきた。二俣城内に詰める三河勢を一同に集めたのち、血と汗が染みついた大手口を抜けていく。

武田勢がずらりと並ぶ前を、三河勢は首を垂らしながら進んだ。

「どうした、三河の田舎侍が！　おめおめと退散か！」

「お前らはどうせ死ぬんだからよ、最後まで戦ってもよかったんじゃねえのか！」

武田の雑兵たちから罵声が浴びせかけられ、思いあやまって太刀に手をかける兵卒もいたが、傍らの仲間に咎められて、唇を噛みしめる。

武田の兵卒とて、悔しさに代わりはないのである。大手口の攻防で何人もの同僚を失った男もいれば、敵を目の前にして槍を振るえず、何一つ手柄は立てられなかったのだ。

「いやあ、敵を目の前にして出す小便は気持ちがいいなあ」

と、武田の兵卒にいちもつをあらわにして、三河勢向けて小水を

垂れ流してくる者があった。笑いが響いた。
が、一瞬にして戦慄が走った。小便を放っていた者の胴体が二つに割れてしまったのであった。
三河勢は思わず足を止めた。兵卒を斬り捨てた者は、朱の鎖帷子を身に付けた馬に跨る朱の鎧兜の男であった。
「無礼を働く者は甲斐に去れ！」
牛太郎もそれを目撃していた。その厳めしい風貌ははっきりと覚えている。赤備えのその男は、山県三郎兵衛尉である。
そして、山県も、とりわけ目立つ栗毛の馬と、その鞍上の綱巻き姿の牛太郎に気付いた。
「簗田あっ！」
山県は冷徹に斬り捨てたときの静けさ漂う顔つきを一変させ、単騎、三河勢の隊列に近寄ってきた。三河勢は槍を構え、武田の兵卒たちも山県の後ろに付いてくるが、山県は腕を伸ばして武田勢を制すると、牛太郎を睨み据え、静かに声を放った。
「なにゆえ、貴様がここにおる」
「お前を殺しに来たんだよ」
牛太郎の言葉に、山県に従っていた兵卒たちが槍を構えながら騒ぎ始めた。三河勢も同じように目を据わらせ、槍を突き出した。
張り詰めた空気が、細く冷たい雨に打たれて静けさを増していく。鼻の頭からしずくを垂らし、顎の雨滴をぬぐいながら牛太郎は言った。
「山県。いくさはまだまだこれからだからな。覚えておけ」
朱の兜の下で、山県はひっそりと笑みを浮かべる。
「望むところだ。簗田牛太郎」
牛太郎と山県は手綱をふるうと、馬を歩かせて互いにその場から去った。

冷たい雨、帰参

雨にかすむ野を横目に、無言の隊列に混ざって街道をひた進み、浜松城郭がうっすらと見えるようになったころ、

「旦那っ！」

畔に立って隊列を見送っていた栗之介が陣笠を跳ね上げながら牛太郎に駆け寄って来た。

「旦那っ！　旦那っ！」

栗之介は言葉が浮かばないらしい。

牛太郎は一カ月ぶりに見た栗之介の浅黒い顔に安堵した。長く続いていた緊張感からいっとき解放されたようで、わざわざ自分を探しに来た栗之介を有難く思ったが、牛太郎は照れ臭さに敗北の悔しさが混じって、つっけんどんにかえした。

「なんだよ」

「もう、戻って来ねえかと思ったよ」

栗之介は瞼をこすりながらそのまま栗綱の鼻面を撫で、

「良かった。クリも大丈夫だったんだな。良かった」

と、栗綱に額をこすりつけた。それに応えるように栗綱は栗之介の顔を舌で舐める。

「良くねえ。まだ、いくさは終わってねえんだ。良くねえんだ」

まるで、牛太郎は自分自身に言い聞かせるかのようだったが、栗綱の口輪を手に取った栗之介は、馬上の牛太郎を見上げながら言う。

「生きていればどうにかなるだろ。生きていればよお」

牛太郎は白い吐息をつくと、鉛色の雲の下にかすむ浜松城をきつく見つめた。

二俣城から退いてきた将たちは、そのまま足取り重く浜松城の三河守の前に参列した。もちろん、牛太郎も登城した。

本丸御殿の広間に入ったとき、はっとした。二俣城の将たちを出迎えた三河武者たちの中に、長髭の佐久間右衛門尉信盛の姿がある。

他にも滝川彦右衛門一益、水野藤四郎らがいた。
援軍が来ていたのか。それなのに、どうして、二俣城の加勢に来なかったんだ。
牛太郎は織田の将たちの姿に呆気に取られながらも、二俣城防衛を共にした中根平左衛門や青木新五郎と同じく三河守を正面にして平伏した。
平左衛門が悔しさに肩を震わせながら、絞り出したような声で言う。
「おやかた様、申し訳ありませぬ……」
「よい。お主らはよくやった。責めるな。これもわしの能のなさじゃ」
三河守の顔つきはしばらく見なかったうちに変わっていた。相変わらずの肥え太りした丸い顔ではあるが、口許を引き絞り、眼差しはどこかぎらりとしている。
「すべてが失われたわけじゃない。まだ、いくさはまだじゃ。そのときは頼むぞ、中根、青木」
平左衛門と新五郎は震えを大きくしながらも、頭をより深く下げ、返答の声を発した。
「それに、簗田殿――」
ふいに三河守は腰を上げた。平伏し続けている牛太郎の前まで歩み寄って来ると、三河守は腰を下ろして着座し、その頭を床にこすりつけた。
「面目ないっ！　友人がたった一人戦地で働いているというのに、当のわしは浜松でのうのうとしておった！　簗田殿、簗田殿っ、面目ないっ！　この通りじゃっ！」
嗚咽をもらしながらの三河守に牛太郎はあわてた。
「ち、違いますって。あっしは、ただ、何も」
「面目ない。面目ない」
すっかり取り乱してしまっている三河守を酒井左衛門尉と本多平八郎が上座まで引きずり戻し、場は三河守が泣きやむのを待った。

ただ、三河守に感化されて鼻をすすり上げる者もいる。
すべてが終わってしまったかのような悲痛な空気が、広間に圧し掛かっていた。中根平左衛門と青木新五郎も泣き出してしまっている。
牛太郎は瞼をぎゅうっと瞑り、唇を中に押し込めて、自責の念に改めて襲われた。もしも、二俣城さえ死守していれば、もしも、水源を見逃さなければ、未来はあった。
いや、違う。まだ、希望はある。武田信玄は死ぬんだ。まだ、いくさは終わっていない。
「しかしだのう、牛太郎」
佐久間右衛門尉だった。長髭を指先でつまみながら、細目の中の瞳を怪訝に光らせた。
「お主は何をやっておったのだ？　三河殿が頭を下げるようなことなどしておらんであろう」
牛太郎に衝動が走ったが、ぐっとこらえて頭を下げた。
「た、確かに何もしていません。ただ、そこにいただけです」
「違いますっ！」
青木新五郎が声を跳ね上げた。
「簗田殿の策のおかげで二俣城はここまで持ったのです！　簗田殿がおられなかったら、二俣城はとっくに攻め落とされており、千人の兵も殲滅されておりました！」
「左様！　簗田殿は二俣城を救った三河勢の恩人でございます！」
中根平左衛門の言葉に三河守以外の誰もが耳を疑う様子であった。
「いやいや、織田の将だからといって遠慮するでない。牛太郎ごとき、邪魔ばかりであっただろう」
佐久間右衛門尉は笑い上げた。悲痛な場にあって、その様子は異様だった。
「佐久間様、お控えなされ」
水野藤四郎が佐久間を制したが、当の佐久間は興を削がれたように不服に眉をひそめ、水野を睨みながら、鼻で笑った。

「わしはただ、場を和ませようと思っただけじゃ」
三河武士たちの訝った視線が佐久間に集中したが、泣きやんでいた三河守が、
「もうよい。各々、籠城に備えて英気を養え」
そう言って、広間を立ち去った。
牛太郎は平左衛門や新五郎とともに広間をあとにした。
「簗田殿、あのお方は一体誰なのです」
新五郎が鼻息を荒くしている。
「たとえ簗田殿が活躍されていなかろうと、前線で戦っていた者に対するなんたる愚弄か」
「いいんスよ。青木殿がそう言ってくれるだけで、あっしは有難いんですから」
「あの方は佐久間右衛門尉殿ですな、簗田殿」
平左衛門が牛太郎に視線を送って確かめると、うなだれながら首を横に小さく振った。
「織田の重臣の佐久間殿がやって来ながら、なぜ、二俣城に援軍を寄越してくれなかったか」
牛太郎は思わず足を止めてしまう。牛太郎は平左衛門や新五郎に、織田の援軍が来るまで持ちこたえると言っていたのだ。
それを反故にしてしまったことになる。
「牛太郎」
二人の前でうつむいて立ち尽くしていたところに、水野藤四郎がやって来た。
「牛太郎、話がある」
と、牛太郎の肩に手を置き、平左衛門と新五郎に目配せした。彼らが去っていくと、藤四郎は牛太郎を城内の隅に連れていき、耳打ちした。
「玄蕃允を説得せい」
意味がわからない牛太郎は、顔を上げて藤四郎の目を覗きこむ。
藤四郎とは大した面識もない。ただ、藤四郎が上総介の父の代か

ら織田に仕えていた古参武将であり、三河守の母方の叔父であることは知っていた。

「玄蕃を説得しろって、どういうことッスか」

藤四郎は年季の入った瞳の奥を牛太郎に寄せると、声を小さくして言った。

「佐久間様の命じゃ。武田が浜松を籠城するときには、我ら織田は直前に脱出する」

「そんなっ！」

藤四郎は牛太郎の口を咄嗟に塞ぎ、静かにせい、と、声音を低く、眼光を鋭く突き刺してきた。

冷たい雨、慟哭

「旦那っ」
栗綱の口輪を取る栗之介が、陣笠の先端から雨滴を垂らして呼んでくる。
「旦那っ、ぼさっと突っ立って何をやってんだよ。風邪ひいちまうぞっ」
鉛色にうねる遠州灘を遠目にして、牛太郎は愕然としていた。
佐久間右衛門尉が引き連れてきた軍勢の数は三千に過ぎなかった。一万の徳川方にそれが付いたところで、本隊と山県隊が合流した武田勢二万五千には遠く及ばない。
しかし、牛太郎が上総介に要請したのは「わずかながらの軍勢でも構わないから」なのだった。
甘かったとしか言いようがない。武田勢の動きを肌で感じるところ、徳栄軒には死ぬ気配がまったくない。
それでも、三河勢を見殺しにして自分たちだけ逃げるとは如何なものか。
牛太郎が姿を消している間にやってきた佐久間勢は、九之坪勢を率いている玄蕃允を呼び出し、彼に方針を伝えたらしい。
だが、玄蕃允は言うことを聞かないでいて、三河勢とともに籠城すると騒いでいると、水野藤四郎は言った。
「お主が説得しろ」
本気で言っているのだろうか。信長がそんなことを許すだろうか。佐久間は本気なのか。
織田は腐っている。水野藤四郎も滝川彦右衛門もどうして佐久間に従うのだ。牛太郎は憤りさえ覚えた。いや、違う。牛太郎はすぐに首を振り、金ヶ崎の退き口を思い出した。織田には木下藤吉郎もいるし、明智十兵衛もいる。
それに、森三左衛門だっていた。

宇左山城を文字通りに死守した三左衛門は、三河勢と何ら遜色のないもののふであった。

「サンザ殿がいれば。サンザ殿が援軍であれば」

牛太郎は雨に打たれながらも、分厚い雲の向こうにある天を見ようとした。涙がこぼれた。悔しくて仕方なかった。

負けたことも、自分が不甲斐ないことも、織田の将に腐った者たちがいることも。

牛太郎は打ちひしがれて、地面に手を突くと、声をもらして泣いた。

責める必要はない。責める必要はない。しかし、牛太郎はこの世の愚かさすべてが自分の愚かさであるような気がしてならなかった。後世の時代からやって来て、自分は今までの十年間、何をやって来たのだろうか。こんなことのために十年を費やしてきたのだろうか。

ここで死に花を咲かせたとしても、三左衛門に合わせる顔がない。無力すぎる。

「旦那……」

栗之介が濡れそぼって泣きじゃくる牛太郎に歩み寄ってきたが、言葉はかけられなかった。

栗綱が首を伸ばしてくる。そうして、頬に伝う涙を舌で舐めた。牛太郎は顔を上げる。栗綱は牛太郎の顔をしきりに舐める。その黒くつぶらな瞳は、哀しみに満ちていて、優しみに溢れていた。

牛太郎は栗綱の顔を抱いた。わんわんと泣いた。

栗綱は知っている。牛太郎の勇気と嘆きを。

城下に下りて、九之坪勢が宿陣する寺に一カ月ぶりに戻ってきた牛太郎は、雨に冷えた体を湯船に沈め、決心した。

玄蕃允も勝蔵も九之坪勢も岐阜に戻す。しかし、自分は残り、山県三郎兵衛尉と最後まで戦う。

「そうだ。おれはあいつを殺すためだけに生きてきたんだ」

牛太郎は二俣城下で山県と出くわした日中の出来事を思い出して

いた。

小便を垂らしてきた兵卒を有無も言わさずに斬り捨てた山県は、もしかしたらいいやつなのかもしれない。

憎き山県とばかりに恨みを引きずってきた牛太郎だったが、思えば、山県が自分を殺そうとしたことは、主君の徳栄軒に命じられたことなのである。

あのとき、睨み合ったとき、恨みつらみを越えた何かが自分と山県の間にはあった。むしろ、昔年の友人と再会したような気分であった。

だからこそ、山県を殺さなければならない。そして、もしも、自分が殺されるのであれば、山県三郎兵衛尉のその手でなければならない。

このままいけば、浜松城は落ちる。が、その最後の抵抗のときに、牛太郎は山県と刺し違える決心をした。

「これが最後だ」

牛太郎は湯船から上がった。

もう、何もいらない。梓の顔が脳裏によぎるが、

「おれは戦国武将だ」

何もいらない。徳栄軒が死のうがどうであろうが、構わない。歴史が変わっていようがどうであろうが、これは自分の人生だ。

最後の最後に自分の生きざまを確かめるのみである。そうすれば、三左衛門も笑ってはくれるだろう。

牛殿らしからぬ生きざまであったな！

牛太郎は湯屋から出ると、その足で玄蕃允の居室の板戸を跳ね開けた。

「おいっ！　イノシシ野郎っ！」

しかし、牛太郎ははっと目を押し広げた。

居室には若者たちがたむろしている。玄蕃允はもとより、勝蔵、なぜか松平善兵衛、それにもう一人、見たことのない優男。

「なんだよ、オヤジ殿は。騒々しいな」

あろうことか、四人は酒を飲んでいる。あれほど禁酒を促していたのに、勝蔵の頬は真っ赤に染め上がってしまっている。
「な、なんで、善兵衛殿がここにいるんだ」
善兵衛はにこりと笑った。二俣城での悔しがりようが嘘のように、爽やかな微笑みであった。
「簗田殿と酒を酌み交わしたくなってやって来たのですが、簗田殿には拙者と歳の近い配下の方々がいらっしゃったようで、つい、意気投合してしまいました」
「水臭いではないか、オヤジ殿。一人で二俣城に行ってしまうとは。手柄を一人占めしたそうじゃないか」
「そうだ」
勝蔵が椀の中身をがぶりと飲み込み、熱っぽい吐息をつくと、すでに据わってしまっている目で牛太郎を睨み上げてきた。
「俺たちは浜松で飼い殺しだ。そのくせ一人でいくさ働きとはやってくれるじゃねえか、あーっ！」
「よせよせ、勝蔵。せっかく身を粉にして働いてきた簗田殿をそう出迎えるとはあんまりではないか」
と、誰だかわからない優男の若者が勝蔵をなだめ、勝蔵は不思議とその若者には従いおとなしくなる。
「だ、誰だ、キミは」
「ああ。お初にお目にかかります。拙者、平手甚左衛門と申します。もっとも、左衛門太郎殿とは懇意にさせてもらっているのですがね」
むう。名乗られたところで、なぜ、平手甚左衛門が悠々としているのか牛太郎は見当もつかない。
「平手殿を知らないとは、オヤジ殿はよっぽどだな」
甚左衛門は、かつての上総介の教育係であり、次席家老でもあった平手五郎左衛門政秀の忘れ形見らしい。
上総介の命で佐久間右衛門尉とともに浜松にやって来たが、
「籠城戦になったら浜松から脱するなど有り得ませぬ」
と、若気の至りで玄蕃允とともに佐久間に反抗しているようであ

った。
　こいつらは何をべらべらと喋っていやがんだ。徳川方の善兵衛がいるんだぞ。
　牛太郎は気が気でなかったが、善兵衛は佐久間の企みを聞いてもなお、憤ることもなく、にこやかである。
　牛太郎は思わず訊ねた。それでいいのか、と。
「ここは浜松。これは武田と徳川とのいくさであって、三河勢のいくさです」
「馬鹿言うな、善兵衛とやら」
　勝蔵は酒をあおると、据わった目で善兵衛を睨みつけた。
「俺らはなあ、わざわざ浜松まで来て、一度も槍をふるってねえんだぞ。ここで岐阜に帰られるか。ここで岐阜に帰れば名ばかり武者よ」
「フン。別に山田三郎は帰ってもいいんだぞ。お主が森勝蔵だとは誰も思っていないからな」
「なんだと！　コラ！」
　玄蕃允の悪態に腰を上げた勝蔵だったが、甚左衛門に止められて、おとなしく着座する。
「玄蕃もいい加減にせい。善兵衛殿が笑っておられるぞ」
「いや、喧嘩するほど仲がいいと言いましょう」
「善兵衛殿。喧嘩するほど仲がいいかもしれませんが、こうも喧嘩をされては周囲も疲れてしまいますわ」
「おいっ！」
　牛太郎は和気あいあいと酒を酌み交わしている若者たちを一喝した。
「お前らは佐久間殿と一緒に岐阜に帰れっ！　甚左衛門殿もだ！　お前ら小僧がいたって何の役にも立たねえ！　おれだけが浜松に残る！」
　若者たちはいちようにして牛太郎を睨んだ。

オヤジ殿

「おい、オヤジ」
勝蔵がゆらりと腰を上げると、
「今の話を聞いてなかったのか？」
猛然と牛太郎の頬を殴りつけた。齢十五の小僧のものとは思えない勝蔵の硬い拳に吹き飛ばされた牛太郎は板戸を外し、廊下にまで転げ倒れた。
「俺たちはなあ、佐久間のような日和見ジジイとは違えんだよっ！」
「勝蔵っ、やめろっ」
甚左衛門と善兵衛が勝蔵の腰に抱きつくが、勝蔵は我慢ならなかったらしく、二人に阻まれながらもなおのこと牛太郎に襲いかかろうとしてくる。
相当の鬱積が溜まっているらしい。恐怖を克服して一言坂に出たものの、敵方と相対することもなく退却し、一カ月間、武田勢が二俣城を包囲する中で、ただ、浜松で指をくわえているしかなかった。
「オヤジ殿」
玄蕃允が倒れ込んでいる牛太郎の前に中座し、奥に秘めた眼差しを注ぎ込んできた。
「山田三郎の言う通りだ。俺たちを小僧扱いするな」
牛太郎は玄蕃允を睨み返す。
「小僧扱いだと？」
牛太郎は玄蕃允の頬を殴りつけた。
「扱いもくそもお前らは小僧だろうがっ！」
おもむろに腰を上げた牛太郎は居室の中にずかずかと上がり込み、押さえつけられている勝蔵の頬を殴りつけ、甚左衛門の頭に拳骨を落とし、善兵衛にまで拳を落とした。
「何しやがんだっ！　オラァ！」
「お前ら小僧はおっかさんのおっぱいでも吸っていろ！」

ふいに玄蕃允が背後から掴みかかってきて、牛太郎はぶん投げられた。玄蕃允は牛太郎の上に乗りかかり、牛太郎の顔面に拳を入れた。

「お前に何がわかる！　わしにはな、帰る場所などないのだ！」

玄蕃允はさらに拳を振りかぶる。そこに善兵衛が掴みかかって、牛太郎から玄蕃允を剥がし取ると、今度は善兵衛が玄蕃允を殴りつけた。

「年配者に拳を入れるとは何事だっ！」

「よそ者は黙ってろっ！」

玄蕃允が善兵衛を殴り返す。取っ組み合いになり、押しつ引かれつで廊下になだれ込んでいく。

「何をやっておるんだあっ！　やめんかあっ！」

甚左衛門が廊下の二人に駆け寄るが、解放された勝蔵がここぞとばかりに二人の揉み合いに参戦し、理不尽な不意打ちを玄蕃允と善兵衛に食らわした。

「やめろって言っているだろうがっ！」

甚左衛門が勝蔵を殴りつける。目玉を剥き出してしまっている勝蔵は甚左衛門を殴り返す。収拾がつかなくなってしまう。

牛太郎は善兵衛が持ってきたらしき酒瓶の中身を四人目掛けて撒き散らした。そうして、瓶を床に叩きつけて割った。

「喧嘩したいんならおれとやれ！　いくさに出たいんなら、おれを倒してから行け！」

酒瓶が割れた大きな音に動きを止めた四人は、仁王立ちの牛太郎を見つめた。牛太郎は呼吸を荒げ、目はかつてないぎらつきだった。

大男が余計大きく見える。

若者たちは牛太郎の背後にゆらめいているものが、自分たちにはないものだと理屈抜きで感じた。いや、愚将で、情けないあの簗田牛太郎が、そこに仁王立ちしていることだけでも、牛太郎の意思の強さを知った。

「なにゆえ、そこまでして、わしらを止めるんだ」

玄蕃允が唇を震わせた。が、勝蔵だけは酩酊してしまっていた。
「望むところじゃねえか、この鈍牛！」
勝蔵が飛びかかってくる。牛太郎は放たれてくるであろう勝蔵の右拳を予想し、腰を屈めて勝蔵の腰に飛びかかっていく。しかし、喧嘩慣れしている勝蔵の膝が牛太郎の顔面を直撃し、ううっ、と、顎を上げてよろめいたところに右拳を見舞わされて、牛太郎は吹っ飛んだ。
倒れ込んだ牛太郎の顔面に勝蔵は蹴りを浴びせてくる。牛太郎は襲いくる足の甲に目を瞑りながらも、勝蔵のふくらはぎを抱いた。そうして、噛みついた。
勝蔵の悲鳴が上がり、牛太郎は噛みついたまま足を引き寄せて勝蔵を薙ぎ倒す。
そこへ、三人が割って入り、牛太郎は玄蕃允の腕で勝蔵から引き剥がされる。
「何をやってんだ、オヤジ殿！　あんたが勝てるわけないだろう！」
善兵衛と甚左衛門に抑え込まれた勝蔵が、獣のように狂った雄叫びを上げていた。
「どけっ！」
牛太郎は玄蕃允を振り払おうとする。
「どけっ！　お前ら、どけっ！　おれがな、おれが、三左殿の代わりに、やってやるわ。これはな、親子喧嘩だ！　どけっ、玄蕃っ！」
瞳孔を開け広げる牛太郎に思わず圧倒されて、玄蕃允は力を緩めてしまう。牛太郎は玄蕃允を突き倒すと、善兵衛と甚左衛門を引き剥がし、倒れ込んでいる勝蔵の腹に乗り上げて、勝蔵をめった打ちにした。
「お前がなあ。お前がなあっ！」
牛太郎はぼろぼろと涙をこぼしながら、勝蔵の顔を殴りつける。
「お前が死んだら、おれはどうすればいいんだ！」
鬼気迫る牛太郎に他の三人はしばらく圧倒されていたが、甚左衛門が牛太郎を掴んで止めた。

「もう、やめてくだされっ」
甚左衛門も泣いていた。
「もう、簗田殿の気持ちはわかりましたゆえ、やめてくだされっ」
解放された勝蔵だったが、唇から血をこぼしつつ、吐息を荒げるだけで牛太郎と見つめ合う。
「いいか、お前ら」
牛太郎は甚左衛門に組みつかれたまま、呼吸を整え直しながら、若者たちに視線を送った。
「お前らはな、あと十年生きてもおれより年下だ」
甚左衛門の腕を振り払うと、牛太郎は涙と血を袖で拭い、もう一度、しっかりとした眼差しを若者たちに送った。
「あと十年生きて、いくさ働きなんかよりももっと大切なものを見つけろ。死に花ってのは、そのときに初めて咲くもんだ。自分の生きざまを見つめろ。どうせ死ぬんなら、土になるより、花を咲かせろ。生きざまの花を咲かせろ」
勝蔵が起き上がった。ふらふらと歩み寄り、牛太郎と睨み合うと、一発、牛太郎を殴りつけた。
「だったら、オヤジの生きざまとはなんだ！」
牛太郎は一瞬うつむいてしまう。だが、すぐに視線を持ち上げて言った。
「ここにあるだろう。お前らと向き合っているのが、これがおれの生きざまだ」

実は、牛太郎も彼らから聞いて初めて知ったことだが、四人とも父親を喪っている。

勝蔵は森三左衛門の息子であるから、前々から知っていたことではあるが、平手甚左衛門の父の政秀は、かつて、尾張のうつけ者として名高かった上総介を戒めるために腹を切った。

甚左衛門は平手堅物という兄がいて、今はその養子となっている。

松平善兵衛は、祖父と父が三河守に刃向かって一揆衆と共に蜂起してしまったため、流浪の少年期を過ごしていたが、父が亡くなると、三河守はこの一族を許し、大草松平家の当主となった善兵衛は三河岡崎城主の、三河守の嫡男、岡崎三郎に仕えている。

玄蕃允は三年前にやはり父を病で亡くし、若くして一家の主となった。だが、彼は佐久間一族の分家であり、玄蕃允自身の粗野な物言いもわざわいして、佐久間右衛門尉から遠ざけられていた。

「だから、わしは功を上げたいんだ」

玄蕃允が訴えるように牛太郎を見つめた。もう、玄蕃允には岐阜を出たころの牛太郎をあなどる気配はない。

「拙者も同じゆえ」

徳川方の善兵衛がうつむきながら言う。

「おやかた様にお許しをもらい拾い上げてもらった以上、おやかた様のために戦わなければなりませぬ」

勝蔵は腫れ上がった顔でふてくされたように牛太郎を見つめて黙っている。

「簗田殿」

甚左衛門がまっすぐな眼差しをにじり寄せてくる。

「かつては町娘の子であった左衛門太郎殿が侍大将まで昇り詰めて活躍されている中、拙者どもは何をやっているのか。拙者どもの気持ちも察してくだされ」

「馬鹿を言うな」
牛太郎は、何を言おうと食い下がってくる若者たちの情熱から逃れるように視線を伏せた。
「太郎はお前たちと違う。太郎は死ぬためにいくさをしたことなんて一度もない。太郎は常に勝とうとしている。それが太郎とお前らの決定的な違いだ。だから、あいつは出世したんだ」
「だったらだ、オヤジ」
と、勝蔵は酔っ払っているせいなのか、牛太郎をいつのまにかオヤジ呼ばわりである。
「左衛門太郎がここにいたら、佐久間と共に逃げているというのか」
「それはないだろうけど」
「左衛門太郎もきっと俺らと同じように武田に立ち向かうはずだろう。俺たちも左衛門太郎と同じように武田と戦う。それだけだ」
「違う。あいつはお前らと違って頭がいいんだ。半兵衛にいくさの手ほどきを受けたぐらいなんだぞ。虎御前山から退却するときとか、姉川で斜めに突撃したときとか、あいつはな、あれでもいろいろ考えていて、無謀な戦いはしないんだ。勝つためにいろいろ考えてやっているんだ」
「じゃあ、わしらも考えればいい。武田に勝つための手段を」
「馬鹿を言うな！　ここで死んだら元も子もないだろ！　浜松が落ちても、三河だって残っているし、いずれ、信長様が小谷城を落としてやって来るんだ！」
「それは、簗田殿も同じことではないですか」
甚左衛門に、牛太郎は口を噤まされた。
「あと、十年生きられるかどうかは、やってみないとわかりません。何も、負けが決まったわけではございません」
「違う違う違う！　おれはな、お前らを死なせたくないだけなんだ！」
牛太郎は額を床にこすりつけた。
「わかってくれ！　頼む！　もう、誰かが死ぬのはこりごりなんだ

！　知っているやつが死んでいくのはいやなんだ！　若いお前らだったらなおさらなんだ！」

自分の思いを必死に訴えかけてくる牛太郎を前にして、若者たちは押し黙るしかなかった。

牛太郎が元いた平和な時代では死は当然ではなく、どこかぼんやりとした必然であった。偶然に近い絶対であったり、事故みたいなものであったりした。

この時代にやって来てから、最初のうちは、目の前の死にたいして鈍感ではあった。前田又左衛門が拾阿弥を斬り捨てたときも、桶狭間で今川治部太輔が討ち取られたときも、数々の戦場で血が流され、命が絶えていったとしても、それは目の前で起こっている出来ごとでありながら、自分自身とは遠くかけ離れた世界で起こっている出来事であった。

いや、むしろ、それほどまでに死が溢れていた。当然でなかったことが当然すぎて、牛太郎は目を背けていたのかもしれなかった。

しかし、金ヶ崎で沓掛勢の大半を失ったときから、牛太郎の中に生死の無常さが湧き上がった。

金ヶ崎の退き口は、手柄欲しさに牛太郎が自らしんがりを名乗り出たのだった。そうして、沓掛勢は主人の牛太郎を、命を賭して守り抜いていった。

残酷な事実が牛太郎に突きつけられた。沓掛勢を生かすも殺すも牛太郎の手によるものであった。牛太郎があのとき手柄欲しさに名乗り出なければ、この世を去っていった沓掛勢四百人の人生は続いていたのだ。

もちろん、四百人の中には玄蕃允や勝蔵ぐらいの若者もいた。

さらに、牛太郎の面倒を見てきた森三左衛門の討死にが牛太郎を敏感にさせた。

それまでは自分の死を恐れていた。しかし、それ以上に、周囲の死を恐れ始めた。

「俺は戦国の男だ」

むっすりとしていた勝蔵が言った。
「オヤジにそこまで言われて、はいそうですかと引き下がる戦国武者がいるか？」
「そうだ。槍もろくに振れないオヤジ殿をみすみすいくさ場に置いていって、わしは叔母上や左衛門太郎殿に合わせる顔などないわ。オヤジ殿の言っていることは、そのままわしらの言いたいことだ」
「違う」
牛太郎は首を小さく振る。
「何も違いませぬ、簗田殿。拙者どもは死ぬために戦うわけではないのです。功を上げ、名を上げるために戦うのです。簗田殿もそうしてきたんでしょう。簗田殿もそうやってここまで生きてきたんでしょう」
「違う！」
「おい、オヤジ。いい加減、駄々をこねるな。こいつらはどうか知らねえけどな、俺は簗田左衛門尉の配下の山田三郎だぞ。主人と共にするのが当然だろうが」
「今さら、そんな屁理屈並べんな！」
「屁理屈並べているのはオヤジだろうが。いい加減、観念して、奥方の小袖にしがみついていろ」
牛太郎は凍りついた。
玄蕃允がにやにやと笑みを浮かべながら勝蔵に訊ねる。
「なんだ、奥方の小袖とは」
勝蔵もにやにやと笑みを浮かべた。
「いやな、オヤジが二俣に行っている間、オヤジの部屋の整理をしていた馬丁をふと見かけて、その中に場違いの見事な桐箱があったからな、オヤジは何かの宝物を持ち歩いているのかと馬丁の者に訊ねたところ、いや、違う。これは奥方の小袖だと言う。オヤジは女の小袖を集めて、その匂いを嗅ぐのを趣味としているとんでもない性癖の持ち主なのだ」
「ま、まことか、オヤジ殿！」

と、玄蕃允が飛び跳ねるようにして前のめりに体を寄せてきたが、牛太郎はただ黙る。
「まあな、あんまり言いふらすとオヤジに悪いから黙っていたんだがな。おい、玄蕃、あんまり公言するんじゃねえぞ」
「いやいや、オヤジ殿を小馬鹿にしてしまうと、例の奥方にどやされてしまうからな」
「ということは――」
善兵衛もにやにやと笑っていた。
「簗田殿は二俣城で奥方の小袖がなかったゆえ、今すぐにでも小袖にしがみつきたいのですな？」
「黙れ」
「いや、黙っていられましょうか」
甚左衛門が言う。
「簗田殿を野放しにさせておいて、岐阜中の小袖がなくなったらたまったものじゃありません」
甚左衛門が囃し立てると、若者たちはげらげらと笑い上げた。
「さすがは天下の簗田左衛門尉よ！　やることなすことずば抜けておる！　これは是が非でもオヤジ殿を岐阜に返さなくてはならんな！」
「左様。こんな愉快な男を死なせるわけにはいかん」
「おい、オヤジ。俺にも奥方の小袖の匂いを味わわせてくれよ」
「ふざけんなっ！　クソガキども！　誰がお前らなんかに嗅がせてたまるかよ！　浜松で死んじまえっ！　クソ野郎！」
牛太郎は笑い立てる若者たちから逃げ去るように居室を立ち去った。

一路、浜松

牛太郎の二人の与力のうちの一人が堺にいる。

女である。しかし、甲賀の忍び上がりで、かつて諜報活動に従事していた彼女は、変装を得意としていた。

普段は男装し、吉田早之介を名乗っている。

忍び名はさゆりである。

着物嗅ぎの性癖を発見されて堺から逃げ去ってしまった牛太郎に代わって、摂津工作に日々を費やしている。

「姐さん、旦那様は浜松に向かったそうなんですが、大丈夫でしょうか」

彩が細い眉尻を垂れ下げながら言うと、つぼみのような唇を不安げにきゅっと押し込める。

彩も甲賀のくのいち上がりであった。甲賀衆から脱け出した兄とともに牛太郎に拾われ、しばらくは簗田家の女中、簗田家の奉公人中島四郎次郎が経営する団子屋の娘として働いていたが、簗田家の人手の少なさから、摂津工作のためにくのいちに舞い戻っていた。

「大丈夫じゃないやろうなあ。そんでも、あの人は今までどんな死地もくぐり抜けてきた。運があるんや。私が三度殺そうとしても死ななかった人や。なんとかなるやろ」

「でも、今までは姐さんや若君が傍にいたからで、今回は栗之介と九之坪勢わずか五十人を引き連れてのことなんですよ」

「彩。あんたや私が今やらなあかんことはなんや」

さゆりが突きつけた鋭い目に彩は顔を伏せると、「申し訳ございません」と、さゆりの前から立ち去っていった。

彩に言われなくても、さゆりは今すぐにでも浜松に飛んでいきたかった。牛太郎、一人では何もできないことなど、さゆりが一番よく知っている。

だが、堺から離れるわけにはいかなかった。自分が離れてしまっ

たら、摂津工作を見る者がいなくなってしまう。
牛太郎の悪運を信じるしかない。
主人が九之坪勢を率いて浜松に向かったという一報を聞いてから一カ月後、浜松の栗之介から文が届いた。
達筆である。栗之介は読み書きができないから、誰かに代筆してもらったのであろうが、あの栗之介が文を寄越してくるなど、かつてない出来事であった。
さゆりは息を呑みながら文を開いた。
一言坂のいくさで主人は隊列からはぐれてしまい、帰ってこない。しかし、武田に包囲されている二俣城を脱してきた足軽兵によると、牛太郎は単身二俣城に乗り込んでいる。
「一体、何をやっているんや……」
さゆりは一人、呟いた。
なぜ、あの主人が自分を護衛する隊列を捨ててまで、包囲されている二俣城に行ったのかわからない。牛太郎の意図がさゆりにはまったく読めない。
「あかん」
その夜、さゆりは、彩と中島四郎次郎を前にして、初めてその顔を切迫させた。
「このままいくと、あの人は死ぬ。連れ戻さなあかん。私ら全員がいくさ場で滅びるんならわかるけれど、あの人だけを死なせて、私らが生き残っているわけにはいかんわ」
「でも、姐さん、どうやって」
「私が浜松に行く」
「で、でも、摂津はどうするの。さゆりちゃんがいなかったら摂津は誰が。それこそ、旦那様があとで怒るよ」
四郎次郎があわてふためきながら言ったが、さゆりは首を振った。
「摂津よりも、主人の命や。あの人が死んだらどうにもならん。それに、新七がおるやんか」
「でも、兄さんはまだ高槻城に」

「はよせいって伝えておくんやっ。和田惟増を殺させたんやから、明日か明後日にでも高槻城はどうにかなるやろ！　彩！　摂津はあんたがなんとかするんやっ！　四郎次郎も銭稼ぎばっかやないで、たまにはこっちも見いっ！」

さゆりは支度を始めた。いくさをする気はない。小袖の裾をたくし上げ、半纏を羽織り、陣笠と蓑を被ると、太刀と脇差は置いていき、懐に短刀を、巾着に矢筒を忍ばせて、一人、堺をあとにした。

甲賀流の中でも優秀なくのいちであったさゆりは、長年培った脚力と方向感覚で、山道を駆け上がり、けもの道の草木を薙ぎ倒しながら東進した。

あのとき、引き留めておけば。

さゆりの無念さが募っていく。牛太郎が逃げ出したとき、すぐに追いかけて引き戻していれば、主人が変な真似をすることはなかった。

身の程知らずが。どうして、浜松なんかに行ったんやっ。

さゆりは冷たく降りしきる夜雨の中を走り、わずかな時間を仮眠にあてて、また走った。やがて、山々を抜けると、雨上がりの夕日に彩られた伊勢の海が広がった。

「あと、少しや」

さゆりの頬は草葉の先端に切られて傷だらけであった。白い息がとめどなく吐かれていた。足は泥だらけになり、太ももまで泥が跳ねあがっていた。

死なせん。あの人だけは死なせん。あの身の程知らずが死ぬのなんて嫌や。

しかし、さすがにくたびれてしまって、山を下りたところで寝床を探していると、

「おい」

途中、二人の野盗に絡まれた。野盗はへらへらと笑いながら歩み寄ってきて、おそらく強姦を企んでいたが、さゆりは有無も言わせないままに野盗の首に腕を絡めると、そのままへし折って息の根を

止めた。腰を抜かして逃げ出したもう一人には毒矢を吹き、殺害した。

「女はそこまで甘くないわ」

さゆりは野盗の死体の股間をそれぞれ蹴飛ばしてから立ち去ると、寝床を探した。

織田と一向一揆衆の戦火のあおりを受けた集落があって、焼け落ちた家や、人骨が散らばっている道を行くと、倒壊せずに済んでいる廃屋があった。

そこで一泊すると、翌朝、伊勢湾沿いをひた走り、清州、沓掛へと入った。

沓掛は牛太郎の所領である。城下の町人や旅人にそれとなく訊き回ると、二俣城が武田に降伏したことを初めて知った。

ただ、牛太郎が無事だったかどうかは誰も知らない。むしろ、牛太郎が二俣城に詰めていたことすら知っていない。

そして、浜松から逃げてきたという行商人に遭遇した。

「一昨日、武田様が二俣城から出陣したという噂を聞いて、あわてて浜松から逃げてきたところだわ。もう、浜松は終わりだ。三河も、尾張も、武田様が攻め込んでくる」

「二俣城と浜松は近いんか！」

「天竜川を渡って、目と鼻の先だよ。今頃、浜松城は燃えてしまっているかもなあ。てか、あんた、泥だらけの傷だらけじゃんか。どこから来たんだ」

「鬱陶しい！　どけやっ！」

さゆりは行商人を突き飛ばすと、我を忘れて駆け出した。

死地へ

二俣城に時間を割いてしまった武田勢は、失った時を取り戻さんとばかりに、二俣城入城からわずか三日後、全軍を率いて西進を再開した。

この一報が浜松に届いたとき、武田勢を籠城戦で迎え撃つと軍議は一致していた。浜松城郭に各部隊が配置され、佐久間勢も籠城の構えを取っていたが、そこに九之坪勢が佐久間勢の退路を断つように陣取り、水野藤四郎が詰め寄ってきたが、牛太郎は聞く耳を持たず、代わりに玄蕃允が藤四郎を突き飛ばして、九之坪勢の陣から追い出した。

「逃げるなら堂々と逃げるがよかろう！　三河殿に逃げたいと申して逃げればよかろう！」

玄蕃允が見境なく騒ぎ立てるので、藤四郎は立ち去った。それからしばらくして、佐久間右衛門尉自らがやって来たが、やはり玄蕃允が牛太郎の居場所まで通さなかった。

いや、殴り飛ばした。

尻もちをつきながら、佐久間は喚き立てる。

「げ、玄蕃っ！　貴様っ！　誰に何をしたかわかっておるのかっ！　追放だっ！　貴様など一族から追放だ！」

すると、背後から玄蕃允の肩をのけて、槍を担いだ男が現れた。勝蔵だった。酔っ払っていた。恐怖をまぎらわすために、失敬してしまっていたのである。

佐久間の傍らに従っていた者たちが九之坪勢の乱心に太刀を抜いたが、

「よ、よせっ。こ、こやつは森三左の子、勝蔵だぞ！」

佐久間の声に従者たちは戸惑った。森勝蔵が上総介の寵愛を受けていることは周知の事実である。

だが、酩酊している勝蔵は槍を振り回し、従者たちを容赦なく突

き殺していくという狼藉を働いてしまい、最後に、佐久間の喉元に槍先を突きつけて、唸った。

「去ね」

佐久間は尻もちをついたまま、後ずさりした。

「な、なにゆえ、お、お主がいるんじゃ」

「初陣だ！」

勝蔵は高笑いしながら去っていき、玄蕃允も佐久間に唾を吐くと、勝蔵とともに去っていった。

「お前らは本当に……」

牛太郎は溜め息をついた。

「オヤジ！　これはいくさ前の余興よ！」

「大叔父のあの顔ときたらなかったわ。胸がすうっとしたわ」

勝蔵と玄蕃允は互いに笑い合い、すっかり仲が良くなってしまっている。

もう、止められないだろうな。牛太郎は無邪気な若者たちを眺めながら、半ば嘆き、半ば微笑ましく思った。

ところが、昼前、緊急の招集がかかった。

徳川、織田の将校が本丸御殿の広間に一同に会すと、酒井左衛門尉忠次から招集の理由が告げられた。

「物見の報告を察するに、武田勢の進路は浜松城を見過ごして、堀江城に向かっておる」

場はざわめいた。

「そんなはずがない！　浜松を見過ごすなど有り得ん！　酒井殿、それは誤報ではないのか！」

「いや、念のために何人もの物見を走らせたが、やはり、武田勢は堀江城に進路を取っている」

すると、三河守が腰を上げ、しんと静まり返った諸将を見渡していった。

「徳川は、打って出る」

「何を言っておるのじゃ、三河！」

水野藤四郎が甥の三河守に激昂した。
「これは徳栄軒の策じゃっ！　城内からおびき出そうとし、二俣城の二の舞を避けて、野戦にてお主を討ち取ろうとする徳栄軒の策じゃぞ！」
「左様！　ここで我らが打って出ても兵力の差は歴然としておりますぞ！」
と、佐久間右衛門尉が言ったが、三河守は穏やかなこの男には不釣り合いなほどの厳しい目を佐久間に注いだ。
「浜松から逃げおおせようとしている者たちの言葉に貸す耳はござらん」
張り詰めたものが走った。
「手助けは無用。これは徳川と武田のいくさゆえ、上総介殿にはそうお伝えくだされ」
「あっしは行きますよ」
と、牛太郎は三河守を望んだ。
「あっしは織田も徳川も関係なく、家康殿の友人として参らせてもらいますよ」
「何を生意気な口を聞いておるか、牛太郎！」
すると、三河守は佐久間の声を遮るようにして牛太郎に歩み寄ると、膝を曲げ、牛太郎の手を取り、目を潤ませながら言った。
「ありがとう、簗田殿。この恩は、生涯、いや、あの世に行っても忘れませんぞ」
「だったら、家康殿、いずれ、あっしの孫娘と家康殿のお子さんを結婚させてくださいよ」
三河守は笑い上げた。徳川方の諸将も牛太郎の肝の据わりように思わず笑った。
「左様！　そうしましょうぞ！　むしろ、わしから願いたいくらですぞ！　のう、皆の者！」
諸将はうなずいた。その顔はどれも柔らかかった。悲愴と緊迫が嘘だったかのように、場は晴れやかだった。

徳川方は籠城から一転、野戦にて雌雄を決することとなった。

武田勢が進路を取る堀江城までの街道は、途中、祝田の坂という木々に囲まれた細く薄暗い坂道があり、徳川方はそこを下りていく武田勢を背後から襲い、混乱せしめ、あわよくば徳栄軒の首を討ち取ろうという算段だった。

だが、浜松城を出立した一万の軍勢の中にあって、牛太郎は必ず返り討ちに合うと予測していた。

武田信玄は誰よりも上を行っている。絶対におびき出すための罠だ。

しかし、今、もう一度、牛太郎は狙いを定めていた。籠城戦では、徳栄軒の首は討ち取れない。しかし、野戦であれば、好機はある。

「オヤジ殿！」

馬上に揺れながら、玄蕃允が笑っていた。

「軍議でかぶいたそうだな！　善兵衛殿から聞いたぞ！」

「かぶいたんじゃねえ。遺言を残しただけだ」

「なんだって！」

「なんでもねえよ！　べらべら喋ってんじゃねえ！　舌を噛み切るぞ！」

「旦那あ」

栗之介には聞こえていたらしい。口輪を取って走りながらも、馬上の牛太郎に振り返ってきて、泣き出しそうな顔だった。

「鉢巻き。お前はちゃんと岐阜に帰って、あずにゃんや皆に伝えておいてくれよ」

すると、牛太郎の鼻先に横から槍が飛んできて、牛太郎が思わずのけ反ると、勝蔵だった。

「オヤジ、死なせねえよ」

勝蔵は器用に槍を振り回して脇下に戻した。

なかぞらに燦然と輝く太陽の日差しを、兵卒たちの兜が跳ね返し、それらは舞い上がる土煙の中でぎらぎらと跳ね上がっていた。

どこに行くのか。おれはどこに行くのか。

砕け散る光のまばゆさに瞼を細める。光と土煙が混ざり合った見通しの悪い白濁の世界の向こうは、もっと、もっと遠くまで道が続いているようだった。

兵卒の進軍が、延々と続くような錯覚がした。

まるで、死に向かっているようだ。

「伝令っ！　武田勢、三方ヶ原にて着陣っ！」

進軍に逆流してきた騎兵が、そう叫び続けながら九之坪勢の脇から去っていき、やはり、徳栄軒は待ち構えていた。

兄弟よ、君の道を駆けろ（1）

武田徳栄軒はいくさ場の王者であった。

三方ヶ原台地に布陣された武田勢に寸分の隙もなかった。どころか、ここで徳川三河守を根絶し、三河勢の再起を阻むという意欲が陣形に表われていた。

山県赤備えを前方に配し、武田軍の副将格の内藤修理亮隊と武田一門の穴山梅雪隊で赤備えの両脇を固め、この先鋒部隊が三河守本隊に一挙に突入する。

さらに、やや西に離れたところに、不死身の馬場美濃と武田随一の勇将小山田左兵衛尉、土屋右兵衛尉が、若干斜に向いて配置していた。

塊であった。三河守を防御する備えを突破し、破壊し、三河守を討ち取ることだけを狙った陣構えであった。

これを見た三河守は武田の王者に対し、無謀にも、翼を広げた。三河守本隊、その両脇に佐久間右衛門尉と水野藤四郎、この三隊の前に、本多平八郎、酒井左衛門尉を中心とした翼が東西に広がり、武田勢の塊を包みこみ、四方から圧迫しようと夢見た。

水野藤四郎はこの陣形に反対した。しかし、三河守は聞かなかった。前方の平八郎と酒井左衛門尉、そして自分自身が塊の突撃を食い止めれば勝機はあると譲らなかった。

牛太郎率いる九之坪勢は本隊の傍らにいた。三河守の懇願で、九之坪勢は本隊とともにあったが、牛太郎は悩んでいた。

たとえ栗綱でも、武田本陣まで届かないのは火を見るより明らかだ。

会戦は姉川しか経験していない。いや、三河守も同様である。小競り合いの野戦は何度も経験しているが、大軍と大軍が雌雄を決する一大会戦は、この時代のこの国ではほとんどなかった。

これは小競り合いではない。栗綱が天を駆け抜ける名馬であろう

と、一騎で本陣を強襲しようなど夢物語だ。
雌雄を決するのである。ここで両家の浮沈を決定づけるのである。
だが、上杉不識庵との会戦を何度も行ってきた徳栄軒は、三河守のすべてを凌駕している。
二万五千の大軍勢から太鼓の音が一斉に鳴り響き、それは大地を、空をも震わせんばかりだった。
喚声と唸り声が怒涛のように押し迫ってきた。
徳川方も一斉に駆け出した。
玄蕃允が槍先を陽光にきらめかせた。
「尾張九之坪勢、遠江の地にて大輪の花を咲かせてみせるぞ！」
死ぬ気だ。
「我に付いて参れえっ！」
勝蔵を乗せている馬が前脚を掻きあげ、太ももの鶴丸紋が羽ばたいた。
牛太郎は瞳孔を開きっぱなしだった。瞼をいっぱいに押し広げ、目玉が飛び出んほどに血走らせていた。唇を噛みしめ続け、鼻息を荒くし、やがて、ぞわぞわと震えが足の先から頭の頂点へと立ち昇っていった。
口を大きくして吠えた。迷いを、不安を、恐怖を、すべてを打ち消すために吠えた。目玉はあらぬ先を見据え続け、眉間には皺を刻みこみ、背中の火縄銃を抜き取った。股に挟み込むと、脂汗を滴らせながら火打ち石で火縄に点火した。
栗綱の脇腹を蹴飛ばす。
栗綱の目尻が切れ上がった。瞼が押し広げられ、血走った。前脚を掻きあげて、天に向かっていななくと、振り上げた蹄で大地を踏みしめ、首をぐっと前に沈みこませると、栗色の馬体は躍動した。
栗之介をあっという間に置き去りにしていく。
「オヤジ殿っ！」
「オヤジっ！」
九之坪勢を一気に追い抜いていく。

そして、本多平八郎隊に追いついたとき、すでに徳川方の白い旗指し物は次々に薙ぎ倒されていっていた。

牛太郎は左手で手綱越しに栗綱の首をぐいと押した。本多隊目掛けて全速力で突っ込んでいった栗綱は、すんでのところで跳躍した。

無数に伸びた白の旗指し物が栗綱を避けていくかのようでいて、深い竹藪の中を切り裂いていくようでいて、眼下の甲冑の兵卒たちが景色のようでいて、栗綱と自分以外のすべての時間が止まったかのような、優雅なひとときであった。

ふと思う。まるで、英雄じゃんか。

ぐしゃ、と、栗綱の前脚が朱色の兵卒たちを踏み砕いた。牛太郎はさらに栗綱を押した。四方を朱の色に固められながらも、栗綱はさらに駆け出した。弾き飛ばした。飛んできた槍を交わした。武田の騎馬は栗綱の迫力に気狂いして、目を剥きだしながら伸ばした首を左右に大きく振り、馬上の制止も無視して栗綱の突破から逃げた。

牛太郎は左手を手綱から離し、内股で鞍をきつく締め上げ、鐙に縛り付けた両足を踏み締めると、火縄銃を構えた。

「山県あっつ！　覚悟しろおっ！」

一際目立つ朱の兜が見え、驚愕する山県三郎兵衛尉の目に己の目が交錯したとき、牛太郎は引き金を引いた。

「殿おっ！」

轟音が響いた。

悲鳴が上がった。討ち取った――。

しかし、牛太郎は後ろにのけ反ってしまっていた。それでも、鞍を締め上げていたぶんだけ、腰は伸びなかった。すぐに態勢を戻せた。

「簗田あっ！」

銃声で騎馬が混乱する中、山県が栗綱の突撃を交わしつつ、すれ違いざまに槍を振り抜いてきた。槍の刃は牛太郎の鼻先まで伸びてきていた。このとき、牛太郎は自分でも信じられないほど、槍の軌

道が見えていた。
牛太郎はすんでのところで首を傾けて、槍を交わした。宙に残っていた切っ先が頬をかすめ、左耳を横に裂いていったが、痛みはまったく麻痺していた。
栗綱は山県隊を抜けた。山県隊の後方には徳栄軒の子、諏訪四郎勝頼の部隊が控えていたが、距離はあった。
牛太郎は山県隊を振り返った。討ち取った感触はあったのに、山県は槍を振るってきた。誰かが盾になったのか――。
このとき、牛太郎は興奮してしまっていた。当初の目的を忘れ、山県三郎兵衛尉を討ち取ることだけしか頭になかった。
手綱を引き絞ると、栗綱を止めさせ、火打ち石を取り出した。
火縄に点火する。
が、弾を持ってきていないことに今さら気付いた。
「クソッ！」
牛太郎は火打ち石を叩き捨てると、火縄銃を背中の綱に挟みこみ、柴田権六譲りの太刀を抜きながら栗綱を旋回させた。奮い立って首を左右に振り続けている栗綱の脇腹を再度叩く。
三郎兵衛が部隊の指揮を放棄して、馬上で待ち構えている。
弾き飛ばしざまに振り抜こうと、牛太郎は太刀を振りかぶった。
しかし、十人ばかりの鉄砲隊が三郎兵衛を守るようにして一斉に整列し、牛太郎と栗綱に銃口を向けてくる。
「邪魔するな！　どけえっ！」
三郎兵衛が叫んだが、銃弾は放たれた。

栗綱が空を飛んでいたのを、中根平左衛門ははっきりと目にしていた。

「簗田殿はどこに行かれたのだ！」

本多平八郎の言葉は稚拙だったが、襲い来る赤備えの兵卒を必死で薙ぎ倒していきながらだった。

「なぜ、簗田殿が！」

青木新五郎が槍を振るいながら叫ぶ。

平左衛門は二俣城での恥を挽回しようと、自ら志願して正面の本多平八郎隊に加わっていた。

「簗田殿は死に行ったのです！」

松平善兵衛は戦場にあって、泣いていた。

「何を泣いておるんだ！　善兵衛！　しっかりしろおっ！」

平八郎に檄を飛ばされて、善兵衛は雄叫びを上げた。

「拙者とて死を覚悟している」

平左衛門は呟いた。そうして、槍を振り上げた。

「二俣城の借りを返すんじゃあっ！　怯むなあっ！　押せえっ！」

すると、汗と鮮血にまみれて凌いでいるうち、なぜか、赤備えの圧力が衰え始めた。

「好機！」

と、疾風のごとく突っ込んできたのは九之坪勢であった。朱の兵卒たちを弾き飛ばすように薙いでいき、たった五十の部隊が聞こえに名高い赤備えを、そして、騎馬さえも駆逐していく。

その中に鬼神のごとく次々と首を跳ね飛ばしていき、悪魔のように笑い上げている少年がいた。

勝蔵だった。

「どうしたあっ、赤備えよっ！　お前らはこんなもんかあっ！」

が、本多隊と九之坪勢は内藤修理亮隊と穴山梅雪隊の突撃に見舞

われた。一挙に数十人が絶命し、さらに突破を許した。
「止めろおっ！　止めろおっ！」
平八郎が叫び上げる。本多隊を突破されれば、三河守本隊である。青木新五郎が踵を返し、濁流のごとき内藤隊に果敢に突入していく。松平善兵衛があとに続く。しかし、馬上の善兵衛は併走してきた何者かに襟首を掴まれて、鞍から振り落とされた。
「善兵衛！　生きろ！　生きていつか二俣城の借りを返してこいっ！」
平左衛門がかつての二俣城の守兵たちを連れて内藤隊へと飲み込まれていった。
「オヤジ殿はどこなんだあっ！」
玄蕃允が天に向かって吠えた。矢が一直線になって玄蕃允の額へと空を裂いてきた。玄蕃允は目を見開くと、矢を籠手で払い飛ばした。馬の手綱をしごく。槍を斜に構えると、朱の塊に突っ込んでいく。
「勝蔵！　先に行っているぞ！」
玄蕃允の言葉に、勝蔵は笑いを止めた。鮮血に塗りたくられた顔の中で、白目を剥き出して叫んだ。
「やめろおっ！」
そのとき、赤備えの後方で、羽ばたくように中空へと飛び出した栗色の馬体が見え隠れして、玄蕃允は手綱を引き絞った。
「オヤジ殿だ」
「引くぞっ！　引けいっ！」
平八郎が檄を飛ばし、勝蔵が叫ぶ。
「オヤジが後方で錯乱させてるじゃねえかっ！」
「言うことを聞けいっ、小僧っ！　おやかた様が討ち取られたら、このいくさは終わりだぞっ！」
勝蔵は奥歯を噛み締め、きしませた。平八郎の言う通り、山県隊は食い止められていても、内藤隊と穴山隊の勢いが洪水のようにとめどない。このままでは本多隊は包み込まれて終わりだ。

「玄蕃！」
勝蔵の声に玄蕃允はしばらく動けないでいたが、
「引くぞっ！」
九之坪勢に号令し、山県隊に背を向けた。
本多隊と九之坪勢は山県隊が戸惑っているあいだに後進する。内藤隊と穴山隊から背中に矢と刃を向けられ、一人、また一人と朽ちていくが、武田勢の突破に前進してきた三河守本隊が距離を縮めてきていた。
本多隊はもう一度、前方に向き直り、改めて相対する。
両脇の穴山隊と内藤隊が、足踏みしている山県隊の前方を埋めるようにして駆け抜けてくる。
そこに、きらめく光のようにして栗綱が飛び出してきた。武田勢の勢いを削ぐようにして栗綱は兵卒たちを弾き飛ばし、馬上の牛太郎は太刀を振り抜いていた。
左肩が血で真っ赤に染め上がっている。
「オヤジ！」
牛太郎の一騎駆けのすさまじさに勝蔵は震えた。
「織田の人間は、わしは、オヤジ殿の何を見てきたんだ」
玄蕃允も我を忘れて呆然としてしまっている。
「簗田殿に続けえっ！」
平八郎が槍を振り落とした。本多隊と九之坪勢は武田勢に突入していく。
栗綱が後ろ脚で兵卒の顔を破壊し、前脚で押し潰し、武田勢の兵卒たちは槍を弓矢を栗綱に向けるが、栗綱はまるで一寸先を読んでいるかのように集中攻撃をひらひらと交わしていき、交わしながらも跳ね上がって暴れ回る手のつけようのなさであった。
「なんなんだ、この馬はっ！」
兵卒が思わず叫んだ。その兵卒の鼻頭を牛太郎が振り回す太刀が切り裂いた。
牛太郎は何も考えていなかった。山県三郎兵衛尉の前面に現れた

鉄砲隊が射撃してきたとき、人生の終わりを悟った。
だが、走馬灯を見る前に、栗綱が勝手に飛んだ。
そこからの光景は、もう視界に入れているだけで、記憶にもないし、判別もできない。ただただ右手で手綱を握り締めながら、目の前の何かに向けて太刀を振り回しているだけである。
そんな中、死と生とが交互に螺旋している曖昧な時間の中で、牛太郎の意識の奥底は触れてはいけないものに触れた気がしていた。
見てはいけないものを見たような気がした。
「オヤジいっ！」
勝蔵の声に呼び覚まされたように牛太郎は瞳を取り戻した。自分の太刀が空振りした兵卒の首が、突如、勝蔵の槍で胴体と切り離された。
「また、抜け駆けかあっ！」
勝蔵は大口を開けて笑っていた。しかし、矢が肩口に刺さった。勝蔵は顔を歪めながらも舌を打ち、矢を抜き取って放り捨てると、咆哮を上げながら槍を振り下ろした。
玄蕃允が汗を滴らせながら敵兵を槍先で突いていくが、ついに柄が折れてしまった。玄蕃允は太刀を抜いた。
「我は佐久間玄蕃允盛政なりいっ！　武田の者ども覚悟しろおっ！」
馬上に仁王立ちして名乗りを上げた玄蕃允に武田の兵卒たちが群がるように襲いかかる。
「愚か者があっ！」
と、玄蕃允の前に本多平八郎と三河勢がなだれこんだ。平八郎が一閃するも、武田勢の猛攻は留まるところを知らなかった。それでも、三河勢は槍で腕を貫かれてもなお太刀を振り下ろす兵卒もいれば、目玉を矢に射抜かれても雄叫びを上げながら武田勢に飛びつき、脇差で敵兵の首を掻き切る兵卒もいた。
その後に伸びてきた無数の槍で絶命してしまったが。
駄目だ。もう駄目だ。
牛太郎はもはや太刀を振るっていなかった。栗綱は汗を腹からし

たたらせながら必死に馬上の牛太郎を守ろうと暴れていたが、牛太郎はあきらめてしまっていた。
気付けば左腕のところどころが赤い。
血だ。
耳がなんか、変だ。左手で触れてみると、割れてしまっている。
「うわああっ！」
牛太郎は潮が引けていくように蒼白した。
「耳がっ！　耳があっ！　耳がなくなるっ！」

兄弟よ、君の道を駆けろ（3）

よもやの混乱をきたしてしまった山県赤備えであったが、山県三郎兵衛尉は内藤隊と穴山隊が前方で突進している中、あわてふためることなく、部隊の隊列を直させた。

与力の者が身を呈して盾になっていなかったら、簗田左衛門尉に殺されかけており、決着をつけたい気持ちもあったが、山県は私情を捨て、赤備えを迂回させた。

前方の武田勢を回り込み、馬の姿をした化け物と相対してしまって足元がおぼつかなくなっている部隊に山県は檄を飛ばした。

「これが武田の天下への名乗りぞっ！　三河守の首を討ち取りし者は、未来永劫、子々孫々までその名を轟かせるぞっ！」

赤備えの目はぎらついた。

「我に続けえっ！」

山県は先陣を切って徳川本隊に馬を駆け出した。血の色の騎馬隊が大地を響かせた。

佐久間右衛門尉からはそれが見えた。

「佐久間様あっ！」

平手甚左衛門が佐久間に激昂した。佐久間隊はこのいくさでいまだ一歩も動いていない。そして、ここで動かなければ、徳川本隊は赤備えの餌食となってしまう。

「野戦になりえたとしても静観しろというのがおやかた様からの命だ」

「虚言を申すなっ！」

「誰に物を言っているのじゃ！　わしは織田軍の大将ぞ！　おやかた様の代理ぞ！」

「話にならんわっ！」

甚左衛門は瞼を籠手で拭うと、手綱を振るい、荒野に駆け出した。塊となって突進してくる赤備えにあわてふためいていた三河守の

前方に、黄色地に黒の永楽銭が記された旗指し物を背負う者が単騎、現れた。

「三河勢よっ！　我は尾張の名無しの権兵衛だっ！　尾張武者の散り花、しかと目に焼き付けておけっ！」

「な、何をやっているのだ、あやつは！」

三河守は狼狽した。馬上にある以上、名のある武将に違いない。

「止めろっ！　あやつを止めんかっ！」

しかし、平手甚左衛門は山県隊へと駆け出した。織田永楽銭を背中にはためかせながら、冬枯れの荒野を疾走した。

「我は織田の平手甚左衛門なり！　山県三郎兵衛尉おっ！　尋常に勝負いたせえっ！」

先陣を切っていた山県は、単騎突っ込んでくる若武者の心意気にほだされそうになって、自らの手で斬り捨てようとしたが、構えかけた槍を斜に下ろすと、甚左衛門の脇を颯爽と通り過ぎていった。

山県のすぐ後ろを付いてきていた騎馬隊が多数でこれを仕留め、首を掻き取った。

「おやかた様！　もはや退くしかありませぬ！」

旗奉行の成瀬藤蔵という者が三河守を促した。

「し、しかし」

三河守は単身切り込んでいった尾張武者の最後に呆然としてしまっていた。

成瀬は三河守が跨る葦毛の馬に鞭を振るった。口輪を取っていた馬廻の者が葦毛馬を力ずくで一転させる。三河守は手綱を引き絞り、

「何をやっておるかあっ！　わしは最後まで戦うぞ！」

「鳴らせっ！　太鼓を鳴らせっ！　退却だっ！」

成瀬の声に退き太鼓が鳴らされ、さらに成瀬は鞭を二度、三度と振るって、葦毛馬を駆け出させた。

三河守を護衛するように徳川本隊は三河守に続いていく。

「我らはしんがりだっ！」

成瀬は三つ葉葵の下に厭離穢土欣求浄土の墨字が入った纏の大将

旗を背後に押し立てさせ、粉塵を撒き散らしながら押し寄せてくる山県赤備えを迎え撃った。

成瀬隊の大半が騎馬隊に蹴散らされ、一瞬にして土となった。しかし、退き太鼓が討ち響く中、成瀬隊は纏の大将旗の周りを囲って防ぎ続ける。

成瀬は三つ葉葵がはためく下で声を発した。

「武田の者ども！　我が徳川三河守家康ぞ！　この首、この旗、欲しければ思う存分向かって参れっ！」

赤備えの兵卒が一斉に群がってくるが、大将旗の周囲は頑強な断崖のごとく朱の波を押し返した。

「おのれえっ！」

「どうした、これが天下無双の赤備えか！」

そのうち、退いてきた前線の部隊も次から次へと大将旗を通り抜けていく。

「違う！　それは三河ではないっ！　構うなっ！」

山県が気付き、太鼓を打ち鳴らさせるが、成瀬隊は一歩、前に進み出、目の前の武田勢を斬り伏せていき、兵卒の端々にまで一兵たりとも通させないという意志が表われていた。

そのとき、

「馬場美濃守信春！　三河殿の首、貰い受けた！」

徳川方の右翼を粉砕してきた馬場隊が突っ込んできた。

成瀬隊はあっというまに消し飛び、纏の大将旗はもぎ倒された。

成瀬は槍を振るい、一人、斬り伏せた。しかし、十数本の矢が襲いかかり、最後は人形がそうなってしまったかのように串刺しにあった。

成瀬の最後の槍働きの甲斐あってか、三方ヶ原台地に布陣していた徳川全軍は蜘蛛の子を散らすようにばらばらに退却していた。

だが、成瀬隊と向かい合っていた山県三郎兵衛尉は三河守の退路を読んでいた。本陣の徳栄軒に騎兵を走らせて徳川本隊の退路を知らせたあと、自隊は先回りをするために方角を変えた。

徳栄軒は戦局がこのようになった場合のことを想定し、二俣城に入っていた三日間、決戦地の三方ヶ原、浜松周辺を入念に調べ上げていた。

徳栄軒の大目的は三河勢の殲滅ではない。屈強な三河勢の主人であり、精神的支柱である徳川三河守の首であった。

一度、戦場に引きずり出したら、三河守に二度と浜松城の門をくぐらせないよう、諸将に重ねて申しつけていた。

迂回した山県赤備えと同時に、馬場隊、穴山隊、内藤隊は徳川本隊の追撃に走った。ついで、諏訪三郎隊、徳栄軒の本隊も動き出す。

諜報と、篭絡と、策謀とに、王者らしからぬ細やかさで勤しんできた武田の虎であったが、このとき、ついに牙を剥いた。

兄弟よ、君の道を駆けろ（4）

三河守の側近に鳥居四郎左衛門という男がいる。

本多平八郎と同じぐらいの齢であるが、平八郎と違うのは、松平善兵衛の祖父のように、一度、三河守に刃向かった時期があったことである。

三方ヶ原台地での決戦前、武田勢の進軍の物見に走ったのは四郎左衛門であった。

武田勢が浜松城を通り過ぎる進路を取っていたことを、四郎左衛門は物見の役目通り浜松城に持ち帰ったが、その道中、これは徳栄軒の策ではないかと疑った。

武田の隊列が怪しかった。

赤備えの山県三郎兵衛尉、不死身の馬場美濃は、数々のいくさで先鋒を務めた猛将である。しかし、武田勢の隊列はこれらの将を先鋒に置かず、最後尾に置いていた。

二万五千の大軍を容易に陣替えするための隊列なのだ。

四郎左衛門は浜松に戻ると、まだ、諸将が招集される前、三河守に武田勢の進軍が浜松を通り過ぎる方向であると同時に、これは徳栄軒の策だと訴えた。

「後方に赤備えと馬場美濃を置いているゆえ、出てはなりませぬ」

しかし、三河守は妄想してしまった。

「四郎左、仮に徳栄軒の策であっても、武田の進路には祝田の坂があるではないか」

あの細長く薄暗い坂を下りているときであれば、浜松の地を知らない徳栄軒は、

「策士、策に溺れると言うではないか」

と、あなどってしまったのである。

「おやかた様！　敵はあの武田入道ですぞ！　そのようなことなど百も承知で進んでいるのですぞ！　こちらより一枚も二枚も上手で

あることを、なぜおわかりにならないのですか！」
　言い方がまずかったのかもしれない。三河守はむっとしていた。
「なら、どうするのだ。籠城し、指をくわえて武田勢を見送るのか。徳栄軒が悠々と浜松の地を進んでいくのを、我ら三河武者は指をくわえて見ているというのか」
「左様！　いくさは意地ではございませぬ！　勝利あってこそのものではありませぬか！」
「ならば、その勝利が籠城で得られると申すか！」
「今は耐えなければなりませぬ！　上総介殿の援軍を待つ他ありませぬ！」
「そんなもの来るか！　来たとしても、あの佐久間の日和見ジジイのように逃げおおせるのが関の山だ！」
「なりませぬ！　何がどうあれなりませぬ！」
　すると、主従の争いを目にしていた成瀬藤蔵がおもむろに言い放った。
「臆病者が！　貴様はそれでも三河武者のはしくれか、四郎左！」
　あのとき、四郎左衛門を臆病者呼ばわりした成瀬は、まるで己の意地を貫き通すかのように、しんがりを務め、朽ち果てた。
　日が暮れ始めている。夜になれば勝利を引き寄せていたとしてもいくさには不利益である。徳川本隊の退却も必死であったが、三河守を討ち取ろうとする武田勢も必死である。
　武田勢が死の物狂いで追いついてきた。
　四郎左衛門は決心する直前、馬上からこの空を仰いだ。紅に染め抜かれた空は、まるで世界の終焉のように美しかった。
　四郎左衛門は手綱を引くと、反転し、単騎、武田勢へと突っ込んだ。
「武田徳栄軒の首、頂戴したく候！」
　四郎左衛門は押し寄せてくる波へ猛然と斬りかかりながら、馬を駆けさせた。四郎左衛門の唯一の幸運は、穴山隊と内藤隊が隊列を揃えていなかったことだった。三河守の首欲しさに兵卒が我先にと

駆けていたおかげで、兵と兵との間に、細い道があった。
四郎左衛門は槍を振るいながら、そこを駆け抜けた。
さらに、追撃戦を行っていたはずなのに、狂気をはらませて逆送してくる三河武者を目にして、諏訪三郎勝頼の部隊がひるんだ。
四郎左衛門は一瞬、期待した。徳栄軒と刺し違えることができるかもしれないと。
しかし、諏訪三郎隊を抜け切った四郎左衛門に、馬体をぶつけ、跳ね返してくる者があった。
もう一歩のところで立ちはだかったのは、
「三河武者の武勇、あっぱれ。この土屋右衛尉昌次がお相手つかまつろう」
その声は喧騒の中に冷たく響きながらも、真っすぐであった。
四郎左衛門が人馬ともによろめくところへ、土屋右衛尉は槍を振り抜いてくる。四郎左衛門は自らの槍の柄でそれを受け止める。
腕がしびれた。
土屋隊の兵卒がここぞとばかりに駆け寄ってきて狙いを定める。
「手出し無用っ！」
右衛尉昌次が兜の下の目玉を剥きながら一喝すると、手元に引いた槍を「ぬんっ」と、さらに突き出してくる。四郎左衛門は間一髪で交わしたが、兜のはいだてが割れた。
衝撃が脳内を襲う。が、四郎左衛門は噛みしめた奥歯を砕きながら、右衛尉昌次のがら空きの胴目掛けて槍を抜き払った。
もらった。
しかし、右衛尉昌次は柔軟に腰を引いて、槍先をすんでで交わした。
「やるではないか、三河武者」
右衛尉昌次は瞳孔を押し広げながら口端を緩めて笑った。圧倒的な強さが滲み出ていた。四郎左衛門はこの一騎打ちに負けるかもしれないと思った。武田の武将は槍さばきでさえ天下無双か、と。
だが、たとえ、勝ったとしても、兵卒たちの槍の餌食になって終

わりなのである。
四郎左衛門は吠えた。槍先を無数に突き出し、息をもつかせぬ猛攻に出た。
右衛尉昌次の柄が無情にも四郎左衛門の槍を受け止めていく。
「どうした！　こんなものか！」
そして、槍がとうとう折れた。四郎左衛門は柄を放り捨てると、太刀を抜いた。荒い吐息で右衛尉昌次を見つめ、最後の一太刀を狙った。
右衛尉昌次は槍を斜に下ろし、全身をがら空きにしたまま、馬上にて泰然と四郎左衛門を見つめてきていた。
「三河武者。名を申せ」
「鳥居四郎左衛門忠広！」
「見事であった」
太刀を右衛尉昌次に振り下ろしていったとき、喉元に飛んできた槍先で四郎左衛門は二十八年の生涯を終えた。

兄弟よ、君の道を駆けろ（5）

牛太郎は耳が痛くて痛くて仕方なかった。どうしてこんな思いをしなくてはならないのか理解できなかった。

馬上にありながらうつ伏せになって、栗綱のたてがみに顔を埋めて泣いていた。

おれが、何か悪いことしたか？

おれは、何か悪いことしたか？

どうして、おれは戦わなくちゃいけないんだ？

『それを望んだのはお前だろ』

『望んだんじゃない！　そうするしかなかったんだ！』

『望んだからこそ、そこにいたんだろうが。望まなければ、ここにいることもなかった。すべては望んだ結果だ』

『黙れ！　だいたい、お前は誰なんだ！　偉そうな口叩く前に、お前がやれっ、ボケ！』

『フン。愚か者。お前はいつまで経っても牛太郎だな。牛太郎なら牛太郎らしくしていればいいのによ。愚か者』

『何がわかる。お前なんかに何がわかる。のうのうと生きているやつに何がわかるってんだ』

『歌えよ』

『なんだ？』

『歌えよ』

『何を言ってんだ！　死ねっ！』

『歌えよ！　兄弟！　ここは生の歓喜の場だ！　ここは極上の生だ！　目の前は歓喜で満ち溢れている！　生きる喜びはすべての生に平等に与えられているんだ！　見てみろ！　みんなが声を合わせて生きている！　痛みも苦しみも平等に与えられた生だ！　この世は生で成り立っている！　お前が求めていたものが目の前にあるじゃ

ないか！　歌え！　高らかに！　喜べ！　大いに！』

聞けよ、クリツナの鼓動を。

見ろよ、玄蕃允の息遣いを、勝蔵の震える唇を、ねじり鉢巻きの汗を。

嗅げよ、この風の香りを。

感じろ、生のうねりを。

『おい！　太郎！　お前はどうしてそうやってパパを小馬鹿にするんだ！　そうやってなあ、馬鹿にしてばっかいると、お前が欲しがっていた漫画日本の歴史・全二十巻を買ってやんないぞ』

『別にいいですよー。母上に買ってもらいましたから』

『な、なんだと！　ちょっ、あ、あずにゃん！　どういうことだ、一体！』

『どういうことも何も、別にいいではないか。そなたに新しいパソコン買うよりか、よっぽどマシじゃ』

『ぐぬぬ。お、おい！　太郎！　ちょっと寄越せ！』

『やめてください！　ばっちい手で触んないでくださいよ！　デブ！』

『ごちゃごちゃごちゃうるせえ！　寄越せったら寄越せ！』

『何をやっているのじゃ！』

『うるせえうるせえ！　おれは知りたいことがあるんだ！　武田信玄はいったいいつ死ぬんだ、クソッ！』

ふむふむ。なになに？　三方ヶ原の戦いで家康をこてんぱんにのしたけれど、そのあと死んだ。なるほどね。

それにしても、実によく調べているな。信玄なんてそっくりじゃんか。ま、キモブタ家康はイケメンすぎだけど。

むう。でも、キモブタの身代わりになって配下の奴らが死んでいくのか。成瀬藤蔵、鳥居四郎左衛門、夏目二郎左衛門。

夏目のジイサンまで死んじゃうのか。

ん？　なに、これ？

牛太郎は目覚めたように顔を上げた。
そこは陽が暮れて、赤紫色に滲んだ空。やがては星空が漆黒の闇を彩る大きな空。
大地を踏み叩いていく馬の蹄。冷たい風にそよぐほうき草。地平線の向こうに広がる太陽の残り火。
玄蕃允の目が怯えている。勝蔵は唇を噛み締めて悔しさを滲ませている。前を行く本多平八郎の背中は小さかった。
栗之介が栗綱の口輪を取って、必死に走っている。
あとに付いてくるのは徳川旗をはためかす本多隊。
九之坪勢は、いない。
己の体の異変に発狂して我を失ってしまった牛太郎は、三方ヶ原台地からどうやって去ってきたのか覚えていない。
退き太鼓が鳴っていてもなお、敵方と戦い続ける狂人を乗せた凶馬を指笛で呼び戻したのは栗之介であった。
主人と愛馬を一度は見失ったが、栗之介は激闘の中を逃げまどいながらも、牛太郎と栗綱を追い続けた。
指笛に気付いた栗綱の口輪を取り、あらぬ世界に意識を飛ばしてしまっている主人に成り代わって、本多平八郎の背後に栗綱を導いたのだった。
「鉢巻き、お前、生きていたのか」
牛太郎はすっかり我を取り戻していた。
「そう簡単に俺は死なねえよ！　死ぬときは旦那と栗綱と一緒だ！」
「言うじゃんか、鉢巻き」
牛太郎は微笑んだ。
「お前、おれの一番家来にしてやるよ」
そうして、牛太郎は前を走る平八郎を呼んだ。どこに向かっているのか訊ねると、浜松城に退いているのだと、悔しげに、半ば怒り心頭であった。
「家康殿は無事なのか！」

「わからん！　わからんが、ご無事であることを祈らなければなりますまい！」

そのとき、夕闇の果てにたいまつの明かりがちらちらと見え隠れして、平八郎は馬を止めた。

「三河殿かっ？」

玄蕃允が言ったが、違う。たいまつの火は、本多隊の向かう先、浜松城とは反対の方角へと動いていっている。

「三郎兵衛だ」

牛太郎が言った。平八郎が驚いた。

「そんな馬鹿な！　勝手知る我らよりも、甲府の武田勢がここを先回りしているはずが！」

牛太郎は栗綱の腹を叩くと、駆け抜けざまに本多隊のとある兵卒から槍を奪い取った。

「簗田殿おっ！」

栗綱は闇を駆け抜けた。牛太郎は手綱をしごいた。木々をかわし、野原を疾走し、夜空には一番星が瞬いていた。

俺は俺の道を行く。それが全力で生きるということだ。

三河守の進路に先回りすることができた三郎兵衛は、赤備え隊を猛烈に駆けさせていた。

このまま弾き飛ばす。

たいまつの火の下に浮かび上がる朱の鎧兜を視界にし、武田勢二万五千の野心を、その胸中一手に燃え滾らせていた。

三河守の首を取れば、鳥合の衆と化した三河勢を殲滅していくのは容易だ。上総介信長は浅井朝倉に釘付けにされていて、武田との総力戦には持ち込めない。

三河岡崎、尾張清州、そして美濃岐阜へと駆けのぼれば、遥かなる京の都は目と鼻の先だ。

甲斐の山の中から、ついに天下へと羽ばたくときが、目前にある。

薄闇の向こうに三河勢が見えた。

「叩き潰せえっ！」
三郎兵衛は前方へと槍を振り落とした。赤備えの騎馬隊が猛然と飛び出していった。
しかし、闇に閃光が走った。槍が朱の甲冑を破砕し、火花が散ると、飛び出していった騎馬が骨を軋ませて倒れていく。
「山県あっ！」
暗がりではっきりとは見えないが、その声は簗田左衛門尉だ。
そうして、鹿角脇立の本多平八郎と本多隊の残兵、鬼神のごときいくさぶりであった二人の若武者も左衛門尉に加わり、山県隊をもっとも苦しめた部隊の再度の出現に、赤備え　は足踏みした。その間に、三河守の本隊が迂回していってしまう。
「化け物には構うな！　三河だけを目指せ！　構うなっ！　放っておけっ！」
山県隊の一部が化け物たちと応戦している隙に、大勢は三河守を追った。三郎兵衛も馬を返した。
「三河の首だ！　三河の首だけを狙えっ！　雑魚にも化け物にも構わず三河だけを狙えっ！」
このとき、三郎兵衛には一抹の不安がよぎった。もしも、ここで三河守を討ち取らなければ、武田は永遠にこのしつこい三河武者たちと戦わなければならないのではないか。このしつこさに武田は耐えられるだろうか。いや、負けてしまうんではないか。
「負けるなっ！　三河勢に負けるなっ！　我らは武田の赤備えぞっ！」
三郎兵衛は兵卒たちを必死に叱咤した。まるで、勝者ではなかった。
赤備えは三郎兵衛の意気に応えるように全力で走り抜け、騎馬が三河守本隊を急襲した。進行に乱れをきたした三河守本隊を赤備えの足軽たちが取り囲んだ。
ところが、三河守本隊から弓矢が立て続けに発射されてき、それが騎馬の体へとことごとく刺さった。馬の乱れに、隊は乱れた。

なんて、しつこいやつらなんだ。

「怯むなっ！　押せえっ！　馬を捨てろっ！」

が、三郎兵衛が跨る馬の尻にも後方から飛んできた矢が刺さり、悶えた馬が前脚をかきあげてしまって、制御不能となってしまう。

三郎兵衛は馬を叱咤しながら振り返る。

山県隊の一部を撃破して突破してきた本多隊と、三郎兵衛の馬廻を固める足軽兵がやり合う中で、一人、違う世界に立っているかのように時を止めて馬上からこちらに向けて弓を引き絞って来る若武者がいた。

「我の名は松平善兵衛っ！　山県三郎兵衛尉、覚悟っ！」

兄弟よ、君の道を駆けろ（6）

「善兵衛」

と、城代の中根平左衛門は、おのおのの守備位置に配された二俣城の兵卒たちを眺めながら言った。

「この世は穢土と思うか？」

善兵衛はうなずいた。

「なぜじゃ」

「武者は死ぬまで戦い、人々は死ぬまで飢えております。終わりの見えない世ゆえ、穢土であります」

「いかんな、善兵衛」

平左衛門は武骨な頬を緩ませ微笑んだ。

「終わりが見えないのは武者が戦い続けているからであろう。だが、我ら三河武者は極楽浄土を求めて戦い続ける。三河武者と他所の馬の骨との違いじゃ」

「死ぬまで戦うということでしょう？」

「違うな。我らはこの世に浄土を打ち立てるために戦うのじゃ。武者が戦う根本的な理由は、手柄を立てるためでも、領土を拡大するためでもない。この戦乱の穢土を終わらせるために戦うのじゃ」

平左衛門は善兵衛の肩に手を置いた。

「あのおやかた様と共になら、三河の者たちと共になら、わしはそれができるんじゃないかと夢見ているんだがな」

「左様、中根殿の申す通りだ」

青木新五郎が歩み寄って来た。

「天下泰平の世を築くのは織田上総介ではない。おやかた様だ。三河武者の真髄はそれだ。だから、善兵衛、お前はおやかた様に拾われたと思うな。天に拾われたと思え。泰平の世を築き上げる、三河武者として拾われたとな」

中根平左衛門も青木新五郎も、馬場隊に突入していき散っていき、

もはや、この世にはいない。

弓がきりきりと音をたててしなる。

名将、山県三郎兵衛尉が視線の先にいる。

天下に名乗りを上げるのは武田か。

「否っ！　我ら三河勢よっ！」

放った。

貫け。

喧騒の時が止まったかのように、矢だけが空間を伸びてくるかのように、瞬く間もない速さで三郎兵衛に迫ってきた。

武田の夢は始まったばかりである。

三郎兵衛は瞼をくわと押し広げる。邪念はない。体はいくさに染み込んでいる。長い年月をかけて、数々の戦いを経て、山県三郎兵衛尉昌景はここにいる。

矢は、三郎兵衛がかたむけた顔をかすめていった。

善兵衛は弓を捨てる。太刀がたいまつの火にきらめいた。手綱をしごき、赤備えと本多隊が騒然と鍔競り合う中、馬を駆けさせ、三郎兵衛に一直線に襲いかかっていった。

「笑わせるなっ、こわっぱっ！」

三郎兵衛も馬をしごき、善兵衛に向かっていった。

善兵衛が太刀を振りかぶる。三郎兵衛が槍を振り抜く。間合いは五分五分。しかし、三郎兵衛の経験が勝った。槍は善兵衛の首を襲った。

ただ、激戦の疲れがどこかにあった。手元がわずかに狂って、善兵衛の首を払ったのは刃ではなく、柄だった。

善兵衛が馬上から崩れ落ちる。三郎兵衛は槍を持ち直す。地面に落ちた善兵衛目掛けて槍先を突き向けた。

「武田の勢いはもはや天下の大勢を決しておるっ！」

余裕はない。三郎兵衛の目は血走っていた。情けにも、心意気にも、構っていられなかった。

しつこければ、しつこいほど、そのつど、

「叩き潰すまでよっ！」
そのとき、何かが飛んできた。いや、襲いかかってきた。三郎兵衛の体は馬上から宙へと吹き飛んだ。
大きな岩をぶつけられたような衝撃。多分、あばらがやられた。
三郎兵衛は地面に打ちつけられた。すぐさま、馬廻の者たちが駆け寄り、三郎兵衛の前を守った。
それでも、栗色の怪物は身を呈して三郎兵衛の盾になっていく馬廻りを次々と蹴散らしていき、三郎兵衛に押し寄せてくる。
「殿っ！」
与力が馬から下りてきた。抱え上げられた三郎兵衛は鞍に手をかけ、与力の手を借りてなんとか馬上に戻った。
「ここは我らが！　殿は三河の首をっ！」
が、同時に与力は腕を貫かれて、悲鳴を上げた。槍の持ち主は顔中を血に染めて笑い上げる悪童であった。
もう一人の若武者が太刀を振りかぶって突っ込んでくる。
「三郎兵衛尉！　もらったあっ！」
三郎兵衛は体を屈め、なんとか、太刀を交わす。
「しぶてえ野郎だな！　山県！」
と、悪童が槍を突き出そうとしてきたが、与力が割って入った。
しぶといのはどっちだ。三郎兵衛は必死に手綱をしごき、乱戦から脱け出す。恐ろしい。自分が三河守の首だけを狙うように、あいつらは自分の首だけを狙っている。
「山県あっ！」
簗田左衛門尉の声に三郎兵衛は目を見開いた。
三郎兵衛は手綱を引いて、馬を返した。
栗色の怪物に跨った簗田左衛門尉が槍を振りかぶって駆け抜けてくる。
「死ねえっ！」
三郎兵衛は太刀を抜こうとしたが、栗毛の馬は予想以上に早かった。暇がなかったし、痛めた体も思うように動かない。

もうすでに、槍は三郎兵衛の頭上にある。
しかし、槍は兜を叩いただけだった。がつんと叩いただけだった。
そのまま、栗毛の馬は通りすぎていく。
下手な槍さばきであった。
拍子抜けしたと同時に、三郎兵衛は冷静さも取り戻した。太刀を抜くと、いなくなってしまった簗田左衛門尉のことは考えずに、三河守本隊とやり合っている赤備えを鼓舞した。
「ここが天下の分かれ目ぞっ！」

天下の分かれ目か。三郎兵衛の檄は三河守にも届いてきていた。
ならば、そうはたやすく、武田に天下を取らせてはなるまい。
三河守は軍配を掲げた。三河勢の意地を見せんと、軍配を振り下ろそうとしたそのとき、手にしていたものを颯爽と奪い取っていく者があった。
「逃げてくだされ、おやかた様。生きてくだされ、三河のために」
鈴木久三郎だった。
三河守がまだ岡崎城にいたとき、勝手に鷹場の鳥や堀の魚を取って食ってしまった者たちを三河守は牢に押し込めた。
それを聞いた鈴木久三郎は、三河守が上総介から頂戴した酒を、
「おやかた様のご厚意だ」
と、三河勢に振る舞ってしまった。
激怒した三河守が鈴木久三郎を呼びつけて太刀を突きつけたところ、
「魚や鳥が天下を取らすか！　人が天下を取るのではないか！」
久三郎の言葉に衝撃を受けた三河守は人々を牢から解放した。
「やめろ、久三郎！」
もう、三河勢に天下はない。天下がなければ、いさぎよく散り花を咲かせるだけ。
「わしは逃げおおせたくはない！　わしも皆とともに死なせろ！」
「あんたは俺たちのおやかた様だ！　主君をみすみす死なせる奴が

あるか！」

久三郎は軍配を星空へとかかげた。

「三河勢よ！　我らには困難な進路も安易な進路もない！　あるのはただ一つ、栄光という進路だけだ！」

久三郎は軍配を振り下ろす。

「続けえいっ！」

三河勢は奮起した。赤備えを、追いついてきた内藤隊を、穴山隊を、六、七千はある軍勢を、迎え撃った。

三河守は何もできない。何もできないでいる自分がここにいる。何かができると信じて生きてきた人間は、何もできない人間であった。

三河守は慟哭した。

「家康殿っ！」

はらはらと涙を頬に伝わらせる三河守の横に馬を止めたのは、簗田左衛門尉であった。

「簗田殿お……」

左衛門尉は左頬から肩にかけてを血で真っ赤に染めている。

「何を泣いていやがんだ！　いまだ、戦乱の夜明けだぞ！　生き延びて、死んだ奴らに報いてみせろ！」

「し、しかし！」

「おれはあんたの味方だ！」

兄弟よ、君の道を駆けろ（7）

梓のことを思った。

浜松城まで数里。

三河守、それに三河守の近習数人とともに馬で闇をぬっていく。

栗綱の脱出を見かけた玄蕃允と勝蔵も牛太郎を追ってきている。

梓を思った。

後方には馬蹄が轟いている。振り返れば、赤備えがたいまつの火に浮かび上がりながら、猛然と追いすがってくる。

三郎兵衛だけが身代わりを見抜いていたらしい。引き連れて来ている軍勢は五千の山県隊の中でもわずか数百。

牛太郎は梓を思い出す。真っすぐに見つめてくる黒い瞳。木曽川に映る月影のような瑞々しさ。はかない微笑。無邪気な喜びに満ちた微笑。

しっとりと柔らかい黒髪、その香り。

不思議と、あの鬼梓は思い出さない。優しい梓、愛らしい梓しか思い出せない。

自分の幸せは梓がいたからあった。

自分の人生を劇的に変えたのはタイムスリップでもなければ、信長でもない。

梓だ。

「玄蕃！　勝蔵！　家康殿だけでも逃がすからな！」

玄蕃允と勝蔵はうなずいた。

三河守は馬上にうつむき男泣きしている。

あと一歩で追いつかれる。武田の騎馬は実に鍛錬されている。牛太郎だけであったら、栗綱の脚で颯爽と駆け抜けられる。だが、牛太郎は三河守だけは生かさねばならなかった。

三河守が生きていれば、いずれ天下は治まる。

三河守がいれば、梓は泰平の世を迎えることができる。

おれがキモブタを生かし、歴史を作る。
これが、天への信義だ。
「家康殿！　うちの孫娘の約束、忘れるなよ！」
牛太郎は栗綱の手綱を引いて、赤備えに向き直った。
「築田殿！」
三河守は近習たちに周囲をがっちりと固められ、牛太郎の後方から消えていく。
「オヤジ」
「オヤジ殿」
玄蕃允と勝蔵は口許にそれぞれ笑みをたたえている。たった半日で、若者たちの顔は見違えるほど精悍に締まっていた。
「結局、お前らを死なせることになっちまったな。申し訳なかったな」
「本望よ」
「冥土の親父と兄者への手土産に山県の首を持っていってやる」
赤備え数百の相手をするのは、わずか三人。
「じゃあ、勝蔵。山県の首、お前に取らせてやるよ。おれが栗綱でぶつけに行ったところを、お前はその槍で突き殺せ。玄蕃は勝蔵を守れ」
「不服だが、花を持たせてやるわ、山田三郎」
「恩にきるぞ、佐久間玄蕃允殿」
牛太郎は微笑んだ。いい人生だったと思った。
地上を揺らせて迫りくる赤備えに瞳を据える。
「山県は弱っているぞ！」
栗綱の脇腹を蹴り上げようとしたそのとき、牛太郎の背後から前方へと徳川旗を翻す多数の足軽兵たちが雪崩を打って赤備えに突っ込んでいった。
「どういうことだ」
玄蕃允が目を丸める。三河守の鎧兜と似たものを着込んだ男が颯爽と現れた。

男は兜の下の目尻に深い皺を刻みこんで微笑を向けてくる。
「簗田殿、御苦労であった。あとはわしに任せ、城へとお戻りなされ」
夏目二郎左衛門であった。
「駄目だ！」
二郎左衛門を死なせたくない。二郎左衛門は死ぬ。しかし、死なせたくない。だから、自分が歴史をほんの少しだけ変える。
「おれが代わりに行く！　おれが家康殿の身代わりになる！」
「客人を身代わりに立てるわけにはいきませんよ」
すると、何者かが宙を飛んできた。牛太郎の真後ろ、栗綱に跨ってき、牛太郎の背中越しに栗綱の手綱を取り、鼻面を浜松城に向けさせると、栗綱の脇腹を蹴り込んだ。
「何をしやがんだあっ！」
牛太郎は暴れたが、
「あんたの命を取るのは私や」
さゆりだった。牛太郎はおもわず振り返ったが、
「前だけを見い。落ちてもしらんよ」
「嘘だろ」
牛太郎の瞼に涙が溜まった。
誰しも、命を捨てなければならないときがあれば、一方で、誰しも捨ててはならない命を持っている。
三河守が三河勢の主人であるように、牛太郎は簗田家の主人なのだ。
「いつ、浜松に来たんだ」
「ついさっきや。おかげで、もう、くたくたや」
「おれの死にざま、奪いやがって」
「生きざまならよう見といてやったわ。ふふ。惚れ直したで」
牛太郎は嗚咽した。
浜松城の大手門をくぐり抜け、玄蕃允と勝蔵も牛太郎に付いてきていた。城内には栗之介が待ち構えていて、脚を掻きあげて立ち止

まった栗綱に駆け寄ってくると、牛太郎の両足と鐙とを縛り付けている縄を短刀で切りほどく。
牛太郎は力尽きるように転げ落ちた。
さゆりが闇の中に消えていく。
玄蕃允が牛太郎に駆け寄ってき、牛太郎の肩を抱いた。
「オヤジ殿！　大丈夫か！」
退いてきた兵卒たちがぞくぞくと門をくぐり抜けてくる中、勝蔵は唇を噛みしめて突っ立っていた。
栗綱が四股を震わせながら、栗之介が持ってきた桶の中の水に首を突っ込んでいる。槍にかすめ取られたらしき傷が無数にあった。
牛太郎は玄蕃允の腕を振りほどくと、栗綱に歩み寄り、栗綱の馬体を抱きしめて、いっそう泣き声を強くした。
泣いている者がもう一人いる。三河守だった。地面に突っ伏して、
「わしのせいじゃ。わしのせいで、皆が、皆が逝ってしもうたあ」
「三河！　まだいくさは終わっておらぬぞ！」
叱咤しているのは水野藤四郎であった。
「何を言うかあっ！」
勝蔵が藤四郎に駆けつけ、力任せに頬を殴りつけた。
「我先に戦場から逃げ出した者がほざきやがってっ！」
玄蕃允や三河勢が多数で勝蔵を止めにかかる。
「佐久間の日和見はどこにいるんだ！　あーっ！　俺らが、三河勢が必死で戦っているときに、お前らは何をしやがっていた、あーっ！」
「喧嘩をしている場合ではないのだ！　殴りたければあとでゆっくりと殴らせてやるわ！」
藤四郎の言葉に勝蔵の火がさらに燃え上ったが、藤四郎は眉間に皺を寄せながら、地面に突っ伏している三河守を見やると、視線を持ち上げた。
「門を閉めるなっ！　味方を迎え入れろ！　味方を見殺しにするな！　武田勢が打ち入ってきたら、この水野藤四郎が迎え撃つ！　か

がり火を焚け！　最後の戦いだ！」
「何が最後の戦いだ！」
おもむろに突っ込んできたのは牛太郎であった。藤四郎の胸倉をつかみ上げると、
「おれたちにとっては全部が最後だったんだよ！　初めから終わりまで、全部最後だったんだよ！　それをなんだ！　いまさらなんなんだ！」
牛太郎は玄蕃允や三河勢に引き剥がされていくが、なおのこと暴れた。
「おれたちはお前なんかのために戦ったんじゃねえぞ！」
「わかっておる。わかっておる！」
「もう、ええ加減にせいっ！」
泣きじゃくりながら、三河守が立ち上がっていた。
「糞食らえだわい。わしなんか、糞食らえだわい！　全部、わしが情けなかったせいなのだ！」
そうして、また、三河守は地面に突っ伏した。三河守の悲痛な泣き声に皆が押し黙るしかなかった。
「叔父御。叔父御。もうわしは何も考えられん。あとは叔父御がやってくれい」

駆け抜けたあと

まるで、黄泉の国から這い出てきたかごとく、三河勢の小隊が次から次へと現れては、三河守への襲撃を阻んでいく事態に、山県三郎兵衛は半ばおののいていた。

忠誠心だけでは片づけられない。

彼らを突き動かしているものはなんだ。

「どうした、赤備えよ！　ここを抜ければ、天下が見えるぞ！」

三河守の身代わりとなっている者の笑い声が夜空に響き上がった。

「殺せっ！」

三郎兵衛は必死だった。怒号は悲鳴のようであった。

「殺せっ！　すべて蹴散らせっ！」

殺さなければならない。根絶やしにしなければならない。武田の人間として、天下に覇を唱える集団の一員として、三河勢は生かしてはならない。もし、一人でも生かしてしまったら、武田は終わりそうな気がする。

三郎兵衛は怒声を張り続け、兵卒たちの背中を押した。

あと一歩。あと一歩なのだ。

いくら、天下無双の騎馬隊と称賛されているとはいえ、手に入れているものは何の役にも立たない名誉だけでしかない。

どれだけ称賛されても、ここで道を切り開かなければ、自分たちは甲斐の盆地の百姓侍として時代の流れのうちに埋もれてしまうのだ。

だから、この生ける死体たちを完全に葬らなくてはならない。

「押せっ！」

兵卒たちは槍を一斉に突き出した。

「駆けろっ！」

騎馬が三河勢を薙ぎ倒していく。

身代わりを討ち取った。

三郎兵衛は休む間もなく浜松城へ突っ切る。
が、城郭を前にして、三郎兵衛は迷った。浜松城はかがり火で赤々と闇に浮かび上がり、あろうことか大手門が開け放たれている。
「殿っ！　ここは一気に攻め込みましょう！」
与力が訴えてきたが、三郎兵衛はうなずかない。
策ではないか。
隠れた策士、簗田左衛門尉の罠ではないか。
三河勢はとにかくしつこい。最後の一人になろうとも降伏の姿勢を見せてこない。
「深追いは禁物だ」
三郎兵衛は馬を返した。
野戦と攻城戦は種別がまるで違うし、武田勢は三方ケ原台地での戦いには用意周到であったが、そこに浜松城攻略のすべはない。
攻城には攻城のやり方があり、野戦には野戦のやり方がある。三郎兵衛率いる赤備えは騎馬隊を主力とした野戦部隊である。
そもそも、入ってくださいとばかりに大手門が開け放たれているのがおかしい。
「しかし、殿っ！　ここが好機では！」
「好機は過ぎた。三河を討ち取る好機はいくらでもあったが、討ち取れなかった。我らのいくさは終わったのだ。あとはおやかた様のいくさだ」

牛太郎は宿泊寺の一室で休んでいた。赤備えが退いていくのを見届けたあと、牛太郎の耳の具合を見た玄蕃允と勝蔵に、とにかく休んでおくよう押し込められた。
栗之介に手拭いで出血を押さえてもらうが、急にいくさ場の緊張から解放されたおかげで、めまいを起こし始めた。
「旦那。とりあえず、横になっていろよ」
栗之介に素直に従って、板床の上のござに寝転がる。

目の前がうっすらとしていく。視界が白く濁り、頭の中が曖昧になっていく。

「さゆりんは？　さゆりんは？」

牛太郎は口だけを動かしてもごもごと言った。

「どっかに行っちまったよ」

「さゆりんは？　どこに行ったんだ？」

「だから、わかんねえって」

牛太郎は濁った記憶に手を伸ばし、さゆりが呟いた一言をなんとか手繰り寄せる。惚れ直したとかなんとか言っていた。

惚れ直した、ということは、まさか、本当に自分に惚れていたということなのだろうか。

「さゆりんは？」

「だから、わかんねえって言ってんだろ」

だったら、探してこい！　と、普段なら怒鳴り散らしている牛太郎だが、気力がなかった。

今すぐにでもさゆりに会いたい。牛太郎は心細い。梓にかける思いとはまた別次元の思いが募っていく。

梓がいれば命を賭して戦える。さゆりがいれば生きていける。

でも、朦朧としていた。

「御愁傷さまやな」

牛太郎は瞼を開いて起き上がった。頬かむりをした半纏姿のさゆりが部屋に入ってきた。

「さゆりん。さゆりん」

「なんや、気持ち悪い」

と、さゆりは牛太郎が伸ばしてきた手を打ち払い、牛太郎をござに押さえつけた。

「栗之介、この人を押さえといてや。しっかりとな」

栗之介が言われた通りに牛太郎の肩を押さえつけ、両腕に足を乗せる。

「な、何をするんだ」

牛太郎が弱々しい声で言ったが、さゆりは何も答えずに針を見せてきた。
「おいっ！」
やろうとされていることがなんとなくわかって、牛太郎は気力をよみがえらせた。
「麻酔とかしろよっ！　おいっ！」
「なんや、マスイって」
「やめろっ！　やめろっ！」
割られた耳がさゆりの手に取られて、牛太郎は今日一番の暴れようであった。しかし、栗之介にがっしりと押さえられてしまっている。
「今、縫っておかないとどうにもならんって。あきらめるんや」
「いいっ。耳が三つでもいいっ。だから、勘弁してくれっ！　だいたい、それ、ただの縫い針じゃねえのかよっ！　おいっ！」
さゆりは有無も言わさずぐさりと針を刺してきた。激痛が走って、牛太郎は悲鳴を上げながら飛び跳ねた。無論、栗之介に押さえられている。
「旦那。無茶するからこんな目に合うんだ」
牛太郎は痛みに悲鳴を上げ、涙を流した。まして、耳元でそれをやられているから、肉を貫く音が恐ろしい。牛太郎は赤子が泣き叫ぶように絶叫する他ない。
「やかましいんや。男ならこらえんか」
さゆりの声は淡々としている。彼女のその躊躇のなさが牛太郎の声を余計に大きくさせる。
「やかましいっ！　栗之介、この人の口になんか詰めるんやっ。やかましくてしゃあないわっ」
「詰めておけって言ったってなあ」
牛太郎が叫ぶ中、栗之介とさゆりは辺りを見回した。そうして、さゆりはにやりと笑った。
「ええもんがあるやんか」

さゆりは桐箱の蓋を開けると、花散らしの小袖を手にした。
「や、やめろっ！　それだけはやめてくれえっ！」
「奥方の匂いでも嗅いで落ち着きいや」
さゆりは笑みを浮かべたまま瞳を輝かせると、小袖を牛太郎の喉奥にまで押し込めた。

さゆりの縫合によって牛太郎が失神している間、大敗北を喫した三河勢は一矢報いようと、浜松城北方にある犀ヶ崖で野営中であった武田勢を夜襲したらしい。

どこまでもしつこい三河勢に武田勢は狼狽したようだが、兵力の絶対数がまったく違う。勝敗がどうのというより、三河勢の意地を見せただけの奇襲であった。

翌朝、牛太郎は浜松城に登った。夜通し城郭に詰めていた玄蕃允、勝蔵と合流し、本丸御殿の三河守のもとを訪ねる。

「武田に目立った動きはありませぬ」

と、酒井左衛門尉が言った。彼もまた三方ヶ原台地での戦いによって顔には疲労が浮かんでいた。

「簗田殿」

酒井左衛門尉は牛太郎の名を呼んだあと、しばらく目をじっと伏せ、その後、深々と頭を下げてきた。

「簗田殿がおらなかったら、おやかた様は今こうしておられなかったかもしれませんでした。いや、三河勢はなかったかもしれませんでした。感謝しても感謝しきれぬ思いでございます」

九之坪勢は全滅した。玄蕃允と勝蔵がかろうじて生き残っただけで、尾張からやって来た五十人は三方ヶ原台地に骨を埋めた。

徳川方の死者は二千人を越えている。負傷者ともなるとその倍以上である。一方で、佐久間右衛門尉の軍勢に死傷者はいない。

同じ織田の援軍である簗田九之坪勢がいかに三河守の生存に貢献したことか。

「簗田殿、わしは――」

黙りこくっていた三河守が口を開いた。目つきも口調も、昨日までの三河守のものではなかった。黒目がちのぎょろりとした瞳には貪欲な光がかすかに見え隠れしており、その声は地を這うように低

い。

「わしは甘かった。わしの甘さのせいで三河の家族、九之坪の友人たちを多く死なせてしまった」

三河守は傍らに置いてあった巻物を手にし、紐を解いた。牛太郎に、その醜い自画像を見せてきた。

「これこそが徳川三河守家康。この醜い男こそ三河勢のあるじ。なんと情けないことだろう。しかし、わしはこの三河守の失態を忘れませぬ」

さらに、三河守はこのいくさでの敗北を生涯忘れぬよう、また、自分自身の情けなさをあえて流布させて己の戒めとなるよう、偽りの記録を残したと言った。

三方ヶ原台地から命からがら逃げ出してきた三河守は、浜松城に到着したとき、その恐ろしさのあまり脱糞した、と。

「わしが情けないままに死んでいけば、脱糞の三河と後世に語り継がれるでしょうが、しかし、わしはその汚名がかすむほどの大将になってみせまする」

殺意さえ感じる鋭さを眼底にひそませる三河守を前にして、牛太郎は思った。徳川家康という男はこのとき誕生したのだと。

とはいえ、徳栄軒の西進にどう対処すればいいのか。牛太郎にはわかっているが、三河守や酒井右衛門尉は決死の覚悟なのである。

なので、牛太郎は言った。

「家康殿、このまま武田が西上を進めたとしても、浜松城を包囲したとしても、じっと耐えてください。一歩も動かず、ただ、時間が過ぎるのだけをひたすら待っていてください」

それはどういう根拠なのかと酒井左衛門尉に問われる。

牛太郎は登城前、さゆりから今の情勢を聞いてきていた。

さゆりは天下の情報集積地である堺で包囲網打破の工作に動いており、浜松に来る途中には清州や沓掛で新しい情報も仕入れてきている。

今、武田が西上作戦を決行していられるのは、織田軍が北近江の

戦線に捉われており、それは武田徳栄軒の大戦略でもあったのだが、あの上総介信長がいつまでも小谷城を攻めあぐねるはずがない。

それを読んでいる徳栄軒は、北近江の浅井とともに、越前の朝倉とも連携を取り、朝倉を北近江に当たらせようとしているが、越前朝倉はこの期におよんで腰をなかなか上げなかった。

日に日に劣勢となっていく小谷城の浅井備前守は、越前朝倉に何度も援軍要請を通達し、最終的には織田勢を挟み打ちにできるという虚言を用いて朝倉を引っ張り出してきたが、北近江にやって来てそれが事実でないと知った朝倉は、小谷城と虎御前山が見渡せる小谷山頂上に布陣したまま一向に動く気配を見せず、挙げ句に越前に引き返してしまった。

おそらく、その報告は武田徳栄軒のもとに来ているか、もしくは近々に届くだろう。

「風林火山の武田勢でも、どんなに早くたって、このまま攻め上っても美濃に辿り着けるのは一か月以上、いや、二か月はかかります」

さらに岐阜城は、織田勢も苦しめられた難攻不落の稲葉山にある。浅井朝倉が北近江で引きつけ、もしくは織田勢が岐阜に戻って来る瞬間に東西から挟み打ちにできなければ、武田勢は織田五万の大軍勢と血みどろの戦いに持ち込まれてしまう。

上洛を狙う徳栄軒にとって、無駄ないくさでしかない。

「だから、朝倉が北近江にいなければ武田勢も深くまで進めないんです」

進軍を止めるに違いない、と、さゆりは読んでいた。牛太郎はそれをそのまま三河守に伝えただけだが、三河守は、

「築田殿は大局を見ていらっしゃるのか。わしも見習わなくてはならん。わしも大局を見なければ」

と、ぶつくさと呟いたが感心もしていた。

それに、信玄は死ぬ。だから、もう、むやみにいくさをする必要はない。

もちろん、それは言わなかった。

兵卒のすべてを失った牛太郎や玄蕃允、勝蔵にとって、浜松に残りたい気持ちはあったが、残っても意味はなかった。佐久間右衛門尉と仲違いをしているのもあり、三人は岐阜に戻り、もしも、これ以上の危機にあったらすぐさま自分に要請をするよう三河守に告げた。

そのときこそ、織田の大援軍を連れてくるから。

「絶対に」

牛太郎の言葉に三河守は瞳を潤ませ、ひとつうなずいた。

「また、兵隊たちを殺しちゃったか」

浜松城を下りる途中、牛太郎は呟いた。金ヶ崎のときほどの痛みはなかった。玄蕃允と勝蔵を生き残らせることができたからかもしれない。だが、従えていた兵の人生を終わらせてしまった罪悪に麻痺しかけている自分に危うさも感じた。

勝ってはいない。負けたのだ。いや、命のやり取りに勝敗などあるのだろうか。

「また、忘れられないいくさになっちゃったな」

青い空の下、もやになるまで広がる遠州灘を眺めながら、牛太郎は、

「いくさにも負けて、勝負にも負けて、全部負けた」

と、痛感した。

「わしは負けてないぞ」

玄蕃允が瞳をぎらつかせながら言う。

「死んでない。だから、まだ明日はある。明日勝てば、帳消しだ」

「十ぐらい勝たなければ帳消しにはならんだろう」

と、勝蔵が言った。

「勝負だ、玄蕃。どっちが早く十戦勝つか、勝負しようじゃないか」

「拙者も加わりましょう」

三人は振り返った。松平善兵衛だった。

「ただ、拙者は二十戦勝ちまする。甚左衛門殿の分もいれて」

そういえば、と、牛太郎は善兵衛に問い質した。平手甚左衛門は

どうしたのだと。甚左衛門の分とはなんなのだと。
三人は善兵衛の口から、甚左衛門の最後を初めて聞いた。
遠州灘の波間に浮かんでいた白い大群が、一斉に空へと飛び出していく。澄んだ青空と日差しを受ける海の間、その羽ばたき、その鳴き声が聞こえてきそうなほどの鳥の大群は、百合かもめだった。
三方ヶ原台地に散った奴らは、遠州灘の白い鳥になったのか。
「そのほうがいい」
牛太郎は呟いた。若い三人には牛太郎の言葉が、甚左衛門など死んでしまったほうがよかったというふうに聞こえたのだろう、それは一体どういう意味なのだと語気を荒げて詰め寄ってきた。
牛太郎は関せずに、百合かもめの行方をじっと見つめる。
「甚左衛門も夏目のじいさんも、みんな、鳥になった。それでいい」
黙りこくった若者たちを尻目に、牛太郎は浜松城を下りていった。
唇を噛みしめながら。

目的のための道具（前書き）

摂津相間図

＞ｉ２３８４８―２５３３＜

目的のための道具

牛太郎は本来、上総介信長に摂津工作を命じられている。

いや、命じられたというよりは、かつての池田城攻めで、池田勢に勝手に降伏勧告を申し渡してしまい、その責任で摂津池田勢の監視役を務めさせられた上での成り行きで摂津工作の担当者になっている。

簗田左衛門尉が摂津工作にあたっている事実は、ほとんどの人間が知っていない。織田家中でも主君の上総介か、仲の良い木下藤吉郎、明智十兵衛、義兄の柴田権六郎ぐらいが、牛太郎の働きを知っているだけで、他の人間は、拠点にしている堺で牛太郎が遊んでいるものだと誤解している。

息子の左衛門太郎でさえ、一時、激怒したのだ。

無論、織田家の簗田左衛門尉なる者が堺に常駐していたことを、摂津の諸勢力は把握しているだろう。ただ、凡将の噂が功を奏しているのかもしれない。牛太郎が仕掛けている調略工作に対して、無防備であった。

牛太郎は表にまったく出ていない。池田勢の荒木信濃守村重に謀反をすすめている程度である。

それに、家出をした。一年近くも摂津を放っている。

この間、さゆりが調略工作を仕切った。元々からその節があったので、牛太郎がいなくとも支障はまったくない。

逆に進展した。

摂津高槻城の和田惟増を殺害した。

高槻城は元は足利直臣、和田惟政が城主を務めていたが、一年前の池田勢との戦闘で死んだ。

今はその子、和田惟長が家督を継いで、幕府から城主を任されているが、二十歳そこそこで若かった。池田勢と松永弾正忠の圧力によって空中分解している高槻家臣団を彼がまとめることは不可能で、

このため、叔父の惟増が彼を補佐していた。

さゆりを指揮官としている簗田一派は、竹中半兵衛の推薦で紹介された小寺官兵衛の助言により、混乱する摂津を、ひとまずは、牛太郎に近しい池田勢、反織田を貫く三好三人衆、全国一向一揆衆を束ねる本願寺の三勢力にまとめあげようと目論んでいる。

そのうえで、池田勢の重臣、荒木信濃守村重に謀反を起こさせて織田方に引き入れ、北摂津に楔を打つ狙いであった。

達成に重要なのは、池田勢の勢力拡大である。昨年夏、池田勢は織田方の茨木城を攻め落とし、勢いそのままに高槻へと攻め込んだ。

簗田一派の思惑通りに事が運んだが、松永弾正忠という邪魔者が入った。弾正忠は摂津に侵入する好機と見て、大和から出兵し、高槻城、池田勢を圧迫した。

明智十兵衛と牛太郎の調停で、両者、兵を引き上げたが、高槻は疲弊し、その後も松永弾正忠に牙を剥けられてしまう格好となった。

高槻城を弾正忠の掌中にさせてしまえば、摂津を三分させる計略が瓦解してしまう簗田一派は、高槻城に工作を仕掛ける。

甲賀流あがりの簗田家与力、石川新七郎は、浪人に装って高槻城に潜入仕官する。

空中分解している高槻家臣団を瀬戸際で支えている和田惟増を亡き者にさせ、重臣の高山飛騨守に謀反を起こさせることが目的だった。

高山飛騨守は熱心なキリシタンである。高槻攻めのときに南蛮寺に罪をかぶせて町を放火した松永弾正忠になびくことはない。

飛騨守に高槻城を乗っ取らせ、織田方、もしくは池田勢に付けさせる。

そのためには和田惟増は殺さなくてはならなかった。

新七郎は惟増に近づき、彼に城主惟長の無能ぶりが世間に広まっている。行いを正すよう苦言を呈されるべきだと告げた。

逆に、惟長には女を用意した。京から連れてきた町娘で、愛らしい顔つきなのだが頭が弱かった。新七郎はこの女にキリシタンの教

えを説いて信心させた。
女はキリシタンの教えを純朴に守り続け、そのうち、信仰によって洗い流された美しい心が瞳に溢れ出るようになった。
高槻は南蛮人が熱心に布教活動をしているため、惟長もさほどではなかったがキリシタンの教えを尊ぶ傾向があり、彼はこの清らかな女に執心したのだった。
叔父の惟増は女の存在に意識を埋没させてしまっている惟長を注意した。しかし、惟長は戦国武将の叔父の言葉よりも、慈愛と清貧に満ちた女の存在のほうが遥かに高貴であった。
そんなある夜、新七郎は盗み出してきた惟増の衣服を着て女を斬った。女の死体と衣服を城内のそれぞれの場に捨て、翌朝、惟長が叔父を呼び出した。
何も知らない惟増はのこのこと惟長の前に出、怒り狂っている惟長に有無も言わせてもらえないまま斬り殺された。
その叔父とそのあるじとの醜いいさかいに、高槻家臣団は辟易し、今や、その心には、自分だけはどう生き残ろうか、それしかない。
「あとは高山飛騨守だけや」
さゆりから和田惟増殺害のあらましを聞いた牛太郎は絶句した。
沓掛にいる。玄蕃允と勝蔵に城内の一室を与え、牛太郎は沓掛城で武田勢の動きを見つつ、休息を取ろうと考えていた。
この城の主人よろしく、広間の上座でさゆりの話を聞いていたものの、部下が勝手に取った鬼畜めいた所業に言葉をなくした。
「飛騨守を引き入れる点で有利なのは、キリシタンてことや。上総介はキリシタンを保護にしておる。荒木信濃守のほうが首尾よく行けば、上総介の軍門に降りた信濃守に飛騨守は従うやろ」
さゆりは百姓娘の姿のままである。玄蕃允と勝蔵の目を盗みつつ、牛太郎のあとに付いてき、若者二人の姿が部屋に消えると、牛太郎の前に現れた。
ただ、その格好からはまったく不釣り合いな冷えた眼差しをしている。

「あんたには早う堺に戻ってきてもらって、信濃守をいち早くそそのかしてもらわんとあかん」
「よくもそうべらべらとなんでもなかったことのように喋れるな」
声を低く唸らせて、さゆりを睨みつけた。
「無実の女の子を殺してまでやることだったのか。そこまでする必要があったのか。てかよ、え？　それはお前の指示なのか、それとも新七が勝手にやったことなのか」
「何を言うているんや」
さゆりは冷えた眼差しをいっそう凍らせて睨み返してきた。
「私らにとって、人は目的のための道具や。そんな甘いことを言うんなら、岐阜で奥方と一緒に巣ごもりしといてや」
「悪党め」
「阿呆言うなや。あんたも変わらんやろ。あんただって比叡山の焼き討ちに加わっていたんやろ。自分だけ棚に上げんなや」
「それとこれとは違うだろ、全然よ！」
「鬱陶しい。堺を飛び出しておいて偉そうなこと言うなや。あんたに言われて手を汚している新七の気持ちも考えてみいや！　誰が一番苦しいんや！　新七には妹の彩がいるんやからな！　そこのところわかってから物を言いや！　この阿呆！」
そう罵ると、さゆりは腰を上げ、戸をぴしゃりと閉めて出ていった。

裸一貫

意外な報せが沓掛の牛太郎のもとへ届いてきた。

北近江の虎御前山に大規模な砦を築いた上総介が、朝倉勢の撤退と同時に木下藤吉郎隊だけを残して、軍勢のほとんどを岐阜に戻したらしい。

武田勢が三河に侵攻すれば、尾張に大軍を引き連れてくる手筈は整えているという左衛門太郎からの文だった。

速い。

徳栄軒の大きさばかりに捉われていたが、織田の総帥はあの上総介信長である。牛太郎は小々反省した。

信長なのだ。

牛太郎は正月を沓掛城で迎えることにし、玄蕃允と勝蔵は先に岐阜へと戻らせた。

「佐久間のくそったれぶりを信長様に教えてこい」

さゆりは勝手にいなくなった。

武田の動向を見張るはずが、さゆりがいないとろくに情報が取れない。年が明けて元亀四年正月、沓掛城の奉公人や女中たちの年賀の挨拶が終わったあと、牛太郎は膳に箸を叩き投げた。

「なんにもわかんねえじゃねえかっ！」

広間には誰もいない。

「クソッ！」

牛太郎が沓掛城に長く腰を据えることは、美濃攻め以来まったくなかった。奉公人や女中たちも牛太郎の相手をする勝手がわからないので、ただただ事務的に牛太郎の世話をするだけである。

牛太郎は庭先に出ると大声で栗之介を呼んだ。ややもすると、億劫そうに栗之介が顔を出してくる。

「岐阜に行くぞっ！　今すぐにだ！」

「なんだよ。ここでゆっくりするんじゃなかったのかよ」

「しねえっ！」

浜松での活躍にのぼせていた牛太郎は、大きな勘違いをしていた。結局のところ、一人では何もできないのだ。動向を探ることすらできない。

牛太郎は栗綱に跨り、栗之介と二人で清州に入ると、翌日には岐阜に帰還した。

岐阜には軍勢が集結しており、物々しい気配が漂っていた。武田勢が三方ヶ原で徳川勢を破ったという話が城下に広まっているのだろう、町人庶民にいたるまで、どこかしら緊張感があった。

稲葉山の屋敷の玄関に上がると、奥から赤子の泣き声が聞こえてきた。牛太郎は思わず頬を緩めてしまう。そういえば、三河守に、子供に駒を嫁がせる約束を無理強いさせていた。

いずれは将軍家の正室。にたにたと笑いながら草履の紐を解いていく。

ただ、出迎えがない。突然の帰宅とはいえ、気付くものだろう。栗之介が栗綱を馬屋に連れていっているのだから、わかるはずだ。

「おーい！　帰ったぞー！」

反応はない。返ってくるのは駒の泣き声と女どもがはしゃいでいる声だけである。

「おーいっ！　おーいっ！」

反応はまったくない。牛太郎は舌打ちした。さゆりばかりか、梓やあいり、お貞までにもこの仕打ちである。三方ヶ原で死ぬ思いをしてきたというのに。牛太郎は苛立ちながら屋敷に上がり、黄色い声が跳ね上がっている居間の戸を力任せに引いた。

「何をやってんだっ！　ご主人様のお帰りだぞっ！」

出し抜けに怒鳴り散らしたが、すぐに牛太郎はたじろいだ。居間には色とりどりの着物に彩られた井戸端会議の真っさい中であった。

牛太郎をぽかんと眺めるのは梓やあいり、女中の二人だけではなく、前田家の女房のまつやその娘の幸、まつの膝には一歳ばかりの女児、さらに木下藤吉郎の女房の寧々までいた。

しんとしていた中、牛太郎の大声に驚いた駒が泣き出した。
「あ、すいません」
牛太郎は戸を閉めた。そそくさと自室へ立ち去ろうとするが、
「旦那様っ！」
と、お貞が追いかけてきた。あわてて牛太郎の足元に平伏する。
「申し訳ございませんっ」
「あ、いや、いいんだ、別に。ちょっと、汗をかいたから風呂でも召しあがろうかな。うん。あと、太郎はどこにいるのかな」
「若君は森様のお宅にお出かけになられています」
「あ、そう。じゃ、風呂が焚けるまで部屋にいるよ」
と、逃げようとしたが、梓が居間から出てきた。
「なんじゃ、帰っておったのか！」
梓に捕まってしまい、牛太郎は居間へと引き戻される。上座に座らされ、各家の女どもから年始の挨拶と浜松でのねぎらいの言葉をかけられていった。
牛太郎は丸い顔をしかめながら、頭を掻いた。苦手だった。女たちがこうして一同に集まっている晴れやかさも苦手だし、まつや寧々は牛太郎のろくでもなかった清州時代からの付き合いである。
女たちは正月初めの挨拶にと簗田家に集まり、梓が茶を振る舞ったり、香木を焚いたり、歌を詠んだりしていたらしい。そろそろ宴もたけなわとなったところで牛太郎が現れて、彼女たちは上げかけていた腰を再び据えた。
「玄蕃から聞いたぞ。亭主殿はずいぶんと無茶をしたそうではないか。耳まで失ったそうではないか」
まあ！　と、女たちは一様に声を上げた。人の目の前とあって、梓は毅然と振る舞っているが、その瞳は泳いでいた。
「いや、失っていないッスよ。ちょっとだけ、刺されただけッス。大したことないです」
「でも、激戦だったのでしょう？　牛殿の九之坪勢は全滅してしまったんでしょう？」

女児を抱えるまつが、細い眉をすぼめながら、か細い声で牛太郎を気遣った。その雪のような美しさについついうっとりとしてしまって、梓に厳しい眼差しを注がれた。

牛太郎はあわてて背筋を伸ばす。

「い、いやっ。そ、そりゃあ、まあ、相手は武田信玄でしたから、まあ、そこんところはやっぱり」

「牛さん、すごいねえ」

と、まつの娘の幸が母親にそっくりな瓜実顔の頬を緩ませる。

「武田入道様と戦ってきたんだもんねえ。すごい。格好いい」

「いやあ。それほどでもないよお。負けちゃったしさあ」

梓の眼差しがいっそう凄味を増して、牛太郎は咳払いした。

「ま、まあな、将たる者、兵隊たちあってだからな。そんな兵隊たちを全部失ってしまったから、そんなにあっしは大したことない」

「でも、あんまり無理はしないでください。藤吉郎殿は多くの家来の方々や兵卒たちに守られていますけれども、牛殿は裸一貫でいくさ場に出ているようなものなのですから」

寧々の口をついた裸一貫の言葉が妙に染み入った。牛太郎と藤吉郎との間柄からして、この中では寧々がもっとも牛太郎を古くから知っている者だ。

裸一貫か。確かに裸一貫から始めた。そして、今でも裸一貫なのかもしれない。家族も出来て、配下もあって、財力もひそかに持っている。

一人では何もできない。何もできないが、よく振り返ってみれば、戦場にしろ、調略にしろ、常に裸一貫同然で身を呈してきたような気もする。

そのときの結果はどうであれ、たとえ成り行き上のことであったとしても、自らが動いて切り込んでいったからこそ、家族もできて、配下もできて、一財をひそかに成したのかもしれない。

最初はそれこそ裸一貫であった。ただ、切り込むたび、突き進むたび、自分に付いてくる者、自分を守ってくれる者が増えていった。

一人では何もできない。だが、行動することはできる。暗愚であっても。

あいりの腕の中で泣きやんだ駒が、潤んだ瞳でぼけえと牛太郎を見つめてきている。牛太郎は指先で駒の柔らかい頬を撫でた。

「今では牛殿もおじい様ですものねえ」

寧々が言うと、まつが微笑みながらうなずいた。

「自分の子を育てているときも思いますが、久方ぶりにお会いした牛殿がそうしている姿を見ると、時の流れの早さがいっそう染み入ります」

「あっしもそう思いますよ」

清州に住んでいたときの家はなくなっていた。しかし、過去は過去として胸の中に残り続け、それを糧とした未来もある。

「コマ」

牛太郎は呼びかけた。おじいちゃんが将軍のお嫁さんにしてやるからな。

ふり散る桜花

「浜松での件、口外はするなとのことです」
左衛門太郎が言った。
「おやかた様からのお達しです」
牛太郎は箸を止める。久方ぶりの家族団欒の夕飯であったが、左衛門太郎の言葉により、沈黙がおりた。
黙々と白米を口に運んでいく左衛門太郎に理由を訊ねると、厳しい顔つきで一言、
「わかりませぬ」
「なぜじゃ。亭主殿は命を賭して戦ったというではないか。かような武勇を口外するなとは、なぜじゃ」
おそらく、と、左衛門太郎は答える。考えられる理由は二つある。一つは初陣を果たしていなかった勝蔵を無断で連れていったからであろう。
勝蔵は森家の当主であり、その辺りの足軽兵卒ではない。重臣家の当主の初陣とは、その家の将来を占う重大な催しごとでもあり、一族はこの日のために育ててきた若き武者の晴れ姿を見送る。家臣はこれから自分たちが守るべき若武者のいくさ姿に思いを馳せる。
そんな勝蔵が勝手に一人で戦場に出ていってしまったなど、森家の人間に示しがつかない。
牛太郎にも矛先が向けられる。まして、兵卒たちが全滅し、命からがら帰ってきたのだ。当主の森三左衛門、嫡男であった博兵衛を立て続けに戦場で失った森家からすると、牛太郎の行為は許されない。
もちろん、勝蔵が三方ヶ原で暴れ回ったという話は多くの人間がとっくに耳にしている。日中、左衛門太郎が森家に詫びを入れに行ったさい、与力たちにさんざん叱られたらしい。ただ、いつまでもくだを巻く与力たちに激昂してしまった勝蔵が太刀を振り回してし

まい、母親が出てくるまで収拾がつかなくなったそうだが。

とにかく、上総介の真意は、建前だけでも牛太郎が浜松に連れて行ったのは山田三郎にしろということなのではないかと左衛門太郎は言う。

二つ目は、佐久間右衛門尉の失態である。左衛門太郎は玄蕃允から佐久間の日和見行動を聞いた。

玄蕃允と勝蔵は岐阜に帰ってくるなり、まっすぐに岐阜城へと登城し、上総介に佐久間右衛門尉の愚行を訴え、また、そのせいで平手甚左衛門が命を落としたとも。

甚左衛門は、かつて自分の博役であった平手政秀の忘れ形見である。上総介は激怒した。しかし、すぐに居直り、勝蔵と玄蕃允に佐久間の失態は口にするなときつく命じてきたらしい。

佐久間右衛門尉は織田家臣団の筆頭格である。その男が援軍に出て、何もせずにただ戦場から逃亡したなど、このうえない織田の恥である。

「佐久間の処分は俺がする。お前らは黙っていろ。浜松で起こったことは何も口にするな。いいな」

馬鹿馬鹿しい。牛太郎はふてくされながら味噌汁をすする。戒厳令をしいたところで、家中の女どもは知っているじゃないか。噂はすでに広まっているじゃないか。

上総介にしてはずいぶんとせせこましいことをする。牛太郎はほんの少し上総介に失望した。そういう体質こそが佐久間右衛門尉のような愚か者を産み出したのではないかと思い、おもしろくない。

「父上、明日、おやかた様にご報告のため登城してくださいよ」

牛太郎は左衛門太郎の言葉を無視し、自室に戻ると不貞寝した。自分は命懸けで戦ってきたのに、岐阜に戻ってきたらこのざまだ。

いや、そういう考えはやめよう。三河勢はそれこそ命懸けで戦っては散っていき、自分はといえば九之坪勢五十人を死に追いやってしまったのだから。

残酷すぎる。牛太郎は寝返りを打つと、体を丸めて縮こませた。

何かが重くのしかかってくるような気がする。
「亭主殿」
と、梓が入ってきた。牛太郎は背中を向けたままじっとしていた。小袖の上に羽織った濃紺の打掛の裾を翻しながら、梓は牛太郎の枕元に腰を下ろした。
「近頃は、ここに帰ってくるたび、夜になると悩ましげな顔をするようになったな」
梓は牛太郎の頭を撫でた。
「でも、わらわはいつも亭主殿が生きて帰ってきてくれるから、果報者じゃ。亭主殿はわらわのために帰ってきてくれると、近頃は思うようになった」
打掛から香りが漂ってくる。牛太郎は梓のほうに向きを返すと、梓の太ももに顔を埋めて鼻の穴を膨らませた。
甘いにおいがあらゆる鬱屈を忘れさせてくれる。
そのまま寝てしまった。
翌日、登城した。
「うつけが」
開口一番、上総介は睨み下ろしながら牛太郎をそう叱りつけた。
「勝蔵を連れていったどころか、本気でタヌキ入道の首を取りにいったそうじゃねえか。お前は己の身の程をわかっているのか。あ？」
「申し訳ありません」
と、牛太郎は頭を下げるが、声も顔も子供のようにふてくされている。
「うつけが」
上総介はもう一度言った。語気からして、言葉ほどは怒ってはいなかった。ただ、しばらくの間、平伏する牛太郎を黙って睨みつけ、張り詰めた空気を作りだしていた。
「タヌキ入道は強かったか」
父親が訊ねてくるような温和な物言いに牛太郎は思わず顔を上げてしまい、上総介に扇子で頭をはたかれる。

牛太郎は頭をおさえながらうなずいた。
「そ、それは、もう、強すぎました。あっしなんて、毛ほども相手にしてもらえなかったッス」
「織田五万がタヌキ入道とやり合った場合、どうなる」
「五分五分ッス」
フン、と、上総介は鼻で笑った。岐阜城下の気配と比べ、上総介には余裕が感じられた。
「して、入道はいつ死ぬ」
「もうすぐです。春までには生きていません」
沈黙がおりた。遠くのうぐいすの鳴き声がかすかに聞こえてくる。
上総介は小姓を呼んだ。持ってこいとだけ伝えると、小姓は姿を消し、何事かと思って牛太郎はまた顔を上げてしまう。
「相変わらず鈍牛のツラだ」
上総介は肘掛に体を持たせ、扇子で顔を仰ぎながらにたにたと笑っていた。上機嫌である。牛太郎は、へえ、と、わけのわからない相槌を打って、顔を伏せた。
小姓が居間に入ってきて、牛太郎の前に何やら置いた。
「おもてを上げろ」
言われた通りにすると、牛太郎の目の前には、鞍があった。黒漆の居木に光沢貝が詳細に埋め込まれていて、それはふり散る桜花を表されていた。
漆黒の夜に舞い散る銀色の花びら、その鞍は鮮やかで、華やかであり、牛太郎でさえ溜め息が出た。
「くれてやる」
「えっ？」
「お前の馬にな」
と、上総介は体を前のめりにさせて目を押し広げ、半ばおどけていた。このような様子を目の当たりにするなど滅多にない。いや、かつてなかった。
「で、でも、こんなすごいもの」

「言っているだろうが。お前にくれてやるんじゃない。お前の馬にくれてやるんだ。お前の馬は、いらねえとでも言ったか？」
「いや」
牛太郎は目を輝かせながら鞍を手にする。上総介からこうしたものを頂戴したことは今までになかった。
それどころか、他の家臣でさえほとんどない。上総介は天下の名物の収集家であり、その上総介から贅沢品を貰い受けることはこのうえない名誉であった。
にやけ笑いが止まらない。
「摂津に行け」
悦に浸るのも束の間、上総介は激しさを内に秘める言葉短い口調に戻っていた。
「公方に弾劾状を送る。おとなしくするのはここまでだ。摂津も乱れるだろう。お前は堺に向かう道中、京の明智十兵衛を訪ね、あいつに公方を見限ることを決意させてこい」

明智十兵衛光秀

明智十兵衛光秀は、古き主君、斎藤道三を思い出していた。

記憶に自分なりの解釈や補正がかかってしまっているのだろうか、一介の油商人から戦国の雄へと頭角を現し、その仁義なき智謀を「美濃のまむし」と揶揄された道三であったが、十兵衛の記憶の中ではいつも父のような微笑みを浮かべている。

道三が実子義龍に討たれたとき、十兵衛は二十八であった。

あれから十年以上が経っている。

道三方に付いた十兵衛の一族は離散した。生き残ってしまった十兵衛は、明日への道を見失った。

太刀を捨て、百姓でもしようか。そう思った時期もあった。

しかし、十兵衛の体に流れる血は妥協を許さなかった。古来よりもののふの血を脈々と受け継いできた土岐源氏の誇りが十兵衛にはあった。

世も世なら、俺は一国一城のあるじであっただろう。

そして、世も世、戦国の時代なのである。

道三が言っているような気がした。

「何もないところから始めたのが俺だ。十兵衛は何もないところから始められんのか」

十兵衛は始めた。

諸国を流浪し、自分が浮上するきっかけを探した。そうして、足利将軍家の落ち武者を見つけた。

勝ち馬には乗れない。ならば、俺が勝ち馬にさせる。

すべてを失った十兵衛にはそれしか方法がない。

十兵衛は足利義昭の擁立を画策した。越前朝倉、南近江六角、果ては武田や上杉と、ありとあらゆる方法を模索した。

やがて、綺羅星大名、織田上総介に辿り着いた。

道三の娘婿である。

当時、上総介は美濃を征服したばかりであり、京に一番近い者であることは十兵衛も承知していた。

しかし、上総介は嫌だった。さまざまな理由を彼に勝手に押し付けて、上総介には見込みがないと十兵衛は決めつけていた。

他のどんな有力者たちよりも若いし、もっとも勢いがあったし、尾張と美濃を押さえている時点でも、地政学上、武田や上杉よりも頭一つ抜けている。

しかし、嫌だった。

理由はわからない。でも、なんとなくわかる。道三の娘婿だからだ。美濃のまむしが唯一認めた男だったからだ。

葛藤した。自分の立身出世のための野心と、自分のどうにもできない感情とがせめぎ合った。理屈で言えば上総介だった。感情で言えば上総介じゃなかった。

男とは、理屈で生きるものだろうか、それとも、感情で生きるものなのだろうか。

十兵衛の迷いを断ち切ったのは、かつて明智一族の配下であった者の孫娘、山内千代の言葉であった。

目の前の貧者ではなく、あなたが手を伸ばしたのは、空に流れる雲。ただ、その雲を掴んだとしても、目の前の貧者を相手にしなかったものが、どうして天下を定める空となれるでしょう。

男とはそういうものらしい。

男とは雄大な空でなければならないらしい。

もちろん、織田の人間であった千代の説得術であったことは十兵衛もわかっている。

ただ、自分が目指している天下がちっぽけな頭上の空であったことを思い知らされた。

十兵衛は義昭と上総介の仲介に働いた。

それからというもの、上総介の躍進はそのまま十兵衛の躍進ともなった。

今では所領は近江坂本五万石、役職は京都所司代。すべてを失っ

た流浪人であったはずの自分が、まるで、上総介でなかったら今がなかったかのような躍進ぶりだ。

これが目指していたものだったろうか。

上総介には感謝しきれない事実がある。ところが、明智十兵衛光秀という自分は織田上総介信長という人間の中にすっかり埋没しているのではないか。

上総介は主君ではない。かといって、義昭が主君でもない。主君の斎藤道三はとっくに死んでおり、今は明智十兵衛という人間をやっているだけだ。

「やあ、十兵衛殿」

築田左衛門尉が部屋に入ってきて、十兵衛は思い詰めていた顔つきをほがらかに崩した。

「お久しぶりです」

従者から左衛門尉が訪れてきていることを聞いて、十兵衛は用件をすぐに察した。上総介に言われてきたのだろう。義昭を見限れと。

「公方を見限ってください」

あまりにも単刀直入で十兵衛は笑ってしまった。

「まことに言っておられるのですか。拙者は足利直臣ですぞ」

「そんなこと、まだ言っているんですか、十兵衛殿は。年貢の納めどきでしょ」

妙に自信たっぷりに言うから、築田左衛門尉という男は不思議であった。

「しかし、織田上総介という人は拙者が公方様を裏切るほどの御仁でしょうか。この裏切りは拙者にはとてつもなく重いのです」

「いやあ、十兵衛殿」

左衛門尉は茶化してくるように笑っていた。

「そこまで考えている時点で、決まっているようなもんじゃないスか」

十兵衛も思わず笑ってしまう。確かにそうだ。自分が自分らしく身を立てていくにはどうすればよいか。しかし、自分の本音は勝ち

馬になびきたいらしい。いくら、自分を綺麗に見立てようとしても、情けないかな、心のどこかで機を見、趨勢に流れようとしているのだ。

上総介は嫌だ。が、義昭に付いても、たかが知れている。包囲網が組まれている今の情勢は義昭に有利であるが、しかし、義昭は明智十兵衛光秀個人の名を天下に押し出させてくれる器の持ち主ではない。

理屈で考えれば上総介だ。

「一つ、お訊ねしてもよろしいですか」

十兵衛が言うと、左衛門尉はうなずいた。

「簗田殿は上総介殿がまこと天下に武を布くとお考えなのか」

「さあ。どうですかね」

と、左衛門尉はまるで何かを隠しているかのようなあからさまで首を傾げた。彼はいつでもそうなのだ。肝心なところで妙に冷めている。

「ならば、天下はどうなるとお考えか」

「どうなるかっていうより、どうするかが問題じゃないんスかね。よくわかんないですけど」

十兵衛は笑みを浮かべながら首を振った。どう考えても自分は左衛門尉にすべてにおいて勝っているはずなのに、なぜか、肝心なところでかなわないような気がした。

承兌

十兵衛の屋敷をあとにした牛太郎は、例のように相国寺で一泊することにした。

相国寺は幕府の三代目将軍義満が創立者である。京最大の禅寺であり、かつては文学の中心地として栄えた。

水墨画で高名な雪舟等楊も相国寺の出身である。

だが、幕府を二分し、花の都を灰塵とせしめた応仁の乱以降、相国寺も戦火に巻き込まれ、今では仏敵織田上総介に所領を没収されるまでに至るほど没落してしまっている。

相国寺の学僧、西笑承兌とは十兵衛の紹介で知り合った。

承兌は若い僧のわりに、幅広い見識を持っていた。上総介に逆らう僧兵のような一辺倒の考えでもなく、かといって寺にこもって学問に埋没してしまっているような僧でもなかった。

現実的な若者である。

摂津混乱のどさくさで一財をひそかに成している牛太郎は、承兌と知り合ったのち、相国寺に五十貫の寄付をした。

上総介の家臣でありながら、牛太郎は古き体制の最たる象徴である寺社に対して寛容であった。というのも、岐阜の願福寺とつるんで一儲けしているからだった。

寺社に恩を売っておけば何かと便利であると、上総介がもっとも嫌っている寺社体制の利権にあずかろうという気が少なからずあった。

金も有り余っている。

とはいえ、無名の願福寺と、京都五山の第二位に列する相国寺ではわけが違う。相国寺からすれば、簗田牛太郎などという田舎侍などこちらから願い下げであり、さすがの牛太郎もその辺りは承知している。

要は、相国寺を頻繁に訪ねるにあたって、欲はなかった。ただ単

に寄付をした恩に着せて宿代わりにしているのと、承兌にそれとなく人生の指南をしてもらうためであった。

「どうでしたか、この狭い寺から飛び出した世は」

いつものように与えられた一室で寝転んでくつろぐ牛太郎に、承兌はさっそく訊ねてきた。

「愉快であったでしょう」

「愉快なもんか」

二か月近く相国寺に隠遁していた牛太郎は、勝手知る一室で耳糞をほじり出し、それを吹き捨てる始末である。

「さんざんだったぜ。小谷城攻めでは馬から落っこちるし、浜松では耳を切られるしでよ」

浜松という地名が出ると、承兌は瞼を押し広げてきた。浜松といえば、近頃、武田徳栄軒が攻め込んだというではないか、と。

「その武田とやり合ったんだよ、おれは」

上総介の戒厳令を無視して、牛太郎は承兌に浜松や二俣城での一カ月あまりの出来事を話した。徳栄軒にあしらわれてしまったこと、山県三郎兵衛尉との因縁がさらに深まったこと、そして、三河勢、九之坪勢、多くの味方が逝ってしまったこと。

「壮絶だったのですね」

「たったそれだけで済ませられるんだったらどんだけ幸せか」

牛太郎はうつろな目を板床に落とした。

生き残らせてもらえればもらえるほど、生の重さが次々とのしかかってくる。この期に及んで、ただ単に生きることなどできようか。死んだ者たちのために生きなければ、死んだ者たちのぶんまで生きなければ。なぜなら、生きながらえさせてもらったのだから。

ただ、自分にはそれだけの価値があったのか。

公ではないものの、牛太郎の働きは上総介に評価された。極上の褒美を頂戴した。牛太郎はそのときにやけた。が、一瞬の喜びにしかすぎなかった。

それどころか、喜んでいいのかという罪悪感さえ生まれてきてし

まう。
「無常だ」
と、牛太郎はらしからぬ言葉を発した。すると、承兌はなんのことない様相で、
「ええ」
と、うなずく。
「しかし」
承兌は言った。
「人の死を悲しみ、己の生に苦しむ今現在の簗田殿は、悟りを開くに至っておりませぬ。悟りの扉にさえ手をかけておりませぬ。自分の人生を悟ったことのように言うにはまだ早すぎますよ」
「なんだと？」
腹立たしかった。寺にこもっている承兌などにそのようなことを言われたくない。自分のほうがよほど世の中を知っている。承兌は阿鼻叫喚の比叡山や、地獄絵図の三方ヶ原を見ていない。そのくせ、偉そうなことをのたまっているのだ。
「お前に何がわかる」
「何もわかりません」
と、承兌は微笑した。
「何もわからないのが人です。わかる人は聖人です」
「馬鹿馬鹿しい。くだらなすぎて反吐が出る」
「わからないことをわかったつもりでいるから苦しいのです。わからないことはわからないのです。生も死も、我々にはわからないことなのです」
「もういいっ！　帰れっ！」
「ゆっくりされていかれるのもほどほどにですよ」
と、去っていく承兌は悪態も残し忘れなかった。
承兌は仏に帰依している身でありながらささやかな野心を持っていることを牛太郎は知っている。上総介の圧力が厳しいこの時世で、没落した相国寺の再興を常日頃から考えている。

それなのに、余裕を持っている。牛太郎は承兌のそのゆとりが羨ましい。あくせくすることもないが、時代の荒波に流されることもなく、己の道をしっかりと見ている承兌のような人間であったならと思う。

ただ、おそらく承兌に言わせると、それは己の道ではなく、むしろ道ですらない。

肉体は塊であり、心は形成されていくものであり、それを追求することが承兌の学問なのである。牛太郎が言う承兌の道とは、承兌からすれば学問の一つでしかない。

そういった追及の行為はたいがい心の奥底から炎が噴き出してしまうもので、承兌の若さであったらなおさらなのだが、牛太郎が承兌に悪態をつかれようとも屈服してしまうのは、川に流れる水のような穏やかさで承兌は追及しているからであった。

まず、かなわない。竹中半兵衛が天下の参謀であれば、西笑承兌は天下の学僧であると牛太郎は思う。

承兌に否定されてしまって、怒鳴り散らした牛太郎ではあったが、相国寺に流れる悠久な静寂に身を任せているうち、自分を見つめ直そうとした。

自分の中に存在している自分を見つめ、この世の中に存在している自分を見つめ、そして、この無常なる自然界の中の一員である自分を見つめた。

何もわからない。わかりそうでわからない。だから、狂おしくなってくる。

やがて、この気分で堺に行くのは危険かもしれないと思い始め、牛太郎は相国寺にもう何日か滞在しようかと考えた。

無為にすごしていた家出期間とは違って、学ぼうかと考えた。

だが、牛太郎にそのような猶予はなかった。翌日、承兌に、

「またそうしてゆっくりとするつもりですか」

と、釘を刺された。

「織田様が公方様に村井民部殿を遣わし異議を申し立てたそうで、

京の町は大騒ぎですよ。意見書の写しを織田様はあちこちにばらまいているそうなのですから」

敵地感

弾劾状の内訳はこうだった。

一、宮中への参内を怠らないように言ったのに、近年怠っているのはどういうことか。

一、諸国へ馬などを献上させるのは考え直せ。必要ならば信長が添え状を書き取り計らうと約束したはずだ。約束を違え内密で行うとはどういうことか。

一、幕府に忠節を尽くす者に相応の恩賞を与えず、新参者でそれほどの身分ではない者を厚遇するのはおかしい。

一、将軍と信長の不和が噂される中、将軍家の重宝をよそへ移されている状況が京内外に知れ渡り信長の苦労も無駄になっている。

一、賀茂神社の所領の一部を没収し岩成友通（三好三人衆）に与え、内密で優遇処置をとったのはどういうことだ。

一、信長に友好的なものには、女房衆以下にまで不当な扱いをするとはどういうことだ。

一、何事もなく奉公し何の落ち度もない者達が扶持の加給がないため信長に泣きついてきたので将軍に取り次いだにもかかわらず、何も聞き入れられずに信長の面子は丸つぶれだ。

一、若狭の安賀庄の行跡について粟屋が訴訟を申し立てている件について信長ももっともだと思い進言しているのにいまだに何もされ

ていない。

一、喧嘩で死んだ小泉が遊女屋に預けていた刀や脇差など身の回りのものを没収したのはなんなのか。将軍の欲得と世間に思われる。

一、元亀の年号は不吉なので改元した方がよいと一般的な意見で申しあげているのに改元のわずかな費用も献上せず引き伸ばしている。

一、烏丸光康の懲戒の件は、息子・光宜へのお怒りは仕方がないが、光康は赦免するよう申し上げたのに、密かに光康から金銭を受け取っている。

一、諸国から献上されている金銀がある。内密で蓄えているのは何のためか。

一、明智光秀が京の町で徴収した地子銭を預けていたのに、その土地は延暦寺領として、地子銭を差し押さえたのは不当である。

一、昨年夏、幕府に蓄えていた米を金銀に代えたそうだが、将軍が商売をするなど聞いたことがない。

一、寝所に呼んだ若衆を良し悪しに関わらず厚遇するのは世間から批判されても仕方がない。

一、幕府に使える武将達が金銀を蓄える事に専念している。将軍がそのような行動をするから部下がさては京都を出奔するのかと推察しているためと思う。

一、将軍が何事につけても欲深なので、世間では農民までが将軍を悪御所と呼んでいる。

承兌に見せてもらった意見書の写しを目にして、これは果たし状同然だと牛太郎は思った。義昭がこれを受け入れるはずがない。しかも、ここに書かれてある義昭の愚行が真実なのかどうかは牛太郎にはわからないが、天下の人々にこれを晒されてしまった義昭こそ面目がない。

「摂津が動きますよ」

承兌は言う。

包囲網が完成した今の状況にあって、屈辱を与えられた義昭は天下に号令して挙兵するであろう。上総介も弾劾状を突きつけた以上、迎え撃つに違いない。

そのとき、摂津も動く。

「荒木信濃守殿をお味方に引き入れるにはこの機会しかありません。高槻城も同様です。摂津をひっくり返すには今です。今を逃し、公方様にお味方させてしまえば、摂津は永久に反織田様です」

今の時点で織田と反織田、どちらに付けば有利かは明白である。ただ、注視すべきなのは、足利義昭、あるいは武田徳栄軒、三好三人衆、本願寺一向衆などの勢力が反織田の主導権を握ろうとしている点であると承兌は言った。

既存勢力に味方してしまえば、同じことの繰り返しである。

「そこを突けばよろしいのでは」

牛太郎は納得した。ただ、一つ、疑問に感じた。

「お前は織田に天下を取ってほしいのか」

「でなければ、何も変わりません。戦国の世が終わらないことには何も始まりません」

承兌のわからないところだ。上総介がいる限り、相国寺の再興は難しい。それでも、織田に天下を取ってもらって戦乱の世を終わらせてほしいと言うのだから、一体、承兌にとって何がもっとも優先されているのか不明である。

とにかく、牛太郎は京を立って、急いで堺に向かった。
堺の屋敷の居間には半纏姿のさゆりが両手を両の袖の中に入れながらどかりと腰を据えていて、
「どこで道草を食っていたんや」
と、薄い眉間にしわを寄せていた。
「ゆっくりしている暇なんてないで。さっさと池田に行って、信濃守を口説いてきいや」
「なんだと?」
牛太郎が腰を下ろすと、彩が煎茶を運んできて、牛太郎の前に出した。さゆりを睨みつけながら、それをずずと啜る。おかしなことに、さゆりは床の間を背中にして、牛太郎の上座である。
「御主人様がようやく帰ってきたっていうのに、なんなんだ、その口のきき方は」
さゆりは三白眼のきつい目で牛太郎の睨みをあしらいながら、団子鼻を突き上げて笑う。
「ようやく帰ってきただなんてよく言うわ。勝手に出ていったのはあんたやないか。つべこべ言う暇があるんなら、池田に早う行きい」
牛太郎は床をどんと叩いた。
「おかしいだろ!」
障子戸の前に座る彩が垂れ瞼に支えられた大きな瞳を牛太郎にしらりと向け続けてくる。半纏の袖に手を突っ込ませたまま、さゆりは鼻を突き上げて、牛太郎を冷えた眼差しで睨め落としてくる。
「なんで、お前がおれに偉そうに指図してやがるんだ!」
さゆりは口を閉ざしたままでいる。彩は白々しく牛太郎を見つめてくるままである。
なんなんだ、この敵地感は。さゆりも彩もまるで石ころのように冷たい。わざわざ浜松までやって来て窮地を救ってくれたはずなのに、掌を返したかのようだ。
障子戸ががらりと開いて栗之介が無言で入ってきた。手にはなぜか黒漆の鞍を抱えていて、さゆりの背後の床の間にそれを置いた。

「おいっ。鉢巻き。おいっ！」
「なんだよ」
「なんだよじゃねえよっ。なんで、それを勝手に持ってきてんだよ！　岐阜のあずにゃんに預けたはずだぞ！」
「奥方から許しをもらったぞ」
「なんや、それ」
と、さゆりが興味を持ってしまって、栗之介は栗綱が上総介に貰ったものだと言った。さゆりはへえと表情を崩し、鞍をまじまじと眺めた。
「見事やないか。上総介も栗綱にくれてやるなんて粋な男やなあ」
「おいっ！」
牛太郎は腰を上げると、さゆりの手から鞍を奪い取った。
「気安く触んな！　これは簗田家の家宝だぞ！　お前らの汚い手でべたべた触んじゃねえっ」
「何を言ってんだ！」
突然、栗之介に突き飛ばされ、牛太郎は鞍を奪い取られてしまう。
「これは栗綱が頂戴した鞍だぞ！　言っておくけど旦那のもんじゃねえからな！　旦那こそ汚ねえ手で触んじゃねえっ」
呆気に取られる牛太郎を尻目に、栗之介は鞍を床の間に戻し、腰に引っかけていた手拭いで鞍を拭いていく。
「そやそや。あんたの家宝は奥方の小袖やろうが。そういえば、彩、ちゃんと買ってきた錠前付きの箱に着物をしまっているんやろうな。助平泥棒が帰ってきたから気をつけなあかんで」
にやにやと笑うさゆりに彩はこくりとうなずいた。
「旦那様が戻られると聞いてから、着物はしっかりと保管しています」
そうして、彩の冷ややかな視線が牛太郎に突き刺さった。
牛太郎は恐怖に震えた。女たちが牛太郎に向けてくる軽蔑は想像以上に根深い。
「シ、シロジロは、まだ、か、帰ってこないのか」

「早う行きい、池田に」
「はい」
牛太郎はそろりと腰を上げると、
「ね、ねじり鉢巻きくん。池田に行こうか」
すごすごと居間をあとにした。

荒木信濃守村重

摂津という地は京に近いこともあって、いにしえの時代から豪族たちの覇権争いが絶えなかった。

この地に長年君臨した者はいない。しいて上げれば幕府の管領職を担ってきた細川家だが、それはこの地の豪族たちを黙らせていただけの影響力に過ぎず、たとえば、守護としての大きな資質で甲斐の国を一つにまとめ上げた武田家や、力を伸ばした土着豪族がそのまま家族的な結束を持った徳川家の三河などとは違い、誰かに仕えるということを一切知らない人間たちの集合体が摂津国であった。

昨日の友は今日の敵を地でいく猛者どもである。

築田一派が摂津工作の根本としている北摂津の池田は、池田氏がはるか平安の時代から土着勢力とし根を下ろしている。源氏、楠木、足利、細川、三好と、時代の潮流に乗った覇者たちの配下となって、氏族を守り続けてきた。

しかし、池田氏は転機を迎えている。豪族が乱立していた北摂津で、かつてない勢力拡大に邁進していた。親織田方であった筑後守勝正を追いだして当主となった池田九右衛門知正は隣接する仇敵茨木氏を滅ぼすと、当時は織田方であった足利直臣和田惟政を討ち取り、高槻まで攻め上がった。

希代の大悪党、松永弾正忠の横槍で高槻城を攻め取るには至らなかったが、次には伊丹城を牽制し、三好三人衆、本願寺一向衆と肩を並べるまでの勢力となりつつある。

摂津は西国と京を結ぶ要地であり、街道が走る北摂津はなおさらであった。この北摂津に覇権を打ち立てようとしている当主池田九右衛門は、ここで足利幕府内での権威を獲得しようと目論んでいた。時代の覇者の配下に甘んじてきた氏族であったが、たかだか一向宗の本願寺、織田との争いで疲弊している三好を押しのけ、自らが摂津の守護として名乗り出るのも遠くないと。

織田方には付かないのか、という声も家臣団からはある。九右衛門は上総介の時代は一瞬の時代であろうと考えていた。実際、武田徳栄軒が西上している。浅井朝倉や長島の一向一揆に手を焼いている現時点で、将軍義昭が公に号令をかけてしまえば、上総介の時代は終焉するであろう。

つまり、九右衛門の頭の中には天下泰平の時代が来るのかどうかという考察がない。むしろ、ほとんどの諸勢力が同じ考えである。血で血を洗うこの乱世が当然であり、まさか、この混乱を一つにまとめあげる人間が出てくるとは信じがたいのだ。

それが古い体制に生きる人間たちの根本であった。体制は壊れない。いや、壊れてしまえば、自分たちはどうなるのか。恐怖である。が、古い体制の中で権勢を持っていない人間にとっては、彼らを目障りに思っていた。

荒木信濃守村重もその一人である。

信濃守は自宅に築いた茶室で、一人、田中宗易から譲られた高麗物の茶碗をじっと眺めていた。

齢二十八である。この若さで、彼は茶道にひどく精通しており、田中宗易が唱えるわびさびの美を体現しようと日々精進している。

それが武将の目指すところかと問われれば、笑ってごまかすしかない。武家の人間として生まれた信濃守だが、戦乱の世など彼にとってはどうでもいいことで、どちらにせよこの世は人と人とが醜く争う世なのだ。

つまらぬ考えで血を流し、血を見るならば、大きな無常の世界にあるひとときの静けさに身を任せているほうがよい。

追及すべきは天下の良しあしではなく、この無常なる世界に生きる人間のありようではないか。

茶道はそれを体現せしめる。茶器はただの物体でありながら、物体の無を雄大に、かつ、繊細に表現する。

「いくさなどではわかりえぬことだ」

と、信濃守は瞳の奥をほとばしらせながら、高麗茶碗を額の高さ

までかかげ、静かに笑みを浮かべる。
「だが、これを手にするわしにはわかるのだ」
池田の田舎者どもにはこれがわからない。掌をころころと返す臆病者と自分を呼ぶ者もいる。
残念ながら、わからない者にはわからないのだ。池田の今の勢いは、臆病者の自分が軍備を拡張させたからあるのだ。臆病者という先入観で人を見て、根本的なものには目を届けられないでいる。
おそらく、織田上総介は違う。田中宗易を茶頭に迎え入れ、まったく新しい舶来のキリシタンの教えを保護し、天下の名物を収集しているという上総介は違う。
何が根本であるか、あいつはわかっている。
信濃守もまた若かった。むしろ、追及しすぎて、我欲が強い男であった。自分が知り得たこと、獲得したものをひけらかしたいのは人間には当然であった。
また、勢いのある池田家にあって、父の代からの権勢を持っている信濃守が、茶室の中だけで自己存在を確かめるだけに飽き足らなくなったのは必然でもあった。
築田左衛門尉曰く、もしも、荒木信濃守が謀反を起こしたならば、織田上総介はこれを支援する。
「殿」
障子戸の向こうから従者の声がして、信濃守は茶碗を下ろした。
「築田左衛門尉殿がひそかにお見えされました」
「通せ」
ついにこのときが来た。信濃守の手は小刻みに震えていた。主家を裏切る恐ろしさもあれば、念願かなう興奮もあって、信濃守の胸は緊張にとどろいた。
「お待ちしておりました、築田殿」
信濃守は茶室に入ってきた牛太郎に深々と頭を下げた。
牛太郎は無言のまま大きな体をゆっくりと下ろし、唇を震わせている信濃守をじっと見つめた。

「まずは一服いただきましょうか」
「おおせのとおりに」
信濃守は牛太郎の口利きで田中宗易から譲り受けられることができた、自慢の高麗茶碗で茶を点てた。信濃守が茶筌で椀の中をかき回し、牛太郎はそれをじっと眺める。
久方ぶりに再会したはずの二人の時間は沈黙だけが下りていた。思惑はあっただろうか。繰り返されるように流れる時間の中で、ただただ、信濃守は茶を点て、牛太郎は差し出されるのをじっと待っていた。
緊迫している。しかしそれは、織田がどうの、足利がどうの、謀反がどうのという次元の緊迫ではなかった。何度も茶を振る舞っては振る舞われている信濃守と牛太郎の世界は、茶碗の中の一点だけに留めおかれていて、その茶碗の中の無我の世界の前に突き出されたための緊迫であった。
信濃守は無我の世界を牛太郎に差し出してきた。牛太郎は茶碗を取ると、無我の世界を見つめながら掌でそれをゆっくりと回し、時間をかけながら一息で飲み干した。
「結構なお手前でした」
そうして、無我の世界に心を洗い流し、緊迫から解放された信濃守と牛太郎はさえざえとした感覚で言葉を発した。
「村重殿、時は来ましたよ」
「ええ。承知しております」
静かにうなずいた信濃守の瞳は黒々と燃え立ち始めた。

細川兵部大輔藤孝

牛太郎が荒木信濃守の決意を確かめたとき、牛太郎と同じく北摂津を織田方に付かせようと試みて、一人の男が池田九右衛門と面会していた。

山城勝竜寺城城主、細川兵部大輔藤孝である。

細川兵部は、足利直臣であり、先々代将軍の義輝のころから仕えていた。和泉守護の細川家の血筋であり、父は将軍側近の三淵家の養子である。明智十兵衛のような浪人あがりとは毛並みも違えば、生粋の足利幕臣であった。

十三代将軍義輝が松永弾正忠に暗殺されたさいには、義昭とともにわずか数人で京を脱出し、上総介の庇護の下、義昭が将軍職を掴むまでは、苦楽を共にしたのだった。

その細川兵部が、池田九右衛門に目通りを願い、説き伏せようとしたのである。

「織田上総介にお味方しなされ」

池田の家臣団は面食らった。剣術に優れ、和歌を好み、流行りの茶道にも精通していると聞こえに高い風雅な文化人の細川兵部が、眉尻を吊り上げて詰め寄るのである。

「時代は変えていかねばなりませぬ」

池田城の広間は水を打ったように静まり返った。

なぜ、細川兵部が幕府を見限ろうとしているのか。家臣団は見極めかねた。包囲網が完成されている中、誰がどう見ようと、趨勢は反織田に固まりつつある。

家臣団の面々は、細川兵部の真意を知りたがった。幕府には何かがあるのではないかと疑った。

摂津池田は、先代当主の筑後守勝正を追放して以降、九右衛門知正を当主に緒仕立てているとはいえ、それは傀儡に近かった。追放劇を主に演じたのは池田家臣団の二十一人で、この二十一人の家臣

団の合議が池田家のかじ取りであった。

二十一人の中でもっとも兵力と権勢を持つ者が荒木信濃守である。ただ、信濃守の姿はここになかった。

臆病者の信濃守に聞かねば決められない。なぜなら、池田家の大半の兵力と軍備を保有しているのが信濃守なのである。

もちろん、細川兵部も存じている。だから、ここに信濃守の姿が見当たらなくて、内心は空振りに終わったと決めつけていた。たとえ、九右衛門が首を縦に振ったとしても、信濃守がいなければ決議されたものがひっくり返される恐れがある。

牛太郎にとって不幸だったのは、細川兵部が自らの独断で池田の説得にやって来たことだ。牛太郎が摂津の工作に奔走しているのは、ほとんどの人間の預かり知らぬところであり、もしも、兵部が上総介に一言置いておいたら、兵部は牛太郎と行動を同じくしたであろう。

義昭を断腸の思いで見限った兵部は、よかれと思って北摂津に狙いを定めた。しかし、兵部の決死の覚悟が、傀儡でしかなかったはずの九右衛門に火をともしてしまった。

「足利将軍家に多大な恩を持つそなたが、将軍家を寝返るとは如何なものであろうか」

九右衛門は齢十九と、非常に若い当主であった。そして、自分が傀儡であることも当然ながら理解していた。

家臣団二十一人衆が細川兵部の説得に心を乱しているのを目の前にして、九右衛門は、当主である自分の意志を貫くべき場面はここでしかないと思った。

「初志貫徹、池田は上総介に付かぬ。摂津池田は足利将軍家にお味方し、天下を乱す逆賊、織田上総介を討つ」

この若い当主は、時代の趨勢や将来への展望よりも、自分が池田家を主導することを重要視した。

初志を翻せば、それだけ当主としての器が狭められる。初志を貫徹してこそ、当主としての威信を大きく発揮できる。

「これが摂津池田の思うところだ。そうであろう、皆の者」
九右衛門は念を押した。家臣団は忸怩たる思いでうなずくしかなかった。傀儡であるとはいえ、当主は当主である。ここで異存を発するなど、池田九右衛門の面目を潰すなどという些末なことではなく、摂津池田の面目が立たないのである。
「しかし、九右衛門殿、時勢は――」
「将軍家に刃を向けようとは大悪党の松永弾正と同じことよ！　去ね！」
細川兵部は立ち去るしかなかった。見誤ったと後悔しながら池田城を下りた。荒木信濃守から攻めれば、もしかしたら、このようなことにはならなかったかもしれない。
いや、と、兵部は顔を上げた。まだわからない。信濃守を当たれば、決議は翻るかもしれない。
兵部は足取りを速め、信濃守の屋敷へと向かった。
牛太郎が細川兵部と再会したのは、調度、茶室をあとにしようとしていたときである。
「簗田殿ではないか」
牛太郎は首を傾げた。突然、現れた男は自分を知っているような口ぶりであったが、覚えがない。いや、落ち着いた物腰と、鼻の下に勇壮にたくわえた髭、澄んだ瞳の向こうに帯びるはかとない憂いは、昔、どこかで見たような気もするが、記憶は曖昧であった。
「どちらさまでしょうか」
図太いのか、馬鹿なのか、ぬけぬけと訊ねた牛太郎に、兵部は苦笑して返した。
ずいぶんと前のことだが、南近江の観音寺城を落としたあと、明智十兵衛を先鋒に上洛したとき、兵部は牛太郎と同行している。
そのことを兵部に聞かされた牛太郎だが、首をひねった。思い出せない。
「まあ、いいです」
兵部は肩を落としながら牛太郎の隣に腰を下ろし、信濃守に視線

を据えた。

「荒木殿。今しがた、拙者は池田城を訪れていたのですが――」

「兵部大輔殿。とりあえず、一服盛りましょう」

腰を折られた兵部は、口許をむずむずと歪めたが、信濃守があまりにも真剣なので、「うむ」とだけ答えて、あとは黙った。

信濃守が高麗物の茶碗に抹茶を落とし、湯を注ぎこむと、それを茶筌でかきまわしていく。兵部はじいっと信濃守のしようを見つめながらも、心はそこになかった。信濃守を口説き落とすことだけが先行していた。しかも、驚くことに、簗田左衛門尉牛太郎がいる。兵部には牛太郎がどうして信濃守と懇意にしているか計りしれなかったが、とにもかくにも、信濃守が織田方に心を寄せていると推測し、いっときも早く、信濃守を池田城に登らせたかった。

茶碗が兵部の前に差し出された。茶碗を手にした兵部は、茶碗を回し、隣に座る牛太郎に一礼すると、中身を三口で飲み干した。

京の文化人として、兵部も茶道のたしなみはこころえている。身のこなしようは実にしなやかで、茶室の沈黙に押し潰されることもなければ、一つ一つの動作には沈黙を受け入れる柔らかさがあった。

「結構なお手前でございました」

空になった茶碗を膝元に置く。

うぐいすの声が間近に聞こえてきた。みやびに濡れたその声は茶室を一瞬にして彩った。

が、茶碗を兵部の膝元に置いたまま、信濃守と牛太郎が沈黙のままに見つめ合っている。

「何か」

兵部が思わず訊ねると、信濃守も牛太郎も頬をしかめながら首を傾げた。

「なんだかねえ」

と、牛太郎が言うと、信濃守がさらに首をかしげる。

「左様ですな。どこか、兵部大輔殿は、うーむ」

兵部は目を泳がせた。自分の動作はまさに礼に従っていたはずだ。

「なんだか、心ここにあらずって感じでしたよ。細川さん。ここは茶の湯の室なんですから、心は外界と切り離さないとね」

「左様。兵部大輔殿には邪の念が感じられましたな。茶とは味わうものではなく、身を置くものでございます」

兵部はがっくりと落ち込んだ。池田にまで足を運んでまで将来の時代に意を決しているというのに、池田九右衛門に追い返された挙げ句、このような者たちにまでけなされてしまうとは、心底疲れ果ててしまった。

この日、池田家を掌握した者は誰であったか。

信濃守を筆頭とした二十一人衆の合議で左右されていた摂津池田の命運は誰に委ねられていたか。

信濃守も牛太郎も気付かないでいた。当主、池田九右衛門が一寸の隙間を突いて、その存在を確立させたことを。

窮鼠が猫を噛むようにして、ときに傀儡当主は己が建前であることを利用して、表舞台に躍り出る。

歴史上、何度かあったことだ。

そうとは知らず、信濃守は謀反に先だって二十一人衆の合議でもって、九右衛門を追放せしめようと考えていた。

九右衛門は足利幕府に付くであろう。それに反対して自分が上総介に付くことを名乗り出れば、権勢を持つ自分に二十一人衆は付いてくる。

だが、遅かった。

信濃守を除く二十一人衆は、細川兵部が訪ねたさいの九右衛門の押し出しによって、嫌がおうにも、建前上、九右衛門に従わなければならなくなったのだ。

政治屋は体裁が重要なのである。

九右衛門を傀儡として当主に仕立て上げる体裁を築いた以上、この体裁を守らなければならない。

九右衛門はこの体裁をうまく利用し、主導権を獲得した。

信濃守に耳を貸す者はいなかった。

普段は家にこもりがちな信濃守が積極的に同僚の家臣団たちの屋敷を回り巡り、それとなく、遠回しに、織田上総介の庇護を受ける自分に味方するよう説いたが、

「お主は本気でそのようなことを言っておるのか」

と、ある者には冷たい目で見つめられ、また、ある者は、

「それはつまり、おやかた様を寝返るということに聞こえますが、左様なことであれば、すぐさま登城しなければなりませんねえ」

と、わずか半日にして権勢を失った信濃守をあざ笑うかのような微笑を浮かべた。

信濃守にしてみれば、狐に化かされたかのようである。

まず間違いなく、二十一人衆は自分に味方するものだと考えていた。だが、信濃守は甘かったのかもしれない。謀反に対して、自分の権勢だけを頼りにしており、同僚たちに十分な根回しを行っていたとは言えなかった。

信濃守がうなだれながら帰宅したとき、空には銀色の月がはりついていた。

「これはまずいですぞ、信濃守殿」

手ぶらで帰ってきた信濃守に、細川兵部が声をひそめた。

「すぐに九右衛門殿に告げ口をする者が現れるでしょう」

見事なまでの建前の下にひれ伏してしまった信濃守以下二十一人衆は、九右衛門が名実ともに当主となれば、今後、合議制を取る必要がない。

では、誰が家臣団の中で当主の愛を得るか。

新たな権力闘争が始まる。

手っ取り早いのは手柄を上げることであり、信濃守に謀反の疑いありと弾劾することである。

「明日にでも信濃守殿を捕らえにくるやもしれませぬ」

そう、次なる野心を抱いた者にしてみれば、家臣団随一の軍備を保有している信濃守などはさっさと殺さなければならない。

信濃守はうろたえた。

「し、し、しかし、そ、そのようなことが、おこ、起こるわけが」

「起こりまする」

兵部の鋭く突き刺す眼差しに、信濃守は唇を青く震わせた。

かたわらで、牛太郎は呆然とした。しばらくの間は状況がつかみきれなかったが、瞳を泳がせてうつむいている信濃守を眺めている

うち、理解した。
この馬鹿野郎、しくじりやがった。
牛太郎はわなわなと震え、拳を握り締めた。何をやっているのだと、怒りがこみ上げた。これまで費やしてきた労力と時間が、信濃守の見誤った自信のおかげで無駄になったのだ。
「逃げなされ」
と、兵部が言う。
終わった。摂津工作は終わった。
いや。
牛太郎は顔を上げた。まだ、終わっていない、と。信濃守が殺されるまでは終わっていない。ならば、それまでの間、できることはやらなければならない。
「逃げるんなら、岐阜に行ってください、村重殿」
そして、兵部と共に上総介に面会してこいと言った。
「八方ふさがりになっちゃったなら、力でねじ伏せるしかないでしょ」
要は上総介の兵力をあてにしろということであった。信濃守は救われたような目の輝きを見せた。ただ、兵部が眉をしかめた。
「しかし、果たして上総介殿が今の状況下で兵を出してくれるかどうか」
牛太郎は黙った。出さないと思っている。織田家の戦略上、北摂津は二の次である。
だが、ここで信濃守を失うわけにもいかなければ、北摂津を反織田方にするわけにもいかない。
今までのすべてが終わってしまうのだ。
「出してくれるかどうかは行ってみなければわからないでしょう」
牛太郎は兵部に睨むような視線を与えたが、言葉とは裏腹にそこには悲愴が入り混じっていた。ここで終わらせたくないという思いと、終わってしまうのではないかという恐怖が眼差しには同居していた。

「細川さん、村重殿、とにかく、明日、朝一番にでも池田を脱出しなさい。あとのことはあっしがなんとかしてみせるから」
「なんとかするとは、一体何を」
「なんとかです」
牛太郎の瞳の中は行燈の火を受けて燃えており、それを押し付けられた兵部は唇を押し込めてただうなずいた。
牛太郎は兵部と信濃守に決心させたあと、荒木家に用意された居室にこもり、荷紐をほどいている栗之介の手を止めさせた。
「どうしてだ」
「黙ってろ。言われた通りのことをしてろ」
牛太郎は腕を組むと、じっと目をつむった。
栗之介とともに堺に戻り、一度、計略を立て直すべきかもしれない。再び小寺官兵衛にやって来てもらい、策を練り直してもらうしかないかもしれない。
しかし、九右衛門が当主としての当然の振る舞いを始めた以上、工作を挽回する猶予は、今日、明日しかないような、そんな勘が働いていた。
さゆりに頼る時間もないし、そもそも、あの者に頼るのは癪である。謀反が失敗したとなると、叱られるに違いない。
じゃあ、どうすればいいのか。
信濃守の脈がなくなった今、どうすれば、摂津池田を転覆させられるのか。
信濃守以外に、人脈があるか。
一人あった。中川瀬兵衛清秀。彼もまた二十一人衆の一人である。
昨年の夏、白井河原で高槻城城主、和田惟政の首を自らの手で討ち取った中川瀬兵衛清秀は、その恩賞として摂津池田の呉羽台五百石を荒木信濃守から頂戴した。
その信濃守が昨晩やって来て、
「あ、あ、足利幕府に付く、付くのが良策とは、わ、わしは思えぬ」

「しかし、弥介殿」
と、瀬兵衛は従兄弟の信濃守をかつての幼名で呼んだ。
「そなたがおらぬ間に、おやかたは織田に付くと決めてしまいましたぞ。我ら家臣団もそれに従う他ありませんでしたわ」
「なら、な、ならば、わ、我らは、お、織田殿に付けばよ、よろしいでは、ない、ないのか」
「我らとは誰なのです」
「わ、我ら、我らではないか」
「弥介殿ですか」
瀬兵衛の追及に信濃守は黙りこんだ。信濃守が摂津池田の主に立つのかと訊いたのだった。
もし、自分と信濃守の共同統治でないのならば、何かの見返りがなければならない。金、石高、あるいは、
「茨木城ですな」
昨年に攻め取った茨木城に守将を置かないでいるのは二十一人衆が暗黙のうちに牽制し合い、なおかつ、信濃守が他の者に力を得られることを恐れていたからである。
それを寄越せ。
「か、考えさせてくれ」
朝、布団の中で目を覚ました瀬兵衛は、まず、昨晩の信濃守の不甲斐なさを思い出して、舌を打った。
二つ返事で了承さえすれば、信濃守は北摂津に覇を唱えることができ、自身は齢三十にしてようやく、福井村の土豪から城主へと成り上がれたのだ。
瀬兵衛は居室を出て屋敷の縁側に腰かけると、しらしらと明けていく空を眺めながら、早朝の冷えた空気を寝巻き一枚で受け止めた。
「おはようございます、旦那様」
従者がやって来て、傍らに白湯を置いた。瀬兵衛は椀を手にし、白湯をずずと啜る。
「今日も一段と冷えるの」

その息は白い。
「春が待ち遠しいわ」
「はあ」
従者は不思議そうに首をかしげた。朝早くから庭先に出てきて武芸の鍛錬をするのが瀬兵衛の日課であるが、この筋骨たくましい主人が季節の情緒に染み入ることなどそうそうない。
瀬兵衛は椀に口をつけた。湯の温かさが体の端々にまで通っていく。
行われるであろう二十一人衆の権力闘争、瀬兵衛はすでに不参加を決め込み始めていた
白井河原の戦いで上げた武功により、二十一人衆の中で発言権を得つつあった瀬兵衛だが、それは従兄弟の信濃守の権勢の下によるところが大きい。
昨日の細川兵部大輔との会見の席上に信濃守が呼ばれていなかったのは、おそらく、何かの力が働いていたのであろう。九右衛門が信濃守の排除を狙ったか、もしくは、二十一人衆の中の誰かがすでに暗躍しており、会見の場を取り仕切ったか。
この静かな政争において、自然的に信濃守側となってしまっている瀬兵衛ははなから不利である。
それに、同僚たちから信用されていないことも瀬兵衛は承知している。
だったら、静観する他ない。ここでむやみに動いては、命の危険が生じる。
信濃守が大胆な行動を取ってくれるのであれば、話は別なのだが、その可能性は低い。
「春が待ち遠しいわ。のう?」
「はあ。左様で」
瀬兵衛は腰を上げると槍を手に取り、庭先へと下りた。まだ、空は明けきっていない。うっすらと青ばんでいるだけで、星がまだ残っていた。

瀬兵衛は槍を構える。そこに流れている無にじっと相対し、邪念を消していった。熱が肉体に帯び始め、汗がじっとりと浮かんできた。

槍一つで成り上がれる戦国の世などとは、誰が言ったものか。ちいっ、と、瀬兵衛は舌を打ち、槍を放り捨てた。心が乱れている。おもしろくない。

従者が槍を拾い上げているのをよそに瀬兵衛が縁側に足をかけようとしたとき、門番が庭先に小走りに回り込んできた。

「旦那様」

と、ひそやかな声で駆け寄ってき、瀬兵衛の足元にひざまずいた。

「朝早くから何事だ」

「それが、簗田左衛門尉殿が目通りを願っております」

「簗田だと？」

門番はうなずくと、目通りを願う書状を受け取って来たと、それを瀬兵衛に差し出してきた。

書状にはこうあった。

北摂津の今後について、ご相談したい。

「よかろう。通せ」

あの鈍牛が敵地にのこのことやって来て、このような早朝から押し掛けてくるとは、昨日の細川兵部大輔といい、何かあるに違いない。

そして、書状には北摂津の今後とある。池田の今後ではなく、北摂津である。

瀬兵衛は口端に笑みを浮かべた。摂津池田の政争どころではない、織田と反織田の大きな流れが感じられるのだ。

牛太郎は一睡もしていない。

実は中川瀬兵衛の脈を当たろうと思いついたときから、牛太郎は細川兵部と徹夜で話し込み、計画を練った。

摂津工作に月日を費やしてきた牛太郎だったが、なにしろ、ほと

んどの実務はさゆりに放り投げてしまっていたので、事情にうとかった。

瀬兵衛を当たろうかと考えているが、どうすればいいものかと兵部に相談したところ、

「簗田殿は中川瀬兵衛と親しい間柄なのか」

と、訊ねられ、親しくもないが交渉はできる程度の関係だと答えると、

「それは好都合です。信濃守と中川瀬兵衛は従兄弟なのですから」

そう言われて、牛太郎はそのときにようやく、瀬兵衛が信濃守の権勢のおかげで二十一人衆に名を連ねていられていることを初めて知った。

意外だった。牛太郎が感じていたところ、瀬兵衛は信濃守を侮っていたし、臆病者呼ばわりしていた。

なるほど、瀬兵衛は信濃守という人間には不満があるのだが、なすすべない力関係の枠組みの中におさまるしかなかったらしい。

すると、思いついた。

このとき、牛太郎は天才的だった。たいがいの凡人の閃きなどは物事の一つだけを閃くにすぎないのだが、竹中半兵衛のような天才的な軍略家や、小寺官兵衛のような天才的な謀略家、引いては武田徳栄軒のような天才的な政治家は、情報の一つ一つを並べ立てた上で、大局を閃く。

牛太郎は凡人どころか愚将である。だが、半兵衛や官兵衛と接し、それに徳栄軒との心理戦などの経験によって、自然に研鑽を重ねていたのかもしれなかった。

北摂津の覇権の運びようを一瞬にして思いついたのだ。

牛太郎はその策を兵部に話した。すると、兵部は舌を巻き、最後には、

「貴公は恐ろしい御仁だったのですな」

と、唾を飲み込んだ。

兵部が恐ろしいと言ったのは、牛太郎の頭脳に対してではないだ

ろう。教養人の兵部は、不義理で非情なその策謀を考え出した牛太郎の人間性が恐ろしいと言ったに違いない。

馬鹿を言うな、と、言いたい。牛太郎はかつて瀬兵衛にだまされて、池田城の牢獄にぶち込まれている。

その仕返しだと思えば、不義理でも非情でもない。

そもそも、自分が汚い真似をして、瀬兵衛だけが貧乏くじを引くのであれば、万骨も枯れずに済むのだ。

瀬兵衛には泣いてもらうしかない。

「瀬兵衛殿」

呉羽台の屋敷の居間にて、寝巻きから衣服を正した瀬兵衛に、牛太郎は濁った眼差しをにじり寄せた。

「織田家の庇護の下、茨木城を手に入れたいとは思わないか？」

早朝の密会

居間を閉め切る戸の障子を朝日が透かしている。雀の鳴き声がぽつりぽつりと聞こえてきていた。

「ほう。実に簡単に言うではないか」

瀬兵衛は笑みを浮かべながらも瞼を大きく押し上げて、威圧的であった。ぴりっとした殺気が走り、居間に流れている空気が張り詰めた。

「ああ。簡単だとも」

牛太郎が発した声は地をならすように低く、野太い。朝の光を背中だけに受けている彼の表情は影の中にひそんでいて、瞳の色は一点に漆黒、瞼の下をくっきりと縁どらせているくまが、黒さをいっそう際立たせていた。

「一両日中には、瀬兵衛殿は茨木城城主、いや、北摂津に覇を唱える」

「いかようにしてだ」

と、瀬兵衛が広げた瞳孔が牛太郎を更に威圧した。

「それよりもまず――」

牛太郎は影の中で静かに座っている。二つの目だけがそこで生きているかのようだった。

「瀬兵衛殿にその気があるのかどうかだ」

まるで帳の向こう側にいるかのようであった。遠くのほうから目だけをひっそりと光らせて獲物を狙っている闇の獣のようであった。

「こしゃくな」

瀬兵衛は獣の不気味さに抗うかのようにして語気を強くした。

「お主が荒木信濃守と懇意にしていることなど重々承知しておるのだ。そのようなうまい話を信濃守ではなく、わしに持ってくるとは、お主こそその真意を申せ」

すると、牛太郎は口許を歪めて笑った。

「瀬兵衛殿、確かにな、うまい話なんてのは裏を返せば危ない話でもある。ただ、うまい話に乗るか反るか、うまい話を進めるか捨て去るかは、お互いの利害が一致するかしないかで済む話でもあるんじゃないのか」
「ならば、お主の利するところはなんだ」
「天下布武への道しるべとなること、ただそれだけだ」
「ほう。お主がそこまでの忠臣であるとはな」
「瀬兵衛殿にはわからないだろう。織田のためになるということは、あっしのためになることでもあるんだ。知っているだろ、木下藤吉郎、明智十兵衛、この二人は織田の重臣でもないのに、かたや北近江攻めを任される一軍の将であり、かたや坂本五万石を与えられた浪人上がりだ」
瀬兵衛は笑みを消して、押し黙った。
「信長様は能力のある者、貢献した人間に与える褒賞には惜しみない。摂津池田でくすぶっている瀬兵衛殿にはわからないだろうな」
「しかし、天下布武とやらが達成される望みなども薄いであろうな」
「本当にそう思うか」
「ああ。そうでなかったら、この地のおやかたも織田上総介に付いただろう」
「武田信玄が死んでいても、か？」
「なにっ？」
「今、東海道を攻め上がっている武田信玄が、その途中で死んでいてもそう思うのか？」
「笑わせるな」
と、瀬兵衛は鼻で笑いながら、しかし、若干うろたえもした。
「かようなことが起きれば、日の本中の人間が大騒ぎするわ」
「いや、兵を出してすぐに遠江のほとんどを攻め取ったというのに、その後はいまだに三河を突破できていないじゃないか」
それは事実であった。三方ヶ原で圧勝した武田軍であったが、年が明けてからは動きが鈍くなっており、三河に侵攻したとはいえ陥

落した城は野田城という小さな属城のみ。遠江の支城を一日にして落としていった迅速さは失っている。

「武田信玄は死んでいる」

と、牛太郎は言い切った。

二人は沈黙のまま睨み合った。

「話を戻そう」

牛太郎は背筋を反り返すと、着物の袖の下にそれぞれの手を突っ込み、たるんだ顎を引きながら視線を瀬兵衛に据えた。

「瀬兵衛殿はこのままその能力を発揮しないでいるつもりなのか」

瀬兵衛は腕を組み、眉間に皺を寄せて、床のある一点を睨み続けた。初めて悩み始めた。

屋敷の奉公人たちの声がちらほらと届いてくる。

牛太郎は袖の下から手を抜くと、懐から書状を取り出した。それを瀬兵衛の前に差し出し、顔を上げた瀬兵衛をぐいと睨み上げる。

「支度金に二千貫を用意してやる」

瀬兵衛は目の色を変えた。書状を引っ手繰ると、中を広げた。そこには瀬兵衛に二千貫を支払うという誓約書が茶屋四郎次郎の名で記されてある。

以前にも、牛太郎は瀬兵衛との交渉で四郎次郎の名を使って百貫の手形を切った。

無論、それは牛太郎の御用商人の四郎次郎がきっちりと支払っている。

「二千貫だと……」

土豪の身分ではかき集めることも蓄財することも不可能な大金であった。

しかし、摂津工作のどさくさで密かに一財を築いている牛太郎にとっては、さほどの痛手ではなかった。牛太郎の手足となって働いている四郎次郎が本願寺と三好に通行料を支払って淀川の水運業を独占している他、寄進札事業に出資した岐阜の願福寺からは年に三

回、それぞれ五百貫強が送られてくる。
瀬兵衛は証文に手を震わせながらも、疑った。
「た、確かに以前にもこのようなことがあったが、二千貫などとはにわかには信じられん。だいたい、この茶屋四郎次郎とは何者なのだ」
「今井彦右衛門の手下だ」
と、牛太郎は嘘をついた。だが、堺の豪商であり、上総介の茶頭でもある今井彦右衛門の名は、二千貫という大金の信憑性を持たせるには十分だった。
上総介の御用商人である今井彦右衛門が、数々の利権が生じる摂津が織田方の支配に移ることを願っていることなどは、畿内の人間であれば少し考えてみればわかることであった。
まあ、実際、牛太郎の摂津工作は今井彦右衛門の協力を得ながらなのだが。
「わかった。よかろう」
あれだけ牛太郎に突っ込んできていた瀬兵衛は、二千貫の証文を目の前にした途端、早かった。
「して、どのように茨木城を乗っ取らせてくれるのだ」
口も滑らかである。牛太郎は、顔には出さなかったが、ほくそ笑んだ。これで、瀬兵衛を意のままに操れる、と。
牛太郎は瀬兵衛に計略の概要を話し始めた。
「まず、瀬兵衛殿は急ぎ荒木村重殿の屋敷に向かい、村重殿の家臣団を自分のものにしろ」
「なんだと」
「村重殿は出奔した。昨日の件で身の危険を感じ、堺に逃げた。正直に言えば、あっしも最初は村重殿を口説いていたけれど、状況が変わった。瀬兵衛殿は荒木家に出向いて、親族ということで建前を並び立てて家臣団を物にしろ」
そうして、池田九右衛門には、出奔した信濃守が高槻城に逃げたという偽りの報告をし、高槻勢がここぞとばかりに茨木城を狙い始

めている。瀬兵衛はその押さえとして茨木城に出兵する。
「そのまま茨木城に居座り、独立してしまえ」
瀬兵衛は黙りこんで、ただただ、牛太郎の鋭い眼差しを見つめた。
「手筈は整えている。高槻城にはあっしの与力が潜伏していて、そいつが高槻、茨木、池田に流言を広める。高槻勢が茨木を攻め込む準備をしていると」
嘘ばかり吐いている牛太郎だったが、それは真実であった。夜も明けないうちに栗之介を堺のさゆりの元へと走らせている。
「それと高槻城でも近々謀反が起きる。高山飛騨守とかいうキリシタンが信長様に通じているからな」
そうすれば、弱体している高槻も、瀬兵衛の物になると牛太郎は言った。
「わかっていると思うけど、あっしは信長様の代理だ。あっしはこれでも信長様に全部任されているからな。あとは、瀬兵衛殿次第だ」
牛太郎の言葉を受けて、瀬兵衛はしばらくの間、黙って考えていたが、ややもすると、声を大きくして従者を呼んだ。
牛太郎の背後の障子戸を従者が開けると、
「荒木信濃守の屋敷の様子を見てこい。それと、女に湯漬けを用意させろ」
そう言って、証文を懐にしまいこみ、口端だけで笑った。
「お主を信用しているわけではないが、忙しくなりそうなのは確かだな」

計略と引き換えに、牛太郎は呉羽台の瀬兵衛の屋敷に軟禁された。
信濃守の出奔を確認した瀬兵衛は手勢を率いて荒木家に乗り込んでいっている。
「ゼニゲバだな」
与えられた居室で、牛太郎は一人、けらけらと笑った。
主を失った荒木家の家臣団を力と建前でねじ伏せようと、瀬兵衛は鼻息を荒くさせていたが、すべては最初から仕込んでいるのだっ

た。

信濃守は、一時のあいだ、自らの家臣団、軍勢を瀬兵衛に預けることに難色を示したが、牛太郎と兵部の説得により、信濃守は渋々、配下の者たちへ文をしたためた。

自分が戻ってくるまでのあいだ、従兄弟の瀬兵衛に従え。

自分を見限ったふりをし、瀬兵衛に従属するふりをしろ、と。

ゆえ、瀬兵衛はやすやすと信濃守の軍勢を配下に置ける。

あとは、栗之介から伝え聞いたさゆりが高槻城の新七郎に伝え、流言が広まるのを待つだけだった。

瀬兵衛が茨木城に入り、高槻城の高山飛騨守が謀反を起こせば、摂津の情勢を有利に運ばせられる。

「どう考えてもおれのおかげだな」

フン、と、鼻で笑った。

悪玉

瀬兵衛が荒木家を掌握したことは、権力闘争に動き出すと見られていた家臣団の出鼻をくじき、一朝にして、瀬兵衛は頭角を現した。

信濃守と瀬兵衛を除いた二十一人衆は瀬兵衛のやり方にはらわたを煮えくり返らせ、当主九右衛門の前で面罵したが、瀬兵衛は図太い男であった。

「拙者を罵倒するのは筋違いであろう。信濃守こそ主家を裏切ったくせ者ではないか。むしろ、信濃守が蜂起する前に事をおさめた拙者に感謝してほしいぐらいだ」

同僚たちからしてみれば、信濃守よりも厄介であった。

二十一人衆の一部は、夜、ひそかに九右衛門に訴えた。瀬兵衛はそもそも意地の汚い男であり、今回も何かの野心があるに違いない。いつ、織田方に寝返ってもおかしくはない。

「殺すべきです」

「とはいえ、どうするのだ」

と、九右衛門は困惑した。

機を見て一挙に当主の権限を獲得した九右衛門ではあったが、それだけであった。そもそもの資質が当主として足りなかった。

分裂しかけている家臣団を取りまとめることもできなければ、悪玉を排除する術も思いつかない。

瀬兵衛は瀬兵衛で、そうした動きを警戒して、呉羽台に武装した軍勢を固まらせている。

「どうするのだ」

九右衛門の苛立った声に、家臣たちは黙るしかなかった。

すると、弾劾するだけで何も役に立たない二十一人衆ではなく、九右衛門の心は瀬兵衛に傾いていった。

翌日、九右衛門は、自らの足で呉羽台の瀬兵衛の屋敷を訪ね、

「瀬兵衛、老人たちを黙らせることができるのはお主だけだ」

と、力になびいた。むしろ、自分を支えてくれと懇願しているようなものだった。

九右衛門が屋敷を去ったのち、瀬兵衛は盃を満たした酒をなめながら、牛太郎に笑いかけた。

「顔色をころころと変えるあのおやかたでは、池田は終わりだな。いつまでもこの主家に付いていく気など失せたわ」

有頂天である。

牛太郎は思った。人々の欲望渦巻く混沌としたこの世の中で、始めはその怪物たちを手玉に取ろうとする計略に臆し、ひどく難儀なものだと感じたが、実はそんなに大それたものでもなかった。

突き詰めていけば、一人一人の心理が物事を動かしている。瀬兵衛も九右衛門も人間性が如実に現れた行動を取っており、その心理は彼ららしい心理であった。

こいつらは目の前のことしか見えていない。

だからこそ、操りやすい。

信玄は違った、と、牛太郎は二俣城の戦いや、それよりもずっと以前、躑躅ヶ崎館で面会したときの徳栄軒の姿を思い起こした。

徳栄軒の厳然としたいずまいと、落ち着きはらった表情は、自らの心理を覆い隠す鉄壁の仮面であった。一歩も二歩も相手の先を行こうとする人間は、徳栄軒のように自分の手の内を、己の胸の内を明かさないのだ。

自分も謀略なんてしている以上、そうあるべきだな。

牛太郎は瀬兵衛の有頂天ぶりを前にして、しみじみと感じた。

池田家においてにわかに頭角を現した瀬兵衛であったが、牛太郎の助言で、高槻勢が出陣の準備をしているという流言が広まるまではおとなしくしていた。表向き九右衛門にこびへつらい、己が池田家にとって害ではないことを喧伝することに取り組んだ。

家臣団こそはよくは思っていなかったとはいえ、九右衛門は従順な瀬兵衛を信用し始める。

その矢先である。

高槻城に不穏な動き有り。

かねてから分裂していた高槻の家臣団が、足利直臣である城主の和田惟長を排除し、織田方に付こうとしている。

この報告は間者や物見、民衆の噂にいたるまで、あらゆる方面から入ってき、池田九右衛門及び家臣団は対応を迫られた。

高槻城が織田方に付いてしまえば、隣接する茨木城を空城のままにしておくわけにはいかなった。

「わしが詰めましょう」

瀬兵衛の発言に家臣団は渋った。しかし、九右衛門が了承した。

九右衛門は瀬兵衛を頼りにしている。

瀬兵衛は取り急ぎ、四千の軍勢を集め、茨木城に向かった。

池田家の人間が異変に気付いたのは翌日の昼になってからであった。九右衛門は瀬兵衛に茨木の知行を与えたわけではない。しかし、呉羽台の屋敷はおろか、荒木信濃守の屋敷まで、家族や奉公人の姿がなくなっており、もぬけの殻であった。

報せを受けた九右衛門は、すでに茨木城に入ってしまった瀬兵衛に、理由を述べるため急ぎ登城しろという早馬を出した。

瀬兵衛は無視した。

摂津池田は混乱した。瀬兵衛を討つべきだという声もあったが、今、仲間割れをするべきではないという声もあった。せっかく、情勢は反織田に傾いているというのに、ここで勢力を弱体化させてしまえば、反織田の中での権威を失ってしまう。それに、瀬兵衛が寝返ったというわけではない。どちらかといえば、勝手な行動を取ったにすぎず、今のところは瀬兵衛をどうにかして懐柔し、ここを凌ぐしかない。

阿鼻叫喚とする家臣団の様子に、九右衛門はどうしてよいものか決めかねた。

そのため、あろうことか瀬兵衛を放っておくことにしてしまった。

池田家の指揮系統は事実上崩壊した。惨憺たる現状に憂いを覚え

た者は瀬兵衛に通じるようになり、後先を考えない者は権力闘争を開始した。

茨木城を乗っ取った瀬兵衛は高見の見物である。

「あとは飛騨守が高槻城を乗っ取れば、わしは飛騨守を従え池田に攻め入れる。簗田殿、上総介殿にえらい大きな土産ができたな」

瀬兵衛は高笑いし、牛太郎は愛想で笑った。

おれのおかげだっていうのに。

瀬兵衛はすっかり自分の力に酔いしれている。

はりぼての城主なんだけどな、と、牛太郎は腹の内でせせら笑う。

「そんじゃ、瀬兵衛殿も晴れて茨木城を手に入れられたことだし、あっしは明日にでも岐阜に戻るわ」

すると、瀬兵衛は笑いを止め、

「駄目だ」

視線を据えてきた。

「支度金をまだ頂戴しておらぬ」

チッ。ゼニゲバめ。

「だいたい、いつ、二千貫は来るのだ」

「いや、まあ、そのうちにでも来るだろう」

「本当だろうな」

「あっしは嘘と喧嘩は嫌いだ」

そう言って、牛太郎は茨木城の広間をあとにした。与えられた居室に帰り、仕方なく筆と文を取る。堺の四郎次郎に宛てた。

二千貫を茨木城に持ってこい、という文面だった。

栗之介から伝え聞いて、四郎次郎はすでに金を用意しているであろうが、自分の指示があるまでは待機していろとも伝えていた。

牛太郎の思惑のすべてがうまく運べば、二千貫を瀬兵衛にやらずに済んだ。しかし、最後の最後、例の男が、どうせ、京かどこかで遊んでいるのだろう、間に合わなかった。

もっとも、ここで金を渡さなければ、後々、瀬兵衛が何を仕出かすかわからない。

「どうせなら千貫にしておけばよかったぜ、クソ」
一人ごちながら、牛太郎は文を折り畳んだ。

茶屋四郎次郎こと、中島四郎次郎清延が茨木にやって来たのは、牛太郎が文を送ってから四日後のことだった。二千貫と牛太郎の日用品を積んだ荷駄は堺の港から淀川河口までの航路を取ったあと、そこから北上して茨木にやって来た。

四郎次郎と顔を合わせるのは久方ぶりで、去年の春に牛太郎が家出をして以来であった。

「旦那様、お久しぶりです」

城内にて顔を合わせてきた四郎次郎はにこにこと頭を下げてきたが、牛太郎は睨みつけた。

「馬鹿野郎。ここでは旦那様なんて呼ぶんじゃねえ」

「あ。そ、そうッスね」

摂津の工作を始めて以来、四郎次郎は一介の奉公人から淀川の水運業を切り盛りする雇われ豪商と登り詰めたはずなのに、間抜けさは相変わらずであった。

そのくせ、見てくれだけは若干太った。ネズミか小猿みたいに貧相であった体格、面構えが、小豚程度に豊かになっている。肌も艶やかになっており、それを見て取った牛太郎は思う。

この野郎、いいモンばっかり食ってやがるな。

城の広間にて、四郎次郎は瀬兵衛に面会し、口上として、今井彦右衛門宗久からの二千貫を間違いなく届けに参ったと伝えた。

「左様か！」

瀬兵衛はおもむろに立ち上がると、まず、自らの目で確かめねばならんと言って、庭先に出ると、荷駄車に歩み寄り、中身をまじまじと確かめた。

瀬兵衛は笑った。

「たのもしいかぎりだ」

「摂津安定のため、有意義にご使用くださいませ」

と、四郎次郎が手を揉むかたわらで、牛太郎は呆れた。瀬兵衛ときたら、金に目がくらんで重要なことを忘れている。

庇護を与えるという上総介の正式な通達を瀬兵衛はまだ受けていないのだ。

本来なら、まず先にそれを求めるものだろう。

支払いが約束通りにされて、瀬兵衛は牛太郎の軟禁を解いた。ここに残るもよし、岐阜に戻るもよしということだった。

牛太郎は不安になった。なぜ、瀬兵衛は上総介を気にしないのか。実は、独立をする気がなかったのではないか。

「それじゃ、岐阜の信長様の元に馳せ参じ、瀬兵衛殿が織田の味方になったと伝えに行こう」

と、牛太郎は水を差し向けてみた。

「おお。そうだな」

呆れた。瀬兵衛にとって上総介の通達は二の次だったらしい。

「しかし、手ぶらというわけにもなるまい。何か、献上するような物があればいいがな。上総介殿は収集家だと聞くからな」

瀬兵衛は腕を組み、うーん、と、どこかしらじらしい仕草で考え込んだ。

「かといって、わしはなあ、元は福井村の土豪の出自ゆえ、上総介殿が喜ぶような代物など持っておらんからなあ。なにしろ、先立つ物がない」

牛太郎は閉口するしかなかった。

「何か、いい案はないかの、簗田殿」

「い、今井彦右衛門に相談してみようか」

「そうだな！　そうしてくれ。奴に茶碗でも用意させてくれ」

「そ、そんじゃ、あっしは堺に行ってくるか」

牛太郎は頭を下げると、四郎次郎とともに広間をあとにし、居室に戻るとどかっと腰を下ろした。

「なんて奴だ」

「いいんスか、あんなこと言っちゃって」

「別にいいさ。どうせ、あいつはそのうちこの城の城主でいられなくなるんだからな」
それにしても、
「本当に汚ねえ奴だ」

父上様のようです

牛太郎は四郎次郎や荷駄扶持の人間たちとともに茨木城をあとにした。

とりあえず、堺に戻る。

「ていうかよ、お前」

陣笠を目深に被り、蓑で体を覆った牛太郎は、かたわらを歩く四郎次郎の脇腹を掴み上げた。

「痛ッ。何するんスかっ」

「何するんスかじゃねえよ。なんだよ、この腹は。見ない間にぶくぶく太りやがって。何を食ったらこんなに太るんだ、あ？」

「旦那様に言われたくないッスよ」

牛太郎は生意気に髷を結っている四郎次郎の頭に拳骨を落とした。

「減らず口叩きやがって。おれが浜松で死にそうになっている中、テメーは堕落した生活を送っていたんだろう。体に現れているだろうが、まったくよ」

「堕落なんかしてないッスよお！　あっしは一生懸命働いていましたよお！」

「堺に戻ったら、しっかり帳簿を見させてもらうからな」

「そんなことより、旦那様――」

と、振り返ってきたのは、牛太郎と同じように笠と蓑で体を覆い隠した荷駄扶持の人間であり、おかしなことに女の声だった。

「堺に戻るのではなく、高槻に向かったほうがよろしいかと」

「？」

と、牛太郎は四郎次郎に目を向けた。四郎次郎は頭を押さえながら、言う。

「この者は彩ッスよ」

牛太郎が覗きこむと、確かに彩だった。

二千貫もの大金を運ぶさいの警護で付いてきたのだと彩は言った。

「ああ、そう。でも、どうせ、それだけじゃないでしょ」
と、牛太郎は瞼を怪訝そうにすぼめて彩を見つめた。陣笠の下に顔を隠している彩はこくりと頷く。
「ただ、荷駄扶持の者がいるので、多くは語れません」
牛太郎は四郎次郎に視線をきつく向けた。四郎次郎は鼻を突き上げて澄ましている。
「そういうことッス。まあ、いいじゃないッスか。彩と二人旅なんスから。旦那様は彩を気に入っているじゃないッスかあ」
へらへらと笑う四郎次郎の頬を牛太郎は殴り飛ばした。
「笑ってねえで、とっとと堺に戻りやがれっ！」
四郎次郎は尻尾を巻くようにして荷駄隊とともに土煙をあげながら走り去っていった。
彼らがいなくなると、彩が陣笠を上げて笑顔を見せてくる。変装でそうしているのか、垂れ目の下から頬まですすまみれで、見てくれはまったく少年だった。
「敵地でたった一人、よくご無事で。なんなら、私を呼んでくれればよかったものを」
牛太郎は頬を膨らませた。そんなこと言ったって、さゆりと彩に尻を叩かれた結果じゃないか。
まあいい。
「で、さゆりんは今度はどうしろって言っているの」
「高山飛騨守に面会して頂きたいと」
「はあっ？」
牛太郎はあからさまに眉をしかめた。
「なんで。なんで、おれがいちいちそんなことを。だって、飛騨守はキミの兄さんの新七郎があちゃこちゃやっているんだろう。おれが行く必要なんてあるのかよ」
「旦那様が中川瀬兵衛を垂らし込んだように、高山飛騨守も織田の庇護があると伝えなければなりません」
「だって、そんなこと――」

すでに細川のおっさんか十兵衛あたりがやっているはずだろう。
しかし、牛太郎は黙った。どうせ、何を言おうと、さゆりの下僕の彩は言うことを聞かない。ああ言えばこう言うに違いない。
「わかったよ。高槻まで案内してくれ」
牛太郎は溜め息をついた。
次から次へと奔走させられて、くたびれた。信濃守が失脚してから、瀬兵衛が茨木城を乗っ取るまで、牛太郎は軟禁させられているだけの生活だったが、その間の緊張感たらなかった。
ようやく一息つけると思いきやこのざまである。
「そんな顔しないでください。ちゃんと、奥方様の小袖も持ってきていますから。もちろん、姐さんには内緒で」
彩はそう言うと、右目をぱちりとまばたかせてきた。
「よ、よ、余計なお世話だっ！」
牛太郎は怒鳴りつけるとどかどかと歩き始めた。なんてことだ。あーやがそんなお茶目な女の子だったなんて。
「旦那様！」
牛太郎は恥ずかしさのあまりうつむいたまま言葉を無視する。
「旦那様！　高槻はそっちじゃありませんよ！」
ぐう。
牛太郎は踵を返し、箱を担ぎ上げた彩の後ろをおとなしく付いていった。

＊

「久しぶりやな。元気やったか」
甲賀流から解放されて、兄の新七郎とともに岐阜にやって来たとき、さゆりは笑みを浮かべながら彩の頭を撫でてきた。
「姐さんこそ」
彩は涙した。
織田軍が南近江に侵攻したさい、六角方甲賀流のさゆりが織田方から得てきた情報は、ことごとく外れた。逆に、織田方が有利にな

るように仕掛けたのではないかとさゆりは疑われ、結果、さゆりは甲賀流の男たちに殺されそうになった。

さゆりの逃亡をひそかに手引きしたのは彩だった。

「やってくれたな、彩」

逃亡の手助けをしたことを兄の新七郎は見抜いており、彼は左手に短刀を握り締めていた。

「親方衆に知れる前に、俺は甲賀流としてお前を殺さなくちゃならん」

覚悟を決めたような新七郎の冷たい目を前にして、彩は両膝の上に乗せた両手を震わせるだけだった。

「言い残したことがあったら、この兄に言ってみろ」

彩は恐怖のあまり声が出ない。

「どうした。言ってみろ」

「わ、私は――」

彩の垂れ瞼から涙がとめどなくこぼれた。

「私は、私は、まだ、まだ、し、死にたくありません」

そうして、彩は床に突っ伏して泣きあげた。

「愚か者め」

新七郎は溜め息をつくと、短刀を鞘におさめた。

その日から、新七郎は忍びから足を洗うことを考え始め、愚直にも、兄妹を養ってきた忍び衆の頭領に申し出た。

許されるはずがなかったが、金銭と引き換えが条件とされた。

その額は三百貫。用意できなければ、兄妹共々斬り殺すということであった。

一介の下忍に過ぎない新七郎に三百貫など無理だ。新七郎は他に許されそうな条件を考えた。

さゆりの首と引き換えならば。

しかし、さゆりは変装の達人である。甲賀流の人間でさえ、彼女の本来の姿を知らない。さゆりを見極めるとしたらその丸い鼻だけだ。

そもそも、逃亡した彼女は何をしているのか。何を目的に生きているのか。

新七郎は諸国を駆け回った。彼女の故郷である大和や、人々の集う京や堺、摂津、紀伊など、あてどもなかった。

が、思いがけぬ場所でさゆりを見つけた。

山伏の装いで紀伊に入った新七郎は、ただの好奇心から、昨今、世間を賑わせている鉄砲衆を一目見ようと根来寺を訪ねたのだが、そこには火縄銃の使用方法を学んでいる団子鼻の野武士がいた。

野武士は新七郎と目を合わせた途端、殺気を放ち始めた。それがさゆりだとわかった新七郎は、それとなく人目のない森の中に入っていき、さゆりもさゆりで後を付いて来ていた。

先に仕掛けてきたのはさゆりであった。得意の毒矢を吹いてきたが、背後の衣擦れで読んでいた新七郎は瞬時に駆けて木の枝に掴まると、その上にひらりと逆上がりして毒矢を交わした。

新七郎は更に上の枝に掴まって飛び上がり、素早く別の木に飛び移ってさゆりの背後を取り、懐から取り出し指の間すべてに挟みこんでいたくないをさゆりの背中目掛けて連続して投げた。

さゆりが横転して交わしていったところを狙い澄ましたように飛び下り、最後に手にしていたくないでさゆりの首元を刺した。

が、それは羽織を纏った丸太だった。

「あんたが私の命を取るなんてな、十年早いんや！」

背後に回っているのはさゆりだった。地面から伸びてくるように太刀が振り抜かれてきて、新七郎は腰だけをひねってなんとか交わしたが、返す刀で振り落としてきた刃先を逃れられず、新七郎は頬をざっくりと斬られた。

諜報と工作を仕事としていたさゆりの攻撃手段は毒矢と体術だけのはずだった。彼女が剣術を身につけているとは思いもしていなかったので、新七郎は劣勢を悟り逃げようとした。

が、体が痺れてしまって、足が止まった。力が入らなくなって、そのまま地面に倒れた。

太刀にも毒が塗られていた。
フン、と、団子鼻を突き上げながらさゆりは切っ先を倒れ込んで動けない新七郎に突きつける。
「昔の同僚のよしみや。言い残したいことがあったら聞いてやるわ」
「だ、黙れ」
と、手足の痺れを感じつつ、口許から涎をこぼしつつ、なんとか言葉を繋いだ。
「お、お前のおかげで、お、俺たち兄妹は、お、終わりだ。のうのうと、生きやがって。地獄に行っても、の、呪い続けてやる」
「弱肉強食や。往生しいや」
さゆりは太刀を振りかぶった。
「な、何が弱肉強食だ！　あ、彩に、命を救ってもらっておいて、お前だけ生きやがって、何が、何様だ！」
「さゆり様や」
新七郎は歯を食いしばると、両目を血走らせながら手をぎりぎりと動かしてさゆりの足に掴みかかった。
「お、おれはいい！　おれはいいから、彩だけは助けてやってくれ！」
さゆりは振りかぶったまま、ぴくりとも動かない。
「彩を、彩を」
「彩に何があったんや」
と、彼女は太刀を鞘におさめた。

さゆりの計らいで、新七郎は簗田家の奉公人、中島四郎次郎から三百貫を譲り受け、兄妹は甲賀流を離れることになった。
「行く当てがないんなら、あっしの団子屋で働いてはどうだい。用心棒もいなかったし、人手も足らなかったから」
彩は忍びの者ではなくなった。頬に刀傷を作った兄が気にもなったが、陰湿な甲賀流から脱出し、天下の自由を与えてくれた兄とさゆり、四郎次郎に感謝し、茶屋娘として懸命に働いた。

ただ、天下に自由はあれど、混沌とする時代の乱れと、簗田家の人手の少なさが、彩の自由な日々を短いものにさせた。

「できるな、彩」

岐阜から堺に移って日が経ったころ、四郎次郎が新しく始めた団子屋で岐阜のときと同じように働いていたら、摂津工作の番頭を務めていたさゆりに呼び出された。

「あんたも元は甲賀で鍛錬させられていたくのいちや。簗田の家のためと思って自らに鬼になるんや」

眉尻を吊り上げ、瞳孔を大きくさせながら有無も言わせまいと迫力だけで静かに言う。鬼は、さゆりだった。

＊

太陽が傾きかけたころ、牛太郎と彩は高槻に入った。

城下には行かず、郊外の廃村の空き家に腰を据えた。村は無残なもので、昨年の池田勢、松永勢の侵攻のときに焼き払われた跡があちこちにあった。

「ひどいもんだ」

彩にみちびかれて入った家は火の手を逃れたらしいが、たった一年、住人を失っただけで、板壁は腐食を始めており、土間にはねずみの影が走っていた。

笠と蓑を脱ぐと、彩が薪だか腐れ木だかを持ってきて、いろりに火を起こした。どうやら、慣れた様子を見ていると、彩は兄の新七郎と連絡を取るさい、この家を根城にしているらしかった。

ぼんやりと火が染め抜いた土間で、牛太郎はふと片隅である彫像を見つけた。

手に取ってみると、作りかけである。

「それはなんなんでしょう。観音様なんでしょうか」

「いや」

牛太郎はヒエを鍋に入れている彩に首を振った。

「これはマリアだな」

「まりあ？」
「キリストのお母さんだ」
牛太郎は作りかけのマリア像に息を吹いて埃を払うと、いろりの傍らに置いた。
「きりすととは誰なんですか？」
「キリシタンの教祖だ」
「はあ。キリシタンの」
彩は竹筒の中の水を鍋に注ぎ込んでいきながら、よくわかっていなかった。
郊外の集落にキリシタンの教えが浸透しているとは意外である。この時代はまだ宣教師は上総介の了解を得てようやく布教活動を始めたぐらいで、牛太郎が知っているのちの歴史で問題になるほどの広がりは感じていなかった。
ただ、こうしてぼんやりと、作りかけではあるが、マリア像を眺めていると、不思議とその偶像から慈しみを覚える。
時代に虐げられている民衆が、カトリックの教えに傾倒するのも無理はないのかもしれない。
なにしろ、彼らからすれば光の見えない時代なのである。
「キリシタンとはそれほどいいものなんでしょうか」
と、彩が竹筒の中の残りを碗に注いで、牛太郎に渡してきた。牛太郎は水を飲み干した。大して喉を潤わしてくれなかったが、水はもうない。
「すがれるものがなかったからだ。弱者にしてみれば」
牛太郎は碗をひっくり返す。一滴、落ちた。
「神社も寺も自分たちのことばっかり考えているから、大部分の人間は愛想が尽きたんだろ。神仏は何もしてくれないってな。そこに新しい異国の神様が来れば、すがりたくもなる」
「はあ」
「まあ、何に信心するかは人それぞれだ」
彩がつぶらな瞳でじっと見つめてくるので、牛太郎は照れ隠しに

鼻で笑った。
「ちょっと偉そうな言い方だったけどさ。ハハ」
「旦那様は、旦那様は何に信心されているのでしょう」
と、彩は真剣に食いついてきた。非常に興味ありげであった。それはつまり、彩にはそうした対象が無いことを物語っていて、そうした対象を切に求めている様子でもあり、しかし、ただの好奇心のようでもあった。
一つはっきりと読み取れるのは、彩がそうしたものへの知識がまったくないということだ。
忍びとして育てられたからかもしれない。
それでも、彩はさゆりとは違う。さゆりは昔、甲斐信濃の山越えのときに祠の地蔵に手を合わせていたことがあったので、ほんの少しだけ自然神を敬っているのだろうが、彼女は基本的に合理主義者で、だからときに残虐な真似をできる。
さゆりは絶対的に自分を信じている。
反面、彩は多分無邪気なのである。どちらかといえば己の良心に従っているが、思想も教義も持ち合わせていないので、さゆりの命令は淡々とこなすのだろう。
すると、牛太郎は彩がなんだか哀れに思えてきた。さゆりの言う通りになんでも働くが、ここで牛太郎に信仰について食いついてきたところを見ると、目の前の愛らしい子は、自分だけでは解決できない何かを抱えているのかもしれなかった。
そもそも、牛太郎は今まで彩と二人きりになって話したことがなかった。
「おれは、そうだな、おれは何を信心しているんだろう」
普段なら、どうでもいいわそんなこと、などと一蹴しているところだが、牛太郎もなかなか大人になってきてしまったので、自分の一言が少女の行く末を決めるのだろうと考えられるようになっていた。
彼は腕を組んでしばし考え込んだあと、言った。

「まあ、信心するっていうのは、その教えを信じて規律を守っていき、守っていくことで、自分の人生を幸せにするってことだろうからな。別に何かを信心するんではなくて、自分がこうすれば幸せになれそうだって思ったことを守っていけばいいんじゃないかな。だから、おれはおれにそういうことを教えてくれる人を大切にする。あずにゃんだったり、相国寺の承兌だったり、竹中半兵衛だったりな」

彩は視線を伏せて、ぐつぐつと煮え立っている鍋の木蓋を見つめている。

「そうすれば、策士が策に溺れることがあっても、訳が分からないまま人生に溺れることはないだろうと思うんだけどな」

「だとすると、私は溺れているのかもしれません」

「そんなあーやを助ける人間ならいくらでもいるじゃないか」

はっとして顔を上げてきた彩に、牛太郎はにんまりと笑んだ。

「旦那様は――」

彩はどちらかといえば呆然としている。

「よくわかりません」

要は、彩はこう言いたいのだろう。

世間では愚将と呼ばれ、左衛門尉の官位を携えているものの、功績は桶狭間の勲功ぐらいで、あとはこれと言ってなし。主君と嫁に怯え、欲望のままに独善的で、挙げ句には女の着物を盗み出して匂いを嗅いでいる始末。

「恐れながら、旦那様がかように知性がおありで心優しい方だと、私は今まで思ったことがありません。だって、今まで微塵も感じられなかったのですから」

「それはあんまりじゃんか」

牛太郎は笑った。人が変わったかのように余裕を持っていて、大らかな声であった。

「でも、別にいいのさ。誰がどう思おうと。あーやたちが楽しく過ごしていけるんなら」

彩は牛太郎に向けたつぶらな瞳を潤ませ、薄く小さい唇をきゅっと内側に押し込めた。
「摂津が終わったら岐阜に帰ろう」
「旦那様は、旦那様は――」
彩は瞼の下を指先でそっと拭った。
「父上様のようです」
彩や新七郎の父親は、やはり甲賀流の人間であったが、ある日、何らかの指令を受けて甲賀を旅立って以来、行方がわかっていない。
おそらく、殺された。
それはひどく昔のことで、自分の中での父親の記憶はおぼろげでしかないと彼女は言った。
「私は梓様やあいり様の幸せそうな御姿を見て羨ましく思ってしまいます。私は忍びの娘です。私は父上様や兄上を尊敬しておりますから、忍びの娘であることを恨んだことはありません。でも、梓様やあいり様を羨ましく思ってしまう自分もいるのです」
「そうか」
「姐さんはそんなことは思いません。姐さんはとても強い人なんです」
「わかったよ、あーや」
牛太郎は彩の肩に手をかけると、自分の胸に引き寄せて頭を撫で上げた。
「さゆりんはさゆりん、あーやはあーやだ。やりたいことがあったり、やりたくないことがあったら、おれに言いなさい」
彩は牛太郎の胸に埋まりながら、子供のように牛太郎にぎゅうっと抱きついてこくりと頷いた。
そう思いたくはないが、彩は三好左京大夫をたぶらかすときに、多分、さゆりの命令で遊女の真似事をしている。
華奢で小さい彼女をそうさせてしまったことに牛太郎は胸を痛ませた。
ただ、彩を抱きしめる牛太郎は、彼女の髪に鼻を埋めて、匂いを

嗅ぐことも忘れなかった。

小袖とはかりごと

翌日、軟禁生活の中で悪臭ただよっていた牛太郎の衣服を彩が洗い、牛太郎がふんどし一丁で梓の小袖に顔を埋めていたところ、新七郎がやって来た。

牛太郎は彼と会うのも久しぶりである。

頭を丸く剃り上げ、頬の傷がこわもてに拍車をかけているのが新七郎なのだが、一年近く見ない間に髷を結っており、傷も消えている。

素っ裸の牛太郎は梓の小袖を太ももの上に敷き、いろりの火に手をかざしながら、新七郎を怪訝にじろじろと眺めた。

「なんか、お前、顔が変わってないか」

「そりゃあ、もちろん」

新七郎の傍らに彩が碗を置き、新七郎は中身をがぶりと飲み干して口を拭うと続けた。

「忍びこんでいるんだから、人相ぐらいはいじくりますわ」

「ふーん」

牛太郎は新七郎をまじまじと見つめる。野盗のような顔つきだったくせに、高槻城の仮の家臣でいる新七郎は、どこか洗練されているふうで、垢抜けていないところもどこかにあって、摂津の一武将らしい姿形である。

牛太郎は気になって訊ねてみた。

「ということはだな、お前やさゆりんの変装術で、太った顔を痩せさせることもできるのか」

「それはできませんな」

にべもなく言い放つと、新七郎は牛太郎の意図することをわかったのだろう、口端にうっすらと笑みを浮かべた。

「変装の基本は、痩せることですからな」

牛太郎はむかっとした。

「にたにた笑ってんじゃねえ。何しに来たんだ。さっさと用件を言え」

牛太郎に促されて、新七郎は高槻城の様子を語り始めた。

現在、高槻城内は各々の不信感が最高潮に達している。というのも、高山飛騨守に謀反の疑いがあるという流言が原因だった。

誰が何のためにそのような流言を広めたのか、飛騨守や飛騨守に近い家臣たちからすれば検討もつかない。

松永弾正忠が一枚噛んでいるのではないかという見方もあれば、叔父を感情のままに斬り捨ててしまった惟長が良し悪しを判別できなくなってしまって、そのような妄言を周囲に言いふらしているのではないか。

もちろん、惟長自身も飛騨守に向ける疑いを日増しに強めていっている。

ここにきて、そうした不信感が最高潮に達しているのは、畿内の情勢が変化しつつあるからだった。

牛太郎が中川瀬兵衛の軟禁下に置かれている間、足利将軍と上総介に動きがあった。

上総介からの弾劾状に挙兵を決意した義昭は、西近江堅田の山岡光浄院景友に命を下し、山岡光浄院は一向一揆衆と結託して、琵琶湖のほとり今堅田と石山に砦を築いた。

これに対し、上総介は素早く動いた。柴田権六郎、丹羽五郎左衛門に出兵させて陸伝いに進軍させ、更に湖上からは明智十兵衛が向かった。

「十兵衛が信長様に付いたってことか？」

牛太郎の問いに新七郎は頷いた。

織田の軍勢は安普請の石山の砦を即刻攻め落とし、今堅田の攻城では、明智十兵衛隊が大いに活躍し、義昭の反抗を呆気なく鎮圧した。

今、上総介は岐阜を出立して、京に入ろうとしているらしい。

「流れが変わってきているのを高槻城の人間たちも感じ取っていま

す」

なにしろ、反織田の筆頭格である武田が、年が明けて三か月を経ているにも関わらず、三河を突破してこない。むしろ、動きがまったくない。

ゆえに、現在戦闘中の浅井や朝倉はおろか、反織田を表明している三好三人衆や松永弾正忠など、利に聡い連中は確定している勝利がなければ動かない。

更に摂津に限って言えば、摂津池田の混乱に乗じて中川瀬兵衛が茨木城を乗っ取ってしまい、いらゆる力の図式の見通しが立たなくなってきている。

「不安が不信を募らせ、高槻城内は一触即発の状態です」

「ふむ」

牛太郎はあらわにした肉をたるませて、腕を組んだ。肌寒さもすっかり忘れ、彼の体には熱が帯び始めている。

「ただ、旦那様、どっちに転ぶかわからん状況で、あんまりのろのろとしている訳にもいかんでしょう」

新七郎の言う通りであった。武田軍の遅滞な動きにより、たとえ、上総介が包囲網に突破口を見出せたとしても、摂津には石山本願寺という強固な抵抗勢力があり、石山本願寺が健在なかぎり、摂津においての力関係は、織田に分が悪い。

牛太郎は彩に訊ねる。

「さゆりんはなんて言っているんだ」

「姐さんは、とにかく飛騨守に面会して、惟長を追放するよう仕向けなさいと」

うーむ、と牛太郎を考え込む。

「そんなこと言ったって、おれは高山飛騨守に会ったことがねえんだぞ。ヘタレ村重とかゼニゲバ瀬兵衛とは訳が違うだろ。飛騨守のことなんて何にも知らないんだから」

「かといって、臆しているわけにもいかんでしょう」

「いや、お前さ、よく考えてみろよ。流言が広まっていることに飛

騨守は不信感を持っているんだろ。そこにおれがちょろっと出てきて、謀反しなさいって言ってみろ。飛騨守はおれを疑うだろうが。野心家ならわかんねえけど、飛騨守は敬虔なキリシタンなんだろ。そこんとこどうなんだよ」

「まあ、旦那様が言うように、確かに泥臭い男ではありませんが」

「うっかり殺されてもしてみろ。ミイラ取りがミイラになるもんだ」

「みいら？」

「いや、なんでもない」

首を傾げる石川兄妹をよそに牛太郎は溜め息を長々と吐く。

なにしろ、心理戦なのである。いや、いくさもはかりごとも変わらないだろう。己が敵と戦うということは、己の目標のために標的の日常を劇的に変化させ、あるいは破壊することなのである。ただ、己に目標があるように、敵にも目標がある。すると、敵と己の相対関係の線上にある心理の機微をつぶさに読み取っていかなければ、奇跡でもない限り、敗北が生じる。

二俣城の戦いで学んだことだ。最後の最後まで徹底的に神経をすり減らさなければ負けてしまう。己も敵も同じ人間ではあるが、己は敵ではないし、敵は己ではない。考えていることはもちろん違う。

状況が好転し、牛太郎の思惑通りに事が進み始めていても、油断はならない。浮かれてしまえばそこで最後、櫓がいかだに破壊されて水源を失ってしまう。

じゃあ、高槻はどうするか。

牛太郎は石川兄妹が黙っている中、考え込んだ。頭の中に今まで聞き入れてきたことを整理し、そして図式を描いた。

一つ、この図式全体を雲のように覆っているものがある。不信感だ。

牛太郎は閃いた。

「新七。お前、当主に進言できる立場にあるのか」

「まあ、家臣団の中ではわりと信用されているほうです。こういうときは新参者のほうを信じやすいですからな」

「そうか。だったら、まあ、あんまりやりたくはないけれど、当主のナントカに高山飛騨守を殺させろ」
「えっ！」
「当主に茶会か宴席でも開かせて、家臣たちを呼び出させて、その場で飛騨守を斬り捨てるよう当主に進言しろ」
「何を言っているんだ。そんなことをしたら、すべてが水の泡ではないか！」
「そうです、旦那様。何を血迷ったことを言っておられるのですか」
「まあ、聞け。最後まで聞け」
やんややんやと騒ぎ立てる石川兄妹をなだめると、牛太郎は言った。
「呼び出される前に、飛騨守の耳にも入れておくんだ。当主は飛騨守を殺すつもりだって。それで、当主と飛騨守に斬り合いをさせろ。そのどさくさで、新七、お前が当主を殺せ」
石川兄妹は黙りこんで、ただただ牛太郎に目を見張らせた。
「殺したらとっとと逃げてこい。その後におれが乗り込む。織田家に付けば飛騨守を庇護するってな」
圧倒されている新七郎を前に、牛太郎は小袖を鼻に寄せ、匂いを嗅ぎながら言葉を放った。
「命令だ。明日か明後日にでもやれ」
「わ、わかり申した」
新七郎はやや戸惑いの色を見せながら頷くと、彩に碗を差し出し、水を求めた。注がれた水をちびりとすると、
「それより、旦那様。それは一体何をやっているんだ」
と、小袖のことを言ってきた。牛太郎は匂いをすうすうと嗅いだまま、厳しい眼光で睨みつけ、答える。
「女房の匂いで気を落ち着かせているんだ。なんか文句あっか？」
「い、いや」
新七は腰を上げると、「それでは」と言葉少なく頭を下げて、立ち去った。

高山右近助重友

高槻家臣団の一人松尾新左衛門は、高山飛騨守の嫡男、高山右近助に耳打ちした。

「飛騨殿はおやかた様にお呼び出しされているようですが、危険ですぞ。おやかた様は飛騨殿をよく思っていない家臣たちとともに飛騨殿を亡き者にされる腹積もりです」

すると、右近助は間延びした声を出しながら、微笑した。

「なんともまあ」

二十一歳の優男である。色白で、骨格は華奢だ。身の危険を告げられたというのに、手にした茶碗に眺め入るその表情は、あどけなさがどこかに漂い、世間の流れにふわふわと浮いているような風情をかもしだしている。

「さもすれば、父上のことだから、黙って斬られてしまうかもしれませんなあ」

右近助は茶碗を手元に置くと、煙管に煙草の葉を詰め始めた。

「イエスに傾倒しておりますから。拙者にはよくわかりませんが」

煙草をぷかぷかと吹かし、その煙をぼんやりと見つめる右近助に、松尾新左衛門は訊ねた。

「右近殿も洗礼とやらを受けたとお聞きしましたが」

「左様。しかし、それは父上があまりにも熱心すぎるおかげであって、拙者自身はよくわかっておりませぬ」

煙は二人の頭上を漂い、やがて消えていく。

「なので、拙者は死ぬわけにはいきませんがね」

右近助は口許を緩めたまま、視線の先だけをひたりと松尾新左衛門に合わせてきた。

「お味方してくれるのでしょう、新左衛門殿」

松尾新左衛門こと、石川新七郎はこくりと頷いた。

話し合いと称して高山親子が高槻城広間に呼び出されているのは

夜、戌の刻（午後八時頃）であった。
　春の訪れを知らせる強い風が吹きつけている。
「右近」
　広間に向かう途中、飛騨守はそう言って息子の肩を掴んだ。
「なぜ、太刀を二本も差しておる」
「わからないのですか、父上」
　右近助は腰に帯びていた太刀の一本の紐を解くと、それを飛騨守に押し付けた。
「おやかた様は拙者どもを殺すつもりですよ」
　飛騨守は太刀を受け取らず、ただ黙りこんで息子を見つめた。
「雌雄を決するときです」
「馬鹿を言えっ。誰にそそのかされたかは知らぬが、もしもおやかた様がそういうつもりではなく、本心から我らとの和解を願っていると思っていたらどうするのだ」
「そのときは、おやかた様を一方的に斬り捨てるのみです」
「なんと……、貴様は……」
　肩を震わせる父に、子の右近助はじいっと見つめ入る。
「ならん！」
　飛騨守は太刀を奪い取ると、放り捨てた。
「いつまでぬるま湯に浸かるおつもりですか。時代を切り開くのは神でもイエスでもなく、己自身ですぞ」
　右近助は飛騨守を睨みつけたまま太刀をおもむろに抜くと、
「先に行って参りまする」
　広間へと駆け出した。
「やめんかっ！」
　飛騨守の制止を無視し、灯籠の火に薄暗い縁側を駆け抜けていった先に、こうこうと照った広間の明かりを障子戸が透かしていた。
　異変に気付いた近習の者二人が腰を上げ、「くせ者ォ！」「ご謀反！」と叫びつつ腰の柄に手を伸ばしたが、右近助はそれぞれを一太刀で斬り捨てた。

鮮血に染まった障子戸を開け広げると、そこには反高山の家臣たち六、七人と近習が揃っており、当主惟長も上座にいた。

「飛騨守、血迷ったかあっ！」

と、惟長が叫び、連中はすでに腰を上げていた。

「消せ！　火を消せ！」

声とともに燭台の火が一斉に消え、途端に広間は漆黒の闇に包まれた。しかし、右近助は惟長の居場所を確認していた。広間に上がり、闇の中を突っ切るが、どこからか伸びてきた刃が右腕を斬りかすめた。

柄を握る右の手から力が失われていく。右近助は顔を歪めつつも、奥歯を噛み締め、足を踏み出した。

ちらちらと映る影がある。右近助は左手だけで太刀を振り下ろした。

「うっ」

斬った。が、呻き声はあれど、手ごたえは不十分であった。返す刀をやみくもに振り抜く。生温かい血が右近助に飛んできた。

「た、助けてくれえっ！」

殺していない。右近助は歯を噛み締めてもう一歩踏み出すが、どこからか別の者に飛びつかれて態勢を失った。

「飛騨守はここだ！　斬れ！　斬れ！」

右近助に掴みかかった者が声を上げた。右近助は残っていた左手で太刀をひねり返し、その者の背中を刺した。

「右近殿！　加勢いたずぞ！」

松尾新左衛門の声とともに行燈の火が広間を染めた。示し合わせた通り、彼は高山派の家臣たちを引き連れて、反高山派の家臣たちと乱戦に持ち込んだ。

右近助はしがみついてきた者を押し剥がすと、惟長を探す。しかし、太刀が襲ってきて、それを受け止めるので精一杯であった。

「誰か惟長にとどめを！」

右近助はそう声を上げながら敵の太刀を振り払い、相手を袈裟に

斬り捨てる。
そのとき、刃と刃がぶつかり合い、血と叫びが飛び交う修羅場の中、真一文字に振り抜かれてきた太刀で右近助は首骨のすんでまで斬られた。
現実と意識が引き離されていく刹那の間で右近助は見た。自らを襲ってきた太刀の持ち主は松尾新左衛門であった。

春の風が、朽ちかけた空き家を叩く夜半、牛太郎は彩に揺り起こされた。
「なんだよお」
瞼をこすりながら体を起こすと、暗がりの中にのっそりと佇んでいる男がいる。
新七郎だった。
「旦那様。首尾よくいきました」
牛太郎はあくびをかくと、彩に明かりを灯すよう申しつけた。いろりに火が落ちると、ぼんやりと浮かび上がった新七郎の姿に牛太郎はたじろいだ。
顔から衣服にかけて血まみれであった。
「ご、ご、御苦労だった」
暗殺を命じるだけは簡単だが、実際に行動を起こした新七郎の姿にはその壮絶さが如実に表われていて、牛太郎は思わず固唾を飲み込んでしまう。
新七郎は頭を軽く下げたまま言う。
「当主惟長は家臣たちに連れられて高槻を脱出してしまい取り逃がしてしまいしたが、致命傷を負っているようで長くはないでしょうな。当主を失った城内は混乱の極みに達しておりますが、高山飛騨守は無事に生存しており、明朝にでも旦那様が赴けば、高槻城は高山飛騨守を頭にして混乱は収束されると思います」
淡々と報告する新七郎に彩が濡れ手拭いを渡し、新七郎は衣服を脱ぎ捨てると、体中の返り血を拭き取っていく。

手拭いはすぐに朱に染まった。
「それと、乱戦の中で飛騨守の嫡男、右近助重友も傷を負いました。これも存命しておりますが、首を半分斬られており、まもなく息を引き取ることでしょう」
「そうか」
「惜しい男を失くしました。右近助は若いながらも聡明で、摂津の次代を担う男は信濃守でも中川瀬兵衛でもなく、右近助だったでしょうから」
「そうか。まあ、お前が無事でなによりだ。とりあえずゆっくり休め」
「かしこまりました」
新七郎はそう言うと、彩に湯を沸かさせた。髷を解くと、ざんばらの髪を短刀で手際よく剃っていった。

己を知れば百戦あやうからず……

高槻城で起こった事件により幕臣和田惟長と反高山派の家臣団が勢力を失った翌日、高槻城に出向こうとしていた牛太郎は、先に状況を偵察しに行っていた彩の報せに驚愕した。

昨夜の事件をいち早く聞き知った茨木城の瀬兵衛が、飛騨守に使者をつかわし、今現在、面会をしている最中だという。

「あの野郎！　何を企んでいやがんだ！」

瀬兵衛がそこまで嗅覚を鋭くさせているとは思いもしなかった。

牛太郎は奥の手をひそませている。だが、そうとはいえ、このまま指をくわえて時間だけを待っていると、瀬兵衛の力が予想以上に膨らんでしまい、手の施しようがなくなることも十分考えたりえた。

「新七、京の細川兵部大輔のところに行ってこい。もし、細川のおっさんが京にいなかったら、坂本の十兵衛のところに行ってこい」

坊主頭に頬の傷と、元に戻った新七郎を出立させると、牛太郎は彩を高槻城に忍び込ませた。

日暮れに戻ってきた彩の報告によると、高山飛騨守は瀬兵衛と結託したらしい。飛騨守は高槻で表立って独立したと言える。

「ただ、それは中川瀬兵衛の旗の下に組したというわけではなく、どちらかというと不戦協定を結んだというふうです」

牛太郎はほっとした。

「まあ、あんな奴に従うわけもないだろうな。飛騨守もそこまで馬鹿じゃないってことだ」

ただ、飛騨守が織田に付くか反織田に付くかはまだわからない。瀬兵衛にしたって、牛太郎と交わしたのは口約束だけである。

それに、高槻の地を狙っていた松永弾正が横槍を入れてきそうな気がする。

「あーや、堺に行ってさゆりんを連れてこい」

「えっ？」

「さゆりさんだ」
「で、でも――」
「なんだ」
「高槻に来てもらってどうしてもらうのか言わないと、ね、姐さんはおいそれと動きません」
どこかしらさゆりを恐れているふうの彩に、牛太郎は、フン、と鼻を突き上げた。
「そんなことを言ったら、何様なんだと問い返してやれ」
「そ、そうしたら、姐さんは、私はさゆり様やって言います」
彩の言葉が、団子鼻を突き上げているさゆりを容易に思い浮かばせて、牛太郎はむかっとした。
「おれは旦那様だ！」
怒声にしゅんと縮こまってしまう彩。牛太郎はあわてて彩の両肩に手を置く。
「ご、ごめん。そんなつもりじゃなかったんだ」
彩は唇を尖らせると、つぶらな瞳をいじらしく上目にして不満を訴えてくる。牛太郎もすっかり父親のようにして彩を甘やかしてしまう。
「ごめん。違うんだ。ごめん」
「私だって旦那様と姐さんの板挟みになって辛いんです」
「だよな。そうだよな。うん。わかった。おれが行こう。うん。一緒に行こう」
ということで、結局、牛太郎は彩とともにその日中に堺に戻った。日はとっくに暮れている。堺の町に入り、屋敷の門前までやって来たものの、牛太郎は鼻の穴を膨らませて匂いを嗅ぎ取った。
「むう。メシを食っているな」
手拭いを頬冠りにし、空き家にあったつぎはぎだらけの着物をまとう牛太郎は、傍らの彩に視線を向けた。
「今行くとまずい」
そう言って彩の手を引き、門前を離れると、垣根の茂みに腰を屈

めた。
　同じく百姓娘姿の彩は訳がわからないようで、首を傾げる。
「どうして逃げるんですか」
「おそらく、あの女狐、シロジロとねじり鉢巻きと一緒に食っているだろ？」
「多分、そうですね」
「いいか、あーや。おれにはなんとなくわかるんだが、あの女狐はすぐに格好つけたがる性質だ。私はさゆり様よ、って見せたい性分なんだ。あいつがさゆり様を全開にするときはたいがい誰かが周りにいるんだ」
　彩は首をいっそう傾げる。
「あーやにはわからないだろうけどな、あいつはおれと二人きりのときは、まあ、口答えはするけれど、最後には言うことを聞くんだ」
「そうでしょうか」
「そうだ。鉄砲隊をこしらえたときだってそうだった。最初は反対していたけれど、おれが将来の夢を語ったら、あの女狐は、だったら私がやるわ、旦那様のために、ってそれこそ感動の涙を流しながら最後には言うことを聞いたんだ」
「本当ですか？　そんなことを姐さんが言うなんて信じられません」
　彩は眉をしかめて疑いをことさらに表していたが、牛太郎はフッと笑った。
「あーや、まあ、キミにはまだ早いかもしれんが、大人には大人の事情、いや、恋愛ってものがあるんだよ」
「ええっ！」
「しいっ！」
　牛太郎は人差し指を自分の唇にあてながら、もう片方の手で彩の口を塞いだ。
「声がでかい」
　彩は牛太郎の掌の向こうでもごもごと何事かを叫ぶが、牛太郎は覆いかぶせる。

「これはあーやとおれだけの秘密だよ。いや、さゆりんのためにも黙っておくんだからね。いいね？」

彩はもごもごするのをやめたが、いまだ、その目は疑い深い。

「いいね？」

念を押すと、彩は渋々というふうに頷いた。

牛太郎と彩は垣根の向こうの明かりの行方が落ち着くまで、腰をかがめてひそんでいた。

途中、堺会合衆が雇っている見廻りの雑兵に見つかったが、牛太郎は懐からすぐさま一貫文取り出してそれを押し付け、事無きを得た。

「でも、旦那様の言っていることが本当だとすると」

葉の間から屋敷内を伺いながら、彩が言う。

「ずっと荒んだ日々を送って来た姐さんが、ちょっとは女らしい日々を送れるようになったのだと思い、嬉しいです」

「うむ」

「ああ、でも、そうだったんだ。だから、姐さんはあのとき必死になって浜松まで行ったんですね。旦那様が武田様と戦っているとき」

「うむ。そうだろう」

「ハア。羨ましい。私もいつか殿方に心を寄せてみたいものです」

「うむ。そうだな。いつか、あーやにはいい男を、いや、いい武将を見繕ってやるからな」

「本当ですか！」

「しいっ」

「ほんとうですか？」

「ああ、うむ。出来る限りな。うむ。そうだな、まあ、誰がいいかな。カツゾウ君はちょっとタチが悪いし、玄蕃も馬鹿だから、うーん。あ、でも、やっぱり、あーやは嫁がせない」

「えーっ、どうしてですか」

「可愛い娘には指一本触れさせたくない」

「もう。旦那様ったら」

「フヒヒ」
「ふふ」
そんなざれあいをしているうち、居間の明かりが消えたようであった。牛太郎はもう一度人差し指を唇の前に当てると、うなずいた彩とともに腰をかがめながら歩き出し、門をくぐった。
風のおさまった静かな月明かりの下、庭先に回ると、馬屋の中にいる影がぴくりと首を起こした。
栗綱が両耳をぴんと張って、侵入者を見つめてくる。まさかの番犬ならぬ番馬の能力も持っているとしたらまずいと思い、牛太郎は小声で囁いた。
「クリツナ、おれだよ」
栗綱は月光を瞳に浴びながら、両耳を左右にひらひらと振った。
「おれだ。泥棒じゃない。おれだ」
すると、侵入者を牛太郎だと理解した栗綱は、鍵板をがつがつと叩き始めた。散歩に連れてけ、もしくは、戦場に出せということだった。
その音がやたら響いてしまい、牛太郎と彩はあわてて庭先から離れ、木陰に隠れた。
「どうしたんだあ、こんな夜に」
案の定、馬だけには敏感な栗之介が出てきた。栗綱は鍵板を叩き続けていたが、
「やめろって。何を興奮してんだよお。旦那が一生懸命頑張っているんだぞ。お前はいざってときにそなえて休んでろよ」
と、栗之介が栗綱の鼻面を撫でて、やがて、栗綱はうとうとと首を落としていく。
むう。
牛太郎はちょっぴり感激した。
栗之介が馬屋にいる隙に牛太郎と彩は屋敷に上がり込んだ。前を行く彩に習って忍び足で廊下を進んでいったが、さゆりの居室の前に辿り着く直前、牛太郎は彩の肩を掴んだ。

「あとはいい」
「で、でも、報告しなければいけないことも」
「いい。むしろ、あーやは自分の部屋に戻ってなさい。一応、まあな、報告もそうだけど、二人きりになるのは久々だし、まあ、おれもさゆりんも二人きりになりたいし、まあ、そういう大人の男女の事情だから」
牛太郎があまりにも真顔だったせいで、彩ははじらいを隠すように視線をはずした。
そうして、彩は静かにうなずき、自らの部屋に消えていく。
牛太郎はしばらくの間、その場でじっと固まり、屋敷内の静けさを確認する。やがて、足を進め、さゆりの居室の前までやって来た。
板戸に耳を傾ける。何も聞こえない。牛太郎は戸に手をかけると、そろそろと引いていった。そのとき、
びゅうっ
と、開いた隙間から刃が突き出てきて牛太郎は思わずのけ反った。
「なんのつもりや」
低い唸り声が居室の中から届いてきて、
「い、い、いや、お、お、おれだ」
「わかってるわ。なんのつもりなんや」
「い、いや、なんのつもりでもない。決して、変なつもりじゃない。ただ、その、ちょっとお話しがありまして」
「なんの話しや」
「た、高槻城のお話しです」
刃がすうっと居室の中へ消えていく。牛太郎はさゆりの殺気に一つ吐息を震わせたあと、こもれる月光だけの居室内を伺う。布団の上に座っている影が、じいっと睨みつけてきている。
牛太郎は頭を軽く下げると、中に入り、きちんと後ろに体を向けてから戸を閉めた。
「なんや。急に帰ってきて。外でこそこそしていたのなんてずっと前からわかっていたかんな。なんなんや。夜這いなら命はないで」

「いや、そんな、めっそうもない」
「なんなんや」
「えーと、そのお――」
牛太郎はひとしきりもじもじとしたあと、おもむろに両手を床につき、額をこすりつけた。
「すいませんしたあっ！　あっしの不徳の致すところで村重の謀反に失敗しあしたあっ！　ちょっと頑張ってみたんスけど、あっしじゃいっぱいいっぱいになっちゃったんで、助けてください、さゆり様っ！」
春、風の音もなく、虫の声もなく、夜はしんと静まりかえっていた。
「言葉がないわ」
ひどく淡泊なさゆりの声だった。

さようなら、駆け抜けてきたすべての日々

築田牛太郎は変わったと思う。彼に命を助けられ、素性を隠して家臣になったときから考えると、彼が手に入れた力は計り知れない。あのころはただの織田の武将でしかなかった。彼を支える者と言えば、自分か、息子の左衛門太郎ぐらいしかいなかった。

今は違う。田中宗易や今井彦右衛門という大物が堺にいれば、知恵を与える者としては小寺官兵衛という怪物もいる。京の相国寺の承兌なる者は彼の生き方の道標となっているようだ。

更に見渡せば徳川三河守。

上総介の犬となっているのはともかく、一介の武将が一国の大名にあれほど懇意にされているのはどうすればなせる技なのか。

それだけではない。彼が過去から親しくしている明智十兵衛や木下藤吉郎は、このまま行けばいずれは佐久間や柴田といった重臣たちを追い越し、上総介の副将、織田家の家老と登り詰めて行く器だ。

更には佐久間玄蕃允や森勝蔵といった血の気の多い若者たちにまで慕われている。

どうして、こんな凡将がかくも魅力的なのだろうか。かくいう自分も、その凡将に付いてきてしまった一人なのだが。

築田牛太郎は変わった。

馬鹿らしいことだが、彼自身は自分が大きく変貌したことに気付いていないらしい。彼だけではない。息子の左衛門太郎もそうだ。築田家の人間は、自分たちが織田家、いや、天下の趨勢において、重きを成していることを知らない。

「や、やっぱりさ、おれには荷が重かったんですよ。ね。だってさ、おれっていっつも誰かと一緒だったじゃん。さゆり様と一緒だったじゃないですか。こういうときって。ね。だから、助けてくださいよお」

牛太郎は勘違いしている。摂津の工作は満を持している。当初に

立てた到達点は間近にあって、今はただ、我慢して時間を待つだけなのである。

ただ、彼は怖くなってしまったのだろう。信濃守の謀反に失敗し、自らの考えで咄嗟に計略を修正したが、その重圧から逃れたいがために泣きついてきたにすぎない。

なにしろ、牛太郎が編み出した計は完璧なのだ。

「何を怯えてるんや、いまさら。あと二日か三日の辛抱やろが。じっとしい」

「じっとしていられないからここに来たんだろうが！」

「阿呆か。そんなら、私がおらんかったらどうしていたんや。じっとしていたんやろう。違うか」

「おらんかったらって、いるだろうが！」

自分の力をわかっていない。

さゆりは寝転がると布団をかぶった。

「あと、二日か三日や。それまでなんもやることはない。それまでせいぜい、びくついているんやな」

「お前は本当にこういうときに限って使えねえ奴だな！　クソがっ！」

牛太郎は戸をぴしゃりと閉めて出ていった。

朝、さゆりは縁側に立ち、つぼみがほころび始めた桜の木をぼんやりと眺めていた。

「春だねえ、さゆりちゃん」

庭先を竹箒で掃いていた四郎次郎が、さゆりの視線の先に気付いて声をかけてきた。

「そうやな。それにしたって、あんたも毎朝よくやるな。商売で忙しいっていうのに」

「そりゃあ、あっしがやらなくちゃ誰もいないじゃないの。さゆりちゃんや彩は仕事で忙しいんだからさあ」

四郎次郎は鼻唄でも口ずさみだしそうな軽快さで箒を動かしてい

く。
「健気やな。そんだけ働いても、あんたはあの人に殴られるんやから」
「さゆりちゃん、物は考えようじゃないの。だって、旦那様が殴れる人間はあっししかいないんだよ。あっしがいなくなったら、旦那様は旦那様じゃなくなっちゃうよ」
さゆりは笑った。
「本当や。物は考えようや」
「そんなことより、昨晩、旦那様の怒鳴り声が聞こえたんだけど、旦那様は帰ってきたの？」
「そや。帰ってきおった」
「うまくいったのかい。高槻は」
「ああ、うまくいった」
「そっかあ」
四郎次郎は晴れ渡った朝空を呆けるように眺めて、笑った。
「いよいよ旦那様も明智様や木下様みたいに、織田家中に名乗りを上げるなあ」
「それは期待しすぎや」
さゆりは笑った。
「そんなことを夢見るより、早う朝食の支度をしたほうがええで。あの人、帰ってきているんやからな」
「そうだそうだ。旦那様に怒鳴られちゃうや」
四郎次郎は箒を放り捨てると、あわてて縁側に駆け上がり、屋敷の中へ消えていった。
屋敷の屋根を越えてきた朝日が、小さな庭に光をふんだんに注いでいく。雀が、一羽、二羽と、どこからかやってきて、春の朝は賑やかになりつつある。
その中で、さゆりは飛び跳ねる雀をじっと見つめた。
摂津の攻略が終わったら、自分はここにもどこにも必要なくなる。
自分は男でも女でもない。もしも本当に吉田早之介であったら、

何も気兼ねすることなく、これからも牛太郎の与力として簗田家を盛り立てていき、しいては簗田家臣として自分の家を興すのであろう。

もしも、女であったら。

――。

拾われた命。

その使いようは、自分を拾った情けない男を、それなりに助けてやることであった。

摂津池田で捕らわれたときから始まり、火縄銃を調達したいと言い出して一緒に奔走し鉄砲隊をこしらえた。金ヶ崎での死地をくぐり抜け、姉川では共に勝利を目指した。

そして、浜松。自殺行為に走ろうとしている彼を救った。

駆け抜けてきたすべての日々がありありと浮かんでくる。

「私がいなかったらとっくに死んでいたよね」

地面の何かを取り合って、争いつつついばんでいる二羽の雀を眺めながら、さゆりは口許を緩めて微笑んだ。

「でも、もう、大丈夫だよね」

さゆりんはやっぱり女でいたほうがいい。やっぱり、お前は女だ。もう、いくさ場には出るな。もう、ゆっくりしろ。

「女でいるにはこくすぎるもの」

馬鹿な男。さっさと追い出してくれればどれほど楽だったか。

「どうした」

栗之介が栗綱を連れて散歩から帰ってきた。さゆりはあわてて瞼の下をぬぐう。

「なんで、お前なんかが泣いているんだ」

朴訥な栗之介でも、さゆりの普段にない姿に異変を感じたらしい。栗綱の口輪を手にしたまま、呆然とさゆりを見つめてくる。

「泣いてなんかいないわ」

栗之介はただ見つめてくる。栗綱も澄んだ瞳で見つめてくる。

「春の匂いがきつかっただけや」

すると、栗綱が栗之介にまるで話しかけるように顔をすり寄せる。

さゆりはその無邪気な動物に悟られてしまったと思い、そこから逃げ出した。

「おい。さゆりんはどこに行ったんだ」
牛太郎は出かけようとしていた四郎次郎を呼び止めた。
「朝メシにも来なかったし、部屋に行ったらすっからかんだぞ。どこに行ったんだ」
「えっ。朝、庭先にいましたよ。なんか、ぼけえっとしてたッスけど」
「どこに行ったか訊いているんだよっ！」
「そ、そんなのわからないッスよお。なんか、仕事でもしに行ったんじゃないんスかあ。てか、あっしも仕事ッスから」
四郎次郎が逃げるように飛び出していき、牛太郎は地団駄を踏んだ。さゆりがごちゃごちゃ言おうと、とにかく早急に高槻に連れて行かなくちゃならない。吉田早之介のおべんちゃらで高山飛騨守を織田方に付けなくてはならない。
「クソッ。こんな一大事に何をやってやがんだっ」
牛太郎は廊下を踏み鳴らしながら駆け回り、ありとあらゆる部屋の戸を開けていってさゆりを探した。
どこにもいない。
いないどころか、おかしい。さゆりの部屋に再び上がり込んだ牛太郎は、押入れを叩き開けると、布団を力任せに引っ張り出した。
布団しかない。何もない。
息遣いを荒くしていると彩がやって来た。
「どうしたのですか、旦那様」
牛太郎はぜえぜえと呼吸を乱すだけで、呆然と突っ立っている。
「ね、姐さんは……」
「いないっ！」
牛太郎は意味がわからなすぎて、視線の行き先を混乱させて、部屋をぐるぐると見渡した。

「いないっいないっいないっ！」
「ま、まさか、姐さん……」
牛太郎は窓辺の障子戸を叩き開けた。
「どこだ！　どこに消えやがった！」
「だ、旦那様、姐さんは……」
「あ、そっか。あの野郎、気をきかして高槻に行ったんだな。まったく、ツンデレなんだからよ。しょうがない奴だな」
牛太郎は一人で勝手にうなずき、しょうがない奴だ、しょうがない奴だと呟きながら、彩を押しのけて部屋を出る。
「旦那様！」
彩が追いかけてくる。
「姐さんは、姐さんは――」
「しょうがない奴だ。本当にしょうがない奴だ」
「旦那様、姐さんはもう帰ってこないんじゃ」
「あっ、そうだっ！　せっかく堺に戻ってきたんだから久々にタナカのところにでも行ってやるか！　いろいろと報せなくちゃならないかんな、うん！」
「旦那様っ！」
牛太郎は居間の前で足を止めると、ぽけえっとした顔で彩に振り向いた。
「なんだい、あーや。そんなに騒いで」
「姐さんはもう帰ってこないんじゃないんですか！」
「ほっほっほ。キミは何を意味不明なことを言っているんだい」
「だって、もぬけの殻だったじゃないですか！」
「うーむ。言っている意味がよくわからないなあ」
「おい、旦那」
と、栗之介の声がして目を向けると、栗之介はそこにいたのかどうかもわからかったほど薄暗い居間の中に憮然と突っ立っていた。
その視線の先には床間に飾られた鞍がある。
「見てみろよ」

促されて、牛太郎はどこか恐々と鞍に視線をやった。
黒漆の居木に、散りばめられた光沢貝がひっそりと映えている。
「なんだよ。その鞍がどうしたんだ」
「よく見てみろって」
牛太郎は舌を打ちながら居間に入ると、床間の前に突っ立って、鞍を見つめ下ろした。
鞍に一輪の花が添えられている。
「なんだよ、これ……」
気付いた牛太郎は一瞬呆然としたが、嫌な予感がしてあわてて花を手に取った。
よく見てみると、紙をむすんで作られた造花であった。
「なんだよ。なんなんだよ、これは！」
彩が駆け寄ってきて、牛太郎が手にしている造花を覗きこむと、ぼそりと言った。
「これって姫早百合（ひめさゆり）のつもりじゃ」
牛太郎は唇を震わせて、折り紙の花を見つめるしかない。
彩が見上げてきて言う。
「姐さんの好きな花です」
そうして、彩は続ける。
百合の花にちなんだ和歌が、古来の万葉集にはあり、和歌などに何の知識も持っていないさゆりなのに、一つだけ自分の呼び名にちなんで、気に入っている歌があるのだと。

夏の野の茂みに咲ける姫百合の
知らえぬ恋は苦しきものぞ

（夏の野の茂みにひっそりと咲いている姫百合のように、人に知られない恋は苦しいことなんです）

「キミはいったい何を言っているんだい？」

牛太郎は笑う。
「あーや」
百合の造花を持つ牛太郎の手は震える。
「キミはいったい何を言っているんだい？」
彩は苦渋に表情を満たして、ただ黙って牛太郎を見上げてくる。
牛太郎の頭の中は真っ白だった。
「あいつがこんな粋な真似をするわけないだろうが」
「旦那」
栗之介がぼそりと呟いた。
「あいつも女だったんだ」
「うるせえっ！」
牛太郎は造花を床に叩きつけると、居間を飛び出した。屋敷中を駆け回り、ところかまわず戸を開けていった。
「どこだ！」
いない。
「どこにいやがる！」
いない。どこにもいない。いるはずがない。
さゆりの不在が確信に変わっていく。変わっていくごとに、牛太郎は身を切り刻まれていくような思いになっていく。
気持ちが急き立てられて、牛太郎は戸を開けていく。早く見つけなければ、もうずっと、見つからない。そんな気がして、急き立てられる。
やがて、問いが生まれた。
どうして、いなくなったんだ。
理由がなければ、その理由を教えてくれなければ、自分はこの先どうやって生きていけばいいのか。
「いや、違う。絶対に違う。さゆりんはいなくなっていない」
しかし、牛太郎のその声は涙声だった。

こんなとき、牛太郎が唯一出来ることは、布団をかぶって丸まり、世間から自分を隔離することであった。

現実を直視できない。ちっぽけな暗闇の中で頭を抱えておびえる。どうにもできない現実が今もなお続いていることに恐怖する。

生きていくということがときに死することよりも恐ろしいことを、牛太郎は思い知らされる。

昨日までさゆりはいた。いるのが当然だった。ところが、今日はいない。明日もいない。この先ずっといない。

いて当然だった人間が、この先ずっといない。当然じゃない日々がすでに始まっており、じゃあ、当然の中で生きていた自分は、明日からどうやって生きればいいのだ。

そして、昨日までの当然は、気付いてみれば実は当然ではなかった。

夏の野の茂みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ

信じたくない。さゆりがそんな思いでいたとは考えたくない。もしも、本当にさゆりが「姫百合」だったとしたら、

おれはなんにも見えていなかった。

さゆりは牛太郎にとってただの部下ではない。

とてもいびつで、とても特別な関係で、皮肉っぽい滑稽な愛情で結ばれていた。

「私には帰るところなんてない。何もかも失ったんや。だから、あんたを殺すことだけが私の生きる目的や」

「勘違いするのもやめえ。私はもう女やない。あんたの家来や」

「殺そうと思っていたら、隙だらけのあんたなんかとうに殺しておるわ」

「あんたなんかに抱かれるなんて気持ち悪くてしょうがないわ！もう絶対にこっちに来んなや！」

「あんたが死んだら、私らはどうするんやあっ！」
「殿、どうしたのです」
「小ざかしい真似をするからしっぺ返しをくらうんや。ま、黙っといてやるわ。言ってしまったら、あれだけ大層にしていたあんたが可哀想な目に合うからな」
「殿、おかしな真似をしてはいけませんぞ」
「嫌やっ！　何と言われようと嫌やっ！」
「あんたは昔から私に惚れているやろ。その証拠に嫌がらないやんか」
「どういうことや、これは。なんで、あんたがこんなに着物を持っているんや。どういうことなんや。何のつもりなんや」
「鬱陶しい。堺を飛び出しておいて偉そうなこと言うなや。あんたに言われて手を汚している新七の気持ちも考えてみいや！　誰が一番苦しいんや！　新七には妹の彩がいるんやからな！　そこのところわかってから物を言いや！　この阿呆！」
「生きざまならよう見といてやったわ。ふふ。惚れ直したで」
牛太郎の瞼からするりと涙がこぼれ落ちた。ただただ、とめどなくあふれた。今までに流したことのない涙だと、牛太郎は思った。
思い出が、ただの思い出だけになっていく。ただの思い出には何の生産性も見当たらなかった。
何の生産性も。
思い出が、見つめることしかできないものになっている。
悲しい。味わったことのない狂おしい悲しさである。でも、流れている涙がやたら澄んでいた。なんの濁りもない涙だった。
牛太郎は初めて知った。自分でも、こんな清らかな心もちになれることを。悲しみというものは、突き抜けても突き抜けても清らかすぎる悲しみでしかないことを。
ただ、流れる時間は悲しみに浸り続けることを許してはくれない。まがまがしい現実が蘇ってきて、体中を絞られるような苦しみが襲いかかってくる。

「おれはどうしたらいいんだ」
牛太郎は布団を握り締めた。
天涯孤独のさゆりを再び孤独にさせて、自分はのうのうと生きていけるだろうか。確かに、自分には梓がいるし、太郎もいる。愛情に不自由ない生活が待っていてくれる。
でも、さゆりは孤独だ。
孤独のさゆりと同じ時間を生きていくことができるのか。いつかどこかで孤独を抱えているさゆりがいるこの世界で、自分は梓を抱くことなど、孫娘を抱き上げることなどできるだろうか。
簗田牛太郎という人間は、この戦国時代にあって一人ではやっていけない。だからこそ、女房の梓はもちろんのこと、血が繋がっていない左衛門太郎でも息子であって、駒は孫娘であって、あいりも貞も、四郎次郎も栗之介も新七郎も彩も、さゆりも、簗田家という家族だと信じているのだ。
「さゆりん」
牛太郎は顔を埋めて嗚咽する。
「帰ってきてくれよお」
「旦那様」
新七郎の声だった。しかし、牛太郎は構わずに泣く。
「彩から聞きました。一日中、そうしてばかりいては体に毒ですぞ」
牛太郎は泣くだけである。
「旦那様、お気持ちはわかりますが、細川兵部大輔様と荒木信濃守殿を連れて参りました。今夜ばかりは仕方ないですが、明日の朝一番には茨木城に向かわなければなりません。旦那様、せめて、明朝、信濃守殿にお会いしてくだされ。そうしなければ示しが付きませぬ」
牛太郎は嗚咽をどうにかこらえようとして唇を噛み締める。
「し、新七」
「はい」
「おれは、おれは、駄目な男か？」
「人に愛される男、すなわち、天下に愛される男です。さゆりが愛

した人間は今も昔も旦那様の他にはおりませぬ。あの女でさえ愛した男です」

牛太郎は声をあげてむせび泣くしかなかった。

「それでは」

新七郎が去っても、牛太郎は一人泣きじゃくった。

重かった。やくざな顔つきの新七郎のくせに、その言葉は重かった。

天下に愛されている男。それはつまり、自分を必要としている人間がこの世の中に大勢いるということだ。

さゆりを再び孤独にさせて、自分はのうのうと生きていけるだろうか。

否、人生はのうのうと生きていけるほど甘くはない。たとえ人は誰かに愛されていても、それと同時に、孤独も背負う。

そう、さゆりのいない孤独。誰かのいない孤独。悲しみは一人で噛み締めなくてはならない孤独。

俺は一生涯戦い続けるぞ――。

かつて、自らを尾張のうつけと嘲っていた織田上総介信長は、いつしか、己を超越し、覇王への道を駆け抜け始めた。

簗田牛太郎政綱は、そんな上総介の家臣であった。

そう。戦い続けなければならない。たとえ、上総介の家臣でなくても、戦い続けなければならない。人は誰しも戦い続けているから。

昨日までのことはなくなった。だが、明日、やらなければならないことがある。自分のために、家族のために、去っていったさゆりのために、やらなければならない。

天下布武を。

表裏のはて

数人の従者と近習を連れて領内を見回ったのち、茨木城に戻って来た中川瀬兵衛を待ち受けていたのは、まさしく青天の霹靂であった。

出迎えがない。頭を下げてきたのは門番の兵卒だけである。

「どういうことだ」

瀬兵衛は馬上で呟いたが、このときはさほど気に留めていなかった。配下や兵卒たちは自分が城主となったことに慣れていないから、まあ、仕方ないことだろう。そのぐらいであった。

異変を知ったのは御殿の前で馬を下りてからであった。

ぞんざいな素振りで歩み寄ってきたのは元々信濃守の与力であった者で、平伏はおろか、頭も下げずに言い放ってきた。

「殿がお待ちだ。さっさとせんか」

瀬兵衛は一瞬、何を言われたのか理解できなかった。その者は昨日までは瀬兵衛を「殿」と呼んでいたのである。

与力はぷいと顔を背けると、御殿の中へすたすたと消えていった。

瀬兵衛は当然怒りに震えた。が、理解しがたい行動をされたゆえ、その怒りは不安定でもあった。

「どういうことだ！」

雄叫びを上げると、与力を追いかけるようにしてずかずかと御殿の中へ入っていく。

屋敷内はしんとしていた。奉公人も女中の姿もない。

おかしい。

瀬兵衛はあわてた。何かが起きてしまっていることにようやく気付いた。足は自然、大広間へと向かう。

広間はなぜか信濃守の旧近習二人が番人を務めており、障子戸は開け広げられていた。

床に膝をつける近習二人の冷たい視線を受けながら瀬兵衛は広間

の前に立った。
開いた口がふさがらなかった。
大広間には荒木家の与力から奉公人までが居揃っており、それを統べる上座に座っているのは、荒木信濃守村重である。
厳粛な空間を統率している信濃守は、声を上げた。
「せ、瀬兵衛っ！」
信濃守は相変わらずどもっているが、瀬兵衛は立ちつくすしかない。
「わ、我の、る、留守の間、い、い、茨木城の守りを務め、大儀であった！」
城内の人間の大勢がひしめき合う中、信濃守にもっとも近い場所にいるのは細川兵部大輔と簗田左衛門尉である。
このとき瀬兵衛は、もはや茨木城主ではなくなった。池田家の家臣でもなかった。荒木信濃守の家臣にさせられてしまっていた。
そもそも、茨木城に詰める四千の兵の大半は荒木家の所属なのである。
この場において、瀬兵衛はたった一人。生き残るには、床に両膝を付けるしかない。
「は、ははっ」
「お、表を上げい、瀬兵衛」
瀬兵衛は奥歯を噛みしめながら重たい頭をゆっくりと上げる。
「瀬兵衛！　お、お主が留守を守っている間、わ、我は織田、か、上総介様から摂津の所領切り取り次第の御免状を頂いた！」
視界に入るのは簗田左衛門尉の冷めた顔つき。
やられた――。率直にそう思うしかなかった。
すべては左衛門尉の掌の上で転がされていた。池田二十一人衆で権勢を失った信濃守を出奔させたと見せかけて、左衛門尉は、信濃守を織田上総介に引き合わせ、信濃守に織田方の摂津の統治者とさせた。
だが、池田を追い出された信濃守に力はない。だから、自分を使

って茨木にその礎を築かせたのだ。
瀬兵衛は逆らいようがない。池田家の中で勝手気ままを働いた彼は、もはや織田方に付くしかないのだが、その織田上総介は信濃守を摂津統治者にさせると言っているのだ。
細川兵部大輔がこの場にいるのが、それをはっきりと表している。
「せ、瀬兵衛！　こ、今後も、あ、荒木家のために、お、お主の、お主の、力を、頼りにしているぞ！」
「ははっ」
瀬兵衛は頭を下げながら、拳を握り締め、悔しさに涙を浮かべた。

反抗ののろしを上げた足利義昭を従属せしめるために、岐阜を立って京を目指していた上総介の軍を、細川兵部は荒木信濃守と共に近江大津の逢坂というところで出迎えていた。
中川瀬兵衛が池田の権力闘争にかまけている間に、信濃守を上総介に引き合わせるという築田左衛門尉の案である。
上総介から摂津統治を任ぜられれば、信濃守は労せずして北摂津の覇権を握る。
兵部はいささか不安であった。左衛門尉はまるで引き合わせるだけで構わないような言いぶりであったが、果たして上総介は荒木信濃守を認めるだろうかと。
なにしろ、上総介は無能な人間を嫌う。信濃守は残念ながら、見た目だけでは無能である。
だが、出迎えを受けた上総介は上機嫌であった。
「兵部、御苦労であった」
黒塗りの甲冑に身を固めて床几に座る上総介に、いつもの威圧感はない。足利幕府を正式に見限った兵部と、織田方に付くことを誓った信濃守が平伏する前で、口許をほころばせている。
「お前が荒木信濃守か」
「は、はいっ。せ、摂津国は、じゅ、じゅ、十三郡分国にて、せ、

拙者は、城を、城を、構え兵卒を集めており、そ、それがしに、切り、切り取りを申し付けてくだ、くだされば、身命をとしまする」

「殊勝だ」

上総介はすっくと腰を上げると、傍らに置いていた小姓に腕を出した。小姓は太刀を差し出し、上総介がそれを鞘からすっと抜く。

「信濃守、お前は茶碗に目がないと聞くが、太刀の目利きはどうだ」

春の日差しを刃にぎらぎらと跳ね返させながら、上総介は笑っている。

「い、一瞥、し、しただけでは、ど、どうにも」

「そうか。ならば教えてやろう。これは郷義弘だ」

兵部も信濃守もはっとした。郷義弘は南北朝時代の刀工で、彼が残した作品は大名たちがこぞって求めている天下の名物である。

「くれてやる」

まさか、であった。入手が困難な郷義弘をたかだか北摂津の豪族にくれてやるのである。兵部は信じられない思いであった。

だが、上総介は郷義弘の刃先で皿に盛られていた饅頭を三個突き刺し、それを平伏する信濃守に向けてきた。

「食え」

何を考えているのだろう、兵部は青ざめた。信濃守を恐る恐る見た。

「は、は、はいっ。ありがたく、ちょ、ちょ、ちょうだいしますっ」

信濃守は大口を開けると、両手は地に付けたまま刃に刺さった饅頭をほうばった。

上総介は甲高い声で大笑いした。

上総介が何を狙ってそのような真似をしたか、兵部には到底理解できない。だが、上総介の暴虐ぶりと、信濃守の物欲ぶりが如実に表れている、奇妙でうすら寒い光景であった。

恐ろしい。教養人の兵部にとっては、上総介も信濃守も常軌を逸していた。

そして、簗田左衛門尉も。

兵部は信濃守とともに摂津に戻るすがら、何人たりとも殺さずに荒木信濃守の謀反を成し遂げさせた簗田左衛門尉の剛腕は理屈では証明できない危うさを感じ始めていた。

これでよかったのだろうか。兵部は自問自答する。いや、完璧すぎるほどよかったであろう。だが、完璧すぎるのが逆に怖い。

「左衛門尉殿」

大広間での演出を見届けたあと、二人きりになった。

「中川瀬兵衛がそなたに抱いた恨みは計り知れませんぞ」

よかれと思って兵部はそう言った。が、左衛門尉が沈黙のままに兵部を見つめてくる眼差しの威圧感はすさまじかった。瞳は瞼にがっしりと据わっており、その眼光は刃のように鋭い。

兵部は思わず視線を外してしまう。

一体、この男は何者なのだ。愚将ではないのか。

左衛門尉の存在の奥には激しさが見え隠れしている。謀略家にはあるまじき激しさだ。

たとえば、上総介の種類と似ている。

愚将と評判の男であったはずであった。しかし、この愚将は上総介とかなり近い距離にいる。

逢坂で機嫌よく郷義弘を信濃守にくれてやった上総介だが、おそらく、上総介は荒木信濃守という男をすでに知っていた。

知っていた、つまり、前々から左衛門尉が上総介に摂津工作のあらましを伝えていたに違いない。

上総介は有能な人間を好むが、無能は嫌う。

愚将と評判の簗田左衛門尉は、実は上総介の懐刀なのではないか。敵を騙すには味方をも騙すのが古来からの定石だが、上総介と左衛門尉を繋いでいる主従の関係は、まさしくそうだ。この二人は織田家中の人間たちを騙している。

兵部は思う。自分は親友である明智十兵衛ほど将校としても政治家としても有能ではない。足利幕府を見限ったものの、織田家の中で飛び抜けた躍進を遂げたいとも考えていない。

ただ、上総介に気に入られている十兵衛は、自分の実力を知っているゆえに名を上げようという男らしい野心を抱いている。

出世頭の木下藤吉郎もそうだ。織田家の栄達は己の栄達とばかりに華々しい功績を上げている。

だが、簗田左衛門尉はなんなのか。上総介の懐刀のような存在であるのに、それをひけらかそうともしないし、むしろ、ひっそりと謀略に徹している。

野心はないのか。

「細川さん」

左衛門尉がようやく口を開いた。

「あっしが瀬兵衛に恨まれたところで、世の中はもう動いている。瀬兵衛ごときにこの流れは止められませんよ」

兵部は直感した。

この男は時代の黒幕になる。

茨木城での茶番劇を終えたのち、摂津茨木を領し織田家の配下となった荒木信濃守は、高槻城の高山飛騨守に牛太郎を使わした。

牛太郎は述べた。

織田家は北摂津を領することになった。ゆえ、飛騨守は荒木信濃守の与力となり高槻をそのまま統治しろ。

飛騨守に断るすべはない。幕臣の惟政に反逆してしまった以上、生き長らえるには織田方に付くしかなく、それがたとえ宿敵の荒木信濃守の配下であろうと、背に腹は代えられなかった。

「かしこまった」

簗田家の摂津攻略はひとまずの目的をようやく遂げた。

戦火の中心として荒廃の限りを尽くした高槻の地に春の甘い風がゆっくりと流れていた。

高槻城の門前にて、新七郎が季節の風にぼんやりと打たれていると、役目を終えた牛太郎が栗綱と栗之介に導かれて戻ってきた。

「次は小谷城攻めだ。おれはしばらく堺に残るけど、お前は太郎の

ところに戻れ」
新七郎は無言のまま頭を下げた。
主人はあれ以来変わった。口数が少なくなり、あれだけ激しかった感情の起伏も鳴りをひそめている。まるで、感情をその内に押しこめており、謀略家の凄味だけが日に日に増していっている。
人間とはこうして前に進んでいくものなのか。
栗綱の足音を耳にしながら、新七郎は視線を伏せてただただ後を付いていく。
高槻にいい思い出はない。
無常の風が新七郎の頬を撫でていく。
「旦那様」
新七郎は牛太郎を呼び止めた。牛太郎はただ黙って新七郎を栗綱の上から見下ろしてくる。
「あの空き家に忘れ物をしてしまいました。旦那様は先に堺に戻ってくだされ」
牛太郎はじいっと新七郎を見つめてくる。なんだか、その冷たい目に見透かされているようだった。
「わかった。ゆっくりしていけ」
「ありがとうございます」
新七郎は頭を下げると、主人の姿が見えなくなるまで見送った。
何人たりの命も殺めずに成し遂げたこの摂津攻略。荒木信濃守や細川兵部大輔の中ではそうなっている。
しかし、彼らは何も見えていない。高槻では多くの犠牲が払われた。人の命も、誰かの尊厳も。
新七郎は空き家とは違う方向に足を進めた。
ゆえという女であった。元は京の宿場で働いていた娘。新七郎が目を付けたのは、その天真爛漫な笑顔であった。
和田惟増を殺すために必要であった。
ゆえは新七郎を信じていた。
「新さんのためなら」

高槻城の和田惟長の傍に上がるよう指示すると、ゆえは目尻を柔らかくほぐし、にこりと微笑んだ。

「俺のためなら、か」

ゆえを呼び出し、彼女の前で太刀を鞘から抜いたとき、ゆえは叫びも喚きもしなかった。

ただただ、微笑んで見つめてくるだけだった。

新七郎はためらった。しかし、やらなければならなかった。目的のため、簗田家のため、自分のために。

「ゆえ、すまん」

「お元気で。新さん」

自分の宿命を知っていたのか、ゆえは。新七郎は涙ながらにゆえを斬った。

寺の墓地は、高槻での戦火のあおりを受けて、卒婆塔が無数に立てられていた。キリシタンの多い地でもあるが、死後の世界を宗教にこだわれないほどに、多くの民衆が死んだ。

ゆえの墓もここにある。

命を失っていった人々を慰めるかのように、桜の大木が花びらを風に舞わせていた。

「ゆえ」

新七郎は突っ立ったまま、ささやいた。

「さらばだ」

胸の上で十字を切ると、拳を握った。

「不憫なもんやな」

はっとして振り向くと、卒婆塔が無数に並ぶ中で半纏姿のさゆりがにやにやと笑いながら立っていた。

「その子はキリシタンなのに、仏の墓で眠っておるんか。あんた、南蛮寺に移してやりい」

新七郎は黙ってさゆりを睨む。

「昔の同僚のよしみや。最後に別れを告げに来てやったわ」

「お前、旦那様のあとをずっと付けていたな」

「そや。最後の最後でへまをやらかしかねないかんな。ま、あの人は一皮剥けたみたいや。もう、私がいなくても大丈夫やろ」
後ろで束ねた髪の尾が、桜の花びらを乗せる風に揺れていた。さゆりは微笑んだまま新七郎に背を向け、立ち去ろうとした。
「それでいいのか、お前は」
「何がや」
「行く当てもないんだろう。お前の帰る場所は旦那様のところしかないだろうが。それでもいいのか」
さゆりは背中だけを見せて、しばらくは黙って風に打たれていたが、横顔だけを振り向かせてきて言った。
「甲賀流のくのいちになったときから、私には行く当ても帰る場所もない。流れ流れることが私の生きる道や」
「止めはしない。止めはしないが、旦那様はいつだってお前を待っているからな」
さゆりははかなげに笑うと、
「達者でな」
そう言って立ち去っていった。
が、そのとき、唐突にさゆりがばさりと倒れた。
「おいっ」
新七郎は駆け寄った。瞼を瞑って倒れ込んでいるさゆりを抱きかかえると、彼女の首には細い針が刺さっていた。
まさか、甲賀流の追手か。新七郎は懐に手を入れながら、腰を上げて辺りを見回した。
「ふふ」
卒婆塔の間から小柄な女が笑いとともにゆらりと現れた。
「兄さんも姐さんも腕が落ちましたね。私にあとを付けられていることに気付かないなんて」
矢筒を手にしているのは、彩だった。

堺に戻ろうとしていた牛太郎であったが、途中、なぜか堺にいるはずの彩が背後から追いかけてきて、

「姐さんを捕まえました。急ぎ、高槻の例の空き家に行きましょう！」

「う、嘘だろ！」

ここ数日、塞ぎこんでいた牛太郎は、喜びのあまり発狂した。栗之介に栗綱のきびすを返させると、栗綱を小走りに走らせる。

彩が話したところによると、彼女はずっと兄の新七郎のあとを付けていた。というのも、さゆりは失踪したものの、性格上、摂津工作が最後まで成し遂げられるかどうか心配でどこからか様子を見ているはずだと彩は踏み、ならば、それが成し遂げられたあと、もしも、最後に別れの言葉をかけに来るとしたら新七郎だと思った。

「姐さんよりも私のほうが一枚上手だったってことです」

彩は嬉しそうに言う。牛太郎はうんうんと大きくうなずく。

高槻の空き家に到着すると、牛太郎は勢い余って馬上から転げ落ちながらも、おたおたと朽ちかけた戸に駆け寄り、力任せに開け広げた。

「この女狐野郎っ！」

と、減らず口を叩いた牛太郎だったが、薄暗い居土間はさゆりが仰向けに寝ており、傍らに新七郎が座っていて、しんとしていた。

牛太郎は拍子抜けしてしまい、立ちつくす。

「姐さんは眠り薬で寝ているだけです」

「そ、そっか」

牛太郎は唇を結んだ。

「そっか。そっか」

牛太郎はただただ首を縦に振ってうなずき、何やら拭いきれない感激にじわじわと身を絞られていった。

「そっか」
鼻をすする。瞼をぬぐう。
「また泣いてんのかよ、旦那」
背後で栗之介が笑っていた。
「泣いてねえっ！　目がかゆいだけだ！」
彩がつぶらな瞳を潤ませて牛太郎を見上げてくる。牛太郎は皆から顔を背け、目をごしごしとこすった。
「あー、かゆい。かゆくてたまらん。花粉症だな。うん」
「旦那様」
腰を上げた新七郎が歩み寄ってきて、頬の傷を歪ませて笑んだ。
「我らは先に堺に戻っています。あいつがいるから護衛はいらんでしょう」
牛太郎はうなずいた。目をこすりながらうなずいた。
栗綱だけを置いて、新七郎や彩、栗之介が去っていくと、牛太郎は玄関に立ちつくしたまま、居土間に寝ているさゆりを見つめる。
起きたら、何を訊けばいいんだろう。何を話せばいいんだろう。
そんなことを考えて戸惑っていると、栗綱がぬうっと首を入れてきて、じいっとさゆりを見つめる。
「なんだよ、お前」
無垢な瞳でさゆりを見つめている栗綱の鼻面を、牛太郎は撫でてやった。
「さゆりんだぞ」
栗綱は瞳をちらりと牛太郎に向けてきた。首を玄関の外に出すと、そのままそこに脚を折り畳んで座り込み、出入り口を塞ぐかのようであった。
「そうだな、また逃げ出さないようにしないとな。もし、逃げ出すような真似をしたら、お前が捕まえてくれよな」
また、ちらりと見上げてきたあと、栗綱は首を体の中に丸め込んで瞼を閉じた。
可愛いんだか、可愛くないんだか。

牛太郎は居士間に上がり込むと、煎餅布団の上で半纏をかけてすやすやと眠るさゆりの傍らに腰を下ろした。

「馬鹿野郎……」

と、鼻をすすりあげる。

「何が気に入らなかったか知らねえけどな、黙って出ていく奴があるか」

さゆりの寝顔は普段の冷徹さが微塵もなく、健やかな女の顔であった。

夏の野の茂みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ

「何が姫百合だ。お前はさゆりんだろうが。変な真似をしやがって。そりゃあ、あずにゃんがいたりして、いろいろな束縛はあるけどな、おれはお前のことだって好きなんだからな。嫌いだけど好きなんだからな」

牛太郎はさゆりの額に手を伸ばすと、乾いた髪を撫でた。思っていたより、彼女の頭は牛太郎の掌に比べてすこぶる小さかった。

今後、どうすればいいのかわからない。さゆりの思いを受け止めるためにはどうすればいいのかわからない。梓がいる以上、側室なんて言語道断であるし、そもそもさゆりを女房として見られない。

「お前はそれをわかっていたってことか」

さゆりはただただすやすやと寝息を立てる。

牛太郎は重々しい吐息をついた。まさかこんなことになるなんて、さゆりを配下にしたときには思いもしなかった。

あれだけ色恋沙汰には縁のなかった自分なのに、よもやこんなことで悩むとは。

まあ、今後のことは今後考えればいいとして、今は二人きりである。

牛太郎は塞ぎこんでいたのもどこへやら、にやにやと笑い始めた。岐阜を出て摂津にやって来てから三カ月余、すっかり御無沙汰である。いや、普段から諸国を駆け回りつつ、恐妻の影に怯えている牛太郎は、まったく遊んでいない。

牛太郎はそろりそろりとさゆりの首元に鼻先を近づけた。
「何をやっているんや！」
急にさゆりの瞼が開いた。即座に両手が伸びてきて、牛太郎の首をがしっと掴んだ。
「私が寝ているからって変な真似しくさって！　あんたは相変わらず下衆やなっ！」
ぎりぎりと首を絞められ、牛太郎は口から泡を吹いた。
「ご、ごめん。か、か、勘弁」
さゆりが手を離し、牛太郎はごほごほとむせた。殺されるかと思った。
さゆりは寝返りを打ち、牛太郎に背中を向けてくる。
「阿呆。なんであんたはいつもそうなんや」
「ひ、ひ、卑怯だぞっ！　寝たふりしやがって！」
「阿呆」
さゆりがただ呟くだけで、牛太郎はなんだか拍子抜けしてしまう。
しばらく、言葉はなかった。
さゆりの背中と牛太郎の視線の間には、解き難い何重もの紐が絡み合っているような互いの感情だけが流れていた。
「なあ」
牛太郎はぼそりと訊ねた。
「どこに行くつもりだったんだ」
「あんたに関係ないやろ」
「なんでだ」
「関係ないからや」
「わかった。だったら出て行け。もう何も訊かない」
さゆりは振り返ってきて、睨みをきかせた。
「いや、嘘です。出て行かないでください」
牛太郎はうつむく。
「おれにはさゆりんが必要なんだ。さゆりんを苦しませているかもしれないけれど、おれには必要なんだ。吉田早之介じゃない。さゆ

りんが必要なんだ」
　さゆりはじっと見つめてくる。
「あずにゃんには言っておくから。さゆりんっていう好きな人ができちゃったんでどうにかしてくださいって言っておくから。だから、どこにも行かないでくれ」
　うなだれる牛太郎を、さゆりはしばらく黙って見つめたあと、のそりと起き上がった。半纏を袖は通さず背負いこみ、体をその中で丸める。口をへの字に曲げたまま、猫のような丸い目でじっと牛太郎を睨みつけてくる。
「本当なんやろうな」
　鬼気迫るものを感じて、牛太郎はうなだれるだけである。
「本当に奥方にそう言うんやろうな」
「う、うん」
「そんなの無理に決まっているやろ。奥方が許すはずないやろうが」
　ぷいと顔を背けてしまう。
「い、いや、でも――」
　ちらりと目を向けてくるさゆり。
「なんや」
「そうでもしないと、さゆりんはどっかに行っちゃうんだろ」
「知らん」
　さゆりはまたそっぽを向いて、牛太郎はうなだれる。
「まあ、でもな、あんたがそこまで言うんなら、ちょっとは考えてやってもええかな」
　牛太郎はおもむろに顔を上げ、体は思わず前にのめった。
「本当かっ？」
「その代わり、もうなんにもしないかんな。調略もいくさも何もしないかんな。これからのことはあんたがやるんやからな」
「わ、わ、わかった。と、当然だ。お前はおれの心の恋人だ。もうそんなことはさせん」
　さゆりは笑いを吹き出した。

「なんなんやそれ。心の恋人って」
顔を向けてきたさゆりは、険のあるはずの目尻を緩ませ、歯を見せて笑っている。
「あんたって人は本当に口だけは大層なんだから。適当なことばっかり」
「適当じゃない真実だ」
ふふ、と、さゆりは笑う。
「ありがとう。嬉しいよ」
「え……」
「私もあんたのこと好きやで」
「えっ！」
さゆりの思わぬ言葉に牛太郎は馬鹿みたいに飛び跳ね、心躍らせ、表情は喜色に溢れた。胸はどぎまぎと躍動し、喉元はこの甘酸っぱさに渇き切り、目は子供みたいにきらきらと輝かせる。
さゆりは微笑んで牛太郎を見つめる。
「さ、さ、さ、さゆりん――」
牛太郎は夢を見た。さゆりを愛人にしてしまえる、と。
が、例のように丸い鼻を突き上げながら放ったさゆりの言葉が、牛太郎の夢を無にかえした。
「ただし、あんたの言う通り、私はあんたの心の恋人や。体の交わりはなしやで。あんたなんかに抱かれるのなんか、気持ち悪くて仕方ないからな」

内線作戦（1）

明智十兵衛光秀、細川兵部大輔藤孝、さらには荒木信濃守村重を配下に組み従えた織田上総介は、大軍勢を率いて入京し、十兵衛と兵部大輔を足利義昭に使わして恫喝した。

出家し、人質を寄越せ。さすれば、和解に応じる。

義昭は恫喝に屈しなかった。彼は京都所司代村井民部少輔貞勝の屋敷に兵を送りこんで、ここを包囲させ、焼き払った。

義昭が征夷大将軍とあって、ある程度は我慢しているつもりの上総介であったが、義昭のしようについに堪忍袋の緒が切れた。

村井民部の屋敷が焼き払われてから翌々日、上総介は全軍に指令を発した。義昭の勢力基盤である京市街地の北半の上京と、南半の下京に焼き討ちを命じる。

規律をもっとも重視していたはずの織田軍であるのに、今はその見る影もない。比叡山延暦寺の一件といい、まさに鬼夜叉である。

これに恐れおののいた京の町衆は金銭をかき集め、上京の町衆は銀千三百枚を、下京の町衆は銀八百枚を上総介に差し出し、焼き討ち中止を求めた。

上総介は下京の焼き討ちを中止させた。が、上京の焼き討ちは実行した。上京には足利幕臣や、幕府に組みする商人が多かった。

徹底されていた。

深夜から翌日までに上京の数々の寺院が焼き払われ、周辺の村々が一夜にして消滅した。織田兵卒たちは寺院に殴り込み、ありとあらゆる宝物を強奪し、さらには逃げ出した僧たちを追いかけてその身ぐるみを剥がし、彼らを拷問にかけてまで金銀の在り処を吐き出させた。

その対象は僧だけではなく、家財道具を背負って逃げ惑う一般市民にまで向けられ、男は身ぐるみすべてを剥がし取られて殺され、女は強姦の餌食となり、子供は連れ去られた。

人々は織田上総介を魔王と呼んだ。

この所業に足利義昭は恐怖を覚え、心を痛めた正親町天皇は上総介に義昭と和睦をするようはたらきかけた。

天皇の勅令とあって、両者和睦の席に着いた。

上総介は京をあとにすると、岐阜へは戻らずに、南近江の守山という地に陣を敷いた。近くの鯰江城には観音寺城落城以降も抵抗を続ける六角右衛門督義治が籠っており、上総介は柴田権六郎勝家、佐久間右衛門尉信盛、蒲生左兵衛大夫賢秀、丹羽五郎左衛門長秀の四名に、鯰江城の四方に付け城を築くよう命じた。

更に上総介は近在の百済寺が鯰江城をひそかに支援しているという諜報を受けて激怒し、この百済寺を一晩で焼き払った。

鯰江城は一時の猶予も与えられないまま落城し、五月、上総介は守山をあとにしたが、やはり岐阜には戻らずに磯野員昌が城主を務める佐和山城に入った。

上総介は琵琶湖上の佐和山にて大船の造船を命じた。足利義昭が再び反抗したときのために、琵琶湖の水運を使って兵を進軍させようと考えたのであった。

織田勢がようやく岐阜に戻ってきたのは六月に入ってからである。

「それにしても、叔母上。オヤジ殿はいつ戻ってこられるのか」

玄蕃允が白米をがつがつと頬張りながら訊ねたが、

「知らん」

梓に睨みつけられ、玄蕃允は思わず箸を休め「は、はあ」と、視線を伏せる。

「それよりなんなのじゃ、お主は。岐阜に戻ってきて、一番に寄るのはここか？　なんなのじゃ。早く嫁を迎えて落ち着かんか。馬鹿者が」

梓の妙な苛立ちを前に、食卓は静まってしまう。

おそらく、またしても父の牛太郎が文を出さないでいるのだろう。

とはいえ、家の雰囲気は梓の機嫌の行方で決まる。放っておくわけにもいかないので、左衛門太郎は口を挟んだ。

「摂津は目の離せない状況のようです。なので、父上は戻ってきたくても戻ってこられないのでしょう」

四月に下剋上を起こした荒木信濃守は、指揮系統を失った池田家の旧二十一人衆を懐柔していき、高槻、茨木に飽き足らず摂津池田、更には伊丹の支配を目論んでいるという話を、摂津から戻ってきた新七郎から聞いた。

「ならば、文でも寄越したらどうなのじゃ」

やっぱり。

「亭主殿はわらわをないがしろにしすぎておるのではないか」

「そんなことはありませんよ、奥方様」

と、あいりがなだめる。

「旦那様は奥方様を常日頃から思っております。私は何度も何度も旦那様の口からそうしたことを聞きました。きっと、旦那様も辛い思いをしております」

「そうですよ、梓様」

お貞が更にかぶせた。

「旦那様は今や織田家でも名前の通った御方なのですから、いろいろと忙しいのですよ。梓様がやきもきされていては、旦那様も気兼ねなくお勤めできませんでしょう」

梓は頬を膨らませて並べられている夕食をじっと見つめる。少女のころから傍らにいるお貞には逆らえないらしい。

芯の通った母だが、まあ、そうしたところは箱入り娘だけあっていつまでも子供のままである。良く言えば健気、悪く言えばわがまま。とはいえ、三十を越えても若々しさを保っているのは、そうした幼さからなのであろう。

「父上に報せなくてはまずいなあ」

居室に戻った太郎は、駒をあやすあいりに向けて苦笑すると、机の前に座り、筆を取った。

「何度繰り返されたことか。また、父上は母上の折檻を受けてしまうぞ」

「でも、旦那様も一通ぐらいは寄越してもいいのに。どうしてすぐ忘れてしまうんでしょう」
「昔からそうじゃないか」
太郎は微笑みながら筆を進めていった。

沓掛勢は昨年の小谷攻め以来、沓掛に戻っていない。武田軍の西上、伊勢長島での蜂起、畿内の一進一退の情勢により、織田の全軍がすぐさま出撃できるよう、沓掛勢だけではなく、大半の土地の兵卒が岐阜に詰めている。

そのため、岐阜の城下に長屋が建設され、沓掛勢も分け与えられた長屋が生活の基盤である。

太郎は来るべきいくさに向けて、沓掛勢の訓練に熱していた。京での焼き討ちはただの強奪でしかなく、またしても精神だけがすり減る行軍であったが、やがて訪れる浅井朝倉との戦いに目を向けることでそれを忘れようとしていた。

沓掛勢は四百人に増えている。それに足して、壊滅した九之坪勢を玄蕃允が一から立て直し、百名。簗田家が抱える軍備は、足軽兵四百余に、鉄砲隊が二十、弓衆が五十、騎馬十という体制であった。

岐阜郊外の野原で、黒連雀に跨りながら玄蕃允とともに鍛錬を眺めていると、歩み寄って来る馬上の者がいた。

丹羽五郎左衛門であった。たった二人だけの従者を連れて現れた五郎左に、太郎はあわてて下馬し、片膝をついて迎えた。

「よいよい。そう、かしこまるな。わしはお主の父親ではないか」

と、五郎左は馬から下りて、太郎の腕を取って体を起こさせる。父親と言っても、五郎左はあいりの養父となってくれた人間だけの話であり、太郎はさほど近しいところを感じていない。

ただ、小さいころから世話をされてきたのは事実であり、五郎左が自分にそうやって目をかけてくれるのも、そうした感慨からなのかもしれないと思った。

「お主が精を出していると聞いてな。どのようなものかと思って参

ってみたのだ」
「これはわざわざ。ありがとうございます」
「ふむ。しかし、沓掛の兵卒たちは精悍になったものだ」
「いや、五郎左殿」
と、口を出してきたのは玄蕃允である。重臣を「五郎左」呼ばわりとは猛将だけあってなかなかふてぶてしい。
「左衛門太郎殿の兵卒はいっときかなりの人数を減らしたんですよ。五郎左殿の口利きで、銃やら騎馬やらを回してもらえませんかねえ」
「なんなんだ、お主」
五郎左は生意気な玄蕃允に冷めた目つきである。
「佐久間の人間なのに、どうして沓掛勢の世話をしておる」
五郎左は近江戦線が長かったせいで、事情を知らない。さらにはかつて牛太郎の目付役として沓掛を切り盛りした五郎左には、玄蕃允の物言いが気に入らなかったらしい。太郎は険悪な空気を漂わせる二人の間に割って入って、理由を説明した。
「なるほどな。そういえばお主は佐久間の爪弾き者であったな」
「五郎左殿とはいえ、今の言葉は聞き捨てなりませんな」
「まあまあ、お二人とも。それより、丹羽様、まあ、沓掛勢に声でもかけてやってあげてください」
太郎がなだめすかして、ようやく五郎左と玄蕃允は顔を背け合った。玄蕃允がふてぶてしく去っていき、五郎左は「まったく」とぼやく。
「今の若い者ときたら。あやつといい森殿の次男坊といい、まったく。太郎、お主の垢を煎じて飲ませてやったらどうだ」
太郎は苦笑いするしかなかった。

内線作戦（2）

この時期、西上作戦を行っていた武田軍は三河遠江から甲府へと撤退している。

武田徳栄軒が死んだ。

春先からまことしやかに流れていた噂であり推測であったが、あれほどの無類の強さを見せていた武田軍が撤退するなどとは、徳栄軒の死以外には考えられなく、やがては諜報によって得た報せにより、確実なものとわかった。

「天は皮肉なものだ」

太郎を城内に呼び寄せた勘九郎信忠は、そう呟いた。

「あと一年生きていれば義父は我らを駆逐し、武田菱の旗を京に打ちたてたであろうに」

まるで、それを願っていたかのような言いぶりに太郎は内心驚いた。そもそも、武田軍の西上作戦以降、勘九郎と徳栄軒の娘、松姫の婚姻関係は解消されている。

「しかし、若様。徳栄軒殿の死によって、我ら織田は窮地を脱出する絶好の機会を得たのですよ」

「絶好の機会とは言い得て妙だな」

「はあ」

首を傾げる太郎に、勘九郎は薄ら笑みを浮かべる。

「我が稲葉一鉄らと共に長島に攻め入っている間、父は京を焼き討ちし、その残虐ぶりは女子供に至るまで容赦しなかったというではないか」

「さ、左様でございますが、しかし――」

「簗左衛門」

と、勘九郎だけの呼び方で太郎の口を制した。

「お主は天下の将か、それとも父の犬か。お主とて佐久間や柴田などとは違って、兵卒の暴虐など好まぬであろうが」

上総介の配下であり、勘九郎の配下でもある太郎は黙ってうつむくしかない。

「聞けば、京雀たちには父は魔王などと呼ばれているそうだが、父も父で己を第六天魔王などと自称しているあつかましさよ。一体、誰が父の蛮行を止めるのだ」

太郎はふと思ってしまう。若様は謀反を企んでいるのではないか。もちろん、今ではなく、いずれであるけれども。

たしなめなければなるまいと、太郎は顔を上げた。しかし、恐ろしすぎて口にも出せなかった。

だいたい、若様はどうしてこんなにも苛立っているのだろう。

「まあ、よい。今日、お主を呼んだのは摂津のことだ」

「摂津ですか？」

「左様。世間では荒木信濃守とやらが中川瀬兵衛という豪傑とともに池田家に反旗を翻したとなっておるが、それは違うとカツが言っておった」

「勝蔵殿がですか？　なんとおっしゃっていたのですか？」

「お主の父親の左衛門尉だ。今回の摂津の反乱劇には左衛門尉が絡んでいるに違いないとカツが言っておった」

実は太郎もよく知らない。摂津工作に従事しているのは心得ているが、牛太郎がどういう動きをしていたか、新七郎も多くを語らなかったし、噂にも入ってきていない。

だから、太郎は笑った。

「勝蔵殿は父上を買い被りすぎなのでは。もし、荒木信濃守殿の反乱に織田方が絡んでいたとすれば、それはおそらく明智十兵衛様か細川兵部様でしょう」

「あのカツが他人を買い被るか？」

「それはそうですが」

「左衛門尉は切れ者なのではないのか」

「まさか！」

太郎は腰を浮かせた。あの父が切れ者などとは、相手が勘九郎で

なければ大笑いしている。木下藤吉郎にさんざんこき使われ、惚れた女にはさんざん袖にされ、いざ女房を持ってみたらさんざん尻に敷かれ、摂津池田では信濃守や中川瀬兵衛に騙されて一時期投獄され、ときたま戦場で顔つきを変えるけれども、それは切れ者などとは程遠い猪突猛進のいくさ振りである。

「若様、冗談もほどほどにしてください。もしも父が切れ者であったら、拙者は今頃織田家の重鎮の倅です」

「まあ、そうであるが」

勘九郎は納得いかない様子であったが、太郎は相手にせず、今までの牛太郎の愚行ぶりをべらべらと並べ立てた。

そのうち、勘九郎は牛太郎の愚行を聞いて愉快になったらしく、当初の苛立ちも忘れて声を上げて笑っていた。

勘九郎の前をあとにし、稲葉山の坂を下っていくと、前から五騎、六騎ぐらいの集団が坂を上がってきた。

まるで、栗綱の馬体か、いや、それ以上に黄金のように輝く栗毛馬に跨っているのは、上総介であった。

川で水泳でもしてきたのか、上総介は浴衣なんかを羽織っていて、いつものように片方の肩をはだけさせている。一大勢力を築くようになった今でも、上総介は暇を見ては城下に繰り出して遊んでいる、いや、肉体の鍛錬に勤しんでいる。

太郎は坂道の脇に避けると、地面に膝をついて、頭を下げた。

「なんだ、こましゃくれ」

上総介は太郎の前までやって来て、馬を止めた。

「奇妙にでも呼ばれたか」

「左様で」

「どうせ、くだらぬ愚痴でも聞かされたんじゃねえのか」

太郎は黙るしかない。勘九郎も勘九郎だが、上総介も上総介である。言いにくいことを軽々しく訊ねてくる。

「まあいい。それより、お前、加賀に行ってこい」

「か、加賀ですかっ？」

「ああ。今、誰を向かわせるか調度考えていたところだ。そうしたらお前と会った。だから、お前が行ってこい」
「か、加賀とは一体、何用で」
「不識庵だ」
上杉不識庵謙信のことであったが、上総介はただそれだけを言っただけで馬を歩ませて去っていってしまった。
太郎は困った。上総介のあの感じであると、ひどい思いつきで言ったような気もするが、そうした気分屋である一方で、上総介は回りくどい説明を言うのも聞くのも嫌う短気な性格だ。
実際、木下藤吉郎のような、上総介の機微を理解し、それを先回りするような小賢しい人間を上総介は気に入る。
とはいえ、加賀に行っている暇なんてあるのだろうか。現在はまさに足利義昭の動きに対して臨戦態勢を敷いている段階であり、明日、出陣となってもおかしくはないのだ。
太郎は困った。なので、柴田家に立ち寄った。
血は繋がっていないが、柴田家の当主、権六郎勝家は梓の兄であり、太郎からすれば義叔父ということになる。
「これまた唐突であるな」
もみあげから顎にかけて髭を勇壮にたくわえた権六郎は、太郎の話を聞くと、太い腕を組んで、うーむ、と唸った。
三好三人衆と戦った二年前の野田福島城や、苦戦を強いられ撤退を余儀なくされた去年の伊勢長島の一向一揆との戦いで、権六郎はしんがりを務めた。この二戦のしんがりがなければ、他方面で蜂起した反織田に上総介は対処できず、織田領は包囲網の餌食となっていたであろう。
そんな猛将で、家中では佐久間右衛門尉に次ぐ重臣でもある権六郎は、新参武将や若者たちになかなか厳しい目を向けているが、太郎にはなぜか甘かった。
「確かに先日、織田は上杉と同盟を結んだが、目的がようわからん。まあ、二三日様子を見てみろ。おやかた様は考えをころりと変えて

いるかもしれん。もしも、咎められることがあったら、わしにそう言われたと申すのじゃ」

「でも、そうしたら、柴田様にご迷惑ではないでしょうか」

「いや、おやかた様にお叱りを受けるかもしれんが、どうせ、すぐにいくさじゃ」

「はあ」

太郎は釈然としないまま柴田家をあとにした。戦場では奇策を用いて機転を働かせる太郎だが、それ以外のところでは不器用な部分があり、言ってみれば政治には向かない軍人将校だった。

まあ、とりあえず二三日待つことにして、その間、加賀の情勢などを調べてみた。

しかし、二日後、権六郎の言う通りいくさになった。足利義昭が勅令を破棄して、再び挙兵したという一報が岐阜に入ったのである。

内線作戦（3）

京は動乱している。

武田軍の西上作戦の中止によって、包囲網の一角が崩れ、織田と反織田は五分五分、いや、織田軍の総帥上総介による警戒力と指揮力、弱すぎる織田兵の唯一の長所である機動力、兵数や軍備といった火力、更には強力な指揮官たちが揃う統率力を考えれば、足利義昭は挙兵を無謀なまでに早めた。

おそらく、徳栄軒の死を知って、せっかく築いた包囲網を無碍にさせたくないあまり気を焦って、冷静さを欠いたのかもしれない。

ともかく、義昭は二条城に側近を置いて、自らは宇治川に囲まれた要害となっている槇島城に立てこもり、諸国の各勢力に上総介打倒の令状をばらまいた。

さらに、かつての天敵三好三人衆の一人である岩成主悦助友通を淀城に置き、各地の勢力の一斉蜂起を待った。

だが、足並みはまったく揃っていなかった。義昭の挙兵に加勢したのは畿内の三好三人衆ぐらいで、大和の松永弾正忠や河内の三好左京大夫は武田軍の撤退に不利を悟ったか一向に動かず、越前朝倉は例のように小谷方面へ進軍を開始したものの、朝倉一門の不和がここにきて一気に噴き出しており、北近江浅井にいたっては虎御前山の大砦を前にして動くに動けない状況だった。

上総介は足並みの乱れを一挙に突くように二万余の大軍を連れて早々と出陣し、たった一日で佐和山に到着すると、先に造らせておいた大船で兵の大半を坂本まで運ばせ、そこで明智十兵衛と合流し、翌日には二条城を包囲するという驚愕の速度だった。

二条城は一切の抵抗も見せずに開城し、四日後には槇島城へと進軍した。

この日、宇治川の水量はふんだんで、織田の諸将は渡河をためらっていた。

沓掛勢は柴田隊に属しており、太郎はいくさの気配に興奮しきりの黒連雀をなんとかなだめ、権六郎の命に従って宇治川の流れが落ち着くのを待っていた。

が、命知らずの隊が渡河を始めた。兵卒の体は胸まで浸かり、馬も体半分で川の中を泳いでいる。なかには濁流に流される人馬も。

「あの野郎っ！　まさか酒を食らっているんじゃないのかっ！」

玄蕃允が思わず声を上げた。命知らずの者たちが背負っている旗印は森家の鶴丸紋である。

「遅れを取るかあっ！　皆の者、続けえっ！」

と、玄蕃允が勝手に兵卒を従えて川の中へ駆けていく。

「若君！」

新七郎が困り顔で指揮を求めてきて、太郎は唇をひとしきり噛み締めたあと、意を決して鞭を振るった。

「仕方あるまいっ！」

また、軍紀違反か。

森勢に遅れまじと、沓掛勢は濁流の中へと突っ込んでいく。馬上から降り、甲冑の重量に悩ませながら、すいすいと足を掻いていく黒連雀とともに宇治川の対岸へと進んでいく。

このとき、普通なら、渡河に気付いた敵方が城から打って出て対岸から矢を放って来るものだが、まったくなかった。ただ、太郎はこれを不思議に思わなかった。なぜなら、頭の中はいくさから離れてしまっていて、勝手に飛び出していった軍紀違反について、上総介や権六郎にどう言い訳しようか、そればかり考えていた。

だが、背後からかまびすしい押し太鼓の音が聞こえてきた。上総介本隊からであった。太鼓の音を聞いて、織田勢は次から次へと川を渡り始めた。まるで、早くしろと、上総介が急かしているような太鼓の響きである。

結局、森勝蔵隊が槇島城に一番に攻城をしかけた。が、すでにもぬけの殻だった。

義昭は逃げたらしい。

「天下の征夷大将軍が逃げ出すとは」
濡れそぼった黒連雀が、首を上下に振り乱している。暴れられなかったのが不満らしい。
「クロ。あんまりそう戦いたがるな」
太郎は黒連雀の首をぽんぽんと叩くと、暴れ馬の手綱は兵卒に任せて　脱いだ兜を小脇に抱えながら、玄蕃允と共に本陣に向かう。
「なんだと、この野郎っ！」
向かう途中、揉めごとを目にした。
「宇治川に腰が引けていたくせに言ってくれるじゃねえか！」
勝蔵が詰め寄っている相手は、黒母衣を背中に流す佐々内蔵助成政だった。どうやら、勇んで突っ込んでいったものの、空振りに終わった勝蔵を内蔵助が冷やかしたらしい。
玄蕃允がぼそりと呟く。
「あの馬鹿」
「おうおう、お前は誰に掴みかかってんのかわかってんのかあ？こんな真似してただで済むと思ってんのかあ？　謹慎だぞ、謹慎」
「ほざけ、この筋肉ダルマっ！」
勝蔵は内蔵助を兜もろとも殴り飛ばした。しかし、内蔵助は顔をもっていかれただけで、勝蔵に振り向き直ると、瞳孔を広げながらにやりと笑う。
「きかねえなあ、若僧！」
内蔵助の右拳が飛んだ。さしもの勝蔵も、織田の狂犬の拳に体を吹っ飛ばされた。
「この野郎ォっ！」
起き上がった勝蔵が内蔵助に掴みかかって、周囲の諸将も大勢で止めに入っていく。玄蕃允も、もちろん、太郎も。
大の男たちに引き剥がされながらも、なおのこと掴み合おうとする勝蔵と内蔵助であったが、赤母衣を翻しながら、黒鉄器の烏帽子兜を被った男がぬうっと現れた。
「やめんかっ！」

前田又左衛門利家であった。
「仲間割れしている場合かっ！　互いとも頭を冷やさんかっ！」
又左の怒声に揉み合いはぴたりとおさまり、しんと静まりかえる。
勝蔵がぼそりと言う。
「なんだ、尻込み又左か」
「なっ！」
内蔵助もぼそりと言う。
「拾阿弥を叩き斬ったお前には言われたくないわ」
「へ、減らず口叩くなっ！　わ、わしは子供が四人もおるのだぞ！　お主のようにいつまでも暴れていられんのだ！」
内蔵助も勝蔵もハアと溜め息をつき、半ば面白半分でそれを止めていた連中も、なんだかしらけてしまったかのようにぞろぞろと解散していった。
仲裁に入ったはずの又左衛門だったが、むっとしながら立ちつくしている。
「前田殿が止めに入らなければどうなっていたことか」
と、太郎は又左を慰めた。
「そうだろう。そう思うであろう。お前ならわかるだろう。ああいううつけを止めるのは俺のような大らかな人間なのだ。わかるだろう？」
かつてのかぶき者の言葉に、太郎も内心、よく言えたもんだ、と思った。
「ま、まあ、とにかく、おやかた様のもとへ」
そう言って、太郎は体を返した。
と、そのとき、本陣の裏手から飛び出ていく黒い影を目にして、太郎は歩みかけていた足を止めた。
又左が立ち止まっている太郎に目を丸める。
「どうした」
「い、いえ、今、本陣から熊みたいなものが」
「熊だと？」

又左は大笑いした。
「宇治に熊がいるか！　いたらそれこそ、おやかた様は喜んでしまうわ！」
太郎は首を傾げる。確かに変な物体を目にしたのだが、錯覚であろうか。

上総介本隊が槇島城を攻略した同時刻、近在にある淀城を望んで、木下藤吉郎秀吉隊が陣を張った。
三好三人衆の一人、岩成主悦助が立てこもった淀城は、木津川、桂川、宇治川が合流する地点に築かれた天然の要害で、四方を取り囲むには地理上はおろか、兵数としても困難であった。
しかし、兄の藤吉郎は是が非でも落としたいらしい。
「近江から出張ってきて手ぶらで帰るわけにはいかにゃあ」
藤吉郎は包囲網が組まれて以降、北近江の戦線といい、上総介から大任されることが多い。藤吉郎は上総介に寄せられる期待の大きさをひしひしと感じ取っていた。彼にとって、一戦一戦が出世街道の分かれ道であり、失態は絶対に許されなかった。
「でも、兄上」
小一郎は鼻息の荒い藤吉郎に釘を刺す。
「戦功欲しさに無茶な真似をすれば、それこそ、おやかた様のお叱りを受けますよ」
すると、朱の軍配を携えて床几に座る藤吉郎は、小一郎に視線をぎろりと向けてくる。
「おみゃあに言われなくたって、わかってりゃあ」
「じゃあ、どうするのです」
視線を厳しくさせるだけで、押し黙る藤吉郎。ややもすると、すっくと腰を上げて声を上げた。
「半兵衛！　半兵衛はおるきゃあ！」
「なんでしょう」
陣幕を捲り上げて、一之谷兜の竹中半兵衛が入ってきた。

「おみゃあ、なんとかしにゃあか！　槇島城が落城の伝令が入ってきたんだぎゃあぞ！」
「なんとかせいと申しましても、攻城策はさきほど申し上げたではありませんか」
「他の策を考えいと言っているでにゃあか！」
「水攻めしか思いつきません」
「水攻めなんかできるきゃあ！　さっさと落とさにゃあならなにゃあんだぎゃあ！　水で囲って日干しにするなんて、何カ月かけるつもりなんだぎゃあ！」
「そうおっしゃられても、攻城というものは一日一晩でできるものではないことなど、殿もよくご存知でしょう」
「それはそうだぎゃあが、なんとかせんかえ！」
「いくさの勝利とは一朝一夕で得られるものではありませぬ」
「おみゃあって奴は、本当にくそ真面目だぎゃあにゃあっ！」
名参謀の半兵衛に無理を強いている兄に呆れ果てていると、小一郎様、小一郎様、と、陣幕の裾から従者が小声で呼びかけてきていた。
半兵衛と藤吉郎の言い争いを横目に、小一郎はそっと従者に歩み寄る。
「なんだか、よくわからねえ娘がやって来まして、これを小一郎様に渡せと押し付けてきたんですが」
従者は小一郎の顔を伺いながら、一通の折り畳まれた文を差し出してきた。
「娘だと？」
「へえ。畿内訛りの百姓娘みてえな小汚ねえ女だったんですが」
とにかく、小一郎は文を受け取って中を開いてみると、こう書かれてあった。

淀城の諏訪三将を寝返らせた。こいつが主悦助に、城から打って出て野戦をするよう進言する。信長様には伝えた。じきに勝竜寺城

から細川さんが援軍に来る。相手を叩きのめすよう、今から準備をしておけ。　築田左衛門尉牛太郎

追伸
　おれが調略を仕掛けたってことは絶対に誰にも言うなよ。とくに太郎には絶対に言うなよ。

　小一郎は一瞬、文を疑った。なぜ、築田牛太郎が調略を仕掛けているのか。しかも、その功績を公言するなと念を押してきているのも不可思議である。
「半兵衛殿」
　小一郎は兄と喧嘩別れして出て行った半兵衛を呼び止めると、文を見せた。半兵衛は目を通したあと、ハハ、と、軽やかに笑う。
「これはまさしく築田殿の字です」
「し、しかし、なぜ、築田殿が調略などを。それに誰にも公言するなとは一体」
　半兵衛は微笑を浮かべたまま、文を胴鎧の中へしまい込む。
「築田殿は摂津工作に従事してきましたからね。三好の連中と何らかの脈があるのでしょう。それに誰にも公言するな、特に太郎には、と書かれてありますゆえ、おそらく、また親子喧嘩でもしたか、それとも岐阜の鬼嫁を怒らせてしまっているのか、とにかく今は太郎に居場所を知られたくないのでしょう」
「なるほど」
　と、小一郎も思わず笑ってしまう。
「それにしても」
　半兵衛は再び陣幕を捲りながら言った。
「不憫な御仁ですね。手柄を上げてもそれを大っぴらにできないとは。まあ、築田殿らしいと言えばらしいのですが」

内線作戦（4）

木下隊とこれに合流した細川兵部大輔の軍勢は、淀城から打って出てきた岩成勢と対峙した。やがて岩成勢諏訪隊が織田方に寝返り、孤立した岩成主悦助は奮戦したものの、細川家中の者に討ち取られた。

これを期に勢力基盤を失った三好日向守長逸と三好下野守政康も消息不明となり、悪名馳せた三好三人衆は歴史の表舞台から消えることとなった。

「さすが半兵衛だぎゃあ！　さすがおりゃあの右腕だぎゃあ！」

藤吉郎は、岩成勢に調略を仕掛けたのが牛太郎であることを、半兵衛から聞かされている。

「三好三人衆を追い払ったこの勢いで、浅井もひとひねりだぎゃあなあ！」

「兄上」

小一郎が厳しい眼差しで牛太郎の文を押しつける。

「もう一度ご覧下され。このことはおやかた様もご存知なのですからね」

「にゃあにゃあ、そうかえそうかえ」

藤吉郎は小一郎から文を奪い取ると、笑顔のままそれをびりびりと破っていき、欠片を初夏の空めがけて舞い散らせてしまった。

「それはそうと、牛殿は何をやっているんぎゃあにゃあ？　畿内まで来たことだし、堺にでも顔を出してみようきゃあ？」

にゃっはっは、と、藤吉郎の笑い声はいつまでも響いた。

槇島城落城により、幕府のすべての機能が終焉すると、上総介はかねてから朝廷にはたらきかけていた年号改元を実現する。

この夏、元亀四年は天正元年と改まり、織田上総介信長の時代が始まった。

これに乗じたのだろう、調子者ぶりを発揮した藤吉郎は、二条城

にて姓を変えたいと上総介に求めた。
「ハシバだと？」
古今東西聞いたことのない姓に、上総介は眉をひそめた。
「なんなんだ、それは」
「ハシバの羽は丹羽様の羽、ハシバの柴は柴田様の柴でございますぎゃあ。おりゃあもこのご両名にあやかっておやかた様のために身命を賭す覚悟の表れですぎゃあ」
上総介は藤吉郎の神経の図太さに笑った。
「よかろう。お前は今日から羽柴藤吉郎秀吉を名乗れ。俺が許してやるわ」
まさに絶頂の藤吉郎である。
丹羽五郎左はにこにこしながら太郎に言った。
「藤吉郎はまあ調子の良い奴だが、それでいて頭のきく奴よ。家中の者の姓を一字ずつ取るとは、考えそうで思いつかんもんだ。太郎もあやつとは仲良くしておいたほうがいいぞ」
五郎左は、少年時代には上総介と兄弟のように仲が良かったのも手伝って、織田家中の席次は五、六番目ぐらいであろう。
そんな五郎左を藤吉郎は立てたのだから、悪い気がしないはずがない。
しかし、もう一人の重臣はおもしろくなさそうであった。
「あの人もどきめ。勝手にわしの字を奪い取りおって何様のつもりだ。運だけで生き残ってきたくせに、まったく腹立たしい奴だ。太郎、あんなサルとはさっさと縁を切ってしまえ。牛太郎にも言っておけ」
藤吉郎の改姓は権六郎に至っては逆効果だったかもしれない。しかし、藤吉郎ぐらいの男なら、はなから藤吉郎を毛嫌いしている権六郎が納得しないことなど想像できたに違いない。
太郎には藤吉郎の頭の中がよくわからない。
出世頭の藤吉郎の改姓は、五郎左や権六郎だけではなく、諸将の間でも物議をかもした。

「計り知れん男だな」
と、前田又左衛門は好意的であった。
「藤吉郎は昔からそうだ。あいつは凡人では思いつかんことをやる。もっとも、凡人では百姓から一軍の将にまで登り詰められなかっただろうがな」
「腹立たしい男よ」
とは、佐々内蔵助であった。
「いつか斬り捨ててくれる」
内蔵助の異常なまでの敵愾心の理由を太郎は知っている。かつて、藤吉郎の女房の寧々を内蔵助と藤吉郎とが取り合ったのを、太郎は八歳のときに目にしている。
今でもそれを妬んでいるとは恐ろしい男だと思う。
「あやつは百姓の小倅だから仕方ありませんな」
玄蕃允は目上の藤吉郎を「あやつ」呼ばわりであった。
重臣家の若当主である勝蔵はどう思っているかと気になった太郎だが、勝蔵は槇島城でのいくさが空振りになって、日々、やけ酒を食らっているらしく、当分は距離を置くことにした。
「まあね、太郎殿」
上総介の小姓上がりの側近である堀久太郎秀政は、太郎と齢も近く、太郎が馬廻衆であったときからの仲である。
「サルの知恵は、ここなんですよ、ここ」
上総介に愛されるほどに美青年の久太郎は、すらりと通った鼻先を自らの指先でちょんちょんと叩いた。
「鼻が利くんですよ。おやかた様の匂いがわかるんです」
太郎は首を傾げる。
「でも、太郎殿はサルの真似なんかしちゃいけませんよ。おやかた様が太郎殿に求めているのはいくさの将としての太郎殿なんですから」
解せない。いくさの将としても、藤吉郎は同じ侍大将の太郎より功績の質量とも遥かに上回っている。

そんな折、ふと疑問が湧いた。藤吉郎と尾張時代から苦楽を共にしてきた牛太郎はどう受け止めているだろうかと。

織田軍の岐阜への帰陣はすでに決まっているが、太郎は上総介に目通りを願い、一時の暇を求めた。

「父に会っておりませぬゆえ、二、三日、堺に行かせて頂きたく存じます」

断られないと考えていた。修羅道に徹する上総介だが、たまに家臣に家族を大切にするよう申しつける意外な一面も持っており、それに娘の名付け親にもなってくれた主人である。

「ならん」

ぶっきらぼうに断られた。

「一刻の猶予もねえ。だったら、あんな奴より嫁や娘に会え。あいつは好きにさせておけ」

わからない。上総介のその人情も、牛太郎を野放しにさせておく理由も。

幕府を滅ぼし、三好三人衆を駆逐して京の安定を取り返した上総介と織田勢が岐阜に帰陣したのつかの間、一報が飛び込んできた。

北近江である。

昨夏、簗田勢は羽柴勢とともに小谷城近在の山本山城の弱体化に成功したが、その山本山城城主、阿閉淡路守貞征が織田方へ内通してきた。

これまで、難攻不落の小谷城を包囲できずにいたのは、小谷城と琵琶湖の間に支城が並んでいるためであり、この中でも天然の山城である山本山城が支城配列の中心であった。

阿閉淡路守の寝返りを好機と見た上総介は躊躇することなく立ち上がり、夜中にも関わらず、岐阜城下に出陣の法螺貝をけたたましく鳴り響かせた。やがては無数のたいまつが闇を赤々と染め上げ、織田の将兵たちは休む間もなく岐阜を飛び出した。

一日をかけて大垣を抜けると、織田軍はそのまま虎御前山南西に位置する小谷城支城の月ヶ瀬城を攻撃し、丸一日で攻め落とした。

さらに、虎御前山に本陣を置いた上総介は、軍勢の一部を山本山城に入城させ、もう一部は小谷城を回り込ませて、北方の山田山に布陣させる。これにより、織田軍来襲を知って、あわてて出陣した越前朝倉勢であったが、小谷城までの通路を遮断された。

嵐のように北近江に上陸してきた織田軍の機動力に浅井方は混乱し、小谷山城郭を形成する一角の焼尾砦に配置されていた浅見対馬守が織田方に寝返る。

これを受けて、虎御前山の軍議にて、上総介は諸将を睨みつけながら声を唸らせた。

「新九郎の首を取る」

三年越しの復讐戦が始まった。

内線作戦（5）

織田勢三万。
浅井勢五千。
朝倉勢二万。

これが野戦であったなら、七分三分で上総介の優勢であるが、なにぶん織田勢は攻城方であり、浅井朝倉は籠城方である。

まして、浅井勢が立て籠っているのは小谷城という名城であった。

これこそまさしく、姉川の戦いに始まった織田対浅井朝倉の攻防が三年もの長きに続いた理由であった。

だが、情勢はこの三年の間に変わった。武田軍撤退をきっかけに上総介は織田家存亡の危機を脱出し、各地で反織田勢力を集中的に撃破した。

背後に差し当たっての脅威はない。

「小谷城よりも先に、まずは邪魔な朝倉を蹴散らす」

虎御前山本陣の軍議、上総介の執念が伝わってくるようで、太郎は息を呑んだ。浅井よりも先に朝倉を壊滅させると言うのである。

「時が来れば一乗谷まで突っ走るぞ」

諸将が上総介の言葉をどう受け止めたかわからないが、太郎は本気だと思った。北近江の浅井を見張りながらも、敦賀を突き抜け、朝倉本拠の越前一乗谷まで二万の大軍を追撃するなど尋常でない戦略だが、上総介は法螺を吹かない性格である。

このときから、太郎の口数は減った。燃え滾るものと、くすぶり続ける焦燥感をぐっとこらえながら、膠着した睨み合いが決壊される瞬間を待った。ここで功績を上げなければ、簗田左衛門太郎広正の価値は侍大将の役職と比例しなくなる。

姉川の戦い以来、活躍していない。

作夏の山本山城下での浅井勢との小競り合いでは、上総介が上機嫌になるほど活躍した。しかし、包囲網の苦境を乗り越えるため、

織田諸将はめまぐるしく戦い続け、近江戦線では羽柴藤吉郎秀吉という偉大な将校を生み出した。比叡山延暦寺の焼き討ちでは明智十兵衛光秀が諜報の才能を活かし、第六天魔王の完璧な虐殺劇のお膳立てをした。摂津の野田福島や伊勢長島では柴田権六郎が見事に退却戦を乗り切った。

それだけではない。公にされていないことであるが、佐久間玄蕃允と森勝蔵が武田騎馬隊相手に鬼神のごときいくさぶりであったことを、上総介は知っている。

そして、父、簗田牛太郎が二俣城で武田の進軍を足止めさせたことも。

実は太郎は口惜しさを感じていた。もしも、牛太郎だけではなく、自分も浜松に向かっていたら、勝利こそはなかったものの、玄蕃允や勝蔵ぐらいは奮戦したはずだ。

いや、二俣城を死守できた。

おごりだろうか。違う。牛太郎にできて、自分にできないはずがない。あの人のことは昔から知っていて、誰よりも知っている。簗田左衛門尉は愚将だ。

かつて、烏帽子親となってくれた竹中半兵衛に説教されたことがある。

勘違いするな。お主は簗田殿がなかったら、ここにいない。お主は自分で己の道を切り開いているかと思っているみたいだが、簗田殿がなければ、その切り開く道すらなかったのだ。

確かにそうだ。自分が率いている沓掛勢も、跨っている黒連雀も、牛太郎がいなければ手に入れられなかったものだ。

だが、

「俺は違う」

まあ、結局は愚将の牛太郎に功績で敗北している現実が、太郎には悔しくてたまらなかった。

天涯孤独の自分を拾ってくれ、あいりや駒といった幸福を与えてくれた牛太郎には感謝している。簗田牛太郎という人は、過程はど

うであれ、裸一貫の身から築田家という慎ましいながらも慈しみに満ちた一家を築き上げた偉人である。

しかし、

「父上は将としては愚なのだ」

「若君」

じっと思い詰めている太郎に、新七郎は語調を厳しくさせた。

「旦那様とご自身を比べることこそ愚かだと思いませんか」

太郎は珍しく表情をむっとさせた。彼は牛太郎以外の人たちには当たりのよい青年で、いくさに対する厳しさはあるが、配下や兵卒たちにも物腰柔らかく接する。

ある意味、人間臭い部分を見せるのは牛太郎とやり合っているときだけで、その他の人と話すときは、自分自身の感情を超然とさせようと心掛けている。

だが、このときばかりは声に怒気をはらませた。

「その言葉は覚悟があってのことだろうな」

「覚悟の有無はともかく、旦那様がご自身の才覚を若君と比べていましょうか」

「何が言いたいっ！」

滅多にない太郎の怒りであったが、新七郎は動じることなく冷めた眼差しのままで静かに言う。

「他所のことなど気にするなと言うことです」

「気にしてなんかいるか」

「いいえ、気にしていましょう。拙者が旦那様の下におり、若君から離れていた一年の間に、若君はすっかり変わられた様子で」

「なんだと」

ただ、眉尻を吊り上げながらも、太郎は怒りの中に佇むちょっとした冷静さで、新七郎の人間性の変化に気付いた。

堺に行く前の新七郎はもう少し無邪気な男であった。ところが、帰ってきてからの新七郎には、常に張り詰めた感がある。何か、耐えがたい物を背負い続けている重苦しさと、それを消し去ろうとす

る冷徹な感情がないまざって、得体の知れない鋭さを体中から放っている。

　すると、太郎はふと感じてしまった。牛太郎を始め、新七郎や早之介など、堺に行っていた連中は、想像を絶する修羅場を乗り越え、まるで自分を置いてけぼりにするかのように成長してしまったのではないか。

「若君はもっと正々堂々としており、勝利を純粋に求めている方でした。しかし、駒様がお生まれになってからは、戦場での勝利よりも、家中での処世術に執心されていらっしゃる」

　図星であった。

「黙れっ！」

　太郎は生まれて初めて激しい憎悪を表情に表した。

「ここで俺に斬られるか、もしくはこの場からさっさと去れっ！」

　新七郎が、蛇がとぐろを巻くようにしてじろりと睨めつけてくる。太郎はとうとう頭に来てしまって腰の太刀に手をかけたが、新七郎がぬうっと立ち上がり、その不気味さに思わずためらった。

「言っておきますが、若君は旦那様には適いませんぞ。今どこで何をやっているかも知らない時点で、適いませぬ」

「ならば父上は何をやっておるのだ！」

「おやかた様のお側におりますよ」

　新七郎はうっすらと笑みを浮かべると、太郎の前から去っていった。

　太郎は柄に手をかけたまま、唇を震わせる。何が起こっているのか知らない。たったそれだけで、自分の存在価値は失われていくようであった。

内線作戦（6）

進路を遮断された朝倉勢二万は、やむなく北近江の玄関口である小谷城北西の山麓一帯に布陣した。

このころの朝倉家は、この国の一族集団らしい典型的な仲間割れを起こしていた。

当主は十一代目、左衛門督義景で、上総介信長と同年代である。

左衛門督義景は可もなく不可もない男であった。いや、その辺の土着豪族とは違い、越前一国を束ね、敦賀湾沿岸に影響力を持っていたのだから、戦国大名としては可もないが、一家の当主としては不可もなかった。

左衛門督の不幸は上総介信長の登場である。

金ヶ崎の戦いで口火を切った織田勢との長い対立により、朝倉家と左衛門督の平凡な日々は消し飛んだ。毎年、雪が解ければ出兵し、大した成果も得られないまま越前に帰ってくる。

数々の遠征の失敗により、朝倉氏一門には次第に不満が募っていき、こうなると、自然、当主左衛門督の才覚や人格に嫌悪するようになった。

そもそも、なぜ、足利幕府の再興を望む義昭を突っぱねたのか、なぜ、織田勢と対立したのか。先見の明がまったくない。おやかたは暗愚だ、と。

そして、今回、足利幕府に終止符を打った織田の激流が北近江にも迫ってきて、左衛門督は浅井救援の下知をくだした。

が、一門重臣衆はこれを頑なに拒否した。長年の戦いで軍全体が疲弊しているからという理由で。

恐ろしい出来事であった。織田の勢いは留まる事を知らず、これを放っておけば小谷城の落城も目に見えている。北近江が織田の勢力下になってしまえば、次は越前に侵攻してくるのが当然なのだ。

そんなことは誰にでもわかる。しかし、一門重臣たちは、援軍の

指揮を拒否した。

左衛門督はやむなく自らの腰を挙げて、北近江にやって来たのだった。

すでに朝倉氏の内部は崩壊しつつある。無論、上総介が把握しているところであった。彼はかつて朝倉の客将であった明智十兵衛の情報を元に、この三年間、調略を重ねてきたのだった。

浅井もろとも朝倉を滅ぼす好機である。

今までいくさを一門重臣たちに任せてしまっていた左衛門督義景は、司令官として何の経験も持っていない。

対して、上総介は歴戦の男である。

小谷城を包囲し、朝倉兵の入城を阻止した現状ではあるが、朝倉勢が北西に布陣したことで、包囲線の一角は敵を背後にも置いてしまっている。二万の大軍を三万の一部だけで食い止めつつ、小谷城を攻めかかるのは時間も労力も莫大に費やさざるを得ない。

戦局として、浅井の不利は変わりないが、朝倉勢は不利でもなく、むしろいくさのしようでは有利であった。

だが、朝倉勢の大将は経験の乏しい左衛門督であり、織田勢の司令官はあの織田上総介信長である。

復讐戦への激情でもってこの戦線に挑んでいる上総介だが、一方で緻密すぎるほどの戦略を展開していた。

山田山に兵を陣取らせて朝倉勢の進路を阻んだと同時に、実は朝倉勢をおびき寄せていた。

つまり、朝倉勢に包囲線の背後を取らせ、いくさのしようでは有利に運ばせられると錯覚させたのだ。

左衛門督は上総介の目的が小谷城攻略だと思い込んでいる。よもや、ここで朝倉氏を壊滅させる気でいるなど考えるはずがない。

二日間、織田と浅井朝倉は互いの動きを牽制し合っていた。

上総介が動いたのは嵐の日であった。嫡男、勘九郎信忠に虎御前山本陣を任せると、自らは千人の馬廻衆を率いて、打ちつける雨で視界もままならない中、大嶽山下の焼尾砦に入った。

この動きを朝倉勢はおろか、織田の将校たちも知らない。まさか、こんな嵐の中で動くとは誰も考えていない。

桶狭間以来の奇襲であった。

上総介は焼尾砦を出ると、朝倉勢最前線の大嶽山砦五百人を電光石火の攻撃で降伏させ、この将兵たちを朝倉本陣へと逃がした。

経験の浅い左衛門督に、奇襲という衝撃的な敗北を報せるためであった。

上総介は砦に一部の兵卒を置くと、自身は間髪入れずに北東の丁野山へと進軍し、ここも降伏させて、兵たちを本陣に逃がした。

味方の目まであざむいた上総介は丁野砦から北近江に陣取る全軍に通達した。

左衛門督は必ず撤退する。この追撃を逃さぬよう覚悟しろ。

もちろん、この通達は柴田権六郎の指揮下にある太郎のところにも届いてきている。

「おやかた様は感情で盲目になられているようだ」

陣中の床几に座りながら、権六郎が言った。

「たかだか前線の砦を落としたところで、二万の軍勢が引き返すとは思えん」

太郎も同感であった。上総介のこの戦いにおける意気込みはすさまじい。ただ、それが返って冷静さを欠かせているのではないだろうか。

こう考えたのは権六郎や太郎だけではない。織田の将校たちのほとんどが上総介からの通達をうがった気持ちで受け止めていた。

朝倉勢との前線に布陣していたのは、上総介の他、佐久間右衛門尉隊、柴田権六郎隊、滝川彦右衛門隊、羽柴藤吉郎隊、丹羽五郎左衛門隊、稲葉一鉄隊と、歴戦の経験豊かな将たちであった。

このすべての将たち、調子者の藤吉郎でさえ、朝倉勢は退却しないと決めつけており、ゆえに動かなかった。

戦局もさることながら、彼らには自負しているところがあった。

若かりし頃の上総介は確かに自らの足で戦場を駆け抜けていたが、

大軍団となった今では違う。上洛作戦のときも、包囲網に耐え忍んでいるときも、前線で槍を振るっていたのは自分たちであって、上総介は大戦略を指揮していたにすぎない。時々刻々と変化する最前線の機微を悟るには、司令官の上総介よりも指揮官である自分たちのほうが優れている。

二万の軍勢が退却するはずがない。

優れた織田の将校たちであるが、この辺りが、尾張の田舎武者さがいまだ抜け切れていない点であったろう。

相手方の大将は経験の浅い左衛門督なのである。

追撃準備に取り掛からないでいる各将の状況を知った上総介は、頭に来てしまった。二つの砦を落とした翌日、上総介は自らが手勢の馬廻衆を率いて、朝倉勢本陣のある余呉へ猛進した。

上総介は余呉への途上にある各地の陣所を次々に襲いかかった。左衛門督義景のいる余呉の本陣には、この一連の攻撃の先陣を切っているのが上総介自身だという報告が入り、左衛門督は恐れおののいた。

昨日の砦の攻撃だけに留まらず、当主自らが鬼神のごとく駆け抜けてきている。左衛門督は上総介がまるで何十人もの兵卒たちを斬り捨ててきていると妄想してしまい、その恐怖から、彼を武田徳栄軒か上杉不識庵ぐらいの軍神と過大評価してしまった。

軍神に攻め立てられて勝てるはずがないとばかりに、左衛門督は全軍撤退を指令した。

あわてたのは左衛門督だけではない。上総介自らが切り込んでいったことを知った前線の織田将校たちである。さらには上総介の通達どおり、朝倉勢が撤退の動きを見せている。

各々真っ青な顔をして、進軍の法螺貝を鳴らさせた。泥水を跳ね飛ばし、馬に鞭を振るいながら、皆が皆、全速で上総介のあとを追った。

諸将たちが上総介に追いついたのは余呉への途上、木之本の地蔵山というところであった。

天下に名を馳せる猛将たちが、上総介の前にずらりと並んで額を地面にこすりつけた。

もちろん、権六郎も太郎もいる。

「このうつけ者どもがあっ！」

怒りの絶頂にいる上総介は、佐久間右衛門尉も丹羽五郎左衛門も、重臣新参関わらず、端から順に諸将の頭を蹴飛ばしていき、あるいは鞭で引っぱたき、調子者の藤吉郎にいたっては頭を地面に踏み潰した。

「テメーらに何度となく言ってきたというのに、この有様はなんなんだ！　あーっ！」

「申し訳ありませぬ！」

と、言った権六郎を上総介はぶん殴った。

「申すことがねえなら、黙って言うことを聞きやがれっ！」

「お、おやかた様！」

権六郎が頬をさする傍らで、涙声で叫んだのは佐久間右衛門尉であった。

「さ、左様に仰せられても、わ、我らのような家臣はなかなか、お、おりますまい！」

「なんだとお」

佐久間の口答えに上総介が瞳孔を押し広げてしまって、諸将たちに戦慄が走った。

「貴様あ……」

手足を出して暴行を働くなら、ともかくの怒りは発散されるであろうが、それすらもしないで握った拳だけを震わせている上総介のしようは、怒りが最高潮に達しているのを表していて、平伏する太郎は脂汗を垂らした。

しかし、いっときの寒気のする沈黙ののち、上総介は怒りを押さえこんだのか、フン、と、鼻を突き上げた。

「失態を棚に上げて己の器量を自慢するなど、片腹痛いわ。岐阜であったなら斬り殺しているところだが、貴様らの失態、このあとの

働き次第で許してやろうじゃねえか」

内線作戦（7）

細川兵部大輔藤考は京の相国寺に立ち寄っていた。簗田左衛門尉が西笑承兌という若い学僧に指南を受けているという話を明智十兵衛から聞き、近頃、左衛門尉という男が妙に気になる兵部は、承兌を訪ねて左衛門尉の正体を掴もうとしたのだった。

「先の上京の焼き討ちで当方の寺が難を逃れられたのは簗田殿のおかげなのです」

清貧な微笑で承兌がそう言い、兵部はその理由を訊ねた。

実は上総介が上京下京の焼き討ちを命じたとき、それを知った左衛門尉はどこからか無数の織田永楽銭の黄旗を持ってきて、それを相国寺の境内のいたるところに立てるよう進言してきた。

そもそも、上京焼き討ちに作戦という作戦はなく、織田の下級兵卒たちに乱暴狼藉を働かせるだけのものであった。兵卒たちは相国寺が織田の敵か味方かも知らないので、織田永楽銭が占拠しているこの大きな寺社は、どこかの隊の駐在地だと勘違いした。

「簗田殿は意外と細やかな人です」

「しかし、大胆でもある」

兵部は北摂津で起こった下剋上の経緯を承兌に話した。

「それに松永弾正忠」

今、上総介が織田を包囲している諸勢力を一個一個撃破できているのは、その機動力もさることながら、一個の勢力を攻撃している最中に、他の各方面の勢力を足止めさせているからである。

例えば、義昭の一度目の決起で、上総介がそれを恫喝し、京に炎を放ったときである。上総介が岐阜から出陣する前、稲葉一鉄の軍勢に嫡男勘九郎や森勝蔵を加わらせて伊勢長島を攻めさせている。

また、浅井は虎御前山の砦に張り付けさせておいて動かせなくしており、朝倉には一門衆に調略を仕掛けて足並みを乱させていた。

その折、摂津では荒木信濃守、高山飛騨守が足利幕府に反旗を翻

し、これらの一連の繋ぎ止めによって、上総介は京に大軍を送りこませられた。

さらに、義昭が槇島城に立てこもったときは、これに呼応したのが三好三人衆だけであった。大和の松永弾正忠や河内の三好左京大夫は動かなかった。

「織田家中の人間は知らないが、実は簗田殿があの弾正忠をねじ伏せたのだ」

弾正忠が動かなかった理由、それは左衛門尉が弾正忠に密かに面会し、このまま義昭に付いても弾正忠の利益にならないと説得したためであった。

上総介を裏切った弾正忠だが、武田徳栄軒の死による反織田の劣勢にどうしたものか悩んでいた。一度は裏切った自分を上総介が許すはずもない。しかし、このまま行けば上総介にいつかは滅ぼされてしまう。

そんな中で左衛門尉がやって来たのは、弾正忠にとって願ったりかなったりであった。左衛門尉を介せば、滅びの道は辿らなくても済む。

「無論、簗田殿は弾正忠のそうした心理の隙を狙っていたのだ」

弾正忠が動かなかったことにより、河内の三好左京大夫も日和見を決め込んだ。

このおかげで、上総介は槇島城を攻撃し、さらには北近江に軍勢を引き返すことができた。

「承兌殿は簗田殿をよく存じているらしいが、実は簗田殿はおやかた様の指南役なのではないか」

織田軍が取っている戦略行動である。

各方面から向かってくる敵勢力に対して、敵戦力を合致させず一部に拘束させておいて、主力を持って敵を一部ごとに撃破していくことを内線作戦と言う。

織田軍は、北は越前から東は三河、南に伊勢長島、西に摂津という範囲を大きな戦場に見立て、各地をそれぞれの戦場にするのでは

なく、上総介自らが率いる織田軍主力が大きな戦場を縦横無尽に駆け回り、一個一個を壊滅していっている。

主力が主戦場と見立てて、そこで戦いを始めたとき、他の方面では動きがまったくない。いや、なくさせている。

北近江、伊勢、摂津はおろか、三河でも武田軍が撤退したあと、徳川勢がすぐさま反抗を開始し、長篠城を取り戻している。

「これは簗田殿がおやかた様に進言したのではないのか」

兵部がそこまで左衛門尉にこだわっているのは、織田の部将の中で、唯一自由奔放を許されているのが簗田左衛門尉だけだからだった。さらに、左衛門尉の動きは弾正忠を懐柔したときといい、淀城の内部に亀裂を走らせたときといい、上総介の作戦と連動している。

しかし、承兌は笑った。

「兵部殿、それは買い被りすぎですよ。簗田殿は自分から動くような人ではありません。誰かに命じられて動くか、それとも切羽詰まってようやく動き出すような人なのです」

そもそも、今現在、左衛門尉が織田家中から姿を消し、人知れずこそこそと動き回っている理由、それは上総介に命令されていて動き回っているのか、何か利益を企んで動き回っているのかは知れないが、姿を消さざるを得ない切迫している理由なら承兌は知っていると言った。

「拙僧はお会いしたことはありませんが、簗田殿の奥方は織田家中では有名な恐妻らしいのです」

織田永楽銭の黄旗を持ってきたとき、左衛門尉は頬冠りを被り、つぎはぎだらけの着物を纏っていた。どうして百姓のような身なりをしているのか承兌が訊ねると、

誰にも見つかりたくないんだ

と、言った。

「なにゆえ。私の前にはよく顔を見せるぞ。よくわからぬが、女を口説く和歌を作ってくれと言って」

「ははあ。それは兵部殿が優れた歌人であることを簗田殿が誰かか

ら聞いたのでしょう。築田殿が姿を消しているのは、どうやら岐阜の奥方を怒らせてしまったことをご嫡男の文から知ったそうで、それでほとぼりが冷めるまで家中の人々に見つからないようにしているようなのです。兵部殿に和歌の師事を求めるのは、奥方の怒りを鎮めるために送っているのでしょう」

兵部は少し唖然とした。左衛門尉が恐妻家であるのは兵部も耳にしたことがあるが、そこまでして妻を恐れているとは、どことなく愚かしい。

もしかしたら、それこそ愚将と呼ばれているゆえんか。

「まあ、北近江に行った築田殿は次には何をするでしょうね」

「北近江にいるのかっ？」

「御存知ではなかったのですか？」

兵部はうなずいた。

「退却した朝倉の追撃戦が敦賀まで続いているというのは私も聞いたが、まさか、築田殿もそれに参加しているのだろうか」

「いえ、それはないでしょう。織田様の主力にはご嫡男の部隊も入っているようで、築田殿はご嫡男に見つからないようにしているのですから」

ふーむ、と、兵部は唸った。

「見ようによっては奇人だな」

そのころ、噂の奇人は小谷城郭を包囲する四方の織田勢の様子を、望遠鏡を覗き込んで確かめていた。

「信長様はまだ戻ってきていないようだな」

夏の霞んだ青空の下、虎御前山の砦には織田永楽銭の旗指し物が見え隠れしているが、数はそれほど多くない。主力部隊が朝倉追討戦から戻ってきたら、四方は黄旗で埋め尽くされる。

「なんや、それ。何か見えるんか」

青い小袖を着たさゆりが望遠鏡を物珍しがって手を伸ばしてきたが、頬冠りをした牛太郎はさゆりの手をはたいた。

「触んなっ。これは金十枚をはたいて買ったんだからなっ。世界に十個ぐらいしかない貴重品なんだからなっ」

西洋で発明されたばかりである。なので、精度も良くないが、南蛮人が持っていた筒を望遠鏡だと一目でわかった牛太郎は、周囲に自慢したいがために堺の団子茶屋のヨハンを介して入手した。

「いやー、よく見えるなー、やっぱ、金十枚をはたいただけあるわー」

すると、望遠鏡をさゆりに奪い取られてしまう。

「おいっ！」

さゆりは、フン、と、顔を背けると小谷山の谷に望遠鏡を投げ捨ててしまった。

「ああっ！」

「私に見せてくれないからや。いい気味や」

さゆりが草履をぺたぺたと鳴らしながら小谷城本丸の屋敷に帰っていく中で、牛太郎は望遠鏡が吸い込まれていった谷底をしばらく涙目で覗き込んでいた。

けふもまた尋ね入りなむ（1）

上総介が虎御前山に本陣を置いた日のこと。

百姓姿の牛太郎は、さゆりと共に虎御前山にこっそりと現れた。

京、堺、摂津、大和と、あちこちの人間たちと面会する忙しさの中で、急遽、上総介から呼び出しの書状が届いた。

さゆりの導きでけもの道を上がって本陣まで辿り着いた牛太郎は、しばらく木陰に隠れて様子を伺っていたが、上総介の側近かつ男色相手の一人である長谷川藤五郎を見つけ、

「竹。おい、竹」

と、上総介が呼んでいるのと同じ藤五郎のかつての幼名で、木陰から手招いた。

藤五郎は涼やかな目を牛太郎に向けてきたが、一度、知らんぷりした。

「おいっ、竹っ」

そうして、藤五郎は口許をにやにやとほころばせながら歩み寄ってくる。上総介の寵愛を受けているせいか、鼻持ちならない面がある美青年で、

「なんなんですか、その格好は。オヤジ殿」

と、玄蕃允や勝蔵の真似をしたりもする生意気さもあった。

「どうだっていいだろ。そんなことより信長様に会わせろ」

藤五郎は本陣館をちらと一瞥する。

「お会いすればいいじゃないですか」

「お前なあ、なんでそう意地悪するんだ。おれが人目を憚っていることを知っているだろうが。信長様に伝えて、さっさと周りの連中を追い払ってもらえよ」

「いちいち面倒だなあ。いくらあの梓殿だからって、抱いてしまえば何もなかったことにしてくれるでしょう」

「おれはお前みたいないい男じゃないんだ。さっさと行ってこい」

「はいはい」
ようやく、藤五郎が館の中へ入っていき、しばらくすると、館の縁側に藤五郎が現れ、牛太郎を手招いてきた。
上総介の御前にまで連れていってもらうと、藤五郎は会釈を残して去っていく。牛太郎は頬冠りの手拭いを外し、床几に座る上総介の足元に平伏した。
「仰せの通り、やって来ました」
「なんだ、その格好は」
戦場にあって気が立っているのか、上総介の声音は厳しい。
「あ、いや、正体がばれたらまずいんで」
「お前、まだそんなことをやってがるのかあ？　いい加減、梓にもこましゃくれにも詫びを入れろ」
「いや、梓殿には細川さんに教えてもらった短歌を送って機嫌を取っているんですけれど、でも、まだ、やっぱ怖いんで」
「うつけが」
「へえ」
と、上総介の説教に慣れてしまっている牛太郎は、適当な相槌を打つだけ。
「ところで、あっしなんかを呼び出して、なんでしょう。手紙に書いた通り摂津は信濃守が伊丹城に攻め込もうとしていますが、ま、勝手にやらせておけば今のあいつらなら勝つでしょうし、松永弾正も信長様に謝りたいとか言っていますし、今のところあっちのほうは何かあるわけでもないです」
「べらべらべら口達者になりやがって」
「あっ、い、いや」
「お前、このいくさが終わるまでこの砦にいろ」
「えっ？　なんでですか？」
「いいからいろ」
と言われても、姿をくらましている理由を知っている上総介や長谷川藤五郎、堀久太郎といった側近以外に顔を見られたくないので、

牛太郎は上総介の許しを得て館の奥深くに閉じこもっていた。
数日後、上総介が馬廻衆を率いて虎御前山を下りていったと同時に、引きこもっている牛太郎の部屋に上総介の実弟、三十郎信包が訪ねてきた。
三十郎は勘九郎とともに虎御前山の守りを任されている。
「牛太郎、折り入っての頼みごとなのだが」
「なんでしょう」
三十郎は上総介によく似た切れ長の瞼を持っているが、性格は兄とは違って穏やかだった。神妙な顔つきでしばらく視線を伏せていたが、牛太郎に顔を上げると言った。
「兄上がお主をここに呼んだのは他でもない、妹のことなのだ」
むう。彼らの妹の市の婚姻を進めたのは牛太郎である。その名前だけでも暗澹たる気持ちになった。
「市を小谷城から連れ戻して来てほしい」
牛太郎は思わず溜め息をつきそうだった。どうして虎御前山に呼ばれたのかわかった。
上総介は鬼に徹しているが、本当は妹の市を救い出したい。しかし、諸将に復讐戦を位置付けている手前、そのような人情をおくびにも出したくはない、もしくは出せなかった。
その点、牛太郎は織田家中で行方不明同然である。牛太郎が勝手に動き回っていたことにしてしまえば、上総介の面目も立つのだった。
第六天魔王も可愛い妹の兄貴か。だからといって、回りくどい真似しやがって。
「お主ならやってくれるな、牛太郎」
三十郎は物腰の柔らかい口調であったが、その言葉は「市の婚姻を進言した牛太郎こそ決着をつけろ」という意味合いを含んでいるかのようでもあった。
当然、牛太郎は断れない。
「因果なもんやな」

と、さゆりがにやにやと笑いながら言った。虎御前山のどこかに隠れているさゆりはときおり牛太郎の部屋に忍び込んできていたが、小谷城の潜入に協力するつもりは甚だ皆無の様子であった。

「前にも言った通り、私は調略にもいくさにも参加しないかんな」

牛太郎はふてくされる。

「だったら、なんでここまで付いてきたんだ」

「おもしろそうだったからや」

「ふざけんな、クソッ」

牛太郎もさゆりにそうした行動をさせないと言ってしまった手前、さゆりを頼れなかった。

結局、牛太郎は単身小谷城へ潜入することになった。小谷城には市の輿入れのさい、これに供してそのまま小谷城に入った藤掛善右衛門永勝という織田一門の男がいて、三十郎信包は忍び上がりで尾張の元盗賊であった者の子、篠木於松を使い走らせ、善右衛門永勝に牛太郎の潜入を手引きするよう伝えた。

「小谷城に潜伏だなんて、旦那は大変な仕事を与えられちまいましたねえ、ししし」

深夜、牛太郎を迎えに来た篠木於松はどう見ても老人であった。小柄で、猫背で、笑って見せた口の中には歯が三本ぐらいしかない。同行者がこの不気味な老人だと知って、牛太郎は寒気を覚えた。

なんでこんな奴が織田の陣中にいるんだろう。牛太郎は於松のあとをついて虎御前山を下り、切り開かれた小谷山の城郭の影や小怪をぬうように進んでいったが、於松はとにかく歩くのが遅かった。警戒しているからではない。単純に老人だからだった。

ただ、老人だけあって、長年培った勘というものがあるらしい。城郭を張り巡らす浅井兵に一度も見つかることなく牛太郎は本丸近くで待っていた藤掛善右衛門の手引きで小谷城に潜入した。

「じゃ、おれはこの辺で」

役目を終えた於松が暗闇の中に消えていき、

「それでは簗田殿、こちらへ」

と、善右衛門の導きでかがり火の明かりを避けながら城郭の切り立った先端に建てられている屋敷の中へ入っていった。

市姫か。廊下を行く牛太郎の胸中には複雑な思いが湧き起こっていた。市姫に合うのは三、四年ぶりで、最後に会ったときはまだ織田と浅井が盟友関係のころだった。

どんな顔をして会えばいいものか。

「簗田左衛門尉殿をお連れしました」

膝をついて、板戸の向こうにそう伝えた善右衛門に習って、牛太郎も頬冠りを外してその場に両膝をついたが、

「入れ」

と、男の声だった。

牛太郎はあわてて善右衛門に視線をやった。善右衛門はなぜか唇を押し込めて視線を逸らした。

牛太郎は震えるだけで動けなかった。嵌められた。戸が開き、広間に一人、胡坐を組んで座っていたのは甲冑姿の浅井備前守長政だった。

しかし、備前守は牛太郎の姿を確かめるなり微笑する。

「久方ぶりだな、簗田牛太郎殿」

なんなんだろう。三年もの長きに渡って血を流し合ってきたというのに、備前守長政は、最後に会った盟友関係のあの日から何も変わっていない。織田に向ける憎悪も感じられないし、長い戦いでの疲労も、滅亡を近くしている悲愴感も見受けられなかった。

本当に織田軍はこの男と戦ってきたのだろうか、そう疑ってしまえるほど、備前守の目元は涼やかである。

「ど、どうして――」

牛太郎は言葉にならなかった。怒っていないのか。憎んでいないのか。織田を、信長を、自分を。

「いやな、虎御前山から乱波が来たと善右衛門殿が教えてくださってな、内容はというと、簗田殿が市や子供たちを説得しに来るというではないか」

「浅井様は」
善右衛門が頭を下げたまま言った。
「市様や姫君たちの命を救いたいと日頃から考えておられたのです。しかるに、拙者は浅井様に伝え申しました。簗田殿が小谷に来ると」
「わしはお主を待っておった。ずっとな」
牛太郎の視界は涙で霞んだ。この青年の偉大さに感じ入り、同時に姉川の戦いからの三年間を無碍にさせてしまったことに恥入り、悲しみ、後悔した。
あのとき――、姉川での決戦が始まる前夜、牛太郎の元に届いたのは助けを求める備前守からの密書。それを反故にしていなければ、歴史は変えられた。市だけではなく、この青年ももしかしたら助けられた。
だが、時はもう止められない。

けふもまた尋ね入りなむ（2）

油蝉の声が小谷の山を満たしていた。

牛太郎の潜入を容認した備前守だが、織田の将を引き入れたことが将兵たちに知られるとまずいということで、牛太郎にはそのままの百姓姿でいるよう求めてきた。

「市に会ってもらおう」

真夏の日差しが注ぎ込まれる青々とした庭には、白い蝶々がひらひらと飛んでいた。崩壊の予兆などまったく感じられない穏やかな日であった。

甲冑を鳴らす備前守のあとに牛太郎は付いていき、すだれに仕切られた居室の前までやって来た。

中では女児の声が跳ねている。外に控えていた侍女が備前守の来訪にすだれを上げていった。

「市、客人だぞ」

光がこもれる居室には、白桃色の小袖に身を包んだ市が二人の小さな娘を相手にお手玉を披露していた。傍らには赤子を抱いている侍女がいて、あと、齢の通った女と、若い女がいた。

牛太郎はそれを目の当たりにして、岐阜の我が家にあった光景とふと重ねてしまう。いや、梓や寧々、まつといった家来衆の女房たちの集まりとは違って、市の周囲には華やかさも慎ましさもあった。

しかし、戦場を永遠に駆け回る男にとって、女たちの平和とはなかなか目にできないものであった。

平和だった。

備前守に客人だと紹介された牛太郎に、市も娘たちもきょとんとしていたが、牛太郎が頬冠りを外して平伏すると、市はようやく気付いて、声を上げた。

「ああ、牛殿ですか、お待ちしておりましたよ」

「お、お、お久しぶりでございます」

「小谷までわざわざ。大変であったでしょう」
牛太郎はちょっと変だなと思った。もう少し驚かれてもいいものじゃないかと、寂しくもなった。まるで、牛太郎の来訪を知っていたかのように平然としている。
「簗田殿はお主たちを引き取りに来たのだ」
備前守がそう言う。牛太郎は、市が頑として小谷城から出ていかないと言って強情を張っていると聞いている。しかし、備前守の言葉に市は、ふふ、と、夏のそよ風のように笑った。
「神出鬼没とはまさに牛殿のことを言うのでしょうね」
母親になった市は、生来の美しさに加えて、すべてを包み込むような慈愛も得たかのようで、少女の市しか知らなかった牛太郎はたまらずどきまぎしてしまう。
「お、お、お市様のためなら、あ、あっしは、や、山でも、海でも、空でも向かいます」
「お上手だこと。でも、牛殿が梓殿を娶られたということはとっくに存じていますわ」
「そ、そ、そういう意味、意味ではなくて」
「何をでれでれしているんや」
その声に牛太郎はあわてて顔を上げた。突然の来訪者を怪しんでいる下の娘を膝の上に抱えたのは、青の小袖を纏ったさゆりだった。下ろした髪がしっとりと潤っていて、肌もきめ細やかになっていて、ここにやって来たときはただの侍女かと思っていたが、よく見てみると特徴的な丸い鼻である。
「な、な、なんで、お前が！」
騒ぎ立てた牛太郎に備前守はきょとんとし、娘たちは怯え、市は軽やかに笑う。
「お市様の警護とあんたが変なことせんための見張りや」
なんて、でしゃばった真似を……。だったら、最初から素直に協力すればいいものを……。
「さな殿からお聞きしましたわ」

市が訳のわからないことを言う。
「簗田殿がこちらにやって来ることを」
「さ、さな……？」
牛太郎はさゆりにそろりと視線を向ける。
「私の本当の名前や。さゆりは忍び名や」
「ちょ、ちょっと、待て、おいっ！」
「ど、どういうことなのだ、簗田殿」
何をとち狂っているんだ。牛太郎は汗でびっしょりになった。
「旦那様。さな殿は簗田殿の御家来なんですって。くのいちのようですけど、今まで男装して簗田殿にお仕えされていたそうですわ」
あわわ。牛太郎は額に噴き出した汗を手拭いでぬぐいながらも、目の前を真っ暗にしてしまう。
「さな殿が子供たちを小谷から連れ出してくれるそうで」
「さ、左様か」
「でも、さな殿がくのいちで簗田殿の御家来であることをここだけの秘密」
つぼみの開花のような微笑を浮かべる市。上の娘はじっと母親を見つめ、下の娘はさゆりの胸に顔を埋めながら、牛太郎を睨んできている。
「さな殿がおれば安心してこの子たちを任せられますわ。そうでしょう、簗田殿？　お話しは聞きましたよ。さな殿と共に数多のいくさ場を駆け抜けてきたのでしょう？」
牛太郎はさゆりをぎろりと睨みつけた。すると、下の娘が牛太郎を指差し、
「さな、はよ、やっちけて」
ぐぬぬ。
「これ、初」
備前守が下の娘に歩み寄り、さゆりの膝の上から抱き取ろうとしたが、初はちょこちょこと逃げていってしまい、今度は市に抱きついてしまう。

「そのような物騒な物をお召しですから、初が怖がっておりますわ」
「なんともまあ、悲しいものだ」
備前守は笑いながらその場に腰を下ろした。転がっていたお手玉を拾うと、それを父親をじっと見つめている上の娘に、
「ほれ、茶々」
と、放り投げた。掌にお手玉を受け取った茶々は、しばらくじいっとそれを見つめていたが、急に牛太郎に向けて目尻をきっと吊り上げてきて、お手玉を投げつけてきた。
「ぬちはなにものなのぢゃっ！　なのななれ！　ぷれいもの！」
菊人形のようにおとなしい子供だと思っていたら、その小さな体からふいに弾き出た勝気さをどこかの誰かと重ねてしまった牛太郎は、怯えながら額を床にこすりつけた。
「あ、あっしはお、織田の、あ、いや、姫君様のお父上の友人の牛太郎ですっ」
「うとをもうつな！　ぬちは茶々たちをたらいにきたぬつっとぢゃろう！」
「これ、茶々」
血相を変えている茶々を市が抱き寄せようとするが、茶々は小さな手を振り回していやいやすると、転がっていたお手玉を再度牛太郎に投げつけてくる。
「ぬつっとはててけ！」
牛太郎は頭を抱えながら、子供に向かって真面目に訴える。
「な、なんで、あっしが！　盗人だったら、そこの女だってそうじゃありませんか！」
「さなはかわいいからぬつっとぢゃない！　ぬちはみにくいからぬつっとぢゃ！」
「そんな！」
お手玉を投げ尽くした茶々は牛太郎に駆け寄ってくると、牛太郎の頭を小さい手で何度も叩いてきた。
「堪忍してください、姫様！」

「これ、茶々！　やめんか！」
備前守が茶々を引き剥がして、牛太郎はようやく解放された。

「勝手な真似しやがって。どうしてくれんだ。あ？　忍びから足を洗って、次は吉田早之介をやめて、今度はさゆりんをやめて市様の侍女か？　そんなでたらめな物語がまかり通るわけねえだろうが！」
「お市様もおやかた様も了承してくださったんやからええやないか」
「お、おやかた様だと……？」
「そや。私は浅井の人間や」
「ふざけんなっ！　何を滅茶苦茶なことを言ってやがるんだっ！　そんなこと許されるはずがねえだろっ！」
「誰が反対するんや。あんただけやないか」
「当然だろ！　お前の雇い主はおれだぞ！」
「はあ？　私はあんたの家来をやめたはずやけど。高槻で言っていたやないか。いくさも調略もせんて。ただの女やって」
「そういう意味で言ったんじゃない！」
「じゃあ、なんなんや。どういう意味なんや。私はあんたのなんなんや」
「こ、心の恋人だ……」
「あほくさ」
「す、好きだって言ったじゃんか、おれのこと！」
「何を言ってんの？　夢でも見ておったんか？」
「い、言わせておけば、こ、この野郎っ！」
「やめんか！」
「何がやめろだ、この野郎。そうやって綺麗につくろっているのだって、おれを誘惑するつもりだからだろ」
「いやっ。やめてっ」
「うっせえ。どうせ、いやよいやよもいいのくせに。本当はこうしたかったんだろ、んー？　くんくん」
「やめいって言っているやろうがっ！」

「い、痛ててっ！　や、やめろっ！」
「ここであんたの選択肢は三つや。このまま腕をへし折られても私を抱こうとするか、それとも騒ぎ立てられて城内の兵に捕まって、おやかた様の計らいで小谷から解放されたはええけど、このことを知った岐阜の奥方に殺されるのがええか、それとも素直に私の言うこと聞くか。どれか一つや」
「き、聞きます」
「ほんまやな」
「いててててっ！　聞きます！　絶対に聞きますっ！　是非とも聞かせてください！」
　腕ひしぎ十字固めから逃れられた牛太郎は、しらりとした顔で衣服の襟を正すさゆりを、肩でぜえぜえと息を切らせながら睨みつける。
「てかよ、お前が来たんだったら、最初からおれはいらなかったんじゃねえのか」
「さあな」
「さあなも何も、言っていたじゃんか。さゆりんがいれば安心してうんたらかんたらって。だったらさっさと連れ出せよ」
「お市様は出ていくと言ってないやろ」
「むっ」
「あんたが命じられたのは娘たちじゃなくて、お市様やろ」
「じゃ、市様も連れ出せ」
「それは無理な話や」
「なんでだよ」
「惚れておるからや。おやかた様に」

けふもまた尋ね入りなむ（3）

浅井備前守長政はすべてが備わっている最高の男だと牛太郎も思う。ただ、彼は不幸だったのだ。

金ヶ崎の戦いで備前守が寝返る前、上総介は備前守に全幅の信頼を置いていた。

浅井は裏切る。

と、牛太郎が忠告したにも関わらず、上総介は笑い飛ばした。

どうして新九郎が俺に背く。

つまり、上総介がそこまで愛すほど、備前守にはそうした気配が微塵も感じられない健康的な好青年であった。

備前守は不幸な男だ。浅井の裏切りの最大の要因は、義兄の上総介が浅井との約束を反故にして、浅井と古くからの盟友である朝倉領に侵攻したことであった。

あのとき、備前守は義兄の上総介に付こうとしていたらしい。だが、隠居した父の下野守久政や古い重臣たちが、畿内を蹂躙する綺羅星大名の上総介をさほど好んでいなかった。

折しも、将軍と上総介の仲が悪くなり始めたときでもあった。

備前守は古い人間たちの憤りを抑えきれず、渋々、金ヶ崎に向けて出兵してしまった。

もしも、あのとき、上総介が和をもって貴しとしていたら、備前守は今頃、徳川三河守のような飼い犬ではなく、上総介の右腕だったかもしれない。

「金ヶ崎に向けて兵を出したときから、こうなることはわかっていたことだ」

備前守は自嘲するような笑みを浮かべる。

「わしだけではなく、市も」

牛太郎は視線を伏せてしまう。金ヶ崎の戦いから大きく変貌した上総介だが、とどのつまり、上総介の異常なまでの激しさは傲慢な

だけなのではないかと、達観してしまっている備前守を前にして牛太郎は感じ入ってしまう。

今までの虐殺、焼き討ち、どれも織田の天下布武を成し遂げるために必要な悪なのだと言い聞かせようとしてきた。しかし、それは正論ではなかったようだ。

魔王とは、その名の通り、巨大な利己主義者らしい。

「こうなることはわかってもいたが、浅井の当主である以上、戦わなければならなかった。だから、わしは考え方を変えるようにした。義兄上に勝負を挑んだのだと。尾張の天才にわしは勝つのだと」

ただな、と、備前守はにこりと頬を崩し、牛太郎を澄んだ眼差しで眺めてきた。

「やはりかなわなかった。武田殿が撤退されるまでの間、義兄上の耐えようは強靭であり、撤退されてからの動き方は目を見張るほど鮮やかであった。半年もしない間に、もう畿内を制圧せんとしている」

「恨んでいないんですか」

一回りも年上の牛太郎が馬鹿みたいなことを訊ねると、備前守はあっはっはと笑い上げた。

「それは恨んでおるさ。この時代をな」

「時代をスか」

「左様。だが、この時代でなければ得られなかったものもあった。市も子供たちも、それに浅井新九郎という男も、この時代であればこそ得られた。ゆえに恨みはすれこそ、不満はない」

「た、例えばなんですが」

「なんであろう」

「もし、あっしが手柄欲しさに長政様の首を取ろうとしたら、くれますか」

「やらんよ」

備前守はにんまりと笑っていた。

「築田殿、市と子供たちを頼んだぞ」

浅井家は風前のともし火だ。この国の中で虫けら同然でしかなくなってしまっている。ただ、浅井備前守長政という男以上の男がこの国にいるだろうか、牛太郎は廊下を行く中で考えた。

牛太郎は数々の戦場を見てきている。存亡を賭けたいくさ場で、大きな華を開かせた男もいれば、鮮やかな散り花を咲かせた男もいた。

備前守がその男たちのどれとも違うのは、破滅を迎えるだけの長い時間の中で、戦国の男としての意地で反抗を続けながらも、一方ですべてを許し、醜い真似もせずに男として家族を愛し、人間として生きた喜びを実感している。

これに惚れない女がいないわけない。

「もしかして、お前もそのくちか」

と、若干の嫉妬もこめてさゆりを睨みつける。

「何がや」

「いや、いいから、とっとと通せ」

さゆりは首を傾げると、燭台の火がゆらめく障子戸の向こうに声をかけた。

「お市様。織田の盗人が見えられました」

くすくすと笑い声が聞こえてくる。牛太郎は一度、拳を構えて殴る真似をしたが、逆にさゆりに殴る真似をされて腰を怯ませた。

「どうぞ、お入りください」

さゆりがそろそろと障子戸を開けていき、牛太郎はその場に手をつく。

「夜なんかに来て、はしたない真似をしてすいません」

「いいえ。さ、どうぞ、中へ」

「し、失礼します」

居室の中へ入ると、さゆりがするすると障子戸を閉めていった。

二人きりの状況にあがってしまっている牛太郎をよそに、市は針仕事をしている。

「ご、御自分でおやりになるんスか。その、ぬ、縫い物を」

「ややこのべべでございますわ。母親らしいことをしてあげたくなったのですが、何をすればわからなかったので、こうしてべべを縫っているのです」

邪推かもしれないが、それはつまり、離れゆく子にせめてもの遺品を残したいということなのだろうか。

「わらわを口説きに参ったのでしょう？」

「えっ！」

牛太郎はあわててかぶりを振った。

「そ、そんな、滅相もない！　お、お市様を、く、く、口説くだなんて、そんなこと！」

「違いますって、簗田殿」

目尻を緩ませて、牛太郎を柔らかく眺めてくる市。不思議と、この女性に妖艶さは皆無であった。だが、美しい。大袈裟に例えれば、菩薩のようである。

「わらわを説得しに参ったのでしょう？」

「あ、は、はい」

「梓殿とは円満なのですか？」

「えっ？」

「あ・ず・さ・どの」

牛太郎は近頃すっかり必需品の手拭いで額を拭う。少女のころから知っている市なのに、まともに目を見られないほど舞い上がってしまっている。

「あ、は、あ、あー、はい。なんとか、まあ、喧嘩したり、仲が良くなったり」

「ふふ。梓殿がまさか簗田殿の奥様になろうだなんて、誰が思ったでしょうね」

「あ、あ、いや、市様はあずにゃ、あ、いや、梓ど、いや、あ、あ、梓を存じているのですか」

というのも、市が備前守に嫁いだのは織田家の美濃攻めの前で、牛太郎と梓が知り合ったのは岐阜の城下である。そもそも、梓を娶

ったことすら知らないと思っていた。
「もちろん。梓殿は尾張中の女の憧れでしたわ。いいえ、今の世で、自分の生き方を貫き通している女性は梓殿ぐらいでしょう」
雲上人の市に女房をべた褒めされて悪い気のしない牛太郎は、頭をぽりぽりとかいた。そんな梓に惚れられているのだから、まるで自分が褒められているようだった。
とはいえ、市の言う、自分を貫き通す女性が、この戦国の世で果たして正しいのかどうか、疑問でもある。いや、だからこそ、牛太郎と一緒になる前の梓は、織田家中の男たちに厄介な女と見られていたのだろう。
「殿方にも生きざまがあるように、女にも生きざまがありまする。きっと梓殿も、同じ立場なら今のわらわと同じ道を選んでくれるはずです」
牛太郎は市の真意を聞いてはいない。しかし、市は暗に言っていた。説得は聞かないと。
「多分、そうッスね」
しみじみと言いながら、やめようと思った。いくら、自分みたいな人間が言ったところで無駄だろう。
「もし、長政殿があっしで、市様が梓殿だったら、梓殿はあっしと一緒に死ぬって言うでしょうね」
牛太郎は脱力してしまって、長い吐息をつく。
「そうしたら、きっとあっしも止めないッス。だって、梓殿がそう言ってくれたら嬉しいですもん」
ようやくわかった。市に対して備前守が強く出ないのを。
一人で死ぬのは寂しい。だから、一人で死ぬなら誰かと死にたい。そして、それが愛している者であったら、なおさら、その人間と一緒に死にたい。
だが、牛太郎たちは、彼ら夫妻と決定的に違う点がある。
子供がいない。備前守と市にはいる。
それでいいのか。

とは、口に出さなかった。言わなくても、母親の市はわかっているのだから。わかっていてもなお、備前守との死を選びたがっているのだから。

「簗田殿には感謝しております。この浅井家に嫁がせてもらって」

牛太郎は何も答えられない。市は、子供たちとともに生き残っても、思い馳せて死んだとしても、どちらにしても不幸すぎる。選択肢はない。市自身が選択するしかない。

それでも、織田家臣、簗田左衛門尉として、牛太郎は市を力ずくでも小谷城から引きずりおろさなければならなかった。

「でも、市様」

なので、結局は市の胸を一刺しに貫くしかなかった。

「小さい子供に絶望はありません。希望もありません。あるのは親のいる幸せと、親のいない不幸だけです」

牛太郎の言葉に市は笑みを消し、夢のない瞳でただうつむく。牛太郎は頭を下げると、居室を去った。

さゆりには目もくれず、牛太郎はずかずかと廊下を行く。

牛太郎に実子はいない。それでも、あんなことが言えてしまうのは、人の弱味を見つけられているということだった。

謀略を操ってきたからこそ、怪物たちとの交渉を乗り切ってきたからこそ、最後には市に鋭い刃を突きつけられたのであろう。

だが、牛太郎は逃げるようにして足早に廊下を行く。視界の中のものは何も目に入らず。

唇を噛み締めずにはいられなかった。

波濤

左衛門太郎広正は遠い昔のときの自分を見ていた。
雪原と化した西美濃の光景。雪を降らせていた雲が去り、朝空は抜けるように青く、白銀の山々が陽光を浴びて静かに連なっている。
人の姿はこの者だけしかない。
彼はうつむきながらただただ足を運ばせていき、雪をざくざくと踏みしめていき、あてもなく、あてもなく、歩いていた。
着物は返り血で染められている。
十四歳。
「どうして、お前はそこまで躍起になっているんだ」
と、太郎は彼に問いかけるが、少年の耳には何も届かなかったようで、うつむいたまま歩いていく。
哀れだ。太郎は唇を噛み締め、押し黙って彼についていく。
少年は何を求め、何を得るためにそうしているのだろう。この先に待っているものなど大したものではないのに。
銀世界の広大な静寂は、少年の姿をともし火のように小さくさせていた。
どのぐらい歩いただろうか、やがて、少年は老婆とすれ違った。
老婆はずっと腰を曲げて歩いてきたので、少年には気付かないでいた。何事かをぶつぶつと呟いてもいる。
『す、すまぬが』
少年が老婆に声をかけた。少年の声は寒さから、声までかじかんでいた。
『ぼ、菩提山とはどこにあるのか』
老婆は始めて顔を上げたが、少年の姿を確かめたなり、腰を抜かして尻もちをついてしまう。
『お、お助け、お助けくだせえ』
老婆は肩をひどく震わせながら、少年に向けて両手を合わせ、お

助けくだせえ、お助けくだせえ、と、ひたすら命乞いしてくる。
『ち、違う。おれは違う。菩提山を教えてくれ』
『ぼ、菩提山は、あ、あの、あの山でございます』
老婆は顔を伏せたまま、連なる山々の一つを指差した。
『ありがとう』
『鬼じゃ。鬼じゃ。お助けくだせえ。お助けくだせえ』
少年は雪原を行く。嗚咽しながら。
『あいり殿……。あいり殿……』
「どうして泣くんだ」
太郎の声を無視して、少年は頬をぬぐいぬぐい足を進める。
「卑下することはないだろう。お前は立派に生きているじゃないか」
すると、少年はぴたりと足を止め、血塗られた顔を振り向けてくると、充血しきった眼で太郎を睨みつけてきた。
「貴方様に何がわかります」
少年の眼差しは飢えていた。すべてに。
「貴方様に拙者の何がわかりますかっ！」
少年はかつての自分。簗田姓も名乗っていなければ、ただの小姓の太郎だった。
あれから何年経ったのだろうか。左衛門太郎広正は今、漆黒の鎧兜に身を固め、槍を小脇にたずさえ、黒毛の馬と共に山を駆け抜けていた。
鬱蒼と茂る木々の葉から陽の光がこもれている。樹木の根が地上に張り出していて、先日の大雨がところどころに泥水の溜まりを残している。手綱を押し通しにされていきり立つ黒連雀はかまわず泥を跳ね飛ばし、それは馬上の太郎の顔にも、背中に指した織田永楽銭の黄旗も汚した。
小怪を虎か豹のように突き進んでいく太郎と黒連雀に簗田勢の兵卒は付いていくのがやっとの状態であった。
それでも構わず太郎は手綱を押す。黒連雀は太郎に応えるようにしなやかに四股を躍動させる。

進めど進めど小怪の先の木漏れ日は進む先で、進めば進むほど山が彼らをさ迷わせるかのように木々の葉と草が更に視界に茂っていく。

ただし、道はあった。

ここを行けば、敦賀へと抜ける。

「クロ」

馬上に揺れながら太郎は語りかける。

「お前ならわかってくれるだろ。今の俺の気持ちを」

織田の侍大将とは名ばかりの兵数、家格、そして、己。

「だから、なんだ。俺は昔から俺だ」

小怪を抜けた。視界が広がったそこは、遥か先に敦賀湾が望める山の先端であった。

そして、三つ盛木瓜の紋を旗指し物にした朝倉勢百人余が行く手を阻むようにして構えていた。

朝倉勢の退却は混乱を極めているにも関わらず、しんがりを務めているとは、誰に命じられたのでもなく、自らの意思なのだろう。

将校は気概のある者、部隊は強靭であると見られた。

彼らは太郎と黒連雀を待ち構えていたかのように、槍を並べて一斉に駆け出してきた。

真夏の日差しを漆黒の鎧兜で跳ね返しながら、太郎は黒連雀の手綱を引き絞って、足を止めた。首を振り乱して暴れる黒連雀を手綱で操りながら、波濤のように襲いかかって来る朝倉勢をたった一人で見つめた。

「一兵たりとも通させるなあっ！」

馬上の将校の檄が飛んでいる。

「名のある奴だ！　手柄を立てろっ！」

突進してくる兵卒が口端に泡を立てながら叫んでいる。太郎はひどく冷たい眼差しを押し寄せてくる波に注ぎ込みながら呟いた。

「手柄などない」

瞬間、太郎の背後から簗田勢が一気に飛び出てき、太郎は槍を朝

倉勢目掛けて振り落とした。
「者ども！　殺せえっ！」
黒連雀の脇腹を蹴飛ばす。築田勢の兵卒たちと共に駆け抜けながら、
「精神一到！　恩賞、勲功などは無用！　殺戮あるのみだ！」
叫び、瞳孔を広げた。
「相手を殺すことだけを思い、念じろっ！　我らは金ヶ崎からの修羅だっ！」
「佐久間玄蕃允が相手してくれるわっ！」
突進してくる朝倉勢に馬上から一番槍を振り入れたのは玄蕃允であった。彼の槍は最初の敵兵の首を一瞬で掻き切り、続けざまに二人目を突き殺した。
さらに、玄蕃允に続いて築田勢兵卒が槍を突き出していき、そこへ黒連雀が突っ込んでいって、数人を弾き飛ばした。太郎の振り抜いた槍が敵兵を見事に一閃し、返り血が頭上に降った。
血管を浮き上がらせる黒毛の馬上から、血気凄まじさに怯えている敵兵を睨み下ろした。
「どうした、命乞いしてみろ」
そう唸り上げた太郎は、有無も言わせぬままに槍先を敵兵の顔面に突き刺す。そして、あろうことか、串刺しにしたまま死体を持ち上げ、また再び別の敵兵を睨み下ろす。
「俺は築田左衛門太郎だ」
太郎は槍を引き抜くと、間髪入れずに黒連雀の首を押した。黒連雀が前脚を振り上げて、敵兵を踏み砕いてしまい、そうしている間に、一人、また斬った。
「どうしたっ！」
唖然としてしまっている築田勢に向かって太郎は吠え上げた。
「我らは戦場の鬼ぞ！」

織田軍の追撃戦は苛烈を極めた。

余呉を抜けて、敦賀へと誘われる刀根坂で朝倉勢に追いつくと、上総介本隊を加えたうえでの織田軍の至上課題は敵の殲滅であった。目についた者には一切の逃亡を許さず、その首をことごとく跳ねていき、勇敢にも立ち向かってくる部隊は芥子粒のごとく踏み潰した。

絶命した兵卒は三千、将校は二十以上。

それでも上総介は猶予を与えない。敦賀へと侵入すると、待ち構えている敵部隊を全軍をもって撃破していき、その足を止めることもなく木ノ目峠を越えると、朝倉本城のある一乗谷へ突入した。

北近江から一乗谷までの追撃戦はわずか五日。二万の軍勢はもはや離散していた。

「若」

簗田勢の兵卒たちがかかげるたいまつが黒煙を立ち昇らせる中、新七郎が言った。

「大勢は決しております。ご慈悲を」

馬上の太郎は新七郎を睨み据えた。

「慈悲だと？」

この五日間で、太郎の眼差しは血に飢えた獣のように研ぎ澄まされていた。求めようとしているものも、得ようとしているものも、そこには何もない。追撃と殺戮を繰り返してきた男の目は破壊への衝動を抑えられていなかった。

「新七。お前に何がわかる。これはおやかた様の命だ」

そう言うと、太郎は軍勢に進軍を命じた。

「女子供、残らず叩き斬れっ！　一乗谷を根絶やしにしろっ！」

父は喜ぶか

北近江では二万人を引き連れていた朝倉軍であったが、目も当てられない退却戦の有様の末、左衛門督義景を護る兵卒の数はわずか五百人であった。

左衛門督は、従兄弟で朝倉重臣の朝倉孫八郎景鏡の助言で一乗谷城を捨て、孫八郎景鏡の領地である大野郡に逃亡する。

このとき、火あぶりにされて追い出される鼠のごとく、朝倉勢に猶予があまりにもなさすぎたため、女たちには満足に輿などを与えられず、ほとんどが着の身着のまま裸足で城を脱出するという惨状だった。

左衛門督の一乗谷城の放棄を知った上総介は、柴田勢（簗田勢）、西美濃三人衆の部隊に左衛門督の追尾をさせた。

さらに、北近江戦線にも兵を出していた平泉寺を羽柴藤吉郎が調略し、所領安堵と引き換えに織田方へ降伏させて、左衛門督の逃げ場を失わせる。

左衛門督の所在を追っている間にも、織田軍は一乗谷を焼き払い続け、根絶やしの言葉がまこと当てはまるほどの虐殺劇を繰り広げる。

北陸に繁栄を築いた一乗谷という町は消滅した。

窮地に立たされた左衛門督義景であったが、それでもなお、抵抗を夢見ていた。南近江の六角勢のように、北陸の一向一揆衆と組み、辛抱すれば、やがて好機は訪れるであろうと自らを励ました。

しかし、大野郡に移った左衛門督を待ち受けていたのは、孫八郎義鏡の裏切りであった。朝倉の終焉を絶対視した孫八郎は左衛門督の宿所を取り囲むと、左衛門督に忠誠を誓う男たちの最後の抵抗を受けながらも、最後にはかつての主君を自害に追い込ませた。

孫八郎は左衛門督の首を携え、上総介に降伏を申し入れた。

「しかしながら、上総介殿」

孫八郎は上総介の前に平伏したまま瞼を押し瞑り、嘆願した。
「かつての主君の首は携えたものの、左衛門督の子や女房など、これらの者には非はありませぬ。どうか、彼らの命だけはお許しくだされ」
主君を裏切った孫八郎のせめてもの罪滅ぼしだったのであろう。
上総介は冷たく研ぎ澄まされた眼差しでしばらくの間孫八郎と左衛門督の生首を眺めていたが、
「あいわかった」
と、孫八郎の条件を受け入れた。
だが、その後、陽が暮れると、上総介は一乗谷に置いた本陣に丹羽五郎左衛門長秀、それに、左衛門太郎を呼び出した。
「連中を一人残らず殺せ」
「しかし、おやかた様」
と、五郎左が戸惑った。
「降伏の条件は連中の命の保証であったはずでは。ここで約束を反故にしてしまったら、今後の領土の平定に響きまする」
「殺せと言ったら殺せっ！　俺に刃向かうか、五郎左っ！」
「しかし、おやかた様っ！」
五郎左が逆らうことは滅多にない。ただ、彼は今の軍事よりも将来の国造りであったのだろう。上総介が家督を継ぐ前は親友同然の仲であったので、五郎左はわりと物を申せるほうだった。
「だったら、テメーは岐阜に戻れ。できねえなら帰れ」
「そのようなわけには行きませぬ！　拙者は織田のため、おやかた様のために――」
「こましゃくれ」
と、上総介は五郎左を無視して、太郎に目を向けた。
「お前はやれるな？」
「御意」
太郎はそれだけを言うと、甲冑を鳴らしながら腰を上げた。かがり火が照らすその横顔は感情がない。

柴田勢の傘下にある太郎を上総介が直々に呼び出したのは、おそらく、刀根坂から一乗谷にかけての非情な活躍からであった。

「太郎！」

と、五郎左が呼びかけるが、太郎はただ五郎左を見下ろして、

「禍根は残してはなりませぬ。朝倉の滅亡の原因は金ヶ崎にて我らを生き残らせてしまったためです」

「そのようなこと、お主の父が喜ぶと思ってか」

「拙者は簗田左衛門尉の子である前に、織田の武将です」

太郎は踵をくるりと返すと、兜を小脇に抱えたまま去っていく。

「倅はああ言っているが、テメーはどうなんだ。あ？　五郎左。丹羽五郎左衛門とは織田の武将か、それともこましゃくれの親父なのか。どっちだ」

すると、五郎左はあろうことか上総介を睨みつけた。上総介はにやにやと笑っている。

「おやかた様。そのようなことは口にしないでくだされ」

「なら、やれ」

「おやかた様は変わられました」

「お前が変わっていないということだ。いつまでも尾張の地侍でいたいのなら、丹羽の家督をこましゃくれに継がせてやってもいいぞ」

五郎左は腰を重々しく上げると、上総介に一礼して、その前を去った。

翌日、丹羽五郎左衛門の部隊と簗田勢は、岐阜に送るという名目で列を成して進んでいた朝倉の女子供たちを急襲し、皆殺しにした。

上総介は一部の軍勢を越前に残し、北近江へと馬首を返した。

一日で虎御前山の砦に入ると、すぐさま軍議を開き、小谷城の全軍包囲を決定する。

そのうえで、上総介は、この北近江に執念を燃やしている男に命じた。

「サル、お前が攻城の先陣を切れ」

小谷城本丸は備前守長政が立てこもっており、父親の下野守久政が小丸に立てこもっている。それを繋ぐ京極丸の攻め落とし、小谷城郭の分断を藤吉郎に任せた。

「お任せくださりゃれえ！」

諸将の憧憬と嫉妬の眼差しを交互に浴びながら大声を張り上げた藤吉郎だったが、この調子者の野心というのは立身への飽くなき情熱によって支えられていて、本陣から自部隊に戻るかたわら、命じられた以上の成果がどこかにないものかと考えた。

そうして、すぐに思いついた。

「お市様を助けるだぎゃあ」

これを聞いた竹中半兵衛と羽柴小一郎は呆れ顔であった。

「助けると簡単に言っても、どうやって小谷城から連れ戻すのです」

小一郎が言うと、半兵衛が重ねた。

「明朝には京極丸の攻城を申し渡されたというのに、お市様はその攻撃先におられるのですよ。そもそも、お市様にそうした御心があれば、とっくに小谷から下りてきているはずでしょう」

「なんだ、おみゃあ。無理だって言うのきゃあ？」

「左様」

「おみゃあな、無理なものをやってこそ、初めて功が立つもんだぎゃあろ。それににゃ、おやかた様がもっとも願っているのは北近江の地でもなく、備前守の首でもにゃあ。お市様だぎゃ」

「だからといって、兄上の言うことはいつも無理難題すぎます！」

「うつけだぎゃあな、おみゃあは」

藤吉郎は耳をほじくり、取り出した耳糞を小一郎に吹きかける。

「あきらめたらそこでいくさ終了だぎゃ。だいたいにゃ、最近の半兵衛はすぐに無理だ無理だと騒ぎ立てているぎゃあな。天下の参謀にゃんて言われていた美濃のころはどうしたんだぎゃあにゃあ」

「拙者は天下の参謀などと自らを思ったことなどありませぬ。拙者は殿の参謀にすぎませぬ」

「おりゃあの参謀ならどうにかせんかえ！」

小一郎と半兵衛は揃って溜め息をついた。
「それににゃ、おりゃあはどうも気になることが一つあるだぎゃ。おみゃあらにはわからんだろうけどにゃ、これは大出世者の勘というやつでにゃ、気になることが一つあるだぎゃ」
「なんなんですか」
「牛殿だぎゃ。淀城以来、あの男の音沙汰を聞かにゃあけども、もしかしたら、あの男はひそかに北近江にいるんでにゃあか。だいたい、あいつは昔からおりゃあを出し抜く傾向のある男だぎゃ」
「考えすぎですよ、兄上」
「いんや、あいつは北近江にいるだぎゃ。それで、ひそかにおりゃあを出し抜いて功を立てようとしているだぎゃ」
「勘で人の匂いがわかれば苦労はしませんがね」
「だったらいいだぎゃっ！　おみゃあらには任せられにゃあっ！　おりゃあが勝手に探りを掛けるだぎゃあっ！」
藤吉郎は馬鹿みたいな金切り声を放つと床几を立った。ずかずかと陣を出ようとする藤吉郎を小一郎が呼び止める。
「どこに行くのです！」
「於松のところだぎゃ。あのくせ者の爺さんならなんか知っているだぎゃ」
そう言いながら藤吉郎は二人に振り返り、睨みを与える。
「攻城はおみゃあらが勝手にやるだぎゃ。おりゃあはもうやる気がなくなったぎゃ。でも、今のうちだぎゃあ、おりゃあの気持ちを変えられるのは」
小一郎と半兵衛は何も言わず、ただ藤吉郎を見つめるだけだった。
「もういいだぎゃ！」
藤吉郎は地団駄を踏みながら篠木於松のところへ出ていった。

けふもまた尋ね入りなむ（4）

物見により、朝倉家の滅亡は小谷城にも届かれ、もちろん、牛太郎の知るところにもなった。

「簗田殿」

藤掛善右衛門が眉間に皺を寄せ、頬に汗を伝わせながらにじり寄ってくる。

「もはや猶予はございませぬ。今すぐにでもお市様を説得してくだされ」

牛太郎は両の手を両の袖に入れて、目を瞑るだけである。

市に小谷城脱出を促して以来、彼女の返答を聞くどころか、牛太郎は居室にこもりきりで何もしていない。

手を付けたくなかった。

むしろ、牛太郎は市に関わることを恐れている。

牛太郎は後世からやって来た人間であった。幸か不幸か、史実の知識が乏しいがために歴史を大きく操作することができない。そのため、この時代の人々と何ら変わることなく、同じようにもがき苦しみ、同じように喜びを共有していたりもする。

しかし、牛太郎は後世からの知識を活かし、それを意識して歴史を構築してしまったことが二つだけある。

一つは桶狭間の戦い。もう一つは市の婚姻であった。

どちらも上総介に進言したのは他ならぬ牛太郎であり、この二つこそ歴史の転換を決定づけた一大事であったと言っても過言ではない。

桶狭間はいい。今川義元という男の命を奪うことになってしまったが、これは勝者と敗者が確定される闘争の結果である。牛太郎は今川義元という男を一目見ただけであったが、彼は戦国武将であった。野心も抱いていれば、死も覚悟している戦国の男であった。

桶狭間は牛太郎の助言によって時代が引き寄せられたとしても、

それは闘争の結果なのである。

だが、市のことは次元が違った。

市と備前守長政の婚姻が、たとえ、時代の宿命であったとしても、これを決定づけたのは牛太郎であり、それはつまり、市と備前守の人生を牛太郎が決めてしまったことに繋がってくる。

もしも、あのとき進言していなければ――。

時代というものを、たった一人の人間が操ってしまってよいものなのだろうか。

仮に、人間をこの地上に産み出したものが神だったとしても、時代を構築していくのは神ではない。一人一人の人生が積み重なって出来上がった産物が時代である。

地上を支配した王だけでは時代は築けない。道端で野垂れ死んでいった者もいたから、今の時代がある。誰かの人生が欠けてしまったら、今はない。この世にあまねく多くの動物と、草木と、人々があったから、今、世界には昼と夜がある。

だから、牛太郎はなんとなく思っていた。時代の重さと一人の人生の重さは等しいと。

大袈裟に言えば、時代は牛太郎の次の一手を待っている。市を生かすか、死なすか、それだけで今後の歴史は大きく変わっていく。

だが、それでいいのか。市の人生を決めるのは市でなければならないのではないだろうか。たとえ、彼女が俗に言う戦国の女だとしても、一人の男の操作的な行動によって彼女の人生を決めてしまうのは、あんまりではないか、いや、人間の尊厳への冒涜ではないのか。

そもそも、時代を、そして人々の人生を操作するのは異常なことだ。本来ならこの世に存在しない技術だ。神にしか成せない業なのだ。

後世から来たという理由だけで神になってしまえるほど、牛太郎はエゴイストになれなかった。彼は数々の死を目の当たりにしてきたし、一人一人の人生の尊さも感じてきたから。

市の人生は市自身が決めてほしい。牛太郎のせめてもの罪滅ぼしであった。

「あきらめたんか」

と、さゆりが言う。

「まあ、私はお市様はお市様でいてほしいわ。残していく姫様たちが不憫やけど、惚れた男と最後を供にしてもらいたい」

「お前は――」

牛太郎はそのあとを言い淀み、吐息を一つつくと、また言葉を直した。

「さゆりんらしくないな」

「何がや」

「いや、さゆりんはもっと冷徹だっただろ。人の生き死にだとか、感情だとかより、自分たちにどんな利益があるかで判断するような人間だっただろうが」

さゆりは切れ上がった目でしばし覇気を失いかけている牛太郎を見つめていた。そうして、重々しく唇を開いた。

「私はお市様に託しているだけや」

「何をだよ」

やたらむきになっているさゆりに牛太郎が微笑すると、さゆりは恨めしそうな眼差しを牛太郎に送ってきた。

「あんたみたいなグズにはわからんわ。女の気持ちなんてな」

さゆりはあからさまな溜め息をつくと腰を上げ、去り際に言葉を残していった。

「私はお市様の気丈さに女として惚れておる。あんたの家来でもなんでもなくなった今の私の生きがいは、あの人の姫様たちや。姫様たちは私を好いてくれておる」

牛太郎は別段、さゆりに何の言葉をかけるでもなく、去っていく彼女を見送った。

それでいい。忍びくずれでしかなかったさゆりが、新たな生きがいを見つけてくれたならば。

抱かせてもらえないのが口惜しいけれど。
「ししし」
戸の向こうから不気味な笑い声が聞こえてきて、牛太郎は眉をひそめた。戸がするりと開き、現れたのは猿みたいにしわくちゃで小柄な篠木於松であった。
「いい女じゃないですか、旦那」
於松は躊躇することもなく腰を曲げながらも居室に入ってきて、部屋の中をきょろきょろと見まわしたあと、牛太郎の前に緩慢な動作で座り込んだ。
「なんだよ、ジジイ。盗み聞きしやがって。虎御前山に戻ったんじゃなかったのかよ」
「戻りましたけどね、また、忍びこんじまったわけです」
三本しかない歯を見せて笑いながら、首筋をぽりぽりとかき、そこからはシラミだか皮膚かぶれだか正体不明の白い粉がぼろぼろと落ちている。
「ありゃあ、くのいちでしょ、旦那」
牛太郎は黙りこんで於松を見据えた。於松は織田方の何者かに違いないのだが、怪しすぎて容易に言葉を発せられなかった。
「くのいちに惚れられるとは、噂の愚将とは程遠い御仁ですな」
「何の用で来たんだ。言っとくけどな、おれはお前みたいな汚らしくて怪しい奴は大嫌いなんだからな」
「へっへっへ。おれのことを好いている御方なんていませんよ。ししし」
「どうでもいいわ。で、何の用だ」
「へえ。まあね、羽柴藤吉郎様からのことづてですわ」
「なんだと？」
「明朝、京極丸を攻撃することが決まりましてね。羽柴様いわく、お市様を安全なところに避難させられよとのことですわ」
「なんなんだよ、それ。なんで、藤吉郎殿がおれがここにいることを知っているんだ」

「あっしが教えたんで。その代わり、褒美に一両頂きました。ししし」

「てっめー」

「そんで、本丸を攻城するときは羽柴様がお市様のお迎えにあがるから、築田様はお市様を火の手が上がる前にお助けしなされ、とのことです」

「ふざけんなっ！　そんなことできるならとっくにしているって言っておけっ！」

「いやあ、でもね、築田様」

於松はしわくちゃの顔でへらへらと笑いながら言った。

「羽柴様のそれって、おやかた様の命を受けてのことなんですわ」

牛太郎は返す言葉を失くした。

けふもまた尋ね入りなむ（5）

小谷城潜伏は本来ならば密命である。さらには、上総介の指令ではなくて、彼の弟の孫八郎信包からの嘆願であった。

だが、本当に市の救出を上総介が藤吉郎に命じたのであれば、織田軍の公的な指令に違いなかった。

市を小谷城から引きずりおろさなければ、藤吉郎はおろか、牛太郎も許されないだろう。なにせ、あの第六天魔王は虐殺にはためらいも見せないくせに、家族への情愛は人一倍強い。

市の人生がどうのこうのというより、牛太郎は、自身の今後も大きく左右される瀬戸際に立たされた。

腰を針金のように曲げながらにやにやと笑う於松を前に、牛太郎は表情を苦渋に満たしながら、黙りこんで悩み続けた。

どうすればいいんだ。

根底には人間としての苦しみがあるが、それをさておいても、市を小谷城から退出させる手段がなかなか見当たらない。

市が自発的に動いてくれれば、備前守も止めはしないだろう。だが、市がここに留まることを決心しているので、備前守も何も言わない。

そもそも、自分ごときの説得で決心を翻すようなら、藤掛善右衛門あたりがとっくに市を岐阜に連れ戻していたはずじゃないか。

「どうします、旦那」

於松が色褪せた瞳で牛太郎をじっとりと見つめてきた。

「どうしますも何も――」

牛太郎が口を開いたそのときだった。突然、夜の静寂を切り裂くように砲声が鳴り響き、牛太郎の居室も若干揺れた。

「おいっ！」

と、牛太郎は思わず立ち上がる。

「な、なんだ、今のは！」

「あれえ」
於松は呆けた顔である。
立て続けに銃声が聞こえてきた。
「おいっ！　攻撃は明日じゃなかったのかよっ！」
「あいやあ。あっしは確かに羽柴様から明日って聞いたんですけどねえ。気の短いおやかた様のことだから、攻城を早めたのかしらん」
「かしらんじゃねーよっ！　クソジジイッ！」
牛太郎はあわてて居室を飛び出した。廊下を突き進んで庭先に出てみると、太鼓と半鐘の音が夜の帳を打ち響かせている。兵卒たちの掛け声もかすかに聞こえてきた。
攻防は牛太郎のいる本丸と小丸の間を繋ぐ京極丸からであった。
喚声の轟く闇の向こうを唖然と眺める牛太郎の後ろを、本丸に詰めている奉公人や女中たちが叫び声を上げながら右往左往に駆けていく。
「こりゃあ、明日の夜までには持たないかもしれませんなあ」
いつのまにか於松が牛太郎の背後にいた。まったくもって他人事であった。
もしかしたら、と、牛太郎は邪推した。上総介や藤吉郎は、於松を自分のところに寄越し、攻城は明日と伝えておいて、実はそれは浅井方を翻弄する策の一つだったのかもしれない、と。
牛太郎は太ももをぐっと握った。悩む猶予はもうないのかもしれなかった。
闇夜の砲声に阿鼻叫喚とする人々をくぐり抜けていきながら、牛太郎は市の居室に向かった。居室の前にはすでに兵卒たちが五、六人ばかり構えていた。
「なんなんだ、お前は！　奥方様に何の用だ！　持ち場に戻れ！」
奉公人と思われたらしい。
「うるせえ！　どけっ！」
構わず障子戸に手を掛けた牛太郎だったが、兵卒たちに掴まれて引き戻されてしまう。牛太郎は負けじと兵卒たちの腕の中で暴れ倒

し、
「お市様っ！」
と、戸の向こうに呼びかけた。
「あっしです！　話を聞いてください！」
「無礼者っ！」
と、牛太郎は兵卒たちに庭先へと放り投げられてしまう。それでも牛太郎は縁側に這いつくばっていき、上がり込もうとするが、今度は顔面を蹴飛ばされてしまった。
「下郎がっ！　あまりしつこいと斬り捨てるぞっ！」
兵卒が太刀を抜いてきて、牛太郎は尻ごみしたが、声だけ発した。
「お市様っ！　どうか、考えを改めてくださいっ！　姫様たちに寂しい思いをさせないであげてくださいっ！」
「なんなんだ、貴様っ！」
「さては織田の間者だなっ！」
「お市様っ！」
叫び続ける牛太郎に業を煮やした兵卒たちが襲いかかって来て、牛太郎は逃げた。庭先を裸足のままで駆けていったが、足を絡ませて転んでしまい、兵卒たちが迫ってくる。
「やめんかっ！」
縁側から声がした。牛太郎も兵卒たちも声のしたほうに振り向くと、そこに立っていたのは二人の侍女を従えながら、腕に赤子を抱き、両脇に茶々と初を連れたさゆりだった。
「奉公人ごときに目を取られて奥方様の警護を怠るとは何事かっ！」
茶々は小さな唇を押し込ませて牛太郎をじっと見つめてきていた。初はさゆりの足にしがみついて泣き声を上げていた。
「し、しかしっ！」
「今、敵がここに来たらどうするのだ！　奥方様を敵の手にかけるつもりかっ！」
ただの侍女の言葉である。しかし、子供たちを従えながらそこに仁王立ちしているさゆりの気配は神々しくもあり、凄味もあった。

まるで、市かのように、さゆりが姫たちの母親であるかのようなたたずまいであった。
牛太郎はここぞとばかりにさゆりの足元へと這いつくばっていき、さゆりが声を放った。
「早く戻れっ！」
兵卒たちは姫たちに刀を向けるわけには行かず、太刀を鞘に戻すと、渋々と持ち場に戻っていった。
牛太郎は吐息を荒げながらさゆりを仰ぎ見た。
「なんで、お前がお姫様たちと一緒なんだ。お市様はどうしたんだ」
「お市様は部屋におられる。おやかた様と共に自害される。私らは姫様を連れて、おやかた様に最後のお別れや」
「ふざけんなっ！　何を勝手な真似していやがんだっ！」
牛太郎は腰を上げると、口をへの字にしてむすくれている茶々を思わず抱き寄せた。
「こんな小さい子たちを親と離れ離れにするつもりか！　せめてお母さんと一緒ぐらいにさせろよっ！　お前は本当にそれでいいのかよっ！」
「それが戦国の定めや」
「何が定めだっ！　そんなもん、おれが決めてやるわっ！」
茶々が白い歯で唇を噛みしめながら、牛太郎を見上げてきていた。大嫌いな彼に抱かれても嫌がることもなく、ただ、一言、
「うちたろう」
と、目を潤ませた。
「お姫様。あっしがなんとかしてみせますから。あっしがなんとかしてみせますから、いい子でいてください」
そう言って、茶々を縁側に下ろすと、さゆりを睨みつけ、
「お前はお姫様たちと一緒に部屋に戻っていろ」
「どうするつもりや」
「どうもこうもねえ。おれが長政殿を討ち取ってこの戦争は終わりだ！」

牛太郎は縁側に上がるとさゆりや茶々を振り切るようにして廊下を駆け抜け、騒乱している人々たちをくぐり抜け、あるいは突き飛ばしていきながら、備前守のいる居館へと向かった。

大広間にはすでに陣幕が垂らされてあって、庭先にはかがり火がこうこうと燃やされていた。京極丸の戦線に対処しようとする将兵たちの怒号が飛び交っていて、牛太郎はそのどさくさに紛れこんで大広間の前へとやって来た。

「長政殿っ！」

突然現れた奉公人風情の大男の怒鳴り声に、番をしている兵卒も、中に揃っていた将校も一斉に腰を上げた。

「なんだ、貴様っ！」

すぐさま、牛太郎は兵卒たちに揉みくちゃにされるが、

「やめろ。その方は簗田左衛門尉殿だ」

「お、おやかた様っ！」

「どういうことですかっ！」

備前守長政はゆっくりと腰を上げると、兜の下の端正な顔に涼しげな微笑を浮かべた。

「彼は俺の友人だ。姫たちのあとを任せるために俺が呼んだ」

「織田の者を城に呼び寄せていたとは、なにゆえ！」

「黙れっ！　もはや雌雄は決しておる！　それにこの方は織田方を城内に手引きするような無粋な真似をするような御仁ではないっ！　現に命をかえりみず、この場に姿を現しているだろうがっ！」

身勝手な言葉にも聞こえなくなかったが、進退極まってしまっているせいか、将たちは取り立てて騒ぐこともなく黙りこんだ。

沈黙の中、備前守は牛太郎にゆっくりと歩み寄り、兵卒たちに腕をほどかれて平伏する牛太郎に言った。

「市のことであろう。話を聞こうか」

けふもまた尋ね入りなむ（6）

大広間は人払いされ、鎧兜に身を包んで床几に腰かける備前守と、その前に平伏する牛太郎二人きりとなった。

「前代未聞のことだ。城が攻められている最中で、敵方の将と二人きりになろうとは。いや、降伏の交渉の場であったら、おそらくこういう場になるのであろうな」

牛太郎は視線を床に伏せたまま黙っていた。

「して、ついに市を説き伏せられたのかな」

「いえ」

「それでは何用であろう。別れの言葉でしょうかな」

「それとも違います」

銃声、それに武者押しの声がかすかに耳に届いてくる中で、牛太郎はずっと顔を伏せたままでいる。

「長政殿にお願いがあります」

「なんでしょう」

「お市様を説得してください」

沈黙が訪れた。

牛太郎は備前守の顔色を伺わないまま、ひたすら彼の返事を待った。

備前守の本音、それはおそらく、愛した女を織田に返したくない。金輪際、上総介の目に市を入れさせたくない。

上総介に勝負を挑み、完膚無きまでに叩きのめされ、すべての一切を失おうとしている備前守。しかし、彼は唯一の、ささやかにして最大の抵抗を上総介にしようとしていた。

市は返さない。

「説得しても聞かぬ。市にはさんざん言ってきたことだ」

「いいえ。あっしにはわかります。長政殿がお市様を手放したくないことを。長政殿がお市様に生きろと申されれば、お市様は聞きま

す。あっしにはわかります」
「簗田殿」
長政は澄んだ声で言った。
「顔を上げてくだされ」
牛太郎はしばらくの間、顔を伏せていた。
「簗田殿」
と、促されて、牛太郎は仕方なく表を上げた。
備前守は柔らかい眼差しで微笑んでいる。
「せめてもの反抗も、簗田殿は許してくださらぬか」
屈託のない表情で備前守はそうこぼしたが、牛太郎は冷たい目でじっと見つめる。
「それならば」
と、口を開くと、固唾をごくりと飲み込んでから、自らが発する次の言葉に覚悟を持った。
「あっしと共に落ち延びてください」
牛太郎は自分で言って自分の言葉に震えてしまった。市も備前守も説き伏せられなければ、歴史は変わってしまう。それなら、どちらにせよ歴史が変わってしまうなら、備前守も市も生かして、歴史を変える。
「あのくのいちは変装の達人です。長政殿を生かすことぐらい、あっしら簗田の者どもにとっては訳ありません」
自分のケツは自分で拭いてやる。おれがけじめを取って時代を動かしてやる。
自然、彼の目はぎらついた。
「長政殿。あっしは友人と呼んでくれた人を見殺しにできません。だから、ひそかにこの小谷城を脱け出してください」
備前守の顔に笑みはない。
「お願いですっ！　あっしの心意気をどうか汲んでくださいっ！」
牛太郎は額を床に擦りつけ、ひたすら叫んだ。
「あっしが長政殿を守りますっ！　いつの日か、お市様やお姫様た

ちにまた会える日まで長政殿を守りますっ！　お願いですっ！　あっしはあんたも死なせたくないし、お市様やお姫様たちに可哀想な思いをさせたくないっ！」

備前守は軽い溜め息をついた。

「簗田殿」

牛太郎は床にへばりつくように頭を下げ続け、両の目をぎゅうっと押し瞑り、汗を体中から噴き出していた。

「簗田殿のお気持ちは嬉しい限りだ。それがたとえ策だとしても、今のわしにはその言葉だけでも嬉しい」

思わず顔を上げた。

「違いますっ！　本気ですっ！　策なんかじゃありませんっ！」

「わかっておる」

「わかっていませんっ！　あっしは本当に死なせたくないんですっ！　わかってくださいっ！」

「もうよいっ！」

備前守の咆哮が部屋に響き渡り、牛太郎はそろそろと視線を落としていく。

備前守は瞳孔を押し広げたまま、ただただ唇を震わせる。

砲声が轟いて、部屋がかすかに揺れた。

「簗田殿、一つ言っておこう」

か細い声に牛太郎が顔を上げると、悲痛さだけに表情を強張らせる備前守の瞼の奥には光るものがあった。

「この人生が惨めな敗北者の人生であったとしても、わしは浅井新九郎長政という男だ」

そうして、備前守は腰を上げた。宙を仰ぎながら一つ長い吐息をつくと、兜の紐をほどき、それを放り捨ててしまった。

「わしの負けだ、簗田殿。付いて参れ」

備前守のあとに従い縁側を行くと、さきほど牛太郎を追い回してきた兵卒たちが一斉に膝をつき、

「お前らはもうよい。ここを離れて曲輪の守備につけ」
備前守の言葉に一瞬戸惑ったが、
「いいからいけ」
再度の命に兵卒たちは一礼を残すとぞろぞろと去っていった。
「市、わしだ」
備前守の呼びかけに、障子戸が開いた。中には市を取り囲むようにして姫たちが三人、それに二人の侍女と、さゆりがいた。
「ちちうえぇっ」
初がおもむろに駆け寄ってきて、備前守の足に抱きついた。彼女は途端に泣き声を上げ、言葉にならない声で、父上、父上、とさかんに呼び続けた。
「なんだ、初。武者姿は嫌いじゃなかったのか」
「ちちうえぇっ」
牛太郎は見ていられなくて、顔を背けた。
「泣くでない、泣くでない。よしよし。初は泣き虫でいかんな」
備前守は初を甲冑越しに抱き上げ、その小さな体を揺らした。初は初で備前守の首に抱きつき、延々と泣き続ける。
「そろそろでしょうか、旦那様」
市はここにあって微笑を浮かべている。
そんな市のかたわらで、茶々は相変わらずむすくれていた。ただ、瞼には涙が溜められていた。彼女は母親のように気丈に振る舞おうとしているようであった。
「ああ、そろそろだ」
備前守は腰を屈めると、茶々を呼んだ。
「茶々、別れだ。わかっておるな？」
茶々は首を振る。
「そなたが初と江を守るのだぞ」
茶々は首を振る。
「茶々。最後に父上の口を吸うておくれ。な、茶々」
茶々は泣き上げた。わんわんと声を上げて泣いた。そうして、初

がそうしているように備前守に駆け寄ると、父親に抱きついて言った。
「いやぢゃあっ！　わらわもちちうえたまとははうえたまといっちょぢゃあっ！　いやぢゃあっ！」
さゆりが眉間に皺を寄せながら目を瞑っている。牛太郎は腰の手拭いで顔をおさえ、鼻を啜り上げた。胸が引き裂かれるとはまさにこのことだった。
「いやぢゃいやぢゃいやぢゃあっ！」
「さな殿」
と、市がさゆりに呼びかけて、さゆりは顔を歪めたまま腰を上げた。備前守に歩み寄ると、暴れ回る茶々を引き剥がし、初は侍女が引き剥がす。
「旦那様、江も抱いてあげてくだされ」
備前守は市に歩み寄り、赤子を受け取った。江はつぶらな瞳を父親に向けたまま、ぼけえっとしていた。
「肝の据わった子だな。母上に似たのか、のう、江」
指先で頬を触られた江だったが、何が気に入らなかったのか、父親にぷいと顔を背けてしまった。
備前守も市も笑い上げた。茶々と初は暴れ泣いていた。牛太郎はしくしくとうつむいていた。
「さて、あんまり共にしていると名残り惜しくなってしまう」
もう一人の侍女に江を渡した備前守は、
「市」
と、笑顔であった。市は溶けていくような眼差しで備前守を見上げる。その華奢な肩に備前守は籠手越しの手を置き、言った。
「お主も生きてくれ。姫たちのために」
思わぬ言葉に、備前守を見つめる市の瞳はみるみるうちに色を失くしていく。
「あとはもう何も言わせないでくれ、市」
茶々や初が泣き叫ぶだけで、さゆりも侍女たちも時が止まったか

のように、半ば呆然と、半ば震えながら二人を見つめた。
牛太郎は頬の涙を手拭いで何度もぬぐいながら、浮世とまったく離れた二人だけの悲しみの世界で見つめ合っている備前守と市の姿から目を逸らさなかった。
二人の姿をみんなに伝えよう。岐阜の梓に、戦場の太郎に。簗田家の連中どもに。備前守と市は交わす言葉もいらないほどのおしどり夫婦であったと。
「かしこまりました」
市は美しい微笑を浮かべながらそっと目を閉じて、ゆっくりと頷く。
澄み上がった瞼からは涙が一粒、こぼれた。

けふもまた尋ね入りなむ（7）

「藤吉郎殿に伝えろ。明日の朝にお市様たちを小谷城から連れ出すから、そのときだけ攻撃をやめろってな。長政殿にも話を付けてあるって」

牛太郎が言うと、篠木於松はにたにたと笑った。

「備前守を口説くとは大した腕ですねえ、旦那」

「いいから行け」

於松は笑い声を弾ませながら闇の中に消えていく。

柵と石垣に張り巡らされた京極丸が、たいまつとかがり火によってあぶり出されるように浮かび上がっている。太鼓の音と喚声がいっそう大きくなったようで、まるで終末を間近にしているような赤い夜であった。

配下の沓掛勢のほとんどを喪った金ヶ崎の地獄から足掛け三年。長かった。

姉川、二俣、三方ヶ原、池田に高槻。息もつけなかった日々が、今、ようやく終わろうとしている。

織田信長の時代が到来する。

しかし、牛太郎には重圧から解き放たれた充実感など皆無であった。

金ヶ崎山で死に物狂いだったとき、まさか、この戦いの結末を小谷城から眺めるとは思ってもいなかった。

いい加減、もう、帰りたい。嫌なことは全部忘れて。しがらみを脱ぎ捨てて。

「殿」

背後から声がして、牛太郎は振り返った。まったく身に覚えがないその呼び方に何事かと思ったら、庭先にひっそりと佇んでいたのはさゆりだった。

「なんだ、お前か」

牛太郎はさゆりのふざけた冗談に吐息をつくと、また京極丸の火に見入った。

「よくやったわ。立派や」

牛太郎の胸にはなんら響かない。ただただ無視して悲愴な光景を見つめる。

ゆっくりと歩み寄って来たさゆりは、牛太郎の隣に並ぶと、物悲しげな大男の横顔を見上げた。

「上総介にとってあんたはいなくてはならん男になった。あんたは誰にもできんことをした。キンカ頭にもサルにもできんことをやった」

「慰めているのか」

牛太郎は瞳だけを動かしてじろりと見下ろす。

「お市様を長政殿と一緒にさせたいだなんて言っていたくせに笑わせんな」

黒い瞳でじっと見つめてくるさゆり。

「理想と現実は違う。私の理想はいつも現実からかけ離れておる。そんなことはわかっているんや」

「もういい。やめろ、そんなことは聞きたくない」

牛太郎はさゆりを振り払うように背を向けると、その場から歩み出した。

「殿」

さゆりの声に牛太郎は足を止める。

「私は今日からさなになります。お市様たちと共に日々を過ごします」

そっと振り返ると、戦火の香りを乗せた初秋の風が二人の間にそよそよと吹いてきていた。

「今までありがとう」

大きな夜空を背中にして、彼女のしなやかな髪が風に流れている。

「フン」

牛太郎は鼻先を突き上げながら顔を背け、瞼をこすりながらぶつ

くさ呟いた。
「どうせ、おれもお市様も岐阜に帰るんだから、今生の別れみたいに言うな。馬鹿らしい」
地平線の彼方が白み始め、闇から青へ、空がゆっくりと開かれていく。
織田軍の攻撃は停止され、早朝の風が吹く小谷山は、何かを待つような張り詰めた静寂に覆われていた。
戦火の喧騒もなければ、鳥の声もまだない。時の経過を知るには、浮雲のたなびきだけだった。
大手口の門へと向かう道中、それを見送る夜通し戦っていた兵卒たちは、自分たちの前から去っていく愛すべき姫たちの姿に悲痛な面持ちであった。
「奥方様！」
何者かが一行の前に飛び出してきて、地に膝をついた。具足をまとい、汗と埃で顔を汚している彼は、おそらく一兵卒に過ぎなかった。
「どうか、我ら浅井のことを、この小谷のことを、忘れないでくだされ！」
顔を見ることでさえ憚られるというのに、こうして高貴な市の前に飛び出してきた無礼者であったが、藤掛善右衛門も、尾張からずっと付いてきていた奉公人も、侍女や牛太郎も、彼と市の間を遮らずに、ただ見つめた。
市が腰を屈めながら、兵卒に微笑みかける。
「忘れませんよ。一日たりとも」
そう言いながら、市は兵卒の手を取った。
「小谷には感謝しております。今までありがとう。そして、わらわたちのことも、決して忘れないでおくれ。わらわたちは、そなたたちの武運と幸福を離れても願っております」
兵卒は嗚咽を漏らした。すすり泣く声がそこかしこから聞こえて

きた。
「さあ、お市様」
善右衛門が促し、市は腰を上げる。そうして、見送りの兵卒たちに静かに頭を下げた。
そのとき、牛太郎は初めて知った。市は、備前守だけの市ではなく、この浅井すべての市であったことを。
彼女こそが、戦国の女性であった。
大手門が軋みをあげながらゆっくりと開かれていく。門の向こうには、引き渡しの協定通りに織田方の兵の姿は一切なかったが、予定と一つ違うのは朱の襟の陣羽織を纏った小柄な男がただ一人、頭を地にこすりつけて平伏していたことだった。
羽柴藤吉郎である。途端、牛太郎の気持ちはすぐに濁っていく。昨夜からの悲愴を越えた清廉たる時間が、俗物の権化みたいな男の登場によって一気に現実に引き戻されたかのようであった。
「なんなんだ、あの真似は。出過ぎたことをしおって」
善右衛門が思わずこぼし、他の付き人たちも藤吉郎の見え透いたしように顔をしかめる。
さすがの市も足を止めてむっとしている。
「サル殿はまるでこの浅井を侮辱しておる」
「お市様、是非、無視してください」
牛太郎が言うと、市は再びつかつかと歩み出し、やがて、一行は門をくぐった。
「市！」
その声に、皆、振り返った。
「茶々！　初！　江！」
門がゆっくりと閉じられていく中で、備前守長政は馬から下り、そこでじっと立ちつくしながら、一行を見送ってきた。
「皆、健やかに暮らせ！　さらばだ！」
門が閉められ、一行は小谷城から遮断された。
市の瞼から涙がとめどなく溢れている。初も江も女たちの腕の中

で寝ていたが、茶々だけが父親の最後の姿を見ていた。ただ、茶々は泣いていなかった。昨夜はあれだけ泣き叫んでいたのに、最後はむっとした表情のまま閉められた門の向こうを見つめ続けていて、見兼ねた牛太郎が、

「姫様」

と、声をかけると、茶々は小さな瞼にいっぱいの涙を溜めながら、牛太郎を見上げてきた。

「ははうえたまとやくとくちた。なかんて」

牛太郎は茶々の視線まで屈み込むと、茶々の肩に手を置き、

「あっしが父上様の代わりにお守りします。だから、これからは盗人呼ばわりしないでください」

茶々はこくりと頷く。牛太郎は悲しくも気高い小さなその子を胸の中に抱き締めようとした。

が、後ろから藤吉郎に突き飛ばされて、横に転げ倒れた。

「姫様。これからは、この羽柴藤吉郎秀吉が姫様たちをお守りするぎゃあ、ご安心くださりゃれえ」

藤吉郎は満面の笑みである。

「いやぢゃっ！」

茶々は手を伸ばしてきた藤吉郎から逃げ出し、転げ回っていた牛太郎にすがりついてきた。

藤吉郎が牛太郎に冷めた目を向けてくる。

「なんだぎゃあ、早速、姫様を手なずけたんかえ。そんなことしておやかた様の御機嫌を伺おうと見え透いているんだぎゃあ」

牛太郎は藤吉郎を睨み返していたが、フン、と、鼻を背けて腰を上げた藤吉郎は、また、表情を一変させると、市に歩み寄っていった。

「お市様、このたびのご心労察するに余りますぎゃ。この藤吉郎がおやかた様の元までしっかりとお送りしますんで、ご安心してくださりりゃあ」

「いらんっ！」
市が涙を流しながらも、目尻を吊り上げ、見たこともない怒気をはらませていた。
「そなたの所業にわらわらは侮辱された思いじゃっ！　顔も見たくないっ！　去れっ！」
「にゃ、にゃあ……」
「去れっ！」
「しょ、所業とは、しかし、おりゃあはお市様のことを思って――」
「そなたに思われるような市ではないわっ！」
市は着物の裾が汚れるのも構わず歩き始め、付き人たちも藤吉郎を横切っていく。牛太郎は茶々を抱き上げると、呆然としている藤吉郎に去り際、一言添えた。
「ドンマイ」

けふもまた尋ね入りなむ（8）

京極丸攻めをしていた羽柴隊が市とその姫たちを救出した。
前線から飛び込んできた驚愕の報せに左衛門太郎は腰を上げたが、しかし、冷静さを取り戻して、すぐに床几に落ち着いた。
「一体、何が起こったのだ」
左手には佐久間玄蕃允が、右手には新七郎が同じようにして腰かけている。
「半兵衛様の調略であろうか」
「あのサルと竹中殿だったらやりかねないでしょうな」
そう言うと、玄蕃允は下唇をひしゃげ上げながら、つまらなそうに吐息をついた。
「このまま小谷城が落ちれば、浅井攻めはサルに始まりサルに終わったってことになりますな」
新七郎は視線を伏せたままじっと押し黙っている。
「藤吉郎殿はここぞというときに大胆なことをする。昔からそうだ」
太郎は、正直、適わないと思った。戦場でいくら敵兵を薙ぎ倒していっても、藤吉郎がすべてをかっさらってしまう。
それほど、市の救出の印象は絶大である。
しかし、自分にもある程度の兵力さえあれば、と、太郎は忸怩たる思いで拳を握り締めた。藤吉郎のような大胆な発想力はないとしても、戦場の指揮官として立てば、織田家中屈指の将である自信はある。
いや、そう信じていないと、やっていられなかった。
なにやら、陣幕の外が騒がしい。
「何事だ」
新七郎に目を向けると、新七郎はのそりと腰を上げ、陣幕を捲り上げた。すると、そこには兵卒に囲まれて、頬冠りをした大男が立っていて、

「よお」
と、右手を掲げながら入ってきた。
「オヤジ殿っ！」
「父上っ！」
「どもども。お久しぶりですね」
どこかよそよそしく、どこかこそこそと入ってきた牛太郎は、まず、新七郎の肩をぽんぽんと叩いて、彼に微かな笑みを浮かべさせたあと、口を開けて突っ立っている玄蕃允の前を横切り、同じく呆然としている太郎をどかして、床几に座りこんだ。
「お、オヤジ殿、どうして、ここにいるんだ」
「いやあ、暑い暑い」
頬冠りの手拭いを外して、それで額の汗を拭き取っていく牛太郎。
「こんな暑い中、よくまあ甲冑なんて着ていられるな。昼間になったら蒸し鶏にでもなっちゃうんじゃないの」
「オヤジ殿こそ、なんなんだ、その格好は」
「ちょっくら野良仕事をね」
問いにまともに答えようとしない牛太郎が計り知れなくて、太郎は何も言葉にできずただ突っ立っていた。
「おい、新七。お前、堺に行ってねじり鉢巻きと一緒に栗綱を連れてこい。もう、さすがに歩くのは疲れた」
「かしこまりました」
新七郎は剃り上げた頭を軽く下げたが、太郎が制止する。
「ちょっと待ってください。どういうことなんです。まだ、いくさの最中だっていうのに新七郎を外すわけにはいかないでしょう！」
牛太郎はふてぶてしい表情で衣服の中に手拭いを突っ込ませ、何も答えない。
「父上っ！」
「なんだよ。いちいち大声出すな」
「今まで何をしていたのです！　どこにいたのです！　なぜ、ここにいるのです！　まずは訳を説明してください！」

牛太郎は鼻をほじっている。
「父上っ！　何を隠しているのですか！」
「まさか、オヤジ殿」
玄蕃允が言葉を選ぶようにして言った。
「オヤジ殿がサルと一緒にお市様を連れ出してきたのか」
牛太郎はちらりと玄蕃允を見た。しかし、何も答えず、鼻クソを弾き飛ばした。
「まことですか、父上……」
「そんなことよりよ、太郎。沓掛の連中から聞いたぞ。お前、一乗谷で暴れ回ったそうだな」
牛太郎が向けてきた厳しい眼差しに、太郎は思わず視線を逸らしてしまった。牛太郎がそういう真似を嫌っていることを知っている。
「お、おやかた様の命です」
この養父の前で言葉を濁してしまったのは、これが初めてかもしれない。なにしろ、上総介の命という以外の弁明が見当たらなかった。
「そっか。まあ、あんまり無茶して怪我しないようにな」
拍子抜けするような軽い声でそう言うと、牛太郎は腰を上げる。
「疲れたから寝る。出陣ってなっても、おれはしないからな。わかったな」
そうして、陣の奥に引っ込んでいこうとしたが、ふと足を止めて、振り返ってきた。
「あと、太郎。岐阜のあいりんに手紙を出して、あずにゃんの様子を探っておけよな。事と次第によっちゃ、岐阜に帰るのは中止にするから」
雰囲気が変わった気もするけれど、やはり、どこかでは馬鹿馬鹿しい牛太郎に、なんだか、しらりとしてしまう太郎。
「母上は御機嫌ですよ。父上が出し続けている短歌で」
「そ、そっか！　ふむ……。だったら、いいや。うん。じゃ、頑張ってな」

牛太郎は笑顔で奥に引っ込んでいった。

市と面会を果たしたあと、上総介自らが馬に跨り、全軍に京極丸への総攻撃を命じた。

出陣していく簗田勢の騒がしさに牛太郎は一度目を覚ましたが、過ぎ去った嵐のように喧騒が去っていくと、か細い油蝉の鳴き声に夏の終わりを感じながら再び眠りについた。

――。

ハア。ハア。クソッ。おればっかりにこんな思いさせやがって。なんで、おれが一人でコンビニに買い出しに行かなくちゃなんねえんだ。佐久間と森のクソ野郎。後輩のくせに自分たちだけがぶがぶ酒飲みやがって、空っぽになったらおれに行かせるなんて、とんでもねえ奴らだ。

だいたい、なんだって、せっかくの日曜日にバーベキューなんてやるんだ。しかも、おれの家で。どうせ、後片付けするのはおれだけなんて目に見えてるわ。

あずにゃんが出しゃばるからよ……。浅井君が転勤だからって勝手に送別会するのはいいけどよ、なんで、よりにもよっておれの家なんだよ。

本当なら今日はさゆりんとデートだったのに。今日こそさゆりんとデュフフのはずだったのによ！

『あれ、お父さん』

むっ。太郎。隣に連れているのはあいりちゃんだな。久しぶりに見たらめっちゃ可愛くなっているじゃねえか。こんな可愛い幼馴染みだなんて、ふざけやがって。

『どうしたの、一人で。そんなに両手に抱えちゃって』

『気付いたんなら片方ぐらい持て』

『やだね。僕はバーベキューなんかとは関係ないし』

『なんだと！　お前だって織田の人間なんだから、会社のレクリエーションぐらい参加したらどうなんだ！　クソガキ！』

『レクリエーションじゃないでしょ。お母さんたちの井戸端会議の延長でしょうよ』
『まあまあ。おじさん、私が一つ持ちますから』
さすが、あいりちゃんは違うな。出来た子だ。それに比べてうちの太郎ときたらよ！
ハアハア。クソッ。ようやく着いたわ。コンビニ、遠すぎるんだよ。だから、おれはこんなところに家を買うのなんて嫌だったんだ。そもそも、柴田の馬鹿兄貴さえごちゃごちゃ言わなければ家なんて買わなかったんだ。クソッ。
『はいはい、お酒買ってきましたよー』
『おせーよ、オヤジ』
『も、森っ！　誰にそんな口叩いてんだ、こらっ！』
『あー？』
『いや、なんでもないッス。どうぞ』
クソッ。奥様方の前で恥欠かせやがって。まあ、どちらにしろ、マタザの奥さんもサルの奥さんもいるから、どうせ、おれの昔の醜態を話して笑っているんだろうから、今さら、恥もへったくれもないけどよ。
『撃てえーっ』
ううっ。ガキども、どこからそんなに水鉄砲を調達してきたんだよ。
『こらっ！　やめなさい！　茶々！　初！　簗田さん、ごめんなさいね』
あはあ。浅井君の奥さん、拭いてくれるのはありがたいけど、そんなに近寄られたら、フヒヒ。
『お父さん、鼻の下が伸びてるよ』
『なっ、なんなんだよ、テメー。バーベキューとは関係ないんじゃなかったのかよ！』
『お腹空いたし』
『お前、手伝いの一つもしてねえくせにメシだけありつこうとして

んじゃねえっ！』

『まあまあ、いいじゃないですか、簗田さん。さあ、一杯』

むう。浅井君に言われちゃ仕方ねえな。

『さ、仕切り直して、乾杯』

『乾杯』

ごくごく。ふー。使い走らされたあとのビールはうまいぜ。

『簗田さん、いろいろとお世話になりました。娘たちも簗田さんに会えなくなって寂しがりますよ』

『いやいや、浅井君、今生の別れじゃないんだから。二三年したら戻って来るんだろ。また、そのときになったら、こうしてうちでバーベキューでもやろうじゃないの』

『そうですね。それじゃあ、楽しみにしていますよ』

『それより、サル、いや、羽柴さんはどこに行ったんだ』

『え。さっきまでいましたけど』

『にゃあにゃあ、これだぎゃこれだぎゃ、浅井君』

うわあ。どっから持ってきたんだよ、そのゴルフクラブ。わざわざ、車に取りに戻っていたのか。

『タイガーウッズと同じモデルだぎゃ。高かったんだぎゃあからにゃ。ま、これで三百ヤードは軽く越えるだぎゃあにゃ』

――。

光のまばゆさにうっすらと瞼を開けると、真緑の木の葉が風に揺られてさわさわと踊っていた。

瞳の奥に揺らめく倦怠感が、砕け散る光をしばらくの間、見つめさせる。雲が溶け込むような白濁の空は、今ここにいることが夢か現実なのかを判然とさせなかった。

風が運んでくる晩夏の香りは、季節を燃え尽くしたかのような、それでいて爽快な香り。

遠く、打ち鳴らされる太鼓の音が聞こえてきて、牛太郎はようやく目を覚ますと、体を起こした。

「牛太郎には申し訳ないが、今回の件、兄上の中では預かり知らぬことになっている。市の救出に我ら兄弟は関わっていない。藤吉郎が勝手にやったことだと」

三十郎信包の言葉に、牛太郎はただうなずいた。

「最初から承知しています」

仕方ないことだった。いっときは、浅井すべてを滅ぼすと配下の前で公言してしまった以上、上総介には譲れない意地があるのだろう。

どちらにしろ、手柄を上げたと素直に思ってもいないのだが。

「恩に着るぞ、牛太郎。して、市がお主に会いたがっておる。顔を出してやってくれ」

「わかりました」

牛太郎は三十郎の前をあとにすると、市たちが避難しているという居室へ向かった。

上総介自らが小谷城へ向かったことで、館は静まり返っている。

「左衛門尉」

足を止めて振り返ると、勘九郎信忠がたった一人、甲冑姿で突っ立っていた。

「それでいいのか、お主は」

どうやら、三十郎との会話をどこかで盗み聞きしていたらしい。

「なんなら、われが父上に話を付けてやってもいいのだぞ」

「若様」

と、牛太郎は笑った。

「あっしはそういうつもりで小谷城に行ったんじゃないんです。お市様が無事なら、それでいいんス」

「すべて藤吉郎の手柄になるぞ」

「別にいいッスよ」

牛太郎は勘九郎に一礼すると、その場を去った。

居室の前までやって来て、戸の向こうに来訪を告げると、中から市の声がして戸を開けた。

「お疲れなのに、お呼び出ししてごめんなさい」
市は一人だった。侍女も姫たちもいなかった。
牛太郎は戸を閉めると、市の前に腰を落ち着け、頭を下げた。
「お市様に比べたら、あっしの疲れなど大したことじゃありません」
「今頃、あの方は腹を切られる準備でもしているのかもしれませんね」
牛太郎は何も答えられず、ただただ頭を下げている。
「ごめんなさい。誰かと話していなければ、耐え切れないのです。今のわらわが心を開けるのは牛殿しかおりません」
そう言うと、市は牛太郎の前に一枚の紙を差し出してきた。
「これは、旦那様がある日の歌会で詠んだ歌です」
牛太郎は紙を広げると、備前守が詠んだとされる歌を眺めた。

けふもまた尋ね入りなむ山里の花に一夜の宿はなくとも
(今日もまた山里に花を求めに行くのだろう。一夜を過ごす宿はないとしても)

牛太郎の脳裏に備前守の微笑みがまざまざと蘇った。
理想と現実。その狭間で懊悩する備前守の胸中が歌には表われている。もがき苦しみ、世にさ迷い、それでも理想を求め続けた男の呟きであった。
にも関わらず、備前守は微笑を浮かべていたのだ。
牛太郎は天を仰いでしまう。
無常だ。
「きっと、あの方が抱えていた苦しみなど、兄上にも、織田の者たちにもわからぬことなのでしょう。わらわには、それが残念で仕方ありませぬ」
市が鼻をすすっている。
「お市様」
と、牛太郎は唇を噛みしめながら言った。

「織田の者でも、あっしはわかっています。長政殿は誰よりも格好よかったです」
「ありがとう、牛殿」
「故郷に帰りましょう、お市様」
市は瞼の下をぬぐいながら、こくりと頷いた。

けふもまた尋ね入りなむ（終）

小谷城は落ちた。

京極丸を攻め落としたのち、織田軍は下の丸へ突入し、下野守久政が自害したことを確かめると、続いて本丸に総攻撃をかけ、備前守長政が絶命したことを確認した。

浅井朝倉との戦いがここに完結されたが、しかし、上総介はいつものように論功行賞の場を設けず、将兵たちに一人の少年の行方を草の根を分けてまでも探させた。

備前守長政の嫡男、市と婚姻する前の子である万福丸の亡きがらが見当たらない。

「オヤジ殿」

例のように虎御前山の館の居室に隠れていた牛太郎のもとに、長谷川藤五郎がやって来て、しかめっ面で言う。

「おやかた様が怒っていますよ。せっかく、お市様を助け出したっていうのに。何をやってんだか」

牛太郎はよくわかっていないので、

「何をやってんだって、なんなんだよっ。おれは何もやってねえぞっ」

と、あわてて唾を飛ばす。

「まあ、おやかた様が呼んでおりますんで」

事態が飲み込めない牛太郎は戦々恐々としながら上総介の元へ参じた。

「お、お呼びのようで」

汗を滴らせながら平伏する牛太郎に、上総介は小谷城潜伏のねぎらいもかけずに一言。

「万福丸はどこだ」

「へ？」

と、思わず顔を上げてしまう。いくさを終えたばかりからか、上

総介は眉尻を吊り上げて、目は血走っていた。
「だ、誰ッスか、マンプク丸さんって」
「なんだと？　お前は小谷の本丸に忍び込んでいたんじゃねえのか！」
「い、いやっ、た、た、確かにそうッスけど。忍びこんでいたことと、マンプクさんが何の関係があるのかさっぱり」
とぼけているのではない。牛太郎は万福丸を存じていない。
上総介は汗をだらだらと流す牛太郎を睨みつけていたが、やがて、溜め息をついた。
「お前ってやつはいつまで経っても間の抜けた牛だ」
事情も教えてもらえないまま、牛太郎は追い払われた。まったく、理解できない牛太郎は、理由を藤五郎に訊ねてみて、初めてわかった。
「オヤジ殿が逃がしたんじゃないんですか」
「そんなわけあるかよ。おれはマンプク丸っていう子供がいることなんて、初めて知ったんだからな。勘弁してくれよ、クソッ」
織田のために、上総介のために、心を鬼にして市を連れ出してきたというのに、あらぬ疑いをかけられてしまった事実に牛太郎は悔しくなった。本陣館にはもういたくなくなって、泣きながら簗田勢の陣へと去っていった。
牛太郎の言葉に嘘偽りはないと悟った上総介は、市の元を訪れた。
「市、万福丸の行方を知っているであろう」
江を腕に抱く市はただうつむいている。
「お前は万福丸が見つかれば俺が殺すとでも思っているだろうが、違う。俺は新九郎を恨んでおらん。そもそも、俺が協定を破って招いてしまったいくさだ。詫びることができるなら詫びて差し上げたい。だから、俺は新九郎の子を殺さぬ。むしろ、俺の養子とし、織田一門の列に並べたいのだ。そもそも、俺が万福丸を殺そうとする魔王なら、そなたの娘たちも殺しているではないか」
声を放てば常に短い言葉で、人に媚びを売るような物言いを嫌う

上総介なのに、ずいぶんと熱のこもった口調であった。
「市は、兄上様の言葉を信じてよろしいのですか」
「そなたに悲しい思いはもうさせたくない」
市はしばらく押し黙ったのち、言った。
「万福殿は、家臣たちに伴われ敦賀に落ち延びております」
「左様か」
上総介は市の居室を去ると、藤吉郎を呼び出した。
「おい、サル。お前、このいくさで手柄を上げれば浅井所領を褒美にもらうなどとほざいているそうだな」
「あっ、いにゃっ、それは――」
「だったら、くれてやる。ただし、万福丸を捕らえてからだ。俺は岐阜に戻る。お前はここに残り、敦賀にいる万福丸をしらみつぶしに追え。失態は許さねえからな」
一ヵ月後、羽柴勢は敦賀にて万福丸を見つけ出し、身柄を確保した。藤吉郎はその旨をすでに岐阜に戻っている上総介に報せるとともに、万福丸を岐阜へと連行していったが、途中、大垣手前の関ヶ原で岐阜の上総介から早馬が届いた。
万福丸を田楽刺しに処せ。
藤吉郎の手は震えた。万福丸はわずか十歳。
「お、おりゃあがやらなきゃいかんのかえ」
取り囲む小一郎も蜂須賀小六も、藤吉郎の呟きに口をきつく閉ざして黙っていた。
「やらなければなりますまい」
半兵衛が言った。
「やらなければ、今までの苦労は露に消えますぞ。北近江三群の所領がほしければ、殿、やらなければなりますまい」
「どうにかならんのかえ！　半兵衛！　おりゃあは子供を殺したくなんかないだぎゃあっ！」
「たぶらかそうとすれば、殿の首が飛びますぞ」
藤吉郎はがっくりと肩を落とした。

「小一郎、小六。兵に命じて、万福丸様を串刺しにするんだぎゃ」
備前守の遺児、浅井万福丸は関ヶ原で十年の生涯を終えた。

後日、上総介から藤吉郎に北近江十二万石の所領を与える旨が記された朱印状が下され、藤吉郎は明智十兵衛に続く国持ち城主として小谷城を解体し、その木材を使用して琵琶湖のほとりの長浜に城を築き始めた。

ツナマキのじいじい

「じいじい」
「はいはい。なんですか、駒ちゃん」
「じいじい。まーまー」
駒は馬屋の中でうとうととしている栗綱を指差していて興味を持っているらしいが、隣に入っている黒連雀が牛太郎を睨みつけてきているので、駒を抱く牛太郎は馬屋に近寄らなかった。
「駄目ですよ。あの黒いのは危ないから駄目ですよ」
「まーまーっ！　まーまーっ！」
駒が大口を開けて叫んでしまい、牛太郎はうろたえながらも駄目だと言い聞かせる。
「まーまーっ！」
「おいっ！　鉢巻きっ！　ねじり鉢巻きっ！」
「なんだよ」
庭の奥で草むしりをしていた栗之介がしかめっ面でやって来る。
「クリツナを出してこい」
栗之介は駒を腕の中であやす牛太郎を白々と見つめてくる。
「甘やかしすぎなんだよ。昨日だって、若とあいりに言われたばっかりじゃねえか」
「つべこべ言わずに出してこいっ！」
「へえへえ」
栗之介は渋々鍵板を外し、栗綱に口輪を噛ませると、牛太郎と駒の前まで連れ出してきた。駒はきゃっきゃとはしゃぎながら、小さい手を栗綱に伸ばす。
「まーまー」
鍵板をがつがつと蹴飛ばしている黒連雀を気にしつつ、牛太郎は眠気まなこの栗綱の背に駒を乗せてやった。
「まーまー！」

「駒ちゃん、格好いいですねー。可愛いですねー。さすが駒ちゃんですねー。じゃあ、クリツナを駒ちゃんにあげちゃおっかなあ」
「いい加減にしろよ、旦那」
「なんだと」
「毎日毎日駒にべったりしてよ。そんなに甘やかしているとろくな大人にならねえぞ。若じゃなくても言いたくなるっての」
「黙れ」
牛太郎は駒を下ろすと、
「そうだ。クリツナに子供を作らせよう。で、その子供を駒ちゃんにあげよう。おい、鉢巻き、どっかでクリツナの嫁さんを見つけてこい」
「そんな暇があんのかよ。伊勢に出陣するっていう話なんだろ。俺がいなかったら旦那は栗綱に乗れねえじゃねえか」
栗之介は栗綱を旋回させると、馬屋に戻し、暴れている黒連雀を仕方なく出してきた。
黒連雀が目を血走らせながら跳ね上がるので、その異様さに駒はびっくりして泣き出してしまう。
「大丈夫ですよ、駒ちゃん。鉢巻きがいるから大丈夫ですよ」
しかし、駒は軍馬の恐怖に泣きじゃくる。
「よく見せておけよ。馬なんて、たいがい危ねえんだからよ。近寄らせないようにさせろよ」
「お前、さっきからごちゃごちゃ言いやがって。この子は簗田家のお姫様なんだぞ！　それを、侮辱しやがって」
「何を言っておるのじゃ」
うっ。振り返ると、いつのまにか、梓が縁側に仁王立ちしていた。
牛太郎が岐阜に帰ってきて、それまでの短歌攻勢によって音信を滞らせていたことを咎められるようなことはなく、それどころか、小谷城での一件を知って傷心の牛太郎を慰めてくれもした。
しかし、牛太郎が岐阜を離れている間、梓の気分に何が起こったのか、容姿が昔の梓に戻ってしまっていた。さすがに着物はきちん

と着こなしているが、髪型が出会った時のおかっぱ頭に戻っていた。
切り揃えた前髪で眉を隠し、吊りあがり気味の瞼で見据えてくる梓の姿は、過去のじゃじゃ馬娘であった梓を思い出させ、牛太郎はそそくさと縁側に駆け寄ると、泣きじゃくる駒を梓に渡した。
「す、すいません」
「栗之介の言う通り、亭主殿は駒を甘やかしすぎじゃ」
しょんぼりと頭を垂らす牛太郎を尻目に、梓は駒を抱いて去っていった。
「テメーのせいで怒られちゃったじゃねえか」
そう言いながら振り返ったが、栗之介はすでに黒連雀を連れていなくなっていた。
馬屋の中で栗綱があくびをかいている。
「クソッ！」
牛太郎は地団駄を踏むと、そのまま屋敷をあとにした。
稲葉山の木々は色あせ始めている。蝉の声もすっかりなくなって、ちょろちょろと奏でる虫の音が聞こえてくるようになった。
屋敷を出た牛太郎だが、別段、行く当てはない。今更だが、岐阜にいる場合の牛太郎にやるべきことはまったくない。堺では調略やらで忙しくもあり、退屈であればちょっと足を伸ばして文化人と交流していたものだが、岐阜では何もない。所領の沓掛、九之坪の政務は左衛門太郎に任せきりである。
武田との戦い以降、重苦しい日々が続いたので、屋敷でおとなしく休んでいればいいものなのだが、牛太郎は暇を持て余してぼんやりとしてしまうのを避けていた。ついつい思い出してしまうのだ。
小谷城でのことを。
事の顛末は知っている。万福丸は関ヶ原でひどい殺され方をされ、その仕事を果たした藤吉郎は北近江十二万石の褒賞を受け、市は兄に裏切られたと牛太郎の前で悔し涙を流した。
「やはり、わらわは死んだほうが良かった。こんな思いをするのであれば」

思い出したくないので、牛太郎は駒にかまってばかりいた。今の彼には駒だけが安らぎだった。

しかし、引き剥がされてしまったので、泣く泣くどこかへ向かう。訪ねる場所は、前田又左衛門の屋敷ぐらいしかなかった。

「こんちわー」

玄関先で声を上げると年かさの奉公人がやって来て、又左衛門は来客中だから、上がって待っていてくれと言う。

牛太郎は案内された客室に腰を下ろすと、床の間に飾られてある見事な金箔の烏帽子兜にびっくりした。

なんて趣味が悪い。しかも、客間に飾るなんて。

しょせん、尾張の田舎武者か、と、すっかり文化人気取りの牛太郎は又左衛門をあざ笑う。

「牛どの！」

快活な子供の声に視線を向けると、又左衛門の息子の犬千代だった。

「おー。見ない間にずいぶん大きくなったじゃんか。いくつになったんだ」

「とおになりました」

「十歳か。そっかそっか。お姉ちゃんはどうした」

「姉上は本家の甚七郎さまのところに行きました」

「ふ、ふーん。は、早いな、嫁ぐのが」

長女の幸に懐かれていた牛太郎は幾分寂しくなってしまう。犬千代が十歳なら、幸はまだ十二か三だ。

とはいえ、まつが又左に嫁いだのもそのぐらいの齢だったらしいから、年増の女を女房に貰った牛太郎は、一瞬、貧乏くじでも引かされてしまったのではないかと考えてしまった。

「どうしたのですか？」

「い、いやっ、べ、別に。そ、それより、あの兜、お前のオヤジのものなのか」

「さよおです。兜だけではなく、甲冑もあるんですよ。きんきらの

すごいのが」
「誰かに貰ったのか」
犬千代は首を傾げる。まだ、十歳の子供だから無理もない。
「でも、この前のいくさでもその前のいくさでも身に着けていきませんでした」
行事用なのだろう。いくさ場で目立てないでいる又左のやりそうなことだと牛太郎は再度嘲笑する。しかし、一方で、華々しい烏帽子兜を見ているうち、自分も甲冑が欲しくなってきた。
戦場では常に綱巻きの奇怪な格好だが、一度だけ自分の肥えた体に合わせて甲冑をこしらえたことがある。しかし、金ヶ崎山の裏手の沼に甲冑を捨てられてしまい、甲冑を身に着けたのはそれきりない。
隠れて金銭を貯め込んでいるので、甲冑を再び作るのは訳ないのだが、牛太郎は金ヶ崎山以来、後ろ指を差されても、戦場ではずっと綱巻きでいる。
なぜなら、甲冑を着込んでしまうと、その重さで栗綱に跨れなくなってしまうからだ。
だが、ここ最近、織田家はいくさ続きだというのに、牛太郎は昨年末の浜松以来、いくさ場に出ていない。すべて、太郎が済ませてくれている。
なので、又左の金箔塗りの兜のように、行事用の鎧兜ぐらい作ってもいいんじゃないか。
「なあ、犬千代。おれも甲冑を作ろうかなって思っているんだが、どういうのがいいと思う?」
「えーっ? 牛どのはやっぱり綱がいいですよ。ツナマキの簗田なんですもん」
牛太郎は十歳の子供にむっとした。
「お前はやっぱりマタザの子だな」

牛太郎の不機嫌さに犬千代が首を傾げていたところ、又左衛門がやって来た。

「おう、待たせたな。何用だ」

「いや、マタザさんにはずいぶんと会っていなかったので」

「そうかそうか」

急に腰を低くし始めた牛太郎を犬千代がぼけえと見つめてくる。

牛太郎はちょっと恥ずかしくなってしまった。沓掛城主で嫡男が侍大将の牛太郎は、又左衛門と同格か、いや、柴田権六郎の義弟なのだから見ようによっては頭一つ上である。

「い、犬千代殿も大きくなりましたね」

しかし、牛太郎には若いころの又左衛門の印象が強く残ってしまっているので、さきほどまでは犬千代呼ばわりしていたのにこのざまである。

犬千代の牛太郎を見る目がしらりとしている。

「んんっ。んんっ」

なので、咳払いを始めた。

「どうした」

牛太郎は犬千代に視線をちらりと送った。又左は牛太郎をひたと見つめ、重要な話だと勘違いしたらしく、顔つきを神妙にさせた。

「犬千代、下がっておれ」

「はーい」

犬千代が去っていくと、牛太郎と又左はしばらく沈黙した。ただ単に遊びに来ただけだったのに、雰囲気が思わぬ険しさに張り詰めていってしまう。

「して、用件はなんだ」

と、又左の声が厳しいものになっている。

「えーと、そのお……、そ、そういえば、藤吉郎殿が長浜に城を築

かれているそうッスね」
「ん。ああ、うん。そうだな」
「記念に何か贈り物でもしようかと思いまして」
すると、又左はあからさまに顔をしかめた。
「そんなものいらんだろ。だいたい、そんなことなのか、用件は」
「あ、いや、まあ」
又左は大きく溜め息をついた。
「まあいい。それより、お前、今まで何をしていたんだ。浜松に行ったまでは聞いていたが、それから先はずっと堺にいたのか？」
又左は何も知らない。牛太郎が二俣城の防衛、三方ヶ原の会戦に参加していたことも、摂津の工作を成し遂げたことも、小谷城から市を連れ出してきたことも。
「一体、何をやっていたんだ」
又左は眉をしかめた。それが織田家中の将たちの素直な思いである。牛太郎が裏で働いていたすべてを把握しているのは主人の上総介やその側近だけであり、勘付いている者だけでも左衛門太郎や玄蕃允、勝蔵ぐらいしかいない。
「い、いろいろと」
「おやかた様が何も言わないところを見ると、お前はおやかた様の命で何かしらしているんだろうが、ちょっとは太郎のことも考えてやれ」
「太郎のことって？」
又左は腕を組むと、眉間に皺を寄せて、床の一点を見つめた。
「あいつが何か仕出かしたんですか」
「いや、そうじゃねえがな。近頃の太郎はどうも一辺倒というか、なんというか、少し心持ちに余裕ってものがない」
「そうスかね。今は家で一緒ですけど、別に何も変わんないッスよ。まあ、一乗谷で暴れ回ったっていうのは意外でしたけど。でも、それは信長様の命令だったんでしょ」
「まあな」

「あいつはああ見えて残虐凶暴な部分を潜ませているんですよ」
牛太郎は、遠い昔、太郎が返り血を浴びて一人菩提山にやって来たことや、浅井の密使を有無も言わせず斬り捨ててしまったことを話した。
「ダークサイドに堕ちる前のアナキンみたいなもんです」
又左衛門は首を傾げる。
「キリシタンの教えは俺にはよくわからん。お前は、まあ、堺にいって、そういうものを知っているのかもしれんがな」
「そんなことより、マタザさん」
牛太郎は床の間の烏帽子兜を指差した。
「あれって、信長様から貰ったんですか？」
すると、又左のまなこが若さを取り戻したかのようにきらりと光る。
「フッ。己でこしらえたのよ」
「へえ」
興味なさげにうなずいて、胸の内ではせせら笑う。
だせえ。
その価値観が、である。
牛太郎は田中宗易や荒木信濃守が唱えている静けさの中の質実とした美に、いつのまにか、ある意味で毒されている。
藤吉郎もそうだが、目を奪われるような華やかさは牛太郎には虚実でしかない。
だから、日の出の勢いの織田家の人間だということを大々的に表しているようなその兜は、成金根性丸出しだと牛太郎は軽蔑する。
「まあ、俺も行く行くは一国一城の主だろうからな。公所用の甲冑ぐらいこしらえておかねえと、恥をかいてしまうからな」
「いやあ、まさに織田に前田又左衛門ありってのを表している見事さッスよ」
「はっはっ。そうだろう。牛もいい加減、甲冑ぐらいこしらえてみろ」

フン。おれのほうが金持っているし。
「じゃ、あっしはこのへんで。おまつさんによろしく言っておいてください」
「なんだ、会っていけばいいじゃねえか」
「また、遊びに来ます」
今度来たときは上総介から頂戴した鞍を持ってきてやろうと考えながら、屋敷をあとにした。
岐阜はおもしろくないな。牛太郎は帰路を辿りながら、早々に堺に戻ろうかと考え始めた。
しかし、岐阜を離れると梓がまた臍を曲げそうだし、そもそも摂津の調略を一通り遂げてしまった牛太郎は、上総介に了承を貰えるような大義名分がない。
これをいいことにして、きっと、四郎次郎が好き勝手にやっているんじゃないか。
とりあえず、帰って、田中宗易に文をしたためようと思った。四郎次郎が変な真似をしないか監督してくれと。
「う、牛殿」
木陰から届いてきた気色悪い猫撫で声に、牛太郎は足を止めた。
「なんスか」
冷えた視線を木の幹からひょっこり出ている禿げ頭に向ける。
「そんなところに隠れて。あっしをつけていたんですか」
「にゃあ。おみゃあが又左の家に来たもんだから、ちょっとにゃあ」
藤吉郎が頭をぽりぽりと欠きながら、へらへらと笑って牛太郎の前に出てくる。
「何をやってんスか、一人でこんなところで。長浜に城を建てているんでしょ」
「いにゃあ、ちょっと、悶着を起こしちまってにゃあ」
牛太郎は藤吉郎に向ける瞳をさらに冷え冷えとさせていく。
また、金か。
「金ならないッスかんね。ずっと前に貸した五百貫、びた一文も返

してもらってないんスから。それにこの前の小谷城で、あっしを突き飛ばしてしゃしゃり出てきたことを忘れていませんからね」

「いやいや、銭じゃないんだぎゃ。銭は今度まとめて返すだぎゃ。ほら、おりゃあは長浜の城主になっただぎゃあろ。十二万石だぎゃあぞ。十二万石あれば、五百貫なんてすぐに返すだぎゃあ。おみゃあの沓掛二千石とは訳が違うんだぎゃあから」

「馬鹿にしてんスか」

牛太郎はぷいと顔を背けてすたすたと我が家に戻っていく。

「ま、待ってくれだぎゃっ。すまんきゃった。この通りだぎゃ」

牛太郎の前に飛び出てきて、両手を合わせて頭を下げてくる藤吉郎。

「おみゃあにお願いごとがあるんだぎゃ。牛殿か又左しかおらんのだぎゃあ。又左には断られちまったから、どうか、どうか、牛殿、お願いしますだぎゃあ」

藤吉郎は地べたに両膝を付けてまで、牛太郎に手を合わせてくる。

「いや、あっしもお断りいたします」

牛太郎は藤吉郎をのけて、我が家への帰路を辿る。

「待ってくれだぎゃあっ！」

藤吉郎は半分泣きべそをかきながら、牛太郎の袖を引っ掴んでくる。

「頼むだぎゃ。おみゃあしかおらんのだぎゃあ。見返りはするだぎゃ。だから頼むだぎゃあ」

「見返りってなんスか。どうせ、ろくな物じゃないでしょ。あのだっさい陣羽織とか、もしくは、おにゃの子とか。言っておきますけど、あっしはもう奥さんがいるんスからね。物凄く怖いのが」

「いやいや、そんなんじゃにゃあって」

「じゃあ、なんスか」

「長浜城におみゃあ専用の居室を設けるだぎゃ」

「お断りします」

牛太郎は藤吉郎を振りほどいたが、藤吉郎はなおも足に掴みかか

って、しつこい。
「一体、なんなんスか！　あっしに何をしろって言うんスか！」
長浜十二万石の領主ともあろう男が、地べたを這いつくばりながら牛太郎に涙目で顔を上げてくる。
「お、おりゃあと一緒に女房に謝ってほしいんだぎゃ」
「なんで、あっしが！」
「おみゃあしかいないんだぎゃあ。頼むだぎゃあ」
藤吉郎が足にしがみつきながらおいおいと泣き始めて、牛太郎は長々と溜め息をついた。

尾張のころからちっとも変わっていない

聞かなければ良かったと、牛太郎は後悔した。

長浜に城を築いている藤吉郎だが、実は岐阜の屋敷からはずいぶん前に勘当されているそうで、梓の機嫌取りをしていた牛太郎と同じように、藤吉郎もまた北近江攻めの最中で寧々に詫びの文を散々出していたらしいが、寧々は一向に怒りの矛先をおさめず、長浜に城が出来たら移り住んできてほしいとの文を出しても無視された。

寧々が激怒している理由。それは、藤吉郎の隠し子の発覚であった。

「聞かなかったことにしましょう」

牛太郎は逃げ去ろうとしたが、藤吉郎にしっかりと捕まってしまっている。

隠し子はすでに三歳らしい。本圀寺の変があった時期、京に駐在していた藤吉郎は物欲の権化よろしく妾をはべらせ、子を腹ませてしまった。

その事実を藤吉郎はしばらく隠していたらしいが、どこでどう漏れたか、寧々の預かり知るところとなってしまったらしい。

そうして、さきほど、又左衛門の屋敷に牛太郎より先に訪ねていたのが藤吉郎で、又左に頑として断られた。

「おりゃあはどうしたらいいかわからんだぎゃあ。おりゃあとにゃにゃには子供がいにゃあ。でも、にゃにゃには黙っていたから、今さら、嫡男にするだとか言えんだぎゃあ」

地べたに突っ伏しながら頭を抱える藤吉郎。牛太郎は関わり合いを避けたくて突き放す。

「信長様に仲裁してもらえばいいんじゃないんスか」

「そ、そんなの恐れ多くて無理に決まっているだぎゃあっ！　だいたい、おやかた様にはにゃにゃを大切にせいって何度も叱られているだぎゃ……」

「ドンマイ」
「なんなんだぎゃ、それは！　おりゃあを馬鹿にしているだぎゃあか！」
「じゃ、いいッス。さよなら」
「ちょ、ちょっと、待ってくれだぎゃあっ。すまん。すまんだったぎゃあ。おりゃあには牛殿しかおらんだぎゃあっ」
「あっしだって無理に決まっているでしょ、そんなの！　あっしが行ったところで何になるんスか！」
「お、おみゃあがいれば、ちょっとは話を聞いてくれるだぎゃ、多分……。昔から仲良しだぎゃあし……」
「わかりました。じゃ、梓殿に仲裁してもらいましょ」
「にゃっ！　なんでだぎゃあっ！」
「だって、梓殿と寧々さんは仲良しですもん。梓殿の話なら寧々さんも聞いてくれるでしょ」
「お、おみゃあっ！　何を血迷っているんだぎゃあっ！　おみゃあのカカアとにゃにゃが仲良しかもしんにゃあが、お、お、お、おりゃあがおみゃあのカカアに殺されちまうじゃにゃあかっ！」
「そんなことないッスよー」
牛太郎はへらへらと笑う。
「さすがの梓殿でも、他人の旦那さんを殴る蹴るはしないですよー」
「駄目だぎゃ駄目だぎゃ駄目だぎゃ。それだけは駄目だぎゃ。おみゃあはおりゃあを陥れようとしているだぎゃ。おみゃあのカカアが又左や内蔵助のキャンタマを潰したことぐらいおりゃあも知っているんだぎゃ」
「じゃ、いいッス。さよなら」
「ちょっと待ってくれだぎゃあっ。頼むだぎゃあ。おみゃあとおりゃあで謝ってくれだぎゃあ。頼むだぎゃあ。いつでも長浜に招待するから頼むだぎゃあ」
「嫌ッスよ！　勘弁してくださいよっ！」
「頼むだぎゃあ。お願いしますだぎゃあ。おりゃあには牛殿しかお

らんだぎゃあ。頼むだぎゃあ」
いつまでもへばりつく藤吉郎のしつこさに、牛太郎はとうとう根負けしてしまい、
「わかりましたよ」
と、溜め息を吐いた。
「本当かえ！」
藤吉郎は飛び上がると、牛太郎の両手を取り、瞼からあからさまな涙を流しながら、
「おみゃあしかいねえ。おりゃあにはおみゃあしかいねえんだぎゃ。さすが簗田牛太郎様だぎゃ」
そう言うと、牛太郎の手を引き、牛太郎はさっさと連れ出されてしまった。
藤吉郎の屋敷は牛太郎や又左衛門の屋敷とごく近く、門前にまでやって来ると、藤吉郎は足を止めて、真っ青な顔で玄関先を見つめた。
「何をやってんスか」
「こ、心の準備が必要だぎゃ」
「あのね、藤吉郎殿。いくら怒られるからって、あっしに比べたら屁でもないでしょ。あっしなんか、こういう場合、玄関先に飛び出して来て、何も言わせてもらえないままぶん殴られるんですからね」
「そ、それもそうだぎゃな。おみゃあのカカアほど恐ろしくはないだぎゃ」
藤吉郎は何度か深呼吸をしたあと、意を決して門をくぐった。
すると、調度、玄関先から出てくる一人の少年の姿があり、彼は藤吉郎と牛太郎の姿を確認すると、目を輝かせて騒ぎ立てた。
「と、殿っ！　それに、牛！」
藤吉郎の小姓の市松であった。彼とは岐阜城下で悶着を起こして以来の久方ぶりの再会で、背丈も伸び、ずいぶんと逞しくなっている。
が、牛太郎は再会の感慨よりも先に苛立った。

「藤吉郎殿の小姓は、あっしを牛呼ばわりですか」
不機嫌な牛太郎にあわてた藤吉郎は市松に詰め寄ると、彼の頭に拳骨を見舞った。
「お、おみゃあっ！　なんて口のきき方なんだぎゃ！　簗田殿だぎゃあろっ！　この馬鹿たれ！」
「ううっ。だって、殿が簗田殿なんて呼ぶな、あいつは牛――」
藤吉郎は再度市松の頭を引っ叩いて、その口を封じ込めた。
「いにゃあ、腕白で仕方ないだぎゃあにゃあ。こりゃっ、おみゃあはどっか行ってろっ」
市松が頭を抱えながら門外へと逃げ出していき、牛太郎は藤吉郎を白々と見つめる。
「さ、どうぞ、簗田左衛門尉殿」
「なんか、どうでもよくなってきたんスけど」
「いにゃいにゃ、まあまあ、そんなこと言わずに。遠慮なく上がってくれだぎゃ」
牛太郎は渋々藤吉郎のあとから軒の下をくぐる。
「帰ったぎゃー！　長浜十二万石の領主様が帰ったぎゃあどー！」
ふっきれたように威勢良く大声を上げる藤吉郎を睨みつける牛太郎。なんとなく、読めた。藤吉郎は牛太郎を招いたふりをして、そのどさくさで隠し子のことはうやむやにしてしまおうという算段らしい。
「だ、旦那様っ」
女中や奉公人たちがぞろぞろと出てきて、どこかまずい顔をしながらも、上がりかまちの上で膝を揃えていく。
「お、お帰りなさいませ」
「にゃあ。おりゃあの留守中、御苦労でやった。んで、カカアはどうしたぎゃ。出迎えもにゃあのか、あの女は」
すると、連中はいちように蔑むような目を上げてきて、藤吉郎は肩をびくっと震わせる。牛太郎は口端を歪めて笑った。
「お、お、お客様の御足を早くすすいでもらわにゃあかっ！」

女中たちが無言のまま足洗いの桶を差し出してきて、張り詰めた空気の中、牛太郎は笑いをこらえながら足の汚れを落としていく。

すると、

「また、お前様は牛殿に助けてもらおうという腹積もりですか」

上がりかまちに腰を下ろしている二人の背後に、寧々が仁王立ちしていた。

初めて出会った時より若干ふっくらとした寧々は、出世街道を驀進してきたお騒がせ男の女房として十分な貫禄と肝の据わりようを漂わせており、目には梓に負けず劣らずの怒気をはらませていた。

「長浜十二万石の領主様が聞いて呆れますね。尾張のころとちっとも変わっていませんでしょう」

藤吉郎は肩を小刻みに震わせながら、そろり、そろりと背後を確かめ、ごくりと固唾を呑んだ音が牛太郎にも聞こえてきた。

誰でも女房は怖いものらしい。

「お、お、おみゃあっ！」

開き直ったのか、藤吉郎は腰を上げると、突き出した指先をぷるぷると震わせながら大声を上げた。

「きゃ、きゃ、客人の前で、お、おみゃあは恥を欠かせるのきゃあっ！」

「何が客人ですか。どうせ、無理やり連れて来たのでしょう」

「まあまあ」

牛太郎はへらへらと笑いながら、彼らの間に割って入った。どうせなら、ここで藤吉郎に恩を売っておき、今後の脅しの材料にでも使おうかと思った。

「藤吉郎殿も謝りたいみたいですし、冷静になって話し合いましょうよ」

しかし、寧々がぎらりと光らせた瞳を牛太郎に向けてきた。

「それならば、冷静に話し合いましょうか、牛殿。貴方様が梓様をおざなりにされていたことも含めて」

「えっ！」

「藤吉郎殿も今後、私とどうしていきたいのかを！」
　寧々の瞳孔が完全に押し広げられていて、鬼が乗り移ってしまったかのような寧々に牛太郎は鳥肌を立て、藤吉郎はがちがちと歯を鳴らしていた。
「あ、あ、あっしは関係ないじゃないッスか！　あっしと梓殿はうまくいっているし、確かに手紙は出し忘れていましたけど、許してもらえたんだからいいじゃないッスか！」
「おべんちゃらを並べ立ててでしょ。梓様は純粋な方だからいいかもしれませんが、藤吉郎殿にさんざん騙されている私の目は節穴じゃありませんよ」
「そんなあっ！」
「私ははらわた煮えくり返っているのです！　貴方様たちのように健気に待つ女房に鞭打つような真似をする貴方様たちに腹が立っているのです！」
　八つ当たりだ。牛太郎は藤吉郎を恨めしく睨みつけたが、藤吉郎は申し訳なさそうな顔でひょこっと頭を下げてきた。

辻褄合わせ

とばっちりを受けた牛太郎は藤吉郎とともに日暮れまでこんこんと説教をされ、結局、

「お前様に罪はありますが、生まれてしまった子に罪はありません。長浜に城が出来たら私と共に呼んで差し上げなされ」

と、出来た女房の一言で、額を擦り続けていた藤吉郎は、勘弁してもらえた。

牛太郎にしてみればまったく不愉快だが。

この話は羽柴家の女中から前田家の女中、そうしてまつからあいりへと瞬く間に行き渡り、牛太郎が一言も言ってないにも関わらず、簗田家のその日の夕飯の話題になってしまった。

「父上まで寧々様に詰められたとは笑ってしまいますね」

戦場での危うさが抜けおちた太郎がにこにこと笑いながら言ったが、牛太郎はむすっとしながら白米を口に運び続ける。

「羽柴様も羽柴様で、旦那様に頼るとは相変わらずですね」

女中の貞が言うと、あいりが、

「でも、寧々様は本当に根のある方。もし、私が藤吉郎殿の嫁だと思ったら、ぞっとしてしまいます」

ついさっきまで寧々に叱られていた牛太郎は、まるで自分が言われているように感じてしまい、ついつい視線を伏せてしまう。

実際、梓の表情が不機嫌である。そういえば、そんな事実があったと、怒りを蒸し返しているのかもしれない。

「もういい。やめろ。よそさまはよそさま。うちはうち。あんまりせせら笑うもんじゃない」

「なんだい」

口の軽い栗之介が声を上げて、牛太郎は内心焦った。

「藤吉郎殿の失態なんて、旦那が一番喜びそうな話じゃねえか」

「そうじゃ」

おかっぱ頭の梓がむすっとしたまま視線を牛太郎に向けてくる。
「亭主殿も何か後ろめたいことがあるに違いない」
「あ、あ、ある訳ないじゃないッスか！　そ、そりゃ、あ、梓殿に、て、手紙を出し忘れていましたけど、あ、あっしは藤吉郎殿みたいに女と遊んでいたんじゃなくて、い、忙しかっただけなんですから！」
梓は箸を止めたまま、牛太郎に視線を突き差し続けてくる。
「彩はどうしたのじゃ」
「えっ！」
梓の言葉に食卓の空気は一気に冷たくなってしまう。
「なにゆえ、彩は帰ってこんのじゃ。堺はもう用済みなんじゃろう。なにゆえ、帰ってこんのじゃ」
「そ、そ、それは、そ、その」
栗之介にちらりと目をやった。栗之介は唇を押し込めて、そこだけは健気に沈黙を決め込もうとしている。
「だ、団子屋をやってます。シロジロと一緒に」
「ふーん」
「母上」
と、太郎が口を開いた。
「彩が父上とねんごろになるはずがありますまい。むしろ、父上にそうした兆候があったら、彩はすぐに母上に報せてきましょう。そのために母上は彩が父上に付いていくのを了承したはずでは」
大人の対応を取ってくれた太郎に、牛太郎は目をうるませながら見入った。
ありがとう、太郎。
「それもそうじゃが」
「父上が女を口説けるはずがありますまい。おやかた様の命ぐらいでしか婚姻できない方なんですから」
「それもそうじゃな」
牛太郎は太郎に向ける目を睨みに変えた。

「そんなことより、彩もそうですが、父上、早之介はどうしたのです」

牛太郎はそそくさと目を逸らし、味噌汁をずるずると啜ってごまかした。

「まったく音沙汰を聞きませんが、堺で何をしているのです。いくさ場でも早之介がいるのといないのとでは大きく違います。近く、伊勢長島に出陣するとおやかた様もおっしゃっているのですから、早之介を岐阜に戻してください」

「そうじゃ。簗田家の数少ない与力なのだから、いつまでも堺に留まらせておくわけにはいくまい」

「じ、実は……」

牛太郎は椀を置くと、汗ばんだ額をぬぐいながら、ぼそりと言った。

「い、今まで黙っていたんだけど、あ、あいつはおれを裏切った」

「ええっ！」

「み、三好三人衆に。お、おかげで一度殺されかけたけど、信濃守のおかげで大丈夫だった。で、今はどこで何をしているやら。もしかしたら、淀城で死んだかもね……」

咄嗟に思いついた嘘をべらべらと並べ立てただけだったが、栗之介以外の一同は牛太郎の言葉を本気にして、言葉を失っていた。

「そうであったのか、亭主殿」

梓の言葉に、牛太郎は涙なんか出ていないくせに瞼をこすりながらこくりと頷く。

「こんばんわー」

玄関から届いてきた女の声に牛太郎ははっと顔を上げた。さゆりの声だった。

夕暮れの突然の女の訪問に、一同は眉をひそめて顔を見合わせる。牛太郎はどうしていいかわからず、箸を持つ手を震わせる。

何をしにきやがったんだ。

「誰でしょう、こんな時間に」

「拙者が参りましょう」
太郎が腰を上げてしまい、牛太郎は思わず引き止める手を伸ばそうとしたが、逆に怪しまれるので、ただ、目玉を大きくさせながら沈黙した。
まずい。太郎はずいぶん前にくのいちだったころのさゆりと斬り合いをしている。早之介を装っているときは、人相も変えて難を逃れていたが、女の姿をしているときのさゆりは、髪型や目つき、頬の輪郭は時と場合によって違うものの、特徴的な鼻があるし、もし、太郎があのときのことをしっかりと記憶していたら、玄関先で果たし合いが始まってしまう。
「おい、鉢巻きっ！　太郎に行かせないで、お前が行けよ！」
が、時すでに遅く、玄関から話し声が聞こえてきた。牛太郎は焦りをおさえるので精一杯である。さゆりの正体が明るみに出てしまったら、それこそ、隠し子が知られてしまった藤吉郎どころじゃない。
だが、太郎が普段通りに戻ってきた。手に包みを抱えて。
「お市様の侍女でした。お市様が駒のために衣服を縫ってくれたそうで」
「まあ！　お市様が！」
あいりがはしゃぎ上げ、ほっと胸を撫で下ろす牛太郎。
「そういえば、江姫様と駒は一つ違いじゃったな。とはいえ、お市様が衣服を頂戴してくれるとは、このうえない果報じゃ」
「でも、どうしてお市様が駒のためになど」
「父上のおかげだ」
そう言った太郎は、包みを貞に渡し、首を傾げる女たちをよそに腰を下ろした。牛太郎は市に慕われていることを自慢したくてしょうがなかったが、危険が去ったばかりで気持ちが落ち着かなかったし、梓が変に嫉妬しそうなのでやめた。
「ただ、こんな時間に持ってくるほど急ぎであっただろうかなあ。それに、あの侍女、どこかで見たような気も」

「昔、尾張で見たことがあるんだろ。お市様がまだ嫁ぐ前に」
と、牛太郎はあわてて太郎の記憶をかき消そうとする。
「そうですか。そのわりには若かったですが」
「おい、あいりん、太郎が色気出しているぞ。気をつけろ」
あいりにむっとした顔を向けられて、そんなことはない、と、あわてて弁明する太郎。梓たちが笑い声を立てる中、牛太郎はここぞとばかりにそそくさと広間を出ていった。

岐阜駐在の将たちが集められ、伊勢長島への侵攻が上総介の口から発令された。北近江・越前と駆けずり回った将兵たちは休む間もなく、自分たちの所領に帰る暇もなく、疲弊した体に鞭打つこととなった。

牛太郎は伊勢に関わっていないので情勢にはまったく疎いが、各所の豪族を含めた一向一揆衆との対立は泥仕合の様相を呈している。休む間もなく出陣せざるを得なかったのは、前回の伊勢長島侵攻の失敗によって、北伊勢の豪族たちが一向一揆衆側に味方し始め、早急に手を打たなければならなかった。

ただ、評定のあと、牛太郎は一人、上総介に呼ばれ、

「お前はいかなくていい。兵卒はこましゃくれに預けろ」

「ま、また、どっかに行くんスか」

甲斐、摂津、北近江と敵地を飛ばされてきた牛太郎が、まさか今度は越後じゃないだろうなと恐れおののきながら訊ねると、

「岐阜にいろ」

上総介はどこかよそよそしく視線を窓の外に向けている。扇子を開き、それで顔を仰ぎつつも、一向に牛太郎の顔を見ようとせず、第六天魔王はなんだか様子がおかしい。

「忘れていたが、お前は珍奇衆だったな」

なんなんだ、今さら。牛太郎は怪しみながら上総介の横顔にじっと眺め入る。

「市に滑稽話でも聞かせてやれ」

ぱちん、と扇子を留めると、そのまま腰を上げ、去っていってしまった。

「おやかた様は後ろめたいんですよ」

長谷川藤五郎は上総介に抱かれているだけあって、その心情をよく把握している。

「お市様はオヤジ殿の話ならお聞きになるので、要は、お市様を慰めてほしいんです。それに、オヤジ殿なら無害ですし」
「無害ってどういうことだ、無害って」
「女に縁がないってことですよ」
憎たらしい奴。
翌日、黒連雀に跨った太郎を見送り、岐阜に駐屯していたほとんどの兵卒が姿を消すと、牛太郎は早速岐阜城に登った。
珍奇衆などという久しぶりに聞いた役目もあるが、いち早く叱りつけなければならない女がいた。
岐阜城一角の、市たちに用意された屋敷の庭先で、労せずしてその女を見つけた。
「何の用や」
侍女のさなことさゆりは、茶々や初と共に毬で遊んでいた。
「うちたろうぢゃ！」
「うちちゃんぢゃあ！」
すっかり牛太郎に懐いてしまった茶々と初がちょこちょこと駆けてきて、牛太郎に飛びついてくる。牛太郎は腰を屈めて二人の頭を撫で上げる。
「いい子にしていましたか、お姫様」
「また、いくさから逃げたんか」
二人の背後ではさゆりがつまらなそうな顔でいる。
「いつ誰がいくさから逃げたって言うんだ。これは信長様からの命令だ。お市様にいろいろ話を聞かせろっていう命令だ」
「あっそ」
「あっそじゃねえ。お前、この前、おれの家に来ただろ。何をやってんだよ、おいっ。お前、太郎にばれたらどうするつもりだったんだ。もう二度とあんな真似すんじゃねえ！」
「おもしろそうだったから、やってみただけや」
「こっちは全然おもしろくねえよっ！」
茶々と初が表情を無くして牛太郎をぼんやり見つめてくる。

「あ、いやいや、なんでもないですよ」
「うちたろうはいっちゅもおさなに怒っておる」
「うちちゃんはいちゅもおさなにおとっておる」
茶々は不安そうな顔だが、初は意味もわからず姉の真似をしているだけらしくてて、にやにやしている。
「いやいや、そんなことないですよ。ただ、おさなが悪いことばっかりするんで、怒らなくちゃいけないんですよ」
「おさなは悪いことなんてちない」
「ちない」
「そうです、姫様。牛太郎は私が悪いことなんてしていないのに、いつも怒るんです。だから、姫様から怒ってやってください」
「てっめー」
「ほら！　牛太郎が怒りましたよ！　逃げて！　姫様、逃げて！」
さゆりの掛け声に、茶々と初はきゃっきゃはしゃぎながら牛太郎から逃げていく。
腹が立っていたはずの牛太郎は、蝶々が舞い飛ぶように駆けずり回る茶々や初、それにさゆりの姿を目にして、目を細めていった。
市や姫たちにとっては残酷な結果だったが、さゆりは居場所を見つけられたのかもしれない。姫たちと仲睦まじく手を取り合う姿に、太刀を振り回していたころの面影はない。
とはいえ、とうとうさゆりが自分の手元から去っていってしまったことをはっきりと確認できて、寂しくもなってしまう。
おれも年を取っちゃったのかな。
そんなふうに感慨に耽っていたら、縁側の片隅からこちらを見つめてくる女性に気付いた。一目で、女の高貴さがわかった。
白地の打掛には、白や赤の菊や、青の桔梗、紫の萩など、秋の花の模様絵がふんだんに散りばめられていて、振り分けた長い黒髪がそこに流れる小川のようにしっとりと垂れている。
ただ者じゃねえ。どこのお姫様だ。
眉間に皺を寄せながら見つめる牛太郎に、女ははにかみながら頭

を下げてくる。衣服の華やかさとは打って変わった愛らしい仕草に、牛太郎は胸をほんわかとさせてしまった。

決して美人というわけではないのだけれども、柔らかく垂れさがる目尻と、健康的につやつやとした肌、化粧なのか地なのか、頬が桃のように照っていて、大人でも少女でもない、類まれな可愛らしさだった。

「何を見とれているんや、助平」

「何を見とれているんぢゃ！　すけぺえ」

「すけぺえ！」

騒ぎ立てられて、あわてて首を振る牛太郎。

「み、見とれてなんかいませんよ！　ただ、初めて見る御方だったんで、誰かなって思っていただけですよ！」

「なんや、知らんのか」

さゆりがきょとんとしながら、女に振り返る。彼女は恥ずかしがるようにそそくさと歩いていき、姿を消してしまう。

「あの方はお犬様や」

「？」

「おばうえたまぢゃ！」

「えっ？　叔母上様？」

さゆりが溜め息をついた。

「あんたって、何も知らんのもいい加減にしいや。織田の姫様も知らんでどうするんや。お犬様はおやかた様やお市様の妹君や」

「そ、そうなの？」

牛太郎は茶々と初をそれぞれ見たあと、犬がいたところにもう一度視線をやった。

「全然、似てねえじゃんか。腹違いなのか」

「同腹や。姉妹だからって瓜二つってわけあらんやろう」

「ふーん」

市はどことなく上総介に似ている。顔形もそうだが、市が醸し出している凛とした気丈さは、何があろうと信念を揺るがせない上総

介の根本的な部分に通じているものがある。
それに引き換え、犬という姫は、一目見ただけだが、柔らかい。市や上総介とはまったく違う。
さゆりの話によると、犬は尾張南部の知多半島一帯に古来から勢力を築き、桶狭間後、上総介に臣従した佐治家に嫁ぎ男子二人に女子一人を産んだが、夫の佐治八郎信方が二年前の長島攻め――一向一揆衆の逆襲に合い、柴田権六郎と共にしんがりを務めて命を落としてしまったらしい。
そういう訳で今は上総介の庇護の下にあるらしく、今日はたまたま姉の市のところへ顔を出しに来た。
「因果なもんだな」
自分や藤吉郎は戦場であれだけ危険な目に合っていても生き残っているというのに、織田の女の夫たちは戦火の煙となってしまっている。
まるで、天か神か仏かが、残虐非道かつ家族思いでもある上総介の首を真綿で締め付けているかのようだ。
そんな第六天魔王の犠牲者の一人の前に牛太郎は参じると、岐阜での暮らしに不自由はないか訊ねた。
「おかげさまで。兄上たちもお節介なほどですし、善右衛門殿もおさなもおりますから」
市は変わりない微笑で答えた。ただ、仕方ないことだが、切れ長の市の目尻には若干の影が差していなくもない。
「牛殿のお孫さまはべべを気に入って頂けたかしら」
「あ、ああ。すいません、遅れまして。そのせつはありがとうございました。駒は大層気に入っていますし、嫁のあいりはお市様に御礼差し上げなければとやかましいぐらいです」
「今度は是非、皆さんと御一緒に来てください。梓殿に久方ぶりにお会いしたいわ」
「あ、梓殿ですか……」
牛太郎に市は目を丸める。

「梓殿が何か？」
「い、いえ、そ、その、まあ、実は」
牛太郎は「御承知のこととは思いますが」と付け加えてから、梓の男勝りの性格と嫉妬深さを説明し、先日、さゆりが出し抜けにやって来たときは気が気ではなかったと話した。
「なにせ、あいつが女だなんて誰も知らないんスから。もしも、吉田早之介っていう奴の正体が女だってばれてしまったときには、あっしは皮も骨も残っていませんよ」
市は口許を袖で隠しながらくすくすと笑う。
「破天荒だこと。でも、さなとはそういった関わり合いはなかったのでしょう。なら、よいではありませんか」
「あ、うっ、い、いやっ、いやいやっ、とんでもありませんっ。あっしはここ半年近く岐阜から離れて堺や京にいたもんですから、梓殿はあっしを疑ってばかりで仕方ないのですっ。遊んでいたに違いないって。あっしがそんなことするわけないのにっ」
「大丈夫ですよ、牛殿。もしも、梓殿に疑われるようなことがあれば、この市がお話し差し上げますから」
「え。いいんスか？」
牛太郎は眉尻を下げながらにたあと笑った。
「無論、梓殿を大切にしていたらの話ですよ」
「そりゃあ、もちろん！」
牛太郎は、今度は是非梓を連れてくると残して市の前を下がると、しめしめとほくそ笑みながら縁側を行った。
いや、これで浮気が出来ると思い始めたのではない。藤吉郎のような真似をしてしまったら、梓は市の言うことにも絶対に耳を貸さず、牛太郎を長良川の底に沈めるだろう。
ただ、清廉潔白の身でありながらも疑われてしまっており、それについては市の援助を得られた。出来ることなら、すぐに角を立てる梓をちょっとは叱ってもらいたいぐらいだ。
「ていうかさ」

ふと気付いた牛太郎は、一人呟いて足を止め、秋空に流れる雲を眺めた。

「お市様がおれの味方ってことは」

とてつもない後援者を手にしたのではないか。市は上総介の可愛い妹である。上総介に物申せる市である。

「いや、それはないな」

首を振ってまた足を進める。上総介は万福丸の命を救ってくれるよう頼んだ市を無視したのだから。

まあ、あまり変な欲は出さないほうがいい。佐久間右衛門尉のように自分を快く思っていない人間もいるのだから。

「さ、左衛門尉殿」

背後からの黄色い声に、牛太郎は背筋をびくつかせながらも、そろりと振り返った。

まごまごとしているのは犬だった。

「あ、姉上様のために、わ、わざわざありがたく存じます」

そう言いながら犬がすうっと頭を下げてくると、ほのかな香りがふわふわと漂ってきて、牛太郎は鼻の下の伸び具合をごまかすようにして唇を中に押し込める。

まるで、打掛に色づいている花が放っているような、甘くゆるやかな香りであった。

「お、お初にお目にかかります。お声を掛けてもらえるとは、この左衛門尉、こ、この上ない光栄です」

「わ、わたくしこそ。さ、左衛門尉殿に、お、お会いできて」

市にも上総介にもまったく似ていないたどたどしい物言いは、子供を産んだとは思えない初々しさがあった。

なんだか、頬の照りも、恥ずかしさで色づいているのではないかと思えてきてしまう。

「こ、今度、お越しになるときは」

と、潤った瞳で訴えかけてくるように牛太郎を真っすぐに見つめながらだったが、犬は一度言葉をためらって視線を逸らした。

庭先の葉陰で、鈴虫がささやくような音を立てている。
「こ、今度は、わたくしにもお話をお聞かせください」
そうして、犬はちょこんと頭を下げると、踵を返しそそくさと去っていってしまった。
牛太郎は呆然と立ち尽くす。どうしたことなのだろう、と。彼女は誰に対してなぜにあそこまで照れていたのだろう、と。
「ま、まさかな。お、おれは牛だぜ」
自嘲するように笑いながら、牛太郎はおぼつかない足取りで屋敷をあとにしていった。

老人と子供

市が一家揃っての来訪を望んでいる。牛太郎がそう家の女たちに伝えると、途端に梓やあいりはあわただしくなり、牛太郎がくれてやった香炉や茶碗、香木などを木箱に整え始め、鮮やかな小袖に袖を通し、自慢の打掛を羽織り、挙げ句には聞こえ高い名馬の栗綱まで引っ張り出して、近所の寧々、まつ、娘たちや女中たちを引き連れ、まるで正月の参拝にでも赴くような華やかさで、ぞろぞろと稲葉山を登っていった。

牛太郎はというと、留守番である。

栗綱の口輪を取りに栗之介が行ってしまったので、一人、不満たらたらながらも、尻切れ半纏に股引というすっかり馴染んだ百姓姿で馬屋に入っていた。

官位まで携えている一城主が馬のぼろ掃除なんてとも、自分自身思えなくもなかったが、気楽である。堺などで商人たちの茶会の相手をしつつ、腹を探り合ったり、情勢に神経を張り巡らしたり、あるいは織田家の進退を決めるような一大事の策謀に関わらなければならなかったこれまでを考えると、馬の糞でも拾っているほうがいい。

「ししし。尾張武者が健気なもんですなあ、旦那」

篠木於松だった。

「どこの泥棒かと思ったら、お前か」

梅干しみたいな禿げ頭を丸まった背中で突き出し、三本しかない歯を剥いてにたにたと笑いながら、相手にせずに寝藁を運ぶ牛太郎を舐めるような視線で追ってくる。

「何の用だ。気味悪い」

牛太郎は藁を放り投げて、鍬でならしていく。

「だいたい、お前、三十郎様の家来じゃねえのかよ。伊勢に行かねえで何をやってんだよ」

「一つ間違っておりますわ。あっしは三十郎様の家来じゃなくて、おやかた様の近習ですわ」
「じゃあ、なおさら伊勢に行けよ」
「ししし。腰を痛めちまったもんで。先ごろの小谷城でずいぶんと働かされちまったもんでね」
「何が腰を痛めただ」
手拭いで汗をぬぐいながら、せっせと藁をならしていく牛太郎。
「そもそも、お前は何者なんだよ。何のあれがあって信長様に仕えているんだよ」
「ししし」
仕事を終えると、馬屋を出て、古い藁を抱えて庭の奥に向かう。
後から於松が懐いた鼠みたいにくっ付いてくる。
堆肥用の穴に藁を放り捨て、両手の粕を打ち払いながら、薄気味悪く笑っているだけの於松を睨み据える。
「ていうか、何の用なんだ」
「ししし。簗田の旦那は茶の湯に通じているって聞いたんで、一服頂きたくてね」
「なんだテメー。おれに茶を点てろだと。何様のつもりだ、コラ」
「いやね、乱波風情のあっしが茶の湯に預かるだなんて夢のまた夢。せいぜい、加納の田舎商人に点ててもらうのが関の山ですよ。そんなあっしですから、京や堺の垢抜けた輩と付き合いのある簗田の旦那が点てた茶でも頂戴したくてね。あっしなんか、死ぬまで京の味なんて知らずに死んでいくんだから」
「ほほう」
牛太郎は気分を良くして鼻を鳴らした。
「それなら一服点ててやろうじゃねえか」
そんなことで、於松を梓の茶室に連れて行き茶道具を用意したが、於松が急に牛太郎の手を制してきて、
「せっかくだから、あっしに点てさせてくだせえ」
と、言う。

「なんだと」
「こんな立派な茶室で茶を点てるだなんて金輪際ないことですわ。死にぞこないのジジイに最後に夢を見させると思って、あっしに点てさせてくだせえよ」
フン、と、牛太郎は鼻を突き上げた。
「好きにしろ」
於松は茶を点て始めた。茶碗に湯を打ち、抹茶を茶碗の底に入れていくが、その一つ一つの動作はまったく遅滞で、それをしていく姿勢というのも背中を曲げて突っ伏すようにしていくので、醜いことこの上ない。
まあいい。牛太郎は冷え冷えとした視線を送りながらも、余生の短い老人に付き合ってやってやる思いで、茶が差し出されるまで苛立ちを辛抱した。
「ししし、どうぞ」
緑色の液体をたたえた茶碗が牛太郎の前に置かれて、牛太郎は溜め息を一つついたあと、茶碗を手に取って、ゆっくりと一息に飲み干した。
だが、
「うええっ」
茶を胃まで注ぎ込んだときには、そのまずさに気付くのが遅かった。茶碗の中に、ぺっ、ぺっ、と、唾を飛ばし、挙げ句には唾液をこぼした。
「なんなんだよ！　これはよっ！」
しびれるような酸っぱさが喉の頭あたりを、ひどい苦みが舌に残っている。牛太郎は何度も唾を吐くが、一向に口の中の正体不明の味覚は取れない。
「ししし」
於松がにたにたと笑っている。
「テメー、まさか……。何を入れやがったっ！」
牛太郎は於松に掴みかかったが、於松にひょろりと交わされてし

まう。
「ししし。長寿の薬を混ぜさせてもらいましたわ。大丈夫。あっしも飲んでいるんで」
「ふざけんなテメーッ！」
怒鳴り散らす牛太郎をよそに於松は腰を曲げたままちょこちょこと部屋をあとにしようとする。
「待てコラっ！　なんなんだ、一体！」
「ししし。あっしは旦那が気に入ったんで。長生きしてもらいたいだけですわ」
追いかける牛太郎をひらひら交わしていきながら、於松は屋敷をあとにしていった。

変な物を飲まされた牛太郎は、台所で何度もうがいをし、唾を吐き散らしていると、
「こんにちはー」
と、玄関から子供の声が聞こえてきて、口許をぬぐいながら顔を上げた。牛太郎は留守番である。
玄関まで出て来ると、そこには十二、三歳の小太りの子供が突っ立っていて、総髪の頭を結っているので元服前であろう。
「あのう、お貞さんはいらっしゃらないのですか」
「お貞？　お貞なら奥さんや嫁と一緒に城に登ったけど」
すると、色白のふっくらした顔にくりくりとした黒い瞳で、少年は牛太郎をじいっと見つめてくる。
「簗田左衛門尉牛太郎様ですか」
なんだか、ぼけえとした物言いだったので、牛太郎は存在を誇示するかのように胸を張り上げた。
「そうだ。摂津池田で一騎駆けをし、金ヶ崎ではしんがりを務め、姉川では怪物栗綱と共に暴れ回った綱鎧の簗田とはおれのことだ」
「それはそうと、お貞さんはいつごろお戻りになられるのですか」
いたって冷静な少年に牛太郎はしばらくの間無言になる。

「それなら、また翌日に参ります」
まったくもって味気なく踵を返した少年を牛太郎は呼び止めた。
「ちょ、ちょっと。キミはお貞に何の用なんだ。一応、留守番だからさ。用件だけ聞いておく」
「左衛門尉様にお仕えさせていただく旨、お口利きをして頂けるということだったので。左衛門尉様が岐阜に戻られたら、またこちらに来なさいと言われていました」
「おれがその左衛門尉なんだが」
「はい」
「左衛門尉に仕えるのを決めるのはお貞じゃなくて、おれなんだが」
「はい」
「目の前に左衛門尉がいるんだったら、お貞を通さなくたっていいだろ。おれにお願いすればいいだろ」
「そうですが、しかし、私はお貞さんに話を通してもらうという物の順序でお願いに参ったので、義理を破ることになります」
「いや、破ることにならないだろ」
「人によっては破られたと思う御方もいらっしゃいます」
「おいおい。この家の人間はそんな器の狭い人間なんていないぞ。てか、なんなんだ、キミは。おれに仕えたいって奉公人にでもなりたいのか。なんなら、採用してやるよ。人手不足で仕方ないからな」
「いえ。私は左衛門尉様の小姓になりたいのです」
「それは無理だな。おれは小姓とかいらないから。女中なら断らないけど、男の子はいらない」
「でも、お貞さんに訊いてみなければわかりません」
「わかるだろ！　おれが駄目って言っているんだから駄目だ！」
「お貞さんは大丈夫だっておっしゃってくれました。奥方様もそうしたほうがいいとおっしゃっているとも」
「だからっ！　お貞が言っても、あずにゃんが言っても、主人のおれが駄目って言ったら駄目なのっ！」
「あずにゃんとはどちら様ですか」

「ぬう」
急に恥ずかしくなってしまった牛太郎は、少年にくるりと背中を向けると、
「駄目なものは駄目だ。あきらめろ」
と、少年を置いて屋敷の奥にすっ込んでいった。

夕飯の話題は登城したことについて持ち切りで、市の美貌や元気な姫たちのこと、香木がすこぶる評判であったと、梓もあいりも上機嫌であった。
「それにしても、おさなという侍女」
ふいに梓がさゆりのことを持ち出して、牛太郎は箸をぽろりと落としてしまう。
「気立ての良い侍女じゃった。さすがお市様の侍女じゃ」
「そ、そんなことより、お貞」
牛太郎は落とした箸をかつに交換してもらいないがらお貞を呼ぶ。
「今日、おれの小姓になりたいとかいう変な子供が来たけど、ちゃんと断っておけよ」
「ええ？　断ってしまうんですか？」
「なぜじゃ、亭主殿」
「だ、だって、小姓なんてあっしには必要ないですもん。鉢巻きがいるから、別に困ることなんてないですもん」
「栗之介は馬丁ではないか」
「そ、そうですけど、小姓なんて、邪魔なだけだし」
「昔は太郎様を小姓にしていたではありませんか、旦那様」
あいりまで参戦してきて、いつものように劣勢に陥ってしまう。
「だいたい、そんな急に小姓を雇うだなんて。おれは聞いていないし」
「今、知ったではないか」
「あの子は自ら旦那様の小姓になりたいとおっしゃったそうですよ。五郎左衛門様や、あの子のお父上は、おやかた様の小姓ならいざ知

らず、一介の将の小姓を嫡男に務めさせるなんて反対されたそうですが、それでもあの子が懇願されたそうなんですから。そう、無碍に断らなくてもよろしいではないですか」

お貞がやたらまくしたててきたが、牛太郎には何を言っているのかさっぱりわからない。

「五郎左殿が反対したって、どういうことだよ。お父上だとか嫡男だとか、あいつは誰の子供なんだよ」

牛太郎がそう言って、お貞はようやく事のあらましを説明してきた。

あの理屈っぽい子供は、大蔵安芸守盛里という丹羽五郎左衛門の与力の子らしい。一昔前は五郎左の監視下にあった牛太郎は、丹羽家のたいていの与力を存じているが、大蔵某とかいう名は知らなかったので首を傾げた。

それもそのはず、大蔵安芸守は元は近江国南西長束村［なつかむら］の地侍で、姉川のいくさ後、佐和山城近くに築かれた砦に詰めていた五郎左に引き抜かれて与力になり、牛太郎が五郎左の監視から解放されたのちのことである。

あの子供は新三というらしい。

「新三はたびたび堺や京を訪れる亭主殿に指南を承りたいそうじゃ。そんな殊勝な心がけでいる子供を断る理由も、人手の少ない亭主殿にはなかろうが」

梓に攻め立てられて、牛太郎はむすくれる以外、返す言葉はない。女どもの言うことはいちいちもっともだが、牛太郎には誰にも知られたくない事実がたくさんある。さゆりのこともそうだし、願福寺に奇進札をやらせていること、堺で銭儲けをしていることもそう。口外されては首が跳ね跳ぶか否か、川底に沈められるか栗綱に繋がれて引き回されてしまうか、そこまでされかねない悪事を抱え持っているのに、自らの行動にべったりと取りつかれてしまうわけにはいかない。

しかし、

「断る理由はなかろう」
と、梓に押し迫られて、牛太郎はこくりと頷いてしまった。

まるで少年のようです

「大蔵新三と申します。左衛門尉様の手となり足となる所存でございます。至らないところはあるかもしれませんが、なにとぞ、よろしくお願いします」

新三は膝をついて深々と頭を下げ、梓やあいり、お貞たちは少年をにこにこと笑みながら迎えた。

「こちらこそ、亭主殿をよろしく頼むぞ。亭主殿に何か不穏なところがあれば、すぐにわらわに伝え申すようにな」

牛太郎はむすっとしている。新三は牛太郎をちらと見てきたあと、再び頭を下げた。

「かしこまりました」

小姓とだけあって、新三は簗田家の人々と寝食を共にすることになり、牛太郎が文をしたためているときも、寝そべってごろごろしているときも、栗之介やかつとともに草むしりをしているときも、そばを離れずにいた。

「お前よお」

雑草を引きむしった牛太郎は、額を拭いながら、突っ立っているだけの新三に振り返る。

「手伝ったらどうなんだ」

「なにゆえ、殿まで草むしりなどしているのですか」

小太りの体で表情をぴくりとも変えず、ずいぶんとふてぶてしい。

「暇だからだ」

「史書などお読みにならないのですか」

「おいおい、小僧」

牛太郎は腰を上げると、手の土をぱちぱちと払いながら、新三を睨み下ろす。

「本を読んでいるだけの生活をしていたら、庭は雑草で荒れ放題になるんだよ」

「かつ殿や鉢巻き殿がやってらっしゃるではないですか。殿は他に何かをやればいいではないですか」
「ごちゃごちゃ言わずに手伝えっ！　このクソガキっ！」
新三の襟首を掴んで地面に叩きつけると、新三は嫌々草をむしっていく。
「おれから何かを学びたいんであれば、まずは泥水にまみれることだ。わかったな！」
「泥水にまみれることと、一家の主人が草をむしることとは訳が違うと思うんですが」
「黙れっ！　べらべら喋っている暇があるんなら、草むしってろ！」
昼食をとったあと、牛太郎は半纏から小袖に着替え、素襖を羽織り、袴をはくと、脇差を腰に帯び、扇子を手にした。
「どこかに行かれるのですか」
ようやく、まともな格好になった牛太郎に、新三は目を輝かせてきた。
「お城のお市様のところだ」
途端に新三の瞳が陰る。
「おれの役目はお市様やお姫様とお話をすることだ。だから、岐阜に残っている。なんか、文句あんのか」
「いいえ。ただ、私は殿が家中の知識人にお会いするのかと思ったんです」
「そんな奴が織田家にいるわけねえだろ」
牛太郎は玄関で草履をはくと、屋敷をあとにした。
新三があとを付いてくる。
「別にお前は来なくたっていいんだぞ」
「そういう訳にはいきません。私は小姓なのですし、奥方様からは殿に何か不穏な動きがあれば、すぐに伝え申すよう言われていますし」
「おい」
牛太郎は踵を返して新三に歩み寄ると、自らの腰に両手を当てな

がら新三を見下ろした。
「変な真似をしたら即刻クビだからな。いいな」
「変な真似とはなんでしょう」
「おれの意にそぐわないことだ。つまり、おれの自由にさせろってことだ。わかったな。言うことを聞いていれば、そのうち知識人に会わせてやるからいい子にしてろ」
また、新三の瞳が輝き始めた。
「どなたに会わせて頂けるのですか」
「てか、誰に会いたいんだ」
「わかりません」
「お前、馬鹿なんだな」
城に登り、例のように市が居している屋敷を訪ね、生意気な新三は門の外で待たせておき、牛太郎は市の前に上がった。
「先日はうちのあつかましい連中がお邪魔してしまい申し訳ありませんでした」
「あつかましいなどとんでもございません。久方ぶりに楽しい時間を過ごさせていただきましたわ」
市は朗らかな表情であった。やはり、女は女同士、気が合うのかもしれない。まして、梓やあいりだけではなく、寧々やまつまでいたのだから、さぞかし賑やかだっただろう。
「ところで今日はもう一人、牛殿のお話を聞きたいと申している者がいるのですが、よろしいかしら」
牛太郎はどきっとした。いや、色めき立った。
「犬」
と、市が隣の部屋へ声をかけて、年増の侍女がふすまをすっと開ける。牛太郎はあわてて頭を畳にこすりつける。ふすまが開くと同時に、あのゆるやかな香りが流れてきて、牛太郎の胸底はじんじんと熱くなってくる。
「い、犬でございます」
「わらわの妹でございますわ」

「ぞぞ存じております」
「御一緒させてもよろしくて？」
「ももも勿論でございますっ！　あっしの与汰話などお聞きしたいなど、こ、こ、光栄この上ありませんっ」
「だそうですよ、犬。さあ、お入りなさい」
「は、はい」
犬がそっと腰を上げて居室に入り、また、腰を下ろすまでの間、牛太郎は顔を上げられなかった。
「どうしたのですか、牛殿。表を上げてくだされ」
言われてしまって、牛太郎は恐々と顔を上げた。すると、市の隣に座っている犬が視線をそそくさと伏せた。白扇の柄が袖に染められた桃色のまばゆい打掛に似合わず、犬の表情は気丈な姉にくっ付いている引っ込み思案の妹であった。
「犬は夫を亡くし、三人の子とも離れ離れになって、一人、この岐阜で寂しい思いをしてきたのです。わらわは娘たちと共におるので寂しさは紛らわせられますが、牛殿、犬にも愉快な話をしてあげてくださいまし」
「愉快な話と言っても」
牛太郎はちらと犬を見た。目が合った犬は、そっと視線を伏せる。そんな仕草だから、妙に意識してしまって、どぎまぎしてしまう。
「そ、それじゃ、とんでもない大馬鹿な商人の話でも」
と、鼻糞を掴まされた行商人の話を始めた。
男はとある田舎大名の御用商人で、ある日、京で商いを広げてくるよう申しつけられ五百貫の大金を授かった。
男はのこのこと上京し、さて、どんな商売で儲けようかと考えたが、ふと彼に声をかけてくる者があった。その者は当時、京で権勢を振るっていた松永弾正忠久秀の御用商人で、南蛮渡来の物珍しい砂糖で勝負してみないかと持ちかけてきた。
田舎者で馬鹿な男は砂糖と聞いて鼻息を荒くし、五百貫と砂糖を交換し、意気揚々とそれを売り歩きに出たのだが、とある屋敷に押

しかけてみると、そこの主人に言われてしまう。
「砂糖がそんなもののはずねえだろうが」
しかし、男は頑として聞かない。呆れた主人は、ならば一粒十貫で買ってやるから、お前がそれを舐めてみろと言う。
砂糖を舐めたことがない男は喜んで主人に砂糖を売り、そうして、自分で舐めてみた。
すると、
「うえーっ！」
ぺっと塊を吐き出してた男。それは砂糖ではなく鼻糞であった。
「そうして、五百貫で鼻糞を掴まされたことが大名にバレたその男は切腹し、今でもお墓にはそいつの骨と一緒に鼻糞が入れられているというお話です」
勿論、四郎次郎は死んでいないが、牛太郎は終始にたにたと笑いながらだった。
市は眉をしかめ、犬は戸惑っている。
「その話は茶々や初には聞かせてもらいたくないものですね」
市に厳しい眼差しを注ぎ込まれ、牛太郎は笑みを消していく。
からすがカーカーと鳴いている。
「で、でも、とても滑稽なお話でしたわ」
犬が口を開いてようやく重苦しい沈黙から解放されたが、市が犬を睨みつけた。
「滑稽どころか下品でしょう」
そうして、市は打掛を擦らせながらすっくと腰を上げ、しょんぼりしている牛太郎を睨め下ろしながら、
「用事を思い出しました。わらわはこれにて失礼させてもらいます」
と、鼻先を突き上げながら退出していった。
牛太郎はまるで上総介に叱られたあとのような恐怖感で、どうしよう、と、ただただ畳の目を凝視していた。遠慮なくぴしゃりと叩きつけてくるようなところが上総介と似ている。あと、この置き捨てられた感じも。

「わ、わたくしは愉快でしたわ、左衛門尉様」
犬のそれはどう見ても苦笑で、精一杯の笑みだった。
「いや、いいんスよ……。あっしは所詮下品な男なんで……。友達もサルとかゴリラだし……」
「そんなことありませんっ。左衛門尉様が勇ましくて心優しい御仁であることは、姉様もわたくしも存じていることです」
必死にかばってくれる犬に、牛太郎はぽかんと顔を上げた。
「あっしが、勇ましい、ですと？」
すると、犬はぽっと咲いたような微笑で頬を緩めた。
「はい。特に摂津池田で黒連雀と共に一騎掛けを果たしながら、池田勢に所領安堵と引き換えに降伏を申し渡したという話は胸躍りました」
牛太郎を眺めてくる犬のつぶらな瞳は明るい風を望むような眼差しの光りでいて、その熱っぽい視線を長く澄んだ自らの睫毛でゆるりと包み込んでいる。
「亡き夫、八郎信方様が男児のように話してくださいました」
犬の話によると、佐治八郎は五年前の池田城攻めの折、織田本隊と共に従軍しており、そのとき、疾風怒濤のごとく敵味方構わずに兵卒を薙ぎ倒していき、城郭を駆け登っていった黒い怪物と牛太郎を目にしていた。
「あのような名馬は古今東西いない。そして、あれを乗りこなしていた簗田殿は愚将どころではない勇将だとおっしゃっていました」
「ははあ」
と、にやけた。すぐに調子に乗る。
「佐治八郎殿は見る目のある御方だったんスね。一度もお会いできなかったのが残念です。きっと、仲良くなれたはずなのに」
「いえ、八郎信方様は清州でも岐阜でも京でも左衛門尉様をお見受けしたそうですよ」
「あ、そ、そうなんスか」
「ただ、いつもせわしくされていたので、お声をかけられなかった

みたいで」
　犬は亡き夫を思い出したのか、表情を陰らせながらうつむいてしまう。牛太郎は声を張り上げた。
「ま、まあ、そうですねっ。いつもせわしくしていたっていうか、させられていたっていうか。いつも、あっしの周りには藤吉郎殿とか息子の太郎とかマタザとかウザノスケ、あ、いや、佐々内蔵助殿とかがやんややんや騒いでいたんで、あいつらさえいなければあっしも気の合う御方と仲良くしたっていうのに」
　すると、牛太郎が織田の名将猛将たちをぞんざいに扱ったのがおかしかったらしく、犬は袖を上げてくすくすと笑った。
「左衛門尉様は左少将様や又左衛門様とお仲がよろしいと聞いております」
　牛太郎は首を傾げる。
「マタザ殿はそうかもしんないですけど、左少将様って誰スか」
　犬はきょとんとしている。
「羽柴様ではないのですか？　金ヶ崎の退き口のあと、羽柴様は左衛門尉様と共に左近衛少将の官位を拝領されたはずでは」
「あ、ああ。確か、多分、そんなことも。あっしってあんまり知らないんですよ、そういうこと」
　牛太郎が無知を隠すように苦笑していると、犬は目を大きく丸めたあとに、また、くすくすと笑った。
「左衛門尉様って、まるで、少年のようです」
「あ、いや……」
　戸惑っていると、犬はきらきらと弾ける瞳で牛太郎をしばらく見つめ、また、袖で唇を隠した。
　胸の奥に染み渡っていくようなどこか淡い気配に、牛太郎は頭を掻きながら少しだけ笑った。

次なる戦いへ

伊勢長島で織田軍は大敗した。

帰国してきた太郎の兜ははいだてが折れており、甲冑のところどころには矢傷が残っていた。黒連雀もかすり傷だが負傷しており、新七郎は無傷だが、玄蕃允は太股に槍を受けたらしい。簗田勢は二十人近く死んだ。

「拙者の不徳の致すところです」

屋敷の広間で牛太郎と梓に報告をしてくる太郎の目から覇気が失われている。

「いくさ場では仕方ないことじゃ」

梓が慰めるも、太郎はうつむいたままでいる。

「わかった。もういいから、駒に顔を見せてやれ」

牛太郎の言葉に太郎は頭を軽く下げると、広間をあとにしていった。

朝倉浅井を完膚なきまでに壊滅させた織田軍が、伊勢で長年もがき苦しんでいるのは、戦っている相手がこれまでの勢力と違う種別だからであった。

一人の大名が統制している軍団ではなく、本願寺勢力を中心として寺社や地侍、果ては町人百姓たちが結託した土着組織であり、これは織田上総介という仏敵かつ侵略者に対してのなみなみならない憎悪で形成されていた。

こうした連中に、織田軍が得意としてきた調略活動は有効ではなく、とにかく、一つ一つの根城を潰していく以外に方法はなかったが、敵は地の理と既存の連絡網を発揮して、待ち伏せ、挟み撃ちと、織田の大軍を遊撃戦で苦しめた。

今回の侵攻では、織田軍は三万の兵力を注いで、柴田権六郎、羽柴藤吉郎、丹羽五郎左衛門の部隊が一揆衆の籠る西別所城を落とし、佐久間右衛門尉、滝川彦右衛門の部隊が坂井城を陥落させ、ついで

北廻城も攻略し、近在の豪族たちは次々と上総介に降伏していった。
桑名郡一帯を征服し、本格的な侵攻の足場を固めた上総介だったが、伊勢湾の制海権を獲得するための船の調達が難航し、仕方なく滝川彦右衛門を残して軍を岐阜へと向けた。
が、一向衆の反撃はそこからだった。大垣へと向かう道中の多芸山というところで一向衆は待ち伏せをしており、上総介本隊を襲った。
そこは左側が草木生い茂り、右側は川が幾重にも流れて葦が茂る、くねくねとした細い道で、さらには雨が降っていた。織田軍は火縄銃が使えず、要所要所で襲いかかって来る矢のあられをかいくぐりながらも、背後から追撃してくる一向衆たちともやり合い、槍林の異名を持つ織田家古参の将、林新二郎通政がしんがりを務め、命を削って上総介本隊を北伊勢から脱出させた。
内線作戦で包囲網を打破した織田軍だが、長島攻めに至ってはこれで二度も敗北してしまったことになる。同じ敵に二度も負けたことは、竹中半兵衛を相手に戦った美濃攻略以来の屈辱であり、さらには包囲網を突破して勢いを得ていた織田にけちが付いてしまった。
「兵站を遮断し、点を兵糧攻めにすればよいと私は思うんですけれど、いかがでしょう？」
伊勢の状況をどこから聞いてきたのか知れないが、新三が訳知り顔でそう言った。
「いかがでしょう、じゃねえよ。クソガキ。お前が考えることなんて、誰でも考えることだ、馬鹿が。同じことを太郎に言ってみろ。ぶん殴られるぞ」
「若君はそういう御方だとは思いませんが」
牛太郎は新三の頭にがつんと拳骨を落とした。新三は半べそをかきながら頭をおさえる。
「生意気なことを言っている暇があったら、帰陣したお父さんのところに挨拶に行って来い！」
新三は頭をおさえながら部屋を出ていった。

「太郎は近頃、いくさから帰ってくるたびに疲れた顔をしておる」
部屋で香炉を焚き、呼び寄せた梓の衣服にさりげなく香りを染み込ませていたら、梓がぽつりとそう言った。
「前はもう少し、帰ってきたら喜びを顔に出しておったが。それがたとえ負けいくさでも」
「いや、考えすぎですよ。あっしだってそうだったって梓殿は言っていたじゃないッスか。誰だっていくさのあとは疲れるもんです」
牛太郎は扇子で香りを丹念に梓に送り込む。
「あいつにはあいりんも駒もいるんだから、明日にはにこにこしていますよ。そんなことより、今夜はあっしの部屋で寝ていってはどうスかね」
おかっぱ頭と白い肌が醸し出す梓の妖艶さににたにたとしながら牛太郎は手を伸ばしたが、梓は溜め息をつきながら腰を上げた。
「申し訳ないが、そういう気分ではない」
と、あえなくおあずけとなって、牛太郎は不貞寝した。
翌日、城から使番がやって来て、牛太郎と太郎、親子揃って登城するようにとの上総介の言葉を伝えてきて、二人揃って呼ばれるのも珍しいから牛太郎は首を傾げながら稲葉山を登った。
途中、口数の少ない太郎に声をかけた。
「あいつは昔のお前みたいだ」
後ろから付いてくる新三のことである。二人の太刀を抱えている小太りの新三の姿に、太郎は口許を緩ませた。
「そういえば、馬廻衆に入る前、まだおやかた様が稲葉山を攻め取ったばかりのころは、拙者も新三と同じぐらいの齢でしたね」
木々の葉はすっかり色づいて、もみじがひらひらと舞い散っている。
「早いなあ」
と、太郎は頭上の秋空を仰ぎながら呟いた。
城に上がり、長谷川藤五郎に導かれて、二人は上総介の前に揃って参じた。

上総介は伊勢の敗北のあととあってか、眉間に皺を固めていて、肘掛にはだけた肩を持たせかけたまま、平伏する親子に無言で視線を据えていた。

「表を上げろ。用件だけだ」

例のように短い言葉だった。

「牛は若江城に調略をかけろ。こましゃくれは菊千代と共に不識庵にごまをすってこい」

「えっ？」

二人揃って目を丸めたが、上総介は獣の唸りのような低い声でたった一言。

「早く行け」

二人は訳のわからないまま上総介の前から下がる。

「不識庵って上杉謙信のことか？」

「はい。小谷攻めの前にもおやかた様から申しつけられましたが、そのときはすぐにいくさが始まったので」

「大丈夫かよ、お前。おれが甲府に行ったときみたいになるんじゃねえのか」

廊下を行くと、幼名の菊千代で呼ばれた上総介の側近、堀久太郎が待ち受けていた。

「やあやあ、おやかた様からお聞きしましたか」

彼もまた長谷川藤五郎と同じく上総介の寵愛を受けた元小姓で、端正な顔立ちに爽やかな笑みを持っている。ただし、生意気な藤五郎と違って快活で人当たりの良い青年である。

「拙者一人だけで毘沙門天に会いにいくのは心細かったですが、左衛門太郎殿と御一緒で良かったですよ」

「たった一人だなんて。どうせ宝物部隊と一緒なくせに」

牛太郎は久太郎の肩を抱くと、その胸をつんつんと人差し指で突きながら、目を下世話に光らせる。

「いいよな、男だけのスケベ旅行って。女たらしのお前なんて今からわくわくしてんだろ。ん？」

「拙者が女を垂らし込めるだなんて、人聞きの悪い。むしろ、簗田殿こそ隅に置けないのではないんですか？」
「おれが？　馬鹿言え」
　すると、久太郎はにやにやと口許をほころばせながら、声をひそめた。
「女どもの噂に聞けば、とある姫様が簗田殿に思いを寄せているそうで」
「や、やめろっ！」
　牛太郎はあわてて久太郎を突き飛ばした。
「そ、そういう流言を飛ばしているんじゃねえっ。おれを陥れようってのか！」
「大丈夫ですって。おやかた様のお耳には入っておりませんから」
「やめろっ！」
　太郎がしらりとした目でいる。
「どうやら父上は腹を召されたいようですね。もしくは母上に八つ裂きにされたいか」
「ほ、ほら見ろっ！　こういう頭でっかちの馬鹿が信じているじゃねえかっ！　もう二度とそんな軽い口叩くんじゃねえっ！」
　冷や汗をびっしりと噴き出す牛太郎をよそに、久太郎はけらけらと笑う。
「まあ、冗談はさておき、左衛門太郎殿。出立は明後日なので、身支度を整えておいてくだされ」
「おれはどうするんだ」
「簗田殿は好き勝手にすればいいではないですか。今まで通りに」
「好き勝手って……、おれを遊び人みたいに……」
「ああ、そうそう。おやかた様が言っておりましたが、篠木の於松。あれを簗田殿にくれてやるみたいですよ」
　牛太郎は急に暗澹たる思いになった。
　岐阜城をあとにし、新三を連れて稲葉山の山道を下りていく最中、太郎に篠木於松を存じているか訊ねてみた。

「ええ。そろりの惣八の遺児と言われている老人でしょう」
「なんだ、ソロリのソウハチって」
「昔、尾張の篠木村にいたと伝えられている盗賊です」
足利幕府の将軍がまだ八代目足利義政ぐらいだった頃の伝説的人物らしい。
足音もなく屋敷に忍び込むさまから、そろりの篠木惣八、転じて曽呂利惣八。
呼ばれたのか自ら名乗ったのか定かではないが、とにかく異名を得るほどの大盗賊で、国府の役人の屋敷に忍び込んでは盗んできた金銀を篠木村の貧しい人々に分け与える義賊だった。
ただ、忍び込んだ屋敷でむやみに殺人を犯す悪党であったことも間違いなく、彼が病で死んだときには、村人たちが彼の棺を担いで墓地まで運んでいったさい、急に空は怪しくなって黒い雲が天を覆い隠し、雷鳴がごろごろと鳴り響いたと思ったら、突如として稲妻が目の前に落下し、村人たちが言うにはそれはまるで天からの怪物が惣八の死体をかっさらおうとしていたかのようであった。
「そんなことで、そろりの惣八の子だという於松殿をおやかた様が物珍しがって召し抱えたそうですよ」
「どちらにしろ、正体不明の危ねえジジイってことだ」
親子は自宅に戻ると、新たな任務を与えられたことを家の者たちに早速伝え、旅支度を整えさせる。
急な出張は今に始まったことではないから、奉公人たちはてきぱきと働く。栗之介は栗綱と黒連雀の体を洗ったあとにたてがみをとかしていき、あいりとかつが太郎の衣服を用意し、貞が牛太郎の衣服、筆や硯などを荷駄の中に整えていき、梓はまたしても牛太郎と引き離されてしまうことに若干ふてくされていたが、牛太郎はいつものようにそれとなく梓に小袖を貰い受けて、人知れずこっそりと桐の箱にしまいこみ、新三が牛太郎の太刀を抱えながらその様子を背後からじっと見つめてきている。
「何、盗み見してやがんだ、コラ」

「奥方様のお召し物はなんのために持っていかれるのですか？」
フッ、と、牛太郎は笑った。
「お前みたいな子供にはまだわからないだろうな。愛する人を肌身離さず持ち歩くってことだ」
「わざわざ小袖を貰い受けるとは、殿の趣向がなんとなく垣間見えますが」
牛太郎は新三をじっと見据える。
「お前、いちいち鋭いな」

難局の予感

夜、自室にて寝そべって鈴虫の音を聞きながら火皿に灯る小さな炎をじっと見つめ、牛太郎の頭は若江城に専念されていた。

河内国若江城は上総介に反旗を翻し、包囲網に加わった三好左京大夫義継の居城である。

もっとも、左京大夫の裏切りは織田家中の将はおろか、上総介も知らない、牛太郎やさゆり、簗田一派の陰謀である。

三好左京大夫は、今は無役の足利義昭の義弟である。かつて、上総介の庇護下にありながら諸勢力に織田追討令を発していた義昭であったが、反織田の意志を態度にこそ表さずにいたので、義弟の左京大夫は対応を決めかねていた。

当時、摂津工作に奔走していた牛太郎やさゆりは、上総介に恭順している大和の松永弾正忠ののらりくらりしながらの野心旺盛な出方に頭を悩ませていたが、弾正忠と三好左京大夫が裏で連携していることを彩の潜入で突き止めると三好左京大夫に計略を仕掛け、弾正忠とともにあえて上総介を裏切らせ、三好・松永連合は上総介の妹婿、畠山右衛門督の居城である河内交野城へ出撃した。

これによって、簗田一派は弾正忠の出方に興味を示していなかった上総介の軍団を畿内に引きずり出してき――このいくさの前日に性癖が知られてしまった牛太郎は家出をしてしまったのだが――、交野城四方に築かれた連合軍の付け城を織田軍はさらに外から包囲し、敗色を感じ取った弾正忠は大和に引き返し、三好左京大夫は雨天にまぎれて命からがら脱出した。

その後、織田包囲網の一角を形成した左京大夫と弾正忠であったが、武田家の西上作戦のさいには静観を決め込んでおり、義昭が槇島城で決起したさいには、牛太郎の説得によって弾正忠が動かなかったことにより、左京大夫も若江城から出なかった。

若江城の調略――。

弾正忠をおだてあげれば訳ないことだが、牛太郎はあまり弾正忠と関わり合いたくなかった。

武田徳栄軒の死以来、弾正忠は上総介に分があることを悟っているので、しばらくはおとなしくしているべきだという牛太郎の言葉に弾正忠は従ったが、実は去り際にあのどこまでも黒い無機質な目で言われている。

「思い通りに事が運ぶような世では、貴殿もおもしろみがないでしょうな」

足利幕府十三代将軍を暗殺したせいで希代の大悪党と呼ばれている弾正忠と牛太郎はなかなか因縁が深い。五年前の織田軍の上洛の折、上総介にひれ伏した弾正忠に天下の名物茶器である九十九髪茄子を献上させたのも牛太郎であるし、弾正忠が野心を剥き出しにして摂津高槻に攻め入り、同じく高槻に攻め込んでいた池田勢と睨み合いになったときも、弾正忠に一泡吹かせて兵を撤退させたのも牛太郎である。

牛太郎は、天雲をうねらせるような危うい視線の持ち主である弾正忠の顔を思い浮かべて、気が萎えた。

「あの悪党、絶対おれを恨んでいるよな」

「何かお悩み事ですかねえ」

窓の戸の向こうから突如として聞こえてきた声に牛太郎は背筋を凍らせながら飛び跳ねたが、すぐに居直って腰を上げると、戸を開けて闇深い外を覗き込んだ。

於松が窓枠の下に隠れるようにして腰を屈めている。

「テメー、本当に気持ち悪い奴だな」

「ししし。こんな汚ねえジジイが屋敷に上がったら、家の皆さんがびっくりしちまうでしょう」

「亭主殿」

背後の戸が叩かれた。

「戸を開けておくれ」

牛太郎は於松に向かって人差し指を唇にあてると窓の障子戸を閉

め、そそくさと戸を開けにいった。
藍色の浴衣に青の帯を締めた梓が徳利と盃を盆に載せていて、生温かい匂いを漂わせている。頬を赤らめていて、どうやら湯上りらしい。
「しばしの別れの一献じゃ」
「あ、は、はい」
ためらう牛太郎の前を梓は横切って入ってくる。於松が外にへばりついていることを鬱陶しく思いながら戸を閉めて、梓の前に腰かけた。
手に取った盃に梓が徳利の中を注いでいく。浴衣の襟から白い胸元が覗けて、牛太郎は思わず鼻息をもらしてしまう。まったく、自分のいない間にどこかの男に抱かれていたのではないかと疑ってしまうほど、梓は齢を重ねるごとになまめかしくなっていく。
牛太郎はなみなみ注がれた盃に唇を寄せながら、ふと、梓と犬を比べてしまう。
犬は梓と違って子を産んでいる母親だが、そうした慈愛があどけなさと一緒くたになって、独特の愛らしさを醸し出している。
逆に梓は子を産んでいないからだろうか、それとも美貌を保つために何かしら行っているのか、年々、美しさに磨きがかかっていっている。
牛太郎は酒を一息に飲み、盃を梓に返した。淡々と受け取り、牛太郎が注ぐ酒を静かに受け止めるが、その眼差しはうっとりと盃の中に浸っており、抱かれに来ている彼女は、ことさら妖艶であった。
まるで、昼と夜とでは別人だ。抱けば抱くほど魅力的で、抱き足らなくなってくる女である。
が、於松がへばりついている。
「次はいつ戻ってくるのであろうな」
そう言いながら、梓は赤い唇を酒に一口つけた。自分の上唇を白桃色の舌で拭いながら盃を盆の上に戻し、牛太郎にゆっくりと視線を上げてくる。

「今度はきちんと文を出しておくれ」
「も、勿論」
牛太郎はごくりと唾を飲み込むと、のそりと腰を上げ、窓辺に近づいて壁をごつごつと蹴飛ばした。
梓が目を丸めている。
「何をしておるのじゃ」
「ちょっと、近頃、ねずみが出てくるので。目ざわりで仕方ないんです。こうでもしないとどっかに行ってくれないんです」
梓は首を傾げる。
「ちょっと、暑くないですかね」
と、牛太郎は戸を開けて、闇の中を覗き込んだ。人影はない。
「戸を開けたら肌寒い」
「そうッスね」
牛太郎は戸を閉めるとにたにたと笑いながら梓の傍らに腰かけ、彼女の髪に指先を入れた。
「梓殿はいつまで経ってもお美しい。いや、昔よりだいぶお綺麗になりました」
梓がうっとりと見つめてくる。
「亭主殿も年々逞しくなっておる」
梓の指先が牛太郎の襦袢の襟をかいくぐってき、胸元から腹部を撫でていった。
「出会ったころに比べて体が引き締まっておる」
「いやあ、いくさばっかだし、暴れ馬に乗っているからッスかねえ」
「にやけた顔は相変わらずじゃが」
そう言いながら、梓はそのにやけた口に唇を添えてきた。

翌朝、一夜のまどろみの余韻にぼんやりとしながらも朝食を済ませた牛太郎は、素襖を纏わずに、半纏に股引という姿で脇差だけを腰にしめると、太刀を新三に渡し、火縄銃を栗之介に持たせ、一家の連中の見送りを玄関で受けた。

「じゃあね、駒ちゃん。すぐに帰ってきますからねー」
「あーあー」
「くれぐれも行方はくらまさないようにお願いしますよ、父上」
「そんなの時と場合によってだ」
「なんじゃと？」
昨夜のこともどこへやら、梓の眼光がにわかに鋭くなって、
「そ、そういうわけじゃありませんっ。ただ、この馬鹿が減らず口を叩くもんだから」
「もっともなことを申しただけではないか」
「あ、いや――」
「旦那様、彩ちゃんと四郎次郎殿によろしくお伝えください。たまには岐阜に戻ってくるようにとも」
あいりに助け舟を出されて、牛太郎はなんとか無事に玄関から出られた。
門の向こうには荷駄を身に着けた栗綱がぼんやりと待ち構えていたが、その隣に小さな禿げねずみがいた。
「ししし。作晩はさぞかしお楽しみだったでしょう」
「テメーッ！　ぶっ殺すぞっ！」
頭に血が昇った牛太郎は於松に殴りかかったが、於松は栗綱の影にひょいと隠れてしまい、玄関先では牛太郎の騒々しさに目を丸めていて、牛太郎は舌打ちして拳をおさめた。
「いつか煮干しにしてやる。クソジジイ」
「ししし」
栗之介と新三がきょとんとしている。
「こいつはおれの新しい家来だ。使い者にならねえから、信長様がおれに押し付けてきたんだ」
栗之介が於松を睨みつけながらも、牛太郎の前に掌を出してきて、牛太郎はそれを踏み台に栗綱の上へと跨った。
「小僧。途中でへばっても待ってやらねえからな」
陣笠を被って太刀を抱える新三は、馬上の牛太郎を見上げてきて

言う。

「だったら、陸路ではなく、佐和山で水路に変えるのがよろしいかと思うのですが」

いちいち口ごたえしてくる新三に閉口して、牛太郎は相手にせずに手綱を振るった。

馬丁の栗之介はともかく、老人と子供を引き連れての心細い旅路。堺に到着しても、待っているのは彩と四郎次郎だけ。新七郎は事実上太郎の与力であるし、ずっと頼り切っていたさゆりはもういない。

こんなので大丈夫なのだろうか、と、ついつい溜め息をこぼしながら稲葉山の麓を下っていく。

と、道を塞ぐようにして突っ立っている一人の女がいた。

「さゆりだ」

と、栗之介が言った。牛太郎は思わず笑みを浮かべたが、しかし、さゆりは小袖姿で、とてもじゃないが牛太郎一行に付いてくるような格好ではなかった。

牛太郎は栗綱を止めると、どこかつまらなそうな顔でいるさゆりを見下ろした。

「なんだ。名残り惜しくなって挨拶にでも来たのか」

「阿呆か。そんなわけあるか。これを渡しに来ただけや」

さゆりは栗之介に一通の折り畳まれた文を渡し、栗綱の鼻面を撫でたあと、

「くれぐれも気い付けるんやな」

そう言い残して、牛太郎たちとは逆の方向、山道を登っていった。

「どちら様ですか、あのお方」

「ししし。旦那の愛人だ」

「おいっ！　ガキに妙なこと言ってんじゃねえっ！　ただの知り合いだっ！」

牛太郎は怒鳴り散らしながら栗之介から文を受け取り、鞍の上に座ったまま、文を眺めていった。

犬からだった。

簗田左衛門尉様へ

左衛門尉様が畿内へ御出立されること、姉様から聞きました。はなはだ御迷惑かもしれませぬが、左衛門尉様の御健康をお祈りしておりますことお伝え申したくて、筆を取らせていただきました。また、左衛門尉様とお話しできること心待ちにしております。お気を付けていってらっしゃいませ。

なんてことない文面であったが、牛太郎は複雑な思いに駆られながら文を閉じていった。

道草

大垣で一泊した牛太郎は、琵琶湖南岸を行かずに北へと向かった。藤吉郎が精を出している長浜までやって来て、村人に築城の場所を訊ね、目的地に行ってみると、築城どころか寸法が測られた形跡もない。西日を跳ね返す湖面の輝きを背景に、まっさらな土地がうら淋しく広がっているだけである。

晩秋の湖風が栗綱のたてがみを揺らす中、牛太郎はほくそ笑んだ。せっかちな藤吉郎が築城を始めていない理由はだいたい予想がつく。

金がない。

「どうしたんですか、にやにやと笑って」

新三が鞍の下できょとんとしていたが、牛太郎は手綱を振るい栗綱の馬首を返した。

「ゼニゲバに捕まらねえうちにとっとと用を済ませていこうぜ」

伊勢侵攻に参加したばかりの羽柴勢は小谷城下に駐屯しており、藤吉郎も竹中半兵衛も取り壊しにかかっている小谷城ではなくて、城下の寺社に滞在していることは、小谷攻め直後に半兵衛とやり取りしていた文で知っていた。

藤吉郎と半兵衛は屋根を別にしている。

戦火の爪痕残る城下に入ると牛太郎は下馬し、栗毛の派手な栗綱の馬体を夕暮れの薄闇に隠しながら、半兵衛の所在に向かった。

「お久しぶりですね、簗田殿」

仮住まいにも関わらず、半兵衛の部屋の汚さは相変わらずであった。書物が雑多に散らかっており、何本もの筆が干からびて転がっており、見事な一之谷兜も甲冑も床の上に雑然と置かれている。

「せっかくの名軍師も部屋の有様だけは下の下だな」

「お越しになられることをあらかじめおっしゃっていただければ、綺麗にしておきましたのに」

切れ長の目尻を緩ませながら、半兵衛はにこにこと笑う。牛太郎も気心の知れた優男の笑顔を久々に間の当たりにできて、ほっとする。

「まあ、変わらないってことはいいことだ」

牛太郎の言葉に半兵衛は微笑を浮かべながら白湯をすすり、欠けた湯呑みを床に置いた。牛太郎はふと気付く。湯呑みは菩提山にいたときの物と変わっていない。

「そんなことより、簗田殿。ここ最近のいくさではずいぶんと殿を手助けしてくれましたが、今回はあまり長居しないほうがよろしいですよ」

「手助けしたつもりなんてねえよ。たまたま藤吉郎殿に華を持たせる格好になっちゃっただけだ。おれだって藤吉郎殿を助ける真似なんてしたくないんだし」

「ふふ。まあ、それならよいのですが。ただ、明朝には即刻北近江を離れるべきです」

「なんでだよ。ずいぶんと強調しちゃって」

「見つかったら銭をせびられますから」

牛太郎は笑った。

「城のことか」

「左様で」

派手好きの藤吉郎は防衛に徹する柵と櫓だけの城郭の建設ではなく、京の居館や寺社などのような住まいとしての築城を構想しているらしいが、そのためには小谷城を解体するだけの材木では足りず、伊勢のいくさの最中でも金策ばかりを考えていたと半兵衛は言う。

「呆れたものです。そのくせ、簗田殿が昔言った通り、殿は出世の道をひた走っているのですから、まあ、不思議な男ですがね」

「その代わり、お前や小一郎が泣きを見ているんだろ」

「おっしゃる通りで」

と、半兵衛は笑った。

そうして、談笑もそこそこに、牛太郎は本題に入った。弾正忠の

ことである。
「その前に、拙者は摂津転覆の経緯をあまり存じていないのですが」
牛太郎は半兵衛に小寺官兵衛の助言により摂津を三分に割ったことや、摂津池田での下剋上のあらまし、高槻城での殺傷沙汰のいきさつを話した。また、上総介に背信して銭儲けをしていることも包み隠さなかった。
「なるほど。辻褄が合いましたよ。それにしても、ずいぶんと危ない橋を渡られてきたんですねえ」
半兵衛は微笑みながらも、遠い目で天井を仰いだ。
「松永弾正ですか」
「どちらにしろ、あいつは避けて通れない道だ。うちの連中を使って三好左京大夫をはめたっていいけれど、弾正の悪党だけはどんな横槍を入れてくるかわからねえ。そもそも、あの野郎はおれに復讐つもりでいるんだ」
「考えすぎではないのですか」
「そんなことない」
「いや、弾正は劣勢を悟っているのですから別に回りくどい真似をせず、若江城に調略を掛ければよろしいのでは。むしろ、おやかたはなぜか弾正に甘いのですから、逆に弾正に帰参の花道を作ってやればよいではないですか」
「うーん」
と、牛太郎は考え込んでしまう。
「松永弾正という名にとらわれすぎです。希代の大悪党も、今ではただの小悪党にすぎませぬ」
「だったらいいけどさ」
「むしろ、希代の大悪党とは簗田殿のことではないのですか？」
と、半兵衛が茶化すような笑みを浮かべてきて、実際に悪事を働かせている牛太郎は少しだけ焦った。
早朝、牛太郎は藤吉郎に見つからないうちに小谷を出た。
佐和山城を訪れ、かつては敵同士であった磯野員昌に面会し、酒

を交わしながら姉川での激戦に花を咲かせた。
「まさか、馬上から銃弾を放ってくるとは思いもしませんでしたわ」
「あっしだとわかっていたんですか？」
「今でも夢に見ますよ」
佐和山城で一泊したあと、航路を取るべきだとうるさい新三を無視して琵琶湖南岸を西に向かい、夜には京の相国寺に到着した。
「しばらくの間、ここで休憩だ」
佐和山から京まで足を速めてきたので、子供の新三は枯れ木のような顔つきでへばっており、牛太郎の言葉を聞くなり吐息をついて安堵していた。
勝手知る相国寺でいつものように居室を借り受け、旅の疲れを寝そべって癒していたら、案の定、承兌がやって来た。
「お元気そうでなによりです」
「見りゃわかんだろ。全然、元気じゃねえよ」
と言いつつも、牛太郎は承兌に相談した。弾正忠のこと、ではなくて、犬のことだった。
「こんなこと、おれの人生始まって以来のことだ。しかもなっ、可愛いし、優しいし、とろけちゃいそうだし。あーっ、おれは一体どうしたらいいかわかんねえよおっ！」
突っ伏して頭を抱える牛太郎に、苦笑する承兌。
「御自身が良かれと思ったことをすればいいではないですか」
牛太郎は起き上がるとおもむろに目玉を剥き出す。
「それがわかんねえから、お前に相談してるんだろっ！　おれはな、奥さんも好きだし、でも、こんなことって今までなかったから勿体ないことはしたくないしさあ。なあ、わかるだろ、なあ？」
「女のことはわかりませぬ」
と、承兌は鼻を背け、いつになく冷たい。
「女の学問などありませぬから」
「おいおい。女じゃない。おれの気持ちってことだ。おれの欲望ってことだ。女がどうのこうのじゃなく、これはおれ自身の中の問題

なんだ」
「ならば、僧としてではなく、現実問題として一つだけ言いましょう」
「ふむ」
「その方は織田様の姫であり、簗田殿の奥方は鬼神のような御方。ならば、あとは言うまでもないでしょう」
牛太郎は悲しさのあまり承兌を睨みつける。
「お前って本当に容赦ないな」
「さて、どうでしょうか」
承兌はあくまで興味がなさそうで、腰を上げると居室を立ち去ろうとしたが、足を止めて一言残した。
「生涯で得られる物がこの世には何もなく、御自身の肉体すらなくなってしまうものだと思えばそのような邪念は振り払われます」
「あのな」
牛太郎は耳の穴をほじりながら、戸を閉めようとする承兌を呼び止める。
「お前みたいなのがそういう難しいことしか言わないから、キリシタンをありがたがる人間が増えていくんだぞ」
「真実は一つです」
承兌が頭を下げたあと静かに戸を閉めていき、牛太郎は長い溜め息をついた。
翌日、境内には朝から秋の細い雨が落ちていた。牛太郎は縁側にじっと座り込み、濡れそぼった落ち葉を見つめる。
空気は冷たかった。
「旦那」
牛太郎の傍らで背中を曲げた於松がにたにたと笑っているが、牛太郎は見向きもしなかった。
「ししし」
於松は腰を下ろすと骨と皮だけの足を組んで、境内を見つめるばかりの牛太郎を延々と眺める。

「何をされているんですか」
栗之介とともに栗綱の散歩に出かけていた新三がやって来た。於松が汚い口の中を見せながら新三に言う。
「旦那が頭ん中を切り替えてんだよ」
「ほうけているだけにしか見えませんが」
「そうとしか見えねえんじゃ、いつまでも半人前だな」
「何をごちゃごちゃ言ってんだ。うるせえな」
瞳に光を戻した牛太郎は、すっくと腰を上げた。
「ジジイ。信貴山城に行くぞ。小僧はここで鉢巻きと一緒に留守番だ。わかったな」

悪党の引導

松永弾正を手の付けられない動物だと牛太郎は思う。

「いさぎいいほどの悪党じゃねえですか」

大和に入って、人目につかない道なき道を進みながら、遅滞な足取りで先導する於松がそう言った。

「ずいぶん楽しそうじゃんか、ジジイ」

「そりゃあもう。聞こえに高い悪党のツラを拝めるなんて、冥土の土産には持ってこいですわ」

「だったら、さっさと死んでくれよ」

「あいにく、あっしも旦那も長寿の薬を飲んでいるからそう簡単に死にやしませんよ」

「何が長寿の薬だ。仙人気取りか、馬鹿馬鹿しい。ただの死に損ないだろうが」

「ししし」

千年のいにしえから歌われてきた生駒山に連なって信貴山はある。河内平野と大和盆地を隔てる低山で、弾正忠自身が信貴山城を築いたというのだから、その野心が見え隠れしていなくもない。

松永弾正忠久秀は謎の多い男である。出は阿波とも摂津とも京の商人とも噂されているが、そもそも本人が源氏を自称しているだけで出自は語らない。

弾正が人々の目に留まり始めたのは、かつて畿内の覇権を握った三好長慶の代筆を務めてからであった。切れ者の弾正は長慶に認められ、三好家の家政を任せられるようになり、このころに弾正忠の官位を拝領した。

やがて、弾正は幕府にも影響力を持つようになる。一方で、長慶は嫡男、実弟を次々に失っていき、これは弾正の仕業ではないかという疑惑がささやかれるほど、悪党の片鱗を見せ始める。

そして、長慶が没する。弾正は長慶一族である三好三人衆と組ん

で、まだ幼かった左京大夫義継を当主に押し立て、三好家だけではなく足利幕府をも動かす実権を得るが、幕府の再興に信念を焦がしていた当時の将軍十三代義輝が三好三人衆と弾正の排除を狙った。

こうして、三好三人衆と弾正は、希代の大悪党の異名を天下に轟かせた将軍暗殺の事件を起こし十四代義栄を傀儡の将軍とさせるも、次には三人衆と弾正の実権闘争が始まり、阿波三好一族の援護を受けた三人衆を相手に弾正は劣勢に回り、数か月行方をくらますほどであった。

ところが、三人衆に命の危険を感じた左京大夫義継が三好一族から逃亡し、弾正を頼ってきた。弾正はこれによって劣勢を跳ね返そうと三人衆が本陣を置いた東大寺を焼き払い、大和の地盤を取り戻すが、再度の交戦で信貴山城を奪われてしまう。

そこに織田軍の上洛であった。左京大夫とともに上総介の軍門に下った弾正は、織田の大軍の援護を受けて信貴山城を取り戻し、大和一国を平定、畿内から三好三人衆の力を排除した。

弾正は齢六十を越えている。老人である。これまでの彼の歩みを紐解けば、三好三人衆との対立ごろから大悪党の全盛期は過ぎているようでもある。勢力、影響力ならず、弾正自身の政治家としての腕力が衰えているのかもしれない。

信貴山城に辿り着いたのは、京を出てから四日後のことだった。三日目にはすでに奈良に入っていたが、牛太郎は先に於松に書状を持たして信貴山城に走らせ、翌日に於松が面通りを許可する返書を持ち帰ってきてから、牛太郎は山に入った。

城郭を通され、山頂の居館で待たされること一時間、弾正はゆっくりとした仰々しさながらも、老年とは思えぬ重力のある足取りで牛太郎の前に現れた。

「お目通り頂き、ありがとうございます」

弾正は上座で仁王立ちしたまま例のうねるような視線で牛太郎をしばらく見つめたあと、のそりと腰を下ろした。

「いちいち、こちらの様子を伺わなくとも、簗田殿であれば自由に

行き来して結構ですぞ」
そう言うなりには仏頂面である。
「そういうわけには。敵同士なんですから」
牛太郎が愛想で笑みを浮かべると、弾正も口端を歪めた。
「簗田殿と敵同士であるとは残念なことだ」
「褒め言葉ですか」
「左様。煮え湯を二度も食らわされましたからな」
冗談を飛ばしながらも、弾正の目は本気であった。まとわりつくような視線が、そのとき一瞬だけ、かっと光った。
老獪な人間が若輩の者を試すような眼球運動のようでもあったが、牛太郎はわりと平然と向かい合い、無表情であった。
牛太郎は弾正にはやたら強い。それは、大悪党への警戒心もあったし、そもそも嫌いだった。摂津工作の折に邪魔されたせいで計画を修正しなければならなくなったことがあり、一方的に腹を立てている。なので、一度腹を括ってしまえば、負けまいという思いがめらめらと燃え立つのだった。
憎さがまさって、山県三郎兵部の赤備えにまったく恐れなかったのと似ている。
牛太郎と弾正はしばらく睨み合う。
二人の面会を見守る弾正の近習たちは、沈黙の緊迫感に顔を強張らせていた。
しかし、牛太郎にも弾正にも、何の脈絡も持っていないこの睨み合いに意図は無かった。先に目を逸らしたほうが負け、という、老人と中年の幼稚な睨み合いで、ただの意地の張り合いに過ぎなかった。
というのも、この二人は数々の緊迫した交渉の場を経験しているし、お互いに何度も顔を合わせてきては力量を探り合っているし、互いに相手の情勢もわかっているので、回りくどい会話をせずとも、動物が睨み合って威嚇し合うみたいな、そんな意地の張り合いで事足りた。

お互い、なかなか譲らなかった。牛太郎は弾正が嫌いだし、多分、弾正も牛太郎が嫌いだ。だから、お互いに負けたくなかった。

睨み合いはまだ続いた。しまいには近習たちもこれがただの意地の張り合い、いや、我慢比べだと気付き始め、眉をしかめたり、首を傾げたりと、緊張感はなくなっていった。

そうして、先に音を上げたのは汗を垂れ流している弾正だった。急に顔を歪め、イテテ、と、腰を抑えた。

牛太郎はにやりと笑いながらも内心ほっとする。足のしびれは限界に達しつつあった。

「と、殿。大丈夫ですか」

近習があわてて歩み寄るが、弾正は振り払う。

「構うな。おのれ。年長者をいじめおって」

弾正はほうっと溜め息をつきながら肘掛に体を預け、扇子を広げて顔を仰ぎ始めた。

「悪党め」

「褒め言葉ですか」

フン、と、弾正は鼻先を背ける。

「戯言だ」

化けの皮を剥がした弾正は、扇子をしきりに動かし、眉間に皺を寄せながら、牛太郎からは顔を背けたまま言う。

「して、用件はなんだ」

「お人払いを」

弾正は牛太郎にちらと視線を転がすと、そのまま、顎をしゃくって近習たちを退出させた。

二人きりになると、弾正が扇子を揺らす音だけだった。

「して、なんだ」

「その前に足を崩してもいいッスかね。いい加減痺れてしまいました」

弾正は白々しそうな目を向けてきながらも、口端を歪めて、フン、と笑う。

「好きにせい」
牛太郎は組んでいた足をほどいて両の足首を回し始め、そのまま言った。
「実はお願いごとなんスけど」
「どうせ、左京大夫だろう」
「その通りで」
「左京大夫をどうしろと言う」
「若江城に調略をかけてください。織田が攻撃するんで。もちろん、あっしが弾正殿の帰参の橋渡しをしますから」
弾正は無言で扇子を動かす。
「弾正殿なら簡単なことでしょう」
「気に入らんな」
弾正は、平然と足首を回している牛太郎にちらと視線を置き、その顔は強張っているというよりも、ふてくされていた。老人がいい年してすねているといった具合だった。
「貴様はいつもそうだ。わしを手玉に取ってやがる」
「ちょっかいを出してくるからッスよ」
弾正はにやりと笑った。扇子をバチンと叩き閉めると、肘掛から体を起こし、前にのめらせてきた。笑みを浮かべたまま瞼を大きく押し広げ、てらてらとした瞳で牛太郎を覗き込んでくる。
「貴様、いくさ目付として浜松に赴いたそうだな」
「よく知っていますね」
「どうせ、貴様のことだ。ちょっかいを出したのだろう」
「いいえ」
「武田入道は強かったか」
眼差しに生気をほとばしらせながら大蛇のように巻きついてくる弾正を、牛太郎はじっと見つめ返す。
「どちらにしろ、もう死んでます。あっしの勝ちです」
そう言うと、弾正は背中を反り返らせて、かっかっ、と笑い上げた。扇子を再び広げて、上機嫌に手を動かした。

「弾正殿もお亡くなりになられる前に、さっさとあっしに引導を渡してください」
「この弾正忠を前に、生意気な奴だ！」
笑い飛ばした弾正は、腰を上げた。愉快そうに牛太郎を見下ろしながら言う。
「いいだろう、悪党。貴様に乗ってやる」
そうして弾正は上座を下り、牛太郎の脇を抜けて行って、障子戸を両手でバチンと叩き開けた。晩秋のゆるやかな日差しが室内に差し込み、その光に頬の皺を縁どらせながら弾正は牛太郎に振り返ってきた。
「付いて参れ、小僧。貴様に天下の茶器、平蜘蛛の味を教えてやる」

いつものパターン

弾正は牛太郎に茶を振る舞ったあと、今夜は泊まっていけと言ってきた。

「嫌ですよ。殺す気でしょ」

「たわけめ。殺すつもりなら貴様のような生意気な小僧などとうに殺しているわ」

牛太郎は顔をしかめながらも、渋々うなずいた。

その後、夕暮れまで散策に付き合わされた。弾正自らが信貴山を案内し、あれが河内、あれが奈良、あの向こうが京だと、大悪党どころか好々爺よろしく牛太郎を引き回した。

居館に戻ってくると、大和の山の幸と酒が振る舞われ、近習や小姓も遠ざけて、弾正は頬を赤らめながらべらべらと昔話を語った。

「昔は今とは比べ物にならないほど畿内には化け物たちが跋扈しておった」

とか、

「そもそも、応仁の乱以降廃れた都を復権せしめたのはこの弾正忠だ」

とか、

「つまらん世になったものだ。力になびき、己の才覚一つで伸し上がってみせようとたくらむ者も少なくなった」

とか、ほとんどが武勇伝か、愚痴だった。言葉を吐くたびに盃をあおり、やがてはろれつも怪しくなってくる。

「だいたいだな、上総介が現れてからつまらなくなった」

「よく言いますよ」

下戸の牛太郎はいつものように飲んでいる振りである。

「三人衆に負けそうだったところを信長様に助けてもらったくせに」

「違うわい」

弾正は頬を膨らませながら、酩酊した視線を牛太郎に据えてくる。

「上総介がわしを欲しがっていたからくれてやったのだ。それだけど、あやつの下というのは思ったよりおもしろくなかった」
「おもしろいかつまらないかはともかく、確かにこき使われますけどね」
「そうだろ！」
眉根をいからせながら大声を張り上げた弾正忠から酒臭さがもわっと漂ってきて、牛太郎は鼻を背ける。
「貴様は知らないだろうが、あやつはの、あの平蜘蛛釜を寄越せ寄越せとしつこくて仕方なかった。何様のつもりだ！　九十九髪茄子をくれてやったというのに、平蜘蛛まで寄越せと言ってくる。まこと、あやつだけはしつこくて執念深くて我がままで、貴様ら織田の連中はよくまあ付いていけるものだと感心するわ」
「なんです、じゃあ、あの釜をあげたくないから裏切ったんスか」
「そうだ」
弾正は手酌で盃に酒をどぼどぼと注ぎ、それを一息であおる。飲み干すと、盃を膳の上叩き置き、大きな吐息をついた。
「平蜘蛛以外の物ならなんでもくれてやる。だがな、あれだけはやらん。上総介にそう言っておけ。あれはこのジジイが悪党などとさんざん揶揄されながらもこれまで生きてきて、ようやく手に入れた結晶だ。意地だ。誰にもやらん」
「飲みすぎじゃないんスか、弾正殿」
「飲まずにいられるか、たわけ」
牛太郎の制止も聞かず、弾正は盃に酒を注ぐ。しかし、盃に手をかけたものの、なぜか、動きを止めて明かりの火を映す酒をじっと見つめ始めた。
牛太郎には希代の大悪党がやけに小さく見えた。よく見てみれば、鬢も白髪も多かった。どこか虚ろで、どこか儚げに、弾正は小さな火を眺めている。
「気付いてはいたのだ」
急にぽつりと呟いた。

「わしも老いてしまったと」
弾正は盃から手を離すと、ふう、と息をつきながら背中を丸め、くたびれた目を牛太郎に向けてきた。
「貴様は道三殿に会ったことはあるか」
「いえ。あっしが信長様に仕えたころにはもう死んでましたから」
「わしはな、まだ三好に仕える前、道三殿がまだ京の油売りであったころを知っている。道三殿は英気ほとばしる男で、それこそ何かを仕出かしそうな人間で、その通り、一介の油売りから美濃一国の大名と伸し上がった」
弾正は盃を取ると、ちびりと舐めた。盃を置き、またしばらく波打つ火のゆらめきを眺める。
「しかし、今では道三殿の軌跡のかけらも残っておらん」
「信長様は道三公の娘婿ですよ」
「帰蝶に子はおるまい」
「まあ」
「浮世の流れとはそんなものかと言えばそんなものかもしれん。だが、道三殿はさぞかし無念であろうのう。今ではなんにもなくなってしまったのだから」
「なんにもなくなんないためにも、あまり無茶な真似はしないでくださいよ、弾正殿」
「わかっておる」
しぼんでしまっている弾正に、牛太郎は泣きおどしかと警戒する半面、少しだけ同情もした。
翌日、あれだけ飲んでいたというのに、弾正は悪党らしくからりとしており、牛太郎に左京大夫配下の者に誘い水を向けてみると密書をしたためた。
牛太郎は堺に行くと言って信貴山から下りようとしたが、
「駄目だ。貴様はわしが上総介に命を取られないための人質だ」
「大丈夫ですって。なんだか知らないけれど、信長様は弾正殿には甘いんですから」

「信用できん。もしも、上総介がここに攻め入ってきたら、貴様はわしと心中だ。覚悟しておけ」
と、拘束されてしまった。
「また、いつものパターンかよ」
与えられた居室でごちながら、牛太郎は机の上に和紙を広げ、筆を取った。栗之介は字が読めないし新三は子供なので、信貴山城にやって来るよう栗之介と新三に伝えてくれという旨を承兌に宛てた。それと、念のため梓にもそろそろ冬が来るがというような取りとめのない文をしたため、もう一人、どうしようか迷ったが、結局、見送りの文を頂戴した礼を犬に書いた。
居室の外に出ると、近くで牛太郎の見張りをしている近習に文を出したいことを述べると、
「どちらにです」
「いや、京にいる小姓と岐阜の家族です」
「ならば付いて来て下さい」
眉をしかめながら近習のあとを付いていくと、なぜか、弾正の前に通された。
「簗田殿が文を出したいとおっしゃっているのですが」
「どれ」
と、弾正は牛太郎に手を出してくる。牛太郎は首を傾げる。
「はよう寄越さんか。望み通りに出してやるから寄越せ」
「手元にないんスけど」
「なら、持ってこんか」
牛太郎は一度居室に戻り、文を携えて弾正の前に再び現れると、弾正に三通の文を差し出した。
「ふむ。これは何者に宛てるのだ」
「相国寺の僧です」
「これは」
「岐阜の女房です」
「これは」

「信長様の妹さんです」
「そうか」
すると、弾正は折り畳まれた文を勝手に開き始め、
「ちょ、ちょっと！」
「なんだ。やましいことでも書いてあるのか」
「書いてないッスけど、それはないじゃないッスか！」
「当然だろうが。わしは貴様などこれっぽちも信用しておらん。それとも、読まれたくないならば即刻首をはねるぞ」
かちゃ、と、近習が太刀の柄を握って、牛太郎は舌打ちした。
「わかりましたよ。どうぞ、お好きなように」
「さっさとそう言えい」
と、弾正は文を広げた。
「汚い字だ。教養のなさが滲み溢れておる。南蛮人でもこんな字は書かん。文化を与えられた土人の字だ」
牛太郎はわなわなと震えながら弾正を睨みつける。
「ふむふむ。小姓と馬丁を信貴山城に寄越せとな。よろしい」
そうして、弾正は悪口ばかり叩いていたくせに、わりと几帳面に文を折り畳み、次の文を手に取った。
「織田の姫御の犬か。貴様のような土人が姫御と誼を通じているとはけしからんの」
「ただのお礼の手紙ッスよ」
「どうせ、よからぬことを企んでいるのだろう、悪党め」
にやにやと笑いながら文面に目を注ぐ弾正に、牛太郎は無視してただ睨みつける。
「ふむ。つまらん内容だ。味気もないし、色気もない。まるで猿真似だな」
弾正は文を折り畳むと、最後の梓宛ての文を手に取る。
「ふむ。梓とは女房か」
牛太郎の隠密行動を警戒しているというよりも、牛太郎には弾正のそれがただの趣味のように見えてきた。

「ふむふむ。仲睦まじいようだな。女房に文を出すというのはよいことだ。まあ、しかし、字がうなぎの寝床のように汚いわ。可哀想な女房だ。おそらく、読みづらくて仕方ないであろう。土人を夫にすると何かと苦労するであろうな」

弾正は最後の文も折り畳み、近習に手渡した。

「よろしい。出しておいてやれ。おい、左衛門尉。もう少し書の鍛錬をしたほうがいいぞ。貴様の字で目が痛くなってしまったからな」

「もう、ここでは書きませんから大丈夫ッスよ」

牛太郎はむすくれたまま居室に戻っていった。

百戦錬磨の弾正の調略により、左京大夫家臣、多羅緒某、同じく池田、野間の三重臣が織田との内通を承諾した。

牛太郎は早速岐阜の上総介に早馬を出し、佐久間右衛門尉率いる織田の軍勢が河内に大挙して押し寄せてきた。

このとき、若江城には左京大夫の義兄である足利義昭が匿われていたが、織田軍の襲来とともに河内を脱出、籠城に入った左京大夫であったが、内通している三家臣が重臣の金山某を殺害し、織田軍を若江城に引き入れる。

左京大夫は女房子供たちを自らの手で葬ると、城郭へと打って出た。織田の兵卒たち相手に奮戦したあと、鞘から太刀を抜くと自らの腹を十文字に斬って、二十五年の生涯を終えた。

若江城攻略により松永弾正忠は織田家への出戻りが許され、畿内に残る有力な抵抗勢力は石山本願寺・顕如のみとなった。

越後（御託）

武田家の西上作戦以降、北陸の上杉家とは同盟関係にある。

言わずもがな上杉不識庵謙信にとって武田家は長年の宿敵であり、同じく武田につい春先までには窮地に追い込まれていた上総介の苦肉の策であった。

やがて、偉大なる徳栄軒信玄の死により、織田包囲網は瓦解する。

織田軍は息を吹き返し、浅井朝倉を滅ぼすと、その勢いで畿内を制圧した。

残存する当面の敵は一向一揆衆のみである。

この一向一揆には不識庵も同じく苦しめられていた。織田軍が伊勢長島でもがき苦しんでいるように、上杉軍も泥沼に足を踏み入れていた。

元々、越中一向一揆衆の蜂起は、西上作戦を決断した徳栄軒の画策による。

長年、天下への覇道を不識庵との対決によって足踏みされてきていた徳栄軒は、北信濃や関東から上杉軍の目を逸らさせるために、越中一向一揆を工作した。

越中の隣は加賀国である。ここは百年弱前、浄土真宗本願寺教団が加賀守護職富樫氏を滅ぼして以降、武士の力ではなく、教団及び一揆衆の自治によって統治されてきた地であり、その信仰は民衆に至るまで根付いており強大であった。

越中一揆衆は加賀一揆衆と合流し、越中国にある上杉方の各諸城を攻略していった。当時、関東攻めを敢行していた不識庵は越後に引き返し、自ら越中一揆衆の撃退に乗り出し、一度は攻城に手間取るも、一揆衆を野戦へと引き出し、敵方四千人を死傷させて圧勝した。この勢いで越中富山城を取り返し、不識庵は本拠地の越後へと戻るが、その途上、またしても徳栄軒の工作により一揆衆が蜂起。富山城を再度奪われ、不識庵は越後春日山に戻ることもなく兵を引

き返させて富山城を再び取り戻す。

徳栄軒死後の今夏には再び越中に出陣し、各諸城を奪還すると、そのまま越中・加賀国境まで足を進め、上杉軍は越中国の大部分の制圧に成功した。

今、北陸の状況は、越前に織田軍、越中に上杉軍、それらに挟まれるようにして加賀の一向一揆衆である。

織田、上杉両軍にとって、本願寺教団及び一揆衆は共通の敵に他ならない。

だが、上総介の耳には入っていた。

若江城に身を隠している足利義昭が、再度の包囲網構築を狙っている、と。

徳栄軒が死亡し、浅井朝倉、三好三人衆が滅び、松永弾正が織田にひれ伏した結果、各自の連携が希薄になり、織田軍を取り囲む勢力は各自ばらばらになってしまったが、武田は徳栄軒の死以降、跡目を継いだ大膳大夫勝頼を中心にして、上洛こそ適わなかったものの、甲斐、信濃、駿河への影響力はいまだ保持しており、本願寺教団も各地で活発である。更には西の毛利家が中国地方に勢力を拡大しており、やがては織田軍と相まみれるのは必至であった。

そして、不識庵である。

徳栄軒の力が絶大であった先の包囲網に、上杉は参加していない。だが、不識庵は義理堅い男で有名であった。まして、彼の関東管領職というものは足利幕府の官職である。

武田家と何度も激突したそもそもの発端は、武田軍に侵略された北信濃の豪族たちが越後の不識庵に泣いて助けを頼んできたためで、不識庵は無償で武田家と戦ってきた。更に関東の北条氏と長年戦い続けている理由も、先代の関東管領に泣き付かれたためである。

そして、越中に勢力を拡大した根本的な理由。それは上総介の元で形骸化した足利幕府の再興のために上洛を狙ってのことだった。

今は一向一揆衆という共通の敵がある。だが、各地を遊泳している義昭がこのまま黙って時代の藻屑と化していくだろうか。

かつては武田家への手前、不識庵を無視していた義昭だが、今となっては越後上杉軍に上洛を要請するのは火を見るよりも明らかであり、織田と上杉の同盟は、ゆくゆくは浮沈をかけた戦場が待っているという大きな矛盾をはらんでいた。

「使者が織田一門ではなく、拙者や太郎殿というのはそういうことなんでしょう」

と、堀久太郎は言う。

探れ、ということだ。

軍神不識庵謙信に勝利するために。

越後に向かわされるそうした理由を薄々とわかってはいた太郎だが、いざ口に出されてみるととてつもない重圧を感じてしまう。

上杉不識庵に勝たなければ、織田に将来はない。

上総介を筆頭にして将兵から各家臣の奉公人まで、十万人以上はいる織田家の浮沈がかかっていると思うと、指先が震えてくるのが自分でもわかった。

しかも、相手は武田徳栄軒と互角の勝負を繰り広げてきた軍神なのだ。

軍事、外交、政略、すべてにおいて、武田を相手にしたときのような失敗は許されない。太郎は織田軍の対上杉戦略における軍事武官を上総介に任されたと言っても過言ではなかった。

実は戦国武将たちには兵法学が浸透していない。平安貴族の権勢が衰え始めた古来の時代、代わって世に台頭してきた武士の戦い方は、個人の力量に頼る一対一の方法に徹しており、その名残りがいまだに残っているせいで、兵力にものを言わせる足軽戦闘の今日現在でも、明確な戦法というのは確立されておらず、各将の戦争感覚に頼るか、知将たちの調略、奇謀によって相手を切り崩すのが主であった。

ただ、組織戦の概念をいち早く取り入れ、各豪族入り乱れていた戦乱の勢力図を劇的に変化させたのが、武田徳栄軒であり、織田上総介であった。

風林火山を旗指し物にしていたように徳栄軒は孫子に精通しており、局所的戦術ではなく、国を治める一君主としての軍政学に長けていた。

対して上総介は一にも二にも物量で圧倒する戦法である。尾張のうつけなどと呼ばれ、躊躇することなく破壊を繰り返して行く上総介だが、軍事の基本にはまったく忠実であった。

ただ、上総介の戦略観念の場合、限界がある。兵卒をこしらえるための人材というのは当然無限ではない。

まして、兵が弱い。織田軍は日本一弱い。姉川の戦いなどはその最たる例で、兵数では圧倒していたというのに一時は本陣を急襲される直前までの危険に晒されており、徳川三河勢の援軍がなければ勝敗がどうなっていたことかわからない。

弱い織田軍が今後の戦場において確実に勝利を得ていくためには、組織戦を展開するための根本的な柱が必要だと、おそらく上総介は考えていた。

だから、簗田左衛門太郎なのである。

太郎は竹中半兵衛に教えを受けていたのもあって、織田の将校には珍しく兵法の概念を持っていた。

兵法は敵を定めることからすでに始まる。その敵にどのようにして勝つか。そのためには、彼を知り、己を知れば百戦危うからず、なのである。

上杉軍とはなんなのか、まず、それを把握しなければならない。

孫子が言うところの七計。

不識庵と上総介、どちらが将校兵卒から民衆に至るまでの人心をより掌握しているか。

上杉軍と織田軍、どちらの諸将校が秀でているか。

いざ決戦地を決定する場合、いつの季節でどんな天候であった場

合、上杉、織田、どちらに有利に働くか。また、どの決戦地が有効か。

規律はどちらが厳しく定められているか。

どちらの軍勢が強力であるか。

訓練はどちらがよりされているか。

論功行賞及び懲罰は、私心なく行われているか。

これらがあって初めて戦略が立案されるのだから、太郎はより客観的に、より綿密に上杉軍を知り得なければならない。

ちなみに蛇足だが、牛太郎も同じように仮想敵国に友好使者として赴いたことがある。ただ、牛太郎は悪事にだけは優秀な男だが、兵法のへの字は頭にまったくないので相手の状況を観察することもなく、逆に山県三郎兵衛尉に殺されそうになって逃げ帰ってきた。

「築田殿の話だと、徳栄軒は顔ではにこにこしていても腹の中はどす黒い男だったそうですが、さてさて、毘沙門天はどのような人物なんでしょうなあ」

久太郎は口許を緩ませながら、少々呑気だった。越後を見据えてすでに体を硬くさせている太郎とは違って、上杉軍よりも不識庵ばかりに興味が注がれている。不識庵が厚く信仰しているらしき、仏門の四天王の一尊である毘沙門天の名で不識庵を呼ぶあたり、少年が英雄に会えるのを楽しみにしているふうであった。

いや、太郎だって、不識庵とは一体どのような男なのか、当然、興味はある。

「でも、会ってはくれないかもしれませんね。その正体は謎めいているんですから、他所の人間はあまり見たことがないんでしょう」

とにもかくにも、織田の使節団を引き連れて、太郎と久太郎は岐

阜から飛騨の山路を抜け越中へと入り、初冬の季節に荒々しい日本海を眺望しながら越後春日山への峠を越えて行った。

越後（洛中洛外図）

堅牢な山脈と広大な海、長い冬の豪雪がもたらす豊饒な平野。厳しさを乗り越えた者たちに、大自然は豊富な恵みを与える。それが越後であった。

ただ、広大な自然の中に暮らしているわりに、民衆はどこか口数が少ないようでいて、しかし、陰気なわけでもない。織田の使者の行列をじいっと眺めてくる者もいれば、中には道端に跪いて貢物のきらびやかさに有難がっている農婦もいた。

朴訥である。

その分、雪国の人というのは辛抱強いらしい。大雪は一切の活動を遮断するため、人々はただひたすら季節が明けるのを待たなければならないからだそうだ。

越後の兵は辛抱強いのだろうか。

太郎は諜報活動もあいまってふと思った。

越後西部に位置する春日山は標高こそ低いが、北に直江津の港、さらには日本海を見渡し、南に高田平野を眺められる。もっとも、山というより、そのほとんどが城郭である。北近江の小谷城は数ある尾根を利用していたが、春日山城は曲輪が各所の切り立った断崖から城下に睨みをきかしており、空堀が幾重にも施され、絶壁にはびっしりと土塁が張られており、鉛色の雲の下、頂上に居館がうっすらと見える。

「これは難攻不落ですね」

馬上から春日山を仰ぎ見た堀久太郎が苦笑していた。

「攻め落とすことは不可能でしょう」

太郎も言った。

しかも、ここに軍神がどっかりと腰を下ろしているのである。

上杉との真っ向からのいくさは無理だ、と、太郎は考えた。もし、仮に野戦で勝利を得たとしても、彼らを屈服させるには軍事活動で

はない他の手段でしか道はないであろう。
山城のふもと、一の門までやって来ると、十数名の兵卒と身なりを整えた数名の馬上の将が太郎たちを待ち受けていた。
織田、上杉、どちらからともなく下馬し、頭を下げる。
「はるばる越後まで御苦労であった」
出迎えの男は背丈はさほどでもなかったが、横にがっしりとした体つきで、野太い声だった。口を両端にきつく引き結んでいて、そういう顔つきしかできないのか、眉間に皺を刻んでいる。肌艶や瞳の気配から察するに齢は若そうなのだが、いかにも越後の頑固者といった気配である。
「拙者、不識庵が子、喜平次顕景と申す。以後、お見知りおきのほどを」
「これはわざわざ喜平次様がお出迎えとは恐縮です。拙者は堀久太郎と申します。お手柔らかに」
久太郎は普段から上総介との距離が近しいせいか、厳めしい連中にまったく物応じしていなく、むしろ、「お手柔らかに」などと挑発めいた軽々しさだった。その浮ついた感が気に入らなかったのか、喜平次以下、上杉の将はややむっとした。
「拙者は簗田左衛門太郎と申します。喜平次殿自らの歓待、ありがたく存じます」
物腰の丁寧な太郎に、連中は、ふむ、とだけうなずいた。
「それでは、城に」
太郎たちは上杉連中のあとを付いていき城郭を登っていく。
嫌な奴らだ。敵にするには、である。喜平次を筆頭に質実剛健といった言葉がまったく当てはまる男たちであり、曲輪に配置されている守兵たちも背筋に鉄でも差しているかのように直立していて、口許も引き締まっている。
空を分厚い雲が覆っている。ただ、無風であった。それが余計、上杉軍の精悍さを際立たせていた。
織田にはこういう厳格さというものがない。太郎が率いる簗田勢

こそまともだが、織田軍の兵の大半は功名欲しさか強奪ばかりに目を血走らせており、ほぼ野盗集団に近い。上総介の強烈な統率力でなんとか規律は保たれているものの、ひとたび、戦場の危険に晒されるとまるで小鳥の群れのように散り散りに分裂してしまう。

将校もそうだ。佐久間右衛門尉を筆頭に日和見主義者が多く、兵力で勝っているときは実に勇猛だが、巨大な敵と向かい合ったときや情勢が思わぬ展開に作動したとき、何もできない。

おかげで、皮肉にもしんがり戦だけは得意なのだが。

ただし、将校の個性の多さという点では勝っているようにも見えた。常識外れの羽柴藤吉郎であったり、万事に余念がない明智十兵衛、命知らずの猪武者も佐々内蔵助などがいれば、若い佐久間玄蕃允、森勝蔵だったりと人材は豊富だ。

佐久間右衛門尉や柴田権六郎、丹羽五郎左衛門のように、経験が仇となって先入観が先行してしまっている重臣たちでは厳の上杉軍には勝てないだろう。上総介自らが采配を振るえば、これまでの戦いのように勝機はあるかもしれないが、戦線が拡大してしまっている今では当主自らが北陸まで足を伸ばすのは難しい。

誰が大将になるかが分かれ目だ。藤吉郎と十兵衛の両将しかないだろう。この下に自分や前田又左衛門、佐々内蔵助が入れば、面白くなるかもしれない。

すると、城郭を登りながら太郎は胸を躍らせた。軍神に対して、藤吉郎と十兵衛はどう相対するであろう。いや、藤吉郎や又左衛門、内蔵助などは上杉軍を破ることは功名の一大好機として無類の活躍を見せるかもしれず、そんな鼻息の荒い連中を十兵衛が冷静に制していく。

それに藤吉郎の与力には竹中半兵衛もいる。

今の織田軍の最高の陣容であり、かつ、太郎にとっては小さい頃から知っている連中なので、むしろ、これが出来るとしたら上杉軍との戦場が楽しみになった。

無論、父の牛太郎はいらない。あ、雰囲気を和ますために置いて

もいいか。
　頂上に辿り着いて居館に上がると、太郎と久太郎は広間に通された。中には厳めしい男たちが二列に揃っており、上座だけ空いている。太郎と久太郎は平伏し、上座の主の到着を待とうとしたが、
「おやかた様は御堂に入られており、この上杉豊前守が代理を務める」
　と、上座にもっとも近いところの男、豊前守景信が言った。
　やっぱり、不識庵の顔は拝められないかと太郎はやや残念がった。
　久太郎が来訪の口実を述べたあと、連れてきた荷駄部隊を庭先まで通してくれるよう伝えた。豊前守の承諾により、荷駄の男たちが貢物を携えてやって来る。
「友好の印に、上総介から預かってまいりました」
　久太郎が言うと、庭先に屏風が広げられた。上総介が召し抱えている狩野派の絵師、狩野源四郎が十三代足利将軍義輝の注文によって描いた洛中洛外図で、四季折々の京の晴れやかな町並みが表された傑作である。
「ほう」
　曇天の陰鬱な気配を一挙に打ち払った屏風の見事さに、上杉の各諸将は喉を唸らせた。
「なるほど、これは素晴らしい」
　彼らは腰を浮かせ、今にも近くに寄ってまじまじと見つめたいといった頬の緩めようであった。
　ただ、太郎は、喜平次にこそこそと耳打ちをして、その難しそうな顔をさらに険しくさせた少年の姿が目に入った。
「おやかた様も喜ぶであろうなあ。堀殿に簗田殿、今すぐに御礼というわけにはいかんが、せめてこの越後でのんびりしていってくれ」
「さすれば――」
　と、太郎が頭を下げながら言う。
「この風光明媚な越後の自然を楽しみたい所存です。是非とも各所をご案内していただければ幸いです」

「はっは。よかろう。ただ、雪に見舞われないうちに帰国されたほうがよろしいぞ。越後の雪はまこと根深いからのう」
豊前守がそう言うと、諸将も口許を緩めて笑った。
「お言葉ですが、豊前殿」
喜平次の野太い声が談笑を堰き止めた。豊前守は眉をしかめる。
「なんだ、喜平次」
「盟友とはいえ、見知らぬ方たちに領内を探索させるのは如何かと」
太郎と久太郎は思わず頬を強張らせてしまう。
「何を器量の狭いことを。はるばる尾張からやって来た使者にこのような見事な物まで頂戴したにも関わらず、無礼ではないか。お主は上杉の名をおとしめたいのか」
「それとこれとは話が別でございます」
「何がだ」
「友好と詮索は別だということです。おやかた様の御了解を得てからにしてからがよろしいかと」
豊前守と喜平次の間にやや緊張が走った。やがて、豊前守は使者たちに顔を向けると、軽く頭を下げてくる。
「申し訳ないが、当家はこのような堅物ばかりだ。すまんが、まずはここで旅の疲れを癒してくだされ」
そういうことで、領内の諜報活動は保留とされた。太郎と久太郎は腰を上げ、重臣たちの前から下がると、先程耳打ちをしていた喜平次の小姓だという少年の案内で客間へと導かれる。
廊下を行く途中、その少年が背を向けたまま急に言った。
「さすがに尾張の見栄っ張りのやることってのはつまらんですね」
「なんだい、お主、急に」
と、久太郎が苦笑すると、少年は足を止めた。横顔だけ振り向かせてきて、鼻先を突き上げながらあざけり笑うように、
「せいぜい、屏風の都を牛耳られているのも今のうちですよ」
「へえ。ずいぶんと生意気なことをいう小童だ」
「生意気なのはどちらですか。要は屏風はくれてやっても、そこに

描かれている京は俺のもんだっていう上総介のつまらぬ見栄なんでしょう」

なるほど、そういうことか、と、太郎は逆に感心してしまった。対して久太郎は洛中洛外図を贈った上総介の意図を理解していたらしく、口端を歪めた。

「子供。そういうのを邪推って言うんだぞ」

「まあ、いずれ屏風の中の都ですら惜しくなるでしょうけどね」

「お主」

と、感心もそこそこに太郎は少年を睨み据えた。

「言いたいことはわからなくもないが、無礼千万であるぞ。たとえ、いくさ場で敵同士となっても、武者は礼を失ってはただの盗賊だ」

すると少年は飄々としながらも、太郎を見つめながら微笑を浮かべる。

「ふーん。尾張武者にも貴方様のような方もいるんですね。覚えておきますよ。簗田様でしたっけね」

「左様。お主は何と申す」

「与六。樋口与六です」

「太郎殿。どうせ、こんな小童、すぐにでも戦場の塵と化すでしょうから、名など聞くまでもないですよ」

「塵と化すのはどちらですかね、堀権兵衛さん」

「久太郎秀政だ！」

さすがの久太郎も頭に来たらしいが、樋口与六はぷいと顔を背けると、

「じゃ、付いてきてください。あ、ご安心くださいね。当家は闇討ちなんていう汚い真似はしませんから」

すたすたと歩き出した。

越後（不識庵）

その日は豊前守など重臣たちと会食し、結局は領内散策の結論を保留にされたまま一晩を過ごした。

「越後もそうですが、毘沙門天も拝めなさそうですね」

久太郎は溜め息をついた。

「あまり長居しても無駄かもしれません。まあ、一つだけ収穫はあったことですし」

「収穫とは？」

これといって思い当たる節のない太郎は首を傾げる。

「どうやら上杉も一枚岩ではなさそうです。豊前守と喜平次はあまり仲が良くないでしょう」

久太郎は昨日の屏風の件や、晩の豊前守の言葉の端々にどこか喜平次を鬱陶しがる機微があったと言った。太郎はそうした洞察力に疎いので、やはり上総介の側近だと思った。

「不識庵が健康である限りは盤石かもしれませんが、長い目で不識庵の死を待てば、ほころびも出てくるはずでしょう」

久太郎は事前に上杉家を調べていたらしく、そもそも、不識庵に実子はいない。喜平次は不識庵の甥であるが、跡目後継者として不識庵の子となったというよりも、実父が急死してしまったので不識庵が引き取ったという経緯らしい。

不識庵の養子は他に二人いて、一人は武田家に追われて不識庵の配下となった北信濃の豪族村上氏の子であり、不識庵の養女を妻にしている。一人は敵対関係にある北条氏の子で、こちらは一時期和睦したときの外交上、不識庵の子となった者である。

不識庵はこの三人の養子のうち、誰を跡目にするか公にしていない。

さらに、不識庵の出自である長尾一族からの一門衆に豊前守景信がいるが、この豊前守の一族と喜平次の一族は不識庵が長尾家当主

となる前から対立してきている。
「どうやら、その因縁はいまだにくすぶっているんじゃないですかね」
それを聞いて太郎は思った。軍神は実は一族の支配能力に欠けているのではないのかと。
家臣たちがいくら臣従していたとしても、君主亡きあとに後継者争いが勃発してしまうのは大昔から行われてきた人々の真理でもあり国家の愚行でもある。
おそらく、上総介はそこまで考えている。織田の一族というのは、敵対していた者は上総介が尾張平定時に駆逐してしまったし、残った一門衆も上総介が強烈すぎるためか権勢のひとかけらも持っていない。それに、まだ二十歳にも満たない勘九郎信忠に家督を継がせると言っているらしいから、たとえ今、上総介が没してしまったとしても後継者争いは考えにくい。
「どうして、不識庵は見通しを立てないのでしょう」
「さあ」
久太郎は首を傾げる。
「自分はまだまだ健在だと思っているのかもしれませんけれど、四十を越えているみたいですからね。毘沙門天のように大国を有している男が本当に嫡男を決めていないとしたら、お粗末としか言いようがありませんけど」
とはいえ、軍神と呼ばれている男に「お粗末」などとは似合わない。
「まあ、そんなことはないでしょう」
久太郎も自分で言っておいて結局は否定した。
「多分、昨晩の席で豊前守たちと向かい合った感じでは、不識庵は己の考えを口にしない人間なのでは。だから、謎めいた人物なのだという気がします」
「でも、我らがおやかた様もあまりご自身の考えは披露しませんよ」
久太郎は笑った。

「だって、おやかた様はわかりやすいじゃないですか」
「そうですか？」
「そうですとも。だから、おやかた様の顔色なんて伺う必要ありませんよ。太郎殿のお父上だって、最近はおやかた様の前ではいつもぶすっとされていますよ。機嫌取りしたところで何もならないってわかっているんでしょう、きっと」
「そうですかね。何も考えていないだけなんじゃ。それに藤吉郎殿なんかは目ざといぐらいに機嫌を取るじゃありませんか」
「あの人は別格ですよ。だって、サルなんですから」
ひとしきり笑ったあと、太郎と久太郎は外に出た。城下に待機している荷駄隊に、先に帰国するよう伝えに行くためだった。久太郎は城下に下りる許可を得てくると、世話役の豊前守に会いに行った。太郎は連れてきた簗田勢の兵卒や久太郎の従者に、馬を引いてくるよう言った。
一夜明けても、相変わらずの曇り空である。今日はやや冷たい風が吹いている。遠くの守兵たちにじっと監視されるまま庭先で待っていると、眉をしかめるような風体の男が縁側に突っ立ってこちらをじいっと見つめてきていることに気付いた。
禅衣に身を纏っていて手には数珠がある。ぼさぼさの髪が肩まで伸びていて、髭も鼻下から顎の先まで鬱蒼と茂っている。
一目見ただけで不潔だとわかったが、風格もあったので太郎はちょっとだけ頭を下げた。
「織田かい？」
と、男は見てくれとは打って変わった和やかな口調だった。太郎は少し戸惑ったが、
「ええ。簗田左衛門太郎と申します」
「齢は？」
「二十一です」
そのときちょうど兵卒に引かれて黒連雀がやって来た。いつものことながら、前脚と後脚で交互に跳ねて首を上下に揺さぶり、いく

さ場に連れていけと訴えて、口輪を取る兵卒を手こずらせる。
「ははん」
男は威勢のいい黒連雀に毛むくじゃらの顔を緩ませた。
太郎は黒連雀に歩み寄ると、首すじをぽんぽんと叩き、苦笑した。
「一晩休んだらこれかい、クロ」
太郎の言葉に涎を垂らしながらもようやく落ち着いてくる黒連雀。
「いい馬だ」
と、男が裸足のまま庭先に下りてきた。その瞳だけはまるで少年のような無邪気な輝きで、歩み寄ってくると黒連雀の体をぽんぽんと叩いた。
「ああっ」
太郎が小さく叫んだと同時に、黒連雀が前脚を高々と上げ、首を小刻みに震わせ、また暴れ始めてしまう。
しかし、男は驚きもせずに、
「ほう」
と、立ち上がった黒連雀を悠然と見上げた。
「わしが臭かったのかな。いかんせん、三日もこのままだったからね」
「い、いえ。この馬は知らない方に触れられるのを嫌うんです」
「なるほど。見た目の通りに我がままだ。でも、走るだろう？　この馬」
「え、ええ。元気で仕方ありません」
「じゃあ、わしにくれないかな？」
「ええっ？」
ぼさぼさ頭の男は太郎に向けて目尻を柔らかくし、唇は髭に隠れてしまっているがにこにことしている。
「冗談、冗談。わしだって、こんな馬を持っていたら誰にもくれたくないよ。そなたも見知らぬ男は嫌いなんだろう、クロとやら」
黒連雀は兵卒の力ずくの手に御されながらも、血走った目で男を睨み下ろしてきている。

「闘争心の塊だね。でも、お主はこれに跨っているのだろう」
「ええ」
「そなた、足軽大将くらいか？」
「い、いえ、一応ながら侍大将を務めております」
「侍大将？　その若さでか。大将首でも取ったのかい？」
「そういうわけでは。手柄という手柄はそこまで立ててはおりません」
「ほーう」
男の興味は黒連雀からその主人の太郎に移ったらしく、髭まみれのわりに透き通った瞳で太郎をまじまじと見つめてくる。
そうしていると、堀久太郎が喜平次顕景や小姓の与六とともにやって来た。太郎は喜平次に頭を下げたが、喜平次と与六は顔をはっとさせると、突然、地面に膝をつけ始め、深々と頭を下げてきた。
「おやかた様っ、この者は織田の使者ですっ。庭先でお肩を並べられることございませんっ」
太郎は驚きながらおやかた様と呼ばれた男に目を向けた。男は平伏する二人に対してただ一言。
「知っているよ」
太郎は裾をたくしあげ、あわてて足元に平伏した。
「も、申し訳ございませんっ！　不識庵様とはいざ知らず、とんだ御無礼をっ！」
「別に無礼など働いていないじゃないか、簗田左衛門太郎」
久太郎も平伏した。
「お初にお目にかかりまするっ。織田の使者として岐阜から参りました堀久太郎秀政にございますっ。不識庵様直々にお会いしてくださるとは、恐縮至極でございますっ」
すると、不識庵は、ハア、と、溜め息をついた。何も返事をしないままぺたぺたと縁側にまで歩いていき、裸足であることを知った小姓の与六があわてて駆け出していった。
不識庵は縁側に腰を掛け、首をぼきぼきと鳴らし、次は指を一本

一本鳴らしていく。
「上総介から友好の証として屏風を贈らせていただきました。是非、のちに御覧ください」
久太郎の言葉に不識庵は指を鳴らすだけで何も答えず見向きもしない。
「おやかた様っ」
喜平次が呼ぶと、ちらとだけ視線を向けた。
「なんだ」
「この者たちは越後各所を見て回りたいなどと申しておりますが、織田の者にいろいろと探られるのは不利益かと存じます。ゆえん、旅の疲れが癒えたら岐阜に戻ってもらっては如何かと」
「よくまあ、面前で言えるね、喜平次」
これが天下に名高い上杉不識庵かと思うと緊張が抜けていく。実に深刻な敵愾心を抱く喜平次に対して伸びやかな口調で言ってのける不識庵に、太郎は思わず笑ってしまいそうであった。
「そういうことをやっていると恨まれるよ。恨まれるってのは一番怖くて、一番つまらないもんだ」
「さ、左様でございますが」
「いいじゃないか。なんでも見せてやれ。せっかく、織田の見所のある者が来ているんだ。いろいろと準備をしてくれたほうが、わしもやり甲斐がある」
与六が桶を抱えて走って来た。不識庵はばしゃばしゃと足を洗いながら言う。
「いずれ、わしと戦うつもりなんだろう、簗田左衛門太郎」
「い、いえ、そういう訳では」
「遠慮をしているようではわしには勝てんぞ」
「滅相もございません。不識庵様と槍を交えようなど、ゆめゆめ思わぬことです」
不識庵は縁側に上がり、軽快に鼻で笑うと去っていった。

越後（梅干し）

さすがに越後は広大である。わずか一日ばかりで各所を巡るわけにもいかず、太郎と久太郎は喜平次の窮屈な監視のもと、春日山城下を回った。

「貴公たちが特別視するような物など我が軍にはありませぬ」

春日山城に戻る途中、終始押し黙っていた喜平次が、ふいにそう言った。

馬上の太郎と久太郎は、喜平次の背中をじっと見つめる。この若者はとにかく疑い深いというか、慎重というか、上杉家を守るという意志の強さがそうさせているのかもしれなかった。

「騎馬なら甲斐武田、兵の屈強さなら三河徳川、城は小田原の北条。つまり、貴公たちはいつまでもこのような田舎にいなくても良いのです」

隠し事をしているようでもない。

「しかし、喜平次殿――」

太郎が口を開いた。

「腹を割って言わせてもらえば、どう考えても今の織田では貴方たちに勝てるとは思えないのです。ならば、勝つ手段を探し求めるのが将として必然でしょう」

隣の久太郎が眉をしかめた。急に何を言い出しているのだと言わんばかりに。

多分、太郎は越後人の実直さに感化されてしまっていた。というよりか、昼前の不識庵とのやり取りで、彼らの実直さをのらりくらりと交わすことに嫌気をさした。

わしと戦うつもりなんだろう。そう迫られて、そうだ、戦うつもりなのだ、と、なぜ言わなかったのか。不識庵はいくさの土俵に堂々と立っている。いつでも来い。胸を貸してやる、と。

喜平次とて、渋々ながらも太郎たちに探索をさせている。

だったら、自分だって戦いの意志を表明したい。自分は文官ではない。戦国の武将なのだ。

「拙者の我がままを聞いて頂いたあかつきには、喜平次殿を岐阜にお招きいたしまする」

久太郎が顔をしかめて太郎を制してくるが、太郎は聞かない。

すると、前を行く喜平次が、ふっ、と笑った。

「見る物などないと言っているでしょう」

そうして、常に難しそうに眉根を固めている顔を若干和らげながら、彼は横顔だけ振り向かせてきた。

「ただ、貴公は面白い男だ」

あだ名はこましゃくれ。ときには頭でっかちのバカ息子。もしくは融通のきかないバカ。そんな太郎が面白いなどと言われたのは初めてだから、思わずにっこりと一笑した。家族と過ごすときにするような緩やかな笑みだった。

喜平次に従事する小姓の与六が主人をじいっと見つめている。

「だからと言って、いざいくさとなれば叩きのめしますが」

「当然のことです」

喜平次はもう一度、静かに笑った。顔を元に戻し、しばらく春日山城への道程を辿っていると、ふいに背中だけで言ってきた。

「我が軍の強さはあれです」

喜平次は前方の、分厚い雲間にそこだけ覗き込む赤い西日の下を指差した。指先には春日山の頂上があった。

「上杉不識庵」

「そんなことは赤子でも知っておりますよ」

と、言ったのは久太郎である。若い彼もまた、太郎と喜平次の武者振りに血気はやらされてしまったのかもしれない。

「不識庵公を支えている物を我らは知りたいのですから」

「何もわかっていないですな、尾張武者殿」

かっぽらかっぽらと馬の足音だけが広大な秋の野に飲み込まれる中で、喜平次は別人のように饒舌であった。

「おやかた様を支えている物はおやかた様自身。おやかた様は古来の定石も通用せぬ天才です。北条や武田の者ならいざ知らず、上杉のいくさを見たことのない貴公たちにはわかりますまい」
「竹中半兵衛という智将なら織田にもいます」
太郎がそう言った途端、今まで黙っていた与六がけらけらと笑い立てた。
「竹中半兵衛なんかとおやかた様を一緒にするなんて、貴方様たちはどれだけ身の程知らずなんですか！」
「与六、慎め」
喜平次にたしなめられて、与六は笑いを噛み殺しながらうつむく。
生意気な少年だなと太郎は思う一方で、彼らは自分たちに絶対的な自信を持っているのだとも思った。与六だけではなく、喜平次も。
天下に知れ渡っている鬼謀の半兵衛を一笑に伏せるなど、他の地では考えられないことだ。
不識庵のいくさ。それほどまでか。
春日山城の頂上に到着し、
「もしも、またどこかに出向きたいならば、拙者に申してくだされ」
喜平次は去っていったが、与六があとを追わず、主人の後ろ姿をぼんやりと見つめている。
「どうした、小僧。付いていかないのか」
久太郎が言うと、与六は太郎たちに振り返った。瞳が少年っぽくきらめいている。
「あんなにお喋りな喜平次様は見たことがありませんからね」
いちいち上から目線でそう言うと、与六は小走りに喜平次を追っていった。
太郎と久太郎は顔を見合わせて笑う。
居室に戻り、二人は今日見回った場所や状況なりを文字にしていった。
「東国の男というのは無骨なんでしょうかな」
久太郎が、自分たちは畿内を有する織田家の洗練された人間だと

いうことを少々勝ち誇るように言ったが、太郎はひそかに笑った。久太郎だって、その無骨な男たちに若干熱っぽくなっていたのだから。

「まあ、無骨かどうかはともかく」

太郎は笑みを消してから言う。

「不識庵に対する忠義は並々ならないですね。忠誠というよりも、信念を感じます」

「そうですなあ」

久太郎は筆を休めると、天井をぼんやりと見上げた。

「織田にあれだけ君主を信用している将がいるかどうか。正直、拙者はいくさという点ではあそこまでおやかた様を信じてはいませんよ。姉川では危なかったし、北伊勢では勝ちいくさをひっくり返されたし」

これだけの兵力があれば勝てる、というのと、自分たちは勝てる、というのとではまったく違う。不識庵の存在だけが上杉軍をそう信じさせているのだから、まこと神に近い。

「でも、我らはそんな連中に勝たなければいけないんですから、太郎殿には九郎義経にでもなってもらわなくちゃなりませんよ」

「それはさすがに――」

と、太郎は苦笑するが、

「いやいや、本当に」

と、久太郎は大真面目に視線を寄せてくる。

妙な危険を感じ取った太郎は、そういえば、と、あからさまに腰を上げた。

「馬の髪を解かしてあげなければ。さもないと、あの仔は機嫌が悪くなるのです」

そんなことは兵卒がやっていることを誰もがわかりきっているのに、久太郎から逃げた。

越後に足を踏み入れてからずっとすっきりしなかった空は、分厚い雲のところどころからまばゆい光が覗けるようになっていた。西

日を受けた黄赤の巨大なかたまりは一群となって悠然と秋空を流れている。

野は夕暮れの風にひときわ静かだったが、春日山から眺める雄大な景色は自分の存在をちっぽけに思わせつつ、大きな胸に抱かれるような安らぎも、太郎に与えた。

西の海から吹いてくる湿った風に太郎はしばらくの間打たれた。ふと弦の音が聞こえてきた。館から離れたところ、不識庵がこもっているとか言っていた堂からだった。

不識庵は琵琶もひくのか、と、太郎は興味がまさって音色のあるほうへそろそろと歩んでいく。

――ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。

［時は二月十八日、午後六時頃のことであったが、おりから北風が激しく吹いて、岸を打つ波も高かった。］

平家物語。那須与一の扇の的だった。静けさの風に乗るような美声であり、琵琶を打ちつける音も暮れなずむ空に吸い込まれていく。

――沖には平家、舟を一面に並べて見物す。陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴れならずといふことぞなき。与一目をふさいで、舟は、揺り上げられ揺り落とされ上下に漂っているので、

［竿の先の扇も、とまっていない。沖では平家が、海一面に舟を並べて見物している。陸では源氏が馬のくつわを連ねてこれを見守っている。どちらを見ても、とても晴れがましい光景である。与一は目をふさいで、］

太郎は堂を回って、庭先へと出た。長髪に髭むくの不識庵がたった一人、縁側に腰掛けて琵琶を手にしている。自らが奏でる歌の情

景に見入るようにして両の目をつむり、その向こうには雲を抜けてきた太陽が赤々としていた。

――南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を向かふべからず。いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせたまふな。

［南無八幡大菩薩、我が故郷の神々、日光の権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神、願わくは、あの扇の真ん中を射させて下さい。これを射損じたならば、弓を折り、自害して、再び人に会うことはできません。もう一度本国へ迎えようとお思いになるならば、この矢を外させないで下さい。」］

と、歌ったところで、不識庵はそっと瞼を開け、視線だけを子供みたいに突っ立っている太郎に向けてきた。太郎は思わず後ずさりしてしまったが、不識庵の眼差しは優しかった。

「そなた、聞きに来た客かい？」

軍神という異名がまったく似合わないほど、不識庵には西日が映えていた。

「は、はい」

「左様か。なら、そんなところに突っ立ってないで、ここに座りな」

不識庵は縁側を軽く叩いて促してきたが、とでもじゃないが恐れ多くて肩を並べて座れるはずがない。

「め、滅相もございませぬ」

「いいから。これを一粒くれてやるから」

不識庵は徳利の脇にある皿を滑り差し出してきた。盛られていたのは梅干しだった。

越後（漢・オトコ）

不識庵の歌う「扇の的」を太郎は地べたに座したままぼんやりと聴いた。

今から四百年も昔、一連の源平の戦いにおける一戦、屋島のいくさで、源氏方の武将、那須与一が平氏方の軍船に掲げられた扇の的を弓で射落とした。

夕暮れにいにしえの光景が浮かんでくるようである。打ち鳴らされる琵琶は波のさざめきに聞こえてきて、不識庵の高くうねる歌声がときの東国武者の生きようを表している。

やがて、演奏は終わった。冷たい風が落ち葉をはらりとさらっていく。

不識庵は琵琶を抱えたまま徳利の酒を碗に注ぎ込み、それをずずっと啜る。髭についた酒を舌でなめながら、梅干しを一粒、口の中に放り込んだ。

太郎はどうしたらいいものかわからずに、胡坐を組む不識庵の足だけに視線を据えているしかない。

その足の甲は石つぶてのようにごつごつとしていて、古傷だらけだ。

ぷっ、と、不識庵は梅干しの種を庭先に吹き飛ばした。そして、べべん、と弦が鳴らされて、太郎はふと顔を上げる。

不識庵は目尻に皺を寄せていた。

「そなたの父はまがうことなく左衛門尉だそうだね」

勝手に左衛門尉を名乗っているのではなく、朝廷から賜ったものなのだろうという意味らしい。

「さ、左様でございますが――」

太郎は戸惑った。牛太郎のことは越後の人間には一言も話していない。

「なにゆえ、それをご存知なのですか」

「知っているさ」
不識庵は傍らに琵琶を置くと、手に取った椀に口を寄せながら太郎を見つめてくる。
「簗田左衛門尉牛太郎政綱。そなたはその養子の左衛門太郎広正。手柄などあげたことはないと言っておったが、姉川や刀根坂ではずいぶんと奮戦したみたいじゃないか」
茶碗をひっくり返すようにして、がぶりと飲んだ。ふう、と、息を一つついたが、その顔は毛ほども酔っていない。
「父は金ヶ崎で功を立てて左衛門尉を賜ったそうだな」
和やかな夕暮れの庭にあって、太郎は戦慄に近い驚きを覚えてしまう。不識庵は北陸の大大名であり、天下一のいくさ人である。まさか、織田の一介の将の詳細を知り得ているはずがない。まして、昨日初めて顔を合わせたときは、太郎のことなど知っている様子もなかったのだ。
「そんなに驚くことかい」
太郎はこくりとうなずく。
「甘いね。簗左衛門」
胸を貫かれたようだった。驚愕だった。自分をそう呼ぶのは勘九郎信忠だけである。
いや、まさか。たまたまだ。よくあることだ。と、太郎はなんとか平精を取り戻そうとする。
「上総介は忍びを使うのを嫌うようだけど、いくさをするには諜報がなにより先決だよ」
不識庵は椀に酒を注ぎ、それを太郎に差し出しながら言った。
「全国津々浦々までとは言わなけれど、畿内はもちろん、押しも押されぬ織田の領内には当然ながら潜ませているよ」
「し、しかし、かといって、昨日までは拙者のことなど存じていなかったのでは」
「まあ、飲みなよ」
太郎は震える両手で椀を受け取った。ひとつ、椀の中の酒を見つ

めて、一気にあおった。
「ほら」
梅干しの皿も差し出された。胃袋を熱くさせたまま、太郎は頭をぺこりと下げて梅干しを一粒手にする。
かじると、ひどく塩辛くて、ひどく酸っぱかった。思わず顔をしかめてしまう。
「不識庵様自らの手で頂戴いただき、ありがたく存じます」
「そんな紋切り型の文句なんてどうだっていいんだよ。どうせ、辛かったんだろう」
太郎は一瞬たじろいだが、うなずいた。
不識庵が大笑いする。
「ちなみにそれは毒入りだよ」
「えっ！」
「嘘だよ」
ほうっと安堵の吐息をつく太郎。酒臭さも一緒に抜けてくる。
「そなたはやはりまだ若いなあ。姉川では奇策を用いて勢いのある浅井を混乱させたと聞いたが、まだまだ。喜次郎といい勝負だ」
「は、話を戻してもよろしいでしょうか」
「なにゆえ、そなたたち親子に詳しくなったかということかい？」
「左様で」
「聞いたからだよ。軒猿に」
そうして、軒猿とは上杉軍が抱える忍びの集団のことだと不識庵は言った。各所に放たれている軒猿は山伏たちと連動して絶えず越後の春日山に細かな情報を送り込んできており、
「これだけの網を構築したのは、わししかいないだろうね」
と、自画自賛するほど、将の分析、戦略立案に役立つそうで、ちょっと気になることがあれば、軒猿の頭目を春日山に寄越すだけでたいていのことは把握できるという。
「昨晩、そなたのことを教えてもらったよ。で、そなたがこれから先、我ら上杉をおびやかす将になるやもしれないということも教え

てもらった」
　不識庵は髭の下でにやりと笑った。
「ただし、それは未知だね」
　太郎は何も言えない。褒められたとかけなされたとかではなくて、一夜にして自分を知り得るぐらいの力を持っている不識庵が怖くなった。
「でも、そなたには上杉をおびやかすぐらいになってもらわなければ、わしは面白くない。織田にはわしを悩ませてくれるような人間がおらなそうだから」
「そ、そんなことありません」
　そう強く否定した太郎を見る不識庵は、高みからせせら笑っているような目だった。
「織田には羽柴藤吉郎という者もおりますし、明智十兵衛という者も。佐久間、柴田の両雄に、前田、佐々の母衣衆、拙者ぐらいの若い世代にも猛者はごろごろとおります。不識庵様は確かにお強いかもしれませんが、そう簡単に一敗地にまみれるほどやわな将ばかりではありません」
「左衛門太郎。残念ながら、今、列挙していった者たちが束になってもわしには適わないよ。なぜならわしは毘沙門天の生まれ変わりなのだから。たかが人が軍神には勝てぬのだよ」
　諭すように言ってくるから、まったくいやらしくない。だが、そこまで言われてしまっては黙っていられない。太郎にだって意地はある。織田の意地、今まで戦ってきた意地が。
「不識庵様が軍神なら、我らがおやかた様は魔王でございます。そして、魔王に仕える我らは修羅です。やってみなければわかりません」
「ははん」
　と、不識庵の瞳が輝いた。
「それでこそやり甲斐もある。ああ、そうそう。甲斐と言えば徳栄軒。あやつぐらいにわしを苦しめてくれれば、いくさの日も待ち遠

しいなあ」
「そんなに不識庵様はいくさを好まれるのですか」
「左様」
不識庵は梅干しを口の中に投げ込んだ。もぐもぐと動かして、ぷっ、と種を吹き飛ばす。
「ただね、わしも上総介やそなたたちは強いと思うけれど、わしはもっと強い。なぜかと言えば、強さというのは腕力でも知力でも兵力でもない。人々の信をどれだけ得ているかということだ。上杉の者ならず、わしと戦った者、戦った者でなくても、わしを強いと思っている。わしの強さに信を置いておる。それだけでわしは将として強大なのだ」
太郎はなぜか視線を落としてしまう。
「さらにわしは決して裏切らない。来る者は拒まない。人を裏切り、人を拒めば、わしの強さに傷がつくから。強さっていうのは絶対にしなければ強さじゃない。絶対じゃない強さはただの腕白。ところが一方で上総介はどうだい？」
太郎はただただ唇を押し込める。
「上総介はただの魔王だよ。わしには及ばない」
「そ。それならば――」
と、言葉を探しながらも、ごくりと唾を飲み込むと、太郎はひたむきな眼差しで不識庵を見上げた。
「どうすれば強くなれるのですか」
「言ったじゃないか。裏切らず、拒まないこと。それは他人だけではなく、自分自身もね」
太陽は姿をすっかり消した。残り火だけが雲を紫色に染めている。雲間に星が瞬き、風はいっそう冷たくなった。
「飲みな、簗左衛門」
うつむく太郎の前に碗が差し出されてきた。
「これは、ただの願望にすぎませんが、拙者は不識庵様に仕えたかったです」

「おいおい。駄目だな。もう、自分を拒んでいるじゃないか。そなたは織田の将だ。漢とは今置かれている立場の中で必死にもがき、血反吐を出しても、その立場の中で光明を見つけ出し、そして全力で男を立てる者のことを漢と言うんだ」

腕をぐいと伸ばして酒をすすめてくる不識庵の姿は、薄暗闇の中でひっそりと大きかった。

「わしも徳栄軒も血反吐を垂らしながらも自分を貫いてきたから、龍だ虎だと言われるようになったのさ。無論、上総介もそうだろうね。強いか強くないかは別として」

不識庵の言葉を受けて、太郎の脳裏に今までのことが渦になって蘇っては消えていき、蘇った。今までのはなんだったのだろう。自分はわりかし苦労してきたほうだった。しかし、不識庵に言われてしまって、今までのことは些末なこと、ただの空回り。

「わしがいくさを好むのは、自分の強さも弱さも己にはっきりと知らしめさせてくれるからだ」

一乗谷の焼き討ち、朝倉の女子供たちへの襲撃。断末魔の叫び声がまさに聞こえてきた。

自分は弱いんだ。

「そなたにいくさのいろはを教えてやれるほどの時間はないが、一つだけ教えてあげるよ。将を強くさせるのは宿敵の存在だ。宿敵との戦いが自分を磨かせる。わしも徳栄軒もそうして強くなった」

そう言って、酒を飲めと碗を出してくる。

「そなたが強くなってくれなければ面白くない。無論、酒もな」

自然、太郎は笑みをこぼした。碗を受け取ると、中身を一気に飲み干した。

しっちゃかめっちゃか

春日山城を訪れてから四日後、太郎と久太郎は岐阜への帰路についた。

ただ、上杉軍や一向一揆衆の状況、来るべき戦地の選定に、飛騨路は取らずに越中から加賀と隈なく歩き回り、そうして越前、北近江へと南下してきた。

岐阜に帰国したときにはすでに稲葉山は季節の風に色あせていて、天正元年という激動の年が暮れようとしていた。

「やっぱり、岐阜が一番落ち着きますよ」

長い旅で少々痩せこけたようにも見える久太郎が、安堵して笑った。

「今年の年末はゆっくりできそうですし」

北陸を歩き回っている間、太郎も久太郎も岐阜の上総介や自分たちの家族と文のやり取りを怠っていない。［牛太郎を除く］

無論、織田家の状況のある程度は把握している。といっても、初秋の伊勢の敗退以来、織田軍の出撃は河内若江城攻めだけで、金ヶ崎の退き口から始まった対包囲網にあれだけ忙しく各地を転戦し、常に岐阜に漂っていた物々しさも、各将の軍勢が一時の休息のために自領に戻っているおかげで、今は平穏に落ち着いている。

さて、年が明ければどうなってしまうのか、そんな考えは今だけは野暮だ。どちらにしろ、激しい日々がすぐにやって来るのだから、うがった考察などせずに与えられた休息を十分に満喫しなければ罰が当たるだろう。

そんな賑やかな空気が、冬の澄んだ岐阜の城下にはあった。

太郎と久太郎はまずは報告にと岐阜城に上がったが、上総介は不在だった。鷹狩りに出かけているらしい。

そういうことで報告は明朝とすることにし、久太郎と別れた太郎は久方ぶりに稲葉山の家路を辿った。

駒は父の顔を忘れていないだろうな。と、ちょっとだけ不安になりながら、黒連雀の口輪を引きつつ我が家の門前までやって来た。

いや、門前からちょっと離れたところ、坂の下り口で太郎は立ち止まった。

大声を上げて、何か揉めている。

門の下で一人平伏している半纏姿の中年の男がおり、それを取り囲むようにして栗之介、小姓の新三、篠木於松、それと二人見たことのない男たちと栗綱に跨った牛太郎がいる。

太郎は屋敷の前で人目も憚らず行われている揉めごとに割って入ろうとしたが、よく見てみると様子がおかしくてその足を止めた。

牛太郎と栗綱の姿がである。

牛太郎はなぜか陣羽織をまとっていて、それは一見すると漆黒の地の地味な物だったが、襟や袖口に細く走っている銀縁が輝いていて、太郎は眉をしかめる。陣羽織の下には胴丸だけを身に着けている。黒い袴に籠手も身に着けていて、兜は被っていない軽装であるが、織田のいくさは一休みという状況の中で、父の姿はどう見ても異様である。

さらには栗綱。顔、胸、尻に白銀の房が備えられている一方で、なぜかたてがみが丹念に三つ編みにされている。どころかあの黒漆の鞍まで背負っている。

正月はまだしばらくだというのに、なんなんだあの姿は。さては堺で散財したんだな。それで母上や家の者に自慢したいがために、あんな格好をしているのか。口うるさい息子はまだ帰ってこないと思って。

ぶつぶつと脳裏で呟いた太郎は、早速、門前に駆け寄った。

「だから、そこをどけっ！　おれはお前みたいなどこの馬の骨だかわかんねえ奴なんかに用はねえっ！　どかねえと踏み潰すぞっ！」

と、牛太郎が馬上から門前にひれ伏している男に罵っているところへ、

「何をしているのですか、父上っ！」

太郎は飛び入った。
「あ、た、太郎くん……。か、帰っていたのかい」
牛太郎は怒声を放っていたのもどこへやら、途端に愛想笑いを浮かべてくる。
「お、若。お前も今帰ってきたのか」
栗之介が太郎に歩み寄り、口輪を受け取りながら黒連雀の鼻面を撫でる。於松がひょこっと頭を軽く下げ、新三と見知らぬ男二人がいちいち丁寧に平伏した。
「若様っ！　お初にお目にかかります！　俺は宿屋七左衛門と申しまして、こいつは俺の弟の治郎助です！」
「宿屋七左衛門に治郎助ですか……」
「ししし」
と、於松が笑う横で、牛太郎が罵声を浴びせていた中年が唐突に太郎の足元に這い寄り、太郎の顔を見上げた。
「太郎！　俺は、おめえのおっかあの弟だ！　春日井児玉の弥次右衛門だ！　おめえも児玉の生まれだろ！　なあ！　この人に言ったって何も信じてくんねえんだよ！」
ふいに男から飛び出た驚愕の言葉に声をなくして立ちつくす太郎。
「だから、テメーはとっとと出てけや！」
と、牛太郎はいつになく軽快に栗綱から下馬してきて、自称太郎の叔父を突き飛ばし、柴田権六譲りの太刀を抜いた。
「もういっぺんそのデタラメ言ってみろ！　叩き斬ってやる！」
「でたらめなんかじゃねえよお！　本当だってば！」
「この野郎お。おいっ！　格さん！　助さん！　この不届き者を取っちめてやりなさい！」
すると、宿屋七左衛門、治郎助と名乗ったはずの屈強な若者二人が、牛太郎の声に機敏に立ち上がり、自称叔父の両脇を抱えて引きずり上げた。
「やめてくれ！　本当なんだ！　太郎！」
「ししし。こういう騙る野郎っていうのは長良川に沈めちまったほ

うがいいですよ、旦那」
「そうだ。よし。沈めろ沈めろ！」
「長良川より木曽川のほうがいいのではないですか？」
新三があどけない顔してそう言うと、
「そうだ。よし。木曽川まで連行しろ！」
と、牛太郎がまるで野盗の親分みたいに大声を上げる。
若者たちに掴まれてあえぐばかりの自称叔父を前に、太郎はまったく整理ができなくて、何もできない。宿屋兄弟という新たな家臣もそうだし、突然現れた正体不明の男の真偽もそうだし、牛太郎の散財のことも叱りたいしで、何から手に付けていいものかわからない。
いや、まずは、この男の真偽のほどなのだが、それを明らかにする手立てはなかった。
突然、自分の前に現れた丹羽五郎左衛門の招介で沓掛城主となった牛太郎の小姓になる八歳まで、太郎は確かに尾張春日井群の児玉というところで実母と二人慎ましく暮らしていたが、親族というのものには会ったためしもなかった。
幼年時代のことは曖昧な記憶であるし、実母の姿はひっそりとした思い出に留め置きたいので、自分の生い立ちなどは無理に調べないようにしている。
だから、自称叔父などにはあまり関わり合いたくない。むしろ、牛太郎が一方的に怒り狂っているのも理解できた。天涯孤独の身から織田の侍大将に出世した自分に取り入ろうとして、こういう男が現れてきてもおかしくないからだ。
「太郎！　頼むよお！」
「気安く呼んでんじゃねえ！　この不良野郎！　本当に殺すからな、おら！」
殺生を好まない牛太郎がいつになく激怒しており、抜き身の太刀を握ったまま、男の腹を蹴飛ばした。
「何をやっておるんじゃっ！」

門から梓がつかつかと出てきた。いつのまにか、玄関には家の女たちが出てきていて、抜刀騒ぎに恐々とした顔でいるが、梓だけは鬼の形相でいて、一瞬にして青ざめた牛太郎から太刀を奪い取り、それを放り捨てると、牛太郎の頬を平手で打った。

「門前で太刀を抜くとは何事じゃっ！　いい加減にせいっ！」

「い、いや、梓殿。これには訳が……」

「訳も何も家の前を血に染めるつもりか！」

豪華な陣羽織もむなしく牛太郎はしゅんとうなだれて、梓が宿屋兄弟と自称叔父に睨みをきかす。兄弟は梓の鬼の形相に怯んでしまって手を離し、自称叔父はへなへなと座り込んで、挙げ句にしくしくと泣き出した。

於松はにたにたと笑っており、栗之介は黒連雀と栗綱を連れて庭先へ入っていってしまい、新三も素知らぬ振りでそのあとに付いていった。

「お主たち、何者じゃ」

宿屋兄弟はあわてて平伏し、自分たちは新たに牛太郎の家来となった者だと名乗る。

「そうなのか、亭主殿」

「は、はいっ！　そうですっ！」

「この者もか」

と、梓は泣き出している男を差した。

「いいえ！　こいつはただの騙り野郎です！」

「違うっ！　本当なんだっ！　俺は太郎の親の弟なんだ！」

途端、梓の鬼の形相は曇った。唇を固く引き結びながらじっと男を見つめたあと、その顔を太郎に向けてくる。

「そうなのか、太郎」

「わかりませぬ」

どうしたらいいのかも。

さかのぼること一カ月前

さかのぼること一カ月前――。

織田軍が若江城を攻略し、松永弾正忠帰参の許しも上総介から得たことでようやく信貴山城の軟禁生活から介抱された牛太郎は、一度、京の相国寺に戻ったあと、摂津高槻城の高山飛騨守と茨木城の荒木信濃守に顔を見せ、その後に堺に入った。

「高槻でおかしなことがあったんスけど」

と、とと屋に押しかけた牛太郎は、田中宗易の点てた茶を頂戴したあと、そう言った。

「飛騨守の息子の右近助とかいう奴は死んだって聞いたんですけど、なんか、いたんですよね。息子みたいなのが」

「右近助様は死の淵から生還したそうですよ」

牛太郎が飲み干した茶碗に湯を打ちながら、宗易は穏やかな顔だった。

「殺傷騒ぎのあの件で、見舞った太刀は首の骨まで達していたそうですが、見事に蘇生されたそうで。以来、キリシタンへの信仰心もより強くなったとか」

「ふーん」

牛太郎は興味なさげに喉を鳴らしたが、新七の奴、仕留めそこなったのか、と、胸中穏やかではなかった。高山右近助の暗殺は牛太郎が命じたわけではないが、邪魔者らしいので新七が勝手に殺そうとした。

ただ、それが仕留めそこなったとなり、もしも、自分を殺しにかかったのが新七だと把握していたらうまくない。

もっとも、新七は扮装していたから、今の禿げ頭を見ても右近助はわからないだろうけれど。

そんなことより、牛太郎がとと屋に押しかけたのは、馬を買いたいからであった。

「馬なら栗綱という名馬をお持ちではないですか」
「いや、栗綱の奥さんが欲しいんですよ」
宗易はやや唖然とした。牛太郎はよく宗易にありとあらゆる注文をするが、それがいつも突拍子がないので、宗易はまたかといった調子で苦笑する。
「馬の奥方ですか」
「別に嫌ならいいんスけどね」
宗易に対して牛太郎は毎度この調子である。宗易はがさつな将たちに茶の手ほどきをする織田お抱えの茶頭で、家臣たちに教養を身に着けさせたい上総介に結構な地位を与えられているのだが、牛太郎は初めて会ったときに宗易を怒鳴り散らした経緯があるので、以来、この男には強気である。
宗易も宗易で牛太郎は一度言い出したら聞く耳を持たないことを知っているので、呆れつつも牛太郎に馬喰を紹介した。
翌日、牛太郎は中島四郎次郎と共に馬喰に会いに行き、注文をつけた。色は栗毛で、性格は赤子でも跨ぐことのできるおとなしさ。それがあれば、あとはどうでもいい、と。
馬喰は早速木曽の馬産地で見つけて来ると言ってきたので、だったら、春までに岐阜に持ってこいということで前金を払って牛太郎と四郎次郎は引き上げた。
「いいんスか？　栗之介殿に無断で」
四郎次郎は終始、それを心配していたが、牛太郎は一蹴する。
「別にいいだろうが。無断も何も、おれの買い物なんだからいいだろうが。馬鹿か、お前は」
「変な馬、つかまされなければいいんスけどね」
「お前に言われたくねえよ！」
そして、翌日には、彩を連れて甲冑をこしらえに出かけた。前田又左衛門の烏帽子兜を見て以来、欲しくなってしまっていた。
「いいんですか、旦那様。若君に言われますよ。どこからそんな金銭が出たんだって」

彩は終始、それを心配していたが、牛太郎は途中で呉服屋に立ち寄って、彩にたくさんの反物を買ってやり、願わくはその中で一度着たものの一着をくれてほしいと言ってみた。

「それは無理です」

一蹴された牛太郎は、とぼとぼと呉服屋をあとにしようとしたが、反物を見ていたら藤吉郎が自慢していた陣羽織を思い出して引き返した。店の番頭にああせいこうせいといちいち注文をつけたあと、店を出た。

その後、織田家の御用商人で茶頭でもある今井彦右衛門宗久を訪ね、甲冑販売もしている彼に、馬の乗り降りに支障のない軽い鎧はないかと相談してみた。

「ありませんな」

たまには天啓ひらめくごとく発案をしてくる牛太郎だが、たいてい言い出すことはいつも荒唐無稽なものだと宗久はわかっているので、畿内の利権の大半を牛耳る豪商らしくふてぶてしい顔でにべもなく牛太郎を一蹴した。

「そんなことよりも、そろそろ火縄銃をご購入しませんか。近頃、築田殿の軍勢は兵数が増えてきていると耳にしますがね」

絡みつくような視線で頬に笑みを浮かべる宗久に、牛太郎は頭を掻いてごまかすと、何の成果も得られずに屋敷をあとにした。

「クソッ。強欲商人めっ」

「旦那様、だったら、胴丸だけを身に着ければいいのではないですか」

「？」

牛太郎はよくわかっていない。

「旦那様は今まで綱しか巻いてこなかったのですから、そこまで防具にこだわる必要はないのではないですか」

言えている、と、牛太郎は空を仰ぎながらこれまでの戦場を思い出す。身の危険を感じたときというのは、たいがい栗綱から落ちているときで、落馬さえしなければ栗綱が守ってくれる。

いや、そもそも、今後、いくさの最前線に出るつもりは毛頭ない。無様な姿を晒したくないというわけで、重い甲冑を着込んで自分一人では栗綱に跨れないばかりに、周りの者たちにえっちらおっちらと担がれたくないだけだ。

「じゃあ、そうしよう」

彩の助言により牛太郎は宗久の屋敷に引き返そうとしたが、なんだか、あの顔を見たくないので二日連続でとと屋に向かった。

畿内の情勢はわりと落ち着きを取り戻しているので、倉庫業のとと屋も繁盛していた。ふんどし一丁の荷役たちが忙しく動き回っており、馴染みの番頭も帳面片手に声を張り上げている。

「あ、彩さん」

牛太郎と彩がとと屋の庭先に回ろうとしたところで声をかけてきたのは、四郎次郎が営む水運業の船で水夫として働いている助次郎だった。

下は藍染めの股引、上は尻切り半纏一枚だけを羽織っており、巻きつけたさらしの上には胸板が盛り上がっている。水玉模様の手拭いを小粋な前結びで頭に巻いており、まあ、まばゆいほどの男だった。

二十歳である。元々はとと屋の荷役で次郎と名乗っていたが、兄の太郎とともに牛太郎に、兄は格太郎、この弟は助次郎と名を与えられ、以降、宗易の薦めもあって、兄弟は牛太郎が裏で糸を引く四郎次郎の水運業の船乗りとなった。

「なんだよ、お前」

牛太郎は助次郎を警戒している。

「何を油売ってやがるんだ」

牛太郎が娘と思って可愛がっている彩に、助次郎が心を寄せていることを牛太郎は知っている。なので、一度は彼ら兄弟を自分の従者にしたものの、それを知ってからは遠ざけている。

「ち、違います、旦那様。下ろした荷を運びに来ただけです」

牛太郎の配下にある人間の中で、助次郎は珍しく素直な性格であ

る。意地の悪い牛太郎の言葉にも、好青年らしい焦りを表す。ただし、助次郎に限って、牛太郎はそれが嫌なのだ。

「だったら、さっさと仕事しろ！」

理不尽な牛太郎の怒声に若干の不満を眉根に見せながらも、助次郎は頭を下げて走り去っていた。

「急にどうしてですか。あんまりじゃないですか」

彩が少々目を大きくして怒っている。

「あんまりでもなんでもない。おれはああいうふうに仕事中に女に声をかけてくる軟派な野郎なんてのは大嫌いなんだ。だいたい、おれに先に挨拶しないで、あ☆、彩さん☆、なんだよ。おかしいだろ」

「それはそうかもしれませんが、助さんは毎日一生懸命励んでいますよ」

「なに？」

むすくれた顔で見上げてくる彩に牛太郎は瞳をてらてらと燃え上がらせる。

「助さんだと？」

最低でも、助次郎と彩は顔を合わせれば会話をするぐらいの仲ということなのだろう。

裏を返せば、そこまで親密ではない。が、このまま放っておくと、以前に、自分も殿方に心を寄せてみたいなどと言い放っていた彩が、好青年の助次郎に奪われてしまう可能性は非常に高い。

だいいちに、牛太郎は堺に居座れない。常に監視の目を置けない。四郎次郎にそれを命じたところで当てにならないし。

ならば、助次郎には消えてもらおう。

宗易は出払っていたが、今しばらく待てば帰宅するらしいので、牛太郎と彩は差し出された煎茶をすすりながら宗易の帰りを待つ。

その間、牛太郎の脳裏には策と謀が螺旋のうねりのようにめまぐるしく働く。違う船乗りに金品を与えて、航行中に海へ突き落させてしまうか。それとも、四郎次郎から金品を盗み出し、それを理由に四郎次郎を追い込んで、どうせ四郎次郎は盗まれたのだと責任転

嫁するだろうから、どさくさに紛れて助次郎に罪を被せてしまうか。

「やっぱり、とと屋様がお出しになられる茶はおいしいですね」

湯呑みを小さな手に抱えてにっこりと笑う彩。さゆりにこき使われていたときの鋭さはすっかり抜け落ちて、団子茶屋の看板娘らしい愛らしさだった。

牛太郎は微笑み返したあとに、ひそかに拳を握り締める。彩を絶対に男の手に触れさせたくない。

ただ、彩が実に可愛らしいように、助次郎も簗田一派とは考えられないほどの好青年である。冷静に考えればそんな青年を殺してしまうのは非常に惜しいし、さすがの牛太郎も愛情とは言えない独占欲だけで一人の若者を追い落とすのは気が引けた。

でも、彩には触れられたくない。

「あ」

と、牛太郎は思いついて声を上げた。彩が不思議そうに首を傾げる。

おれの直属の家来にして堺から切り離しちまえばいいんだ。

思い立ったら猪突のごとく動き出すのも牛太郎で、帰ってきた宗易に甲冑師を手配してくれるよう頼むと、彩を先に帰らせて船着き場にさっさと出向き、四郎次郎を呼びつけた。

「格太郎と助次郎は今日で上がりだ。おれの家来にさせる」

「えっ！　なんでスか！　格と助はあっしには欠かせない者たちッスよ！」

「お前の下にはいっぱい船乗りがいんだろうが！　おれには家来がジジイしかいなくて、新七は沓掛行っているか太郎に付きっきりだし、他には生意気な小姓と馬丁だけなんだぞ！　お前の我がままに付き合ってられるか！」

「そんなあ。今更、それはないッスよお。さゆりちゃんを呼び戻せばいいじゃないッスかあ」

「うるせえ！　言うことがきけないんだったら、クビにするからな！」

何かにつけて反抗する四郎次郎をねじ伏せると、その晩には格太郎助次郎兄弟を屋敷に呼び、自分の従者になって、ゆくゆくは与力にしてやるからという心にも思っていない言葉で釣り上げ、武者に憧れていた兄弟も喜んで牛太郎の配下になると言った。

許されない存在

新たに格助兄弟を従えた牛太郎は、岐阜への帰路を辿る。すると、途中、南近江で取った宿で、兄の格太郎は突然言い出した。

「旦那様。武士になるんなら、名を変えたいんですが」

主人から貰った名を変えたいなどと無礼ではあるが、格太郎は助次郎と違ってわりと図々しいほうだったし、牛太郎も名のどうのこうのはあまりわからないので好きにさせた。

「じゃあ、俺は今日から七左衛門で」

と、前から用意していたような素早さだ。

「お前も変えろよ」

そう兄に促された助次郎だったが、難しい顔をして首を傾げた。

「しかし、せっかく旦那様に頂いた名だし」

兄とは違って律儀な助次郎に、牛太郎は瞳を輝かせながら笑みを浮かべる。

「だったら助平郎にしたらどうだ」

「そ、それはあんまりじゃないですか、旦那様」

「似合いじゃんか」

どこまでも助次郎に嫉妬している牛太郎。見る者によっては冗談とも本気ともつかない愉快そうな顔であった。

「どうして、俺が助平なのか、わかりません……」

助次郎は理不尽を理不尽と理解できない好青年である。泣き出しそうな顔でうつむいてしまっている。それを見兼ねたのか、ただのでしゃばりなのか、黙って眺めていた新三が口を挟んできた。

「治郎助というのはいかがでしょうか？」

「はあ？」

牛太郎はただのでしゃばりだと見た。

「なんだ、お前。偉そうに言い出したと思ったら反対にしただけじゃんか」

せせら笑う牛太郎に新三はむきになって詰め寄ってくる。
「違いますよ！　頭の次を治めるの治に変えていますよ！」
「フン。ガキが考えそうなことだ。もうちょっと格好いい名前を付けてやったらどうだ」
「そこまでおっしゃるならば、殿のお考えを聞かせてくださいよ」
「ふむ。助平郎だな」
助次郎は大きな溜め息をついた。
「もういいです。治郎助で」
結局そうなった。無論、牛太郎はこの兄弟を七左衛門、治郎助などと呼ぶ気はさらさらない。
「姓はどうすんですかね、旦那」
にたにたと笑いながら於松が言ってくる。
「姓も決めています。宿屋です」
兄の七左衛門の言葉に、牛太郎は一瞬、声を失ってしまった。そのあと、鼻で笑った。
「宿屋はないだろ。宿屋は。シロジロだって一応は中島だぞ。本気で言ってるのかよ」
「はい。俺も弟も元は摂津の木賃宿の倅ですから。いくさのあおりを食らって焼けてしまいましたけど。オヤジもおふくろも死んじゃって」
「そ、そっか」
いろいろと忸怩たるものがあるらしいが、深いところまでは聞かないことにした。
身の上をあまり知ってしまうと、彼ら兄弟、特に治郎助に感情移入してしまう。それならば彩と一緒にさせて幸せにさせてやろうかなどと思ってしまわなくもない自分もいる。
それよりも、太郎やあいり、さゆりや新七郎、彩といい、どうして親を喪った若者ばかりが集まって来るのだろう。齢も皆揃って二十前後。
もっとも、太郎以外の皆はすべて戦乱の被害を受けた上でのこと

で、それだけ今の時代というのは業に満ち溢れている。
高貴な身分の茶々や初、江にだって父親はいなく、一歩遅れれば母親でさえ喪いそうだったのだし。
いや、そのことはもうやめよう。
「お前ぐらいだな」
と、牛太郎は岐阜への道すがら、馬上から新三に言った。
「何がですか？」
きょとんとした表情が似合う丸顔だ。
「いや、なんでもない」
生意気ででしゃばりな少年だが、岐阜を出てから今まで、屁理屈めいた逃げ口上は言うものの弱音はあまり吐かない。むしろ、体質的に辛さの感覚がないのかもしれない。信貴山城に軟禁されていたのは新三も同じことであったが、それに対しての不平不満はまったくなかった。
生意気さとでしゃばりさが抜ければ、使える人間になるかもしれないと牛太郎はちょっとだけ思った。
牛太郎一行はのんびりと東進していき、岐阜を目前にした大垣でも一泊した。
「さてと」
寝床から覚めた牛太郎は腰を上げると栗之介を呼び出し、堺でこしらえた胴丸や陣羽織を荷物から取り出すよう命じた。それと、栗綱に黒漆の鞍を背負わせるよう申しつける。
「何を考えてんだか……」
とは言ったものの、栗之介は理由をいちいち訊ねなかった。主人の牛太郎との付き合いもだいぶ長くなってきて、だいたいはわかっていた。
牛太郎も栗之介のぼやきにいちいち反応しない。
真新しい陣羽織をまとって颯爽と現れた牛太郎に、一行の者どもたちは驚き、やがては表情を強張らせた。
「だ、旦那様。まさか、出陣なのですか」

治郎助の声が緊張に震える。
「そんな訳ないだろうが。出陣だったら、お前らにも準備させるわ」
「じゃあ、なんで」
「凱旋帰国だ」
さも当然のことのように胸を張り上げる。
者どもの顔つきは苦笑に引きつった。ただし、七左衛門は違った。
この男だけには海原を駆け抜けてきた船乗りらしい見栄が染みついているらしく、鳶色の瞳をきらきらと輝かせて牛太郎に憧憬の眼差しを注ぎ込むと、
「だったらもっと洒落込みましょうよ！」
と、張り切り始めて、しばらく待ってくれるよう言い残すとどこかへ駆け出していった。
首を傾げ傾げ一同は七左衛門の戻りを待っていると、だいぶ待たされていったんは宿の中に引き上げたのち、七左衛門が一人の男を連れて戻って来た。
連れてきた男は風呂敷に包まれた箱を携えている。七左衛門は箱の中身をどうだと言わんばかりに牛太郎に見せてくる。中身は銀色の房だった。
「ははあ」
牛太郎はにたりと笑った。騎馬装束である。牛太郎は武田の赤備えを目の当たりにしているので、すぐにわかった。すぐに銭を払った。
他の者どもが呆れて眺めるだけの中、牛太郎と七左衛門の二人はぼんやりとしている栗綱にせっせと房を着けさせていき、しまいには七左衛門の提案で栗綱のたてがみを一束一束にして三つ編みに結んでいった。
上機嫌な牛太郎を筆頭に、一行は岐阜へ入った。
「若に見つかったらどやされるぞ」
栗之介がそう言ったが、
「大丈夫だ」

と、牛太郎は屁とも思わなかった。
なぜなら、軟禁から解放されたあとの堺でくつろいでいる間、頻繁に梓と文のやり取りを行っており、北陸に出向いている太郎の戻りが伸び伸びになっていることを把握していた。
うるさい奴はいない。
おそらく、今までの中でもっとも我が家が恋しい帰参であったろう。
が、稲葉山の屋敷の門前で牛太郎の戻りを待ち望んでいたのは、物乞いだった。
「誰だ、お前」
牛太郎の機嫌は一挙に冷めてしまう。従えている一同も栗之介以外は新参だから、なんとなく主人の様子を眺めるだけである。
「お、俺は春日井児玉の弥次右衛門」
牛太郎は眉をしかめた。身なりは牛太郎の普段着のような半纏股引で、しかも薄汚れているし、頬骨が浮き上がった痩せぎすの浅黒い肌、言葉づかいは無礼を通り越して、自分でも何を喋っていいのかわからないといった調子のたどたどしさ。いかにも百姓、いや、百姓に雇われている農奴だった。
「ヤジエモンだと？　知らねえよ、テメーみてえなのは。どけっ」
「違うっ！　お、俺は太郎のおっかあの弟なんだ」
牛太郎の表情は固まった。
「た、太郎にお願いが」
「旦那」
栗之介が振り向いてきて言う。
「構っちゃいけねえよ」
「わかってるよ。おい、格さん助さん。こいつをどかしなさい」
牛太郎の命に七左衛門と治郎助は歩み出したが、弥次右衛門とやらが大声を張り上げてくる。
「違うんだ！　本当なんだ！　嘘みてえなこと言ってっかもしんねえけど、本当なんだ！」

「黙れっ！　だったら、テメーが太郎の親戚だっていう証拠はあんのか！」

「そ、それは、ね、ねえけど」

男があまりにも朴訥すぎて、ただの騙りではないかもしれないと牛太郎は不安になった。

太郎は丹羽五郎左衛門長秀が町娘に産ませた子である。

牛太郎はそれを知っているが、太郎は知らない。家族も知らない。織田の人間でも知っている者はいないのではないか。

牛太郎が十年以上も秘匿し続けてきたことだ。

もしかしたら、この男が本当に太郎の叔父であった場合、真実を知っている可能性は高い。

だから、太郎に会わせることは許されられない。

もし、丹羽五郎左衛門の子であると太郎が知ってしまった場合、一心不乱にここまでやって来た太郎のすべてが崩れてしまう。

牛太郎は思った。こいつを殺してしまおうと。しかし、門前を血で汚すわけにはいかないので、一度追い出して、新七郎に仕留めさせる。

どうせ、こんな人間が死んだとしても、行方知れずで片付くに違いない。

だが、予想に反して太郎が戻ってきてしまったのだった。

是非に及ばず

天涯孤独であったはずの左衛門太郎に血縁者がいる。

簗田家は屋敷をひっくり返すような大騒ぎ、ではなく、皆、口数を少なくして、素知らぬ振りをしなければならない、しかし、一方で身を切り刻まれるような耐え難い苦渋に襲われる。

一度は弥次右衛門を殺そうと考えた牛太郎であったが、太郎に出くわされてしまったのと、梓に割って入られてしまったのもあって、どう決着をつければいいか苦悩し、とりあえずは屋敷には入れたくないので、「今晩、話を聞いてやる」と、男を城下の願福寺に向かわせた。

陣羽織も胴丸も脱ぎ捨てて、普段着の半纏に戻った牛太郎は、自室で梓と二人、男の処置のしようを決めかねていた。

太郎はいない。

「拙者には親族なんておりません。父上と母上、妻と娘、それにこの家の者、拙者の家族はそれだけです。ただ、拙者にはあの方を追い出すこともどうすることもできません。何かすれば、それを知った家中の人たちが情け知らずと噂してしまいますから。だから、処置は父上の一存に委ねます」

つまり、追い出せということなのだろう。

「気丈には振る舞っておったが」

梓にいつもの勝ち気さはなく、ただ視線を落としている。

「血縁者がいないのといるのとではまったく違うものじゃ」

「でも、あいつが本当に太郎の親戚かはわからないッスよ」

「しかし、もしも本当に縁者であったら、あの者はきっと村に戻って言いふらすに違いない。にべもなく断られたと。そうでもしたら、太郎の評判は落ちてしまうではないか」

だから、殺す。とは、言えない。梓がそうしたことを許すはずがない。

力ずくでも早々と引きずり剥がすべきだったと牛太郎は悔やんだ。梓や太郎に見られなければ、摂津工作でそうしたように誰にも知られずに手を汚せられるのである。

どうしたらいいものか。

もしも、騙りであったら、どうせ意地汚い男であろうから、簗田左衛門太郎は非情だと騒ぎ立てる。騙りであったら目的は金銭だろう。はした金でもくれてやって黙らせておき、しばらくはむしり取られるかもしれないが、逆にそれを逆手にとって堂々と処罰してしまえばいいのかもしれない。

もしも、言っていることが本当であれば――。

厄介である。

目的は何か。無論、それでも金銭かもしれないし、親族を手玉にして仕官する狙いなのかもしれない。ただ、そうした野心がまったくない男という可能性も無きにしも非ずで、ただ単に太郎に用事があるのか、何か伝えたいことがあるだけの来訪かもしれない。

これが太郎でなければこんなには悩まないだろう。追い出すか、雇ってしまうか、それだけの選択で構わない。実際、簗田家は慢性的に人手不足なのだから、この戦国乱世に人間性もへったくれもなく、ただの人手として雇ってしまえばよいのだ。

しかし、太郎は目も当てられない宿命を抱えて生きているのだ。まして、その宿命を本人が存じていないという仕打ち。

「ただ、亭主殿。太郎の気持ちもあるであろうが、このさい雇い抱えてしまうのも手ではないのか」

梓は知らないからそう言う。牛太郎は長々と溜め息をついた。その仕草を梓は馬鹿にされたと勘違いしてしまったらしく、眉尻を吊り上げてきた。

「わらわが何かおかしなことを申したかっ」

「ち、違うんです。こ、これには深い訳が、ふかーい訳がありまして」

牛太郎は仕方ないと思った。井戸端会議に余念がない梓だが、決

して口が軽いわけではないし、大丈夫だろう。
「実は、太郎は――」
牛太郎は辺りをきょろきょろと見回し、於松が窓の外にいるかもしれないので、梓の耳に口を近づけた。
「丹羽五郎左殿の隠し子なんです」
梓はゆっくりと牛太郎に顔を向けてきたが、何か言おうとして開けた口をそのままにして固まった。
「これを知っているのは多分、あっしと竹中半兵衛、もちろん五郎左殿もそうですけど、他には信長様も知っているかどうか。太郎は――、知りません」
「嘘じゃ」
「嘘じゃありません」
牛太郎は瞼をきつく細め、現実を受け入れられない梓を見つめる。
「嘘じゃ」
梓の瞼にはみるみるうちに涙が溜まってくる。そう。辛い。
「五郎左殿はあっしがそのことを知らないと思っています。だから、五郎左殿はあいりんを二つ返事で養女にしてくれたんです」
はっ、と、梓は瞼を大きく広げた。彼女もすべての合点が一致できたようだった。
牛太郎は、太郎が自分の小姓になったときから竹中半兵衛の仲介で養子縁組してまでのことをすべて梓に話した。
なぜ、町娘の子でしかなかった子供が、桶狭間で勲功第一の手柄を得た武将の小姓に突然なれたのか、なぜ、五郎左衛門は忙しい身を削ってまで沓掛の政務を見てくれたのか。
それはすべて息子のためなのである。
「それを太郎は知らぬというのか。気が付いてもいないというのか」
「多分、ちっとも気付いてないッス。考えたくないんでしょう。本当の父親が誰かなんて」
例えば、織田軍が延暦寺など一連の虐殺劇を繰り広げたとき、雑兵たちはここぞとばかりに女を犯した。そうしたいくさの中での強

姦は織田軍だけの話ではなく、むしろ、敵領地の焼き討ちでは当然のことのように行われているので、もしかしたら太郎も、そういうところから生命を宿されたと思っているのかもしれず、そうすればあまり考えたくはない。

「しかし、よりにもよって」

「だから、どうすればいいかわからないんスよ。おいそれとあいつ雇えないんスよ。もしも、あいつがそれを知っていたら、太郎はおかしくなっちゃいますよ」

「そうじゃな」

梓はがっくりとおかっぱ頭を垂らし、溜め息をついた。鬼梓の片鱗もなかった。

夫婦は沈黙した。子のない彼らにとって、太郎は養子と言えども、たった一人の子である。梓は梓で、実の親子ではないひずみが生じて涙ながらに太郎と言い争ったことがあるほど、梓にとって太郎は子なのであり、牛太郎は牛太郎でそれこそ今の新三よりも小さかったときの太郎を知っているのだ。そこから梓を迎え入れるまではずっと、罵り合いを絶やさないながらも二人三脚でここまでやって来たのだ。

うるさくてやかましくて自我ばかりが強い子だが、今でも鮮明に覚えている。右も左もわからずにただ幼かっただけの太郎が、牛太郎を「殿様」と愛らしい顔を不安げにさせながら見上げてきたときのことを。

ああ、そうか。それを考えると、あいつも立派になったな。

「梓殿」

牛太郎は呟きながらも、尖った眼差しを梓に上げた。

「太郎のためだと思って許してください」

いつにない牛太郎の厳しい顔つきに梓は戸惑った。おそらく、彼女は牛太郎のこんな顔を見たことがない。

「な、何をじゃ」

自然、声は女らしく震えている。

「今回ばかりは目を瞑ってください」
牛太郎は梓に暗い視線を据えたまま、傍らに置いておいた太刀の鞘を握り締めた。鍔が、かちゃ、と鳴った。
「だ、駄目じゃ。そんな真似は駄目じゃ」
鬼梓の目が泳いでいる。
「是非に及ばず」
摂津で培った、梓の知らない謀略家の凄味を見せつけて彼女に声を失わせた牛太郎は、太刀を手にして腰を上げると、人が変わったように女房に一礼を残して部屋を出た。
真正面を睨み据えながらずかずかと縁側を行く。岐阜を出るときには色どり豊かだった庭先の草木もすっかり枯れている。
梓は追ってこない。
「ししし」
於松が庭先で背骨を曲げながら笑っている。どうせ、盗み耳を立てていたのだろう。
「行くぞ、ジジイ」
「いやあ、旦那といると本当に飽きないですねえ」
広間まで来ると、初めての岐阜なのに待ちぼうけを食らわされている宿屋兄弟に、付いてこいと顎をしゃくった。兄弟はなんのことなのかわからない様子だったが、牛太郎の気配が変貌してしまっているので、黙って立ち上がった。
屋敷を出ると、稲葉山を下りる。
牛太郎の算段はこうだった。とりあえず、目的を知っておかないと、もしかしたら裏で動いている人間がいないとも限らないので、話は聞いてやる。一通り聞いたところで、格助兄弟の力でさらってしまう。於松に警戒させながら夜道をかいくぐって木曽川まで行く。そこで斬り殺して、死体を川に流す。
願福寺に向かう牛太郎の額には汗が噴き出していた。自らの手で人を殺めるのはこれが初めてである。いくさでもない。使ったのはせいぜい栗綱の脚である。

そんな自分に殺人ができるか。
いや、殺す。絶対に。

一行は無言のまま、願福寺に到着した。男は痩せぎすの体を門前の柱にもたせかけていて、しなびた干物のようだった。
「あ、あ、た、太郎は」
「話を聞いてやる。来い」
門をくぐり本堂を訪ねると、掃除をしていた小坊主に一室を借り受けたいと申し出た。たかが小坊主でも簗田家に世話になっていることぐらいは把握しているので、住職に取り次ぐような真似もせずにすんなりと部屋まで導いた。
「それでは、ごゆっくりと」
小坊主が下がると、牛太郎は
「入れ」
と、男に睨みをきかせた。その威圧感に怯えを見せながらも弥次右衛門は恐々として部屋に入り、牛太郎は太刀と脇差を外して宿屋兄弟に渡す。
「お前らは外で待っていろ」
「いつでも呼んでくだせえよ、ししし」
於松の危ない笑みから顔を背けると、戸を閉め、牛太郎は男と差し向かって座った。
「用件を聞いてやる。太郎に会いに来た目的はなんだ」
「お、俺は本当に嘘なんか言ってねえ」
「用件を言えっ！」
弥次右衛門は肩をびくりと震わせると、背中を縮こまらせながら牛太郎を見た。
「よ、用件って言うほどのもんじゃねえ。た、太郎に助けてもらいたくて」
「どういうことだ」

「そ、その、なんて言えばいいのか、お、俺っちはすげえ貧乏で」
「銭か」
男は鶏がらのような首でこくりとうなずく。牛太郎は震える手を握り締めておさえた。
「下衆野郎」
「ち、違うんだ！　俺も、俺っちも、やっぱり、そんなことはしたくねえんだけど、でも、もう、どうしたらいいかわかんなくて」
すると、男はうっうっと嗚咽を漏らし始めた。
「俺も、今まで太郎のことなんか面倒見なかったのに、いまさらこんなことしちゃ駄目だってわかってんだ。でも、でも、どうしたら、どうしたら」
「泣き脅しは通用しねえぞ、カス」
しまいに男は突っ伏してしまう。
「堪忍してくれえ。太郎に会わせてくれえ」
「だいたいな、テメーが太郎の叔父だっていう証拠なんかねえんだぞ。太郎だってそんなのがいたなんて知らなかったんだからな。てことは、テメーは太郎に一度も会ったことねえだろうが」
「い、一回だけあるよ！」
男は急に泣き顔を上げてくる。
「太郎が赤ん坊だったときに一回だけ姉ちゃんに会ったよ！」
「じゃあ、お前――」
牛太郎の唇は震えていた。
「太郎のオヤジが誰だか知っているんだな」
男は首を横に振った。
「知らねえ。姉ちゃんも誰なのか教えてくんなかった。姉ちゃんは誰にも言わなかった。だから、多分、野盗か、旅のやくざ坊主だ。きっと、そいつらにやられちまったんだ」
嘘はついてなさそうだった。もし、五郎左だと知っていたら、それを理由にゆすってくるはずだ。
「そうか。わかった。ただ、お前には死んでもらう」

「えっ！」
「邪魔だ。この世から消えろ」
「なんでっ！　なんで、俺が殺されなくちゃなんねえの！　なんでっ！」
「テメーみてえな卑しい奴がいると太郎の将来に傷がつくんだっ！　せいぜい地獄でおれを呪ってろっ！　おいっ！　お前らっ！」
戸がばちんと開いて、宿屋兄弟がなだれ込んできた。弥次右衛門はあわてて飛び上がり、兄弟の脇からすり抜け逃げようとしたが、船乗り上がりの屈強な若者の拳で男は吹っ飛ぶ。
「お前ら！　さらっちまえ！」
治郎助が男を床に押さえつけると、七左衛門が腰にぶら下げていた手拭いを取り外す。男は暴れ回りながら泣き叫ぶ。
「堪忍してくれえ！　俺には児玉に女房も子供もいるんだあっ！　二人も、二人も娘がいるんだあっ！」
「娘？」
七左衛門が男の口に手拭いを押し込め、そのまま締め上げる。
「娘ねえ……」
牛太郎はもがき回る男を見つめる。於松がひょこひょことやって来て、懐から取り出した短刀で、にたにたと笑いながら男の衣服を裂いていく。
「二人か」
牛太郎は天井を仰ぐと、悪事を巡らせ始めた。
そんな牛太郎をよそに、於松が、切り裂いた衣服の布で男の手足を手際よく縛り付けていく。
「太郎の叔父さんで、二人の娘か」
脳裏に浮かんだのは堺にいる彩の顔である。そして、治郎助をもう一度見た。
「旦那、出来上がりましたぜ」
「まあ、待て。格さん、そいつの口の手拭いを取ってやれ」
牛太郎はにたりと笑っていた。

「え？　いいんですか」
「いいから、取れ」
七左衛門は首を傾げながら、のたうち回りながらもごもごと何かを言っている男の口を解放してやる。
男は自由になった口で早速叫んだ。
「俺が何をしたって言うんだ！　なんで、こんなことすんだ！　なんて、ひでえ男なんだ、あんたは！」
「まあ、落ち着け。事と次第によっては助けてやる。お前の娘ってのはいくつなんだ」
「十五と十三だよ！　だから、堪忍してくれよ！」
「ほほう。十五歳と十三歳ね。で、結婚してんのか」
「してねえよ！」
牛太郎は陰のある笑みを浮かべながら宿屋兄弟をちらと見る。
牛太郎は言った。
「おっさん、おれの与力になれ。太郎の叔父さんってことで特別に簗田姓もくれてやる。ただし――」
牛太郎は宿屋兄弟を指差した。
「お前の娘をこいつらに嫁がせるのが条件だ」

本当の主人

牛太郎の企み。

治郎助に対するただの嫉妬から来ている。

弥次右衛門が太郎の本当の叔父であるかどうかは、今となってはもはやどうでもよくなってしまっている。

弥次右衛門の処置は牛太郎の一存に委ねられている。だったら、迎え入れてしまえばいい。太郎の叔父と認めてしまえばいい。

すると、弥次右衛門は簗田家の一門だ。

弥次右衛門には年頃の娘が二人いるらしい。これを宿屋兄弟に嫁がせてしまえば、治郎助の毒牙から彩を守ることができる。

簗田一門という餌を宿屋兄弟にぶら下げてしまえば、断るすべもないであろう。

天下布武を目指して北摂津を転覆させた人間とは思えぬ、ひどく矮小な計略であったが、牛太郎はほくそ笑んでいた。

「今、何と言ったのじゃ」

「だから、このおっさんは今日から簗田弥次右衛門。で、おっさんの娘を格さん助さんの嫁にするんです」

あまりにも唐突すぎて、家の者、皆の開いた口が塞がらない。

願福寺から戻ってきた牛太郎は、新七郎や彩、四郎次郎以外のすべての簗田家の人間を広間に集めた。もちろん、太郎も呼んだ。

そうして、言ったのである。弥次右衛門は太郎の叔父に間違いない、と。

当の太郎は、ややうつむき加減に押し黙っているだけだ。

「い、一生懸命働くんで、よろしくおねげえします」

華やかな女たち、屈強な男たちを前にして、ぼろでも纏っているかのような弥次右衛門はぼそぼそとそう言いながら床に額をこすりつけた。

「ま、ヤジエモンは真面目な奴なのに貧乏で可哀想な奴なんだ。こ

れは見捨てておけないし、それに簗田家の結束のためにも、格さん助さんには一門になってもらいたいなと思っていた矢先だったからな」

ちょっと前には弥次右衛門に馬上から罵声を浴びせていた男の明らかな嘘に、一家の者たちは怪訝な顔つきになった。

ところが、いつもはこういうときになると決まって口火を切る太郎が、

「わかりました」

と、素直に従った。

「ただ、彼らを一門にするというのは早急すぎます。拙者は彼らが何者なのかも知りません」

「お前は黙ってろ。この家の主人はおれだ。お前がヤジエモンを叔父さんとして迎え入れたんなら、あとのことには口を出すな」

封建制度のこの世の中にあって家長は絶対である。だが、この独裁者の身代わりの速さがあまりにもおかしいので、誰の顔にも疑念が表われていた。

そもそも、牛太郎が「簗田家の結束」などと言い出すのが一家の人間には解せない。

ただ、弥次右衛門と七左衛門だけは牛太郎の一言一言に熱心に聞き入っていて、急に嫁を押し付けられてしまいそうな治郎助は栄達を夢見る兄とは違って不安げな表情だった。

「何か変じゃ」

梓が牛太郎を薄ら睨みながら言う。

「おかしい」

梓の言うことはもっともで、あれだけ厳しい顔つきで太刀を手に取って出ていった牛太郎なのに、帰ってきてみたら、ころりと話を変えてしまっている。

鬼梓の気配が見え隠れしているが、牛太郎はついさっき梓を初めてねじ伏せた自信から、ふてぶてしく口を開いた。

「いや、話を聞いてみたら、可哀想な奴だったので。それに、本当

のことを言っているようですしね」
おかしい。あいりも貞もかつも、牛太郎の不遜な態度に揃って眉をひそめた。梓に対するあの態度は今までには有り得ない。
「とはいえだな、亭主殿」
梓の睨みは徐々に光を帯び始め、語気も強くなってきていた。
「それならそれで結構だが、なにゆえ、その話が飛躍して、この者の娘たちをこの兄弟に嫁がせるとなったのじゃ。あまりにも急ではないか」
「善は急げと言うじゃないですか」
牛太郎はへらへらと笑う。
「でも――」
妙な空気が漂う中で口を開いたのは新三だった。
「御家来を一門にして、家の結束を強くさせるのは古来もののふの時代から行われてきたことですよ」
「そうだ、新三。いいことを言うじゃんか。いいですか、皆さん。この格さんと助さんはね、とても働き者で、とても忠義のある若者なんですよ。こんな人たちこそ簗田家には必要なんじゃないんですか？」
「何を言ってんだか」
ふいにぼそりと吐いたのは栗之介だった。
「どうせ、彩を治郎に取られたくないからだろ」
「バっ、お、おいっ！」
「なんじゃとっ！」
梓が鬼の形相でおもむろに立ち上がった。
「ち、違うんですっ！　鉢巻きは馬鹿だからなんか勘違いしているんですっ！」
「そういうことですか、父上」
太郎の目は犬畜生でも見るかのようであった。
「違うっ！　誤解だっ！　おれは簗田家のけっ――」
梓の拳が牛太郎の鼻っ柱に飛び込んできて、牛太郎は瞼の裏に衝

撃の光を走らせながらひっくり返った。
「お主は、お主は、何度、わらわを裏切れば気が済むのじゃっ！」
そのあとはいつもの有様であった。いや、浮気をしたと勘違いしているので、いつもよりひどかった。
牛太郎がすべての威厳を奈落の底に叩き落とされている中、太郎もあいりも、女中たちも、栗之介も、やれやれと言った具合で広間を出ていく。
新参の者たちだけが梓の鬼の所業に身動きできないでいた。
血反吐を吐きながらぐったりと横たわる牛太郎をよそに、梓は宿屋兄弟の前に出て腰を下ろすと、恐怖に震える兄弟に深々と頭を下げた。
「申し訳ない。亭主殿の勝手な行いによってそなたたちを惑わせてしまって。さすがに一門という訳にはいかぬが、どうか、どうか、わらわの顔に免じて亭主殿を許してくれ」
このとき、七左衛門も治郎助もこの家の本当の主人が誰なのか初めて知った。そして、何があろうと絶対に逆らってはならないことも肝に銘じ、
「いやっ、奥方様っ、顔を、顔を上げてください。一門だとかそんなの、どうでもいいんですっ」
と、七左衛門はあわてた。
新三は部屋の片隅で歯をがちがちと鳴らしている。
「許してくれるか？」
持ち上げてきた梓の目は潤んでいた。
「許すも許さないも滅相もございませんっ！」
「じゃ、じゃあ、お、俺は、ど、どうしたら」
褐色の弥次右衛門も顔色が悪くなってしまっている。
「む、娘を嫁にするってのが、条件って」
梓は口端を固く引き結ぶと、一度、こくりと頷いた。
「一度言ってしまったことじゃ。弥次右衛門殿は簗田の身内として、家族を岐阜に呼びなされ」

「い、いいんですか？」
「是非に及ばずじゃ」

牛太郎と彩はそういう間柄じゃない。ただ単に牛太郎が娘のように可愛がるあまりに治郎助をやっかんでいるだけだ、と、栗之介が梓に言ってはくれたものの、配下の者たちを巻き込んでしまった今回ばかりは、どこまでも許されなかった。

冷たい夜風が吹きつける晩、荒縄でぐるぐる巻きに縛られた牛太郎は栗綱や黒連雀のいる馬屋に放り込まれ、寒さと凍えで体を震わせていたところ、栗綱が寄り添ってきてくれたので死には至らず、むしろ、栗綱の温かさに涙を流し、心の底から反省し始めたが、翌朝になっても梓の怒りは収まっておらず、

「縛り付けてしまえ」

と、宿屋兄弟の手によって庭先の木の幹に縛り付けられた。

「旦那様、恨まないでください。俺たちもまだ死にたくはありません」

七左衛門が言うと、

「本意ではありません。もちろん、拙者は彩さんを手込めにしてしまおうだなんて思ってないですから」

治郎助が言った。

「も、もういい。忘れてくれ」

「何をこそこそ話しておるのじゃっ！」

小袖をたすき掛けにして、おかっぱ頭に鉢巻きをした梓の手には、猛将の佐久間玄蕃允もひれ伏した木刀がある。

「そ、それだけは勘弁してください、梓殿ォッツ！」

梓が振り抜いた木刀が牛太郎の腹を叩き、牛太郎は目玉を剥き出して呻きを上げた。

「そなたと彩には何の関係もないと栗之介は言っておったが、正直に言え。本当に何もないのかっ！」

まるで、出会った当初のときの梓だった。小袖をからげ、腕輪をじゃらじゃらと鳴らしながら、男と言えば誰にでも噛みついていた狂犬のときを彼女は蘇らせている。

「な、何もありませんっ！　天地神明に誓って何もありませんっ！」

「ならば、治郎助が彩に惚れていようと、彩が治郎助に惚れていようと構わぬではないか！　何がそなたには不都合なのじゃっ！」

「不都合も何も、鉢巻きの野郎が勘違いしているだけッスよ！」

しかし、梓が振り抜いてきた木刀が、今度は肩口に下ろされ、ぎゃあっ、と、牛太郎は涙線を爆発させながら叫び上げる。

梓の瞳孔は開きっぱなしだ。

「栗之介が勘違いしているだけなら、そなたはなにゆえ七左衛門や治郎助に娘を嫁がせようとしたのじゃ」

「だ、だからっ！　簗田家のけっそ――」

木刀が反対の肩口に振り落とされた。痛みに耐えかねる喚き声は空を割らんばかりだった。

「ちゃんちゃらおかしいっ！　正直に言わんかっ！　何が目的で七左衛門や治郎助に娘をやろうとしたのじゃっ！」

これは折檻ではなく、拷問だということを牛太郎はようやくわかった。梓の納得した答えを返さない限り、これが永遠に続くか、それこそ木曽川に沈められるかのどちらかだ。

牛太郎はもはや白状するしかない。

「すいません……。あーや恋しさのあまり、つい……」

梓の木刀を握り締める手が、わなわなと、いや、ぶるぶると震え始めた。

「で、でも、違うんですっ！　本当に、本当に、何もないんですっ！　本当に太郎とか駒みたいに、娘みたいな可愛さで――」

ぐわっ、と、虎か龍かのような巨大な黒い影が目の前に聳え立ったと思ったら、直後に牙に襲われるかのごとく木刀が脳天目掛けて振り落とされてきて、牛太郎は失神した。

般若面

梓から受けた惨憺たる拷門により三途の川を間近にまでした牛太郎は、数日間、体を起こすことすらできないほどであり、下の世話を貞にしてもらうという辱めまで受けた。

さらに、触らぬ神にたたりなしを地で行くように、自室で寝込んでいる牛太郎に面会を求めてくる家中の将も、どころか家の人間でさえ貞とかつだけというむごたらしさである。あれだけくっ付いていた於松も音沙汰ないし、小姓の新三ですら、とばっちりを恐れて主人に顔を見せなかった。

「旦那様」

粥だけしか食せず、布団の中でげっそりと痩せてしまっている牛太郎に、初老の貞が言ってくる。

「梓様は旦那様の頭を剃らせ、自分も仏門に入ると息巻いておりますよ。手遅れになる前に、梓様にお許しを頂きなされ」

「も、もう、いいわ」

牛太郎の開いている目は半ば白目を剥いており、声も虫のようにか細い。

「ぼ、坊主に、な、なったほうが、ま、ましだ」

「何をおっしゃいますか。旦那様も梓様もまだ四十前ではないですか」

「お、おれは、もう、十分に生きた……」

かつては牢獄に放り込まれ、たまに上総介に折檻を受けるさすがの牛太郎も、今回ばかりは応えていた。自分が行きつく平穏の場所とは多分この世にはないと思っていた。

貞が大きな溜め息をつく。

「旦那様。貞は旦那様と梓様の御子を見ない限り死ぬに死ねません」

「子供なら太郎がいるだろ」

「若様ではなく、梓様の御子です」

「そりゃ無理な話だ」
「なにゆえです」
牛太郎は視線だけを貞に向けた。さすがに老けたなと思った。
「だいたい、わかるだろ。おれが種無しか、あずにゃんがそういう体なのか、どっちかだ」
貞は黙り込んだ。
夫婦になって丸六年になる。各地を駆けずり回って忙しい牛太郎とはいえ、岐阜に帰ってくればやることはやっている。牛太郎は別段、実子が欲しいと思っていないし、梓も梓で子をせがまないので、子作りという形式状で夜を営んでいるわけでもないが、それでも、子が出来てもなんら不思議はない。
でも、出来ないのだから、そういう推測が立つ。
「だから、いいんだ。坊主になったって。あずにゃんだってそれがわかっているから出家するだなんて言っているんだ」
「いいえ！」
と、貞は大きな声を張り上げた。
「そのようなことをおっしゃっているから御子が出来ないのです！　御子は授かり物です！　欲しいと思っていなければ八百万の神様はくれません！」
「もういいだろ、勘弁してくれ」
「いいえ！　勘弁なりません！　この貞は十四で柴田の家に仕え、梓様がお生まれになってからはずっと梓様の傍におったのです。浮世の恋もせず、女も捨てて、ただひたすら梓様のお幸せを願ってきたのです。だから、梓様に御子が出来ないかぎり、貞は死ぬに死ねないのです」
「そんなこと言ったって無理なもんは無理だ。だいたい、もうあずにゃんはおれと寝たくないだろ。もう、めちゃくちゃじゃんか」
「だから、お許しを頂きなされ」
牛太郎はまるで母親のようにやかましい貞から逃れるようにして目を瞑る。

すると、貞は大きな声で、おかつさん、おかつさん、と、二回り若い同輩を呼び出した。
「どうしたんですか、お貞さん」
「旦那様を起こしてあげましょう。梓様にお許しを願うそうですから」
「ちょ、ちょっと」
と、牛太郎は最低限の抵抗をしたが、自力で動かす体力も気力も失われているので、されるがままに二人の女中に体を起こされ、左の脇を貞が、右の脇をかつが抱えて、無理やり歩かされる。
「やだっ！　嫌だっ！　やめてくれっ！」
牛太郎が足を踏み出さないでいると、今度は、あいりさま、あいりさま、と、貞は元女中を呼び出した。奉公癖が抜けきっていないあいりは、打掛を引きずりながらそそそっと、すぐさまやって来て、
「お呼びですか」
「旦那様をお運びするのを手伝ってくだされ。梓様にお謝りされるそうですから」
「まあ、そうですか」
恨めしそうな目つきの牛太郎を無視してあいりはにこりと笑う。
「かしこまりました」
あいりが貞と交代して左の腹を抱えると、貞が前方に回り、腰を屈めると大男の牛太郎を背負い上げた。
「や、やめろっ。お貞はバアさんなんだから、やめろ」
「なんのこれしきっ」
よたよたとした足取りながらも、貞はあいりとかつの手を借りて牛太郎を梓の茶室の前まで運びこみ、そこで力耐えたように牛太郎をひっくり落とした。
「何の騒ぎじゃっ！」
と、戸の向こうから梓のがなり声が届いてきて、牛太郎は震える。相当の不機嫌さである。
「旦那様が梓様にお詫びしたいそうです」

「いらんっ！」
しかし、貞は勝手に戸を開けると、三人で牛太郎を茶室に転がり入れてしまい、二人きりにさせると、ばちんと戸を閉めてしまった。
梓が仁王のように目を剥いて睨みつけてくる。牛太郎は逃げ場もないし、何のしようもないしで、転がったまま顔だけを梓に向けて声を震わせた。
「お、お、お詫びを」
「詫びじゃと？」
と、梓の目玉がいっそう大きくなって、まったく、古今東西ここまで恐ろしい生物がいたのか、空想の化け物でもここまでではないのではないか、そう思えるほど、梓の顔つきは般若面だった。
「わらわはそなたの詫びを何度聞けばいいのじゃ」
「いや、もう、もう、変な真似はしません。だから、だから」
「知らんわあっ！」
梓ががばっと立ち上がったので、牛太郎は思わず目を瞑って顔を背けてしまう。
「好きにするがいい！　彩をここに呼び寄せ、側に上げればよかろう！　好きにせいっ！」
そうして、梓は牛太郎を跨いで茶室を出ていってしまい、さらに外から、貞やかつ、あいりを叱りつける声まで届いてきた。
これは本格的にまずいと感じ、牛太郎はただでさえ悪い顔色をさらに真っ青にさせた。

梓のへそが曲がっているかぎり、簗田家に真の平和は訪れない。刺すような緊張と、息が止まるような緊迫に常にさらされ続ける。
なんとか、自力で歩けるようになるまで回復した牛太郎は、それまで逃げていた新三を捕まえると、棒きれを杖代わりにし、新三に支えてもらいながら稲葉山を登った。
向かう先は柴田家である。
義兄の権六郎に仲介してもらおうと思った。

しかし、権六郎に居留守を使われた。馬もあるし、従者も多いので、明らかに屋敷にいるはずだった。それを突っ込んでも、奉公人はいないの一点張りである。

「クソが……。クソ兄貴が……」

屋敷をあとにした牛太郎を冷たい風が容赦なく吹きつけてくる。おそらく、梓が暴れ回ったことを耳にしたのだ。権六郎は火の粉が降りかかってくるのを避けているのだ。

「殿……」

生意気な新三も、歩むたびに毎度痛みに顔を歪める牛太郎の姿に泣き出しそうな顔である。

「もう、離縁されては……。いくらなんでもひどすぎます。柴田様もわかってくれるはずです」

「そんなことできるわけないじゃんか……」

ううん、と牛太郎は呻きながら、路傍の大きな石の上に腰を下ろし、ぜえぜえと肩で息を切りながらも、呼吸を整えていく。

「おれとあずにゃんの結婚を決めたのは信長様なんだから」

「そんなこと言ったって、いずれは奥方様に殺されてしまいますよ！　言語道断ですよ！　おやかた様だってご理解されますよ！」

牛太郎は、か細い溜め息をつく。

「仕方ない……。仕方ないんだ……」

新三はあからさまに大きな溜め息をついた。

「仕方なくないですよ」

「それ以上言うとクビにするぞ……」

新三は眉尻を吊り上げて、むすっとしている。

「あずにゃんがいないと築田家ってのは成り立たない」

なぜかと問われたら牛太郎はうまく答えられないだろうが、感覚的にそう感じている。おそらく、梓がいなければ牛太郎は欲望のままに勝手なふるまいを働き、自滅しているかもしれない。実際、梓と夫婦になる前というのは女の尻ばかり追いかけて、あるときは恥を欠き、あるときは辛酸をなめさせられ、あるときは殺されそうに

なった。梓の影に怯えることによって、ある程度の自制、ある程度の良識を保っていられる。

また、配下に対してもそうである。牛太郎はときに傍若無人な振る舞いをするが、梓や太郎の目が厳しく光ることで、おとなしくなる。

それを牛太郎は感覚として、なくてはならないものと理解している。もっとも、梓と太郎の監視の目をかいくぐって欲望を表現するから、こんな目に合うのだが。

牛太郎は呻きながら腰を上げると、よろよろと歩き出した。

「どちらに行かれるんですか！」

「城」

鬼梓に物を申してくれるのは上総介だけだと思った。

普段の何倍もの時間をかけて岐阜城に辿り着き、目通りを願ったが、上総介は馬駆けに行ってしまっているらしい。

「それにしても、こっぴどくやられましたね」

梓が暴れたことはすでに城内にまで回っているらしく、長谷川藤五郎もぼろ雑巾のような牛太郎を見て、憐れみの眼差しだった。

「どうして、そんなことになったんです」

「誤解されたんだ……。浮気をしたって……」

「誤解じゃなくて、本当にしたんじゃないんですかあ」

「してないっ！　断じてしてないっ！　すればこうなることはわかっているんだっ！」

「はいはい。わかりました。で、おやかた様に何用なのです」

「ちょ、ちょっと、信長様に言ってもらって、梓殿に許してもらおうと」

「無理に決まっているじゃないですか」

「なんでだよ」

「だって、大笑いしていたんですから。オヤジ殿が奥方に折檻されたという話を聞いて。どうして折檻されたのか、オヤジ殿に聞かなければなと愉快そうでしたもの」

牛太郎は肩をがっくりと落とした。そうだった。今でこそ、いくさに出れば魔王だが、本来上総介は子供のように悪戯好きで、過去にも藤吉郎が寧々を嫁にしたいと願ったとき、逆に佐々内蔵助をけしかけさせて揉めごとを起こさせた前科がある。

それを考えれば、上総介に仲を取り持ってもらいたいと言ってしまったら、さらなる大ごとにさせられてしまうかもしれない。

じゃあ、一体、誰が梓を言いくるめてくれるんだ。そう、牛太郎が絶望していると、藤五郎がふいに言った。

「お市様に頼んでみればいいじゃないですか。お市様はオヤジ殿に一目置かれているんですし」

あ、そっか。いや、しかし、

「そんなことをして、信長様に怒られないか」

「大丈夫じゃないですか？　そういう刺激があったほうが、お市様のためにもなるでしょう」

「ほほう。言われてみればそうだ」

と、牛太郎の目はみるみるうちに活力を取り戻していく。なるほど、確かに市は言っていた。もしも、梓に疑われるようなことがあったら、自分が弁明してやると。

「さすが、竹だな。お前は本当に女たらしだぜ」

「それとこれとは関係ないでしょ」

藤五郎の苦笑も気にせずに牛太郎はにやにやと口許を綻ばせながら、藤五郎に手を掲げて背中を向けると、新三の手を借りつつ、よろよろと市の住まいの屋敷を目指した。

梓の香り

牛太郎の来訪を知って、茶々と初が小躍りしながら縁側を駆けてきたが、瞼が落ちくぼみ、頬は痩せこけ、小姓に支えられながらひょこひょこと歩く牛太郎を目の当たりにして、姫たちはぎょっとして立ち止まった。

「お久しぶりです。お姫様」

姫たちの目線にゆっくりと、痛みに顔をしかめながらも屈みこんだ牛太郎は、市を頼りに来ただけあって瞳の色だけは冴えている。

「お元気でしたか」

「う、うちたろうなの？」

茶々は丸い瞳をぼうとさせて唖然としている。

「そうですよ」

「うちたん、かわいちょう」

と、初が眉尻を垂らしていた。

「大丈夫大丈夫。そのうちまた、まんまるぶくぶくになりますから。それで、もしよかったら母上様のところまで案内いただけますか」

茶々と初はこくりと頷くと、牛太郎の手を引いた。しかし、子供の加減でそうしてしまったので、牛太郎は呻き上げた。

「うちたろう……」

「大丈夫大丈夫。ただ、ちょっとだけゆっくり歩いてもらえますか」

茶々と初は泣き出しそうな顔でこくりと頷いた。今度は牛太郎の手を撫でるように握ってそろそろと歩き出す。

そのうち、向かいからゆっくりと、鼻先を突き上げたお得意の格好でさゆりが現れた。

「聞いたで。えらいやられようやな。まるで、負けいくさの帰還やないか」

言うほど、彼女の表情は心配そうではない。

「どうせ、女に手を付けたのが奥方に知られてしまったんやろう」

このときほど、さゆりの声が忌々しかった日はなかった。ついこの間まではさゆりの不在を寂しがっていたくせに、今ではいなくなってよかった、いや、どうしてここにいるのだと、むしろ腹を立てた。

「お前はうんこだ」

と、訳のわからないことを言ってさゆりを睨みつけると、

「いい気味や」

鼻笑いを返され、むかむかしながら彼女の前を横切っていく。

姫たちの導きで市の前に通され、新三を外で待たせた。

市は別人のような牛太郎に驚いて、口を袖で覆った。

「どうして、そのような姿に。なにゆえ、梓殿はそこまで」

市も簗田家の騒動を知っているらしい。

牛太郎は逆に情けなくなってしまった。この話はいったいどこまで広まっているのだと。すると、泣けてきてしまう。摂津を転覆させ、市や姫たちを救い出し、今まで何度命懸けで働いてきたことだろう。それなのに、そうしたことはほとんどの人に知られずじまいで、これぞ簗田牛太郎と言われんばかりの醜聞ばかりが人々の耳にされるのだ。

ただ、目の前の市は牛太郎を評価してくれている。それが枯れ切った体に染み込むようにありがたくて、牛太郎は市や姫たちの前にありながら、おいおいと泣き出した。

「うちたろう……」

茶々が小さい声で呼びかけながら、牛太郎の顔を覗いてくる。

「いぢめられたのか？」

「違うんです。お茶々様。違うんです」

牛太郎は涙ながらに、違うんです、違うんです、と、それればかり繰り返した。

「泣かないで。うちたろう」

茶々が小さな掌で牛太郎の頭を撫でてきた。牛太郎はいっそう泣いてしまう。

「母上たま。うちたん、かわいちょう」
「いいんですよ、初。牛殿もたまには泣きたくなるんです。初もいつも泣いているでしょう」
牛太郎は突っ伏して泣き続けた。後にも先にもここまで泣かないのではないかというぐらい泣いた。その間、ずっと茶々が牛太郎の頭を撫でていた。初も姉を真似して牛太郎の頭を撫でた。
そうして、十分泣きつくしたあと、嗚咽を混じらせながらもようやく弁明を始めた。
市はうんうんと親身にうなずいていた。茶々と初にはなんのことだかさっぱりわからなかったろうが、市の膝の上でおとなしくしていた。
「あっしはただ、堺にいる女中が恋しくてそうしたんじゃないんです。可愛いばかりに、馬鹿な親父みたいな気持ちでそうしちゃったんです」
でも、
「梓殿は前からどこかしら疑っていたんで、聞く耳を持ってくれないんです。あっしは梓殿以外の女なんて我慢、いや、興味がないのに、梓殿はもう頭の中が大噴火してしまっていて。もう、こんな梓殿が聞く耳を持ってくれるのなんて、信長様かお市様しかいないんです」
一通りのことを言い終えると、市はしばらくの間黙っていて、何かしら言いたそうにもしていたが、牛太郎が姿からしてあまりにも気の毒だったのだろう、
「さな」
と、さゆりを呼びつけると、誰か屋敷の奉公人でも麓の簗田家まで使わして、梓をここに連れてこいと言った。
半刻ぐらい待つと、梓が貞とともにやって来た。梓は敷居の向こうで深々と頭を下げて現れたが、市が中に入るよう伝えて顔を上げた途端、縮こまっている牛太郎を発見して、拳を握り、それをぶるぶると震わせ始めた。

「そなた……、お市様に泣きつくとは……、なんて無様な真似を……」

「やめんかっ！」

今まで聞いたこともない甲高い声でぴしゃりと言い放った市に、梓はあわてて頭を下げた。牛太郎は心の底でひっそりと喜んだ。

いや、ぬか喜びも有り得る。梓が納得しなければ、お市様にすがるとはなんて見っともない真似を。そなたも殺してわらわも死ぬ、などと、我が家に帰った途端に今度こそ殺される。

「いかなる理由であれ、殿方を虐げるとは言語道断ではないか！梓殿！」

浴びせかけられている梓の肩がわなわなと震えている。間違いなく納得していない。

「まして、そなたの夫は織田の宿老、簗田左衛門尉政綱ではありませんか！」

「え？」

と、牛太郎は間抜けな顔を上げてしまう。梓も思わず顔を上げてしまう。宿老は家中を差配する者たちでも最上級の幹部である。牛太郎はまかり間違っても宿老どころか、家老でもない。正体不明の珍奇衆筆頭である。

無論、市が間違うはずがない。

夫婦が唖然としていると、市はふいに和やかに微笑した。

「いいえ。牛殿は宿老です。わらわにとって、茶々や初、江にとって、牛殿は一番の家臣でございます。そして、梓殿はその牛殿の妻でございましょう。ならば、わらわたちのために仲良くして頂かなければなりません」

市は、牛太郎や梓などとは格が違った。別格だった。いつも、母親らしく、それでも少女のように可憐ににこにことしているが、市なのである。時代の革命児織田上総介の妹でありながら、反逆者浅井備前守の妻だったのだ。時代の激動を真正面から受けた戦国の女なのだ。

桁が違う。市の前では牛太郎も梓も小物だ。
「牛殿。梓殿。そなたたちはわらわや姫たちのために働きなさい。つまり、天下泰平のために働きなさい」
その言葉の背景に聳え立つのが小谷山であることが、牛太郎にも梓にもわからないはずがない。
「働けますか？　共に仲良く働けますか？」
市は小首を傾けながら、満面の笑顔だった。
梓はもう肩を震わせていなかった。おかっぱ頭を深々と下げ、「かしこまりました」と、言った。
「牛殿も」
「は、はい」
「それでは仲直りしましょう。もう、昨日までのことは忘れて。お互いに」
市に笑顔で促されて、牛太郎はそろりそろりと梓に視線を向ける。
梓がぎらりと目を合わせてきた。
「あずさどの。牛殿は浮気なんかしていませんよ」
梓は不服そうに牛太郎から視線を背けるが、市がお互い向き合って頭を下げろと言った。どちらも悪いし、どちらも悪くない。それが夫婦なのだと。
しょんぼりとしている牛太郎に梓は渋々向き合い、痩せこけた夫を恨めしそうに見つめてくる。
「先に謝らんか。それだけは譲れん」
市がくすくすと笑う。
「あ、はい……」
牛太郎は頭を下げ、何十回目かのごめんなさいを口にした。
梓は口を真一文字に結びながらも、見据える瞳をうるうると濡らしている。悔しいのか、なんなのか、この夫婦にしかわからない何かしらを牛太郎に訴えかけると、瞼をつむりながら頭を下げてきた。
「ひどい目に合わせて、申し訳なかった」
そして、今度は梓が畳の上に突っ伏しておいおいと泣き始める。

鬼の目にも涙か、などとはもちろん牛太郎は口にせず、微笑む市に背中を撫でられ慰められる梓を目の当たりにして、金輪際、誤解されるような変な真似はよそうと心に誓った。

日に日に陽の沈みが早くなっていく。頭上に広がる空は、冬枯れの稲葉山を包み込むような紫だった。

まともに歩けない牛太郎をおぶっているのは梓である。坂を下る梓の足取りに新三と貞がおろおろとしながら支えていく。馬鹿な真似はやめろと皆が何度も言っているのに、梓は意地になったかのように聞かない。

「梓殿。もう、いいですよお。勘弁してください」

「勘弁せん。けじめじゃっ。亭主殿を歩けなくさせたのはわらわじゃっ」

馬鹿だなあと思う。単純で激情家。いくつになっても尾張の女大将。こんなことをするのなら、最初からやらなければいいじゃないか。

でも、そんな理屈が通用しないのが梓である。

「亭主殿は天下の将じゃ。わらわはその女房じゃ。亭主殿は天下の将じゃ。わらわはその女房じゃ」

一歩一歩、足を運ぶたびにそれを念仏のように唱える。

「天下の将。その女房。天下の将。その女房」

牛太郎の重みに必死に耐えながらそれを呟くさまが本当に滑稽だから、梓をあれだけ恐れ、非難していた新三も笑ってしまっており、しまいには新三も梓に合わせて呪文を唱え始めた。

「天下の将も、その女房もよろしいですが――」

牛太郎の尻を抑えながら貞が言った。

「御子も加えなされ、梓様」

「つまらぬことを申すでない、お貞。わらわはうばずめじゃ」

梓の唐突な告白に貞は立ち止ってしまい、新三は調子を合わせるのをぴたりと止めた。

「重いっ！」
「あ、も、申し訳ありませぬ」
お貞があわてて牛太郎の尻を支える。
「そういうことだ、お貞。おれと梓殿の間には子供ができない。あきらめろ」
「し、しかし、わかりきったことでは」
「わかりきったことじゃ。のう、亭主殿」
「どうですかね。あっしに種が無いのかも」
すると、二人はくすくすと笑った。
陽はゆるゆると落ちていく。朽ち葉が梓たちの足元をさわさわと流れていく。空にひびを入れている木の枝の間には星がうっすらと瞬いていた。
貞がしくしくと泣いている。
「何を泣いておるのじゃ」
「貞は、貞は、旦那様や梓様のことを何もわかっておりませんでした。梓様に仕えて三十年余、旦那様に仕えて五年以上、何もわかっておりませんでした」
「本当にお貞は何もわかっておらん」
梓は額に汗を滲ませながらも、頬を緩ませて笑った。
「子供たちなら大勢いるではないか。太郎、あいり、新七郎、彩。それに七左と治郎とやらも最近出来た。玄蕃もそうかのう。新三もそうじゃ。父上も母上もおるが、そなたは一番小さいからの」
梓に微笑みかけられて、新三は赤くなってしまった。牛太郎が杖代わりにしていた棒きれを路傍の雑草目掛けて照れ隠しに振り回した。
激動の一年もそろそろ暮れていく。
梓の華奢な背中に支えられ、牛太郎はなんだかほっとしてしまった。目を瞑りながら、眠るようにしておかっぱ頭に頬を乗せる。
漂うのは梓の香り。

席順

大晦日である。

なんとか、憂いを残さずして年を越せることになった簗田家の一同は、尾張春日井から家族とともに城下の長屋に移住してきた弥次右衛門も含めて、屋敷の一年の煤を落とすと、夜には広間に集って除夜の鐘を聞いた。

暮れにかけて岐阜の屋敷は一挙に人が増えたし、年越しの特別な雰囲気も手伝って、駒が上機嫌だった。あいりの膝を離れて輪の中をぺたぺたと歩き回ると、なぜか、治郎助がお気に入りである。治郎助の膝をぱしぱしと叩き、丸い目であうあうと話しかける。最初、治郎助は簗田家のたった一人の愛娘に恐縮していたが、太郎に相手をしてやってくれと言われて、恐る恐る駒を抱き上げた。駒はきゃっきゃと大喜びだった。

いまだ回復していない牛太郎が、か細い溜め息を長々とついた。

「結局、駒ちゃんもそういうことなのね。そういうことなのね……」

「まだ、そのようなことを言っているのか、亭主殿は」

「そうですよ。父上にあれこれ言われる治郎の気持ちにもなってみてくださいい」

「いい男ってのは何につけても得だ」

と、陰気な老人のようにぐちぐち言う。そんな牛太郎に新三が唇を尖らせた。

「殿は罰当たりです」

「なんだと？」

「新三。言っていいことと悪いことがあるぞ」

太郎が咎めると、新三はますます頬を膨らませて、しょぼくれながらも牛太郎を上目に睨む。

「だ、だって――」

なぜか、新三の顔が赤らんでいく。

「お、奥方様がいるじゃないですか。殿には。お綺麗な奥方様が」
「まあ」
と、目を大きくさせたのはあいりである。顔つきを厳しくさせていた太郎も苦笑してしまう。
「世辞がうまいのじゃな、新三は」
梓もすっかり愉快そうである。
「せ、世辞じゃありませんっ。私は、殿が恨めしくて仕方ありません」
「おい、新三」
牛太郎だけがむすっとしていた。
「おれはお前みたいに人の奥さんに色目を使う野郎が一番大嫌いなんだ。恨めしいなら出ていっていいんだぞ」
「何をむきになっておるのじゃ。亭主殿は本当に自分勝手な男じゃな」
「お前、まさか梓殿が恋しくて仕方ないから、年末だっていうのに自分の家に帰らないんじゃないだろうな」
と、むきになっている牛太郎は聞かない。
「違います。私は殿の小姓ですから、いつなんどきでも離れないだけです」
「口だけ達者の色ボケマセガキが。変な真似しやがったらただじゃおかねえからな」
ついこの前に変な真似をした男がこれだから、家の者たちは呆れて笑うしかなかった。
やがて、新年の訪れを報せる百八回目の鐘が突かれた。
「年が明けましたか」
太郎がしみじみと天井に見入っている。
激流の渦が巻いていたような一年が、無常のうちへ消えゆくように静かに去った。
いい一年であるように。
皆の願いであった。無論、牛太郎も。

今年こそ、虐殺がないように。今年こそ、悲劇がないように。今年こそ、三百六十五日、途切れることなく梓と仲良くできるように。

当然、新年の初めは上総介への挨拶である。

年越しに寝てしまうと白髪や皺が増えてしまうという迷信を信じている一家の連中は、皆が夜通し起き続けたうえで初日の出を拝み、太郎もそれは例外ではなかったようで、瞼をこすりこすり、稲葉山の坂を登っていく。

牛太郎はというと、一人だけぐっすりと寝た。日の出も見ていない。

「父上、寝てしまったせいじゃないですか。白髪が何本かありますよ」

杖をつき、新三の手を借りながら歩んでいく牛太郎は、太郎に言われて自分の髪を触ってみた。

もちろん、牛太郎はそんなものが迷信だと思っているから、

「違う。きっと、あずにゃんにぼこぼこにされたせいだ」

太郎は苦笑する。

「今年こそおとなしくしてくださいね。くれぐれも夫婦仲睦まじく。母上を怒らせるのは父上しかいないんですから」

「言われなくてもわかっているわい」

天正の年号になってから、初めての正月である。

上洛以来、畿内を駆け回り、ときに窮地に立たされた織田家にとって、各地に散らばっている諸将が上総介の元に一挙に会する新年は、久しぶりのことだった。

この日だけは戦乱の世が嘘のように城下は平和な賑やかさに包まれていて、稲葉山も岐阜城を目指す諸将たちの列で華々しかった。

途中、近江坂本城からやって来た明智十兵衛に遭遇した。牛太郎の歩行が遅いので、追いつかれたのだが、最初、共を十数人連れている十兵衛は、他人行儀にこちらに頭を下げてきただけで牛太郎に気付かなかった。太郎が声をかけて、初めてぎょっとした。

「や、簗田殿ですか」
「アハハ……」
「弾正忠に軟禁されていたと聞きましたが、まさか――」
岐阜駐在の将は牛太郎の醜聞を知っている。さすがに岐阜の外までには広まっていないらしい。
「恥ずかしいことに、奥さんに……」
牛太郎が正直に告白すると、十兵衛は絶句した。
「そ、そういえば、左衛門太郎殿は越後に出向いたそうですな。ど、どうだったのですか、不識庵は」
と、十兵衛は鬼梓との関わり合いを避けるようにして唐突に話を変えた。
太郎が上杉軍の印象、不識庵の人柄などを十兵衛に話しているうち、天守閣に辿り着いた。
城に上がると、大広間には諸将がずらりと座していて、古参の見慣れた顔もあれば、近頃織田家に仕官したらしき新しい顔もあった。摂津茨木の荒木信濃守もいれば、大和信貴山城の松永弾正忠と、牛太郎に馴染みの顔もある。
ただ、牛太郎が太郎に支えられながら入ってくると、信濃守も弾正忠も、いや、佐久間右衛門尉、柴田権六郎、丹羽五郎左衛門といった重臣の面々から、前田又左衛門や佐々内蔵助といった母衣衆の者まで、唖然とし、声を失った。
ほとんどの人間が鬼梓の噂を聞いているのだろうが、ここまでとは思っていなかったのだろう。
そうした視線になんとも言えない複雑な気分になりながら、牛太郎はいつものように列の端、末席に太郎とともに腰を下ろした。
「お、おみゃあ……」
最初に声を出したのは、浅井攻めの大功により結構な上席に座している藤吉郎だった。しかし、藤吉郎はそれだけ言って、また、唖然とした。
「う、う、牛太郎」

佐久間とともにもっとも上席にいる権六郎が、たどたどしい口調で呼びかけてくる。

「お主は、む、無役だが、左衛門尉なのだから、末席ではいかんだろ」

もしかしたら、居留守を使った罪滅ぼしなのかもしれなかった。牛太郎はおもしろくなくて、ふてくされぎみに、自分は席を与えられているだけでもありがたいと言ったが、

「そ、そういうわけにはいかんだろ」

と、又左衛門が言った。彼もまた、牛太郎の無残な姿に憐れみを表していた。

「牛はおれより上だろ」

あの又左の言葉とは思えず、まったくもって、同情でしかない。

「いい気味だ」

佐々内蔵助だけがにたにたと笑っていた。

「おみゃあだって梓殿にやられたって話なのによく笑っていられるもんだぎゃあにゃあ」

「なんだ、この野郎」

「新年早々やめんか！」

と、いつものように丹羽五郎左衛門が二人を叱責している間に、森勝蔵がやって来て、

「そもそも左衛門太郎殿が侍大将なのだからここに座っていては示しが付きませんでしょう」

と、今日はさすがに酔っていない。

ということで、太郎と牛太郎は席を移動し、十兵衛の脇に腰かけたが、十兵衛が自分は無官位なのだからと牛太郎を上座に置かせようとする。すると、佐久間右衛門尉が無官かもしれないが坂本五万石の城主が沓掛三千貫の下座じゃおかしいだろうと、あれこれがやがや席順で揉めたすえ、牛太郎が腰を下ろした列は、重臣数名のあとに、藤吉郎、十兵衛、牛太郎、太郎という並びになった。

向かいには弾正忠や信濃守がいる。弾正忠は寝たふりをして常に

瞼を瞑っているが、たまに薄目を開けて牛太郎を見てき、目が合うと瞼を閉じる。

信濃守は気の毒そうに牛太郎を見つめてくる。

上総介が入ってきて、将たちは一斉に平伏した。上総介は一度上座に仁王立ちし、雁首そろえる家臣たちに威圧感を与えながら睥睨すると、ようやく腰を下ろした。

「表を上げろ」

その声に諸将は揃って顔を上げ、牛太郎も上総介の顔色を確かめた。眉間に皺はなく、わりと機嫌が良さそうである。

「正月だ」

と、上総介は言う。

「まあ、騒げ」

偏屈な人間らしい手短な言葉だったが、意外と頬を緩めていて、晴れがましい賀宴への喜びが滲み出ていた。

長ったらしい新年の口上を佐久間右衛門尉がだらだらと述べたあと、膳がぞろぞろと運ばれてきて酒宴となった。

さしあたっての話題は織田軍の今後の展開についてだった。重臣たちは長島がどうの、武田がどうの、北陸がどうの、と、各方面の情勢に詳しい将たちに話を向けていたが、妙なのは上総介が上座でおとなしく盃を舐めていたことである。

家臣が上総介に答えを求めたりしても、「ふむ」とか「ああ」とか相槌を打つだけで、話題に興味がないふうだが、機嫌が悪いようでもない。心ここにあらずといった具合で、一人、何かに楽しんでいるように口許を緩ませている。

「父上」

と、太郎が体を寄せてきて囁く。

「何か、変ではないですか」

牛太郎は頷いた。自分たちの主人はただただ宴席の雰囲気を楽しむような出来た人間ではない。おそらく何かを企んでおり、急に何かを言い出すのである。

多分、自分だろうな、と、牛太郎は思った。梓から暴行を受けたことに瞳をときめかせていたらしいから、女房の話をしろ、か、梓を連れてこい、とか、おもしろがって言い出すに違いない。

ところが、牛太郎の目論見は外れた。上総介の楽しみは牛太郎をからかうようなちっぽけなものではなかった。

むしろ、常人には到底考えられなかった。

「宴もたけなわになったところで、余興だ」

目を輝かせながら唐突にそう言った上総介を、何事が始まるのかと諸将が注視すると、広間の正面の戸が開き、長谷川藤五郎など近習たち三人が、それぞれ白木の上に金のどくろを携えて入ってきた。

三体のどくろはもっとも下座、上総介の正面に並べられ、そのまがまがしさに諸将はざわめきこそしなかったが、唖然呆然とし、場の空気は揺らいだ。

「お、おやかた様」

権六郎が、白い歯を見せている上総介に訊ねる。

「あれは一体」

「わからねえか」

上総介は非常に愉快そうであった。

「あれは朝倉右衛門督と浅井下野守、それと新九郎だ」

どくろと桔梗

諸将はどくろを目の当たりにして、それぞれ、上総介の愉快さを理解しようと努力した。

何が上総介の真意であって、そこまで上機嫌なのだろうか、と。

浅井朝倉に対してかような怨念を抱いていたのか、その執念というものは地獄の底まで果てしないのだろうか。

いや、もしかしたら上総介なりの供養なのかもしれないのではないか。最後には敵として打ち砕いたものの、備前守長政を気に入っていたのは事実だ。どくろを肴にして酒を飲むことにより、死者を成仏させようとするならわしがどこかにあるらしいし。

だが、諸将たちにははっきりとわからない。なにしろ、彼らの主人は言葉が短いのである。

「誰か、踊れ」

と、口端に笑窪を作ったまま、それだけである。

即座に反応し、前に跳ね出てきたのは藤吉郎である。

「おりゃあが！」

藤吉郎はひょこひょこと跳ね回りながら、禿げ頭をぽりぽりと掻きつつ、前歯を剥いたり、ぎょろぎょろと辺りを見回したり、猿の真似事だった。

サルの奴が、またでしゃばりやがって、と、誰もが思い、白々しく視線を送るものの、藤吉郎は気にも留めずに飛び跳ね回り、やがて、どくろの前にやって来た。

藤吉郎は一体のどくろを手に取り、首を傾げたり、きょとんとしたりする。やがて、どくろの頂頭部が盃状にくり抜かれていることに気付いた藤吉郎は、ぱか、と、それを手に取り、金箔のどくろ盃を口に挟むと、ぴょんぴょんと、やはり猿のように走り始め、柴田権六郎の前で止まった。

次にやった行動に誰もが息を呑む。藤吉郎はどくろ盃を権六郎の

膳に置き、傍らにあった徳利で酌をしたのだった。
「なんていうことを」
太郎が驚愕して呟く。
権六郎の肩が震えている。
しかし、張り詰めた緊張を上総介の大笑いが切り裂いた。
「過ぎた真似だ！」
と、たった一人、笑っている。主人が愉快にしているものだから、諸将たちも合わせて笑うしかない。
「おい、権六！　飲んでやれ！」
上総介に促されて、権六郎は髭の下に引きつった笑みを見せながらどくろ盃に両の手を添え、上総介に向けて盃を持ち上げると、酒をくいっと飲んだ。
藤吉郎がにかっと笑いながら、頭をちょこんと下げ、自席に戻る。
「どうだ、権六。酔狂な味だろう」
「い、いかにも、美味であります」
上総介はげらげらと笑い上げる。浅井朝倉を討伐したときでさえ笑わなかった男が、この怪しい宴席では子供のように腹を抱えている。
気難しい主人が上機嫌であるのはよいことだ。
だが、狂っている。上総介も、藤吉郎も。牛太郎は胸底から暗くなってくるような思いだった。吐き気さえもよおした。あれが浅井備前守の頭の一部だったらと思うと、涙が滲んだ。
上総介の真意など牛太郎にしてみればどうでもよくなってしまっている。ただひたすら悔しい。朝倉右衛門督、浅井下野守がどういう人物であったかは知らない。だが、浅井長政は出来過ぎた男であった。敵を敵として憎まず、己の残酷な生涯を戦乱の快男子として貫いた。
今、風のようだったあの男が、どくろにされてしまっている。しかも、金箔など塗りたくられて。
牛太郎には上総介や藤吉郎が賊の親分と子分にしか見えなくなっ

てきた。
「そこまで美味ならば、皆の者もどくろの酒を味わってみろ」
上総介の言葉に一瞬、座は凍りついた。
「権六、回してやれ」
瞼を大きく広げ、その瞳は好奇の黒に彩られている。せっつくような眼差しでらんらんとさせている。
権六郎は笑みを浮かべながら脇の重臣、池田紀伊守にどくろ盃を渡し、徳利で酒を注ぐ。
「どうだ?」
上総介はいちいち訊ねる。紀伊守は「美味であります」と金太郎飴であった。上総介の表情がやや曇る。
「回せ」
紀伊守は丹羽五郎左衛門にどくろ盃を渡した。徳利の酒を受ける五郎左の手は震えていた。五郎左はちらと一度上総介を見た。
「何を震えていやがる、五郎左」
上総介の語気が若干荒くなっていた。五郎左は上総介を少年時代からよく存じている。視線を伏せると、
「あ、あまりにも珍妙なことで、つい」
「お前は馬鹿真面目すぎる。たまには肩の力を抜いて、騒いでみろ」
と、上総介は笑い声で言った。五郎左は震える手で盃を上総介に向けて持ち上げ、
「頂戴いたしまする」
両目をぐっと瞑りながら、ぐい、と、盃の中を飲んだ。
「どうだ?」
「か、肩の力が抜けたようでございます」
かっかっ、と、上総介は甲高い音で笑い立てる。
牛太郎は五郎左がやった様子を目にすると、瞳孔を広げたままうつむき、額の脂汗を感じながら、止まらない震えを抑えるように太股をぐっと握りしめる。
上総介の真意がわかったような気がしてきた。上総介は憎さ恨み

でこのような真似をしているのでもなく、だいいち、神仏嫌いなのだから供養などとんでもない。ただ単に遊んでいるだけなのだ。おもしろいと思ってこれをやっているのだ。

ましして、どくろをわざわざ金箔に塗るという周到さである。昨日今日思いついたことではなく、ずっと以前から、賀宴の席でこれをやろうと計画していたに違いない。

子供じみている。が、子供じみているからこそ、危うかった。もしも、へそを曲げさせてしまったら、子供のように激怒する。

そして、牛太郎は盃が回されている列に座していた。

「父上」

と、太郎が囁きながら牛太郎の手を握ってきた。牛太郎はすがりつくように視線を向ける。太郎は口許を引き結んで、目だけで言ってきた。

飲みなされ。さもないと、打ち首です。

ところが、逆効果だった。妙な重圧を感じてしまい、備前守の微笑みも一緒に思い出してしまった。牛太郎は信仰を持たないが死者への情緒は人一倍強い。死んだ者たちはこの世には当然いないし、あの世などもないと思っているが、牛太郎の記憶の中では人々は生きていた。

むしろ、そうした人々が牛太郎の芯の一部でさえある。

だから、飲みたくない。申し訳が立たない。備前守はおろか、市にも茶々や初にも。自分はそんな野蛮な男になりたくない。

「簗田殿」

目の色がおかしくなってしまっている牛太郎を見兼ねた十兵衛が、上総介の目をかいくぐりながら声をかけてきたが、牛太郎はどこかに行ってしまっている。

「簗田殿」

十兵衛は声を小さくさせながらも、語気は叱責するようでもあった。

「しっかりなされ、簗田殿」

「いにゃあ、このような酒は今まで飲んだことにゃあです。おやかた様、もしよかったら、おりゃあにこのどくろ盃をくれませんか」

「調子に乗りやがって」

しかし、上総介はまんざらでもない。藤吉郎はまったく上総介の真意を捉えていた。気難しい上総介の折檻を受けながらも、草履取りから長浜十二万石の城持ち武将になれたのは、これだった。諸将にどんな目で見られようと、上総介にさえ嫌われなければ構わないのである。

牛太郎も、諸将には嘲られながらも、上総介には認められているという点で藤吉郎と多少似通っている。ただし、藤吉郎のような機嫌取りはできない。

大役をひっそりとこなし、それをひけらかすこともないが、なぜか馬鹿さ加減が付きまとう牛太郎のさまを、上総介が好んでいると言っていい。欲深なところもあるが、牛太郎には憎めない率直さがあった。馬鹿馬鹿しさがあった。

回し飲みが終わらない様子からすると、もしかしたら、上総介は、牛太郎が何を言い出すのか、それを無邪気に期待し、梓の件を突っ込んでこないのも、そのためかもしれなかった。

牛太郎は人間性を失うような言葉は吐きたくない。そもそも飲みたくない、手に取りたくもない。

だが、そんなことをしてしまえば、上総介は激怒する。絶対に。この日が来るまで子供のように胸躍らせていただろうから、折檻どころではないかもしれない。

そうして、どくろ盃は藤吉郎から十兵衛にまで回ってきてしまった。

十兵衛は物思いにふけるような涼しげな眼差しで、藤吉郎の注ぐ酒を受けている。上総介が笑窪を作って眺める。牛太郎は目を背けるようにしてひたすらうつむく。諸将たちがしんと見守る。

酒を受けた十兵衛は、どくろ盃を手にしたまま、なみなみと揺れる酒を静寂の目でじっと見つめていた。動かなかった。

牛太郎も、時間が止まっていることに気付いて顔を上げた。
「飲めませぬ」
十兵衛は言った。時間が凍った。十兵衛は盃を手前の膳にそろりと置くと、一歩腰を後ろにし、深々と頭を下げた。
「拙者は一度は越前朝倉右衛門督様に世話になった身でございます。それ振り返りますれば、恐れながら拙者には恩義を反故にするようなことはできませぬ」
「このキンカ頭がっ！」
上総介はおもむろに腰を上げ、激怒した。
「恩だとっ！　義だとっ！　テメーは誰の禄を食んでやがるっ！　右衛門督を見限り、義昭を見限ったテメーが、いまさら、恩義だとっ！」
上総介は上座から、だっ、と飛び下りてくると、鬼の形相で十兵衛の前に駆け寄ってき、平伏する十兵衛の頭を踏み潰した。
「余興に水を差しやがって！」
何度も何度も足蹴にされる十兵衛は、黙って耐えていた。牛太郎は震えもしてなかったが、身動きも取れない。髷を引っ掴まれ、顔を上げさせられた十兵衛に上総介が
「飲めっ！」
と、どくろ盃を押しつける。十兵衛は口を開けない。
「飲まんかっ！」
そのうち、酒のすべてがこぼれてしまい、上総介はどくろ盃を叩きつけると、十兵衛を殴り倒した。
「坂本に失せろっ！　このキンカ頭があっ！」
上総介は吐き捨てたあと、目に留まった膳を片っ端から蹴飛ばし、ひっくり返し、広間を出ていった。

「十兵衛殿っ！」
大手門をくぐろうとしていた十兵衛を呼び止めると、太郎の肩を借りながら、牛太郎は歩み寄っていった。

「どうかされましたか」
十兵衛は優しげに笑みを浮かべてくる。
牛太郎は頭を下げた。
「面倒かけてしまって、すいません」
わかっていた。気が動転してしまっている自分をかばって、わざと上総介を怒らせたことを。
「なんのことですか。面倒を引き受けるほどの器ではありませんよ、拙者は」
「拙者からも御礼を述べさせてもらいます」
と、太郎も揃って頭を下げた。
ハア、と、十兵衛は素軽い吐息をつく。
「なかなか、痛いもんですな、おやかた様の折檻は。羽柴殿も簗田殿も大変でしょう。そろそろ、いい齢なのですから、体を張るのもいかがなものですぞ」
「すいません」
枯れ枝のように首を垂らす牛太郎。
「らしくありませんね。奥方の折檻がそこまで応えましたか」
十兵衛は牛太郎の肩をぽんぽんと叩いてきた。梓の折檻が結構応えているせいもあるだろうが、十兵衛の言葉が身に染みて、牛太郎は言葉がなかった。
「簗田殿、拙者は嬉しいのです」
唐突にそう言った十兵衛に、親子は揃って目を丸めた。
「これですよ」
十兵衛の手が牛太郎の腰の物を手に取った。水色桔梗紋の入った脇差である。ずいぶん昔に十兵衛が牛太郎にくれたものだった。
「いつもこれを差して頂いてくれている。目にするたびに思い出すのです。簗田殿と初めて会った菩提山の秋を」
十兵衛は微笑みを浮かべたあと、くるりと背中を返した。
「坂本にもたまには寄ってくだされ」
風雅な男とも、きざな中年だとも思った。ただ、大手門をくぐっ

ていく十兵衛の後ろ姿は大きく見えた。
本当にあの男が時代を変えてしまうのだろうか。牛太郎はあまり考えたくなかった。

朝の鍛錬

年が明けて、また、簗田家の主人は訳のわからないことを言い出した。

「新婚じゃないけど、新婚旅行に行ってくる」

なんでも、向かう先は北近江、痛めつけられた体も全開には程遠いうえに、梓まで連れて行くという。

内実は羽柴藤吉郎にせがまれたらしいが。女房の寧々を一度連れていくので、牛太郎にも是非梓を連れてこいとしつこく迫り、馬に跨れない牛太郎のための輿も梓の駕籠もすべて藤吉郎が用意してきた。

どころか、牛太郎の外出の許可をすでに上総介に貰ってきていた。女房にいびられている牛太郎が不憫で仕方がない。だから、梓と仲睦まじくさせるために、彼らの気分を変えて長浜に連れていきたいとかなんとか言って。

「好きにしろ。どうせ、痩せ牛に使い道はねえ」

とは、上総介の言葉である。

「どうせ、何かがあるに違いないけどよ」

終始愚痴っていた牛太郎は小姓の新三、それに梓のためにかつを連れて、当分の間岐阜を離れた。

これにしたり顔となったのは、七左衛門である。

「あの恐ろしい奥方様が岐阜にいないってだけで、ここまで羽根が軽やかになるもんか」

宿屋兄弟も弥次右衛門同様、城下の長屋住まいで、与力の大石新七郎は沓掛に行っている。稲葉山の屋敷に住み着いているのは、女中たちと新三、馬丁の栗之介であるが、人の少ない簗田家には、上下厭わず揃って食事を取るという常識外れの家風があって、七左衛門もそれに付き合わされている。

揃って飯など食いたくないなどとは梓が恐ろしくて言えなかった

のだ。
「奥方様はいちいち厳しいからな。箸の持ち方なんて別にいいだろうがよ。俺たちは荷役くずれなんだから」
「兄さん。あんまり口が過ぎると、痛い目に合うよ。それこそ旦那様みたいに」
「まあ、それだけは勘弁だけど。でも、本当にうるさいからな。この前なんてそのうち嫁を見繕ってやるから、城下の変な女には手を出すなだなんて言ってきたんだぜ。あの人ってのは、本当に、こう、お堅いっていうか、なんていうか。そのくせ暴れ狂犬なんだから、参っちゃうよ」
そういうことで、七左衛門は梓が消えたその日から岐阜の夜に繰り出し、治郎助が眠る長屋に戻ってきたのは夜明け前。わざわざ早朝から稲葉山に出向かなくて済むとせいせいしながら布団にもぐったが、それからしばらくもしないうちに長屋の戸を叩く音があった。
すでに目覚めていた治郎助が戸を開けると、やって来たのは篠木於松である。
「どうしたんですか、於松殿」
「若様が稽古をつけてくれるってよ」
「兄さん！」
治郎助はこんもりと丸くなっている布団を揺らす。
「若様がお呼びだってさ！　稽古をつけてくださるらしいよ！」
「んだよっ。うっせえなあ。稽古なんかやってられっか」
「兄さんってば！　若様直々だよ！　何を言ってんのさ！」
「うっせえっての！　やめろっ！　若様は優しいから見逃してくれんだろ！　俺は眠いんだよ！　お前が行って、兄貴は風邪でも引いたって言っておけよ！」
「ししし」
治郎助は仕方なく七左衛門を置いて於松のあとをついていき、長良川にやってきた。
朝霧漂う河原にはすでに左衛門太郎と弥次右衛門、栗之介と二頭

の馬、それと見慣れぬ巨漢の青年が口をへの字に曲げてそそり立っていた。
「この方は九之坪勢を率いている佐久間玄蕃允殿――、って、治郎。七左はどうしたのだ」
太郎に問われて、治郎助はちょっと視線を落としてしまう。
「ええと、兄は風邪を引いてしまったそうで」
「稽古なんかやってられっか。若様は優しいから、俺は行かねえって言ってましたよ」
と、於松が告げ口をして、憤怒したのは太郎ではなく玄蕃允だった。
「なんだとっ！　連れ出してきてやる！」
玄蕃允は火車のように長屋へと押し掛け上がり込むと、布団を剥ぎ取り、七左衛門の襟首を掴み上げた。
「な、何すんだ、この野郎っ！」
「誰に口きいているんだ、おおっ？　さっさと来い！」
玄蕃允の迫力に圧倒された七左衛門は、着の身着のまま長良川まで連れ出され、川に投げ込まれた。真冬の水の冷たさにひいっと飛び上がったところ、玄蕃允の右拳を食らって、また、川の水を飲まされる。
「この野郎っ！」
頭に血が昇ってしまった七左衛門は玄蕃允に殴りかかっていったが、返り討ちにあって、最後には河原の上に伸びた。
「本当に風邪引いちまうぞ」
栗之介がどこからか枯れ木を持ってきて、七左衛門の脇で火打ち石を鳴らしたが、七左衛門の前に槍がぽんと放り投げられてきた。
「汗をかけばすぐ乾くわ」
玄蕃允に掴み起こされ、槍を押し付けられて、弥次右衛門や治郎助とともに息絶え絶えの体で鍛錬をさせられる七左衛門。
巨漢の青年が、梓の甥で、鬼玄蕃の異名を取る男だと於松に聞いたときには、七左衛門は厳しい鍛錬をさせられたあとで朦朧とし、

河原の上に突っ伏してしまっていた。
「じいさん。早く言ってくれよ、そういう人がいるって」
「ししし。知っていて言わなかったんだよ」
於松は笑いながら、焚火の向こうで何かの皮を短刀で裂いている。訝しんで訊ねてみると、いたちだと言った。剥いだ皮は売り物にし、肉は食べるのだと三本の歯を見せて笑ってきた。
「おめえも食うか？」
「げえ。いらねえよ」
於松だけは毎日簗田家の食卓に並ばないし、普段はどこにいるのかもわからない。つまり、山か野に出てそういうことをしているのだと想像できると、七左衛門は気味が悪くなった。
治郎助が太郎や玄蕃允と話しながら、槍を構えたり突いたりしている。真面目でつまらない弟だ。七左衛門は仰向けに体を返すと、霧もやがうっすらと晴れてきた向こう、青く広がる空を眺めた。
自分にべったりと付いてくるだけだった弟もいつしか大人になったものだ。
「いつか、手柄を上げられて追い抜かれちまうよ」
於松の言葉に七左衛門は鼻で笑う。「んなこたぁねえ」と。
「今日はたまたま二日酔いなだけだ。そんなことよりよ、なあ、じいさん」
七左衛門は体を起こすと、いたちの肉を串刺しにしている於松に訊ねる。
「手柄を上げるも何も、旦那様のところにいていくさ場で活躍できんのか。旦那様は滅多にいくさ場に出ないんだろ。若様の下に付くならともかく、俺らはなんだか旦那様の従者じゃねえか」
「馬鹿言っちゃいけねえ。これからはいくさばっかりだ。旦那様は摂津にも縁があるし、武田にも縁がある。嫌でもいくさ場に連れて行かれるよ。でっかいいくさにな。ししし」
「つったってなあ。俺はともかく――」
七左衛門は一人ぽつんと丸まって座り込む弥次右衛門に視線をや

った。肩で大きく息を切らしており、年かさの弥次右衛門は鍛錬で粉々に疲れてしまったらしい。

「本当だかどうだか、若様の叔父御の弥次さんは使いものにならなそうだし。大石新七郎殿は若様の右腕みてえなもんだんだろ。旦那様の与力で使える人間は俺しかいねえじゃねえか」

「もう、与力のつもりかい、おめえさんは」

「まあ、そうだ」

「おめえみてえなうつけは、いつかいくさ場で死ぬな」

「心配すんな。じいさんよりは長生きすっからよ」

「ししし。どうだかね」

「あーあ、俺も早く馬乗り侍になりてえな。きんきらの甲冑を着込んで、我は宿屋七左衛門にて候なーんて名乗りを上げてえよ」

黒連雀が川岸をばしゃばしゃと走り回っており、栗綱がそれをぼんやりと眺めている。

「旦那様、栗綱をくんねえかな」

とうてい不可能な願いを口にしたとき、栗綱の近くに女が座っているのに気付いて、七左衛門は「おっ」などと、いちいち気色めいた。

「着ている物は貧相だけど、顔立ちはなかなかじゃんか」

ぼさぼさの長い黒髪で、擦り切れた薄っぺらい半纏を着ている。

「あんな蛇みてえなのがなかなかなんて、どうかしてんな、おめえ」

於松の蛇のたとえも的を射ていなくもない。袖から覗ける腕も脚も痩せ細っていて、にこにこと栗綱を見つめている顔だけがくっきりと深彫りである。瞼は大きく、瞳も黒い玉のようで、唇は鳥のくちばしのように厚い。

「ありゃあ、どこの娘だ。簗田に縁でもあるのか」

「弥次の上の娘だよ」

「へえ」

と、七左衛門はすっかり冴え渡った眼差しで腰を上げた。牛太郎の企みにより弥次右江門の娘を娶らされるすんでまで行かされたが、

雇われ百姓の農奴の娘などに期待していなかった七左衛門は、今ごろになって笑みを浮かべた。
「いいのかい。あの娘は物狂いだし、傷物だぞ」
於松が言ったので、七左衛門はどういうことだと訊ねる。於松はにたにたと笑いながら、へばりつくような視線を向けてくる。
弥次右衛門の上の娘は尾張の児玉ではちょっと知れた娘だったらしい。一日中素足でふらふらと歩きまわり、犬猫と話していたり、旅の僧に付いていってしまったりと、頭が弱い。そのくせ、隙のある色っぽさがあるから、やくざ坊主や足軽雑兵などに何度も犯されていて、二度産んだ子は間引きされている。
「手を付けたら最後、嫁にさせられるよ。ただでさえ嫁にやりずれえ娘なんだから」
「てかよ、なんで、じいさんがそんなことまで知ってんだよ。弥次さんに聞いたのか」
「旦那様に弥次の素性を調べるよう申しつけられたんだよ」
にたあと笑った於松の薄気味悪さと、なかなかどうして油断なく身元を洗っている主人の牛太郎に、七左衛門は少々寒気を覚えた。

すえ

弥次右衛門の娘はすえというらしい。栗綱に何事かを話しかけているが、栗綱は耳をぱたぱたと動かすだけで、視線は暴れ駆けている黒連雀を追っている。

七左衛門は於松の忠告も無視して、そろりそろりとすえに近づいていった。栄達を夢見る若者らしい好奇心の旺盛さと、船の上でも大将面をしていたほどの活発さである。手込めにしてやろうとか物狂いの女の味を知ろうとかそういうものではなくて、ただ単にからかってやろうと思った。

「よお。すえっていうらしいな」

にやにやと笑いながらの七左衛門に、警戒しているのか、すえは黒い瞳でじっと見つめてくる。

「お前、なんでここにいんだ」

「あんた、誰」

と、すえの声は割れ霞んでいた。

「俺は簗田左衛門尉与力、宿屋七左衛門だ」

「この子の御主人様？」

「そうだ」

七左衛門の背後に大きな影がのそっと聳え立った。あわてて、振り返った七左衛門の頭に玄蕃允の拳骨が落とされる。

「法螺ばっかり吹きやがって。来いっ！　その腐った性根、叩き直してやる！」

襟首を掴まれ引きずられていった七左衛門の姿に、すえはきゃっきゃと笑い立てた。

「おかしい人。本当にお前様の御主人様なの？」

すえの問いに栗綱はぼんやりとしているだけである。

「お前様はおとなしい子だねえ。クロスケと一緒に遊ばないの？」

そのクロスケははしゃぎ疲れてしまったらしく、川面に鼻面を突

っ込んで水を舐めている。左衛門太郎が「クロ」と呼びかけると、黒連雀は頭を上げてじっと太郎を見つめ、やがて首を上下に振り始めながら、ちゃかちゃかと太郎に歩み寄っていく。

「お前様たちの御主人様はあのお侍さんなの？」

「違うよ」

と、言ったのは栗綱ではない。どこからかやって来た栗之介であった。摘んできた草を手にしている。それに首を伸ばしてむしゃむしゃと食べ始めた栗綱の鼻面を撫でながら、栗之介は言う。

「クロの主人は若だけど、こいつの主人は簗田牛太郎だ」

「誰？」

「お前の父ちゃんの主人だ」

「あんたは？」

「俺は栗之介だ」

掌の草を食べ尽くした栗綱が、鼻面を栗之介の胸元にぐいぐいと押し付けて、もっと寄越せとねだってくる。

川岸では七左衛門が槍に見立てた棒で玄蕃允と向かい合わせられており、呆気なくやられた。

「この子はいくつなの？」

「や、八っつだ」

と、栗綱にぐいぐいと押し込まれながら栗之介は言う。

「もう、いい齢だよ。なのに、子供みてえなんだもんな」

ぱかぱかと黒連雀が馬上に太郎を乗せて歩み寄ってきた。手綱を軽く絞られると、若干嫌気を差すようにして首を大きく振るものの、

「こらっ」

と、たしなめられて、鼻を鳴らしながらようやく制止する。

栗綱が押し相撲をやめた。弟の黒連雀をじっと見つめる。自分たちが兄弟と理解しているのかどうか、仲が良いのか悪いのか、二頭の馬はしばらくじっと見つめ合ったあと、お互いぷいと顔を背けてしまう。

人間がするような仕草に、すえがはしゃいだ。

「お主、馬が好きか」
馬上からの太郎の言葉に、すえは声を止めてきょとんとした。
「す、すえっ」
娘が付いて来ていたことにようやく気付いた弥次右衛門が駆け寄ってきて、すえのばさばさの頭に掴みかかると、無理やり頭を押し下げた。
「も、申し訳ねえっ。こいつは頭が悪くて駄目なんだっ」
「いやあっ。いやあっ」
すえが弥次右衛門の腕にがぶりと噛みつき、騒ぎ立てた父親を尻目に逃げ出すと、そのまま姿を消した。弥次右衛門がすえに噛みつかれた跡を握り締め、顔をしかめながら、
「あ、あいつのことは気にしねえでくろ」
太郎は表情なく弥次右衛門を見下ろす。やがて、赤黒縞の鞭を取り出すと、いきり始めた黒連雀をなだめながら、
「一回りしてくる。先に戻っていなさい」
鞭をびゅうっと鳴らして、黒連雀は一気に跳ねて駆けていった。
一行は稲葉山の屋敷に向かう。もうすでに於松は消えてしまっている。玄蕃允を先頭にして、新参者の三人は槍や棒を担がされる。ぼろぼろにされてしまった七左衛門は、睡魔も手伝って、首をぐったりと垂らしながらだった。屋敷に辿り着くと、庭先で真っ先に倒れ込んでしまう。
「だらしないなあ、兄さん」
と、治郎助にまで嘲られる有様。七左衛門には返す気力も残っていない。
「お風呂が上がってますよ。汗を流して、朝食にしましょう」
縁側からの声に目だけを向ける。左衛門太郎の女房のあいり。子を産んだせいかふっくらとしていて、鬼梓のような美女でもないが、それでも武士の女房として華がある。
左衛門太郎が下賤な町娘の子で、あいりが明智庄の足軽雑兵の娘であるのは、七左衛門が格太郎の名だったときから耳にしていたこ

とだ。

それが、左衛門太郎は牛太郎の養子に、あいりは丹羽五郎左衛門の養女に、それぞれなったことで、今では本来の出自などかすんでいる。

「将とその他大勢ってのは全然違うんだ」

簗田家は主人の牛太郎が風呂好きなため、人手は少ないくせに風呂場と茶室は贅沢である。上総介の下知で稲葉山に屋敷を築造したさい、風呂場の造りだけは自分の思い通りにしてくれるよう上総介に頼み込み、大工にあれやこれやとうるさかったらしい。どこでそんな知恵を手に入れていたのか、蒸気が逃げないよう壁にも床にも板が何枚も張られていて、しかし、大きな格子窓が、朝は太陽の光を吸い込み、夜は虫の声を届かせる。鋳鉄製の風呂桶は大男の牛太郎が悠々と浸かれる大きさ。

このような風呂場は岐阜の城か、それとも京の公家屋敷ぐらいにも匹敵するから、たまに梓やあいりと仲の良い近所の女房連中が湯を貰いに来るらしい。藤吉郎も牛太郎の目を盗んでやって来ることがしばしばだという。

治郎助に背中をこすらせながら、七左衛門は言う。

「将になれば嫁から風呂まで違うんだ」

「だったら、きっちりと腕を磨くんだな」

と、風呂桶に浸かっている玄蕃允が言った。自分の家の風呂のように満ち足りた表情である。

「ちぇ、玄蕃様だって風呂を貰っているくせに」

「何か言ったか」

ざばあ、と、湯を大量にこぼしながら玄蕃允が風呂桶から出て、七左衛門は彼をじっと見つめる。

「案外、粗末ないちもつですね、玄蕃様」

びしっ、と濡れ手拭いで七左衛門の頭を叩くと、玄蕃允は洗い場から出ていった。七左衛門は舌打ちしながら風呂桶に入ろうとする。しかし、もう一度、舌を打った。湯が半分もなくなってしまってい

る。
「やっぱり、弥次さんの娘を嫁にして与力にさせてもらうのが手っ取り早い」
「槍一つで伸し上がってみようとは思わないのかよ、兄さん」
「馬鹿言え。若様だって旦那様の養子になって、将になったんじゃねえか」
風呂場を上がり、着物を纏って縁側を行くと、馬屋の前で栗綱と黒連雀の体を栗之介が洗っているところ、すえの姿を見つけて七左衛門は口許を緩めた。どうやら、姿を隠し隠しくっ付いてきたらしい。
「兄さん、やめなよ」
治郎助の制止も無視して、七左衛門は草履を突っかけると、にやにやとしながら馬屋に歩み寄る。瞼をうつらうつらと下げている栗綱の鼻面を、すえは撫でていた。
「よお、いつの間にくっ付いてきたんだ」
すえは七左衛門を無視しているのか、声が聞こえていないのか、にこにことしながら栗綱を見つめている。
「お前、栗綱がよっぽど好きなんだな」
と、七左衛門がすえの肩にすうっと手を回したところ、
「いやあっ！」
腕を払ってき、歯を剥きながら七左衛門を睨みつけてくる。すると、突然、栗之介に櫛を入れられていた黒連雀がいななきながら立ち上がり、どすんと前脚を七左衛門の真正面に振り落としてくると、血走った目をにじり寄せてきた。
「ちょ、ちょ、ちょっと！　栗之介さんっ！」
黒連雀の威圧に、七左衛門は腰を抜かし、あたふたと後ずさりする。栗綱が七左衛門をぼんやりと眺めてくる。
「あーあ、クロに嫌われちまった」
「な、なんでよ！」
「助平だからだろ」

黒連雀が首を振り乱しながら前脚でちゃかちゃかと地面を馴らし始める。身の危険を悟った七左衛門は一目散にその場から逃げた。

大判の行方

「叔父上」

朝食も済んだ広間に弥次右衛門は一人、左衛門太郎に呼び出された。

「児玉に帰りなされ」

不安げに眉尻を垂れ下げる弥次右衛門の前に、太郎は巾着袋を差し出した。置くときに袋の中で音が鳴ったので、弥次右衛門が息を呑みながら太郎に顔を上げると、太郎は薄っすらと静める眼差しで、弥次右衛門を見つめ返す。

「開けて確かめなされ」

弥次右衛門が巾着袋の紐をほどくと、中には黄金を叩き伸ばした譲葉金、大判が四枚入っており、米石高にすれば二百石相当、銭貨にすれば百貫、百姓の家族なら三十年は食うに困らない額であった。

太郎の俸禄は三百貫である。沓掛三千貫の簗田家とはいえ、父の牛太郎が常に疑っているので太郎は沓掛城の収入を私的に扱えない。岐阜の家は太郎の俸禄から賄われているので、大判四枚はおいそれと渡せるものではなかった。

「それで静かに暮らしなされ。叔父上にいくさ場は向いておりませぬ」

大判どころか、金など目にしたことがない弥次右衛門は、震えながら巾着袋を胸に抱き寄せると、

「す、すまねえ」

と、頭を下げた。

弥次右衛門はその足で馬屋にひっついているすえの腕を掴み取り、騒ぎ立てるすえを稲葉山から無理に連れ下ろしていく。

山菜を摘んでいた於松がそれを見ていた。於松はひそかに弥次右衛門とすえの後を追い、彼らが城下の長屋に入っていくと、板壁に耳を寄せる。

「た、太郎から大判を四枚も貰った！　もうこれでひもじい思いをしなくて済むぞ！」

弥次右衛門の嫁らしき者が喚声にもならない奇声を放ち、於松はそこを離れると、別の長屋に出向き家屋の戸を叩いた。

戸が開いて、治郎助が出てくる。

「どうしたのですか。鍛錬は昼間からだって玄蕃様が言っていたはずですが」

「しししし」

於松は後ろ手に戸を閉めると、丸まっている布団をちらと見やったあと、言った。

「弥次が若様から大判四枚を頂戴したみてえだ」

「なんだって！」

七左衛門が掛け布団を蹴飛ばして飛び起きた。

「それってどういうことだよ、じいさん！」

「大判と引き換えに尾張に帰れってさ。で、弥次はとっとと帰るつもりだ」

「あの野郎……」

「しししし」

於松は言うだけ言うと、長屋から去っていった。

「あのおっさん、結局はそういうことだったってわけか。ふざけやがって。銭だけ貰って、はいさよならなんて、男気のねえ野郎だ」

「別にいいじゃないか」

治郎助が吐息をつきながら腰を下ろし、止めていた草鞋の補修を再開する。

「弥次さんがいたって、足手まといなだけなんだからさ」

「そういう問題じゃねえだろ。一度ははいお願いしますって口にしたんだぞ。それを大判四枚ごとき並べられただけでさよならかい。だいたい、ドケチの旦那様がこんなことを許すはずねえだろ」

「旦那様がいないから、若様は弥次さんを追い払ったんだよ。だいたい、若様にはいろいろ難しい気持ちがあるんだよ」

「許さん！」
七左衛門は立ち上がると、股引を履いて、帯を締め直した。
「一発、ぶん殴ってきてやる！」
「ちょっと、兄さん！」
七左衛門は治郎助の声も聞かずに長屋を飛び出していった。
「おい、弥次！　開けろ、こら！」
弥次右衛門の長屋の戸をぶち破らんほどに叩き続けていると、弥次右衛門があわてふためきながら戸を開けてきて、七左衛門はその襟首を掴み上げた。
「どういうことだ、おっさん！　あんたは旦那様の家来になったんじゃねえのか！　金だけ貰ってとんずらしようだなんて、なめてんのか、こら！」
「か、堪忍してくれえ。俺なんかがいくさなんて無理なんだよお」
「やめてください！」
少女の悲痛な声に、七左衛門はいからせた顔を向けた。はっとして、絞っていた眉間を緩ませ、両腕から力を抜いてしまう。部屋の片隅に座りこむすえが猫みたいに目を据わらせ、それを弥次右衛門の嫁らしき女が抱いている中で、屹とそこに直立し、両拳をぎゅうっと握りながら七左衛門に立ち向かってくるその少女は、おそらくすえの妹のはずなのだろうけれど、黒髪が農奴の娘とは思えないほど艶がかっていて、目鼻立ちもはっきりとしている。眉だけが勝気さ漂う尻上がりで、耳にしていたところ齢十三のはずなのに、わりと大人びていて、わりと七左衛門の好みだった。
「お父ちゃんはただの百姓なんです！　勘弁してください！」
そうして、下の娘は床に膝を付くと、這うように頭を下げてくる。
「この通りです！　勘弁してください！」
七左衛門は弥次右衛門から手を離した。口をへの字に曲げながら、娘の頭を見つめる。弥次右衛門も土下座してきた。
「申し訳ねえ！　この通り！　俺っちのことは忘れてくれ！」
ちぇっ、と、七左衛門は踵を返した。

「お嬢ちゃんの顔に勘弁してやらあ。てかよ、本当に大判四枚も持ちながら尾張まで帰るつもりか。いくら、織田領は治安がいいとはいえ、物騒な世の中に変わりはねえんだからよ。だったら、弥次さんと知り合ったのも何かの縁だ。あんたら家族、尾張まで護衛してやるよ」

「ほ、本当か？」

「お父ちゃんっ！」

「いいんだよ、お嬢ちゃん。俺はここに来るまでは堺の船乗りだったんだ。船乗りってのは仲間たちとの信頼関係で始めて海に出られるんだ。へっ。酔狂なもんだぜ。船を下りても、情に薄くはなれねえんだからよ。で、お嬢ちゃん、名はなんていうんだ」

「た、たまっていいます」

「おたまか。いい名だ。弥次さん。尾張に行くときは言ってくれ。俺が付いていれば百人力だからよ」

七左衛門は微笑みを残すと、自らの長屋へ戻った。

布団の中に潜るまでの間を治郎助が怪訝そうに見つめる。

「どうしたの。にやにやして。喧嘩してきたんじゃないの」

「へへ。治郎。お前は勿体ないことしたよなあ。弥次さんの娘ってのは、上のあいつは変人だけど、下の子はあのオヤジのくせに、なかなかの上玉なんだぜ。まあ、まだ、子供だけどよ、あとちょっともすれば、結構な女になるよ。しかも、嫁にしちゃえば簗田家一門衆なんだからよ」

しばらくすると、七左衛門のいびきが響き始めて、治郎助は溜め息を深くついた。

四日後、弥次右衛門一家は後ろめたさを振り切るように岐阜を立った。七左衛門も付いていった。無論、太郎には無断である。

ふらふらと道草ばかりのすえを嫁がたしなめ、弥次右衛門とたまが荷駄を担いでいく。

「貸しな」

七左衛門がたまの荷駄をひょいと担ぎ上げ、格好をつけた。

ところが、岐阜を出てしばらくし、難所の木曽川を渡れば尾張の国という目前で、弥次右衛門一家は野盗に遭遇してしまう。

七左衛門の言ったように、乱暴狼藉を嫌う上総介の令により、織田領はちょっとした盗みでさえ死刑になるほど規律が徹底されている。織田が尾張美濃を治めるようになって五年以上が経過しており、野盗などもっての他だ。

しかし、現実には目の前にいた。五人だった。どれも大柄の男で、顔つきはそれなりに野蛮そうで、

「おめえらの荷物、全部ここに置いていったら娘たちは許してやらあ」

と、腕力の自信に満ち溢れている。

「お前ら野盗風情が！　この宿屋七左衛門が返り討ちにしてやるわ！」

とはいえ、太刀も脇差も持っていない七左衛門は、拳一つだった。いいところを見せられたのは頬に見舞ってやった拳一発だけで、あとは五人に寄ってたかって殴り蹴飛ばされ、突っ伏して伸びた。

結局、弥次右衛門一家は荷物をすべて奪われ、挙げ句に大判四枚も見つけ出されて、無一文となった。

弥次右衛門とその嫁は肩をがくりと落とし、涙に暮れる。すえはけらけらと笑っている。たまは、瀕死――でもない七左衛門に屈みこみ、手拭いで彼の鼻血を拭った。

「おらたちのためにごめんなさい、七左さん」

年端もいかない娘に顔を向けていられなくて、七左衛門は両目をぎゅうっと瞑った。弱すぎると思った。

「どうすれば。これから、どうすれば」

と、泣きしきる弥次右衛門に七左衛門はぽつりと言った。

「岐阜に戻って、若様に謝るしかねえだろ」

さて、弥次右衛門一家から荷物を奪い取った野盗――ではなく、尾張九之坪勢の足軽兵五人は木曽川の川べりで篠木於松と合流した。

「いいのかよ、於松さん。こんな真似をしちまってよ。ちゃんと、

ケツだけは拭いてくれよな」
「あいあい。ほらよ、駄賃だ」
於松は彼らが奪い取って来た大判のうちの一枚を、組頭に渡した。
「口止め料だかんなあ。ちゃんと皆で分けるんだぞ」
「荷駄はどうすんだよ」
「そんなもの川に捨てちまいな。ししし」
於松は足軽兵たちと別れると、岐阜の城下をくぐり抜け、一路、北近江小谷を目指した。
牛太郎は旧小谷城下の寺社で寝泊まりしている。夜、於松は人目を忍んで寺社に入り込み、梓を寝床にしていないことを確かめると、障子戸の向こうに声をかけた。
「なんだ、早かったな。入れ」
於松が戸を開けると、牛太郎は梓の小袖で顔を覆って、布団の上に仰向けになっていた。
「首尾よく行きましたよ、旦那」
牛太郎は小袖を除けると、体を起こした。肥えた体は見る影もなくなったが、藤吉郎の好意か何かで食ってばかりいるし、初めて外の世界を見回っている梓が上機嫌でいるので、瞳に生気は戻っていた。
「で、ヤジエモンはどうした」
「岐阜に戻りましたよ。馬鹿な七左がぼこぼこになりましたがね」
「あの野郎。女たらしは助さんじゃなくて、兄貴のほうだったか。まあいい。出せ」
「なんのことで？」
「なんのことでじゃねえよ。太郎がヤジエモンにくれちゃった金だ。どさくさに紛れて自分の物にしようとしてんじゃねえ」
於松は渋々半纏の袖から大判三枚を取り出し、牛太郎の前にそれを並べた。
「一枚は九之坪の奴らにくれましたからね。口止めで」
「気がきくじゃねえか」

牛太郎は大判二枚を手に取り、それを自分の懐におさめると、一枚は於松の前に戻した。
「これはジジイの分だ」
「いいんですかい」
「口止めだ。お前は信用できねえからな」
「そんなこと言わねえでくださいよ。旦那様にいの一番に報せたのはあっしですよ」
「まあな。だから、くれてやる。褒美だ」
「ししし。さすがは旦那様」
「それにしても、太郎の奴は本当に頭でっかちだな。ヤジエモンに金なんかやっちまったら、児玉の連中が押し寄せて来るじゃねえかよ。まあ、気持ちはわからんでもないけどよ」
「そんなことより、旦那様」
「なんだ」
「その残った二枚は若様に返してあげるんですかい」
「……」

築田牛太郎冥利

藤吉郎の目当ては案の定、牛太郎への借財だった。

長浜に城を築くための銭が足りないという身勝手な理由による。

牛太郎が頑として断っていると、藤吉郎は恩着せがましく小谷に招いてやったことを述べ始め、例のように牛太郎と藤吉郎の言い争いになったところで、物怖じしない新三が言った。

「材木なら、浅井様が竹生島に隠していたという噂がありますが」

「ほ、本当かえ！」

新三は南近江栗太群の生まれである。琵琶湖の恵みでその日を暮らしている船頭たちが噂していたことを説明すると、藤吉郎は長浜へとまっしぐらに飛び出していき、琵琶湖の北部に浮かぶ竹生島へと船を走らせた。

竹生島には新三の言葉通り、大量の材木が眠っており、

「おみゃあ！　牛殿には勿体にゃあ子供だぎゃあにゃ！　おりゃあの小姓になりゃれえ！」

「お言葉ありがたく存じますが、遠慮させて頂きます」

「おみゃあみてえな賢い子供が牛殿の小姓なんて勿体にゃあ。いつでも牛殿を見限って、おりゃあの元へ来るんだぎゃあ」

藤吉郎は早速、長浜の築城を始めようと人を集めたが、藤吉郎があれこれやかましく口を挟んでいたのも束の間、越前で異変が起きた。

朝倉氏を滅ぼして以降、上総介は旧朝倉家臣の桂田播磨守を越前守護代としていたが、桂田播磨守は圧政をもってして越前民衆の恨みを買い、これに乗じて、同じく旧朝倉家臣の富田弥六郎が民衆を扇動して土一揆を引き起こし、播磨守を打ち殺した。

富田は越前守護代を自称し、上総介に人質を差し出して、自分を正式な越前守護と認める旨を嘆願するが、上総介が悩む間もなく、今度は富田の圧政に民衆が怒り、一揆衆は加賀の本願寺教団の手を

借り、一向宗を越前に引き入れ、富田を打ち滅ぼさんとする軍勢は十万人以上に膨れ上がった。

富田はわずか千人弱の兵数で、鳥合の衆の一向一揆勢を一度は潰走させたが、その後も寡兵にありながら大勢へのなかば無謀な突撃を繰り返したために兵卒たちの心は離れていき、最後は配下の者に殺された。

混乱のすえ、越前は加賀のように一向一揆衆が自治権を獲得し、上総介はこれの備えのため羽柴藤吉郎や丹羽五郎左衛門などを敦賀群へ向かわせた。

さらに、これに呼応したのかどうなのか、武田が動いた。東美濃岩村城に大膳大夫勝頼率いる軍勢が入城したとの報告が岐阜に入った。武田軍は矢継ぎ早に明智庄へ襲いかかり、長山城を取り囲む。上総介は嫡男勘九郎を連れて出撃し、大膳大夫と決戦に持ち込もうとしたが、山々が連なる明智庄近在は決戦に向かなかった。

織田軍と武田軍がどちらから仕掛けることもできずに睨み合っていると、長山城内で飯羽間右衛門という将が反乱を起こし、武田の手となってしまう。

上総介は仕方なく高野というところに城を築き、ここに織田古参の将、河尻与兵衛を置き、さらに小里というところにも城を置いて、守将を池田紀伊守にし、両者を武田軍の東美濃侵攻に当たらせた。

小谷で静養中の牛太郎は、岐阜に呼びつけられた。一日で来いという達しだった。牛太郎は梓を置いてあわてて小谷を出、輿の上にしがみつきながら担ぎ手たちを叱咤し、一昼夜をかけて岐阜に舞い戻ってきた。

「いつまでも遊び腐りやがって」

上総介の機嫌は相当の悪さで、これは間違いなく折檻されると牛太郎は覚悟して平伏したが、

「武田をどうにかしろ」

と、意外すぎる言葉であった。牛太郎は思わず顔を上げてしまい、いつものように扇子を投げつけられる。

「痩せても、お前はうつけだ」
「と、とは言っても、このうつけに武田をどうにかしろだなんて」
「徳栄軒とまともにやり合ったのは織田ではお前だけだ。自由にさせてやる。摂津のようにどうにかしてこい」
上総介は席を立って、牛太郎の前から去っていった。
牛太郎は上総介の姿がなくなっても、しばらく膝をついたまま、その場で悩みこんだ。
上総介の下知は対武田戦略の全権を牛太郎に与えることにも捉えられる。しかし、摂津を割ったときとは様相がまったく違う。武田家は摂津の豪族たちとは比べ物にならない大大名であるし、偉大な徳栄軒が死んだとはいえ、大膳大夫勝頼を中心とした一枚岩の武者軍団である。
付け入る隙がまるでない。――というのが実際である。
長篠。
後世からやって来た牛太郎は、史実に疎いせいで、己の境遇を有利にさせてこられなかった。しかし、織田軍が鉄砲という新戦法で武田騎馬隊を壊滅させたという大事件は、牛太郎でも知っていた。
先の二俣城の攻防及び三方ヶ原決戦では、それが長篠の戦いに結びつくのではないかと勘違いしていたためにひどい目に合ったが、すでに織田軍は二千丁の火縄銃を備えており、そのときがいつ来てもおかしくはない。
問題は長篠の戦いがいつなのかということで、実は上総介に全権を与えられた自分が武田軍と織田軍を長篠で引き合わせるのではないかと、牛太郎は考えた。
しかし、どうやって。
すべての経験が無いに等しい。織田軍は鉄砲隊を主とした戦いを今まで行ってきていない。過去には三段撃ち、三段撃ち、と、馬鹿の一つ覚えのように連呼していた牛太郎だが、金ヶ崎の退き口で沓掛勢が朝倉勢の大軍に飲み込まれてしまったのを目の当たりして以来、火縄銃が戦場でさほど活躍できるとは思えなくなっていた。

だが、対武田を上総介に委任され、徳栄軒及び山県三郎兵衛尉に苦渋を舐めさせ続けられてきた牛太郎は、これは簗田牛太郎冥利に尽きると思い、瞳には熱を、手には拳を握り締め、すっくと腰を持ち上げた。

ひとまず、長篠に行ってみるしかない。どうするかはそれからだ。

「えらい役目を仰せつけられましたね」

部屋を出ると、長谷川藤五郎が待ち構えていた。

「おやかた様は京の帝の元へ向かうそうですから、てっきり、オヤジ殿も連れていくために呼び出したのだと思っていましたよ」

「天皇陛下に会いに行くのに、信長様がおれを連れていくわけねえじゃんか」

「いやいや、それが、東大寺に納められている天下随一の香木、蘭奢待の切り取りの勅を所望するためとかで。オヤジ殿が香木に興じられているのはおやかた様も耳にしていますからね」

「よ、よくわかんねえけど、知っているの？　おれが香木を漁っていることを」

「知る人は知っていますよ」

にんまりと笑みを浮かべた藤五郎から逃げ去るようにして城を下り、稲葉山麓の我が家に帰ると、於松を呼びつけた。いや、於松は先回りしていて、すでに部屋の窓の外にいた。

「三河に行くぞ」

「三河、ですかい？」

「家の連中には信長様の上洛に付いて行くとだけ言っておく。三河にはお前と新三の三人だけで行く。栗綱もいらない。歩きだ」

「それはどうして。まだ、旦那様にはこたえるんじゃねえんですか」

「黙って言うことを聞いてろ。新三にも京に行くから準備をしとけって言ってこい」

「へえへえ」

障子窓を隔ててそんなやり取りをしたあと、牛太郎は素襖を脱ぎ、半纏と股引を身に着けた。脱いだ着物と太刀、脇差は荷物にまとめ

る。

武田の忍びを警戒してのことだった。

いつぞや、さゆりが言っていた。武田の忍びは格闘には長じていないが、諜報には図抜けている。岐阜城下でも何者かに化けて必ずや徘徊しているであろう。

こちらの動きが筒抜けでは何もならない。

夕飯になると、牛太郎は家の者たちに説明した。上総介の上洛に先立って、京の朝廷に働きかけることになったから、今夜にでも早速、岐阜を立つ、と。

「父上が朝廷に？」

明らかに牛太郎の柄ではないことなので太郎が怪しんだが、牛太郎は今までも何度か働きかけたのだと嘘に嘘を塗り重ねて突っぱねた。

「だったら、俺たちも連れていってくださいよ」

七左衛門が不服そうであった。

「お前らは岐阜に残っていろ。いつ、いくさになるかわからねえんだから。それまで英気を養っておけ。格さん助さんには期待しているんだからよ」

心にもない牛太郎の言葉に、七左衛門は笑みを浮かべ、おとなしく引き下がった。

とはいえ、太郎には言っておくべきかと考え直す。家中の将たちと分け隔てなく顔を合わせられる侍大将の太郎なのだから、朝廷に働きかけなどしていないことは、すぐにわかってしまう。

「太郎。お前だけには言っておく。おれは信長様から武田をどうにかしろって言われた。だから、とりあえず三河に行く」

自室に呼んだ太郎にそう伝え、三河行きの秘匿の理由も説明すると、

「父上のお考えはわかりました。家中の人たちにも京に行ったと言っておきましょう。ただ、どうして三河なのです」

徳川三河守に会いに行くなら浜松だろうし、武田の西上作戦は失

敗したものの、二俣城はいまだ武田属であるし、敵との前線は今も変わらず天竜川沿いなのだから、行くべきは遠江であろうと太郎は言ってきた。

「お前は昔から武田担当じゃないんだからごちゃごちゃ口出しすんな」

太郎はむっとしてふてくされる。

「おれは昔から武田討伐に全身全霊を懸けている。武田はおれの宿敵だ。お父さんの好きにさせろ」

「宿敵、ですか」

「そうだ」

牛太郎は笑みを浮かべた。

「山県がおれを殺すか、おれが山県を殺すか、あいつとはそんぐらいの因縁だ」

梓に半殺しにされて以降、心身ともに気力を失くしていた牛太郎が、武田の名を、山県三郎兵衛尉の名を口にした途端、めらめらと蘇った。

いや、太郎に対して、武者の熱っぽさ、まるで少年のような気概を見せたのは初めてである。

「かしこまりました。ただ、鼻息荒くなるままに無茶はしないでくださいね」

太郎は頬を緩めて牛太郎を眺めていた。

「あ、そうだ。あと一つ、太郎にお願いがある。あずにゃんに黙ってのことだから、機嫌取りだけは忘れないように」

臥薪嘗胆なら知っている

牛太郎は慎重すぎるほどに武田の忍びを警戒し、三河岡崎までの道程を、いつもとは変えた。今までは清州、沓掛、岡崎と三日、遅くても四日で辿り着いていた道のりを、東海道筋の各所でいちいち足を止め、十日をかけて岡崎へやって来た。

「京に行くのではなかったのですか」

子供の新三は行く先が花の都でなかったのが不満らしい。

「馬鹿だな。今から行くところは京なんかよりももっとおもしろい、天下分け目の決戦地だ」

新三は鼻で笑う。

「殿が天下分け目だなんて」

「クソガキが。今に笑えなくしてやる」

岡崎城下で宿を取ると、そこでしたためた書状を於松に渡し、松平善兵衛のところへ走らせた。

二俣城、三方ヶ原で共に戦った善兵衛は、本来は三河守嫡男次郎三郎信康付きの足軽大将である。ほどなく、牛太郎の書状で内訳を知った善兵衛が、百姓姿に扮装し、従者を一人だけ付けてやって来た。

武田との凄惨な戦いから丸一年、善兵衛の面構えは少し引き締まったようでもあったが、牛太郎と向かい合うなり目尻を崩して歩み寄り、三河武者らしいごつごつとした手で牛太郎の両の手を握った。

「お久しぶりです！　簗田殿！　森殿や玄蕃允殿はお元気ですか！」

「申し訳ないね。そんな格好させちまって」

「いえいえ、簗田殿のお頼みを断る者が徳川にいましょうか」

想像を絶する慕われように新三がぽかんと口を開けている。牛太郎は不敵な笑みを浮かべながら新三をしっしと追い払い、善兵衛と二人きりになると、切り出した。

「実は岐阜の信長様に武田をどうにかしろって言われたんだけど、

おれが思うに、武田はにわか調略で屋台骨が揺らぐような連中じゃない」

「おっしゃる通りで」

「とすると、結局は奴等と浮沈を賭けていくさをしなくちゃならないわけだ。三方ヶ原みたいに。あんときは信玄のおっさんがいたせいでボロ負けだったけれど、今はあの化け物がいないし、今度はいくさに万端を尽くすつもりだ」

「次は織田様がきっちりと援軍を向けてくださるということですか」

「そうだ。でも、信長様ってのは、絶対に勝てるいくさじゃないと出てこない。絶対に勝てる方法を編み出さないと、武田との決戦はいつになっても出来ない」

「武田に絶対に勝てる策ですか……」

「ということで、長篠に行きたいんだけど」

「長篠城ですか？」

「そ、そうとも言うかな」

「長篠城のことを知りたいのであれば浜松に向かうべきです」

というのも、今の長篠城の守将は奥平九八郎貞昌という齢十九の若武者だが、これはつい最近家督を譲られたばかりで、その父、美作守貞能は長篠から離れ、三河守の傍らに仕えている。

「美作殿は奥三河の国人衆ですから、あの辺のことはお詳しいようです」

牛太郎は悩んだ。三河もそうだが、徳川軍の本拠地である浜松には大勢の忍びが網を張り巡らせているに違いなく、浜松城に登って三河守に面会をするといった目立った行動は控えたい。

自分が動いているということを武田には露も悟られたくない。

「美作守はとりあえず考えておく。今はひとまず長篠がどんなところか見てみたいんだ」

善兵衛が牛太郎をしばし見つめた。長篠にそこまでこだわっている理由が若干ながら不可解らしい。

ただ、彼は太郎や新三のように理屈っぽい男ではなかった。

「わかりました。長篠城に行きましょう」
そういうことで、善兵衛の先導のもと、牛太郎は於松と新三を引き連れて奥三河へ向かった。
奥三河というだけあって、三河国北東部の深い地である。
武田家の重要拠点である信濃国諏訪から東三河へと抜ける途上に長篠城は築かれており、東海地方に今川家がまだ君臨していた時期からの戦略的要綱であった。
今川家の没落以降、長篠城は徳川軍に属していたが、武田軍の西上作戦の折、徳栄軒本隊の支隊として諏訪から出撃してきた山県三郎兵衛尉の軍勢に降伏する。
しかし、武田軍が甲府へと撤退すると、昨夏、三河守家康は長篠城をすぐさま奪還する。
「美作殿は、一度は武田に属したのですが」
善兵衛の話によると、一時、奥平美作守は武田家に三人の人質を差し出して忠誠を誓っていたが、奥三河に勢力を取り戻したい三河守家康は美作守を自軍に引き戻したいと考え、岐阜の上総介に相談したという。
「織田様の助言により、おやかた様は長女の亀姫様を九八郎殿に嫁がせることや領地の加増などをお約束したのです」
さらには武田徳栄軒の死も決め手となったのであろう、美作守は次男を初めとする人質三人の命と引き換えに、徳川方へと帰参した。
「当然ながら長篠城は東三河の要ですから武田は奪還を狙っているでしょうし、その守将が裏切った美作殿の嫡男ともなれば、武田大膳は牙を剥いてやって来るでしょうな」
牛太郎は新たな当主である大膳大夫勝頼をよく知らないので、果たしてあの徳栄軒の血を継ぐ者が感情的になっているだろうかどうか疑問であったが、西上作戦で武田軍を二個に――実際は東美濃侵攻隊と合わせて三個なのだが――分けて、山県隊が長篠城を攻めたことを考えれば、徳川、武田の両者が東海地方の覇権を争っている限り、長篠城は天竜川沿いの攻防戦線とともに、激戦の中心地であ

り続けるのだろう。
「長篠の戦い」を引き起こしたい牛太郎としては好都合である。ただし、武田軍の侵攻経路には、三河、遠江、東美濃の三方面がある。
三方ヶ原のときのように武田軍が全力を持ってして侵攻してくれば会戦は再度勃発させられるが、今の当主にその勇気があるだろうか。
武田全軍を長篠に引き入れられるかが課題の一つである。
とりあえず、それはまだいい。
長篠に何があるのかである。織田軍に有利な何があるのか。
一行は東海道を東進して豊河の宿までやって来ると、そこから吉田川沿いを北に歩いた。
進むごとに、左右に広がっていた小高い山々が押し迫ってくるようで、平地は狭まっていく。
「あと一息もすれば長篠城です」
善兵衛がそう振り返ったときには、すでに丘陵地帯であった。
長篠城に出向くのは後回しにしようと思い、土地の地侍との接触も避けて、牛太郎は於松に雨風凌げる程度の適当な廃屋を探させた。
於松が見つけてきたのは山あいに溶け込むように朽ちている廃寺であった。善兵衛は隠密行動に徹底している牛太郎に
「このような真似をせずとも」
宿泊先なら寺社なり地侍の屋敷なり用意できると何度も言ってきたが、牛太郎は首を振るばかりで、昆虫が駆け回っている本堂の様子に新三がうんざりと顔をしかめる。
「本当に武田の忍びが殿を追いかけているんですか？」
なかば怒っている。
「黙れ。臥薪嘗胆だ」
「意味がわかって言っておられるのですか？」
「ごちゃごちゃ言うんなら、一人で岐阜に戻ってもいいんだからな」
むっと口をつぐむ新三。

牛太郎は手拭いでさっと床の埃を払うと、その場に平然と寝転がった。岐阜や堺ではそれなりの贅沢はしているものの、摂津高槻でも似たような廃屋で寝起きしていたし、さらなる過去に至れば、
「美濃の調略のときは野宿ばっかだったんだからな。食い物は雑草だったしよ」
と、経験は豊富であった。
「私が聞いていたのは京だったのに」
信貴山城での軟禁生活でも愚痴をこぼさなかったのに、新三は半べそだった。まあ、この子供はまだいくさ場も経験していないから、工作活動全般の泥臭さとは無縁で仕方ない。
「今日は一休みするけど、明日はこの辺一帯を回るぞ。お前はおれの助手として連れてきたんだから、ちゃんと働けよな」
「疫病にかからないうちに帰りましょう」
「バカかお前は。病気にならなくても、いくさで死んだら元も子もないだろうが」
ハア、と、新三は溜め息をついて、とぼとぼと本堂を出ると、破れ布をどこからか拾ってき、それで床を磨き始めた。

翌日、牛太郎は長篠城の目前までやって来た。

信濃の山から注がれてきた二川がY字に合流して吉田川と変わる地点、断崖絶壁に長篠城は城郭を形成している。

「ここから先が奥三河。信濃へと続く山道です」

善兵衛の言葉を隣にして、吉田川の川岸から牛太郎はじいっと長篠の城郭を見つめる。

北方には山々が広がっていて、どう見ても大兵力を向かい合わせる決戦地には適していない。かといって、山道で待ち伏せるような方策では、敵方の兵力の大部分を削ぐ前に、武田軍は信濃へと引き返してしまう。

となると、決戦地は長篠城以南になる。

「難しいなあ」

いくら武田軍を引き寄せるためとはいえ長篠城を渡すわけにはいかない。

牛太郎の想定する「長篠の戦い」での大目的は武田軍の弱体化である。この玄関口に拠点を与えてしまえば、信濃の各所と繋ぐ補給線を構築されてしまう。そうともなれば、決戦地で大勝する前に武田軍は拠点へと引き返してしまい、まして、攻城戦は野戦の数倍の労力が必要だから、織田軍はじり貧に陥ってしまうだろう。

すると、長篠城を落とさせないままに、決戦地へと誘い込む手段が必要だ。百戦練磨の武田軍がそんな馬鹿な真似をするだろうか。

だいいち、牛太郎が想定しているいくさは、武田軍に長篠城攻めをさせなければ、何も始まらない。

「調略だな」

ぼそりと呟いた牛太郎に、新三が訝しがる。

「殿は本気で武田といくさをするつもりなのですか」

「するつもりなのですかって、もうあちこちでしているだろうが」

「しかし、築田殿。もし、大きな野戦をお考えなら、三方ヶ原でもう一度迎え撃つか、それとも天竜川を渡って攻め込むか、どちらかではないのですか」

善兵衛の言うことはもっともである。しかし、牛太郎は長篠にこだわる理由がある。

歴史だからだ。

それともう一つ、鉄砲だった。

姉川の戦いと三方ヶ原の戦いで身に染みてわかったことだが、織田軍は弱すぎて、武田軍は強すぎる。徳川三河勢との連合でして、大兵力をもって立ち向かったとしても、十中八九、負ける。なにしろ、姉川で織田軍は、圧倒的に兵力で勝っていたはずなのに、浅井勢に危うく敗れそうだったのだ。

日の本一弱いと揶揄される織田軍が、日の本最強の武田軍に勝つためには、鉄砲を駆使する他ない。となると、広大な三方ヶ原は考えられない。天竜川近辺も二俣城が敵方の補給拠点となってしまうので、これも牛太郎の想定には入らない。

だったら、なぜ、長篠なのか。牛太郎は長篠城を背にして、元来た道を辿っていく。長篠は鉄砲戦術に有利なのか。

どこが有利なんだ。

普段は悪事にしか使っていない頭であまりにも考え過ぎ、あまりにも悩んでしまったから、牛太郎は苛立ってくる。

「それにしても本当になんもねえド田舎だっ」

チッ、と、舌を打つ。自分から言い出してこの田舎に来たくせに、にっちもさっちも行かなくなりそうだから、何かに当たらずにはいられなくなった。

「堺とか京だったらよ、こんなときには団子屋で一服茶でも飲みながら、頭をお休みさせるっていうのに、ここは山と川と田圃しかねえから、一休みすらできねえ。橋もこんな板っきれだしよ」

小川に掛けられた分厚い板の上に立った牛太郎は、これ見よがしに体を揺らして橋板をぎしぎしと軋ませる。

「ちょっと前の太ったおれだったら、こんなぼろ板割れていたぞ。お前のとこの政治はどうかしてんじゃねえのか。おい、善兵衛」
理不尽な怒りに善兵衛も苦笑い。
「落ちますよ、殿」
新三が冷ややかな目だが、
「おれはもう、昔のパターン化されたおれじゃない」
などと、笑みを浮かべながら意味不明なことを述べ、ぎしぎし鳴らせて遊ぶ。
「てか、於松のジジイはどこに行ったんだ」
と、ようやく止めた。
「さあ」
「たくっ。死にぞこないのくせにふらふらしやがって」
牛太郎は橋板を渡り、道端の畔に座りこむ。
「どうでもいいけど、腹が減ったわ」
「握り飯なら用意しておりますが」
善兵衛の従者が差し出してきたので、皆、牛太郎を囲みながら座り込むと、一人一つずつ冷えた握り飯を口にする。
白濁の空に雲が溶け込んでいる。小高い丘から鳥のさえずりが聞こえてきて、うららかな春のにおいだった。
「水はけが悪い地ですね。春先なのに田には水が張っていて」
背中に担いでいた荷物を下ろし、小川沿いに広がる野を眺めながら、新三が郡奉行にでもなかったかのような知った口をきく。
「こういう地をどうにかすれば、ああいった葦原も開拓できて、収穫は倍増するんでしょうけど」
どうも可愛げのない新三を牛太郎は「生意気だ」と一度は叱りつけようとしたが、やめた。大人のすることにいちいち口出しする少年ではあるけれども、目の付けどころはなかなか発展性のあるものだ。伸び伸びとさせれば、その性格はさておき、役に立つ人物になるかもしれないと思った。
「それができれば貧しい村々も豊かになるであろうがなあ」

と、善兵衛が言う。
「もっとも、それができないから、武士団は豊かな土地を求めていくさをし、戦乱の世は終わらないのだけどな」
「おい、新三」
牛太郎は、野原を眺めている新三をそう呼んで振り向かせた。
「だったら、どうやればそれができるのか考えてみろ」
「考えるも何も、簡単ですよ」
と、やはり生意気ではある。
「水を抜けばいいのです。川に」
すると、善兵衛が笑った。
「確かにそうだがな、お主、言うのはたやすいが、それは大変なことだぞ。いくら狭い土地でもそれなりの土木工事が必要だ。狭い土地というのは領主もそれだけ貧しいのだ」
「私はおやかた様ならそれができると思いますが」
善兵衛も、その従者も、新三の夢想に呆れたように笑う。たかが、一介の小姓のくせに、天下の織田上総介の政策を論じようとしている。
「天下に武を布いても、その後のことも考えなければ、同じことだと思います」
もはや、善兵衛たちは笑うだけである。ただ、牛太郎だけは新三の厚い面の皮をまじまじと見つめる。元服させてもいいかもしれない。
「どうでもいいけどよ――」
牛太郎は腰を上げると、小川沿いに広がる野原と、それを取り囲む丘を一望する。
「水はけが悪いって言っても、この程度だったらそうでもないんじゃないのか」
「いえいえ、簗田殿。今の季節はそうですが、雨期にでもなればそれこそ池のように水溜まりができてしまい、こうした地では稲穂が実っても、小舟に乗りながら稲を刈っていくのですぞ」

「殿は内政には疎いですから」
せっかく将来を見越してやっているのに小生意気な無礼者なのだから、牛太郎はせせら笑っている新三の背中を思い切り突き飛ばした。新三は悲鳴を上げながら畔から田へと転げ落ち、泥まみれになった。
「雇い主を馬鹿にした罰だ。ざまあみろ」
「あんまりじゃないですか」
新三は涙声で立ち上がるが、深いぬかるみに足を取られて、また転がり倒れる。牛太郎が畔からげらげらと笑い、善兵衛の従者が手を差し伸べるが、これもまた新三の体に引っ張られてしまって田の中へ転げ落ちる。
「何をやっておるのだ、まったく」
少年と大人が二人で悪戦苦闘している姿に善兵衛は苦笑する。
牛太郎はげらげらと笑う。が、二人がどうにかして畔にしがみついた姿に、ふとある日のことを思い出す。笑うのをやめると、半べそで泥を拭っている新三をよそに、小川を取り囲むうららかな景色を眺める。
そうして、ぽつりと呟いた。
「金ヶ崎山だ」
金ヶ崎からの退却戦、ではない。牛太郎が脳裏に蘇らせていたのは、その退却戦の前、金ヶ崎山城を織田軍が攻めかかったときだった。
苦い記憶である。丹羽五郎左衛門の部隊とともに、牛太郎率いる沓掛勢は、金ヶ崎山の裏手の沼地から攻め上がったのだが、深い沼地に人も馬も足を取られ、将校は馬を乗り捨て、兵卒は具足を脱ぎ捨てて、どうにか進軍した。牛太郎はというと、栗之介とさゆりに新調した甲冑を放り捨てられ、それでも沼地にはまってたった一人取り残され、栗綱とともにすごすごと引き返したのだった。
ここは、雨期にもなれば、池さえできるほどの水はけの悪い地だと言う。つまり、人も馬も金ヶ崎山の裏手のように進軍に苦闘する

ことだ。
　すると、牛太郎の目の前のうららかな光景に、鮮やかなまでに戦場が広がった。真っすぐに伸びてくる小川と、それに沿いながら広がる湿田と野原、それらを囲うように両側には小高い丘が続いている。
　突撃してくる武田騎馬隊、それを待ち構える織田鉄砲隊。しかし、この水はけの悪い地において武田騎馬隊が通過できる場所は、限られてくる。
　そこに防護柵を築き、二千丁の火縄銃を集中させる。さらに、この小川が堀の代わりになる。
「善兵衛。ここに走っている街道は、これだけなのか」
　唐突に真顔になった牛太郎に、善兵衛は呆気に取られながらも、街道という街道は今来た道だけだが、丘の向こうに一筋、細い山道があると言った。
「なるほど」
　牛太郎は口端にうっすらと笑みを浮かべると、
「おい、新三、於松のジジイが戻ってきたら探索だ。筆と紙を用意しろ。ここの地図を書け」
「ええっ？　もう、泥だらけですよお」
「馬鹿が。ここをどうやったら開拓できるか、勉強だ。お前の意見を信長様に伝えてやる。もし、出来のいい意見書が作れたらどっかの土地でやってくれるかもしれないぞ」
「本当ですかっ？　本当におやかた様に伝えてくれるのですかっ？」
「おれは嘘と喧嘩は嫌いだ」
　新三は喜々として跳ね上がり、泥にまみれているのもなんのその、下ろしていた荷駄から筆と硯をせっせと取り出していく。
「ちなみに善兵衛。ここは何ていうところなんだ」
「この地ですか？　ここは在の者は設楽ヶ原と呼んでいるそうですが」
「シタラガハラか」

毒味役新三

牛太郎は一週間をかけて設楽ヶ原及び、その一帯を隈なく歩いた。

設楽ヶ原は、東西の丘までの幅は狭いところで三百メートル、広いところでも六百メートルぐらいであろう。北には御岳山が覆いかぶさり、ここから注がれる小川――連吾川が設楽ヶ原を南へと真っすぐに流れ、吉田川に合流する。

この地点は深い渓谷となっていて仮に東の丘に武田軍、西の丘に織田徳川軍が布陣した場合、武田軍が迂回戦法を取って西の丘の背後を突こうとしても、進路は長篠城から伸びてくる伊那街道のみしかない。

山の裾野から吉田川までの平地は全長二キロメートル余。連吾川を堀と見立てると、これの渡河地点――人馬が滞りなく進めそうな地点は三ヶ所であった。

牛太郎はこれらの事実を新三に事細かく書き残させた。

想像できる陣形、これに対抗する布陣は――牛太郎にはそういうことがわからないので、これを持ち帰って竹中半兵衛あたりに考えさせればよしとした。

「とりあえず、梅雨時になったらまた来よう」

とはいえ、決戦地の候補を見つけられたとしても、いかにして武田軍を長篠に引き込むか、設楽ヶ原に誘い込むかである。

調略、いや、肉を斬らせて骨を断つ。人々が謀略と呼ぶような、日の当たらない大仕掛けを施さなければ、一枚岩の武田家を操ることは難しい。

そうしたことを得意にしていそうな人間なら牛太郎の知人にはすぐに思いつくだけでも二人はいた。もっとも、毒を持って毒を制す、が、ぴたりとはまるような危険人物だけれども。

とりあえずは、奴らに話を持ち込む前にある程度の情報を仕入れなければならないだろう。牛太郎は一度、岡崎まで戻ってくると、

善兵衛に奥平美作守と面会できるよう頼んだ。

「大袈裟にすると武田の目に引っ掛かるから、どこかの団子茶屋で落ち合うような手筈を取ってくれ」

美作守は一度は武田に属した男である。奥三河の情勢だけではなく、武田内部の情報もある程度は存じているだろう。

善兵衛が岡崎を立った翌日、牛太郎たちも後を追うように浜松へと向かう。

道すがら、牛太郎は考えた。手を染めようとしている相手は三国を治める菱の覇者である。徳栄軒信玄が没したとはいえ、その軍隊は健在、勇名馳せる諸将は数知れず、諜報網は網目のごとく張り巡らされている。

摂津工作では、確かに怪物たちと渡り合ってきた。しかし、武田家は怪物などと呼ぶのが可愛いほどの仁王である。

聳え立つ仁王を手玉に取ろうとする牛太郎の手元の持ち駒は、老人の於松と子供の新三という心細さ。岐阜の人間たちに目を広げたとしても、宿屋兄弟と弥次右衛門という有様。

牛太郎は大きな吐息をつく。

「あの馬鹿に土下座してお願いするしかないか」

できれば、徳川の人間にも手となり足となるような人間があればいい。ただ、もっとも近しい松平善兵衛は、血気盛んな若武者なのではかりごとには向いていない。

いや、善兵衛だけではない。三河武者というのは忠節厚く、戦場では誰もが豪傑と成り得るが、主君の三河守を筆頭として、土豪気質なのだろう、どこか垢抜けない凡庸さが見受けられる。

結論が出ないうちに浜松へと辿り着いた牛太郎は、城下の宿に腰を据え、善兵衛の返事を待った。

ほどなく、善兵衛がやって来た。

「本坂街道を北に戻っていくと、三方ヶ原の近くに茶屋があるそうです。美作殿は明日の昼過ぎ、そこに従者を一人だけ付けてやって来るとおっしゃってくれました」

「わかった。ありがとう」
浜松で長い時間顔を合わせているのはよくないということで、牛太郎は善兵衛を岡崎に帰した。
「ししし」
「何笑ってんだ、ジジイ」
「楽しくなってきましたよ」
牛太郎は新三や於松に計画の全貌を明らかにしていない。それでも、於松は悪事に鼻がきくのだから、もしも敵であったらと思うと、怖くなってくる。
「あ、そっか」
だったら、その怖さを利用すればいい。
「おい、じいさん。甲府に忍び込んでこい。下人でも草履取りでもいいから、武田の誰かに雇ってもらえ」
「ええっ？」
と、飛び上がったのは新三。
「そんなの無理ですよ。於松殿にそんな無茶をさせるなんて。だいたい、尾張訛りですぐにわかってしまいますよ」
「喋らなければいいだろ」
「そんな無茶苦茶な」
「ししし。いいんですかい」
「お前、そういうの好きだろ、どうせ」
「よくご存知で」
牛太郎は新三に言って、荷駄の中から竹細工の籠を取り出させ、その中にしまい込んでいた梓の小袖を手に取る。新三が眉をしかめる中、一度、香りを確かめると、その袖から二枚の大判を取り出した。
ぽいと於松の前に放り投げる。
「駄賃だ。好きに使え」
「へへっ。さすが旦那」
於松はみすぼらしい歯を見せて笑いながら、大判を懐にしまい込

む。
「で、あっしはどうすればいいんでしょ」
「変な真似はしなくていい。その汚い鼻をきかせて、武田の怪しいところを探ってこい」
於松はほくほく顔で宿を出ていった。
「大丈夫なのですか、於松殿を甲府などに行かせてしまって」
夜、布団を並べていると、新三がぽつりとそう言った。
「死に損ないだ。ちょっとやそっとじゃ死なないだろ」
「そういうことではなくて、逆に於松殿が寝返って、殿のことを武田にべらべらと話してしまったら、それこそ、忍びを警戒している意味がなくなってしまうのではないのですか」
ふん、と、牛太郎は笑いながら寝返りを打つ。
「大丈夫だ。あのジジイは絶対に寝返らない」
「どうしてですか。何か根拠でもあるのですか」
「勘だ」
悪党の。
翌日、牛太郎は昼前には浜松の城下を出て、新三と共に三方ヶ原方面へと街道を歩んだ。
暦の上では春に入って間もないが、浜松一帯は季節が充ちたような暖かさで、夏を待ちわびる田畑が広がっている。
「一年前が嘘みたいだ」
無論、あのときは遠州の空っ風が手足をかじかませる冬だった。その寒さも忘れるほどの激戦だった。血と汗が飛び交い、牛太郎自身も山県三郎兵衛尉に耳を裂かれ、汗を滲ませながら命からがら栗綱を駆け抜けさせた。
真っ赤に染まった夕空が瞼の裏に焼きついている。
多くの男が散っていった。牛太郎の知人だけでも、中根平左衛門、青木新五郎、夏目二郎左衛門、平手甚左衛門。
あれからもう一年が経っている。それでも、まだ、一年しか経っていない。三方ヶ原の激戦から今まで、実に長い年月が降り注がれ

たようで、しかし、あっと言う間にまたここにやって来てしまったような心持ちでもある。

広大な三方ヶ原台地までやって来る。目の前には春の乳白色の空が広がり、そこに白や黄の野花が色を添えていた。

「殿」

気付けば、新三が振り返ってきている。

「ああ、すまない」

牛太郎は再び歩み始める。

しばらく行くと、なるほど、道端にぽつんと一軒、茶屋とは思えぬあばら家があって、ただし、濡れ縁を外に並べているところを見ると、やはり茶屋らしい。薄暗い中を覗き込んでみると、老婆がたった一人、亡霊のように座っていて、一瞬、牛太郎も新三も後ずさりしてしまった。

「い、一服、出してくれるかな」

「あいよお」

老婆はのっそりと背中を見せると、奥の間に吸い込まれるように消えていく。

「だ、大丈夫なのですか。本当にこちらなのですか」

「う、うん。多分、ここなら目に付かないんだろう、きっと」

とは言ったものの、小々の不安を覚えながら、濡れ縁に腰を下ろす。中を伺い伺い、そわそわと太股を揺らす。

「やはり、違うのでは。美作守殿がどんな御方か存じませんが、このような茶屋を利用するとは到底思えません」

「うーん」

そのうち、老婆が碗を二杯、危ない足取りで運んできた。震えが自然発生しているしわくちゃの手で濡れ縁にそれぞれの茶碗を置き、

「あんたら、小豆餅でも食うかい？」

と、笑った顔は於松のように歯が無かった。牛太郎と新三は仲良く顔を見合わせてしまう。

「有名なんだよお。うちの小豆餅。偉そうな人が浜松から食べに来

るんだよお」
「そ、それならば頂こうかな。うん。おい、新三、お前が食べろ」
「ええっ？　殿が召し上がってくださいよ」
主従が揉めているのをよそに、老婆は勝手に中へと引っ込んでいってしまう。牛太郎も新三もなんだか言葉にならなくて、茶碗の熱い屑茶をすするしかない。
「でも、殿。この近辺で武田と徳川様はいくさをしたんですよね。どうして、この茶屋は何の被害も受けていないのでしょう。不思議ではありませんか」
「お、おいっ。怖いこと言うなよ」
牛太郎は震えながら中を覗き込む。
「だ、だいたいだな、やり合ったのはもうちょっと先を行ったあたりだ。退却したときはばらばらに逃げたから、街道沿いは多分、走っていない」
「はい、小豆餅」
急に老婆が出てきたので、牛太郎と新三はひっくり返りそうになった。
「おいしいんだからねえ。いっぱいあるから、何個でも食べなあ」
そうして、老婆はまた中へと引っ込んでいく。
黄な粉がふんだんにまぶされた小豆餅を牛太郎と新三はじっと見つめる。やがて、牛太郎は顎をくいくいとしゃくって、新三に食べるよう強要するが、新三は目をちらりと横に動かしてしまって、何も見えていない振り。
「食べたらうまいかもしれないだろ」
「だったら、殿がご賞味してみたらいかがかと」
「その前に毒味しろ。あのばあさんが武田の忍びだったら、絶対におれは毒殺されるぞ」
「毒味だなんて。今までそんなことを私にさせたことなんてないではありませんか」
「じゃあ、今日から毎回毒味しろ」

新三は泣きそうな顔で眉をしかめると、小豆餅を手に取り、両目を瞑りながら、半分かじった。中には餡がぎっしりと詰め込まれていて、見ただけで唾を誘うほどだった。

「ど、どうだ。痺れとかないか」

新三は瞼の端に涙を滲ませながら、恐々と口を動かしていたが、ややもすると、ぱっと目を見開いて、

「あ。甘いですけど、結構、おいしいです」

残りの半分を口の中に放り込み、晴れやかな笑顔ですべてを飲み込むと、屑茶をずるずると啜り、中の老婆へ呼びかけた。

「おばあさん、小豆餅、もう一個ください！」

「おい」

「いえ、大丈夫です。奥方様に頂いたお年玉の残りを持ってきているんで」

「そういうことを言っているんじゃねえ。毒味しろって言ったんだぞ。なんで、全部、食べやがるんだ」

そうして、牛太郎は中の老婆へ、小豆餅と屑茶のお代わりを頼んだ。

結局は二人で小豆餅に舌鼓を打っていたところへ、陣笠を被った旅人の風体をした男が二人、浜松の方向からやって来て、茶屋の前に立ち止まった。

奥平美作守だろうかと、牛太郎と新三がぼけえと眺めていると、前を歩いてきていた男が、もう一人の男に振り返り、どこかわざとらしく言う。

「ちと、喉が渇いたの。一休みしていこうか」

「へえ」

二人は牛太郎たちとは反対側の濡れ縁に腰かけ、陣笠を外した。彼らをまじまじと眺めていた牛太郎は、やはりただの旅人だろうかと首を傾げる。主人と思わしき男は厳めしい骨太の輪郭を持った見た目四十半ばの中年であり、嫡男に家督を譲って隠居をしたような男には見えない。従者と思わしき男はもっと若い。

「あんたら、小豆餅でも食うかい？」

老婆が同じことを言っている。

「小豆餅？　ほう。それはいいな。ちょうど、甘い物を欲していたところだ」

主人の男が言ったが、やはりわざとらしい。牛太郎はどうしたらいいものか、迷った。自分たちも百姓風体であるし、かといって、美作守なのかと率直に訊ねるのも憚られた。

別段、怪しい人影がどこかに見え隠れしているわけでもないのだが、牛太郎は武田の忍びがどういうものなのかよく知らない。忍びと言えば、牛太郎の中ではさゆりか新七郎で、彼らなら老婆にさえ化けられるであろう。

「殿。奥平様ではないのですか」

と、新三が囁いてくる。どことなくせっつかれているのが癪になって、牛太郎は新三の太股をつねった。

「痛っ！」
新三が跳ね上がると、隣の男二人はこれに目を向けてきた。笑顔を見せてきている。
「やあやあ、虎猫にでも噛まれたか」
牛太郎は微笑を浮かべながら中年の男に目を向ける。
「そうかもしんないッスね。近頃、山から虎猫がやたらと下りてくるみたいで」
牛太郎はそう言いながら、中を覗いた。老婆はやはり亡霊のように座っている。小豆餅のうまさを考えてみると、一朝一夕でなかなか作れたものじゃない。忍びではないだろう。
「ここの小豆餅は結構な味ですけど、虎猫の連中は知っているんスかね」
「いや、知らん。わしもつい最近知ったばかりだ」
牛太郎は頷きながら屑茶をすする。
どこかの木の枝に止まっているひよどりが、そういう盛りの時期なのか、ぴいぴいとかまびすしく鳴いている。柔らかな日差しが包み込むのんびりとした台地に、甲高く潤った鳴き声が突き抜けている。
牛太郎は景色にぼんやりと吸い込まれているような目で言う。
「虎猫は、親玉が死んで以来どうなんスかねえ」
「ふむ」
と、男は小豆餅を二つに割ると、片方を口の中に放り込んで、しばらくは遠くの空を眺めながらもぐもぐと食べていた。
屑茶を流しこむ。
「美作の者が言うには」
男も牛太郎も軽い世間話をしているただの百姓と旅人のように、春の日和に馴染んでいた。
「タヌキは悪い奴ではないし、それと、虎がいなくなった飼い猫たちの将来を天秤にかけたら、タヌキと虎なら虎だが、タヌキと猫ならタヌキということだったらしいぞ」

それに、と、美作守は続けた。
「虎の子供の猫は虎の威光に甘んじたくないらしく、古くからの手下猫よりも、自分が昔から身近にしていた猫たちを重宝している」
「分裂しかけているんスか」
「いや、そこまではない。ただ、虎があまりにも偉大すぎた。虎ほどの求心力を持つ者が今の奴らにはいない」
「子供猫はどういう奴なんスか」
「一言で済ますなら豪気。しかし、それは虎の子である重圧と、正室の子でないがゆえの後ろめたさの裏返しだ。まだ、三十路前だし、血気はやる面もある」
だいたい想像がついた。付け入る隙はある。
牛太郎は腰を上げて老婆を呼ぶと、銭を持たせている新三に支払いをさせ、
「それじゃ、タヌキによろしくお伝えください」
と、言った。
美作守は微笑を浮かべながら牛太郎に目を向けてきて、
「百姓、耕せられるのかい」
「いい鍬が必要ッスね」
頭を軽く下げると、新三とともに浜松へと戻った。
「一度、岐阜に帰るぞ。しばらくしたら、畿内に行く」
すぐに浜松を立ち、各地で宿を取りながら、東海道を上った。尾張に入ると沓掛城に立ち寄り、新七郎に再会する。
「武田の忍びってのはどういう奴らなんだ」
出し抜けに牛太郎が言ったので、新七郎の頬の傷がこわばった。
「今度は武田を謀るのですか」
「さあな」
沓掛城の広間で肘掛にもたれかかりながら耳糞をほじる牛太郎だが、眼差しは影に染まっている。新七郎は頭を下げて愚問を詫びると、自らが知っている範囲だがと前置きした上で、言った。
「伊賀の流れを汲む者たちを雇っているという噂です。ただ、非常

時以外は、直属に抱えている美少女の集団を各地に放っております」
「さゆりんやあーやみたいなもんか」
「いえ。甲賀流のさゆりや彩は小さい頃から暗殺術を仕込まれてきたので、武田のくのいちとは少し違います。奴らは格闘はまったく使えないらしいのですが、その分、忍びなら一目でわかるくのいち独特の気配がありません。拙者も見分けがつきませぬ。歩き巫女や遊女に化けているという話ですが、拙者は奴らに接触したことがありません」
牛太郎は耳をほじくっている指を止めて、新七郎をじっと見つめる。
「お前が言っていることってのは、結局、女なら誰でも怪しいってことなんじゃないのか」
「左様で。氏素性が不明の女は、まず、疑ってかかったほうがよろしいかと」
ちょっと、寒気がした。
「じゃ、じゃあよ、あいりんも、まさか」
「それはありませんな。あいり様は丹羽殿が養女にしたんですから。昔、沓掛城には女中がいなかったと言うではありませんか。丹羽殿はそうしたことに神経をとがらせているはずです。そもそも、あいり様の御父上は明智家の足軽組頭だった人です」
「そ、そうなの？」
新七郎は呆れた眼差しで一度口を閉ざした。
「とにかく、手前どもの家は大丈夫でしょう。奥方様は柴田家の娘ですし、お貞殿やおかつ殿は、齢も齢ですし、美女ではないですからな」
「ちょっと待て」
牛太郎は眉根を厳しくさせながら、肘掛から体を起こした。近頃、怪しいと言えば怪しい輩が簗田家にやって来ている。
「たとえ、本人がくのいちじゃなくても、繋がっている可能性は十分にあるんだろ」

「当然ながら。しかし、自覚のないまま繋がっている可能性もあります。例えば、他所の家の女中にくのいちが忍び込んでいた場合、よく、女どもは話をするでしょう。その流れで繋がっている場合もあります」

暗澹たる気持ちになった。梓やあいりたちの井戸端会議も危険ということだし、弥次右衛門の二人の娘も怪しくなってくる。

於松に調べさせたところ、弥次右衛門は確かに春日井児玉の農奴であった。二人の娘も実子である。

ただし、弥次右衛門一家が武田のくのいちたちと繋がっているかいないかは、想像していなかった。

牛太郎は二人の娘にまだ会ったことがない。もしも、彼女たちが美少女だった場合、武田のくのいちの意のままに簗田家の誰かを篭絡するつもりなのでは。

そういえば、七左衛門の馬鹿が変な真似をしたらしいし。

「ただ、旦那様。疑ってはきりがありませんぞ」

「わかってる」

うっかり謀略に手を染めてしまうと、こうなる。人の心を操り、素顔とは違うもう一枚の皮を被ってしまうと、自分自身がそうであるように、すべての人々も同じような仮面で顔を覆っているのではないかと、人間不信になってしまう。

人間の世界を形成しているのは真実ではなく、虚構である。人々はこの世の中の出来事のすべてを知っていない。この世の中のすべてを知る賢人など存在しない。一つ一つの真相は常に地べたを這うようにひっそりと漂っていて、その土台に築かれた営みの楼閣を人々は見聞きして、世界を実感している。

謀略家というのは、華やかな楼閣の日陰に漂う真相の中に埋没している。あるときは暗く冷たい真相を追及し、あるときは真相の光を闇の中へ抹消させる。世界を実感させる楼閣が虚構であることを彼らは認識しているのだ。

虚実を冷徹な感覚で割り切らなければならない。豪胆で、肝の据

わった心持ちで、世の中の虚と実に向かい合わなければならない。
武田の見えない敵は当然ながら岐阜にはびこっているはずだ。どうさばいてやろうか。沓掛城の広間に一人、牛太郎は燭台の炎をじっと見つめた。
岐阜もすっかり春めいていて、牛太郎と新三が帰ってきたころには桜の花も満開であった。
稲葉山の屋敷の門をくぐると、貞やかつが牛太郎の帰りを出迎えたが、一人、見かけぬ顔の小娘が足洗いの桶を抱えてどたばたとやって来る。
「これっ、たまさん。ご挨拶なさい」
と、貞に叱りつけられて、たまはあわてて桶を下ろすと、上がりかまちに平伏した。
「弥次右衛門の娘のたまですっ。奉公させてもらっています。よろしくお願いしますっ」
牛太郎はむすっと見下ろす。幼さがふんだんに残っているが、女の体である。たぶらかすほど妖艶でもなく、美少女でもないが、素朴さと従順さと懸命さが、返って牛太郎を疑わせた。
牛太郎は無言のまま上がりかまちに腰を下ろす。貞とかつには若い女を前にしてむすくれている牛太郎が意外だったらしく、黙って足を洗っている牛太郎をきょとんと眺めていた。
「私は小姓をさせて頂いている大蔵新三と申します。以後、お見知りおきのほどを」
新三が丸い顔をだらしなく緩めていた。牛太郎は新三を睨みつけるが、新三の視界にはたましか入っていない。齢が近いせいもあるだろうが、新三は女にはわりと間抜けらしい。
牛太郎は屋敷に上がると、梓に挨拶する前に新三を自室に連れていき叱りつけた。
「女に手を出したら斬り殺すからな」
と、太刀を鞘から抜いて、切っ先を新三の鼻先に突きつけた。牛太郎の目が本気だったので新三は口ごたえせず、やや震えながらう

なずく。
「あと、絶対に三河遠江に行っていたことを言うんじゃねえぞ」
「は、はいっ」
太刀を鞘に戻すと、広間に出た。梓とあいり、それに駒がよちよち歩きでやって来て、小さい体でうやうやしく平伏すると、
「おじじたま。お帰りなたいませ」
「おおっ！」
牛太郎は歓喜して駒を抱き寄せ、でれでれとしながら頭を撫でた。
「練習したのです」
そうあいりが言うと、
「亭主殿がいつのまにかおらぬ間にな」
と、皮肉めいている梓の機嫌がやや悪い。
「い、いやっ、火急の用事でして」
本当なら、勝手にたまを奉公させていることを追求し、女たちに井戸端会議を控えるようたしなめるつもりだったが、梓の気配に臆して何も言えなかった。

仏の顔も三度まで。牛太郎は二回まで。

貞とかつが大きな釜から茶碗に米をせっせとすくっていき、あいりが味噌汁を注いでいって、駒が手伝いそうにしてあいりを眺めており、治郎助と新三が皆の前へと運んでいき、栗之介が沢庵を摘み食いして、七左衛門も真似して摘み食いし、梓にぴしゃりと叱られて、太郎がにこにこと笑い、牛太郎は腕組みしてむっとしている。

「たまってのはどうしたんだ」

「たまは叔父上とともに城下の長屋に戻りましたよ」

「ここで食えばいいだろうが」

「家族で食事をしたほうがよかろう」

梓に言われて押し黙る牛太郎だが、どこか納得いかない。別にいてもいなくても良いのだが、牛太郎は弥次右衛門一家を不信がってしまっている。

「だいたい、俺が帰ってきたっていうのに、ヤジエモンは一度も顔を見せてないじゃんか。もう一人の娘もそうだし、嫁もそうだ。一回も会ってねえ。普通、雇い主なんだから御礼ぐらい言いにくるもんだろ」

いつもは主人の牛太郎が口を開けばやんややんやと反論する簗田家の一同だが、今回ばかりは至極もっともな言葉だったので、皆、押し黙ってしまった。

とりあえず、支度が整ったので、手を合わせていただきます。牛太郎は味噌汁をすすると、まずそうに米をかきこみながら言う。

「実はあいつら、曲者なんじゃねえのか」

「それはありませんよ、旦那様」

七左衛門の実に説得力のない否定に、牛太郎は睨みだけを返す。

「最初から曲者だったでしょう」

隣の太郎がつまらなそうに言った。

「しかし、急に彼らを召し抱えると言い出したのは父上なんですか

らね」
「お前がおれに下駄を預けたからだろ」
「だったら、今さらそのようなことを申してもらいたくはありませんね」
牛太郎は苦虫を噛み潰したように顔をしかめ、ねちゃねちゃと口を動かす。新三ばかりを連れ歩いていたせいで、太郎のきつさを忘れていた。
「まあいいわ。勝手にしろ。ただ、仏のおれも、今までは問題児のシロジロが泥棒したりしたときは見逃してやったけどよ、曲者のあいつらだけは何か変な真似をしてみろ。家族全員叩き殺してやる」
牛太郎の物騒な言葉がやけに真実味を帯びた息の荒さなので、一同は皆、箸を止めて牛太郎を見つめる。
牛太郎だけが沢庵をばりばりと噛み砕く。
「どうしたのじゃ、亭主殿」
「いいえ、別に。てか、これからは駄目なものは駄目ってきっちりさせてもらいますよ。このたるんだ空気を引き締めてもらいますよ」
そう言って、一同に目を持ち上げた。
「いいな、お前ら。びしっとやれよ！　びしっと！　おれの許可もなしに銭だけもらってどっかに行くような真似をしたら打ち首にするからな！　仏の顔は三度までだけど、おれの顔は二回までだ！」
檄が飛んだあとの食卓は終始無言だった。
「皆さん、びっくりしていましたよ」
自室に戻り、机に向かって文をしたためていると、背後で新三が布団を敷きながらそう言った。
「政治をあまり食事に持ち込まないほうがよろしいのではないのですか？」
「持ち込んでないだろうが」
牛太郎は折り畳んだ文を新三に渡した。播磨姫路城の小寺官兵衛宛てである。
「明日、飛脚に持ってけ。三日後ぐらいには岐阜を出て、まず小谷

の半兵衛のところに行くからな。そのあと、京に行って、坂本、堺、摂津、大和に行くからな。岐阜に帰ってくるのは秋頃だ。家のお父さんお母さんに挨拶しとけ」

文を受け取った新三はちらと牛太郎を覗き込む。

「かしこまりました」

「父上」

と、戸を叩く音があった。招き入れると、新三はすかさず太郎に平伏し、文を懐におさめて部屋をあとにしていった。

「なんだ」

太郎は牛太郎の前に腰を下ろすと、しばらくは顔を伏せて黙っていた。

「なんだよ」

「父上はご存知だったのですか。叔父上が一度は春日井に戻ろうとしたことを」

今度は牛太郎が黙りこむ。というよりかは、無視して布団の上に寝そべった。

「叔父上は百姓感覚が抜けないのですから、あまり厳しくしても仕方ありませんでしょう」

「そういうことじゃない。おれが心配しているのはどこでどうやって、この家で話していることが筒抜けになっちまうかってことだ」

「それは――」

太郎は苦々しく笑った。

「考えすぎでしょう。叔父上が間者だとしたら、最初から金銭を無心してくるような真似はしなかったはず」

「お前は油断している」

牛太郎は武田の忍びの噂を太郎に説明してやった。どこに紛れているのかわからないと。民衆の中なら当然のこと、女中や奉公人にだって扮装していたってわかしくはない。

太郎は小首を振りながら額に手を当てる。

「お気持ちはわかりますが、父上も拙者も家中のことは家では口に

していないではないですか。母上もあいりも織田家に何が起こっているかなど把握しておりません」
「用心に越したことはない」
牛太郎はそういう人間だった。こうだと決めると、周囲の声は一切聞かない。太郎はよくわかっている。昔は女の尻ばかり追っかけていたことも。甲府でだまされたことも。
「ところで、武田はどうなのですか」
と、どうしようもないので、息子は話を変えた。
待っていましたとばかりに牛太郎は体を起こし、そのくせ「うーん」と、あからさまに眉をしかめて顎に手を当てた。
「なかなか難儀なもんだ」
牛太郎は自分の努力を太郎に教えてやりたい気持ちでいっぱいだった。十年以上を共にしてきて、将校の格というのはすっかり抜かれてしまっている。なので、認めさせたいという思いが並々ならない。
「なにしろ、武田だからな」
しかし、設楽ヶ原のことも、武田の内部も口に出さない。それだけ巨大な敵に立ち向かっていることを知らしめてやりたいばかりに。
「三河は無駄骨だったのですか」
「そういうわけじゃないんだがね。そういうわけじゃ」
太郎はこれみよがしに出し惜しみをしている牛太郎をじっと見つめる。
「危険な真似や無謀な賭けには出ないでくださいよ」
むっとする牛太郎。
「おれがそんな単純な奴だと思ってんのか？　ん？」
「単純かどうかはともかく、今までのことを振り返ってみれば言いたくもなります」
太郎は指を折りながら、これまでの牛太郎の危険で無謀な行いを挙げていった。美濃の調略、池田城では投獄された挙げ句に一騎駆け、金ヶ崎ではしんがり役を名乗り出たこと、二俣城に三方ヶ原の

戦い。
「いい加減、おとなしくしてください」
「それは戦場での話だろ。おれだってもう二度といくさの真ん中に突っ込む気なんてない」
「いくさ場だけではなく、命を狙われることだってあるのですから」
「じゃあ、護衛に新七を寄越せ」
「命を狙われるような真似をしなければよい話です」
「おれを殺したって何にもならねえだろうが」
「いいえ。実際、甲府に行ったときに、女忍びに殺されかけたではないですか」
「ごちゃごちゃうるせえな！　子供はとっとと寝ろ！」
「そうやっていつまでも小姓の太郎扱いですか」
「お前だっていつまでも沓掛の駄目城主扱いだろうが！」
「はいはい。かしこまりました。子供はとっとと寝ますよ」
太郎はまるで昔の小姓の太郎を蘇らせたようなふてくされた表情を残して、部屋をあとにしていった。
新三は張り倒してでもきっちり教育しなければ。
翌朝、広間の食卓には玄蕃允がいた。なんでも、宿屋兄弟を毎朝しごいているらしく、弥次右衛門の姿もあった。
弥次右衛門は太郎か宿屋兄弟に釘を差されたらしく、牛太郎を確認するなり、挨拶が遅れてしまったことと、嫁や娘たちの顔を見せていないことをたどたどしい口調で詫びてきた。
「いつまでも百姓気分でいると、簗田姓を剥奪して、市中をクリツナとクロに引き回させて、松永弾正のところに飛ばして、娘たちはどっかの売春宿に売り飛ばすからな。覚悟しとけ」
人が変わったような牛太郎の強権ぶりに、家の者たちは委縮してしまう。
「そこまで言わなくてもよいではないか」
咎めてきた梓をぎろりと見返す。いつものようにおかしなことを言ったわけでもなく、封建制度下の家長たる男として恐怖を示した

だけなので、さすがの梓も口を噤む。
「父上」
たしなめてきた太郎をぎろりと見返す。太郎は、ハア、と溜め息をつく。
すると、よせばいいのに、牛太郎は家長の威厳をしらしめられていることに図に乗って、訳のわからないことを語り出した。
「お前ら、よく聞け。築田家っていうのは戦闘集団だ。男はいくさのために存在して、女は男を支えるために存在しているんだ。そこんところわかれ！」
しんと静まる広間。
「日頃から浮ついた気持ちで生活していると、いざっていうときに足をすくわれるからな。なので、これからはおれを旦那様と呼ぶのはやめろ。新三のように殿と呼べ」
最後が余計だった。
「気でも狂ったか、オヤジ殿は」
と、玄蕃允が呆れ返って勝手に食事を始めてしまう。
「おいっ！　玄蕃！　お前、仮にもおれの家の飯を食らっているんなら、オヤジ殿とかそういう言い方はやめろっ！　おれがいただきますって言ってから食べろっ！」
「なら、御託を並べてないで、早く言えばよかろう。わしらは腹が減っているのだ」
「御託だとお。おれはな、武士の心構えを言っているんだぞっ！」
「何が武士の心構えだ。オヤジ殿が言えたことか。隠れて叔母上の小袖の匂いに執心している物狂いがよくもまあ言えたことよ」
牛太郎は玄蕃允に指を差したまま凍りついた。
「おい。それを言っちゃまずいだろ」
栗之介が密やかに玄蕃允を咎めるが、その声は静まり返った一同の耳にまったく聞こえ渡っていて、玄蕃允は玄蕃允でつまらなそうな顔で箸をすすめる。
しらりとした視線を隣から痛いほどに感じた。

「気が触れているかもしれんが、別によかろう」
と、梓だけは笑っている。しかし、あいりが眉をひそめていた。貞にこそこそと囁き、自分の小袖がなくなったのは旦那様の仕業ではないかというようなことを言っていた。
「あ、あいり様」
と、貞は凍りついている牛太郎を慮ってあいりを制するが、あいりは不満らしく、牛太郎を睨みつけてくる。
七左衛門が口許を歪めていて、治郎助は気まずそうにしている。近頃、牛太郎にべったりとくっ付いている新三は、牛太郎の性癖に勘付いていたのだろう、知らぬ存ぜぬ無表情だ。
「父上、飯が冷めてしまいますぞ」
「う、うん。み、皆さん。ど、ど、どうぞ、召し上がれ」
牛太郎の言葉に、一同は釈然としないながらも箸を手に取る。その中で一人、あいりだけがじっとして牛太郎を睨み続けてくる。
「旦那様」
「は、はい」
「お食事を召されたら、玄蕃允様がおっしゃったこと、詳しくお聞かせください」
「うっ！」
唐突に牛太郎は腹を押さえると、
「腹が、腹が。ちくしょう、最近、腹の調子が悪かったから、クソッ、きっと、変な病気にかかっているのかもしれん。お、おい、鉢巻き。おれを部屋まで運んでいけ」
「私がお連れしますよ、旦那様」
腰を上げ、牛太郎を見下ろしてくるあいりが、かつてないほど大きく見えた。

逃亡登城振られてどぎまぎ

あいりに追及された牛太郎だが、身に覚えがないと押し通した。玄蕃允が言ったことは梓の小袖のことであって、それは梓の承諾を得ている。愛する妻の香りを傍にしたいから匂いを嗅いでいるに過ぎないのだと、とにかくしらを切った。

あいりは梓とは立場も性格も違うので、さすがに強くは責め立ててこなかった。ただ、牛太郎がどこか開き直っているふうなので、不服そうではあった。

「もういいじゃないか」

と、途中から入ってきた太郎があいりをなだめ、牛太郎の部屋から出していく。去り際、太郎が残していった視線が軽蔑の色に満ちていたが。

結局、威張れなくなった。

牛太郎は、誰かに見つかって話を蒸し返されるのを恐れ、窓から部屋を脱け出す。玄関口に回ると草履を履き、こそこそと門をくぐり出た。

昨日から城に登る予定でいたが、まだ、朝雀が騒がしいし、腹も減っている。ということで、前田家に押しかけ、

「追い出されちゃったもんで」

と、女中に朝飯を恵んでくれるよう泣きついた。ほどなく奥方のまつがやって来る。腹が大きくなっていて、また、子を産むつもりらしい。

「どうしたのですか」

太郎と喧嘩をして飛び出してきたという嘘をつき、朝飯を頂戴しに来たとなると梓に殴り倒されるのでこの件は絶対に口外しないでくれるよう何度も言い含めてから、牛太郎は前田家の朝飯にありついた。

又左衛門は上総介に従って京に出ていて不在らしい。代わりに嫡

男の犬千代が挨拶に顔を見せた。
「簗田殿も一緒に京に行ったのではなかったのかと母上が不思議そうにしていましたよ」
牛太郎は思わずむせ込んでしまい、ご飯粒をこぼしてしまう。
「あ、いや、違う、おれは一応、役目を終えたから戻って来たんだ」
「父上はお元気ですか」
「あ、お、おう。元気だったぞ。元気すぎるぐらいだ。アハハ」
前田家でのんびりと隠れたあと、牛太郎は城に登った。大手門をくぐると、番兵たちに声をかけていきながら、本丸には向かわずに市やその姫たちが住居にしている屋敷に向かう。
市の住まいの門前にも当然見張り番が立っているが、夜でもないので、
「簗田左衛門尉だ」
の一言で、見張り番は頭を下げてき、悠々と中に入る。玄関口で来訪を告げると顔見知りの女中頭が現れて、市に伝えて来るから上がって待ってくれるよう言われたが、
「いや、今日は侍女のさな殿に話があるんで、ここで待ってます」
と、上がりかまちに腰を置いて、さゆりが来るのを待った。
「なんや」
ほどなく、深い青にあやめの白の花が鮮やかな小袖を纏うさゆりがやって来た。
「あんた、おやかた様と一緒に京に行っていたと違うんか」
「まあ、いろいろあってだな。話がある。ちょっと来い」
「なんの話や」
「いいから来い」
牛太郎は辺りを確かめつつ、庭の奥までさゆりを連れていく。
「なんや。さっさとしい」
「頼みごとがある」
牛太郎は人目がないことを確認すると、その場にがばりと両膝をついて、さゆりの足元に額を押し付けた。

「おれの下に復帰してくれ！　いや、復帰してください！　お願いしますっ！」
「嫌や」
くるりと踵を返してしまうさゆり。牛太郎は彼女の足にしがみつく。
「話だけでも聞いてくれよお」
実は京に行っていたのではなく、上総介の命で対武田家の作戦を策定しなくてはならなくなったので、三河遠江に赴いていたとちょっと大げさにした。
「なので、さゆりさんに手伝って頂きたいと思いまして」
「知らん」
さゆりは立ち去ろうとする。牛太郎はしがみついて離さない。
「頼むよお。さゆりんがいないとどうにもならないよお。武田のことなんて何もわからないし、ちょこまか動ける人間もいないしさあ」
「何を言ってるんや。新七と彩がおるやんか」
「新七は太郎の手下になっているし、あーやは、その、あんまりそういうことさせたくないじゃん？」
すると、庭先から「うちたろう。うちたろう」と、女中から聞いたのだろう、茶々の声が届いてきた。牛太郎はあわてて手を離して起き上がると、半纏と股引についた土埃を払い落し、すたすたと立ち去ろうとしているさゆりの肩を掴む。
「頼むぞ」
しかし、手を振り払われた。
「頼まれん」
さゆりは、お茶々様、お茶々様、と、庭先へ駆け出して行き、牛太郎は失恋してしまった男の風情で立ち尽くす。茶々が侍女たちを従えてちょこちょこやって来て、結局、目的は果たせないまま茶々の相手をするしかなかった。
初も加わって、鬼の役をやらされた牛太郎は姫たちを追いかけ回す。棒きれをどこからか拾ってきた茶々にそれで叩かれながらも、

唸り声を上げて走り回っていると、玄関口に一振りの白蘭――、いや、柔らかな陽光に輝く白の打掛、黄の小袖が春の日和にまばゆく映える犬がいた。

はっと目を奪われて、牛太郎は足を止める。侍女を一人だけ伴っていて、姉の市を訪ねてきたらしい。

「左衛門尉殿？」

訊ねたわりに、桃色の頬を微笑に緩め、揺れる花弁のようにはんなりと小首を傾げる犬。一応ながら痩せてしまっている牛太郎を確かめたらしい。

まこと、季節の情緒に染み込んでいる女性だった。秋なら秋の犬。春なら春の犬。充ち満ちた香りの中へといざなうような優美なたたずまいに、牛太郎の胸は年甲斐もなくふわりと掴まれた。

「すけぺい！」

と、茶々に膝をびしっと叩かれて、牛太郎は我に戻った。あわてて地べたにひれ伏す。

「お、お、お久しぶりでございますっ！　簗田左衛門尉でございますっ！」

そんな牛太郎をおもしろがって、茶々と初が背中に乗っかったり、頭を叩いたりする。やめてくだされ、やめてくだされ、と、頭をおさえながらも、その口許は馬鹿みたいに緩みっぱなしだった。

「おやめなさいませ」

犬は歩み寄ってくると、茶々と初の目線まで膝を折る。

「お茶々殿、お初殿、母上様に犬が来たとお伝えしてくれますか」

こくりと頷くと、二人は駆け出していった。

「どうぞ、表を上げてください、左衛門尉殿」

しかし、牛太郎はひれ伏したままで、色めき立ってしまっている顔を上げられず、犬は屈んだままで牛太郎の頭を見つめる。

なんだか、そのままお互いに黙ってしまった。

山から飛び立った鷹か何かが、長い鳴き声を空に響かせる。その声が旋回しながら消えていくと、犬から口を開いた。

「奥方殿にたいそう怒られてしまったそうで」
「恥ずかしながら」
「でも、お元気そうでなにより」
なんて、優しい声なのだろう。なんて、愛らしい口調なのだろう。地面を突いている両の手から力が奪われてしまいそうで、目玉の奥を支えているものがどこかに飛んでいってしまいそうで、もう、この場に跳ね上がって歓喜の声を放ってしまいそうで、本当に年甲斐がない、本当に見っともない、でも、本当にほのかな幸せを噛み締めてしまう。
「まさか、今日、お会いできると思いませんでした。ただ――」
続かなくなった言葉に、牛太郎はちらと目を上げた。すると、なんてことだろう、犬は恥ずかしそうにして横に視線を背けている。
「こ、ここにこうして来れば、い、いつかお会いできるとも」
牛太郎は見ていられなくて、あわてて額を地面にこすりつける。
「も、申し訳ございませんっ。かようなことをっ」
犬はそそくさと腰を上げると、逃げるようにして玄関口へと小走りに去っていく。牛太郎は後を追うこともできなければ、顔を上げてその後ろ姿を見ることもできず、ただただ、木か石にでもなったかのように地面にへばりついていた。
まずい。いろいろな意味でまずい。犬に捉われがちな己の心も、その犬が上総介の妹だということも、それに自分には鬼の女房がいるということも。
どうしたらいいのかわからない。いや、なんだか胸苦しい。じわじわと息が詰まっていくように。
この、どうにもしようのない不安定な安らぎ。
そもそも、何をしにここに来たのか忘れてしまった。
「いつまでそうしているんや、阿呆」
尻をえぐるように蹴飛ばされて、涙目で振り返ると、鼻先を突き上げているさゆりがそこにいて、フン、と、背中を返して立ち去っていく。

そっか。武田だった。

天地を鳴動させるかのごとく

「お会いしたかった」
と、市が出し抜けに言ってきて、牛太郎はこの世の春を間近にしたが、すぐに市のそれが甘ったるい意味合いではないことに気づいた。
目を伏せる市の表情は虚ろげていて、しかし、眉間が硬い。
「どうしたんスか？」
「岐阜におりたくありません。家中の将でこんなことを言えるのは牛殿だけです」
「なんで岐阜に？」
市は黙ってしまった。
「姉上様は年賀の宴席の件に心を痛まれておられるのです」
茶々と初を両手にして、牛太郎を見送りに門前にまでやって来た犬がそう言った。
「兄上様とはお顔を合わせておられません」
「そういうことスか」
なんでも、賀宴の事件を知った直後はあの市も激怒しており、羽柴藤吉郎の仁は己の栄達のため、その義は上総介への機嫌取りに過ぎない、と、憤懣やるせなかったらしい。
「サルはぬつっとぢゃ」
茶々まで感化されてしまっている。
ここまで嫌われてしまって気の毒だなと牛太郎は思った。藤吉郎ではなく、女房の寧々が。
牛太郎は一礼を残して門をくぐり出、屋敷をあとにする。
「左衛門尉殿！」
犬の声に牛太郎は振り返った。
「こ、今度、来られるときは犬にも教えてください」
茶々と初が小さな手を大きく振ってくる。牛太郎はもう一度頭を

下げ、背中を向けると、ひっそりとにやけた。
そんな気分のまま、城を下り、黙って脱け出して来たことも忘れて真っすぐに帰路を辿っていく。思うことは勿論武田のことではなく、犬のこと。犬が牛太郎に掛けてきた一言一言。やっぱり自分に気があるのだろうか、どこまで気があるのだろうか、どうして気があるのだろうか。
春の甘い風を吸い込んで、すっかり舞い上がってしまっている。
「駄目だ駄目だ。やめろやめろ」
と、自分の頭を自分でばかばかと殴る。
織田の姫ともあろう人が、自分などに気を持っているはずがない。
「でも、おれって痩せたしな」
そう言いながら、頬のあたりを撫でてみる。顎の辺りをさすってみる。梓に刑を処された直後はげっそりと痩せ細っていただけだが、あれから三カ月も経ち、食べる物は食べて、あくせくと動き回っている。
そういえば、近頃は自分の姿を確かめていない。にやりと笑う。きっと、いい男になっているに違いない。
牛太郎は足を速めた。梓かあいりに鏡を借りようと考え、あいりに詰め寄られたことはもう覚えていない。
そうして、我が家まで戻ってきたのだが、玄関の敷居を跨ごうとしたところ、庭先から何やら声が聞こえてくる。
どこか除け者にされた感覚で、そっと覗いてみる。庭先には家の人間たちが総出だった。縁側には女たちや太郎が立っていて、下では従者たちが一頭の馬を取り囲んでいる。
「あっ」
と、声を上げた。
そういえば、堺の馬喰に牝馬を注文したのだった。春になったら岐阜に連れてこいと申しつけていた。
馬を購入したことを存じているのは牛太郎と四郎次郎だけである。なので、牝馬を連れてきたらしき馬喰と従者たち、とくに栗之介が

揉めているようであった。
「おいおい」
牛太郎は揉めごとに割って入っていくように、鷹揚な素振りで姿を出した。
「いいんだ、おれが堺で買い付けた馬だ」
「そんなの聞いてねえぞ」
と、牛太郎に気付いた栗之介が詰め寄ってくる。
「なんでこんな馬を買ってんだ。なんのために買ったんだ。誰が乗んだ」
「なんだよ、お前。何をそんなに怒ってんだ」
「必要ねえだろ」
栗之介は焼けた額に皺を集めてやたらと語気を荒げており、牛太郎はその理由がよくわからない。
「必要あるかないかはおれが決めることだ。お前が決めることじゃない」
「必要ねえだろうよ！　何のために必要なんだ、こんなおんなっ子！」
栗之介はやって来た牝馬を指差して、相当な不満らしいが、牛太郎が見る限り綺麗な馬だった。栗毛でおとなしいし、しかも、たてがみや尻尾は銀色だった。栗綱よりも見映えがいいと、牛太郎は思った。
「おい、馬喰。いい馬じゃんか。よくやったぞ」
そう言いながら牛太郎は牝馬の首をぽんぽんと叩く。牝馬は首を叩かれても栗綱のようにぼんやりとして微動だにしない。
「へえ。そう言ってもらえると連れきた甲斐がありやした」
「どこがいい馬だよ！　旦那の目は節穴だろ！」
「お前は黙ってろっ！　ねじり鉢巻きのくせにうるせえんだよっ！」
牛太郎と栗之介のやり合いに、宿屋兄弟や弥次右衛門は眺めているだけしかなく、梓や女たちもさすがに馬のことはわからないので口を出してこない。太郎だけが溜め息をついている。

「いい馬だろうが！　髪の毛は銀色だしよ、格好いいじゃねえか！」
「そんなのはどうだっていいだろうよ！　色が変わっていたって、体つきはなんなんだ、これ！　痩せぎすで、張りがなくて、いくさ場でなんかてんで使い物になんねえよ！」
　そう指摘されると確かにそうなので、牛太郎は馬喰を睨みつける。馬喰はあわてて両手を振りかざし、
「いや、だって、旦那様はおとなしくて、子だけ産めるような馬でよろしいとおっしゃったんで。軍馬を持ってこいだなんて一言も」
　その言葉に一同はしんとした。
「ということだ、鉢巻き。おれは軍馬を持ってこいだなんて一言も言っていない。栗綱の嫁さんだ、こいつは」
「旦那」
　栗之介はしばし牛太郎を睨みつけたあと、重々しい吐息をついた。
「あんたって奴は本当に、もう……」
　牛太郎は眉をひそめる。馬喰に目をやると、この中年は愛想で笑っているだけである。宿屋兄弟や弥次右衛門も、栗之介の言葉の真意をわかっていない様子である。
「なんだよ。なんなんだよ」
「父上」
　太郎が縁側から言ってきた。
「残念ながら栗綱は去勢されておりますぞ」
「は？」
「栗綱は金玉抜いてんだよっ！」
　栗之介がそう叫んで、女たちは袖で顔を覆って、牛太郎は唖然とした。
　栗綱はそもそも、どんな馬にも乗れないでいた牛太郎のためだけに、栗之介が仔馬のときから教育してきた。基本、軍馬は去勢されるし、性格をおとなしくさせるためならなおさらだった。
「そ、そんなの、聞いてねえし……」
　牛太郎の弱々しい言葉が舞い散る花びらとともに風に流されてい

く。

「じゃあ、勿体ないから俺が乗ろうかな」

と、七左衛門がでしゃばる有様。「兄さんっ」と、治郎助に肘で小突かれて、

「いや、冗談だけどよ」

無知をさらけ出したのが主人の牛太郎という手前、何とも言えない気まずい空気が簗田家の庭先を覆い、ただ立ちつくすしかない牛太郎の背中はとても寂しい哀れな背中だった。

放心している牛太郎をよそに栗之介が言う。

「この馬は返す。木曽に連れてけ」

「そんなこと言われても、お代は返せませんよお」

空気に耐えられなくて、牛太郎はうつむいたまま立ち去ろうとする。

「おい、旦那っ。どうすんだよっ！」

「おれが悪かった。勘弁してくれ」

と、意味不明の返答。

ところが、そのとき、馬屋から轟音が響き渡ってきて、一同が目を向けると、黒連雀が鍵板をぶち破っていた。首を大きく揺さぶりながらいないていて、その口がおかしなことになっている。

「クロっ！」

太郎が裸足のままで駆け下りてきた。唇を捲り上げ、歯を剥いている黒連雀をなだめようと太郎が立ちはだかるが、猛獣と化してしまっている黒連雀は太郎の声も聞かずに前後の脚で跳ね上がり、首を大きく揺さぶり、涎を撒き散らす。

「クロっ！　やめろっ！」

「若、駄目だっ！」

栗之介が駆け寄っていき、太郎を抱えて黒連雀の前から引き剥がす。

「お前らも逃げろっ！　クロの金玉は抜いてねえっ！　邪魔したら殺されるぞっ！」

従者たちはそこを逃げ出し縁側へとへばりつく。女たちは足を震わせながらどうすることもできず、貞だけが機転をきかせて駒の目を手で隠している。

牛太郎はというと、

「なんだよ、あの性獣は」

黒連雀の腹の下にそそり立っている生殖器の巨大さに釘付けである。

そのうち、尾花栗毛の牝馬も、襲いかかって来る怪物の気配を感じ取って尻っ跳ねをして暴れ出した。馬喰が必死になって口輪を掴み、牝馬の行動を制しようとする。

「だ、旦那も手伝ってくだせえっ」

馬喰の言われるがままに牛太郎は一緒になって口輪を掴み上げる。そうして黒連雀は生殖器をそそり立たせたまま、前脚を高々と持ち上げて、天地を鳴動させるかのごとくいななき上げ、そのまま、暴れ跳ねる牝馬の腰へ、組み伏せるかのようにして乗っかった。

牝馬は猛々しい黒連雀を受け入れて、おとなしくなってしまう。黒連雀は牝馬のたてがみの辺りまで首を伸ばし、そこを噛みつけると、腰を突き上げた。

「こ、これでお代は返せませんからね！」

馬喰が言う。牛太郎はこれで良かったような悪かったような、とにかく、黒連雀の凶暴な男っぷりに圧倒されてしまって声がなかった。

例外

生命が宿ったのかどうかはともかく、馬喰にまんまとやられてしまって、尾花栗毛の牝馬を栗綱や黒連雀と共にさせるわけにはいかず、栗之介が沓掛に連れていくことになった。

「これから北近江に行くから駄目だ！」

とは言えなかった。何度繰り返してきたことだろう、思いつきで事を運び、結果、不利を招いてしまう。どうして、そう無駄な買い物ばかりをするのだと、堺で財を成していることを知らない左衛門太郎にこんこんと説教され、

「おれは金持ちなんだから、黙れ」

という喉まで出かかった言葉を何度も我慢し、牛太郎は黙って聞くしかなかった。

さんざんだ。

太郎から解放された牛太郎は、自室で一人、むすくれていた。三河から岐阜に帰って来てまだ二日目、朝は玄蕃允の裏切りによってあいりに詰め寄られ、昼は太郎に説教され、犬との淡いひとときもどこへやら、岐阜にいるといつもろくなことがないと、自分が招いた災いだということを省みもせず、太股を苛立たしげに揺らした。

思い立って、牛太郎は部屋の戸を開けた。調度、たまが前を通りかかったので、治郎助が鍛錬から帰ってきたら、ここに呼んでくるよう命じた。

「は、はい」

牛太郎は戸を閉めようとしたが、たまがその場にうつむいている。

「どうした」

「あ、あの」

顔を上げたたまは、不安げに眉尻を下げている。

「お父ちゃんは、その、頼りないし、あんまり使えねえかもしんないですけど、身寄りはここしかないんで、どうか、旦那様、どうか、

おらたちをよろしくお願いします」
　そう言って、たまは頭を下げて足早に立ち去ろうとしたが、牛太郎は呼び止めた。
「ちょっと、入りなさい」
　牛太郎は自室の真ん中にどっかりと胡坐をかき、たまがうつむきがちにそろそろと入って来る。腰を下ろすよう申しつける。たまは戸を閉めて、肩をこわばらせながら正座する。
　黒連雀のこともあるから、もしかしたら犯されるとでも思っているのかもしれない。
「言っておくけど、おれはキミがどんなに可愛かろうと、手を出すような真似はしない。なぜなら、奥さんに殺されるからだ」
　確かにそうだとほっとしたのか、尻に敷かれている牛太郎がおかしいのか、たまはうつむいたまま唇をむずむずとさせた。あどけない。
「単刀直入に聞こう。キミは武田のくのいちを知っているか？」
「武田様ですか？」
　たまはぽかんと首を傾げた。演技でそうしているようではなかった。くのいちという存在すら知らなそうな表情だった。
「いや、なんでもない。聞かなかったことにしてくれ。それより、キミはこの家に奉公していて楽しいか。それでいいのか。無理やりやらされているんじゃないのか」
「い、いえっ。そ、そんなことは。梓様もあいり様もみんな、優しくしてくれます」
「好きな男はいるのか」
「えっ？」
「好きな男はいるのかって聞いているんだ」
「い、いえ」
「格さんにちょっかい出されてないのか」
「格さん？」
「七左衛門の馬鹿のことだ」

「い、いえ。特には」
「そっか。まあ、いずれちょっかいを出してくるだろうから、そのときは遠慮なくおれに言うんだからな」
「は、はあ」
たまは最後まで何のことなのかわからない様子で部屋をあとにしていった。牛太郎は他意があってのことではなかった。よく見てみたら、なかなか可愛らしい娘だったので、ちょっと話してみたかった。
苛立ちもおさまった。
改めて、対武田の事案を考察した。
摂津工作のときのように自分があちこちを回っている間に、さゆりに指揮官になってもらおうと考えていたが、当のさゆりは意にも介してくれない。沓掛の新七郎でも申し分ないだろうが、新七郎はいつ戦場に回されるかわからない。
彩を使うのは嫌だし。
於松が甲府にうまく忍びこめたとしても、連絡が取り合えないのだから、意味がない。こちらから調略を仕掛けることもできない。
「さゆりんがいないと何もできないじゃん」
仰向けに寝転がって、天井を見つめる牛太郎は、泣きたくなってくる。上総介も上総介だ。結局は何をしろと言うんだ。貧乏所帯（表向き）の自分を大大名の武田に立ち向かわせるだなんて、何を期待しているのか。
治郎助がやって来た。
「何事でしょうか」
と、牛太郎に目の敵にされている治郎助は、今度は何を言われるのだろうと緊張の面持ちだった。
「夜、岐阜を出るから用意しとけ」
「え？」
「え、じゃねえよ。用意しとけって言ってんだよ。鉢巻きを連れていけねえから、お前が栗綱を引いていくんだからな」

「兄はどうすれば」
「格さんは邪魔だから連れてかねえ。新三も連れていこうかと思ったけど、どっかに行っているし、うるさいからいい」
「今晩ですか？」
「時間がないんだ！　とっとと用意しろ！」
嘘だった。本当は岐阜の屋敷の居心地が悪くなっただけで、太郎やあいりに邪険に扱われるなら、今すぐにでも脱出したい思いからだった。
そう考えたとき、まともな人間は大嫌いな治郎助しかいなかった。ただし、梓には断っておかなければ、へそを曲げられてしまうので、治郎助に旅の準備をさせている間、牛太郎は梓の部屋を訪ねた。
「また、行くのか？」
梓は眉をしかめた。
「なにゆえ、亭主殿はそのように忙しいのじゃ。昨日の今日ではないか。太郎は去年の暮れからずっと岐阜におるというのに」
「これが終わればゆっくりできますんで」
梓は牛太郎をいじらしく睨みつけてくる。やがて、腰を上げると折り畳まれた小袖を一着取ってきて、牛太郎に差し出してきた。
「もう、着る物も少なくなってきてしまったからの」
牛太郎はにやにやとしながら小袖を受け取ると、子供みたいに胸に抱きしめる。
「帰りに反物をたくさん買ってきますんで」
「早く帰ってきておくれ」

竹生島で隠し材木を発見して以来、長浜は連日大工たちの盛んな声が轟いているらしい。
岐阜を立ったと見せかけて、願福寺で一泊してから岐阜を出た牛太郎は、連れている人間が健脚の治郎助だけとあって、栗綱を小走りに進ませ、一日で北近江小谷へと辿り着いた。
例のように夜闇に紛れて竹中半兵衛の所在の寺を訪ねる。

「まこと、簗田殿の来訪は突然ですね」
半兵衛の部屋も相変わらず汚い。
「それで、今夜はどうされたのですか。石山のことでしょうか」
「石山？」
摂津石山の本願寺顕如を言っていた。対武田作戦にかまけて、摂津の情勢に疎くなっている牛太郎は、一向一揆衆が越前で自治権を獲得したことにより、織田と停戦中であった石山本願寺が再び動きを見せていることを知らない。
「顕如が、門徒の将の下間筑後守法橋を越前に遣わし、守護に任じたとかしないとか」
越前の機に乗じて、顕如が織田家打倒の大号令を再び発するであろうと半兵衛は言う。
「なるほど」
一向宗の動向を知りもしなければ、かといって牛太郎に別段あわてた様子もなかったので、半兵衛はすすっていた湯呑みを唇につけたまま止めて、じいっと牛太郎を見つめた。
「となると、また包囲網かな」
やけに他人事口調の牛太郎である。むしろ、それを望んでいるような表情でさえあった。
半兵衛は湯呑みを下ろし、そのままぼんやりと湯呑みの中を覗き込んだあと、すうっと牛太郎に視線を持ち上げ、口許をほころばせる。
「何か企んでいるのですね」
「企んでいるってわけじゃないけど、まあ、これから企む予定かな」
ふふ、と、軽やかに半兵衛は笑いをこぼす。この男は企みに無縁の生活を送ってきたはずがないのだが、調略謀略を駆使する者特有の血なまぐささがなく、天才肌なのだろう、女のような優しい顔つきに陰は浮かばない。いくさ場は例外だが。
そんな半兵衛の前に、牛太郎は新三に書かせた設楽ヶ原一帯の地図を広げる。半兵衛はそれが何を物語るのかすぐに判別できたらし

く、瞳は途端に黒く研ぎ澄まされた。
「これはいずこの図でしょう」
「東三河の長篠の近く、設楽ヶ原だ」
「長篠？」
と、上げてきた視線は刃のように冷たくなっている。
「ということは、相手は武田ですね」
「そうだ。来年か再来年、おれは武田といくさをする」
「会戦ですか」
「織田と武田の浮沈を決めるいくさだ」
牛太郎の言葉に、半兵衛は闇に浸るような視線で見つめてきながら、口許を歪めて笑んだ。
例外の竹中半兵衛が現れる。

いつも大勝負

「おそらく」

半兵衛は持ち出してきた黒の碁石を地図の上に並べていく。

「小川を挟んで丘がこのように向かい合っていて、簗田殿がおっしゃったように、この一帯のほとんどが湿田であれば、武田は鶴翼の陣を敷いてくるでしょう」

陣形など知らない牛太郎だが、碁石の並びを見れば理解できた。黒の碁石は連吾川と並列して丘の上に並んでいる。

「昨年の西上の折りには武田軍は総勢二万五千だと耳にしましたが、もしも、会戦となった場合にはやはり同等の兵力をぶつけてくるでしょう。対して、織田徳川連合は、おやかたのことですから二万五千よりも多い兵力で迎え撃つはず」

仮にではあるが、と、前置きした上で半兵衛は続ける。

「簗田殿の思いを汲んで、おやかたが雌雄を決めるとなると、兵力を結集するはず。ここ最近の小谷攻めや伊勢長島では三万から四万を動員していたので、徳川を加えておそらく四万。となると、自らよりも兵力の大きい軍勢に立ち向かう場合の陣構えは鶴翼を定石とします」

「なんで？」

「強力な部隊を両翼に配置して、そこを突破し背後に回って包み込むのです」

三方ヶ原で徳川軍が取った陣形も鶴翼である。しかし、これは徳栄軒に読まれていた。寡兵が大勢に立ち向かう攻撃的な鶴翼の陣は、両翼の攻撃に頼るために中央を突破されると一貫の終わりであり、実際、徳栄軒は自軍の中央に山県赤備えに穴山・馬場の強力な部隊を配置して、徳川軍の陣をさんざんに打ち破った。

「本当にそうなるかあ？」

牛太郎は茶化すように声を上げたが、半兵衛が向けてきた目が突

き刺さるようだった。
「そうなりますよ」
唸るような低い声に牛太郎は押し黙る。
そもそも、と、半兵衛は言う。牛太郎が選んできた決戦地の目のつけどころがあまりにも良すぎて、偶然にもほどがある。本当にこの図に間違いないのなら、連吾川沿いの平地は進軍不可能な湿地帯であり、渡れる場所は三か所だけである。そして、立ち並ぶ丘の両端をうまい具合に街道が二本走っている。
「絶対にこの街道を使います。間違いなく翼の一方には山県赤備え、一方には不死身の馬場美濃です。武田は数々のいくさで先鋒を務めてきたこの強力な二隊で突破をこころみます」
もちろん、中央の丘に総大将大膳大夫勝頼が本陣を布く。
「わ、わかった。じゃあ、鶴翼の陣に対して、檄弱の織田はどうするんだ」
「両翼を防御する他ありません。築田殿、この設楽ヶ原で、本当にやる場合、考え方としては攻める武田に守る織田徳川という構成でなければなりません。両翼の攻撃に耐え、機会を見て反攻に転じるのです」
「じゃあさ、ここの街道に鉄砲隊を置けばいいことなんじゃないの」
牛太郎はなにげなくそう言って、手に取った白の碁石を、黒石から見た連吾川の対岸、街道の二点に置いた。
「鉄砲？」
半兵衛が眉間に皺を寄せて顔を上げる。
「ほら、金ヶ崎山でやったみたいにさ。山県クソ三郎とババミノはここしか通るところがないんだから、ここにいっぱい鉄砲を置いて、三段撃ちすればいいんだよ。柵もこしらえて。あと、平地の三か所にも。そしたら、鉄砲に撃たれっぱなしだろ」
牛太郎が並べていく白の碁石を半兵衛は凝視する。
「信長様は二千丁持っているらしいから、まあ、平均しても四百丁ずつ。三段に分けたら百……、えーと、百二十ぐらい？　一回で百

二十発撃てるわけだから、下手クソでも十人ぐらいはやっつけられるだろう。それに川を飛んで渡ったり、よじ登ってきたあとだから、武田の勢いも弱めになるし、柵もそう簡単にぶち破れないだろ。あとは金ヶ崎のときみたいに足軽が出たり入ったりしてちょこちょこやり合ってさ」

牛太郎が一生懸命に碁石を動かしているのをよそに、半兵衛は笑みをうっすらと浮かべ、牛太郎を眺めていた。

「築田殿。もしや、これは最初から存じていたことなのですか」

手を止めた牛太郎は目線を上げたが、言っている意味がよくわからない。

「築田殿は後世から来た人ではないですか」

「ああ、そうそう。確か、そうだった」

「この設楽ヶ原でやるいくさというのは、後世から来た築田殿は知っていたということなのですか」

「それはなんとも言えん」

なぜなら、「長篠の戦い」として知っていたからと牛太郎は言った。しかし、いざ長篠に様子を見に行ってみたら、長篠城近辺は決戦地に向いていなかったし、牛太郎が知っている点は大量の火縄銃を用いた決戦だったということであり、長篠城ではとてもじゃないが二千丁の火縄銃の使い道がない。

「そんで、あきらめかけてぐるぐる回っていたら、ここが見つかったってわけさ。だから、これが歴史通りに合っているのかどうかわかんない。わかっていたら、わざわざ半兵衛に聞きに来ないよ」

半兵衛は苦笑しながら顔を拭っている。

「恐ろしい」

笑いまじりにそう言った。

「まるで築田殿が今までしてきたことがここで繋がったようではないですか。拙者どもは築田殿の掌の上のような気さえしてきます」

「おれは半兵衛のことなんか転がしてねえぞ」

「いや、そういうことではなくて」

半兵衛が言いたいのは金ヶ崎山の直前、牛太郎が突如火縄銃を調達してき、自軍の沓掛勢に三段撃ちを習得させ、それを金ヶ崎山で行ったということは、まるで、「長篠の戦い」のためだったではないか。

「あれがなければ、おやかたは二千丁も調達していませんよ。それだって十兵衛様が進言してのことなのですから。十兵衛様が金ヶ崎にいなかったら、いたとしても築田殿が火縄銃を調達していなかったら、これはなかったのですよ」

「だってそうだもん。山県クソ三郎ぶっ殺すために火縄銃をいっぱい買ったんだもん。そしたら、なんか、金ヶ崎山になっちゃっただけで」

半兵衛は笑うことしかできない。すっかり、どす黒い参謀竹中半兵衛は消えてしまっている。

「ただな」

と、牛太郎は言う。

「鉄砲をぶっ放すってことはわかっていても、おいそれと簡単にはできないわけだよ。だって、この後ろには長篠城があるんだぜ。武田が長篠城を見過ごしてここに来るかってのが一点と、あと、長篠城に大軍で攻めてかかるかってのが一点だよ。今の状況で武田が大軍をここに持ってくるかってなったら半々だろ。東美濃からでも遠江からでも攻めることはできるんだから」

「いや、長篠城は重要な要地ですから、ここが決戦場となる可能性は大いにあります」

「じゃあ、どうやって長篠城を渡さないまま、ここに誘い込むんだよ。それがおれにはわからない。常識的にそんなことやらないだろうよ。あともう一つ、ぐちゃぐちゃのところでやるには梅雨時が狙い目だけど、そんな都合良く攻めてきてくれるかってことだ」

「そうですね」

「そうですね、じゃなくてさ」

「うーん」

細い顎に手をかけて、図に眺め入る半兵衛。狂気が抜け落ちてしまっていて、どう見ても身に入っていない。

「しばらく、考えさせてください」

と、言って、図を筒状に丸めてしまった。

「頼むよ、半兵衛。今回は匙を投げないでくれよ。一世一代の大勝負なんだから」

半兵衛はにっこりと笑う。

「簗田殿はいつも大勝負ですね」

牛太郎は朝早くに小谷を立った。治郎助と栗綱を走らせて、琵琶湖の南岸に沿って京に向かう。

大津で宿を取ったあと、翌日には京に入って相国寺を目指したが、織田の兵卒たちの姿がちらほらと見受けられるようになってきて、十数人の一団が栗綱の姿に目を留めた。彼らを率いていたのは馬廻衆の者で、かつて太郎の同僚だったらしい。

「左衛門太郎殿にも下知が渡ったのですか」

言っている意味がよくわからなかったので問い返してみると、なんでも、摂津石山の顕如が和睦を破棄し、織田軍に宣戦布告した。

そのため、近々、兵を差し向けるのだと馬廻衆の者は言う。

「おやかた様は二条城ではなく、相国寺に宿所を置いておられますのでくれぐれもお間違えないように」

牛太郎は馬廻衆に礼を述べ、彼らの姿が見えなくなると、踵を返して早々と京から脱出した。

「どうして、相国寺に行かれないのですか」

馬上の牛太郎は治郎助を無視する。

相国寺にひそかに寄付している牛太郎としては、仏門を目の敵にしている上総介にはそれをあまり知られたくはない。あと、摂津に詳しいのでいくさに駆り出されそうな気がした。

それにしても、所領を没収した相国寺に宿所を構えるなど、上総介の頭の中はどこまでもわからない。それとも、これが合理主義の

極みなのだろうか。相国寺が宿所に適していたから。理由はたったそれだけで、他にはなんら思うところがないのかもしれないのだ。

「非情な人間には簡単なことなのかもしれないですね」

牛太郎が大胆な言葉をあまりにもさらりと言うので、細川兵部大輔は思わずといった調子で辺りを見渡した。

勝竜寺城の主は兵部である。牛太郎を通した広間の奥の一室に、人の気がないことなど彼が一番よく知っているにも関わらず、兵部はあわてたのだった。

「簗田殿っ。滅相なことを言うものではありませんぞっ」

十兵衛のようになるぞ、と、兵部は言う。途端に牛太郎もあわて出し、今さら、口を手でおさえて辺りを伺う。

夕闇が障子戸を影に染めていて、気配はしんとしている。

京を脱け出してきた牛太郎は、寝床にするつもりで勝竜寺城に押しかけてき、折よく兵部が在席していた。快く、という表情でもなかったが、織田家の畿内奪還の立役者をぞんざいに扱うはずもない。

「そんなことより、摂津はどんなもんですか」

と、牛太郎はぎこちなく話を変えた。

勝竜寺城は京と摂津を結ぶ西国街道の途上にあり、京都盆地の南端にある。淀川を越えれば大和、西に少し行けば摂津高槻と、自然、怪しい連中を睨み据える役割を担っていた。

「御存知でしょうが、石山本願寺が再度狼煙を上げましたぞ。数日中にはここもあわただしくなりましょう」

「いや、本願寺もそうですけど、高槻とか池田は」

「信濃守は、まあ」

好き勝手にやっているらしい。

「相変わらずの茶の湯道楽ですか」

「それなら可愛いものですが、摂津切り取り次第となってからは、なかなか野心的な様相もありまして、昨年の若江城攻めの折りもおやかた様の命があったわけでもないのに、張り切って軍勢を出してきましたし、今は伊丹を狙っているようでしてな」

兵部の渋った表情に、牛太郎もどこか複雑な気分になった。戦国の将に野心は付き物で、摂津の一大勢力と躍り出た信濃守の張り切りようもわからなくはないが、あの信濃守が、それなのである。

どこか、素直に受け入れられない。釈然としない何かが、胸の奥に生まれた吹き出物のようにある。

「もちろん、簗田殿は信濃守及び摂津衆を対本願寺の前線とされるおつもりなのでしょう？」

「う、うん」

そんなことは、ちっとも考えていない。牛太郎の中では、自分の摂津での役目は終わっている。

謎の間柄

勝竜寺城を出ると淀川を渡り、大和の信貴山へと足を運んだ。

「何の用だ、小僧。押しかけてきやがって」

広間に姿を現すなり、一時間近く待たされていた牛太郎にそう吐き捨てて、上座にどっかと腰を下ろした松永弾正忠。

肘掛に体をもたせ、唇をへの字に曲げて、眉間の皺をいっそう深く、牛太郎を睨みつけてくる。

「わしは忙しいのだ。貴様の能書きなどを聞いていられる猶予などない」

「そう言うわりにはお見えになられたじゃないッスか」

弾正忠は唇の片側だけを歪めて、フンと笑った。ばちっ、と、扇子を広げ、ばたばたと顔を仰ぐ。やはり、機嫌が悪いわけではない。口の悪い老人なのだ。

「まあ、貴様の醜い顔もたまには良いと思ってな。あわれに痩せこけてしまったしな！」

ゆうに二十畳以上はある広間に、弾正は大きな笑い声を轟かせる。

牛太郎は唇を尖らせる。

「あっしは御隠居と違って、いろいろと大変なんスよ」

「なあにがいろいろと大変だ！　貴様が女房に拷問を受けたことなど知っとるわい！　まあ、それなりに盛んなようで、老いてしまったわしには羨ましい限りだがな！」

「やっぱ、来なかったほうが良かったッスかね」

「おう！　帰れ帰れ！」

ちっ、と、牛太郎は舌を打ち、弾正はげらげらと愉快そうに笑う。

「して、用件はなんだ。まさか、このわしの城を宿所代わりに使いたいなどと申すのではなかろうな」

「いや、そのつもりなんスけど」

「あつかましい奴だ。まあ、好きにしていけ」

牛太郎は思わず笑ってしまう。希代の大悪党と忌み嫌われる弾正なのに、なかなか憎めない。

「で、どうなんスか、その後は」

「何がだ。わしの余命か。そんなもの、この悪党いつでも死んでやるわい」

「そうじゃなくて。平蜘蛛ですよ。信長様にせがまれているんスか」

弾正は扇子の手を止め、はたと牛太郎を見つめた。豪放さも悪党の薄汚さもそこにはなく、どちらかといえば置き物のようにきょとんとしている。

「まあ、変な素振りもなさそうッスから、言われていないんでしょうけど」

すると、弾正はしばらく無言のまま扇子を動かしていたが、やがて近習たちに顔を向けると顎をしゃくった。近習たちはそれぞれ腰を上げ、席を外していく。

弾正と牛太郎の二人だけとなり、閑散とした広間にはうぐいすの濡れた声だけがもれてくる。

「近う寄れ」

牛太郎は言われた通りに腰を引きずっていく。

「もっと寄れ」

と、弾正が扇子で手招き、牛太郎は眉をしかめながら弾正の傍に寄った。弾正は肘掛から体を起こし、顔を伸ばしてくると、鼻と鼻が交錯しそうな距離でぼそりと言う。

「貴様、上総介に愛想が尽きたか」

弾正のしたたるような囁きに、牛太郎は思わずのけ反ってしまう。

「な、何を言ってんスか」

弾正がにやりと笑んだ。

「その気があるのなら、手伝ってやってもいいぞ」

本気で言っているようなので、牛太郎は溜め息をついてしまう。

「つくづくしょうがない御隠居ッスね。勘弁してくださいよ」

「貴様には気概というものがないな」

そう言いながら弾正は姿勢を直し、つまらなそうに見下ろしてきながら扇子を動かす。

「側近などはともかくだが、上総介に心酔している人間など、上役にはおらんだろうが。佐久間柴田しかり、明智の気取り屋もそうだ。己に言い聞かせているだけであろう。忠義忠義と」

げんに、と、言って、弾正は扇子をぱちりと留めると、その先端を牛太郎に向けた。

「上総介に取り立てられた貴様がそうだ」

「思い過ごしじゃないんスか」

「思い過ごしで生きてきたほどわしは生ぬるくない」

「もういい加減にしてください」

牛太郎がきつく睨み上げ、弾正は鼻で笑う。

「そんなね、くだらない化かし合いなんかどうだっていいんスよ。あっしはね、御隠居にお願いしたいことがあって来たんですよ」

「謀反か」

わしゃわしゃと笑う弾正を無視して、牛太郎は懐から取り出した地図を自分の手元に広げた。弾正が興味深そうに覗きこんでくる。

それは設楽ヶ原の図、ではなく、三河遠江駿河の東海三国を並べただけの簡素なものだった。

「ほう」

口端を緩めながらも、弾正の目つきが変わる。この男特有の湿っぽい目をぬうっと持ち上げてくる。

「武田か」

「希代の大悪党の腕を見込んで、武田を翻弄してほしいんス」

途端、牛太郎を見つめてくる弾正の褪せた瞳に、怪しい輝きがぐっと帯びた。蛇が獲物を飲み込むような眼差しである。それは、牛太郎を試してくるようでもあった。

牛太郎は静かに見つめ返す。

瞼の裏に闇をひそませたまま、弾正がにやっと笑った。

「わしに何がしてほしい。事によれば、貴様の頼みごとだ。聞いて

やる」
　牛太郎も口許を緩めて笑う。まるで、黒い絆だった。計算された損得勘定の絆であり、悪党の道楽を分け合っている共有体のようでもあり、しかし、最後には義理でも働かせているような、腐れ縁の父子のようだった。
「武田に包囲網を呼び掛けてください」
　弾正の口許から笑みが消えた。こわばった顔をすっと持ち上げ、背骨を真っすぐにして牛太郎を見下ろす。
「どうせ、今でもやり取りはあるんでしょう」
　ほとんど博打だった。弾正が上総介に心服していないのは明らかで、隙あらば再び反抗する腹積もりなのだろう。そんな弾正が上総介に有利な謀略に乗るのは賭けである。弾正に利益はまったくないのである。
　つまり、弾正が自分に寄せてくる、この奇怪な情にしか訴えるところはなかった。
「もう、時代は変わっていくんですから」
　弾正は厳のように押し黙って、牛太郎をただただ見つめてくる。
　やがて、意を決めたように息を抜くと、目を瞑ってから言った。
「ならんな」
「どうしてです」
　弾正は笑った。片目だけ開けて、牛太郎を見た。
「今のわしにそれだけの影響力があると思ってのことか。武田がわしなど相手にすると思うか」
「いや、相手にするでしょ！」
「愚か者め。何もわかっておらん。今、畿内で上総介に反旗を翻せられる者がどれだけある。石山の顕如とて、摂津でごねているだけで、京に攻め入れられる力も大義もなかろうが」
　弾正が言わんとしていたのは、現在、差し当たっての反織田勢力には一向一揆衆と武田のみであり、かつての包囲網のように織田領をおびやかすほどでもないということだった。

「貴様はずっと織田の人間だからわからんだろうが、去年、上総介はそれだけ駆逐したのだ。だがな――」

弾正はまた再び笑んだ。

「その情勢を悟らずにむやみに上総介に抵抗している者が武田の小倅ということだ。もし、貴様が武田とやり合うのなら、外交ではない。調略だ」

牛太郎はむっとして口をへの字に曲げる。

「調略だってのはわかっていますよ。でも、付け入る隙が今のところ見当たらないんスよ。だから、御隠居にお願いしたんでしょ。そこのところわかってくださいよ。言ったでしょうよ、事によれば聞いてやるって。手伝ってくださいよ」

「調略など大和におるわしができるわけなかろうが、大馬鹿者が」

「じゃあ、助言ぐらいしてくれたっていいでしょ！」

「やかましいわいっ！　ぎゃあぎゃあ騒ぐなっ！」

怒鳴られてしまって、牛太郎は不服ながらも口を噤む。牛太郎からすると、弾正が怖じ気づいているようにしか思えないのだった。影響力がないとか、情勢が違うだとか、そんなものはやってみなければわからないものだと言いたい。

ただ、弾正にも弾正の言い分があるはずだった。織田に帰参してからまだ日の浅い弾正は、滅多な行動を起こし、それが裏目に出てしまえば次こそは上総介に滅ぼされるであろう。

「貴様のような馬鹿者が武田を相手にするということ自体が愚行だ」

「あっしだって好きでやっているわけじゃありませんよ」

譲れない牛太郎は、駄々っ子のようにして弾正を睨みつける。弾正が動き、それがうまく行けば、武田を誘い出す第一歩になるのだ。

そんな、しつこい牛太郎に弾正は業を煮やし、腰を上げた。おい、と、障子戸の向こうへと大声を張り上げて、近習を呼びつけた。

「弥八郎をここに連れ出せ」

「かしこまりました」

障子戸がすっと閉められ、弾正は腰を下ろすと扇子を忙しげに動

かした。
「誰スか。弥八郎って」
「本多弥八郎。居候者だ。お前に付かせてやる。頭の切れる男だからそやつに手助けしてもらえ。三河生まれだし、役に立つだろう」
名を聞いて、牛太郎ははてと思った。どこかで聞いたことのある名だと。本多弥八郎。確か、鹿角脇立兜の――。いや、それは本多平八郎だ。

弥八

本多弥八郎。齢三十六。諱を正信というらしい。

「この小僧、どうやら武田とやり合うつもりだ」

弾正が肘掛に体を持たせかけながらそう言うと、弥八郎は視線を伏せたまま横の牛太郎をちらと見た。

痩せこけている。髷は結っているものの、何本か白髪が混じっており、こめかみの辺りがほつれてもいる。肩衣の裾や着物の袖が擦り切れていて、精一杯の正装なのだろうが、居候者の言葉にふさわしい貧しさが感じられた。

「弥八。貴様は三河者なのだから、手伝ってやれ」

「ということは」

低く太い声音だが、言葉を選ぶようにゆったりと喋る。

「拙者に織田の手伝いをせよということでしょうか」

「違う。わしはこやつを手伝えと言ったのだ。聞こえんかったのか」

弾正も弾正で、牛太郎をからかっているときとは打って変わって、老人なりの凄味を見せる。

「いえ」

「弥八。貴様もそろそろ観念して往生せい」

弥八郎は声も出さなければ頷きもせず、ただじっと視線を伏せている。何に観念するのか牛太郎には知れなかったが、頑固者には違いないと思った。ただ、大多数の三河武者のそれとはまた違う風情である。気配がどこか繊細で、広間にやって来てから、弾正とのやり取りまでの仕草は洗練されている。身なりは貧しいが、一挙手一投足は清らかでもあり、三河武者の無骨な頑固さではなく、何らかの理由に裏打ちされた頑固さであった。

「小僧」

と、弾正は牛太郎へと目を向けてくる。

「こやつは頭が切れるが、人間が堅い。貴様が客将として迎え、そ

の馬鹿さ加減でこやつに天下を見せてやれ」
弾正がそう言ったものだから、弥八郎は牛太郎にひたと目を留めてくる。
「はあ」
牛太郎は解せない。弥八郎の中年には似つかわしくない憂いを帯びた眼差しは、自分よりも遥かに貴そうだったから。
こいつのほうが天下を知ってそうだけどな、と。
牛太郎は、ひとまず弾正や弥八郎と別れ、宿所として用意された部屋に退いた。
「旅のお伴が一人増えるかもしれない」
荷駄を解いている治郎助に言うと、どなたですか、と訊ねてくる。
「本多弥八郎とかいう正体不明のおっさんだ。って言っても、おれと同じくらいかな」
「本多弥八郎殿って、あの本多殿ですか？」
「知ってんのか？」
「鹿角の兜に蜻蛉切の」
「それは平八郎だ」
まあ、三河者で本多姓なのだから、三河守家康との関わりもあるはずだ。それなのに、どうしてこんな大和の山の中にいるのだろうか。
その訳は夜に知った。弾正が慎ましいながらも宴席を開き、弾正と弥八郎、それに牛太郎の三人で酒を酌み交わしているうち、弾正が酩酊ぎみになってきた。
「弥八は一向かぶれだ」
悪態めいている弾正を気にも留めない様子で、弥八郎は静かに盃を運んでいる。
思った通り、弥八郎はかつては三河守の家臣だった。とは言っても、三河守の鷹匠だったらしく、その前は小坊主だったらしい。本多平八郎とは同じ一族だが、平八郎が宗家、弥八郎は分家の身にあたり、弥八郎の本多家はひどく貧しかったため、食いぶちを減らす

ために寺に入れられていた。
　そのためかどうか、桶狭間の四年後に三河で起こった一向一揆に加わり、松平善兵衛の祖父や夏目二郎左衛門などと共に三河守に反逆した。
　以来、三河を追放され、流浪している。
「この前の越前の騒ぎにも駆け付けていきおった。わしの制止も聞かんと。のう、弥八」
「そんなこともありましたな」
　終始、伏し目がちである。どうやら、彼の憂いというのは一向宗に絡んでいるらしい。
「どうして、御隠居のところに」
　と、牛太郎は訊ねてみた。すると、弥八郎はふいと顔を上げて、牛太郎にちょっと驚いていた。
「何か？」
「いえ。弾正忠様の面前で御隠居などと呼んでおられますから、小々可笑しくて」
「こやつは図々しいのだ。無礼で無法の悪党なのだ」
　瞼の下を赤らめる弾正に、弥八郎は囁くように笑う。
「まあ、あっしのことはどうでもいいとして、弥八さんはどうしてここに」
「わしが天下の名将だからだ」
「御隠居は黙っていてもらえますか。さっきからうるさいんスけど」
「なんだとっ！　貴様、老人をもっと敬わんかっ！」
　おもむろに腰を浮かした弾正を弥八郎がまあまあと苦笑交じりになだめる。フン、と鼻を鳴らして腰を下ろし、弾正は盃の中をがぶりと飲み干す。
「まあ、弾正忠様のおっしゃる通り、天下の名将だからです」
　弥八郎が言うには、最初、希代の大悪党と恐れられる松永弾正いかなるものかと、興味を先にして、流浪の土産にと訪ねたらしい。すると、いざ実際会ってみたら、確かに悪党である。ただ、三好家

の祐筆から成り上がったなりの教養と智恵が人並み外れており、三河の田舎者からしてみれば、悪党と教養人、それぞれの顔を持つ弾正から得られるものは大きいと感じた。

「そうですかねえ」

と、牛太郎はうがった目を弾正に向ける。

「このように言っているのだからそうなのだろうが。貴様ぐらいだ、わしをけなしているのは」

「けなしているのは御隠居でしょうが」

「貴様だ」

まあまあ、と、弥八郎がなだめる。牛太郎と弾正はおもしろくなさそうに盃を口に運ぶ。

「どうでもいいが――」

弾正は盃を膳に置くと、場に馴染んできた弥八郎に言った。

「貴様、この小僧と共に歩いてみろ。馬鹿が馬鹿なりにやっているのを傍目にしておれば、浄土も極楽もよいのであろうが、浮世の行く末云々よりも己の些細な果報だということがわかるであろう」

老人の言葉だからだろうか、説得力があった。とはいえ、妙にしんみりとしてしまう。

「どうしたんスか、らしくないこと言っちゃって。大悪党の言葉とは思えませんね」

「阿呆。大悪党の末路だからこそなのだ」

口ぶりはいちいち元気だったが、両の肩を垂らして膳の上をぼんやりと眺める弾正は、猫のように小さくなっている。

「わしはもはや老いさらばえてあとは死ぬだけだ。もう、わしが輝くことはない。これからの時代を作るのは貴様らだ」

何を言っているんだろうと、牛太郎は不可思議な思いだった。まるで、弾正は自分もかつては時代のためを考えて生きていたと言わんばかりである。

その辺り、牛太郎は突っ込みたくもなったが、弾正があまりにも哀愁漂わせているのでやめた。

弱々しい弾正のせいで座が盛り下がる。ゆらめく燭台の火が、三人を影にする。そのうち「寝る」と、弾正が言い出し、腰を上げてしまった。

「あとは貴様らで親睦していろ」

千鳥足で障子戸を開けた弾正は、そのまま近習に抱えられて去っていった。

取り残された二人は、黙って視線を伏せている。明智十兵衛や細川兵部のような生真面目な輩とでも酒を酌み交わせる牛太郎だが、弥八郎のことはよく知らないし、本来は人見知りである。勝手を知らない人間と目的もなく二人きりになるのはほとんどない。

弥八郎もなかなか静かな男である。

「簗田殿は」

「弥八さんは」

二人同時に声を上げてしまって、どちらも言葉が続かず、さながら初夜の夫婦のお見合いだった。

「あ、いや、弥八さんからどうぞ」

「あ、いえ、簗田殿から」

牛太郎は酒を舐めて、とりあえず間を持たすと、頬をぽりぽりと掻きながら、

「その、えーと、弥八さんは三河に帰る気はないんですか。いや、あっしは、まあ、訳あって三河勢に知っている人がいるんですけど、その中に松平善兵衛っていう奴がいましてね」

「ああ。大草松平の子息ですな。元気にしておりますか」

「ええ。元気ですよ。この前もちょろっと会ったんですけど、その、善兵衛も一度は家康殿に刃向かったって言うじゃないですか。でも、今は普通に家康殿の家来ですし、他にも一向一揆に加わったけど、許されて戻って来ている人はいるみたいですよ」

「そのようでございますな」

「弥八さんも戻ればいいんじゃないんですか」

言葉を大して選ばず、わりかし無邪気につついてくる牛太郎に、

弥八郎はか細い笑みを浮かべて視線を伏せる。
「いえ、それは――」
と、その先を濁して、盃を口にした。
「それとも、一向宗の教えなんですか、弥八さんは」
盃を下ろし、静かに無言である。
どうやら、この男は塞ぎこんでいる。他者には打ち明けたくない忸怩たるものを抱えて生きている。
弥八郎は一向かぶれだ、と、弾正は言った。一向宗の教えが浸透しているなら、過激な門徒衆たちなのだ、こうした席上でも上総介の所業を批判してきそうなものだが、それもしない。
そもそも、弾正は何を思って弥八郎を自分に伴わせようとしているのだろう。あの老人の口ぶりだと、牛太郎の対武田への手助けというのもあるが、弥八郎のためのようでもある。
牛太郎は弥八郎の盃に酒を注いだ。物思いから覚めたかのように弥八郎はふと顔を上げ、
「これは失礼つかまつった」
と、自らの膳の銚子を手に取る。牛太郎は手を振りかざし、
「いや、手酌で結構。無礼講といきましょうよ」
「では、これを最後に」
弥八郎が銚子を持ったままでいるので、牛太郎は盃を手にし、酌を受けた。
「じゃ、仕切り直しで」
二人は盃を互いに持ち上げ、口をつける。
「年齢も同じぐらいだし。そういや、弥八さんは子供はいないんですか」
「男子が一人おります。妻とともに三河の大久保新十郎殿に預けておりまして、もう、ずいぶんと会ってはおりませぬが」
先のいくさで浜松の軍議にはしょっちゅう顔を出していたので、牛太郎も大久保新十郎の顔は知っている。親しくはないし、言葉も交わしたことはないが、三方ヶ原の惨敗のあと、牛太郎が気絶して

いる間の晩に、新十郎が兵を引き連れて武田陣を奇襲したことは存じている。

「恥ずかしながら、新十郎殿には世話をかけられ続けておりまして、拙者が幼かったころには大久保の家にその日の飯を恵んでもらっていたという有様」

不幸を絵に描いたような弥八郎を牛太郎は逆に直視する。貧しさと、貧しさへの恥辱がうつむきがちの彼の根底にはあるようで、それが極楽浄土を一心不乱に打ちたてようとする一向宗へと駆り立てたのだろう。

「実を言えば、弾正忠様がおっしゃたように拙者は先ごろの越前の騒ぎに参加しておりました」

酔ってきたのか、幼い日の境遇を口にしたからなのか、弥八郎は酒をなめながら、心情を自ら吐露した。

「郷里に残している妻子を思えば、何をしているのかという情けなさもあります。ただ、拙者は浄土の教えこそが退廃したこの世を救うのだと信じ切り、越中にも越前にも行きました」

しかし、失望したのだと弥八郎は言った。

「顕如様は越前の守護に筑後法橋を寄越しました」

それはなかろう、と。

越前で起こった一向一揆とは、そもそもの初めは桂田播磨守の圧政に蜂起した土一揆であった。それが富田弥六郎に利用され、しかるのち一揆衆は加賀一向宗の援助を借りたのである。

弥八郎も一向宗として越前に赴き、一揆衆や地侍たちとともに富田を討伐した。

「だから、越前は一向宗の国ではなく、民が獲得した国なのです。しかし、顕如様は越前の統治を民の合議に任せず、一向宗の統治とさせた。拙者は違うと思いました。一向というのは教義なのです。民衆を救う教えなのです。権力ではないのです」

今の乱世にあって、珍しい男だと思った。一方で、このような清貧な人物が果たして自分の役に立つのだろうかと牛太郎は疑問にも

なった。

光あるものは光あるものを

信貴山城には三日居座った。その間、弾正から何らかの助言を得ることもできず、老人の散策に付き合わされる日々であった。

治郎助、それに弥八郎と共に堺へと向かう。河内へと入り、大和川の流れに歩みを合わせるように摂津湾の方角を目指す。

弥八郎は馬を持っていない。従者もない。あるのは腰に差したなまくら刀だけで、流浪の身とはいえ、まるで剣術修行者のようなありであった。さらには、白髪混じりの痩せ身なのだから、貧しさが一目でわかる。

堺に行くのはやめようか、と、牛太郎は途中何度も思った。秘密裏に財を成しているし、嫉妬でも起こすのではなかろうか。知られたくないことは山ほどある。しかし、弾正に押し付けられてしまっているし、今さら帰れとも言えないし、無言のままに付いてきてしまっているし。

かといって、堺を避けるわけにもいかない。すでに小寺官兵衛が来ているはずだ。

そもそも、この男をどう扱えばよいのか、牛太郎には判断がつかない。なんなら、家臣にしてしまおうか。いやいや、三河守に反逆した男を無断で雇うことなどできない。

そうこうしているうちに、堺の港が視界に入ってきてしまった。

「あのう、弥八さん」

牛太郎は言いながら、手綱を引いて栗綱を止めた。地面にうつむいていた弥八郎がふいと顔を上げてくる。

「確認したいんですけど、あっしの手助けをしてくれるってのは間違いないんですかね」

「それは弾正忠様の御意向により」

「じゃあ、これから見聞きすることはなるたけ胸にしまっていてもらえませんか」

栗綱の口輪を取る治郎助も、弥八郎にじいっと振り返っていた。
「かしこまった」
弥八郎は実直そうにうなずいた。信用できるかもしれない。けれど、一向宗にのめり込んでいるし、貧乏だし。
まあいい。危なくなったら彩に毒矢で殺させてしまおう。反逆者なのだから、いなくなろうと誰も騒がないはずだ。
牛太郎はそう腹を括って、栗綱を進ませた。
堺の町中に入り、下馬をして路地の賑わいの中をかいくぐっていき、やがて、今井彦右衛門から延々と借り受けている屋敷に辿り着いた。板葺きの小さな門を牛太郎と治郎助はなんとはなしにくぐっていくが、弥八郎が門前に突っ立って入ってこなかった。
「弥八さん」
牛太郎が振り向いて呼ぶと、弥八郎は足を出したり引いたり、戸惑っている。
「せ、拙者のような者が行ってしまえば、簗田殿に迷惑をかけまする」
「何を言っているんですか？」
「いえ、拙者は簗田殿の従者のようなものなのですから、配下は門前で待っていないと」
牛太郎は治郎助と顔を見合わせ、互いに首を傾げる。
「弥八殿。俺だって旦那様の従者ですが、こうして入っていますよ。別に旦那様はお屋敷に下人を上げないとかそういうことを言わないんで、大丈夫ですよ」
「てか、弥八さんは従者じゃなくてお客さんでしょうよ。遠慮しないで上がってくださいよ」
すると、弥八郎はぽかんとして、小さな門の屋根を見上げた。
「こ、ここは簗田殿の屋敷なのですか。拙者はてっきり、どこかの公家の屋敷を訪ねに来たのかと」
驚くほど豪勢な屋敷ではない。とはいえ、それは織田の人間の感覚なのかもしれず、そもそも一介の将が別邸を構えていることも弥

八郎には考えられなかったのかもしれない。
治郎助が門まで駆け寄り、弥八郎の手を取って中に引き入れる。
栗綱がそれをちらと眺めていて、牛太郎は眉をしかめながら頬をかきむしる。参ったな、と。このぐらいで驚かれていたのでは、それこそのちのち狂ったように嫉妬してしまうかもしれない。
それに一向宗に没頭している者からすれば、悪事を働かせて財を成したなど、不愉快極まりないはずだ。
「旦那様っ！」
間の悪いことに玄関から四郎次郎が飛び出してきた。牛太郎は舌打ちしたが、四郎次郎はまたいっそう肥えた顔を緩めながら牛太郎に駆け寄り、なんだか商売人っぽい揉み手で出迎えてきた。
「いやあ、お久しぶりッス。って、あれ？　ずいぶん痩せたんじゃないんスか。噂には聞いていましたけど」
「いいから、お前は引っ込んでいろ」
「ああ、そうそう。官兵衛殿なら三日前にはもうやって来られましたよ。ですんで、官兵衛殿のお相手にかまけて、仕事に出られませんでしたよお」
などと、どうでもいい口実をべらべらと喋っているので、牛太郎は黙って四郎次郎を睨みつける。
「おお、治郎助。息災だったか。旦那様にしっかりお仕えしているか。――あれ。そちらの方は？」
すると、弥八郎が急に声を上げた。
「中島殿っ！　中島四郎次郎殿ではないのかっ！」
「ええっ！　弥八殿じゃないッスかっ！　鷹匠の弥八殿っ！」
四郎次郎と弥八郎は互いに駆け寄ると、手を取り合った。牛太郎はぼんやりと立ちつくす。そういえば、四郎次郎は三河の出だった。
「どうしたんスか。なんで、弥八殿が旦那様なんかと一緒にいるんスか」
「そちらこそ。なにゆえ簗田殿に仕えているのですか」
四郎次郎はこれまでの経緯を話した。事業に失敗し、放浪してい

たところを牛太郎の息子である左衛門太郎に拾われ、今はこうして簗田家に奉公しているのだと。

「何を言ってんだテメー」

四郎次郎が話をごまかしているので、牛太郎は割って入って真実を話した。砂糖と鼻糞を間違え、三河守から預かった五百貫を失ったこと。砂糖を牛太郎に売りつけようとして、そこで初めて騙されたことを知って絶望し、腹を切ろうとしたこと。仕方ないから五百貫貯まるまで雇い始めたこと。居所を三河守と本多平八郎に知られてしまったが、逆に三河守に愛想を尽かされたこと。団子屋をやらせたら横領し（事実は奇進札の売り上げを横領し）、恩を仇で返してきたこと。それでも、行く当てがない馬鹿なので、仕方なく雇い続けてやっており、

「今はこっちの堺で団子茶屋をやらせているんです」

と、石山本願寺に通行料を支払って、淀川水運を独占させていることは言わなかった。

「まこと、そのようなことで？」

弥八郎は瞼を見開いて驚きを示すが、醜態を並べ立てられた四郎次郎は首を垂らして、ただただ春の日差しを額に照り返している。

「やあやあ！　どうもどうも！」

大声を上げながら門をくぐってきた者があった。素襖の裾をからげ、太い足をあらわにしているのは官兵衛だった。串でしーしーと歯糞を削っており、町中を歩き回っていたらしい。

しかし、官兵衛は入ってきたなり、鳶色の瞳をきょとんとさせる。

「四郎次郎殿。栗綱はおれど、簗田殿の姿がありませんが、さて」

「おれだ」

牛太郎が名乗ると、官兵衛は薄平べったい無の表情で見つめてくる。

「おれだって言ってんだろ。わざとそうしてんのか」

「牢獄にでもぶちこまれましたか」

「まあ、そんなところだ」

とにかく、玄関先でわいわいと騒ぐのならさっさと中に上がれと促し、牛太郎は軒をくぐった。

上がりかまちに腰を下ろして足を洗っていると、官兵衛が弥八郎をじろじろと眺めている。

「こちらは新たな御家来ですか」

「いえ。拙者、訳あって簗田殿と行動を共にしておる、浪人の本多弥八郎と申します」

「本多殿でございますか。拙者は播磨姫路の小寺官兵衛。本多殿は三河の出ですかな。三河武者には同じ姓の方がよくおられるようですが」

「左様にて」

「なるほど」

と、官兵衛はどこか子供っぽい笑みを浮かべて牛太郎に横目を向けてくる。

「なんだよ」

「いやあ。簗田殿は本気なのだなあと」

「何がだよ」

「それはゆっくりと話しましょうよ。茶でもすすりながら」

積もる話は置いておき、真っ先に官兵衛に確認しなければならない。

「武田をどうにかできるのか」

「そんなことより、どうしてあの三河者を同席させないのですか」

官兵衛は腕組みをして、牛太郎が広げた東海三国の図を瞳だけでつまらなそうに見下ろしている。この若者は背丈があるし、胸板も以前より厚くなったようにも見受けられ、そこに座しているだけでも図太さを漂わせている。

「知られたくないことが山ほどあるからだ」

「別に構わんじゃありませんか」

牛太郎の隠しごとなど大したことでもないと言わんばかりに鼻糞

をほじくり出し、それを開け放たれた庭先に向けてぴんと弾き飛ばす。

「いい大人なんだから、そういうことはやめろ」

「はっは。父にもよう言われます」

まったく、人の話を聞いていない。

「どちらにしろ、あいつは松永弾正に押し付けられただけの貧乏侍だ。陰気臭いし、無口だし、どうせ役に立たねえ」

「松永弾正？」

官兵衛はぐいと顔を寄越して来て、興味深そうに牛太郎の目を覗き込んでくる。

「なにゆえ、弾正忠が簗田殿に」

牛太郎と弾正忠の間柄を、官兵衛は摂津の覇権を翻すまでのいがみ合いまでしか知らない。なので、牛太郎は弾正を若江城の攻略に使ったことや、昨日まで信貴山城にいて弾正に武田攻略の助言を求めたことなどを説明した。

「なのに、あのクソジジイ、ビビって何もしねえ。そんで、適当なこと言って貧乏侍を押しつけてきたんだ。何を企んでんだか、わかりゃしねえ」

「へえ。そういうことですか」

官兵衛は瞼をうっすらと細め牛太郎を眺めてくる。掴みどころのない男で、快活ではあるのだけれども、ときにじっとりと考察を計る。

「それなら、一層のこと同席させましょうぞ。簗田殿の話を聞く限り、弾正忠に他意はござらんと思いますがな。それに、あの弾正忠が見込んだ男だということなのでしょう」

牛太郎は黙ってしまいながらも首を傾げる。官兵衛の言うことは牛太郎も思っていたが、どうも、納得がいかない。切れ者だと言うわりに、弥八郎は清貧すぎるのだ。

「簗田殿。沙石集にもあるではないですか。光あるものは光あるものを友とするって」

牛太郎には官兵衛の言っていることがわからないので、素直に従うしかなかった。

未来への好奇心

播磨国姫路城城代、小寺官兵衛孝高、齢二十八。
「徳川の城番の者を武田に寝返らせましょう」
摂津のときもそうであった。彼の策は大胆であり、節操がない。
しかし、からりと言う。いとも容易い業のように。
「お前、何を言ってんだ」
牛太郎は憮然と睨みつける。弥八郎も官兵衛をじっと見つめる。
「何をって、さすれば武田は攻めてきましょうぞ」
「馬鹿か、お前は！　長篠城を取られたら不利だってことを、今、おれは三回ぐらい言っただろうが！」
「それが長篠城だと拙者は申しましたか？」
「なんだと？」
官兵衛は筆を取った。牛太郎が広げた東海三国の地図に筆を下ろし、掛川城と高天神城を丸で囲んだ。
天竜川以東、この遠江二城は今なお武田の手に落ち延びずに息を永らえているが、二俣城を奪取されて以来、進路は遮断されてしまっている。
「肉を斬らせて骨を断つ。このどちらかの城を武田に落とさせ、自信を過剰にさせればよろしい。すると、次に狙うのは浜松、もしくは長篠」
「東美濃はどうなんだ」
「織田よりも徳川から攻めるでしょう。東美濃には付け城が築かれ、岐阜も目と鼻の先ですから」
「じゃあ、どうやって長篠に目を向けさせる」
「単純に守兵を減らせばよろしいでしょう」
問いにはすぐに返してくる。口調はきっぱりとしている。そして、さらさらと、山谷を流れる水のごとく、答えは次から次へと簡素で滞りない。

実に簡単そうだ。聞いているぶんには。

しかし、当の牛太郎にはとんでもない。遠江の城番を寝返らせる、長篠城の守兵を減らさせる、この二点を達成させるために、どれだけの労力、権力が必要か。

「寝返り工作にはさゆり殿を任じればよろしいでしょう。守兵を減らすには、うーん、徳川殿の理解が必要ですな」

百歩譲って三河守に理解を迫ることは可能かもしれない。しかし、さゆりなる者はすでにさなを名乗ってしまっている。

「官兵衛」

牛太郎は腕組みしながら図を睨み据える。

「もう、さゆりんはいない」

「なにゆえ」

「死んだ」

弥八郎は座禅を組んでいるかのように影と成っている。

コト、と、手にしていた筆を硯に置いた官兵衛は、ゆっくりと天井を仰ぎながらも両目を瞑り、しばらくじっと耐えてから、ほうっと息をもらした。

「左様でございますか。なんて、惜しいことか」

瞼には光るものが見受けられ、すっかり信じ込んでしまっている。はかりごとには躊躇もないくせに、ずいぶんと疑いを持たない。

いや。どうも官兵衛のそれは、さゆりを女として見ていたような感じであり、独占欲の塊である牛太郎は眉をひそめる。

こいつは堺に来てからの三日間、彩にちょっかいを出していたのではないか。牛太郎はそうしたいらない疑惑をまた持ち始める。武田のことは頭から失くしてしまう。

「僭越ながら」

影に徹していた弥八郎が、ふいに低い声を発した。

「掛川城守将の石川彦五郎家成は、三河守が今川の人質であったころから主君に寄り添っていた忠臣にございます。これが寝返ることは考えられません」

あらぬ方向に行っていた考察を牛太郎は戻し、目を伏せる弥八郎を注視する。

「高天神の小笠原与八郎信興は今川義元公からの高天神城城主。これは三河守が遠江を併呑した折に徳川方に属した将ですが、三年前、三方ヶ原以前に武田徳栄軒が攻撃してきたさい、大軍を寡兵で退けており、こちらも早々に寝返る人物だとは思えませぬ」

官兵衛が顎を抱えて、弥八郎の言葉にじっと耳を立てている。

気付いたのは、十年前に三河を追放されてから一度も郷里に戻っていないわりに、弥八郎が今現在の徳川をよく知っているということだった。

牛太郎は瞼を閉じた。弾正に押し付けられて正解だったかもしれない。

「とはいえ、小寺殿が苦肉の策を持ち要られようとするのは、武田をおびき寄せ、更には慢心を抱かせる策が他にないのだと拙者は解釈しておりますが、いかがでしょうか」

「おっしゃる通りで」

「ならば、流言を用いてみては。小笠原与八郎に寝返りの気配ありと、武田の間者の耳目に伝わるよう、さらには浜松の三河守の耳にも入るように。さすれば、三河守に疑われたままに、武田に攻城されては、小笠原は寝返りこそせずとも、心情として早々と降伏してしまうでしょう」

「なるほど」

にやと笑った官兵衛の傍らで、牛太郎ははっとしていた。弥八郎の観点に。

姿形を隠している武田の忍びに、慎重すぎるほど警戒していた牛太郎である。だが、弥八郎はその諜報網を逆に利用してしまえと言っているようなものだった。

弥八郎と出会ってからの三日間、牛太郎は武田工作について彼とは一度も話し合っていない。無論、何の情報も与えていない。ところが、弥八郎はたいていのことは知っているようだった。武田家と

いうものはどういった組織なのか、徳川家とはどういった集団なのか、そして、武田と徳川を比較したうえでの情勢も。
「ただし、危険もあります」
「それは？」
「仮に高天神を攻めさせた場合、小笠原は浜松に援軍を要請するでしょう。そのとき、三河守だけではなく、織田本隊が出撃してしまえば、決戦地が遠江となってしまいます」
「それはどうなのですか、簗田殿」
「どうって？」
「遠江で会戦を開いた場合、勝算があるのかということです」
「ない」
「なにゆえです。そもそも、これの始まりは長篠を主戦場にするということですが、なにゆえ、長篠にこだわるのでしょうか」
「それは織田軍が弱すぎるからだ。対して、武田軍は強すぎる。多分、十倍ぐらいの兵力がないと、まともにやったら勝てない。ここだけの話、実はおれも三方ヶ原に参加したんだけど――」
途端、官兵衛も弥八郎も瞼を広げ、驚きを隠さなかった。
牛太郎は肌身に染みて知った武田の凄まじさを語った。徳栄軒という巨大な武将の下での統率があったとはいえ、山県三郎兵衛尉を初め、将校一人一人の武勇というのはずば抜けており、兵卒は一糸乱れず敵に怯まず、勝利を確信している者たちでしか備えられない強さであった。
「それに比べて織田の兵卒は雑魚だ」
姉川の戦いで磯野員昌一隊に備えをことごとく突破された。そんな磯野に匹敵する将校、部隊が、武田には両手では数えられないほど揃っている。
「勝てるわけがない」
「ならば、なぜ」
と、弥八郎が珍しく身を乗り出してきた。
「長篠だったら勝算があるのですか」

「それは――」
牛太郎は懐を探って設楽ヶ原の戦図を取り出そうとした。しかし、半兵衛にくれてしまって持ち合わせていないことに気付き、治郎助を呼んで紙を持ってこさせると、筆で設楽ヶ原の地形を描いていった。予想される部隊の配置も半兵衛が言った通りに書いていく。
＞ｉ３１３７７―２５３３＜
「調べてきたのはおれだ。設楽ヶ原っていう。陣形配置を考えたのは竹中半兵衛だ」
「これは……」
官兵衛が戦図に凝視する。
「見にくいですな」
「見にくくねえだろ！　一生懸命書いたんだぞ！」
「築田殿」
弥八郎が手を伸ばしてき、黒く塗りつぶされた箇所を差した。
「これはどういうことでしょうか」
渡河地点だと牛太郎は答える。連吾川は跨いで飛び越えられるほどの小さな川だが、この辺り一帯は水はけの悪い湿田のため、人馬が滞りなく進める地点はこの三箇所しかない。
「だから、時期としては梅雨時にやりたいんです。多分、来年か再来年ぐらい」
「銃というのは、火縄銃のことですか」
「そうです。織田軍は二千丁持っているから、これを各所の柵越しに配置して、突撃してくる武田軍を迎え撃つ」
「なるほど……」
弥八郎は乗り出していた体を起こし、喉を鳴らした。
「これなら勝算はあるやも」
官兵衛が頷くと、言った。
「まあ、これがこの通りに行くかどうかはともかく、まずはこの設楽ヶ原とやらに武田の軍勢を引きこまなければならないということですな」

「そうだ」
「いやあ……」
官兵衛は感嘆の息をつき、苦笑とも取れる笑みに口許を緩めながら、牛太郎を眺めてくる。
「まこと、姫路でくすぶっているのが悔しい。どうして、織田というのはこうもおもしろいんでしょうか。まさに血肉が湧き躍らんばかりに胸が滾りますわ」
そして、官兵衛は瞳を輝かせるまま、隣の弥八郎に目を向けた。
「ねえ、本多殿」
弥八郎は自重して目を伏せる。ただ、未来への好奇心を彼もまたどこかに潜ませているようで、ひっそりと笑んでいた。

祭には出たくない

宿屋兄弟を連れ出した昨秋までは、家事全般は四郎次郎と彩が行っていた。ところが、あれから半年余、堺の屋敷には人が三人増えており、どうやら四郎次郎の身の周りの世話をしている下人の男が一人、あとは食事、洗濯、掃除などに従事している年かさの女が二人。

四郎次郎は何もしていない。それと彩はなぜか不在である。

食事を済ますと、牛太郎は官兵衛を自室に呼び、酒を振る舞った。播磨の情勢を聞いたり、一連の織田包囲網打破の戦いを話したりした。

「石山本願寺のこともありましょうが」

官兵衛は牛太郎のお猪口に徳利を傾けながら言う。

「東海の雌雄に決着がつけば、いよいよ上総介殿は天下に手を掛けますな」

「どうだかな」

「すでに我が小寺家は、織田、毛利、どちらに付くか密かに検討しております。時が来れば我が家中も揉めるでしょう」

「今のうちに早くまとめといたほうがいいぞ。ごちゃごちゃしてくると、信長様も聞く耳もたなくなるからな」

「わかっております。だから、武田とのいくさは是非勝利していただきたい。さすれば、家中の者どもを説得できる口実になります」

燭台の火を照らし返す官兵衛の瞳がなかなか切迫していて、大勢力同士に挟まれつつある播磨の小勢力の厳しい現実がそこにはあった。

二、三杯で座を切り上げたあと、牛太郎は四郎次郎を呼び出した。

「どういうことなんだよ」

酔いで赤く染まった瞼の縁を据え置きながら言う。屋敷に見知らぬ奉公人がいること、あとは彩の所在。

「いや、旦那様に怒られるとは思ったんスけど、近頃はあっしも忙しくて。なんで、ちょっと、雇わせてもらいました」
牛太郎は扇子をばさりと広げ、自ら作った風で火照った顔を冷ましながら、四郎次郎を据わった目で睨む。
四郎次郎は正座をしてしょんぼりしている。
「まあいいわ。へまもしていないし、結構稼いでいるから大目に見てやる。てか、好きにしろ。もう、おれも忙しくてこっちまで目が届かない」
「ほ、本当ッスかっ？」
「ただし、稼いだものは基本的におれのものだからな。お前が何をしようと構わないけれど、お前のその服も、お前の手下も、たとえお前が勝手に家を建てようとだな、全部、おれの財産だからな。あんまり派手なことをやったり、変な真似をしたりしたら、すべて没収だからな。今の立場から身ぐるみまで剥がして、摂津湾に叩き落とすからな。いいな」
「あっしはそんな贅沢しないッスよお」
「わかったかって聞いてんだっ！」
「はい」
「あと、あーやだ。どこにいんだ。なんで帰ってこねえんだ」
「彩は、その、沓掛の新七に会いに行くとか言って、四、五日前に出ていったんス」
「なんだとお？」
無断で家を空けるなど苛立たしいが、彩と新七郎はお互いたった一人の身内であるし、結局は彩の顔を見られなくて寂しいというだけの牛太郎。
「そっか」
か細い吐息をついてしまう。
翌朝、治郎助を連れてとと屋に向かったが、上総介が上洛しているので宗易は今井彦右衛門と共に京に駐在しているらしい。
「築田殿は織田様とご一緒ではなかったのですか」

馴染みの番頭が牛太郎と治郎助に煎茶をすすめてくる。牛太郎は碗を口に運びながらかぶりを振った。

「京は実に華やかだと、淀の川を下ってきた者たちが声を揃えます」

倉庫業だけあって、とと屋は業者の出入りが多く、番頭も都の出来事には明るい。

上総介は上洛したその足で、早速正親町天皇に蘭奢待の切り取りを所望する奏聞を行い、内裏は奈良東大寺に勅使を立てた。東大寺が開封を認めると、上総介は佐久間、柴田、丹羽の重臣連中や、側近奉行衆の松井友閑、武井夕庵、さらには荒木信濃守まで引き連れて、大和の多聞山城に入った。

「なので、私はてっきり簗田殿も御一緒されていたのかと」

確かに文化人との交流はある牛太郎だが、式典めいたものに参列できるような位置にもないし、柄でもないことは自覚している。もっとも、信濃守がくっついていることが理解できないが。

それよりも気になったのは、上総介が多聞山城に入ったことである。多聞山城は元は弾正忠の属城であったが、先年の帰参の折に上総介に開け渡している。

弾正がこの件について一言も喋らなかったことが、牛太郎を不安にさせる。愚痴の一つでもこぼしそうなものなのに、一切なかった。

よほど、不満なのかもしれない。

「ほどなく、東大寺から多聞山に香木が届けられ」

貴人などを迎え入れる御成の間に蘭奢待は据え置かれた。足利幕府三代将軍義満が切り取りを許されて以来、百年の悠久の時を越えて再び現れた名香に諸将が息を呑みながら眼差しを注ぐ中、上総介は古法に従って香木を切り取ると、諸将に披露しながらこう言った。

末代までの物語にせよ。

「私はそれを聞いたとき、いよいよ天下の夜明けかと、鳥肌が立つ思いでありましたよ」

番頭の話にじっと聞き入っていた治郎助も、固唾を呑んでいた。

牛太郎はといえば、ちょっと冷めた思いでいる。自分には関係のな

いこと。あるいは、尾張美濃と泥水をすすっていた過去のほうが、どうもまばゆく見えてしまうこと。

「それに来たる賀茂の葵祭には織田様にご依頼があったようで」

「依頼？」

「はい。祭では馬を競わせるのを神事にささげることとしているのですが、織田様はこれを受け、数々のいくさに乗りまわした馬に名物の馬具を装わせて、競馬を披露させるおつもりだと、うちの主人が言っておりました」

なので、栗綱にも声がかかっていたのではないかと番頭は言った。

牛太郎はとと屋をあとにすると、

「さっさと畿内を脱出するぞ」

と、治郎助に告げ、足早に帰路を辿る。

「でも、栗綱にお声がかかるのではないかと番頭もおっしゃっていたじゃありませんか。あの綺麗な鞍も、こういうときのためにあるんじゃないんですか」

「あの鞍は岐阜に置いてきている」

それに、目立ちたいのはやまやまだが、そうした行事に参加すると嫌な予感しかなかった。どうせ、自分のことだから恥を晒しそうだ、と。おそらく落馬するか、それとも栗綱がのんびりしたまま働かないか。

多分、上総介は、黒連雀と栗綱を上洛させるよう、岐阜に催促の早馬を出している。幸運なことに、牛太郎は家の者たちには京に行くとしか言っておらず、実際は諸国をうろついている。

「坂本に逃げる」

牛太郎は治郎助と弥八郎に出立の支度をさせ、

「もう、離れるのですか！　せっかく久方ぶりにお会いしたのだから、もうちっとゆっくりしてもよろしいではありませんか！」

「おれは忙しいんだ。ゆっくり好きにしてけ」

官兵衛の声を振り切って、牛太郎はそそくさと堺をあとにした。

高槻を回って、また、勝竜寺城に押しかけると、呆れ顔の兵部に

京の都は今どうなっているのか、明智十兵衛は坂本を留守にしていないのかあれこれと訊ね、ひと眠りすると、まだ空が明けていない早朝から勝竜寺城を立ち、京をかすめるように大津へと全速力で回って、琵琶湖西岸の坂本城へと一気に駆け逃げた。

「確かにおやかた様は簗田殿親子を催促しているそうですが、別によいではないですか。葵祭での競馬に所有されている馬を出すなど、それこそ末代までの物語になりますぞ」

「いや、いいです。あっしは日陰者なんで」

牛太郎の答えに、苦笑しながら軽い吐息をつく十兵衛。

「まあ、簗田殿がそう言うなれば、しばし、こちらでゆっくりしていきなされ」

牛太郎はほっとした。いや、十兵衛なら理解してくれるものだと決め込んでいたが。

十兵衛は京と坂本を往復していて、なかなか忙しいようだが、坂本に所領を与えられて以降は、京の政務所司や朝廷とのやり取りの大半は、村井民部大輔や、松井武井の両奉行が行うようになった。

近頃はもっぱら自領の坂本の政務、それと西国に繋がる勢力拡大の陣頭を上総介に内々に命じられているらしい。

正月の岐阜城での件、牛太郎が見るかぎり、あれは上総介も十兵衛もなんでもなかったことのようである。

「そういう御方でしょう。おやかた様は」

十兵衛が言うには、殴る蹴るで気持ちを解放してしまえば、上総介はからっとしてしまう。逆に主人に暴力を振るわれても、まるで気に留めない快活な男を上総介は好み、それが藤吉郎や牛太郎なのだ、と。

「いや、あっしは傷ついていますけどね」

というよりは、牛太郎の場合は上総介よりももっと激しくて気の短い鬼夜叉が傍にいるので、それなりに手加減をしてくれている上総介の拳は屁でもなくなってしまっている。

「まあ、それはともかく」

と、十兵衛も牛太郎の憂いのない言葉を信用していない。
「おやかた様に従うことで、それよりももっと恐ろしいのは、殴られないままに怒りを胸の内に留め置かせてしまうことでしょう」
上総介は華美を好み、開けっ広げに派手である一方、浅井朝倉の一連の戦いでそうであったように、陰湿なほど執念深い。
「そうですかねえ。だって、一度は裏切った松永弾正を許したんですよ」
「それは簗田殿が仲介したからでしょう」
と、弾正嫌いの十兵衛は、少しつまらなそうな表情ながらも言う。
「簗田殿はもう少し己を信じてもよろしいのでは。おやかた様は簗田殿を相当買っておいでですぞ。これは拙者の邪推かもしれませんが、羽柴殿の次に大領を与えられるのは、佐久間殿でも柴田殿でもなく、簗田殿だと拙者は思っておりますが」
「まさか」
と、牛太郎は一笑する。
「そうなったとしても、面倒だから太郎に全部やらせますよ」
そんなことより、と、牛太郎は懐から例の戦図を取り出し、十兵衛の前に広げた。
「武田のことなんですが」
牛太郎の頭は目前のことでいっぱいだった。

天下のこと

十兵衛は藤吉郎ほどの戦功を立ててはいない。

ただ、藤吉郎のそれは大博打に賭ける勝負師的な一面が強く、運がことごとく味方したおもむきもある。対して十兵衛は博打を打たないので大功に恵まれてはいないが、緻密でぬかりないぶんだけ勝利を確実に引き寄せる。比叡山焼き討ちのときなどは私情を捨てて各所地形を調べ上げ、先陣として冷徹に攻撃を進めた。

なにより、上総介に火縄銃の増強をすすめたのが十兵衛なのだから、牛太郎は桶狭間の錆びついた功績しか持っていない自分よりも、十兵衛から上総介にこの草案を伝えてもらったほうがよいと、政治屋的感覚で思っていた。

十兵衛は戦図を眺め見て唸り上げる。

「これはすごい。これが本当に起きたら戦史に残る一大事ですぞ」

牛太郎はいい気持ちになったが、緩みそうな頬をぐっとこらえて、敵陣配置の予測は竹中半兵衛が立てたものだと言った。

さらに、牛太郎は弥八郎を呼んで、三河の出の浪人だと紹介したうえで、弥八郎に設楽ヶ原決戦を起こさせるための謀略を語らせた。

すべてを聞き終えた十兵衛は、視線の先をじっと戦図に置いたまま、黙っている。十兵衛が陰謀をあまり好まないことを牛太郎は知っている。ただ、かつて足利将軍擁立に働いていたとき、各大名を天秤にかけて計量していたというしたたかな一面もあった。

「つまり、高天神城を攻められ、徳川殿がおやかた様に援軍を請うた場合、おやかた様は援軍を出すなということなのですな」

「出すにしても、出した振りです」

「兵部が言っておりましたよ。簗田殿の差配は恐ろしいと」

十兵衛は戦図を折り畳むと、自らの懐にしまいこんだ。

「しかし、武田に勝利するためにはそれしかないのかもしれません」

「恐れながら、明智様」

と、弥八郎が唐突に割って入ってきた。
「もう一計あるのですが」
「なんでしょう」
「武田に勇み足を踏ませるために、織田重臣の一人に武田と内通させてはいかがかと。無論、こちらの偽りでありますが」
そんなことは牛太郎も初めて聞いたので、弥八郎の怜悧さに驚いた。口数が少ないので胸中は読み取れないが、もしかしたら、この男はこればかり考えていたのかもしれない。
「重臣ですか」
さすがの十兵衛も語調を鈍らせる。難しそうに眉根をしかめた十兵衛に、牛太郎も同じ思いである。田舎武者上がりの頭が堅い織田の重臣に、そんな役目を引き受ける者がいるだろうか。
ただ、
「重臣の誰かとなれば、武田も喜んで攻めてきますね」
と、牛太郎は言った。
「左様でございますがなあ」
詰め寄られた十兵衛は、ほとほと参ったとばかりに笑う。
「拙者とて、家中の重役に恨まれたくありませぬ」
と、やはり、したたかである。もっとも、重臣の顔色を気にしないで思うがままに驀進している藤吉郎みたいな者が異常なのだろうが。
あ。それなら、その汚れ役は藤吉郎にやらせようか。いや、駄目だ。今回ばかりは藤吉郎に塵ほどの功績も与えたくない。
「じゃあ、それだけはあっしから信長様に言いますよ。ま、柴田の義兄にでもやらせておけば、あっしもなんちゃないですし」
守護神の梓がいるし。
一息ついたところで、膳が運ばれてきた。急な来訪で大したもてなしもできないがと十兵衛は自嘲したが、照りのよい漆器や小皿に高野豆腐やひじきなど一品ずつ並べられ、弥八郎にも振る舞われた。
恐縮しながら箸をすすめる弥八郎に、十兵衛はいろいろと訊ねる。

同じように不遇に耐え忍んでいた時期があったためであろう、十兵衛は流浪の士を好む。

「本多殿は天下泰平のためには何が必要であろうとお考えか」

「教義であると思っております」

「教義？　それは何の？」

弥八郎は黙ってうつむくだけ。織田の将の前だからだろうか、一向だとは答えない。

「教義ですか」

十兵衛はしみじみと酒をすする。

「古来、王朝は仏の教えを取り入れ鎮護国家の礎にして参りましたが、そもそも仏の教えとは加護を求めるものではなく、自らを問い詰め悟りを開くもの。無論、人々が煩悩を捨て、教義に徹すれば世は救われるでしょうが、しかし、その本懐を逸脱したなまくら坊主どもの暴虐も、乱世を招いた一因であります」

「しかし、僭越ながら、明智様」

弥八郎が反論する。

「本来、まつりごとを司るべき内裏は野盗の成れの果てのような武家に権勢を剥奪され、その武家が欲望のままに争いごとを繰り返した結果がこの乱世ではないでしょうか。乱世をおさめられるのは武家しかいないのかもしれませんが、もっとも弱小な民衆の自治こそがこの世の安寧を獲得できるはず」

「それを口実に民衆を扇動しているのが一向門徒でしょう。拙者は賛同できませんな。民衆を扇動してまつりごとを行おうとする者にろくな輩はおりませぬ」

「しかし、明智様――」

と、弥八郎と十兵衛は酒の力も借りて、議論を白熱させる。この時代、国家という概念を持った人間はまったくといっていいほどいない。尾張国とか美濃国とか、もっと庶民的になれば何々郷とか何々村とか、そういう単位が人々の概念である。庶民からすれば天皇というのは存在もよくわからない神であって、将軍は神の下にいる

盟主みたいなものである。いや、庶民には、なんだかよくわからないミカドやショウグンよりも、自分たちの村の長や、物知りの長老のほうが偉い。

地侍や土豪もそうだ。摂津守だとか出羽介だとか、農政期には鍬を持っているような男まで官位を自称しているが、実際はそれがなんのことかよくわからず、ただ権威がありそうだから名乗っているだけの輩がほとんどだ。

諸国に落ち延びた公家の末裔などにちょっとした話を聞いても、へえ、そうなんだ、程度。

帝や将軍などを意識しているのは、結局、大勢力の長かその重臣たちぐらいで、出来星大名の織田の人間などは、そのほとんどが地侍上がりだ。世の体制を知り始めたのは近頃ようやくである。

上総介が十兵衛を重宝しているのは、その点だった。無教養のならず者集団が恥を欠かないためには、村井民部のような聡明な政務家が必要だし、松井武井の両奉行のような文人、そして、軍人にも洗練された男がいなければ、いくら華美に振る舞ってもしょせん出来星大名とせせら笑われるだけである。

そんな、天下を見据えている数少ない男に出会えたからだろう、弥八郎は水を得た魚のように思想をぶつけていくが、牛太郎は二人の論争を馬鹿馬鹿しく思いながら膳の上を平らげていく。

「簗田殿はどうお考えなのです」

と、十兵衛が急に話を差し向けてきて、牛太郎はきょとんと箸を止めた。

「何がですか」

「泰平のために何が必要なのか」

別にこれと言ってない。流れ流れるままに、そのうち泰平の世となっていくのであろうという意識でいるから、牛太郎は考えたこともない。

ただ、十兵衛も弥八郎もじっと牛太郎を見つめてくる。思想信条だけには血気盛んなこの男たちにはそれなりのことを言わないと軽

蔑されるだろうと思った。
「まあ、天下を取るには武力で勝ちとれば簡単なんでしょうけど、泰平の世の中を長く続けさせるためには」
そこまで言って、考え込む。なんだろう、と。
「ためには？」
「うーんと、えーと、法律ですかね」
「法律？」
「いや、これをやったら駄目とか、あれをやったら駄目とか、駄目なことをやったら処罰するとか。もちろん、平等にね」
「法度ということですか」
弥八郎が言ってきたが、牛太郎は首を傾げる。
「よくわかんないですけど、とりあえず、まあ、悪いことした奴を処罰することですよ。ああ、あと、そうするためには、民衆が皆、読み書きできることかな。学問。そう、学問をさせればいいんです。皆に。承兌もよく言っているし。そう、道徳を皆が勉強すれば、いいことをするのはとても大切なことだって教え込めばいいんですよ」
「道徳とは孔子のことをおっしゃられているのですか」
十兵衛にぐいぐいと訊ねられて、適当なことを言っていた牛太郎だから、やっぱりやめとけばよかったと思いながら、
「ま、まあ、そういうことです」
と、腰を上げ、急いで坂本に来たものだから疲れたと言って、その場を逃げた。
「まったく参っちゃうよ、お堅い奴等に付き合うのは」
梓の小袖を顔に押し当てながら布団の上でごろごろと転がる牛太郎。
「てか、何をやってんの」
治郎助が机の前に座って筆を取っている。覗いてみると、拙い筆さばきでいろは歌を写していた。
「読み書きぐらいできないとと思って。弥八殿に教えてもらっているんです」

「ふーん。まあ、そうだな」
牛太郎は少しばかり感心し、また布団に寝転がって小袖の香りにのめりこみながらも、思い立って起き上がり、治郎助から筆を取り上げた。
「じゃあ、手紙でも書いてみろ。助さんが言ったことをおれが書いていってやるから、それを写してみろ」
「えっ。でも、文を出す人なんて俺には」
「あーやに出せばいいじゃんか」
「い、いやっ、そんなっ、だって――」
治郎助は健やかな瞳を泳がせて、牛太郎の変節に大いに戸惑う。
「元気ですかとかそういうのでいいんだよ。もちろん、変な真似はさせないけどな」
「いや、でも、別にそんな仲じゃ。あ、兄に、兄さんに出します」
「格さんの馬鹿に出したって読めないだろうが」
そのとき、戸の向こうから、
「迎えのお酒をお持ちしました」
と、女の声がした。牛太郎は治郎助と顔を合わせて眉をしかめる。十兵衛は牛太郎があまり酒を好まないことを知っているので、わざわざ寝床まで寄越すはずがない。
「いらないから帰ってくれ」
牛太郎が言ったにも関わらず、戸がするすると開いていく。こんなことが昔にもあった。そのときはさゆりだったけれども。
牛太郎は桔梗紋の脇差を手繰り寄せると治郎助に渡し、自らは太刀の柄を握った。
張り詰めた空気を揺らすように戸が開いて、盆を傍らに置いたまま、城女中が頭を下げてくる。
「なんだ」
牛太郎はすぐにわかって太刀を置いた。
「ふふ。びっくりしました？」
首をかたむけながら微笑んできたのは垂れ目の彩だった。

なめてんのか

銚子と盃を乗せた盆を牛太郎の手前へとすべり運ばせながら、
「堺におられると思ったのに。どちらに行かれたのかと思って苦労しました」
そう言って、大ぶりの銚子の蓋をかぽと開け、中身を見せてきた。
牛太郎と治郎助はぎょっとする。金判銀判がぎっしりと詰まっていて、何千石分であろう、安っぽい銚子に雑多に押し込まれ、目が奪われるような怪しい輝きを放っている。
牛太郎のまなこはすっかり金銀に染まってしまって、しまりのない頬で訊ねる。
「なんだい？　これをおれにくれるのかい？」
「くれるというか」
彩は蓋を閉めた。
「元から旦那様の物なんですけどね」
彩は昼前まで堺におり、四郎次郎に両替商をかき集めさせて、蓄財している銭貫のうち五千貫を、持ち運びやすいよう金銀に両替したという。
牛太郎はなんのことかさっぱりわからない。
「忍びを雇うために」
「ちょ、ちょっと、待て。何を言っているんだい、あーやは。忍びを雇うためって、え？　おれは忍びを雇うだなんて一言も言ってないぞ。てか、もうすでに雇っているじゃんか」
「いえ、私みたいな半人前ではなくて」
「えっ？」
と、声をもらしたのは治郎助である。唖然とし、どことなく青ざめている。
「あ、彩さんは、忍びだったんですか」
「助さんの質問はあとでゆっくり聞いてやる。おい、あーや、一体

どういうことなんだ。忍びを雇うってなんなんだ。誰の差し金だ」
　すると、自分で言っておいて、はっとした。彩にこんな真似をさせたのは誰なのか。勝手に隠し財産を両替させ、それを使わせようとしている人間など、この世の中で一人しか思いつかない。
「岐阜の女狐か」
　彩はこくりとうなずいた。何も知らない治郎助が目を回さんばかりになっている。
　話によると、彩は沓掛などには行っていなかった。さゆりの文を携えた飛脚が堺に飛んできて、そこには急ぎ岐阜にやって来るようしるされてあった。
「あの野郎、大将気取りやがって」
　それはともかく、彩は岐阜の城下でさゆりと落ち合い、書状を渡された。
　伊賀の百地家に持っていけ、と。
　彩は返す足で伊賀の里に向かい、伊賀流上忍家の一つを束ねる百地丹波泰光を訪ねる。書状を受け取った百地丹波から五千貫で仕事を請け負うという返事をもらい、堺で両替したという訳だと彩は言った。
　牛太郎は唖然呆然とかぶりを振って、さゆりが勝手に作り上げている物語の壮大さに言葉も出なければ、整理もつかない。
「なんで、さゆりんはその伊賀流のモモチタンバと知り合いなんだよ。キミたちは元甲賀流だろ。敵同士じゃないのかよ」
「いえ。伊賀と甲賀は別に敵とか味方とかではありませんし、それに、書状の差し出し人は姐さんではなくて、旦那様ということになっています」
「あいつ……」
「伊賀流は甲賀流と違って御主人様を持たず、自分たちで話し合って暮らしている忍びなんです。だから、銭貫文さえ払えばどんな将にも豪族にもお味方します」
「だからって五千貫はふっかけられすぎだろ！　だいたい、仕事っ

てなんなんだよ！」
彩は薄い唇を尖らせて、すねた目つきで不満をあらわにする。
「いやっ。今のは遠くのさゆりんに届けるつもりで大声を出したんであって、あーやを怒鳴ったわけじゃない。うん」
ばちん、と、急に戸が叩き開けられて、三人はびくっと腰を浮かせた。弥八郎が足をもつらせながら、なだれのように押し入ってきた。ばたばたと体勢を倒していくも、壁に背中を預けられて、ずるずると腰を下ろしていく。
顔が赤紫色にゆで上がっていた。目はだいぶ据わっている。
「やなだどのお」
しまらない声はもう道端に崩れているオヤジと変わらない。両の腕をのれんのように垂らし下げ、捲り上がった袴から毛むくじゃらの太股をあらわにさせて、清貧さはどこかに消えた。
「明智じゅうべえどのは、やはりてんかの将よな」
何が可笑しいのかは知れないが、小刻みに笑い声を立てている。
「助さん。水を入れてやれ」
「あ。私がやります」
「やなだどのおっ！」
唐突に吠え上げられて、彩は腰を浮かしたまま立ち止まり、牛太郎は眉をしかめる。
「おなごがおるではないかあっ。これは一体どういうことよっ」
言ってからすぐにひっくとしゃくり上げた。がくりと頭を重たそうに垂らし、うー、と、唸ったあと、ぐったりと酩酊したまなこを持ち上げてくる。
「てんかのゆくすへを望むおとこが、おなごに溺れるなどごんごどおだんよ」
「いや、弥八殿、こちらの方は――」
と、治郎助がよいどれの残骸をなだめようとするが、
「相手にすんな。あーや、眠らせとけ」
「はい」

彩が襟の裏から短い針を取り出した。

彩、治郎助、それに何も覚えていない弥八郎の四人で伊賀の里を目指す。

彩が先導する。髪を後頭部に結い上げ、蓑を纏って、草鞋に足袋という姿である。腰には革袋やら瓢箪の水筒やら鉈やらをぶら下げて、見てくれは小柄な青年猟師だが、案内役で雇い上げたと見せるにはちと凛々しすぎるきらいもある。

尻切り半纏にふんどし一丁の治郎助が栗綱の口輪を取りながら牛太郎の左側を、笠を被った弥八郎は相変わらずの剣術修行者の風体で牛太郎の右側を固める。

大津で一泊したあと、葦に覆われた琵琶湖の岸と、その向こうの光り輝く湖面を眺めながら南下していき、琵琶湖南端の石山寺までやって来ると、その翌日からは山路だった。

ささやかな若芽を仰ぎながら曲がりくねった道を登っていき、裏白峠を越えた。

牛太郎一行が行く鈴鹿山系には小川城という小さな山城があるが、その一帯は土豪でありながら甲賀流上忍家の一つでもある多羅尾彦一が牛耳っていた。

主家の六角氏が滅んで以降、多羅尾は他の甲賀流上忍家に比べいち早く上総介の軍門に下ったが、

「私は明日の朝まで山にこもっています」

と、彩が避けたがっていた。

伊賀の里へ下りるには、もう日が暮れかかっていて、多羅尾の厄介になる他なく、牛太郎は泣く泣く彩を置いて、夕闇せまる小川城へと押し掛けた。

無論、番兵たちは板葺きの大手門前で太刀の柄を握り締める。

「京から将がやって来るだなんて聞いてねえぞ」

「お前が簗田左衛門尉様だっていう証明ができんのかっ」

番兵と言っても、着物一枚に太刀を腰にぶら下げているだけの百

姓雑兵三人であった。さゆりや新七郎のような忍びの際どさも感じられない。

「たかだかお前らごときが簗田左衛門尉の証明を見極められんのか」

と、牛太郎は喧嘩腰だった。

「俺たちが見極めるんじゃねえっ。見極めんのは親方だっ」

すると、牛太郎は腰帯の裏に隠していた銀判を無言のうちに雑兵たちの前にぽいと放り捨てる。

たった一枚でも、西日を怪しく照り返す銀貨に、雑兵たちはさすがに目の色を変えた。太刀を構えたままに押し黙って牛太郎を見たり、銀判を見たり、彼らは何の判断もつけられない。

「通行料だ。通せ」

「ま、待てっ」

顔つきだけはすっかりなびいている雑兵たちだが、

「親方に一度許しをもらってからだ」

と、彼らの中で一番年長者らしき中年が太刀を構えたままそろそろと銀判にすり寄り、牛太郎一行を見つめたままゆっくりと屈みこむ。指先で銀判を一度ちょんちょんと叩いたあと、危険物でも扱うかのように銀判を拾い上げた。

「お前ら、こいつらを通すなよ。親方に掛け合ってくるからよ」

中年が通用口から館の中へ入っていく。

「簗田殿」

弥八郎が耳元に顔を寄せてきた。

「あまり無駄遣いは」

「いいのいいの。宿賃だと思えば」

それに、どうせなら、甲賀流と伊賀流を天秤にかけてやろうかと牛太郎は考え始めていた。甲賀流は元六角配下、伊賀流は忠義なき傭兵集団、共通点はどちらも日陰者。

さゆりを暗躍させ、新七郎を配下にしているくせに、牛太郎は得体の知れない忍び者をどこかおもしろく感じていなかった。それは多分に、さゆりや新七郎が闇の内に大活躍した裏返しであろう。あ

の二人を逆の視線から見れば、何を考えているのかわからないところがあるし、冷酷非道、暗殺程度はお手の物で、摂津高槻の事件などでは罪のない少女を利用するだけ利用して男を誘惑させ、挙げ句に殺してしまったのだ。

忍びは利用する価値が十分にある。しかし、それしかない。

牛太郎は配下としてのさゆりや新七郎は愛しているが、忍びの彼らは（さゆりにさんざんこき使われた不快感もあって）大嫌いだった。彩にくのいちの真似事をさせたくないのもそのためだ。

五千貫なんていう大枚を要求してきていることも腹立つし。普通の武将だったら払えるはずないじゃんか。なめてんのか。

もちろん、それは伊賀流の百地丹波であって、甲賀流の多羅尾はまったく関係ないのだけれども、牛太郎は例の一辺倒な感情思考でもって、忍びを流派云々関係なくひとくくりに忍びだとしてしまっている。

邪魔な連中だ。本当はさゆり以外の忍びなんかは頼りにしたくない。

ほどなく、中年の雑兵が戻ってきた。目通りの許可が下りたという。

ほら、見たことか。牛太郎は鼻で笑いながら門をくぐった。

おれはもう動かない

多羅尾彦一は老人である。体がしおれたように細く、丸めた頭のところどころに茶色いしみが出来ていた。燭台の火に照らされながら御座の上で背中を丸めており、一人きり招かれた牛太郎をじろりと見上げてきたさまは、さながら瓢箪ナマズの化け物のようであった。

「岐阜の簗田左衛門尉でございます。急な来訪申し訳ございません」

平伏して丁寧に頭を下げると、瓢箪ナマズは薄ら汚れた眼差しで見つめてくるままに、

「存じております」

と、老婆のようなしわがれた声だった。

これが甲賀流上忍五十三家の筆頭格の惣領だとは嘘のようだった。そもそも、彼自体が忍びに思えないし、小川城内の男たちのほとんどが百姓風体である。

ただ、この多羅尾老人、怪しさだけは並々ならない。信貴山の乱世の梟雄とはまた一味違った不気味さで、篠木於松を知的にさせたような感じだった。

「左衛門尉殿とあろう御方が、わずかな従者だけでこの山奥を歩かれているとはいかなることかな」

虚言をついても仕方ないと思った。どうせ、忍びの連中のことだから背後を付けてくるに違いない。

「伊賀の里に向かいたいと思いまして」

瓢箪ナマズは顔色変えずに牛太郎を見つめてくる。

「ほう。伊賀に。それはなにゆえ」

「伊賀の忍びを雇うつもりです」

「なにゆえ」

「武田家とのいくさのためです」

すると、老人は黙った。くすんだ瞳で牛太郎をただただ見つめて

くる。牛太郎はあえて目を合わせずに、視線の先を床の一点に静かに据え置く。

風がどこからか漏れてきて、燭台の火を大きく揺らす。

「聞かなかったことにしましょう」

意外な言葉におやと思って、牛太郎は視線を上げる。

「なにより、我ら甲賀流は簗田殿に深く関わりたくありませぬ」

「どうしてです」

もしかして、さゆりや新七郎たちに関連しているのかと思って、牛太郎は内心はらはらとした。

「お忘れでしょうか、上総介様の観音寺攻めの折を」

「忘れるも何も、多羅尾殿に恨まれるような真似はしていませんよ」

「いえ、上総介様に同じく仕える身ゆえ、恨みなどはありませんが」

老人の目が鈍く光った。

「六角をたばかったのは簗田殿のその舌ではありませんか」

牛太郎はようやく気付いた。多羅尾老人はどうやら、織田軍の六角攻めのさい、織田の出方を探ろうとして牛太郎に近づいてきたさゆりに、逆に虚言を吹きこんだことを言っている。

誤情報を鵜呑みにした六角勢は、織田軍の竹中半兵衛の鬼謀も働いたことにより、たった一日で駆逐されてしまうというさんざんな結果だった。

「そんなこともありましたっけねえ」

牛太郎はにやにやと笑う。

「そういや、あのくのいちはどうしているんでしょう。もしかして、多羅尾殿の手下だったんですか。いやあ、いい女だったから、どうせなら会わせてくださいよ」

多羅尾は表情こそほとんど変えなかったが、眉根だけに力を寄せて、むっとしているようだった。

「左衛門尉殿がおっしゃられている女は当家の者ではありませんでしたが、なかなか優秀な者で拙者も目をかけておりました。しかし、拙者も含む惣領たちに失態を責められ、女は八つ裂きに処されまし

た」
「そりゃ残念だ」
牛太郎はへらへらとしていた。

翌日、牛太郎一行は小川城を立った。
しばらく歩くと猟師姿の彩が後方からひっそりと現れた。
「ごめんね、あーや。野宿なんかさせちゃって」
しかし、栗綱に並んで歩く彩は、視線を前方に据えたまま、唇に人差し指をすうっと当てる。
目つきが真剣を帯びている。団子茶屋の看板娘の面影はまるでない。
春の光が砕け散る林道、妙な静けさに包まれていて、鳥の声もない。かっぽらかっぽらと栗綱の足音だけが果てない山に吸い込まれていく。
「振り返らないでください。付けられています」
「えっ」
と、牛太郎は思わず振り返ろうとしたが、
「旦那様っ」
小さな声でたしなめられて、びくっと背筋をこわばらせる。
「ま、まことか、彩殿」
弥八郎が視線だけを横に動かして、背後の彩に訊ねた。
「中忍が一人、下忍が三人います。姿を見てしまったら最後、仕留められてしまいますので、このまま伊賀の里までやり過ごしてください」
「あ、あーやは大丈夫なのかよ」
「私は、兄さんが抜けるときに筋目を通したので大丈夫です」
とはいっても、生きた心地がしなかった。山は不気味なほどの静寂のうちに浸っているのに、何の物音も背後から聞こえてこない。ただし、見られている、という寒々しさはある。
尾行してくる目的はなんなのか。

四人は終始無言のまま山を下りていく。鬱蒼と生い茂る木々の中をうねうねと曲がりくねっていく細道で、いくら進めど視界は開けない。山の上から里を見下ろせてもいいものなのに、ひたすら山だった。

人とすれ違うこともない。ただただ、背後を付けられている。

「旦那様は」

治郎助が言う。

「こんなことばっかりなんでしょうか」

牛太郎は緊張しっぱなしのため、喉が渇ききっていた。そうでもない、と答えようとしたけれど、なかなか声が出なくて、

「うん」

としか言えなかった。

坂はなだらかになった。

「あと少しの辛抱です」

そんなこと言ったくせに、彩は腰に引っかけている鉈に手をかけた。それを視界にしてしまった牛太郎は顔を引きつらせる。

「おい、あーや」

「山を抜ければ伊賀の縄張りですが、もしかしたら――」

伊賀に入る前に襲ってくるかもしれないということらしい。

「勘弁してくれよお」

「念のためです。大丈夫です。でも、もし襲われたら、旦那様は栗綱と共に伊賀へと駆け抜けてください」

しかし、杞憂に終わった。洞穴を抜け出たようにして視界は一挙に開け、山々と田畑に囲まれる里の集落が目前にあり、それを光景にした途端、彩が大きな吐息とともにへたとその場に膝をついて崩れた。

「助かったあ」

「ま、まことか」

弥八郎も治郎助も立ち止まり、栗綱ももっさりと足を止める。

「はい。もういなくなりました」

牛太郎はほっと胸を撫で下ろした。すると、安堵したら尿意をもよおした。栗綱から下りると、そそくさと道端にはずれ、股引を下ろして半纏をたくしあげた。

張り詰めた息を抜きながら、じょろじょろと用を足す。

木陰に何かがいる。牛太郎の目玉が震えた。一物を支えている指先も震えた。草葉の中に二つの目がある。目が合った。しかし、小便が止まらない。

「あ、あーやっ！」

温かいものを自らの足にこぼしながら騒ぎ立てると、彩が即座に吹き矢を飛ばした。駆け寄ってきた治郎助が牛太郎の盾になって両の腕を広げる。さらには弥八郎がなまくら刀を抜いて身構える。

目はいなくなった。

小便を終えた牛太郎だったが、恐怖のあまり歯をがちがちと鳴らし、一物をあらわにしたまま動けない。あんな目は生まれてこのかた見たことない。不気味で、獣じみていて、殺意に充ち満ちていて、しかし、もてあそばれているようでもあった。

「旦那様、大丈夫ですか」

治郎助に顔を確かめられて、牛太郎はなんとか正気に返った。あわてて股引を履き上げ、治郎助が鉢巻きにしている手拭いを奪い取ると、小水にぬめった足を拭いた。

泣きそうな顔で治郎助が立ちつくす。

「簗田殿」

太刀を鞘におさめた弥八郎が言う。

「何が目的かはわかりませぬが、連中に後を付けられてはうまくありますまい。甲賀がひそかに武田に通じてしまえば、簗田殿のすることがすべて筒抜けになってしまいますぞ」

牛太郎は手拭いを治郎助に押し返すと、溜め息をもらしたあとに舌打ちした。

「くそったれめ」

とにかく、甲賀流は牛太郎を恨んでいる。ただし、殺そうともし

ない。なぶるように牛太郎を追い詰めてきている。
彩が瓢箪を差し出してきた。中には水が入っている。牛太郎は栓を抜くと、瓢箪をひっくり返してむさぼった。
「旦那様、このさい、別口で伊賀の忍びを護衛に雇ってください。私だけじゃ旦那様をお守りできませんし、伊賀流の忍びはすごく強いみたいですから」
牛太郎は瓢箪を弥八郎に手渡すと、口許を手の甲で拭いながら彩を睨めつける。
「簡単に言うけどさ、幾らぐらい払わされるのよ」
「おそらく三百貫ぐらいは当然かと」
「なんなんだよ、もうっ」
泣きたくなった。もうそれこそ読んで字のごとくに地団駄を踏み、気も狂いかけてしまって、わあっ、と涙目で叫んだ。
「さゆりんが来ればいいんだよっ！　さゆりんがっ！　あいつが仕組んだことなんだろっ！　おれはこんなところに来るつもりなんてさらさらなかったんだからっ！　もう、嫌っ！」
しまいには頭を抱え込んでその場に座り込んでしまう。
「おれはもう動かないっ！　ここから動かないっ！　さゆりんが来るまで動かないっ！」
「簗田殿っ。しっかりなされいっ」
弥八郎が牛太郎の両肩を掴んで、その体を揺らすが、牛太郎は嫌だ嫌だと駄々をこねるばかり。何が嫌なのかといえば、忍びに殺されそうだということと、財産を次々に喰われていってしまうこと。
小川城からここまで終始緊張が貫いていたのも手伝って、彩と治郎助が互いに顔を合わせてしまうほどの情けなさだった。

伊賀の惣領

駄々をこねていても伊賀の里には来てしまったので、牛太郎は嫌々ながら百地家の惣領にして伊賀軍団の筆頭である百地丹波の屋敷へと向かった。

何がなんでも五千貫は払わない。集落の中を向かう道すがら、牛太郎は心に決めていた。血と涙の結晶をむしり取られてたまるか。

伊賀の里は山々に囲まれた狭い盆地で、何をしているのだか、山の麓のあちこちから細長い煙が筋となって天に立ち昇っている。集落の家々のほとんどが茅葺き屋根で、貧しさは感じられなかった。軒先には物珍しそうに一行を眺めてくる老人やら女やらが出てきていて、どこからともなく子供たちが大勢集まってきた。木の枝を振り回しながら賑やかに栗綱のあとをくっついてくる。

「やっぱ武者はいいなあ！　こんぐらいの目方だと百貫文ぐらいだろうな！」

「百貫じゃきかねえよお。この仔、ぴっかぴかじゃんか。まあ、黄金十枚、五百貫はくだらねえよ！」

頬を赤くして鼻水を垂らしながらのくせに、言うことは銭勘定だった。ぞろぞろと付いてくる子供たちになんだか心も和んで、牛太郎は栗綱を止めると、

「お前ら、そんなにおれたちが珍しいか」

と、話しかけたが、子供たちはさっと目を逸らして、何も聞こえないふり。口笛を吹いたり、じゃれ合いを始めたり、牛太郎を見ていない。

首を傾げながら栗綱を再び進ませると、子供たちは列になって付いてくる。

「おい」

牛太郎はまた振り向いた。子供たちは立ち止まって、また目を逸らした。今日はいい天気だなあ、などと白々しい独り言までついて

いる。

軒先の女たちにも目を向けてみると、彼女たちはそれまで雀のようにぴいちく喋っていたのに、途端にさっと目を背けて口を閉ざしてしまう。

山々に囲まれているだけあって保守的すぎるのだろうか。とはいえ他所者に悪口を叩いているわけでもなく、陽気な人々には違いないのだが、どうも様子がおかしい。

それに、大人の男の姿がない。田畑に働きに行っているとしても、いなさすぎた。

百地丹波の屋敷は集落のど真ん中にあった。板塀が四方を囲むだけで、門もただの木枠だった。伊賀流の惣領のわりに、物々しさがまったくなく、まるで豪族とも呼べない庄屋風情の屋敷である。

ただ、煙がもっとも多く立ち昇っている辺り、山のふもとから中腹にかけて城郭めいた造成がされていて、緊急時にはあそこに立てこもるというわけなのかもしれない。

門前には見張りの者も誰もいない。ただ、冗談なのか本気なのか、やな田サマいっこう、かんげいいたす

という汚い字の張り紙がされてあった。牛太郎は栗綱から下馬し、うがった思いで張り紙をしばらく眺めた。

「旦那様、さあ入りましょう」

簗田も書けない奴と交渉するなんて。すっかり教養人気取りの牛太郎は、治郎助と弥八郎にここで待ってくれるよう伝えると、荒んだ心持ちで彩と共に門をくぐった。

何の変哲もない屋敷であるが、庭先は殺風景であった。草木の一つもない。ただただ板塀に括られている。

玄関先まで来ると、彩が声を張り上げて来訪を告げた。

薄暗く、しんとしている。しばらくすると、のそりのそりと男が現れた。ひどいガニ股歩きで、羽織は腕を通さず肩にかけているだけ、帯を締めず、代わりにサラシを巻いている。眉間に余計な皺を押し寄せて、眼力を来客にのしのしと飛ばしてきながら、

「おうおう、甲賀の嬢ちゃんじゃねえかァ。隣の御仁が簗田左衛門尉さんかァ？」

と、声にドスを響かせ、どう見ても渡世人であった。

「はい。丹波様の条件も引き受けましたので」

「そうかそうか。さ、どぞ、左衛門尉様、粗末な屋敷ではありますが、お上がりくだせえ」

男は中腰に屈みこみ、上がりかまちに腕を伸ばして促してくる。

牛太郎はためらう。彩は訪ねる場所を間違えているのではないかと。

「ささ、遠慮なさらず」

どう見ても忍びじゃない。牛太郎は、細見ながらも陽に焼けて逞しい渡世人を見つめる。なにしろ、サラシにはドスのような短刀を挟んでいる。

「旦那様」

「い、いや、こちらの方は、その、用心棒さんかな？」

「旦那様っ。違いますってっ。こちらの方が百地丹波様ですよっ。あんまり失礼なことを言わないでくださいっ」

彩があわてふためく中、百地丹波だという渡世人は笑いながら、

「いやいや、お嬢ちゃん、主人自らが玄関まで迎えに出てくるなんざ、お武家様では考えられねえことよ。もっとも、簗田さん、ここには嫁も下人も使いッパもいねえんですわ。手下どもは山の砦に詰めていますんでね」

いくらなんでもこれはないだろう。伊賀流と言えば、甲賀流と双璧をなす忍者集団じゃないのか。甲賀流の多羅尾はまあ、憎い老人だがそれなりの怪しさ、危うさを漂わせていた。一方で伊賀流の頭らしき百地丹波とやらは、ただのやくざ者じゃないか。

交渉はなしだ。とはいえ、渡世人に対してにべもなく断るわけにもいかず、牛太郎はひとまず屋敷内に上がり、促されるがままに広間の席についた。

はてと首を傾げた。座った御座の前には湯呑みが置いてある。向かい合う百地丹波の手前にも。

煎茶である。湯気が立っていて、明らかに注いだばかりであった。百地丹波は牛太郎と彩を広間に案内してきただけで、茶を注いでいる素振りも暇もなかったはずだ。

「どうぞ、粗末なもんですが」

丹波に促され、牛太郎は湯呑みを手に取った。

「これは――」

湯呑みの質感に唸った。碗には若干のへこみと膨らみがあり、よく見てみると縁も無造作に歪んでいる。ろくろを使用せずに手とへらだけで成形された手づくねの茶碗だった。

丹波は牛太郎の注目に気付いたようで、

「さすが簗田さんですわ」

と、肘を自らのあぐらの上に乗せて、格好を崩しながら茶をすする。

「ただ、恥ずかしながらあっしにはその価値がよくわかりませんでね。あるとき、泥棒が得意な手下の一人が、仕事の土産にって持ってきたんですわ。結構な値の代物だと手下は言っておりましたんで、客人に出しているんですが、まあ、それに気付かれたのは簗田さんが初めてですな」

牛太郎はしみじみと茶をすする。おそらくこの茶碗は田中宗易が扱っていたもので、どこかの富豪が買いつけたものだ。

「まあ、あっしには飲みづらくて仕方ねえ代物ですがね」

と、丹波には何でもないことらしい。

「煎茶も取り寄せているんですか」

「ええ。うまいんでね」

こんな山の中でよっぽどのことだ。

「そんなことより、簗田さん。例の件ですが」

丹波が身を乗り出しながらじろりと覗いてくると、傍らに控えていた彩が両手で抱えられるほどの革袋を丹波の前に差し出した。

「五千貫分、金銀に替えてあります」

「ちょ、ちょっと待った」

牛太郎があわてて割って入る。
「丹波さん、見ての通り五千貫は用意しましたよ。しましたけど、あなたたちに何ができるのか教えてくれませんか。なにしろ、相手は天下の武田ですよ。何もできませんでしたじゃ済まされないし、五千貫分の仕事はしてくれなくちゃ困るんですからね」
「内容によりますわ」
丹波の言葉に牛太郎は眉をしかめる。
「内容によるから五千貫じゃないんですか」
丹波はふっと笑った。
「簗田さん、天下の武田を相手にしようなんざ、そんなこたァお武家様のやることでね、日陰モンが出しゃばっちゃあいけないんですよ。天下の善し悪しってのはァ、あっしらみてえなコソ泥がやんじゃない。お武家様同士、正々堂々とやりゃあいいんですよ」
「で、でも、五千貫用意すれば引き受けるって丹波様は――」
「まあまあ、嬢ちゃん、話は最後まで聞きな」
丹波は眉間を皺で固めたまましみじみと茶をすする。湯呑みを置くと、浅黒い顔に笑みを浮かべて牛太郎を見つめてくる。
「あっしら伊賀流はね、雇い主の言うことはなんでも聞きますよ。でも、そういう節操のねえ集団だからこそ貫かなくちゃなんねえものがありまして。いくら節操がなかろうと、天下にはぜってえに迷惑をかけるようなことをしちゃならねえってね。じゃねえと、野盗と同じになっちまう」
だから、五千貫という無茶な要求をしたのだと丹波は言った。そして、無茶な要求を用意されてしまっては男がすたる。引き受けなければならないとも。
「てことは、安くしてくれるんスか？」
と、牛太郎は急に気力を取り戻して身を乗り出した。ころりと掌を返すように忍びに対して前向きになり、高いか安いかという区別だけで丹波に好感触を持ち始めた。
牛太郎の調子が良すぎたためであろう、丹波は笑い上げた。

「まあ、それこそ内容によりますわな。戦場に何百もの連中を連れ出すんじゃあ、やっぱり五千貫はいただきますわ」
「いや、そんなんじゃなくていい。例えば武田のくのいち相手に流言を放って本国の甲斐まで広めるようなそんな仕事で」
「だったら、二千貫、と言いたいところですが、まあ、あっしも武田の忍びのやり方にはおもしろく思ってなかったところ。千五百貫で手を打ちましょうかな」
「ほほう」
牛太郎はほくそ笑んだ。千五百ぐらいなら、軍資金として調達したいと上総介に言っても、怒鳴られずに済むかもしれない。

そろそろ報告しないと

伊賀流に頼むべきことはなんなのか、牛太郎は弥八郎を呼び、彼に詳しく話させた。

二つある。武田軍に高天神城を攻めさせること、長篠城を攻めさせること。

「高天神城城主小笠原与八郎に翻意があるという風説を武田徳川両方の耳に入るようしてくれればよろしいのです」

あとは長篠城。ただし、これは織田徳川の軍事行動が万端ではないため、ひとまずは保留することとなった。

「人数が必要ですが、たいして時間もかからねえでしょう」

流言を広めることぐらい新七郎やさゆりの二人だけでもできたことだから、これしきのことでという思いも牛太郎にはあったが、まあ、相手は武田であるし、工作範囲も東海三国から尾張美濃、甲斐信濃と広大であるから、その道のことはその道の連中にやらせたほうが確実だろう。

とはいえ、百地丹波がその道の連中の頭目なのどうか、牛太郎はあまり納得していない。

なので、訊ねた。

「手下ってのは何人いるんですか」

「簗田さん。申し訳ありませんが、そればっかりは教えられないんですわ」

忍びはありとあらゆることを門外不出としなければならない。格闘術はもちろんのこと、組織構成から一人一人の姿形まで。

屋敷に惣領の百地丹波しかいないのもそのためで、集落の女子供たちが他所者との接触を避けているのも、彼らに余計なことを喋らせないためだという。

言いたいことはわかる。納得できなくもない。ただ、伊賀流、伊賀流と口にしても、牛太郎は伊賀流の集団そのものを目にしていな

い。確認できたものは渡世人だけである。
　忍びなんて本当にこの世の中にいるんだろうか。まあ、さゆりが腕や首を絞めてきたときの強さときたら尋常ではなかったから、忍びというものは確かにいるのだろうけれど。
「丹波さん。代金はいくさが終わってからにしてくれないッスかね」
「旦那様っ！」
　彩が本気で怒っていた。畏怖の念を抱いている彼女を見る限り、百地丹波は相当な男らしいが、牛太郎は騙されて来た経験も結構あるし、自らも人を何度も騙してきているので、根本的に自分の耳目にしたものしか信用しない。
「あいにく、そういったのはやってねえんですわ」
　まあいい。立て替えた分は長谷川藤五郎か堀久太郎に言って、織田家の台所から引き出させればいいのだ。騙されたら騙されたで怒り狂うのは上総介なのだから、忍びを叩き潰すいいきっかけにもなるし。
「そういう決まりなら仕方ないッスね」
　開き直ると変わり身も早く、けろりと金銀を差し出した。
「丹波様。あと、一つお願いがあるのですが」
　彩が例の甲賀流に付け狙われている件を話し、護衛の忍びを借り受けたいと言った。
「三百貫で下忍を一年間貸し出しますわ」
　一人で三百貫など自らの俸禄よりも高いのだから、目玉を飛び出さんばかりの牛太郎であったが、丹波は四、五人相手なら一人で十分だと軽い素振りであった。
「姿形は見せませんが、どこからともなくぴったりと付いてきますんで、ご安心くだせえ」
「旦那様、命には代えられませんよ」
　牛太郎がケチであることを彩はよく知っている。主人をじっと睨み据え、泣きたそうな顔の牛太郎に迫る。
「わかったよ。しょうがない」

そうして、彩が革袋の中から三百貫分の金銀を差し出し、これば
かりは織田家に請求できないなと牛太郎は暗澹たる思いだった。
「しかし、なにゆえ多羅尾殿は簗田殿のあとを付けさせておるのか」
弥八郎がふいに一人言のように言った。
「もしかして、簗田さん」
丹波が牛太郎の目を覗き込んでくる。
「多羅尾に武田攻めのことを話しましたかねえ」
牛太郎が頷くと、それが原因だと丹波は言った。
丹波は語る。武田は信濃侵攻の折に望月氏という豪族を配下にし
たが、この望月氏は甲賀流上忍家の望月家と祖を同じくしており、
その縁から甲賀流望月家は本家の娘である千代というくのいちを信
濃望月氏に嫁がせた。
これは甲賀流が、いずれは武田徳栄軒が畿内に攻め込んでくると
予測したからであろうと丹波は言った。
そしてこの望月千代こそが頭となって育てた女たちが武田のくの
いち集団らしい。
「多羅尾は織田様に媚びへつらっておきながら、他所ではしっかり
と甲賀流をやっているってことですわ」
「ということは」
弥八郎が影の帯びた表情で言う。
「一連の包囲網に甲賀流も絡んでいたことになりますな」
「ですな」
何をやっていたか、そこまではさすがに丹波もわからないとした
が、西上作戦に連動した各地の事件のほとんどは甲賀流の仕業であ
ろう。
「ただ、あっしはね、拾ってきた女の子に体を売らせて諜報をさせ
るなんてやり方はね、大嫌いなんですわ。いくら乱世の世で人がば
たばた死んでいくたってね、やっていいことと悪いことの境目が見
えなくなったら、そんな連中は日陰者にもなれねえただの犬畜生で
すわ」

牛太郎にはちょっと胸の痛い言葉である。なにせ、隣に座っている彩に同じようなことをさせてしまったし、摂津工作では悪事をさんざん働かせた。

いや、違う。百地丹波は口だけ野郎だ。綺麗事だけで済んだら、こいつらだって存在していないじゃないか。

伊賀の里をあとにし、牛太郎は再び堺に向かった。

再び山路に入り、彩が甲賀忍びの気配を再び感じ取ったらしいが、そう思ったのも束の間すぐに消えたらしい。

「一瞬、空気が乱れた様子でしたけど」

護衛についている伊賀忍びが始末したのか訊ねると、彩は、多分、と曖昧ながら頷いた。

「ただ、わかりません。甲賀流らしき忍びが現れたのは察知できたんですけど、伊賀流の忍びが里からずっと付いてきているようには感じられないんです」

それほどの達人ということなのだろうか。不気味にも思えるが、反面、これで憎き甲賀流に狙われなくて済むとせいせいしながら牛太郎は山を進んだ。

堺に戻ってくると、

「そろそろ上総介殿に報告すべきでしょう」

弥八郎に言われた。

「助さん。賀茂の祭りっていつごろやるって言っていたっけ」

「五月五日です」

「じゃ、それまで堺でのんびりしていましょ」

本当にのんびりとした。彩を伴って香木を探しに出かけたり、船着き場に行って四郎次郎の尻を叩いたり、それと梓の機嫌を伺って、買ってきた香炉を岐阜に送り出したりした。

一週間ぐらい自堕落な生活を送ったのち、牛太郎は再び治郎助、弥八郎を引き連れて京に出向いた。

上総介は相国寺にいる。いつものようにずかずかと寺に押しかけ

ると怪しまれると思い、牛太郎は織田兵卒に聞き回って前田又左衛門の所在を探し当て、いちいち又左衛門を経由して上総介に面通しを願った。

「そんなことより、お前、どこをほっつき歩いていたんだ」

そそり立つ相国寺の南門をくぐったところで又左衛門にそう言われ、牛太郎はぎくっとしてしまう。おそらく、葵祭の競馬のことだろう。

「また行方をくらましたと、太郎がかんかんになっているぞ」

上総介に呼び出された太郎は、競馬のためにわざわざ岐阜から来ているらしい。

「マ、マタザさん。あっしが京に来ていることは、太郎には内緒で」

「お前って奴はいつまで経っても」

又左衛門に呆れられた牛太郎は、胸の内で舌を打つ。マタザの馬鹿が。何もわかっちゃいねえ。いつまで経っても馬鹿なのはお前のほうだろ。こっちは忍びに追いかけ回されていたっていうのに。

などなど、むっつりとはするものの、又左衛門は昔馴染みの情からか、ときに上総介の怒りの矛を収めてくれる。そういう理由もあって又左衛門と同伴だった。

織田の奉行衆や下人が行き交う境内を進んでいき、織田木瓜紋の陣幕をめくって、本堂の大広間へと足を運ぶ。

しばらくすると、上総介が小姓を伴ってやって来た。牛太郎と又左衛門はすかさず平伏する。足音からして、機嫌は悪くない。

どかっと腰を下ろすと、開口一番、

「おおかた、祭りが終わったのを見計らってのこのこと出てきたんだろうが、この野郎」

見透かされていたようだった。ただ、言葉ほど語調は荒くない。

「ふざけやがって」

「あ、あっしなんかが出ても、どうせ信長様に恥を欠かせるだけだと思い」

「誰がテメーなんか出すかっ！　俺はテメーの馬を寄越せと申して

いたんだっ！　のぼせやがって、このうつけがっ！」
「す、すいませんっ！」
と、やはり怒っていたのであわてて額をこすりつける牛太郎。
「まあ、武田の攻略に奮闘していたらしいから、それを建て前に勘弁してやる。して、用件はなんだ」
「えーと、そのお、申し訳ありませんが、又左さん以外はお人払いしてもらっても、いいですか」
上総介は黙った。しばらく頭を下げ続ける牛太郎を無言で見つめたあと、
「部屋を替える。茶室を開けろ」
腰を上げた。

鉄砲奉行

茶の時間を上総介と同じくするのは牛太郎には初めてのことである。

五畳半の狭い茶室に大の男が四人。牛太郎と又左衛門の向かいに上総介、それらを両脇にして茶頭の田中宗易が茶をたてる。

茶席に主従の上下は持ち込まないとはいえ、牛太郎はなかなか緊張した。初めて茶を振る舞われる田舎武者のように両肩をこわばらせている。

そもそも、どうして急に一席設けたのか牛太郎は疑問だったが、静けさのうちに宗易の仕事を眺めているうち、なんとなくわかった。茶室は本堂の別棟にあり、境内からも外れている。牛太郎が人払いを求めた理由がなんであるのか上総介はすぐに察知したのだろう。茶頭をわざわざ呼び出して、あたかも牛太郎家臣たちに茶を振る舞っている。

岐阜城ならまだしも、ここは寺であり、何が紛れ込んでいるかわからない。

「お前が言わんとしていることはだいたいわかる」

上総介がふいにそう言った。そろりと目を向けてみると、腕を組み、両目を瞑ってじっとうつむいている。瞑想をしているようにも見え、短気な上総介にしては意外な静けさだ。

「キンカ頭がお前の案だと言って、戦図を持ってきたからな」

「案？」

と、何も知らない又左衛門に上総介が片目だけを開けて一言。

「武田だ」

菱の覇者。

又左の目が固まった。

「武田、ですか……」

隣の牛太郎に視線をちらりと向けてくる。牛太郎は口許を引き結

び、一つ、こくりとうなずく。
「本気なのか、牛」
宗易でさえ手を止めている。上総介も腕を組んだまま目を瞑りっぱなしであり、張り詰めたひとときの埒は牛太郎の言葉にゆだねられていた。
「本気ですけど」
唇を尖らせてふてぶてしく言った。今でもどことなく清洲の野良牛扱いしてくる又左がおもしろくなかった。
「実は、信長様」
そんな又左に見せつけてやるかのように牛太郎はいちいち丁寧に両の手を突いて、瞑想中の上総介に頭を下げながら言う。
「明智殿からすでに聞いているやもしれませぬが、武田が遠江高天神城に攻め入ったさいには、援軍を出しても出した振りだけにしてくだされ」
と、そんな言葉遣いなどしたことないくせにわざわざかしこまって緊迫感をあおった。
「攻めるのか？」
「攻めます」
言い切ったあとに牛太郎は固唾を飲み込んだ。武田が高天神城を攻めるか攻めないか、百地丹波を信じるか信じないか、もはや腹をくくるしかない。
「どうぞ」
と、急に宗易の手から茶が差し出されてきた。息の入れ具合ときたら絶妙だった。一気に肩から力が下り、上総介も薄っすらと目を開け、口端だけでただ笑う。血なまぐさい男たちのこの時間が、すっかり茶の湯に引き戻される。
上総介はそっと茶碗を掌にし、ゆっくりと回す。魔王のことだから片手でがさつな飲み方だと思いきやそれだから、牛太郎は半ば面食らいながらも、上総介の洗練された仕草に注視した。
一言で言えば無駄がなかった。懐紙で茶碗の縁を拭うまで、静け

さに落ち着いていた。
茶碗は上総介から又左衛門へと回されていく。やり取りについていけていない又左衛門は上総介からの茶碗は恐縮しながら受け取ったが、牛太郎へ回すときはぶっきらぼうだった。いや、すねていた。
茶碗の中を飲み干す牛太郎。
「結構なお手前でした」
宗易が目礼で答え、茶碗を引き下げる。
フン、と、上総介が笑った。
「又左」
目覚めたような声の張りで、少年のような輝きを瞳に放っている。
「内蔵助とともに鉄砲奉行になれ。二千丁の行方はお前らが決めろ」
「て、鉄砲奉行ですか？」
驚く又左の脇で、牛太郎は憮然とする。策定した設楽ヶ原の決戦において鉄砲隊はおそらく一番の花形部隊となるであろう。しかし、その戦場の主役が又左と内蔵助だなんて。
どうして太郎じゃないんだ。
「こましゃくれは権六と後詰だ」
上総介の睨みに牛太郎は胸中を悟られたと思って身を跳ね上げそうだった。
いや、急に牛太郎がふてくされたので、上総介にはだいたいが読めたのだろうが、牛太郎はあわて通しで視線をおろおろとさせた。
「又左。鉄砲隊の詳細は牛に聞け」
そう言って上総介が立ち上がろうとした。
「いやっ、信長様」
「なんだ。まだ、なんかあんのか」
「あ、あ、あ、あの、実は援軍のこともそうなんですが。その、織田の重臣が武田に内通するという偽装工作を、し、してほしいんです」
「なにい？」
「い、いや、ね、念には念を。多分、喜んで攻めてくると思います

し」
「確かにそうだ」
と、上総介は腰を下ろしなおした。
「して、どいつを武田に内通させたんだ」
「それは、えーと、そのお、んーと――」
柴田権六郎となかなか口に出来ずに言い淀んでいると、上総介が急遽押し付けてきた。
「佐久間だ」
「えっ？」
「あいつがもっとも寝返りやすい。首尾よくやっておけ」
牛太郎は腰を上げた上総介を止めようとしたが、あまりにてきぱきとやられてしまったので、なんとも翻しづらいままもじもじしているうち、上総介は去っていってしまった。
瞑想の時間はなんだったのだろう。いっときの暇も惜しんでいるかのような忙しさである。
牛太郎は溜め息をついた。権六郎ならともかく、佐久間右衛門尉に話を持ちこむだなんて、まったく頭が痛い。
でも、右衛門尉だとは言ってなかった。玄蕃允に聞き間違えたことにしてしまおうか。
「牛」
又左がどこか怒っている。
「なんなんだ、鉄砲奉行とは。いや、なんなんだ、これは一体。お前は今まで何をしていたんだ」
詰め寄られて、顔をしかめる。面倒だったし、あまり明かしたくはなかった。けれども、上総介の折檻からの防御のために又左を連れてきてしまったのは牛太郎自身だし、上総介が又左を鉄砲部隊の頭にしてしまった以上、仕方ない。
宗易がひっそりと茶碗の手入れをしている横で、牛太郎は用意していた設楽ヶ原の図を又左に見せた。
「弱い織田軍が武田に勝つにはこの場所で鉄砲をぶっ放すしかない

んスよ」
「しかし、武田の陣形がこうとは限るまい」
「いや、竹中半兵衛がこうなるって言いきっていましたし、明智十兵衛殿のお墨付きでもあるんスよ」
「そうか。なら、大丈夫だな」
むっとした牛太郎に、又左は大笑いする。
「いや、冗談だ。お前を信用していないわけじゃない」
絶対嘘だ。半兵衛と十兵衛の名を出したから、冗談でごまかそうとしているんだ。
「それにしても、なるほど、火縄銃で武田騎馬を殲滅していくのか」
「そう簡単にはいきませんからね」
馬鹿の一つ覚えで一斉射撃しても、火縄銃は弾込めに時間を要するから、そうした無駄をなくすために三段撃ちが必要だと牛太郎は説く。三段撃ちは一朝一夕で得られるものではないから兵卒の訓練も必須であるし、弾丸に足踏みした隙を狙って足軽を投入したり、それを引っ込めてまた射撃をしたり、
「その呼吸が大変なんスからね」
と、まるで金ヶ崎山で陣頭を取ったのが自分であったかのような口ぶりであった。
又左衛門は鼻で笑う。
「おいおい、俺を誰だと思ってるんだ。赤母衣衆筆頭、槍の又左衛門だぞ」
駄目だ、こいつは。一つに言うことに聞く耳を持たない。一つに鉄砲奉行だと言っているのに、槍の又左衛門などと胸を張っている前時代的気分。
子供も大勢抱えてすっかり大人になったと思っていたのに、結局、前田又左衛門を形成している根っこの部分はいつまでも尾張の又左らしい。
「前田殿」
茶碗を磨いている宗易が、微笑を浮かべながらふいと言った。

「二千名の鉄砲衆を率いるとは、歴史に残る大役ですな。ただ、それが武田様ともなると、いやはや織田様の心中、一か八かの賭けなのでしょうなあ」

茶室がしんとした。

「赤備えは日の本一ですぞ」

又左がまた固まった。どうやら、宗易はどこか浮かれている又左衛門を牛太郎の代わりにたしなめてくれているらしい。

又左も又左で茶頭の言うことにはわりとおとなしい。

「もう一服、どうですか？」

「い、いただこうかな。な、なあ、牛」

「そうッスねー」

この半月後、武田軍出陣の一報が入った。兵数二万五千。目的は高天神城攻略とのこと。

おれたちって実はすごい馬鹿なんじゃないのか

武田軍出撃の一報は京の上総介の下にいち早く届けられ、出撃可能な兵数が一万程度の徳川三河守も案の定援軍要請を京の上総介に送った。

牛太郎は岐阜に戻ってきており、彼に武田軍の動きを報せたのは篠木於松であった。

「高天神城の小笠原っていう城主が寝返るんじゃねえかとかそんな話らしいですわ」

初め、牛太郎は言葉をなくした。百地丹波に流言を頼んでからまだ一ヶ月弱なのだ。偶然じゃないのか。

もっとも、於松が言うには、武田軍は高天神城と掛川城に前々から照準を定めており、高天神城の動きは領土拡張策に渋っていた宿老たちを黙らせる決定打となった。

武田家が遠江攻略にすでに準備万端であった偶然と、伊賀流に風説を流させた必然が一致した結果らしい。

それはともかく、一つ気になった。

「勝頼と宿老は仲が悪いのか」

「へい。特に山県赤備えとは」

「う、嘘だろ？」

嘘じゃない。山県三郎兵衛尉が大膳大夫から遠ざけられているのは於松が密かに仕入れてきた情報ではなく、武田家中の誰もが知っている隠しようのない事実であった。

「なんで、山県が。あいつは武田の中でもかなりやれる奴だし、一本、筋が通っているところもあるし」

と、宿敵をかばっていることに自分でも気付いて、すぐに口を閉ざした。けっ、と鼻で笑う。

「山県が疎まれているなんて好都合だ。ざまあみろ」

牛太郎は腰を上げると、部屋を出た。

ここ数日中、まとわりつくような雨が降っていて、牛太郎は縁側に突っ立って庭先をじっと見入る。たまが毎日手入れをしている草花が濡れている。

二俣城を開城したときも雨が降っていた。あのときは凍えるような冷たい雨であったけれど。

山県ほどの武将を遠ざけるなんて、一体、大膳大夫は何を見ているのだろう。それとも、当主が代わるということはそういうことなのだろうか。牛太郎には理解できない。

「ししし」

於松が傍らに座って笑っている。

「持つべきものは宿敵ですな」

「黙ってろ、クソジジイ。どっか行ってろ」

「へいへい」

於松は庭先に跳ね下りると、糠雨に濡れながらどこかへと消えていった。

牛太郎は腰を下ろす。

今の時期に武田軍が出陣したということは、田植えを済ましたからなのであろう。九月になればすぐに稲刈りだから、武田軍の動きは夏の短い間だけに限っている。

徳栄軒の西上作戦は秋から冬にかけてであった。とすれば、今回の高天神城攻めは大規模な軍事行動ではない。目的は一城制圧のみである。

無論、大膳大夫はそれだけでは満足しないであろうし、高天神城攻めのそもそもが大膳大夫に隙を生み出させるための簗田一派の工作である。

しかし、うまくないのは農政期が過ぎた中秋にかけて事を起こされてしまうことだ。長篠、設楽ヶ原の湿地を活かすには梅雨時しかない。

この雨のように降り続く季節でなければ。

軒からぽたりぽたりと垂れおちるしずくを眺めていたら、そそそ

とたまがやって来た。牛太郎の傍らに膝をつき、白湯の入った碗を置く。

「どうしたい。やけに気がきくじゃんか」

たまは盆を胸に抱えて、若干視線を伏せながらも、褒められたことに照れ臭そうにして口許を緩ませている。

「旦那様はここにおられるのが多いんで」

なんだか、初めて見かけたときよりも大人びた。芋娘臭さがひどかったのに、おそらく、茶に香りにと興じている梓やあいりに感化されているのだろう、着ている小袖も見かけたことがある。

「貰ったのかい、それ」

「あ、はいっ。あいり様に頂きました。帯は奥方様のを」

「ほう」

鼻の穴がむずがゆくなってくる。近頃は梓の匂いしか味わっていない牛太郎は、香りに飢えていた。まして、生娘である。

きっと、初々しい風のような香りに違いない。

いや、駄目だ。あいりに疑われている。ここで変な真似をしてしまったら、まず間違いなく家の中での居場所を失うであろう。

とはいえ、絶品を目の前にしておきながら。

牛太郎は眉間から頬の皺までぐっとしかめながら、自らの頭をさすりつつ悩んだ。どうしたら、たまの小袖を物にできるのか。泥棒すれば無くなったと騒がれるし、頂戴と言ったところで梓のように快く引き受けるはずもないし。

「どうしたんです？」

「いや、うん。まあ、いろいろと大変でね。いくさのこととかで」

碗を手に取り、白湯をすすって気を紛らわせる。

「いくさになったら、やっぱり、お父ちゃんも……」

たまが上目に覗いて伺ってきていた。眉尻は勝ち気さを漂わせて尻上がりだけれど、十四歳の瞳は不安に揺らいでいる。

稲葉山の森はこぬか雨に覆われていた。

「当然だ」

牛太郎の声は低く野太かった。
「言っただろう。いつまでも百姓気分でいると追い出すぞって。ヤジエモンがおたまのお父さんだからって甘やかさないからな」
「はい……」
たまは頭をちょこっと下げて、足早に立ち去っていった。
陣笠を被り、蓑で体を覆っている少年が、軒の下に半身を隠してこちらを覗きこんできている。
「何をやってんだ、お前」
新三はさっと隠れてしまう。
「おいっ」
返事はない。すでにどこかに消えてしまったらしい。
本当に新三は何をやっているのだろう。どうせ、使い走りであろうが。
新三は、自分も連れていってもらえるはずだったのに、いつのまにか治郎助と二人で京に行かれてしまってすねている。牛太郎が畿内を歩き回っている間、やることもない新三は読書か家事手伝いの日々だったらしく、牛太郎が岐阜に戻ってきてもずっとふてくされている。
もう、いい齢なのに。だいたい、新三はいつまでここにいるつもりなのか。
新三の父親と話をしなくてはならないと思っていたら、太郎や黒連雀、玄蕃允たちが濡れそぼった姿で庭先にぞろぞろと入ってきた。
七左衛門は今日もこっぴどくやられたらしく、治郎助に抱えられてぼろ雑巾であった。
「よくもまあ、雨の中御苦労さんだな」
「いくさは雨のときもある。オヤジ殿も鍛錬したらどうだ。そんなことだから槍もろくに振り回せないのではないか」
「おれは槍とか使わないし」
玄蕃允は口端を歪めた。
「いい身分だことよ」

太郎が黒連雀を馬屋の中まで引いていき、そのあとを栗之介と栗綱が付いていく。そのあとをちぎってきた花を振り回しながらすえが付いていく。

あいりとかつが手拭いを両手に抱えて縁側に出てきた。

「旦那様ぁ。もう、こんなんじゃ、いくさに出る前にくたばっちまいますよお」

手拭いで顔を拭いながら、ハア、と大きな溜め息をつく七左衛門。

「くたばったらくたばったで格さんが弱かったってことだ」

「ちぇっ。旦那様はいいよなあ。のんびりしてて」

「のんびりなんかしてるか。なあ、助さん」

「おっしゃる通りです。旦那様はいろいろ大変なんだよ、兄さん」

弟が兄をたしなめている向こうでは、弥次右衛門がすえの頭を掻き毟るように拭いている。

「んなことより、マタザ殿や内蔵助殿たちも雨の中やっていたのか」

鉄砲衆のことであった。又左衛門は牛太郎とともに岐阜に戻ってき、同じく鉄砲奉行を命じられた佐々内蔵助とともに三段撃ちの鍛錬に励んでいる。

「何を言ってんだ。雨の中、火縄銃が撃てるか？」

あ――。

玄蕃允は至極当然のことのように言ったが、まったくその通りだった。雨の中で火縄に点火できるはずがない。

「ささ、早くお風呂に入りませんと風邪をひいてしまいますよ」

「ほんと、風呂だけは有難えんだよなあ。てか、面倒だからここで脱がさせてもらいますよ」

ふんどし一丁になった七左衛門を治郎助がたしなめ、あいりとかつは逃げ出していく。

「若様っ。早くしねえとお湯が冷めちまいますよ！」

「わかっておるって」

わいわいと騒ぎながら、ぞろぞろと縁側を上がっていく家の者どもの傍らで、牛太郎は別の世界に閉じこもっている。

梅雨時に火縄銃は禁物じゃないのか。どうして、十兵衛や半兵衛ぐらいの男たちがそこに気付かなかったのだ。

雨が降れば降るほど設楽ヶ原の湿地帯はぬかるみを増していき、織田軍に有利になっていく。が、雨が降っていては火縄銃が使えない。

この作戦は初めから大きく矛盾している。いや、破綻している。おれたちって実はすごい馬鹿なんじゃないのか。牛太郎は居ても立ってもいられなくなり、腰を上げて台所に駆け込むと貞に傘を引っ張り出させてきて、一人、屋敷を飛び出した。

とても絶望的な気分だった。

そして牛太郎は馬鹿だった

本多弥八郎は願福寺にいる。
泥まみれの足で床が汚れていくのもいとわず、牛太郎が弥八郎の居候部屋に押し掛けると、新三がいた。
「な、何やってんだよ、お前」
息を切らしながら牛太郎が入ろうとすると、「ああっ、足っ！」と、新三はすかさず駆け寄ってきて牛太郎を一度廊下へ追い出し、寺のどこかへ出かけていってしまう。
牛太郎は手持無沙汰にぜえぜえとしているだけ。
「どうされました。そんなにあわてて」
弥八郎の膝元と、新三がいたところには書物が置かれてあって、どうやら新三が弥八郎に物を教えてもらっていたらしい。
「武田が高天神城に攻めたって報せが」
まだ、肩で息を切っている。
弥八郎は声を驚きで跳ね上げさせ、瞼を大きく見開いた。
「もうですかっ」
「まあ、それもそうなんですが実は重大なことに気付きまして――」
新三が濡れ手拭いを片手にして、もう片手には湯呑み茶碗を携えて戻ってきて、牛太郎に一方を渡すと、一方の手で主人の足を拭いていく。
「実は火縄銃は雨だと――」
「ちょっと、こっちの足をあげてくださいっ」
新三に掴まれた右足を上げる。
「雨だと火縄に点火できないということですか？」
「そ、そうです。つまり、梅雨時を狙い目にしていますけど――」
「こっちの足もっ」
新三に掴まれた左足を上げる。
「梅雨時では火縄銃は役に立たない。大きく矛盾しているのではな

いかと」
「そ、その通り」
「ふむ」
と、弥八郎は腕を組んで、じっとうつむいた。新三が丹念に脛やふくらはぎをこする。
「もういいだろっ。お前は本当にもう」
牛太郎は部屋の中に入り、弥八郎の前に着座した。新三が戸を手に取ってよそよそしく帰ろうとしているので、お前もいろ、と、言って中に入れた。
「いつまでも女々しくしやがって。たかだか連れていかなかったぐらいでよ」
「御約束だって守られていないではないですか」
「約束？」
「ほらっ。おやかた様に湿田の開拓を申し入れる旨ですよっ」
「そんなの、この前、京に行ったときに言ったよ。相国寺で会ったし。まあ、そんな余裕はないから駄目だって言われちゃったけどね」
新三は恨めしそうに牛太郎を睨みつけると、鼻を背けた。
「もういいです。フン」
弥八郎は眠ったように目を瞑っている。
「何がもういいですだ。お前、小姓なら小姓らしくちゃんとしろ。さっきだって盗み見していただろ。呼んだって逃げちゃうし。なんであんなコソ泥みたいな真似をしていたんだ。ん？」
「別にたまたま見ていただけです」
「たまたま？　ははあ。お前、おれがおたまと話していたから気になって見ていたんだな」
「違いますっ。たまたまですっ」
「フン。エロガキが。どうせ、おれが岐阜を離れている間、おたまに近づいたんだろ。んで、おれがおたまに手を付けないかどうか心配で盗み見してやがったんだ。そうだろ。当たってんだろ。んー？」
「そんなんじゃありませんってばっ。殿がおたまさんに手を付ける

だなんて奥方様がいるのですもの、絶対にないではありませんか」
「そ、そりゃ、そうだ」
「ただ――」
「なんだよ」
「七左殿や治郎殿がいるし」
新三は視線を伏せながらも、ちらと牛太郎を伺い見る。牛太郎はこの色恋小僧を冷ややかに見つめる。
「どういうことだよ」
「おたまさんは若様の従兄妹に当たるのですから、やはりまだ殿は七左殿か治郎殿を一門衆にしようとしているのかなって」
「んなわけあるか。おたまをあんなごろつきにくれてたまるか。もちろん、お前にもなっ！」
牛太郎は本気で言っていた。また、新たな独占欲に毒され始めた牛太郎の瞳孔の開きように、新三は唇を尖らせて見つめ返す。
「でも、おすえさんは鉢巻き殿と仲良くしていますよ」
「？」
「おすえさんとねじり鉢巻き殿ですよっ」
「お、おす……、ん？　んーと――、え？　お、すえって、おたまのお姉ちゃんのお化け女のことか？」
「お化けではありませんが、おたまさんの姉上ですよ」
「おいおい」
牛太郎は思わず笑ってしまう。
「勘違いもほどほどにしとけって。馬のことしか考えてないねじり鉢巻きが女に興味を持つわけないし、あのお化け女だって鉢巻きと仲がいいんじゃなくて、クリツナとかクロときゃっきゃしているだけだろ。まあな、簗田家っていう狭い中で生きているから、お前もそう言いたくなるんだろうけれど、おれは別にいいさ。鉢巻きとすえなら。でも、中年おっさんとお化け女の恋話だなんて気色悪くて聞きたくもないからもうやめろ」
「ちょっと待ってください。なんで、おすえさんならよくておたま

さんは駄目なのですか。明らかに殿の趣味ではありませんか」
「黙れっ！　おれは簗田家の旦那なんだから、女中も趣味で囲うのも当然だろうがっ！　悔しかったらお前も出世してみろっ！」
「あ。今のお言葉、殿の口から出たとは思えませんね。奥方様がおられる殿のお言葉だとは」
「やめろ。今の発言は撤回する。やめろ」
「奥方様が聞いたらどうなることやら」
「やめろっ！　脅してんのか、この野郎っ！　お前、いつもなら主人だ家来だって気にしているくせに、なんで、女が絡むとそんなに悪者なんだっ！　ガキのくせにっ！　チンコの皮とか剥けてねえだろ、どうせよっ！」
「脅してなどいませんよ。ただ、私は奥方様が聞いたらどうなることやらと心配になっただけです。ねえ、本多殿。殿は言いましたよね、女中も趣味で囲うのが当然だと」
「い、いや、新三殿。そ、その前に少々よろしいかな」
弥八郎は両の手を前にかざしながら、熱くなりすぎている牛太郎と新三をなだめるように微笑を浮かべつつ、少しの間、黙った。
「なんスか、弥八さん。言っておきますけど、弥八さん、あっしのあの奥さんってのはとんでもない凶暴な奥さんなんスからね。ほ、ほ、本当にとんでもないんだからっ！　だから、本当に、お願いします。変なことは言わないでください。本当に」
「いや、簗田殿」
弥八郎は苦笑するしかない。
「奥方のことではなく、火縄銃のことなのですが」
「あ。あーっ。そ、そうね。そういえば、そんな話もしてた。雨に濡れちゃうと撃てなくなるだろってことね」
自分から押し掛けてきたくせに、別のことに捉われて他人事になってしまっている牛太郎に、弥八郎は疑うような眼差しだったが、清く貧しいこの男はすぐに軽蔑の色を顔から消して言った。
「鉄砲隊を主力とした決戦を梅雨時に仕掛けるのは確かに矛盾して

おりますが、梅雨時でなければ秋から冬にかけてとなります。その場合、簗田殿の言う例の湿田はわりと乾いてしまっており、武田の主力としている騎馬隊に大いに活躍されてしまうでしょう」

「どうだ？」

と、牛太郎は同じく設楽ヶ原を調査した新三に訊ねる。新三は先程の余韻から、目つきがまだ悪者だった。

「あの場所が乾ききるということはありえませんが、今日みたいに雨が降り続いていると溜め池も出来るでしょうし、人馬が進軍できる場所はごくごく限られてくるでしょうけど」

「この小僧が言うにはそういうことらしいです」

最初に押し掛けてきたときの切迫感がまるでない。

「簗田殿、つまり、そういうことです。梅雨時のほうが勝機が存分にあるということ。確実に近いのです。あとはいかに晴れ間を狙って時間を調整するか。それしかありません」

時間を調整するという言葉がいまいちぴんと来なくてどうでもよくなった。弥八郎が言っているのだから大丈夫だろう。あとのことは半兵衛、十兵衛にやらせておけばいいだろう、と。

おれは司令官じゃないし。

「そんなことよりだ、新三。お前、もう元服しろ」

簗田牛太郎という男は猪突猛進というか、こらえ性がないというか、無責任というか、あれだけあわてていたのに、すでに頭の中は厄介な新三を追い出すことに専念されてしまっている。

「なんでですか。私はお払い箱というわけですか」

新三はその辺りの牛太郎の人間性をよくわかっている。

「そういうわけじゃない」

「私は頑として簗田家から出ません」

「なんでだよっ！　お前は元々おれの家来じゃないだろうがっ！　お父さんのところに戻って、一緒に五郎左殿に仕えろっ！」

弥八郎は苦笑しながら首を傾げ、二人をいっさい相手にしないで書物を捲った。

徳川三河守の要請を受けて、上総介は京に駐在させていた軍を自ら率いて東進させ、遠江援護への体勢を取ったが、速攻を至上としている織田軍なのに明らかに進軍は遅かった。

こんなときのために琵琶湖に大船を浮かべている。だが、それに見向きもせずに陸路を取り、しかも、岐阜に帰陣するまでに十日もかかった。

本圀寺の変のときは岐阜から京まで一日で駆け抜けた織田軍である。

こうしている間にも武田軍二万五千は高天神城を包囲。ただし、小笠原与八郎はすぐに降伏しなかった。浜松の徳川本隊の援軍を待つが、三方ヶ原以来、武田の大軍にすっかり恐怖してしまっている三河守は織田軍が来ないかぎり出ていかない。そうこうしているうちに武田軍は攻撃を開始。上総介も嫡男勘九郎とともに軍勢を率いて岐阜を出立するも、遠江国に入り浜松城を目と鼻の先にしたとき、小笠原与八郎降伏により高天神城開城の一報が届けられ、上総介は仕方なくといったふうに三河へと馬首を返した。

上総介は三河吉田城に入り、援軍の謝礼にやって来た三河守と面会した。このさい、上総介は援軍要請を受けたうえでの鈍重な進軍に後ろめたかったのか、それとも、狙いがあってのことだったと三河守に悟らせないためか、兵糧代として革袋二つにぎっしりと詰まった黄金を馬につないで浜松に贈った。

贈られた浜松では、ためしに革袋を持ち上げてみた。すると、二人がかりでやっとこさ上げられる重量だった。あまりの黄金の量に徳川家の人々は驚き、将から下人まで上下の関係も構わずぞろぞろと見物に集まってきて、

「こんなことは、古今東西聞いたことがねえよ！」

と、遅滞な織田軍の不満もどこへやら、素朴な三河者たちらしく喜々として大騒ぎであった。

ここで登場人物の紹介1

『簗田牛太郎政綱』

沓掛城城主。官位は正七位上左衛門尉。

後世からやって来た知識を活かし織田家勢力拡大において大小の影響を与えてきた。

仕官当初はまったく役に立たずに運だけで生き残ってきたが、数々の戦場での経験と名将たちとの人脈により、包囲網攻略の影の立役者に。

サイズが合った甲冑を探すのに苦労するほどの大男だったが、最近、妻の拷問を受けて痩せた。

‘牛太郎の戦歴’

桶狭間の戦い（１５６０年・永録三年　織田　対　今川）

尾張に進軍してくる今川勢に対し桶狭間での奇襲を牛太郎が進言し、馬廻衆毛利新助が総大将今川義元を討ち取って勝利。牛太郎はこの勲功で沓掛城及び、政綱の名を信長から拝領する。

森部の戦い（１５６１年・永録四年　織田　対　斎藤）

美濃に侵攻した織田勢の前に脛取り足立が立ちはだかるも、前田利家の参加により形勢逆転。利家はこの活躍によって織田家帰参が許される。なお、牛太郎の活躍はなし。

稲葉山城の戦い（１５６７年・永録十年　織田　対　斎藤）

難攻不落の稲葉山城。弱点が搦め手であることを事前に竹中半兵衛から聞いていた牛太郎だが、佐々成政と木下秀吉の邪魔が入り、この二人が喧嘩をしている間に稲葉山城は落城。親衛隊を勝手に動

かした軍紀違反により成政は謹慎処分。牛太郎の活躍はなし。

観音寺城（箕作城）の戦い（１５６８年・永録十一年　織田浅井徳川連合　対　六角）

牛太郎がさゆりに吹き込んだ流言と、竹中半兵衛が想定した作戦と奇策により六角勢は一日で敗退。上洛を目前にし、織田軍を天下にしらしめる。なお、牛太郎は戦場のどさくさで山内一豊を私情で殺そうとしたが失敗し、活躍もなし。

池田城の戦い（１５６８年・永録十一年　織田　対　池田）

信長に命じられて摂津豪族衆の説得に回っていた牛太郎だったが、摂津池田を訪ねたさい、急遽織田軍が池田に攻め入ってきて、牛太郎は投獄される。攻防の最中、太郎に助けられるが、信長に口ごたえをしてしまって怒りを買い、再び池田勝正の説得へ。黒連雀とともに激戦の中を本丸まで一騎で駆け上がり伝説を作るも、降伏と引き換えに池田家の所領安堵を勝手に申し渡してしまい、信長が再び激怒。ぼこぼこにされたうえ、謹慎処分をくらう。

本國寺の変（１５６９年・永録十二年　織田足利連合　対　三好三人衆）

謹慎処分が解かれた牛太郎は摂津池田の目付け役に。その折、信長の岐阜帰陣を見計らって、将軍足利義昭が仮御所としていた本國寺に三好三人衆が攻め上がり、池田勢は急遽本國寺の援軍に向かい三好三人衆は桂川へと退散。のち、岐阜から駆け付けた織田本隊により三好三人衆は蹴散らされる。なお牛太郎は見ていただけで活躍はなし。

金ヶ崎の退き口（１５７０年・元亀元年　織田徳川連合　対　朝倉浅井連合）

火縄銃百五十丁を今井宗久から借り受けた牛太郎が意気揚々と越

前侵攻に加わるも、浅井長政の裏切りにより一転窮地へ。木下秀吉、徳川家康、明智光秀、池田勝正とともに退却軍のしんがり役を務め、朝倉勢の猛攻を食い止めるも牛太郎率いる沓掛勢は五百人から百人と壊滅状態へ。

姉川の戦い（１５７０年・元亀元年　織田徳川連合　対　浅井朝倉連合）

馬廻衆から侍大将に昇進した太郎とともに柴田隊傘下で参戦。牛太郎は一撃必殺で敵将磯野員昌を火縄銃で狙うも失敗。押されっぱなしの織田軍を見て一度はあきらめかけるも、援軍の到着に奮起。牛太郎の栗綱、太郎の黒連雀が先頭に立って沓掛勢は斜行突撃を行い、混乱を誘う大活躍をするものの、部隊から勝手に離れた軍紀違反により勲功はなし。

野田・福島城の戦い（１５７０年・元亀元年　織田　対　三好三人衆石山本願寺連合）

三好三人衆殲滅のために摂津を襲いかかった織田軍。初めは連戦連勝だったが、本願寺顕如が全国本願寺門徒衆に織田追討の檄文を発したため、一転、苦境に立たされ、織田包囲網構築のきっかけに。さらに浅井朝倉連合軍が琵琶湖西岸を南下して京へ進軍。信長は摂津から急遽退却。なお、牛太郎は後ろめたさから戦場にやって来るも、森可成が討ち取られたことを知って大泣き。太郎にぶん殴られ、堺に帰って終わり。

比叡山焼き討ち（１５７１年・元亀二年　織田　対　延暦寺）

浅井朝倉軍を比叡山に引き入れ、織田軍の行動を比叡山に張り付けさせ、各地の戦線で織田軍に敗退を招かせた延暦寺。朝廷を介して各勢力と和睦後、信長は朝倉討伐と見せかけて出陣するも段取り通り明智光秀の指揮で急遽比叡山を攻撃。老若男女いとわず殺戮していき、虐殺が嫌いな牛太郎は何もせずに終わり。

山本山城の戦い（１５７２年・元亀三年　織田　対　浅井）
北近江浅井の弱体化に向け出陣。当初から牛太郎はやる気がなかったが、佐久間盛政に馬鹿にされて頭に血が昇り、山本山城下の焼き討ちで突撃をこころみる。しかし、想定外の状況に何もできず、やみくもに撃った火縄銃の反動で馬上から落ちて終わり。

二俣城の戦い（１５７２年・元亀三年　徳川　対　武田）
武田勢二万の包囲軍に対し、二俣城守兵はわずか千。しかし、天然の要害を活かして一ヶ月の間、城内に一兵の侵入も許さなかった。だが、最後は武田信玄の奇策により水源を破壊され、降伏。

三方ヶ原の戦い（１５７２年・元亀三年　徳川織田連合　対　武田）
武田信玄におびき寄せられ、徳川軍は浜松城から出撃。三方ヶ原で相対する。信玄の首を狙いに一騎のみで突撃を開始した牛太郎は、山県昌景と激突。牛太郎が発した弾丸は山県隊与力が身をもってふせぐ。襲い掛かってきた山県の槍先をかわすも耳を切り裂かれる。
戦況は終始武田軍が優勢で、数々の将が家康の身代わりとなって死んでいく。牛太郎も覚悟を決めたがさゆりに割って入られ生還した。

簗田家の人々
『簗田左衛門太郎広正　やなだ　さえもんたろう　ひろまさ』
牛太郎の養子。実父は丹羽長秀だが本人は知らない。妻はあいり。娘が一人。
精鋭部隊馬廻衆を経たのち、若くして織田家侍大将に昇進、虎御前山からの退き口ではしんがりを務め、姉川の戦いでは奇策で自軍の窮地を救う。

『梓　あずさ』

牛太郎の妻。柴田勝家の末妹。

織田家中では知る人ぞ知る恐妻。木刀の達人。曲がったことと夫の浮気が大嫌い。しかし、匂い馬鹿の夫に自分の着物をあげる優しさ（？）も。

『中島（茶屋）四郎次郎清延　なかじま　しろうじろう　きよのぶ』

三河出身の商人。徳川家康から五百貫を与えられて京都に上ったが、松永弾正の御用商人に騙されて、牛太郎に拾われる。摂津攻略の折に工作の流れから淀川水運業を任せられることに。独占をいいことに莫大な利益を上げているが、牛太郎の監視が厳しいため贅沢はしていない。

『栗之介　くりのすけ』

簗田家の馬丁。丹羽長秀の命を受けて、馬に乗れなかった牛太郎のために栗綱を育てた。素朴なせいで口が軽く、ときに牛太郎の秘密を喋ってしまい大きな災いを引き起こす。みたらし団子が嫌い。

『あいり』

最初、山内千代に無理やり押し付けられ女中として雇うことに。牛太郎のささやかな企みの結果、丹羽長秀の養女になって、太郎の妻に。娘を産んでのち、肝が据わり始めてきている。

『駒　こま』

太郎とあいりの娘。わがまま。

『大石新七郎　おおいし　しんしちろう』

簗田家与力。元甲賀流。四郎次郎に立て替えてもらった三百貫と引き換えに妹ともども忍びの道から足を洗う。虎御前山のしんがり戦で首級を上げて与力に。摂津工作では高槻城に潜伏仕官し、和田

惟長、高山右近の暗殺を謀った。

『彩　あや』
新七郎の妹。団子茶屋の看板娘で牛太郎に可愛がられている。さゆりの要請により忍びをさせられることもあるが、さゆりの厳しさにうんざりするときも。

『大蔵新三↓長束利兵衛正家　なつか　りへえ　まさいえ』
丹羽長秀与力、大蔵盛里の子。牛太郎が天下の将たちと交遊していることを知って、自らすすんで牛太郎の小姓となった。頭が非常に堅かったが、牛太郎と行動を一緒にしているうちに徐々に軟化。弥次右衛門の娘のたまに一目ぼれ。綺麗好き。

『宿屋七左衛門・治郎助　やどや　しちざえもん・じろうすけ』
最初、兄弟ともにとと屋の荷役。田中宗易の推薦により牛太郎の従者となるが、弟の治郎助が彩を慕っていることを知った牛太郎に、一度は船の上へと遠ざけられる。

『簗田弥次右衛門　やなだ　やじえもん』
太郎の叔父。元は雇われ百姓。貧しさに耐えかねて、血縁を頼りに尾張春日井から出てきた。牛太郎の意地汚い計略のすえ簗田姓を頂戴してしまう。二人の娘のうち、妹のたまは簗田家に奉公している。

『篠木於松　しのぎ　おまつ』
尾張篠木村出身で、伝説の盗賊篠木惣八の忘れ形見という噂。七十歳を超えているが、山の中で隠れて獣の肉を食っている。信長の乱波として織田家に奉公していたが、小谷城攻めをきっかけに牛太郎にまとわりつくようになった。

『本多弥八郎正信　ほんだ　やはちろう　まさのぶ』
三河一向一揆で主家に反逆し、三河を追放された浪人。各地の一向一揆にスポット参戦するも、本願寺宗家の権力支配に疑問を持ち始め、一向宗とは一線を画し始める。松永弾正忠の下で居候していたところ、簗田家の食客へ。

『栗綱・黒連雀』
栗毛の兄、栗綱。名前の由来は綱鎧の簗田の異名から。黒毛の弟、黒連雀。名前の由来は腹に白く発汗しながら跳ねるさまが連雀のようなので、織田の兵卒たちが呼び始めた。牛太郎や太郎が名前を付けてわけではない。

『さゆり・さな・吉田早之介』
元は甲賀流の下忍。諜報、変装、格闘に長けた優秀なくのいちで、甲賀流上忍家の覚えもよかったが、牛太郎に誤情報を吹き込まれた結果、主家の六角氏の衰退を招いてしまう。一転、甲賀流に命を狙われるが、彩に助けられ、男装して牛太郎の与力に。運だけで道を切り開いていた牛太郎を助け、金ヶ崎の退き口や摂津工作で貢献した。
一度は牛太郎の下を出奔するも、彩に麻酔針を狙撃されて引き戻される。
牛太郎とともに小谷城に忍びこんだのちは、浅井三姉妹の侍女に転身。一線を退いている。

羽柴家の人々
『羽柴藤吉郎秀吉　はしばとうきちろうひでよし』
下人から北近江十二万石の国持ち城主となった織田家の出世頭。調略を得意とし、織田軍の戦いでは数々の勢力を寝返らせてきた。五百人の兵で浅井兵三千（一揆衆含む）を撃退したことや金ヶ崎の

退き口でも撤退を指揮し、生来の度胸の大きさからいくさ上手でもある。　ただ、調子に乗って木下姓から羽柴姓へと変更したりと図々しいため重臣から嫌われてもいる。女と贅沢が大好きなうえに、無理をして家臣を増やしていったため牛太郎に借財している。

『寧々　ねね』

藤吉郎の妻。清州の極貧時代に牛太郎はなにかと世話になったため、夫の藤吉郎ともども頭が上がらない。梓やあいりと仲が良いので、昔のことを喋られないかと牛太郎は警戒している。

『羽柴小一郎長秀　はしばこいちろうながひで』

藤吉郎の異父弟。藤吉郎の浪費癖に常に頭を痛め、わがままな言動には冷たくあしらうが、自軍五百で三千の浅井勢に対したときに兄の偉大さを知った。昔から太郎と仲がよく、しょっちゅう文通している。

『市松・夜叉丸　いちまつ・やしゃまる』

藤吉郎の小姓。共に尾張中村の出身で、押しかけ同然で羽柴家に入った。牛太郎をかなり馬鹿にしているが、太郎は尊敬している。

『蜂須賀小六郎正勝　はちすかころくろうまさかつ』

藤吉郎の片腕。元は木曽川の川並衆で、野武士の親方。前田利家と殴りあって喧嘩したのち、藤吉郎の配下に。

『山内伊右衛門一豊　やまうちいえもんかずとよ』

藤吉郎の与力。ただし、簗田家と違って羽柴家には何十人もの与力がいるために埋もれており、元は主人であった牛太郎ですら近頃はその姿を見かけることがない。

『千代　ちよ』

一豊の妻。明智庄出身であいりと同郷。明智庄の住人を沓掛城に避難させた件で牛太郎や太郎と縁があり、岐阜城下に移ってきたあとも時折牛太郎の姿を見かけると後をつけている。出世の見込みがない夫に変わって何かを企んでいる。

『竹中半兵衛重治　たけなかはんべえしげはる』

藤吉郎の与力。稲葉山城を十数名で乗っ取った首謀者で、のち藤吉郎の三顧の礼に織田家に。数々の鬼謀を繰り出す超有名人だが、作戦立案や戦場では気が高揚しすぎてしまうため信長から気味悪がられている。できないことはできないとして、実は無謀なことはやらない。実家の菩提山に牛太郎・太郎親子が居候していた時期があり、二人と仲が良い。部屋が汚い。

前田家の人々

『前田又左衛門利家　まえだまたざえもんとしいえ』

赤母衣衆筆頭。尾張清州でも有名なかぶき者だったが、信長が可愛がっていた茶坊主を叩き斬って追放されたので更生。一男四女の父になってからはすっかり保守的になり、家中の将たちからも白い目で見られている。

『まつ』

利家の妻。十三歳のころに利家に嫁ぎ、五人の子を産むも、少女から変わらず美女。ただ、張り巡らせている連絡網は絶大な素早さを持ち、聞きいれたことは一日で織田家に広めることができる。

『犬千代　いぬちよ』

利家の嫡男。父の若いころとは違い、従順で真面目な少年。牛太郎にもわりと素直。

『豪　ごう』

最近生まれた女の子の赤ちゃん。

牛太郎対新三　仁義なき戦い

牛太郎は、おたま恋しさに反逆心が見え隠れする新三を家から追い出すことにがむしゃらになっている。新三の父親である大蔵安芸守に会い、新三を元服すさせるべきだと強く説得した。

「でも、新三の奴は簗田様にお仕えしたいって申しておりますし。あと一年ぐらいは勉強させてやってもらえませんか」

どうやら安芸守は息子の意向を尊重している親馬鹿で、牛太郎が齢も齢なのだからといくら言っても、新三の好きにさせたいと言って聞かなかった。

かといって新三自身を説得しても、新三は牛太郎の魂胆を読んでいるので意地でも小姓で居座り続けようとし、それどころか、いつのまにか梓に取り入っており、

「新三が摘んできてくれたのじゃ」

と、床の間には初夏の花が活けられていた。梓がそうした素朴な贈り物を素直に喜ぶ性格だということを新三はまったく心得ており、それを利用する姑息さまで見せ始めた。

可愛いところもあったのに、おたまが絡んだ途端に恐ろしいやつだ。牛太郎は寒々しい思いをしながら、最後の手段、太郎に相談した。

「大蔵殿も新三自身ももう少しは父上の世話をしたいと言っているのならよいではないですか。新三は少々小生意気なところはあるかもしれませぬが、なかなかどうして細かな気配りができる者ではありませんか」

駄目だ。太郎まで洗脳されている。牛太郎は早々にあきらめて自室に戻る。

「お前は寄生虫だな。いや、家に居座るダニとかノミだ」

と、布団を敷いている新三に言った。新三は澄ました笑みを浮かべて意に介さない。

「皆さま、私を正当に評価されておりますから。そのように私を罵るのは殿だけです」
「おれをあんまり見くびると痛い目に合うぞ」
翌日、牛太郎は三河吉田城から織田軍とともに帰陣した丹羽五郎左衛門の屋敷を訪ねた。
「あっしのところに大蔵殿の子供が小姓としているんですけど、十五歳になりましたし、元服させようかと思って。主人の五郎左殿の許可で元服させてやり、丹羽家に奉公させてもらえませんか」
もちろん、五郎左衛門は新三と牛太郎のいさかいも知らなければ、新三が元服をしないと言い張っているのも存じていない。なので、牛太郎が善意で新三を元服させたいと申し出ているように誤解した。
「左様だな。子供をいつまでも子供のままにさせておくわけにはいかんな」
と、四十を前にして鬼五郎左の鬼の字などどこかに消えた五郎左は、垂れ下がった眉を緩ませながら、にこにこと笑っていた。
「ありがとうございます。新三もいっぱしの将になれて喜びます」
牛太郎はしたり顔で頭を下げていた。
「いやあ、めでたいめでたい。可愛い新三の元服だから簗田家を上げてお祝いしなくちゃな。あ、送別会も兼ねてな。元服して大人になったら、簗田家家臣というわけにはいかないからな」
大人の力学を行使した牛太郎は、夕飯の食卓で上機嫌にそう言った。
その魂胆はともかく、牛太郎と新三が元服するかしないかで揉めていたことを知っている家の者たちは、丹羽五郎左衛門まで引っ張り出してきた牛太郎をいつものように怪しんだ。
「新三自身が元服はまだ早いと言っていたのに、そこまでする必要はなんだったのじゃ」
「梓殿。これはですね、新三自身だけの問題じゃないんですよ。大蔵殿を召し抱えている丹羽家の問題、しいては織田家全体の問題なんですよ」

太郎以下、家の者たちは納得しなかったが、牛太郎の言っていることはあながち間違いじゃない。新三の本来の主人筋は五郎左衛門であり、彼が元服をしろと言ってしまった以上、簗田家の人間がとやかく言える立場ではなかった。

「いやあ、残念だ。新ちゃんがいなくなると寂しくなるなあ。でも、これればっかりは仕方ない。あ、そだ。お祝いに新ちゃんに太刀を買ってやろう。あと、袴も買ってやる。餞別にな」

新三がむすっとしている中、牛太郎は高らかに笑い上げた。

追い出したい側と居座ろうとする側の仁義なき主従の戦いは牛太郎の強権によって幕が下ろされるかと思いきや、おそらく牛太郎ゆずりであろう狡猾さと奇策で新三は挽回に転じた。

牛太郎が有頂天になって市の相手に登城している最中、新三は太郎に今後も簗田家に世話になりたいという無理を願い出た。太郎は気持ちは有難いがと渋ったが、新三が丹羽五郎左衛門を説得してくれと強く迫った。

「無理だとは思うが、一応は話をしてみよう」

新三は太郎を連れて丹羽宅へと押し掛けると、

「丹羽様にはまことに不忠なことかと思いますが、私は簗田家に仕えたいため大蔵の家を出ます。幸い、私には弟がおりますし、父上も了承してくださいました」

太郎も五郎左衛門も唖然とした。むしろ、そこまで牛太郎に従いたいのかと感動した。

「いや、別に家を出なくてもよかろう」

五郎左衛門がそう言うと、太郎も、

「左様。元服しても借り受けているという格好でよいではないか」

「いいえ。それでは示しが付きませんし、殿が絶対に許してくれません」

「わかった。そこまで言うならお主は簗田家に仕えよ」

ということで、新三は大蔵家を出た形となり、元服と同時に姓を出身村の長束村から、名を利兵衛に改め、諱を当てつけのごとく牛

太郎の政綱ではなく太郎の広正から一字取って、長束利兵衛正家とした。

主従の戦いは新三改め、利兵衛の勝利であった。丸顔の頬をほころばせて主人の牛太郎の前にひれ伏し、

「太刀と袴の品、有難き幸せ。これからも神明に誓って簗田家にお仕えする所存です」

「お前はそこまでして……」

新三が長束利兵衛に変貌したのを牛太郎が知ったのはこの日だった。してやられた牛太郎は悔しさのあまり拳を握って震えたが、そこまでたまが恋しいか、とは、梓やあいりがいる手前発せられなかった。

「どうしたのじゃ、真っ赤な顔をして」

「い、いや。新三の忠義さに感動してしまって。よ、良かったな、新三。五郎左殿が許してくれて。良かったな」

「もう元服したので、新三はやめてもらえませんか」

と、憎たらしい顔だった。

絶対にたまは渡さない。

七月十三日。

上総介は伊勢長島を討伐するべく、嫡男勘九郎とともに岐阜を出立、同日、木曽川下流に面する尾張西部の津島に着陣した。

尾張津島から南西方向にかけての伊勢長島一帯には美濃から流れ出る川が幾条にもなって集まっており、大きな川だけでも岩手川、大滝川、今州川、牧田川、一之瀬川、木曽川などがあり、これらの大河に加えて周辺の山々から流れ出る谷水もこの地で合流している。

これらの流れは長島の東西北を幾重にも囲みながら南の海へとそそがれており、この中に位置されている長島は四方を天然の要害に囲まれた難攻不落の地であった。

およそ五十年前、この地に本願寺中興の祖である蓮如の六男蓮淳

によって浄土真宗本願寺派願証寺が立てられた。願証寺は地元の国人、地侍を取り込んで地域を教義支配し、さらには賊や罪人を囲いこんで門徒衆十万人、石高約十八万石という大教国を作り上げた。

かつては尾張の国人領主たちばかりではなく、美濃の斎藤道三でさえ、まったく手出しのできない存在であり、上総介も上洛のときにこれを避けており、願証寺側も介入してこなかった。

沈黙に火花が落ちたのは、織田と三好三人衆とのいくさに宗家石山本願寺が参戦したためである。願証寺はこれに習って北伊勢の豪族たちや紀伊の雑賀衆などに檄文を飛ばし、これらがぞくぞくと集結。

数万に膨れ上がった軍勢は織田方であった長島城を一気に攻め落とすと、次いで上総介実弟、彦七郎信興が城主を務める尾張小木江城に進軍。

彦七郎は兄の上総介に援軍を要請するが、織田本隊はこのとき琵琶湖西岸を京に向けて南下してきた浅井朝倉勢に対応せねばならず、さらには比叡山に立てこもられてしまい、動くに動けない状況であった。

北伊勢桑名城の滝川彦右衛門も一向宗に攻め立てられており、完全に孤立してしまった彦七郎は、六日間奮戦し耐えたが、多勢に無勢、小木江城は落城し、彦七郎は八十人の家臣とともに自害を果たした。

上総介が長島一向門徒衆に向ける憎悪は浅井長政への比ではなかったが、長島への侵攻を二度失敗している。

一度目は東西各地の中洲に築かれた砦を攻めるも、河が容易に進軍をさせず、さらには数千から万単位が立てこもった砦からは鉄砲、弓矢が雨あられと飛んできて、河上の要塞と化した長島になすすべがなく、撤退。この退却戦において柴田権六郎がしんがりを務めたが、氏家卜全、犬の夫であった佐治八郎などが討ち取られた。

二度目は一度目の失敗を反省し、海上からの進軍を目論んだが伊勢大湊での船の調達の交渉していた上総介次男、北畠三介具豊の動

きが芳しくなく、本隊は北伊勢のある程度は攻め入れたものの本拠長島の攻略まではいかず、撤退。そこを一向宗はしたたかに待ち伏せして狙いうち、織田軍にとっては再び惨憺たる退却戦となった。

三度目の正直かどうか、上総介は長島討伐を号令し、織田総所領から軍勢を津島へとかき集めた。

その数、八万。明智十兵衛と羽柴藤吉郎は、京、越前、と各々の業務のために参戦していない。にも関わらず、この大軍勢であった。

戦場へ

武田攻略に専念しているので今回の長島侵攻も不参加であろうと高をくくっていた牛太郎であったが、上総介からの下知は参戦。

「兄上様は長島に向かわれるそうですね」

犬は百日紅のつぼみを眺めながら言った。普段は柔らかい表情が少しうつろげであった。

「でも、左衛門尉様は岐阜にお残りになられるんですよね？」

振り上げてきた犬の瞳は期待に輝いている。

牛太郎はかぶりを振った。

「全軍総出の命令なんで」

「そ、そうでございますか」

犬は眼差しを儚い色に沈ませた。唇を結び、視線を落とす。

鉛色の雲に覆われた空、暦の上では梅雨は過ぎているが、天気はいつまでもすっきりとしない。やがては庭園を彩るであろう百日紅も、つぼみをちんまりと閉じている。

「どうかご無事で――」

犬はそれだけを言って、あとはずっと黙っていた。

牛太郎は目礼を残し、屋敷をあとにする。長島出陣の旨を市に報せに参ったところ、犬が来訪していた。畿内から戻ってきてからは、どうも、犬と顔を合わせる機会が多くなっており、市とそれとない会話をしたあとには常に犬と庭先で二人きりになる。

そのときばかりは茶々や初も市のそばでおとなしくしているのである。

どうも、市が仕組んでいるような気がしてならない。

梓と仲良くしろって言ったのに。

「よかったやんか」

玄関先でさゆりがつんと顔を澄ましていた。艶やかな青の小袖を羽織っているのに、袖をまくって腕組みなんかをしていて見っとも

なかった。牛太郎はそこのところついいつもの口を叩こうとしたが、犬とお近づきになれてよかったじゃないかというふうに聞こえたので視線を逸らしてそのまま逃げ去ろうとした。

「まあ、これで調子に乗んなや。相手は武田やからな」

なんだ、そのことか。牛太郎は足を止めて振り返ると、水を得た魚のように目玉を剥き出す。

「よかったも何もねえだろうが。お前のおかげで余計な大支出だぞ！」

伊賀流に渡した金銀の分は結局織田家の台所から引き出せなかった。長谷川藤五郎に話をしてみたところ、上総介は忍びを疎んでいるので無理に決まっているだろと一蹴され、牛太郎がしつこく詰め寄ったために藤五郎は頭に血を昇らせ、どこからそのような銭を用意したのだと逆に問い質されてしまい、堺の会合衆から借りたというその場しのぎの嘘をついて逃げた。

牛太郎はめげずに堀久太郎にも駆け寄ったが、涼しい目元で駄目だの一点張り。理由は藤五郎と一緒であった。むしろ、物分りのよさそうな久太郎のほうが強烈だった。

「おやかた様の承諾なしで勝手に忍びを雇ったとなると、見過ごすわけにはいきませんよ」

と、恐ろしく事務的な冷たさに豹変してしまい、牛太郎は黙らされた。

「聞かなかったことにしておきますよ」

久太郎はにこっと笑った。

「お前のせいだ。伊賀流なんて雇わなくても、お前がやれば何も問題なかったんだ。伊賀の里に行かなければクソ甲賀に命を狙われなかったしな」

「私一人でこんなに早く流言を飛ばせるわけないやろうが。もういい加減私に頼るのはやめてや」

「お前が勝手に伊賀流に話をつけちまったんだろうが！　文書を偽造してまでよ！　伊賀流なんかに頼らなくたって、おれがどうにか

できたんだ！」
「だったら最初から私に泣きつくなや。しがみついてきたのはどこのどちらさんや。だったら、もうええ。今後一切、私はあんたに何もせん。本当に何もせんからな」
「こっちこそ願い下げだ！」
牛太郎は歯をぎりぎりと噛み締めながら稲葉山を下った。
翌日、出立である。
まともな出陣ともなると玄蕃允や勝蔵とともに浜松へと向かった一昨年までさかのぼるので、牛太郎は出陣といえば何をしたらよいものだったか考えてしまった。
さらには宿屋兄弟や弥次右衛門の新たな配下もいるし、新三こと利兵衛も元服を果たし一将兵である。貞やかつ、あいりなどのこなれた女たちが整然と男どものいくさ支度を整えていく中で、たまはその辺をあっちにこっちに駆け回るあわただしさ、曇天の庭先に落ち着いている新参者の男たちといえば、無駄に息巻いている若者が一人、青ざめている中年と少年、被った陣笠の下で眼差しを泰然とさせている者は治郎助ぐらいであった。
あと、たてがみを編み込まれた栗綱の姿にすえが大喜びしていて、
「すえも髪の毛を編んだほうがいいんじゃねえか」
と、栗之介が気色悪い笑みを浮かべて言っている。確かにすえと栗之介は仲が良い。が、広間で座り込んでいる牛太郎はそれを見なかったことにして、黙々と湯漬けをかきこんでいく。
ちなみに堺でわざわざ造った胴丸と陣羽織は痩せてしまったので用無しとなり、結局その辺の足軽雑兵の格好に毛が生えた程度でおさまってしまった。
太郎がお気に入りの赤黒縞の鞭を腰に差して縁側に現れた。すえと栗之介以外の一同は平伏する。広間から太郎の後姿を眺めながら、長篠の戦いまでには将校らしい鎧兜を揃えなければなどと、牛太郎の頭の中に長島の戦場はない。
「各々、初めての戦場だが無理はするな。父上を守っていればそれ

でよろしいからな」
　そう言いつつ、太郎は牛太郎に振り返ってくる。
「とはいえ、父上がまたしても一騎駆けをしてしまったら誰も守れません。なので、父上こそ無茶な真似はやめてくださいよ」
「そうじゃ」
　牛太郎の脇に座っている梓がそう言った。膝の上に抱えている駒の小さな手を持ち上げながら、
「駒からも言っておやり。無茶な真似はよせと」
　駒は頬を膨らませてそっぽを向いてしまう。父の太郎も、祖父の牛太郎も、鎧兜を着込んだその日からなかなか戻ってこなくなることを幼い心で理解しているらしい。
「駒。駄々をこねるでない。しゃんとしてお見送りするのじゃ」
「大丈夫ですよー、駒ちゃん。おじじはすぐに帰ってきますからねー」
　牛太郎は駒の頬を革手袋越しの人差し指で触れたあと、腰を上げた。太郎は無言で駒を見つめる。男が人前で赤子をあやしたりするのを恥だと思っている堅物の太郎である。精一杯の未練を残している太郎の肩をぽんぽんと叩いて、牛太郎は玄関へと向かった。
「御武運をお祈りしております」
　と、あいりが女中たちを従えて上がりかまちに平伏する。
「くれぐれも無理はせんようにな。亭主殿も太郎も」
　牛太郎と太郎は梓に目礼すると、門前へと出て、それぞれ栗綱と黒連雀に跨った。栗之介が口輪を引く。利兵衛が牛太郎の脇を、七左衛門と治郎助が栗綱の背後を、弥次右衛門は――、くっ付いてきてしまったすえをあたふたと追い返し、駆け付けてきたたまに預けて落着した。
　沓掛勢は新七郎が清州を経由して直接津島へと率いることになっており、九之坪勢は三方ヶ原で全滅してしまったので、率いる兵のない玄蕃允がどこからともなくやって来て合流する。
「話によると織田の総兵は十万だというではないか」

と、馬を並べてきた玄蕃允が言う。今回の大軍勢の侵攻に岐阜城下は盛り上がってしまっていて、少し大袈裟な風説が回っていた。

「我らの出番はないだろうから、オヤジ殿は十分に眠っておられるぞ」

言われなくてもそのつもりの牛太郎だった。十万の大軍勢ならたかだか三百人そこらの沓掛勢の出る幕はないであろう。ただ、相手は織田軍を相当苦しめてきた長島一向一揆衆である。下手を打てば命の危険も有り得るので、無視、静観を決め込むつもりでいる。

伊賀の忍びもどこからか守ってくれていることだし。

ところが、本多与八郎がずたぼろに擦り切れた具足を着込んで現れた。

「拙者も行きます」

刃の欠けた槍を携え、まったくの雑兵で、見るからに眉根をひそめたくなるみすぼらしさであったが、弥八郎は健気に馬上の牛太郎へ濁りのない瞳を向けてくる。

牛太郎はどうしたものかと唇を噛んだ。仕方なしに馬から下りて、太郎や玄蕃允、従者たちを先に行かせる。

「弥八さんが参加してくれるのは心強いですけど、でも、相手は一向宗ですよ。弥八さんは一向宗じゃないですか」

弥八郎は口許を引き結びながら目を落とす。

「確かに、正直、心は迷っておりますが、拙者の中には信仰とともに、自分でも反吐が出るほどの野心があります」

両の手を突き出すと、それを見つめながらぎゅうっと拳にした。

「拙者とて天下を相手にできるのではないかと」

「だからといって、いくさに出てこなくたっていいでしょう。まして、一向宗を相手にするいくさに」

「いえ、築田殿」

弥八郎は視線をじいっと上げてきた。

「築田殿は今回のいくさに呼ばれないだろうと言っておりましたが、それでも下知があったのは、鉄砲隊のことではないですか？」

牛太郎は首を傾げる。

「長島を占拠するのが真の目的でしょうが、しかし武田を相手にした場合の想定もし、鉄砲戦法を実戦で試す側面もあるのではないかと拙者は思うのですが」

だから、自分も出たいのだと弥八郎は言う。

そんな訳ないと牛太郎は思った。自分まで駆り出されたのは、蟻の子まで徴兵するという上総介の本気度からだ。

牛太郎ぐらいの端々の将までが駆り出されるとき、それはたいがい上総介が修羅のいくさをするときである。だから、弥八郎は連れていきたくない。今はどうなのか知らないが、かつては一向宗に染まっていたのだ。

でも、何を言っても聞かなそうなので、牛太郎は黙って鞍に手をかけた。栗之介の介助で栗綱に跨る。

「弥八さん。あっしに付いてくる時点で弥八さんは織田軍ですけど、それでいいんですね」

弥八郎は頷いた。

雨がぽつぽつと降ってきた。

天地鳴動（1）

夥しい数が木曽川岸を埋め尽くした。小雨が景色をかすませている中で数えきれない織田永楽銭の黄旗が派手な色彩を放っている。

いつのまに織田軍はこんなにも巨大化したのか。牛太郎は今さらながら気付かされる。

桶狭間ではたった三千しか集められなかったのだ。

昔を思えば夢でも見ているかのようだ。ただし、それはどちらかといえば悪夢。平和時には厳しい規律を課せられる織田軍だが、戦時になれば解き放たれた小魔物のように狂い走る殺戮集団。しかも、この集団、兵卒一人一人に至るまで危機と見ればすぐに逃げ出すようなまったく下衆な心意気の持ち主たちだが、反対に、勝利を確信すればするほど牙は強力になっていくという下衆な集団なのである。

そして、この下衆な悪魔の軍団は、理性と感情の交錯の魔王に統率されている。

「九鬼と滝川が水軍を率いて川を上がってくる。佐久間と権六は西へ攻め立て、本隊は小木江から、奇妙は東から、最後には船団で長島一帯を包囲する。敵は誰一人とて逃がすな。女子供まで容赦するな。長島のすべてを極楽浄土の土くれへ還してやれ。毛髪一本まで我らが目の前に残すな。わかったか」

口調は静けさに淡々としており、瞼の中は光のないただの無機質な黒と白。短気とか悪戯好きとか、そういう上総介はここにはいない。司令官の理性と君主の感情を微妙な具合で昇華させた織田軍の統率者がここにいる。

織田家を勃興させた上総介は、創造性豊かな君主であり、珠玉の作戦家でもあるが、外交や内政で派手な一面がある一方、いくさについては地味だった。いや、陰湿であった。よほどのことでないかぎり舌を巻くような奇策で戦線を打破するという考えは念頭になく、たいがい戦場に馳せ参じているころには勝利における可能性を九割

九分としてきている。

前二回の長島侵攻はこの点がいけなかった。一度目は相手を把握しきれていなかった。一向一揆衆というのはただの土一揆とは違って、本願寺宗家石山御坊から派遣されてきた僧衣をまとう将が指揮を取っており、武器も農具ではない。刀や槍、弓矢から火縄銃までが、全国の本願寺門徒からふんだんに送られてきており、もはや軍隊であった。

しかも、ただの軍隊よりも遥かに強力であるのは、南無阿弥陀仏と唱えれば死んでも極楽浄土が待っているという根幹の教えが本願寺門徒にはあり、ゆえ、端から端に至るまで死を恐れていなかった。

織田軍は上総介から一兵卒まで、長島が強烈な軍隊であることを認識していなかったのがある。このときは総兵数五万で、大軍に間違いなく、いつものように圧倒的物量で押し切るという織田軍の戦い方であったが、善戦どころか川向こうの長島に到達すらできなかった。

二度目は焦りが出てしまったことにある。上総介は一度目の侵攻で長島を取り囲む大河には大量の船舶が必要不可欠と判断していて、次男の三介を大湊へ交渉に当たらせていたが、交渉が一向に進まないままに出陣を決めてしまった。

というのも一度目の侵攻以来、織田軍の対長島に関してはまったくいいところがないままであり、一方で一向一揆衆はさらに北伊勢の豪族を取り込んでいき、膨張は止まらなかった。

それにちょうど浅井朝倉を滅ぼした直後であった。上総介は三介の交渉が間に合うものだと、半ば息子に期待しつつ見切り発車してしまったのだった。

軍議から戻ってきた牛太郎は、陣中の床机に座って、太郎や玄蕃允、新七郎などと長島一帯の見取り図を眺めながら、今までの経緯を太郎から聞いていると、いつからくっ付いてきていたのか、於松が隅のほうにこっそりと座っており、

「三介様は庭の小松なんですよ」

と、にたにた笑っていた。玄蕃允が顔を上げる。
「庭の小松とはどういうことだ、じいさん」
「盆栽ってことですわ」
三本だけの歯を出して得意げでいる。牛太郎は呆れて鼻で笑う。
「うまいこと言っているつもりなのかもしれないけどよ、三介様ってのはまだ十六か十七だろ。子供じゃねえか。子供を船着場の商人たちと交渉させるなんて酷だろ。だいたい、三介様の面倒は誰が見ているんだよ。信忠様には紀伊守殿がくっ付いているだろ。誰が助けてやっているんだ？」
「父上も世話になった掃部助殿ですよ」
「カモン？」
「甲府にご一緒したではありませんか」
「ああ。あの掃部助殿か」
織田家でもっとも弁の立つ男として武田家への媚中外交には大いに重宝されていた一門衆である。ただ、これといって特色するべき点は、口達者以外にはなさそうであった。
「掃部助殿じゃなあ」
牛太郎の失言を誰も咎めないので、そういうことだった。
二度目の失敗により、上総介は三介を見限り、対長島におけるすべての差配を自らが取ることにした。長島に影ながら物的支援を行っている勢力を大小徹底的に調べ上げ、長島への補給路を遮断。さらに大湊の船舶調達に失敗した一因を、大湊の会合衆が長島に肩入れしていることであると政務方の奉行である塙九郎左衛門が察した。
塙は大湊の船主たちが長島の将の要請で、足の弱い門徒衆の女子供たちを「頻繁に」船で運んでいるとし、長島に味方した者は必ず成敗するとの書状を会合衆に突き出した。
実際、福島という親子が、真実なのかどうか長島の協力者であるとされ、上総介の命により処刑された。
恐怖支配によって海路を手に入れた上総介は、滝川彦右衛門、九鬼右馬允、次男三介に二百隻の船舶を与え、これに伊勢湾から木曽

川をさかのぼらせ、長島を水上から封鎖攻撃することとする。
兵糧攻めだった。
上総介は合理主義者だ。いくさの華など知ったことではない。地味であろうと陰湿であろうとただただ勝利のために、九割九分の可能性を作り上げてから戦場にやってくる。
「若殿様の部隊に配された我らはとりあえず木曽川東の兵を駆逐していくことになりましょう。本隊や叔父上たちの部隊に比べれば過酷ではありません」
太郎には沓掛勢に足して、初めて二千の岐阜兵が分け与えられた。上総介の口からそれが発せられたとき、牛太郎は太郎が興奮のあまり馬鹿みたいな突撃を繰り返すのではないかと、息子をまったく信用しなかったが、太郎は普段通り落ち着いていた。
むしろ、疑われたのは牛太郎のほうで、玄蕃允に、
「兵が与えられたからといって調子に乗るのではないぞ、オヤジ殿」
「それはおれがお前に言うことだ」
と、三方ヶ原で共にしていたせいか、互いが互いに猪武者だと決め付けている。
太郎はこの様子だと危ない真似はしないと牛太郎は思った。ただ、荒くれ猪の玄蕃允もいれば、簗田勢が統率を頼む勘九郎の傘下には森勢、つまり勝蔵が付けられたのだった。
牛太郎は何か余計な悶着が起こるのではないかと気が気ではない。勘九郎隊の陣容は、まず上総介の弟たち、三十郎信泡、半左衛門秀成、又三郎長利に上総介の叔父である孫十郎信次、従兄弟の市之介信成、そこに森勝蔵、簗田左衛門太郎、姉川で死んだ坂井久蔵尚恒の弟坂井右近という若武者などなどで、重臣級は池田紀伊守ぐらい。
ほとんどが一門子弟と若者たちで固められた部隊である。実に心細い。
翌日、七月十四日。
織田軍は東西北から一斉に攻めかかった。勘九郎隊の先陣を切る

のは関小十郎右衛門のはずだったが、森勢の鶴丸紋が抜け駆けした。勝蔵率いる森勢は迎え撃つ一揆勢と激突すると、簗田勢が十八番の斜行突撃で傘も被っていないような連中たちを粉砕する。一揆勢はそれでも応戦するが、次々と押し寄せて来る勘九郎隊の兵卒にさんざんに蹴散らされていき、牛太郎はといえば栗綱をのんびりとさせたまま遠目に見てた。

「旦那様っ！　俺らも行きましょうよっ！」

七左衛門が騒いでいるが、牛太郎は打ち鳴らされる押し太鼓の響きを聞くだけ。

「旦那様っ！」

「黙ってろっ！　このすっとこどっこい！　格さんの役目は御隠居のお守りなんだから、黙ってじっとしてろやっ！」

今回、牛太郎はまったくやる気がない。

勘九郎隊は一揆勢を打ち破っていき、小さな集落や砦といった東岸の一揆勢の拠点を焼き払っていき、ついに一揆勢は川向こうの中州へと避難していく。

北方では本隊が小木江城下の村の防備線を突破し、一気に飲み込んだ。そのままの勢いで河川へと足を踏み入れ、北近江から派遣されてきている木下小一郎隊が篠橋という中州の砦に攻め入った。さらにこだみ崎という中州の河口に船をこぎ着け、兵を集結させていた一揆勢に丹羽勢が襲いかかり、一気に撃破。

勘九郎隊も川を渡って中州へと踏み入れ、本隊と合流。上総介はここに陣幕を張り巡らせ、一夜、野営し、水軍の到着に備えた。

＞ｉ３２３１３―２５３３＜

天地鳴動（2）

七月十五日。

一転、雲一つない晴天であった。伊勢湾から立ち昇ってきた太陽が血の匂いが漂う河口をまばゆく照らし出し、地上に残っていた湿り気は一気に蒸発した。

織田水軍は朝日が昇るのとともに河口へとやって来た。牛太郎は川岸から従者ともども、額の上に作った手庇で陽光を遮りながら、その姿が確かになってくるごとに声を失くした。

蒸気の粒が光を反射する眩しいもやの中に浮かび上がったのは、数えきれないほどの黒い影。上流に来れば来るほどその数は多くなっていき、やがては甘露に群がる働き蟻の増殖のように水軍は河口を埋め尽くした。

「す、すげえや」

七左衛門が瞳をときめかせていた。

二百隻のうち、十数隻の安宅船（戦艦）が隊列の中心となって関船（巡洋艦）と小早（駆逐艦）を従えている。

安宅船（あたけぶね）はさながら水上の要塞であった。敵を恐れず暴れ回ることをあたけると言い、安宅船の由来はそれにあやかっている。見てくれは大きな木箱。ただ、木箱で形容するには巨大すぎる。長さは四十から五十メートル、幅は二十メートル余、最大乗員は百人余、三層の矢倉から成っており、最下層は兵糧、武具などがぎっしりと詰められた倉庫、二層目で四十人の水夫が櫓を漕ぎ、三層目に鉄砲隊、弓矢隊がひしめきあっており、さらには北畠三介、神戸三七がそれぞれ乗船しているものには大鉄砲が備えられている。

さながら水上の要塞であった。これを小型化したものが関船で要塞の安宅船よりも速力に優れている。安宅船と関船を囲みながら進んでくるのが小早で、こちらは足軽兵卒たちをすし詰めにしている乗員船である。

「終わったな」
牛太郎は呟いた。上陸するだけの船団ならともかく、水上の要塞で封鎖されてしまうのだから、一向一揆衆になすすべはないだろう。しかも、二百隻というのは、聞くのと見るのとでは感動が違う。一言で言えば恐ろしい。旗指し物が河口を埋め尽くしたさまは、なんだろう、どこまでやっても気が済まない上総介の性格の表れというか、人間の向上の果てしなさとえげつなさというか、とにかく絶句から始まる光景である。
無論、牛太郎は琵琶湖に浮かんでいる安宅船を見たことがある。だが、これは違った。長島にぞくぞくと集結しているのは輸送船団ではなく、水軍なのだった。
川岸に待機する勘九郎隊の兵卒たちが歓声を上げている中、弥八郎が陣笠の下から船団をじっと見つめている。
丸い顔の利兵衛が言う。
「多分、誰もおやかた様にはかなわないのです」
弥八郎は何も答えない。
「旦那様っ！　俺らも船を出しましょうよっ！　船の上なら俺たちだってひけを取らねえですよ。なあっ、治郎」
治郎助は兄を相手にせずに船団の進行を眺める。
銃弾が轟いて、水軍はまず勘九郎隊の対岸の砦を攻めた。安宅船と関船が弾丸や火矢を撃ちかけ、煙をもうもうと立ち昇らせると、小早を漕ぎつけて兵卒が上陸、圧倒的物量になすすべない一揆勢は駆逐され、逃げ切れた者は命からがら長島へと船を出して脱出した。
そして、この二百隻の船団は列になって中州をびっしりと包囲した。
半径一キロメートル弱内の河口に浮かぶ島々に十万人近い門徒衆たちが閉じ込められた。夕刻、織田本隊は渡河して更に進軍し、包囲網の中、前線にほどなく近く、長島を西に望む殿名という島にある伊藤某の屋敷を本陣とした。
燃え盛るかがり火が蒸し暑い夜をいっそう鬱陶しくさせる。将校

の牛太郎には息子の太郎ともども門徒衆を追い払って空き集落となった内の一軒が割り当てられたのだが、牛太郎はあまりの暑さで屋外に出、地面に敷いた御座の上にふんどし一丁で仰向けに寝そべって利兵衛に扇子をあおがせ、治郎助に汗を拭わせているという体たらくであった。

当然、太郎がたしなめにやって来たが、牛太郎は聞かない。

「どうせ、出番はないんだから。兵糧攻めなんだし、気長に待とうぜ」

「そういう問題ではないでしょう。父上はそんな姿を兵卒たちに見られて何とも思わないのですか」

「思わないからこうしているんだろうが。そもそもおれは大将だからって一人だけ家の中にいるのは嫌なんだよ。皆とこうして肩を並べながらのが性に合っているからな」

「では、雨が降ってきても、皆と同じように笠と蓑だけでやり過ごすのですね」

「もちろんだ」

ぷいと背中を向けて、太郎は家屋の中へ消えていった。

牛太郎の周りを車座になって囲む従者たち。栗之介が干し柿をかじりながら言う。

「どうせ、雨が降ってきたら一目散に家の中に入っていくんだろ」

牛太郎は寝そべったまま視線だけを栗之介に向けて鼻で笑った。

「当たり前じゃんか」

「ある意味尊敬しますね。殿のその平然とした虚言は」

「おい、利兵衛。おれが嘘を言っているんじゃない。太郎がおれに嘘を言わせているんだ」

訳のわからない傲慢に従者たちは呆れるしかなかった。

「んなことより、旦那様っ！」

七左衛門がおもむろに立ち上がる。

「いつになったら俺らに槍働きをさせてくれるんですかっ！」

退屈に耐えきれなくて、七左衛門はさすがに険しい顔つきだった。

それでも牛太郎は冷ややかな目であしらう。
「槍働きなんていつになってもないよ。だって、おれは危ない場所にはいかないもん」
「じゃあ、俺も若様の付き人にさせてくださいよっ！」
「そんなの駄目に決まっているだろ。格さん助さんはおれのお守りって昔から決まっているんだから。それが嫌ならクビな。もちろん、堺の船着き場にも出入り禁止だから」
七左衛門はがっくりと肩を落として、すとんと腰を下ろしてしまう。
「なんだよ、それえ。何のために毎日毎日玄蕃様にしごかれてきたんだかわかんねえよお」
「おれを守るためだろうよ」
ちぇっ、と、七左衛門は舌を打って、あとは黙った。弥次右衛門が七左衛門の肩をなだめるように叩くが、七左衛門はその手を払いのけて、
「いくさに出たくねえ弥次さんにそんなことさせられたくねえよ」
と、まずい雰囲気になる。
「まあ、そうかっかすんなよ。先は長いんだからよ」
牛太郎は起き上がり、利兵衛から扇子を奪い取ると、隅で短刀を研いでいる於松に呼びかけた。
「おい、じいさん。明日は早起きでもして魚でも釣ってこい。刺身にしようぜ。なあ。せっかく海が近いことだし」
「そんなことしてっとおやかた様に見つかっちまいますよ、旦那様」
「釣りぐらいいいだろうが。あ、なんか、自分で言っておいてなんだけど、本当に刺身が食いたくなってきたな。鉢巻き、お前ならただの馬丁なんだからこっそり釣りしてこい」
「そんなのじいさんに行かせろよ。おれはいくさ場で釣りなんてしたくねえよ。門徒衆に撃たれたりしたらどうすんだよ」
「どうせ、船に乗っている連中は釣りしてんだろ」
まったく戦場に身が入っていない牛太郎の言葉には誰も反応しな

くなった。
「そうだ。だったら、明日あたり、あのでっかい船に行こうか。見物がてら刺身も頂戴してこよう。おい、利兵衛。あの船の連中におれの知り合いはいそうなのか」
利兵衛は首を傾げる。
「そのようなことを言われても殿のお知り合いが誰なのかわかりません」
「じゃあ、誰が大将なんだ」
九鬼右馬允、滝川彦右衛門、北畠三介の三人が水軍の大将だと利兵衛は答えた。
「じゃあ、掃部助殿もいるだろ。あの人なら知り合いだ。よし、利兵衛、明日はお前の大好きな船に乗せてやるからな」
「別に好きではありませんが」
「いつも言ってんじゃねえか。船にしろ船にしろって」
そう言いながら牛太郎は扇子を押し付け、再び寝そべった。虫の音を聞きながら瞼を閉じ、前線で呑気に熟睡した。

天地鳴動（3）

かつての伊勢国司北畠家に支配的和睦の条件として送り込まれた上総介次男、三介具豊は、北畠家の代々の当主たちが呼ばれてきたように、御本所（ごほんじょ）、と、呼び名では敬われている。

「やあやあ。築田殿ともあろう御方がわざわざ出向かれられなくても、こちらから迎えを寄越しましたのに。さあさあ、せっかくですから御本所にご挨拶でも」

織田掃部助はそう言いながら牛太郎と従者たち、利兵衛と弥八郎を安宅船の中へ通した。

間近に見ると巨大さをさらに実感したものだが、中に足を踏み入れると実にせまぜましい。階層を渡る廊下は人一人通るのがいっぱいで、すれ違うものならどちらかが壁に張り付いてゆずるしかない。階段を上がっていき甲板に出ると、潮の香りがかすかに漂うのとともに、河口の島々と船団の包囲線が一望できた。陽光がさざ波に砕けていて、地上よりも若干だが涼しい。牛太郎は率直に、

「いやあ、いいなあ」

と、こぼした。

戦場を水上の高見から望むというのは華があった。血なまぐさい陸上とは違って、爽快である。利兵衛も弥八郎も同感のようで、この三介安宅船が包囲線の中心的存在に位置しているのだから、戦争の不毛さなどちっともおよおさず、武者の意気だけが高揚としてくる。

「御本所。こちらは築田左衛門尉殿でございます」

掃部助が牛太郎の前に連れ出してきたのは、北畠三介具豊。

「おう。貴様が築田左衛門尉か」

牛太郎たちがあわてて膝をついていたところ、いち早く軽快に右手を掲げてきた青年は、その仕草から自信に満ち溢れていた。伊勢国司の名跡を意識してのことか、源平武者を思わせるような赤糸の

大鎧を身に着けており、烏帽子の下の顔は父親の上総介をそのまま若返らせたような美丈夫であった。

「わしの船を訪ねるとはどういう用向きだ」

声は父親と違って低い。そのぶん、威風堂々としている。頭を下げて平伏する牛太郎は、三介のどこが凡才なのかわからなかった。気難しそうな勘九郎よりも、他の上総介の弟たちよりも、よほど大将風情でしっかりしていると思った。

「はい。実はあっしは安宅船というのを乗ったことがありませんでして。なので、勉強のためにも昔の知り合いでもある掃部助殿にお願いして乗せてもらいました」

「おうおう。珠勝ではないか。お主を愚将などと呼んでいる者もおるが、父上ならず叔母上もお主を頼りにしているという話ではないか。なにしろ、桶狭間の勲功第一だからなあ」

「もう、ずいぶん昔の話になります」

「謙遜するな。どれ、表を上げて、この戦況を見てみろ」

そう言って牛太郎を引き連れてへりに歩み寄った三介は、黒筒の遠眼鏡を取り出し、覗きこんだ。牛太郎は思わず声が出そうになる。世界に十数個もないと言われている遠眼鏡は牛太郎も大枚をはたいて持っていた。日本人で所有しているのは自分と、宣教師から献上されたという話の上総介しかいないのではないかという優越感に浸っていたのだが、牛太郎の場合はさゆりに捨てられてしまっている。

「御本所、それは信長様が持っていたという遠眼鏡ですか」

三介は切れ長の瞼をちらと向けてくると、父親そっくりの笑みをにやっと浮かべた。

「違う。わしのは大湊の商人から買い付けたものだ。ところで、左衛門尉は遠眼鏡を存じているのか」

「はあ。あっしはよく堺に行っているんで、南蛮の船長が持っていたのを見たことがあります。でも、あっしが欲しがったところべらぼうな値段を吹っ掛けられたので、貧乏侍のあっしは泣く泣く断念しました」

と、その船長からべらぼうな値段で購入したくせに、三介の自尊心の前に黙っておいた。

牛太郎の思った通り、この青年とも少年ともつかない次男坊は、愉快そうに瞳を輝かせてきた。

「ほほう。遠眼鏡を欲しがるとは左衛門尉、なかなか博識と見たぞ。どれ、せっかくだから覗いてみろ。覗いたことなどなかろう」

「はい。南蛮人は意地悪なので見せてくれませんでした」

三介は遠眼鏡を牛太郎に渡してきて、ここを覗き込むのだと、上機嫌だった。

牛太郎は筒を右目に当てて、中州の景色を覗き込む。と、言っても、レンズの風景はぼやけている。この時代、まだ精度はよくなかった。

「どうだ、長島の者どもの姿形がありありと見えるであろう」

三介はそう言うが、いくら目を凝らしてもそこまで確認できるはすがない。

「いやあ、そうッスね。ありありと見えますよ。いやあ、本当にいいなあ。さすが、御本所。遠眼鏡に目をつけるとはさすがです。これからは指揮官たる者、遠眼鏡の一つでも持ち歩かなければいけません」

半ば皮肉っているのだが、三介は何の疑念も持たずに気を良くした。戦況を見てみろと言っていたのもどこへやら、三介は船の最下層にある座敷間に牛太郎を招いた。窓の外に川面がゆらめき、そよ風が入ってくる。

「左衛門尉は目の付けどころが良い。やはり、叔母上が頼りにしているだけある。是非とも左衛門尉にこの戦いでの我らの在り方を教えてもらいたいものだ」

「在り方ですか」

「うむ。ただ、ちと腹が減ったな。おい、掃部。膳を用意させい」

「膳、ですか？」

「左様。さっさとせい」

「しかし、御本所。おやかた様は昨日本陣を構えたばかりで、いつ軍議になるかわかりませぬ」
「さっさとせんかあっ！」
牛太郎がびくっとした傍らで、掃部助は無言で頭を下げて座敷間を出ていった。
三介は軍扇を取り出し、顔をあおぎ始める。若者に似つかわしくない金箔の扇だった。
「まったく融通がきかぬ。父上は兵糧攻めだと言っておったのだから、軍議などなかろう。今から気を長く持たなければ息も詰まると思わんか、左衛門尉」
「は、はい」
牛太郎は川面を眺める三介の横顔を伺いながら、やはり、凡才か、と思った。いや、凡才どころか、暴君じゃないのか。まるで、上総介の駄目な部分だけを残したような男である。
まあ、牛太郎の目的は刺身だった。さすがに三介に釣りをしたいなどと言い出せず、次男坊に連れられてしまったので今は諦めるしかないが、三介に気に入られれば安宅船に居座られる。危険で蒸し暑くて口うるさいのが傍にいる陸上よりも、このまま優雅な水上の要塞で寝そべっていようと牛太郎は企んだ。
「それにしてもこの大船団をまとめ上げるのは大変な気苦労でしょうね」
「左様」
軍扇をゆっくりと動かしながら牛太郎を横目にしてくる三介。
「船の上の人間というのは海の危険と隣り合わせゆえ、たいがいならず者だ。そのためにも気を張り詰めるだけではいかん。気長に構えんとな。左衛門尉。陸とは違い、海とはそういうものなのだ」
話せば話すほど、三介のぼろが剥がれおちてくる。この水軍を取りまとめているのは九鬼右間允と、滝川彦右衛門であり、三介はただの飾りであることは牛太郎も存じている。しかも、船乗りの教訓めいたことを言っているのだから、気を抜いてしまえば笑ってしま

えるほどだった。
なのに、三介はどうやら本気らしい。
「織田の今後を占うは水軍よ。左衛門尉、しかと心にしておけ」
ほどなく、膳が運ばれて来た。抱えてきたのは掃部助ではなく、怪しげな気配を目尻にたたえる美少年たちであった。牛太郎は気味が悪くなったが、膳の上は贅沢にも魚の活け造りであった。
「こ、これは、いいんですか、御本所」
三介は少年になぜか酌を受けながら、
「これも水上ならではよ」
げらげらと笑い上げ、猪口の中をがぶりと飲み込んだ。牛太郎はちょっと言葉にならず、三介を呆然と見つめてしまう。
「どうした。食べんか」
「い、いや、御本所、それは酒、ですか」
三介が一瞬目つきを厳しくさせたが、
「なわけあるかい」
と、笑って、再び酌を受ける。
「水だ、水。雰囲気だけを味わっておるのよ。貴様も飲んでみればよかろう。ただの水だから」
牛太郎の隣に付いている少年が徳利を傾けてくる。牛太郎は仕方なく猪口に受け入れ、中身をちびりと飲んでみた。
酒だった。
「どうだ、なかなかの水であろう」
心なしか、三介の目の縁が赤らんできているようにも見える。
「あ、はあ、なかなかの水です。で、でも、あっしは、じ、地元の水しか飲めない体質でして。いわゆる、下戸みたいなもんでして」
ハハ、と、苦笑しながら猪口を膳の上に戻す牛太郎。箸を取り、刺身をつまんで、うまい、と大袈裟な舌鼓を打つ。
こいつはとんでもない息子だ。牛太郎は関わらなければ良かったと悔やみ始める。上総介が軍規を重視していることを三介が知らないはずがない。さらにはごまかし方といい、ふてぶてしい強要の方

法といい、大人顔負けの狡猾さである。
「下戸みたいなものなら仕方ないの。まあ、遠慮するな、左衛門尉」
やがて三介は、牛太郎のこれまでのいくさ遍歴を聞きたいと言い出した。九歳のときに北畠家に出されたので、尾張美濃勢のこれまでの活躍を詳しいところまでは知っていないとのことだった。
牛太郎はもっとも激闘であった金ヶ崎の退き口や姉川の戦いの話をした。しかし、途中から三介の手が少年の内もも辺りをまさぐり始め、男色が大嫌いな牛太郎は早々に話を打ち切ろうとした。
そのとき、掃部助が押し掛けてきた。
「御本所っ。本陣からの伝令で軍議を開くとのお達しですぞっ」
「なにい？」
三介の姿勢はすでにだらしない。
「掃部。代わりに行っておけ」
「いやっ、しかし、大将の御本所がお出でにならなければおやかた様が――」
「船に酔ってしまって寝込んでいるとでも言っておけっ！　そもそも、わしは昨日からの航海で本当に酔ってしまったのだ！」
そう言って、三介は少年の膝の中に頭をかたむけてしまう。
「うう。気持ち悪いのう。船酔いじゃあ」
「じゃ、じゃあ、あっしも出なくちゃならないんで」
牛太郎は立ち上がろうとしたが、
「左衛門尉っ！　貴様は息子の左衛門太郎がおるから構わんではないかっ！　一度乗った船から下りるとは男がすたるぞっ！」
酔っ払いの哲学にどうにもならなくて、牛太郎は掃部助に視線で助けを求めたが掃部助はうつむいて小さくかぶりを振ると、戸を閉めてしまった。
牛太郎と三介が出向かなかったこの軍議で、長島を取り囲んでいる島々や川岸の五か所の砦のうち、大鳥居と篠橋への攻撃が言い渡され、三介の安宅船も駆り出されることとなる。
牛太郎は船から下りようとしたが、三介に許しを得られず、意に

反して出陣とあいなった。

天地鳴動（4）

一向一揆衆が逃げ込んだ五つの城砦のうち、大鳥居は西岸にあり、篠橋は包囲線の外の中州にあった。上総介は一向一揆衆の一人たりとも討ち取りこぼさない構えであり、大鳥居には佐久間柴田隊を当たらせ、篠崎には本隊から弟たち一門衆、丹羽五郎左衛門が後方に陣を取り、水上から三十郎信包を百隻の船団とともに上陸させた。

陸上での攻防を尻目に三介の安宅船は悠々と岸に漕ぎつけた。兵卒が抱え構える大鉄砲から火を吹いて発せられた鉛玉はほとんどが外れたが、もちろん命中したものは砦の櫓や塀を破壊した。

大鳥居砦の阿鼻叫喚が、安宅船の甲板からは目と鼻の先である。人影があろうものなら、下層の鉄砲狭間から火縄銃が立て続けに掃射される。内部に侵入してくる佐久間柴田隊の兵卒たちを一揆勢はなんとか退かせながらも、安宅船にへばりつかれている以上、亀のように丸くなるしかなかった。

三介は自軍の圧倒的優勢を高見にして大笑いしている。まるで海賊だった。

「御次男が愉快にならられるのも無理はありませんな」

海賊から離れたところ、弥八郎が篠橋の方角から幾筋も立ち昇っている煙を眺めながら牛太郎に言う。

「ここまでされては手も足も出ますまい。ただ、あまり得られるものはなかったかもしれませぬ」

弥八郎は戦場から逸らすようにして視線を伏せる。利兵衛がどういうことかと訊ねる。

「武田とやるには、ということです」

「それは初めからわかっていたことではないでしょうか。船と騎馬ではいくさの仕方もまったく違うはずです」

「お前は黙ってろ。来る前は青ざめていたくせに、もうお喋りか」

「私はお訊ねしているのです。殿だってそう思いませんか。初めか

らわかっていたことではありませんか」
「お前は本当に何もわからないくせにべらべらべら」
見ろ、と、牛太郎は皮手袋の指先をずらりと並んでいる船団に向けた。
「これは合戦じゃない。討伐だ。いくらおれでも船の上でこんなにゆっくりしていられる合戦なんてのはないんだからな」
利兵衛が弥八郎に視線を向けると、彼もうなずいた。
牛太郎たちが船上で戦況を眺めている間も討伐戦は続く。上総介の執念はなみなみならなく、水陸の波状攻撃に耐えかねた大鳥居と篠橋の一揆勢は降伏明け渡しを申し出てきたが、上総介の答えは「日干しにする」であった。
二週間、攻撃もなく、ただただ包囲した。たまに飛び出てくる一揆兵を斬り捨て、あるいは銃殺し、また、河口は静けさを取り戻す。牛太郎は安宅船から下りたくて仕方なかったが、大鳥居の岸に張り付いてしまっているため、出るに出られなかった。
下層の座敷間でこっそりと酒色にだらけている三介の相手を時折して、退屈しのぎに弥八郎や利兵衛を連れて安宅船の隅々を歩き回り、それでも最後にはすることがなくなってしまって、腕立て伏せや腹筋運動をして体を鍛えたり、利兵衛や弥八郎、水夫たちと相撲を取ったり、今まで鍛錬など考えられなかった牛太郎がしているほど水上は退屈だった。
この退屈を打ち破ったのは八月二日の夜の嵐であった。河口の水かさは増して、船体は風と波に揺れていた。三介や掃部助などは甲板の上に建てられている天守にいたが、牛太郎たちは与えられている下層の居室に引っ込んで利兵衛と腕相撲をしていた。
なにやら、室外が騒がしい。
「何事だろうか」
瞑想をしていた弥八郎がふと腰を上げ、戸を開ける。その前を鉄砲兵卒たちがあわただしく駆けていく。弥八郎はその中の一人を捕まえ、事情を訊ねた。

「大鳥居の一揆勢が雨に紛れて逃げ出しているんだ！」

ほどなく、銃声が立て続けに鳴り響き、轟音が船内の空気をびりびりと破った。硝煙の香りがまたたくまに広がる。素っ裸でいた牛太郎は利兵衛の手を借りながらあわてて具足を身に着けていき、もう、今まで退屈すぎたものだから、いくさに参加するというよりも、野次馬根性で甲板に駆け上がっていった。

甲板に出ると、海から吹きつけてくる強風がさらに実感され、立っているのがやっとである。ただ、人馬の喚声、断末魔の叫びがところどころから起こっていた。

「何も見えません！」

利兵衛がしかめた顔でへりにしがみつき、戦況を探ろうとしている。

下層の鉄砲狭間から再び弾丸が掃射された。どうやら三介が自ら号令しているらしいが、砦に向けて滅多やたらに発砲させているだけである。

「弥八さん！」

牛太郎は帆立てに捕まりながら叫んだ。

「鉄砲、撃てているじゃないッスか！」

「それはもちろん！　船内で点火しているのですから！」

なるほど。二週間も居座っているのに今更だった。

風雨の中の怒号は激しさを増していく。斬りつけられたのか、激流に飲み込まれてしまったのか、船体のともし火の前を数々の死体が河川の渦にぐるぐると回されながら、牛太郎の前を通り過ぎていって、湾へと流されていく。衣服を見るだけだと女もいたし、大きさから子供もいた。何を考えてか、安宅船の鉄砲隊はそれらの死体に銃弾を浴びせる。

牛太郎は顎の先から滴りおちる雨滴を拭った。一揆勢はどこへ逃げようとしていたのだろう。

この晩、大鳥居砦は陥落した。ただの砦に逃げ延びてきた近在の門徒衆たちは、もはや、飢えに耐えられなくなって脱出を計ったら

しいが、佐久間柴田隊がこれを見逃さず、およそ千人の老若男女をなで斬りにした。

台風一過の翌朝、牛太郎は砦を占拠したどさくさで安宅船を脱出し、兵卒たちとともに小早に乗って殿名へと戻った。

二週間もはぐれており、牛太郎は太郎の叱責を恐れたが、行動を共にしていた利兵衛と弥八郎がかばってくれるだろうとして、そそくさと帰陣してきた。

簗田勢二千は大鳥居でも篠橋でも出番がなかったらしく、どうやら本陣の守備固めのようである。隅々まで晴れ渡った好天の下、牛太郎が船上でそうしていたようにおのおの体を動かしており、その中をかいくぐっていくと、やがて、栗綱の輝く馬体が見受けられた。

玄蕃允が七左衛門や治郎助、弥次右衛門の相手をしており、新七郎もいる。

「あ、旦那様」

七左衛門がぽつんと呟いた。牛太郎はあえてちゃらんぽらんに手を掲げて一同の前へ歩み寄っていく、

「よおよお、励んでいるかい」

しかし、恨むような視線が向けられてきた。玄蕃允や七左衛門、栗之介だけならず、治郎助や新七郎までも。弥次右衛門だけはさすがになかったが、それでも彼もどこか虚ろげな目だった。

「なんだよ」

牛太郎は明らかに冷めた気配にたじろいだ。利兵衛も弥八郎も同感だったらしい。牛太郎と同じく、視線の冷たさに棒立ちとなった。

「どこに行っていたんだ、オヤジ殿」

と、玄蕃允が視線を外しながら呆れるような声だった。

「ど、どこって、その――」

「御本所三介様の船に乗っていたのです」

利兵衛が代わりに言った。

「三介様が殿をお返しにさせてくれず、それで昨夜、大鳥居を占拠できたのでようやく逃げ出してこられたというわけなのです」

「左様か」
玄蕃允の答えはそれだけだった。この生意気な若者にしてみれば鈍すぎる反応だった。
「さあ、治郎。続きだ。打って参れ」
と、棒きれを構え、牛太郎など視界に無いような淡泊さであった。
「た、太郎は」
「家の中だ」
と、栗之介が顎でしゃくった。
とてつもない疎外感である。牛太郎は連中がかもし出す、切れるような冷たさに思わず深呼吸してしまう。今までさんざん勝手気ままにやってきたこの男も、とうとう見放されてしまったかと恐れを抱いた。
太郎まで相手にしてくれなかったら、おれは――。
牛太郎は利兵衛と弥八郎を外で待たせ、家屋の中へ足を踏み入れた。
居土間には格子窓から光が筋になってこもれていた。その先に甲冑姿の太郎が背中を向けて座っている。
「太郎」
牛太郎が呼びかけると、太郎は横顔だけをちらと寄越してきて、牛太郎を確かめてくる。
「い、いやあ、船の見学にいったらさ、三介様に捕まっちゃって、今まで帰ってこれなかったよ。ごめんごめん」
「左様ですか」
太郎はそのまま顔を戻してしまう。
親子の間に、鍛錬している武者たちの声がただただ流れた。
「お、おいっ！　な、なんなんだよ、それはっ！　お、おれは別にこんなに長い間、いなくなるつもりはなかったんだ！　あのドラ息子に捕まっちゃったからこうなったんだ。なのに、なんなんだ、皆しておれのことを汚い物でも見るような目をしてよ！」
「何を言っているのですか、父上」

太郎はくすくすと笑った。笑いながら頭を垂らし、やがて笑いもやめて、鼻を啜りあげた。

「誰も父上をそのような目で見ておりませぬよ。むしろ、無事に帰ってきて何よりです」

「お、おい……」

様子がおかしかった。牛太郎は草履のまま上がり込み、そろそろと太郎の背中に歩み寄る。

「父上。一昨日の朝、岐阜の母上から文が届きました」

急な言葉に牛太郎は足を止めた。太郎は背中を向けたまま、文を後方に差し出してくる。

「駒が死にました」

天地鳴動（5）

八月十二日。

篠橋砦に籠る一揆勢から門徒衆の命と引き換えに、砦を開け渡す降伏申し出があった。上総介はこれを許し、篠橋砦の門徒衆たちは長島城へと大挙して移動した。

牛太郎は栗綱に跨り、栗之介と二人で殿名の岸辺まで出向いて、一向一揆衆の移動を遠目に眺めた。

西空に傾く赤い太陽の下、小舟で運ばれていく者もあれば、体を川に浸からせている者、皆が列になって織田水軍の包囲線の中を進んでいく。

「残酷だな」

馬上の牛太郎は呟く。これも夕凪なのだろうか。川面は鏡のように静かで、風は無かった。

「長島で待っているのは極楽浄土じゃない。飢え死にだ」

栗之介が牛太郎を見上げる。牛太郎は手綱を振るって、宿営地へと戻る。

この兵糧攻めは方策ではなく、上総介の憎悪なのかもしれない。水上からの大船団の援護を借りて、陸兵七万を投入すれば、残っている三つの城砦は落とせるだろう。

それをやらないのは、死後の世界に極楽浄土が待っていると信仰する門徒衆たちに、耐えがたい現世の苦しみを与えるのを目的にしたからかもしれない。

宿営地に戻ってくると、家屋に入り、太郎と与力格の二人、玄蕃允や新七郎とともに夕げを取った。

「篠橋には門徒衆がずいぶんといたみたいだな」

牛太郎が言うと、玄蕃允が顔を上げる。

「見に行っていたのか」

「ああ。何とも言えない光景だった」

「旦那様」
新七郎が厳しい目を向けてくる。
「いくさ場では一人ではあまりほっつき歩かないでくだされ。旦那様の身に何かあったら我らは岐阜に戻れませんぞ」
「そ、そうだな。ごめん」
牛太郎がちょこんと頭を下げると、湯漬けをかきこんでいた太郎がふと箸を止めて、そのまま静かに微笑んだ。
長島の完全封鎖はさらに続いた。一カ月以上も張りつけられている牛太郎は、諸国の情勢に不安になってきて東海方面に於松を飛ばして、徳川武田両勢力の探りを入れさせたり、本陣にちょこちょこと顔を出して、奉行衆に寄せられている情報を長谷川藤五郎や堀久太郎から聞き出したりした。
荒木信濃守が伊丹城を攻め落としたらしい。
越前では藤吉郎の与力となっている樋口三郎左衛門が突然、一向一揆衆に砦を渡し、妻を連れて出奔するという信じがたい事態が起きたそうで、藤吉郎はすぐさま追手を差し向け、樋口夫婦を処断、その首は検分のため殿名の上総介の下に送り届けられたという。
「あの人がどうして」
牛太郎は三郎左衛門を知っている。聡明な男で、まさかそのような暴挙に出るとは思えなかった。
「さあ」
藤五郎は首を傾げる。
「サルとうまくいかなかったとか、過去の主人の堀殿に恨まれていたという噂もありますが、真相は本人にしかわかりませんでしょう。なにせ、人の考えることなんて実際には誰にもわからないことでしょうよ」
「そうだな……」
牛太郎は本陣の伊藤屋敷をあとにした。
自身の宿営地に戻って来ると、連中が相撲を取っていた。いつもの鍛錬のうちなのだろうが、遠目に眺めていると玄蕃允の独壇場だ

った。大将の太郎ですら容赦なく投げ飛ばしてしまう。

「殿」

利兵衛だけ参加していない。弥八郎も取り合っているというのに。

「羽柴殿から文が届いていますよ」

牛太郎は眉をしかめながら受け取ると、裏を返した。藤吉郎秀吉とある。同じ戦場にいる小一郎がなにゆえ文などをと思ったら藤吉郎だったので、さらに眉間に皺を刻んだ。

十年以上の付き合いの中で、藤吉郎から文を頂戴したことなど一度もない。また借財の申し出かと思って開いてみたが、牛太郎は三行目で読むのをやめ、折り畳んで利兵衛に返した。

「全部読んでないじゃありませんか」

「いいんだ」

牛太郎は手袋で瞼を拭いながら家屋の中へまっしぐらに歩いていく。

「どうすればいいのですか、これは」

利兵衛が鬱陶しく付きまとってくるが、

「取っておけ。いくさが終わったら読む」

牛太郎は後ろ手に戸を閉めた。唇を引き結び、頭を垂らして立ちつくす。

おそらく寧々が藤吉郎に報せたのだろう。あの夫婦は昔からの馴染みだから。

藤吉郎らしからぬ心配りは胸に染み入るが、いくさの間だけは忘却していたい。ただ、短いながらも感謝の言葉だけは書きしたため、北近江の藤吉郎に送った。

終局は九月二十九日にやって来た。

津島に大軍を集結させてから二カ月以上を経ている。この間、織田軍には美濃尾張の米櫃から兵糧が絶え間なく送られてきているのに対して、長島は空っぽであった。当然、秋の収穫どころでもなく、十万人近くが過密している長島城、他二つの砦の中は言葉を失う惨状であるという物見の報告があった。

大半は餓死している。蠅が飛びまわり、腐臭が支配し、生き残っている者も、もはや、干からびてしまって南無阿弥陀仏の声も出ない。

「生き残っていることすら地獄じゃないか。さっさと降伏すればいいのに」

牛太郎が嘆くと、それを聞いていた弥八郎が答えた。

「本願寺宗家が織田との和睦交渉に入ってくれることを長島は待っているのではないでしょうか」

長島は願証寺が建立されて以来の教国であり、支配者は己の利益しか考えていない独裁者ではなく、自分たちの信仰であった。一向門徒にとってみれば長島は慎ましいながらも楽園だったのである。

だから、意地でも明け渡したくはない。彼らはここでしか生きられなく、ここでしか存在を確認できない。

戦うこともままならない彼らの一縷の望みは、和睦しかなかった。実際、石山本願寺と織田軍は朝廷を介して一度は停戦した経緯がある。上京の焼き討ちのときも帝のとりなしにより、足利義昭と和解した。

ところが、こと長島に至っては二カ月間、何も進展はなかった。

一向門徒は命の無駄遣いをやめ、長島を捨てることを決意し、本陣の伊藤屋敷に使者を遣わし、降伏開城を願い出た。

上総介がこれを許したという報せとともに、簗田勢に対して長島が望める岸辺に進軍する下知が渡された。

牛太郎と太郎が二千の兵を連れて岸辺までやって来ると、天高く突き抜けた秋空の下にはすでに織田永楽銭の旗指し物でびっしりと埋め尽くされていた。

「まさか、ただの見物じゃないよな、これは」

牛太郎が言うと、隣で黒連雀に跨る太郎はただ唇を噛み締め、旗指し物の向こうに垣間見える長島城を睨み据える。

「やる気なんじゃないのか、信長様は」

「仕方あるまい」

玄蕃允はあっさりと言った。
そうしていると、牛太郎の下に本隊からの使い番がやって来て、牛太郎だけを上総介が直々に呼んでいるという。牛太郎は思わず太郎に顔を向けてしまう。
「行かなくてはなりませんでしょう」
宿屋兄弟が声を上げて兵卒たちをかきわけていき、弥八郎、利兵衛を後ろに従えて、栗之介と栗綱とともに波打ち際まで出てきた牛太郎は、川の浅瀬を小走りに、使い番のあとを追っていく。
対岸の長島城は目と鼻の先で、中州と中州の間もわりかし広くはなかった。水かさもおそらく腰まで浸かるぐらいであろう。対岸にはすでに無数の小舟が漕ぎつけられており、門徒衆も長島城からぞくぞくと出てきていた。
牛太郎はそちらにあまり目を向けないことにする。
ひしめき合う織田軍の前をひたすら横切っていくと、やがて、目を疑う光景が入ってきた。
鉄砲隊が前線にびっしりと張り付いて、皆、対岸に体を向けて片膝を付いている。しかも、前後に三列で並んでいる。
整列する鉄砲隊のほぼ真ん中に上総介はいた。黒鹿毛の馬に跨り、腰には金鞘の太刀がまばゆく輝いている。ビロードのマントをそよ風に揺らしながら、南蛮兜の下の目を牛太郎にぎらりと向けてくる。
「遅えじゃねえか」
「も、申し訳ありません」
牛太郎はあわてて下馬しようとしたが、
「構うな」
と、上総介に言われた。
気付けば上総介の両隣を、赤母衣、黒母衣をそれぞれ背負った馬上の前田又左衛門、佐々内蔵助が固めている。
戦慄した。やる気だ、と。
案の定、上総介は口端に笑みを浮かべながら牛太郎に言う。
「お前が言っていた三段撃ち、見てみようじゃねえか」

又左衛門は悲痛な面持ちで牛太郎を見てきたが、内蔵助はむすっとしたまま対岸を見つめているだけだった。

「又左、内蔵助。相手は動く人形で、襲いかかる騎馬じゃねえが、しっかと射程を見極め、射撃の間隙、威力を確認し、長篠で下手を打たねえよう、ここで心おきなく撃ちまくれ」

「はっ」

と、二人の親衛隊筆頭は従順だった。

川面を撫でていくような優しい秋風が吹いている。栗綱が風につられたのか、ちょっとだけ首を左右に振った。栗之介が栗綱の首筋を撫でる。

対岸に向けられている銃口は二千丁。一列目だけでも単純に七百弱の弾丸が一斉に放たれる。

門徒衆たちを乗せた小舟が次々に離岸していく。どうやら、老人や女子供、病人などを先に脱出させる気らしいが、奴らはこちらで何をしようとしているか気付いていないのか。

内蔵助が鞭を空に突き上げる。すると、鉄砲隊の端々から一列目点火の号令が飛び交い、金ヶ崎のときとは違って二千の鉄砲隊は組単位で構成されていた。

煙がいっせいに立ち込める。

「構えいっ！」

組頭たちの声がこだまするると、七百弱の銃身が寸分狂うこともなく一斉に前方に下ろされた。

「まだだ、内蔵助」

又左衛門の言葉に、

「わかっておるわ」

鞭を上げたままの内蔵助。

上総介がゆっくりと流れていく門徒衆たちを無言で見つめている。牛太郎も目を背けることができず、そうするしかなかった。

水鳥がゆうゆうと浮かび泳いでいる。

内蔵助が鞭を振り下ろした。それを確認した組頭たちが号令した。

「撃ていっ！」
七百の弾丸が銃身から開放された。轟音が天地を引き裂かんばかりに響き渡り、乗船していた多数の門徒衆たちが血しぶきとともに一瞬のうちに消えた。
さらに二段目が生き残って逃げようとしていた者たちを殺した。
三段目が対岸の者たちに襲いかかった。
轟音に驚いて馬どもが荒れ狂う中、上総介は自身の馬を御しながら、
「なるほどな！」
と、高らかに声を上げた。
さすがの栗綱もそわそわしてしまっていた。牛太郎は目を落としながら、彼の首すじを撫でてやるだけ。
鉄砲隊の掃射による虐殺は続いた。門徒衆たちはどうすることもできず、中でも七百人近くが裸のままで抜き身の太刀を手に取り、鉄砲隊の範囲外である織田一門衆の部隊へ突っ込んでいき、包囲線の突破を狙ってきた。
決死隊の突撃に足元をすくわれ、三郎五郎信広、半左衛門秀成、孫十郎信次、市之介信成の多くの一門衆が討死。千人以上の死者を出し、決死隊はそのまま包囲線を抜けて逃走した。
これにより超利己主義者の憎悪は頂点に達した。死体の山となった長島を占拠したのも束の間、残る二つの砦の周りに柵を何重にも打ち立てて完全に閉め切り、兵糧攻めなど最初からなかったかのように、砦内に火矢と火薬を投下。あぶり出しにされた者は弓矢と火縄銃で掃射するなど、暴虐の限りを尽くして、二万人近くの門徒衆たちを焼き殺した。
長島から一向宗の息吹は消えた。
血と屍に覆われた岸辺を眺めながら、弥八郎が言う。
「生きるのはひどく難しいことだというのに、殺すというのはこれほどまでに容易なのですか」
七左衛門も口数が少なくなっている。利兵衛も虚ろげな眼差し。

治郎助は空を仰いでいて、弥次右衛門は肩を落としていた。
二カ月間のうちで、いくさといういくさは一度もしていない。それなのに皆が皆、ひどくくたびれてしまった。
「一体なんだったんだろ」
そう呟いた牛太郎は、栗綱の馬上から、空に昇っていく一筋の煙をしばらく眺めていた。

それぞれの夕日～願福寺にて

目元のあたりにはまだ小童らしいあどけなさを残しているのに、利兵衛の舌鋒の鋭さというか、しつこさは、弥八郎でさえ辟易とさせるものだった。

「そもそも念仏というのは阿弥陀如来に帰依することを忘れないように唱えるのであって、南無阿弥陀仏と唱えれば浄土に行けるなどという説法は本来の教義から外れているそうではありませんか」

利兵衛が誰から聞いてきたのかは不明だが、こうした文句は一向宗が頭角を現した時期から、その敵対勢力が常に糾弾してきたことである。

「つまり、一向宗は門徒を増やすために、無知で何もよくわからない賤民たちを虜にしたのです。長島で殺されていった女子供に罪はありませんが、おやかた様の行いは人々に責められるどころか、欺瞞の世を作り出そうとしていた一向宗に振り下ろした鉄槌なのです」

近頃、織田家中の、教養人まがいの若者たちの中では、長島における虐殺の是非がかまびすしく論争されている。もっとも、織田上総介の独裁体制下での論争なので、強硬派が圧倒的大部分を占めており、なかでも利兵衛のように先進的に毒されてしまっている者は、聞いてもいないのにいちいち織田軍の正義を領内の人々に喧伝している始末であった。

ただし、利兵衛は他の思想家たちと違い、自らが仕える家の簗田家の人々に対しては、こうした類いの話をまったくしていない様子であった。

主人の牛太郎に咎められるためである。多分、牛太郎は宗教思想には寛容なのだが、その強要は忌み嫌っている。利兵衛もそれを承知しているのだ。

ゆえん、利兵衛は弥八郎に思いのたけをぶつけてくる。

「本多殿も一向宗などにはさっさと見切りをつけるべきです」

「いやいや、利兵衛殿」
弥八郎は笑うしかない。
「見切りをつけていなければ、この寺で寝食することはできませぬから」
願福寺は天台宗派である。
利兵衛は、弥八郎をじっと見つめたまま押し黙った。どこかふてぶてしい。
彼はなかなか尊大な少年で、過ちを認めないところがある。牛太郎の小姓をしていたときはあまり感じられなかったが、元服してからは男として背伸びをしているのだろうか。
「左様でした」
と、それだけ言うと、うすべらな唇をつまらなそうにへの字にしたまま腰を上げ、弥八郎の前を去っていった。
あの生意気さ加減は天性のものなのだろう。奉行役にでもなったらいやらしい仕事をしそうだ。
「生意気か」
すると、弥八郎の眼差しは憂いに帯びた。
千穂は幾つになったか。
大久保新十郎に預けている実子も、利兵衛のように生意気な盛りなのだろうか。それとも、自分自身が貧しさのあまりに肩身を狭くしていた少年時代のように、千穂も同じような苦渋にさいなまれているのではないのか。
反逆者の子である。当然、辛酸を舐めているに違いない。
弥八郎がついた溜め息は後悔だけに満たされていた。すでに十歳になる息子の千穂には、一度も会っていない。
南無阿弥陀仏と唱えることだけが、耐え難い事実から目を離せる唯一の手段であった。しかし、弥八郎が口にしていたのは念仏ではなく、どちらかといえば、不遇を忘れさせる呪文だったのかもしれない。
三河を追放されたあともなお、各地の一向一揆に参加していた理

由は、とどのつまり、後にも先にも引き返せなくなってしまったからだ。

帰れるはずがない。たとえ、三河守が許してくれたとしても、また、あの屈辱が待っているのだ。

「物乞いなどをして、恥ずかしいと思わんのか。言っておくが、お主がわしと同じ名を名乗っているのがわしには腹立たしいわ」

十も年下の平八郎忠勝にそう言われたのは、大久保新十郎の家で味噌を分け与えてもらった帰りの夕べであった。

十五歳にして宗家の跡を継いでいた平八郎であったが、すでに桶狭間のいくさでは初陣も果たしており、目元には自信と勇ましさがみなぎっていた。

「弥八、お主は一族の恥よ」

弥八郎は頭を凡庸に下げると、仁王立ちする平八郎の脇をのそのそとかいくぐって、味噌壺を抱えながら家路を辿った。

宗家の小僧に俺の何がわかる。俺だって好きで物乞いをしているわけじゃない。生まれたときから貧しかったのだ。生まれたときから宗家の息子ではなかったのだ。

そんな不条理に挑戦状を叩きつけたのが、弥八郎にとっての一向一揆であった。三河の本願寺派本證寺が檄文を発すると、元々から一向宗であった本多一族にあって、宗家の平八郎は浄土宗に改宗して主君三河守側に残ることを決めるが、弥八郎はここぞとばかりに、同じく分家の一族の者たちを焚きつけ、平八郎以外のほとんどを一向一揆側にさせた。

しかし、弥八郎の孤独な復讐心もむなしく、元来が素朴な三河武者たちは主君に刃を向けていることに苦悩を始め、やがて彼らは次々に三河守の下に戻っていき、一揆は勢力を失っていった。

あのときのことを、平八郎は根にもっているに違いない。本多一族を束ねられなかった当時を省みて、在りし日のような傲岸な態度は取っていないという風の便りだが。

大久保新十郎からは何度も帰参するよう説得されている。だが、

あたかも一向宗の教えに邁進しているかのような素振りで何年も居続けていたら、世間にも自分にもいつしか引っ込みがつかなくなってしまった。

近頃は一向門徒を名乗ることはもうやめているが。

織田軍が長島で働いた所業を目の当たりにして、弥八郎は率直に恐怖した。もしも、松永弾正に出会っていなければ、もしも、簗田牛太郎の客将になっていなければ、弥八郎は長島の一向一揆にも、変な意地だけで加勢していたかもしれない。

日干しにされた長島城内では、門徒同士で殺し合い、人肉を食らう者まで現れていたという噂さえある。あってもおかしくないと弥八郎は思う。たとえ南無阿弥陀仏と唱えて、救いを浄土に求めたとしても、現実には死と隣り合わせであるし、空腹は耐えがたいのであるし、人間集団とはただでさえ我慢を忍ばせて成り立っているのだから、極限の世界に追いやられては人格も破綻していくであろう。

血に染まった大河を眺めていたとき、弥八郎はあちら側ではなくて良かったとひそかに思った。そして、それほどまでに自分の信念というものが脆弱であることに感じ入らざるを得なかった。

そもそも、信念などあったのだろうか。

などなど、陰鬱な時間を過ごしていたら、住職が部屋にやって来て、来客とのことだった。

牛太郎や利兵衛だったら生活部屋に有無もなく押しかけてくるので、客は誰か、と不思議になったら、住職が言うに牛太郎の息子の左衛門太郎であった。

縁側に出てみると、太郎はにこりと笑いかけてきた。

「年も暮れますね」

誰も付けずに一人で来たらしく、小坊主が用意した粗茶をすると、枯れた境内の木々を眺めながら、ハア、と、どこか子供っぽい溜め息をもらした。

「いつものことですが、今年もいろいろありました」

そう言う太郎の脇に弥八郎は腰掛ける。

光に潤む簗田青年の眼差しは、何をしに来たのかが不明な穏やかさだった。もしかしたら、彼は誰にも言えない哀しみを、織田家臣でも簗田家の奉公人でもない弥八郎に聞かせに来たのかもしれない。

弥八郎は神妙に目を伏せた。

「姫君のことは残念でありましたが」

「姫君だなんて。一介の男の娘にすぎません」

太郎は笑いながら湯呑みを口に運ぶ。

弥八郎は彼の横顔をまじまじと眺める。もう少し性格の角張った生真面目な青年だったような気もするが、娘の死以来、何かを悟ったのか、どこか人なつっこい笑みである。

「本多殿」

「はい」

「妻子を岐阜に呼んだらどうです」

一瞬、弥八郎は太郎の言葉に呆気に取られたが、まるで菩薩像のような澄み上がった切れ長の瞼に見つめられて、思わず視線を逸らしてしまう。

「い、いえ、突然、そうおっしゃられても」

「父上も、本多殿であれば喜ぶはずです」

簗田家に仕えてみてはどうかということなのだろう。

「父上は三河殿と仲をよろしくさせてもらっているみたいですし、なんら、問題はありませんでしょう」

「ありがたいことではありますが」

弥八郎はぽつんと視線を落とすだけ。

「今はまだ整理がつきませぬので」

何の整理かは自分でもよくわからない。十年近くも流浪に身を任せていると、居場所を定めることに尻込みしてしまっている。

だが、世の中の人々とはよくわからないもので、こういう卑屈者を当然軽蔑する人もいれば、逆に、たなごころでそっと包んでくれるような心温かい人もいる。

残念ながら、卑屈者は、自分を含めた誰に対してでも素直になれ

ないので、たなごころを鬱陶しく感ずるか、痛切な思いに苛まれるか、良くて遠慮するかしかできない。逆に軽蔑されているほうが快く感じられのが卑屈者なのである。

もっとも、そんなものは、偽りの快感でしかないのだが。

「整理ですか」

そう呟きながら、簗田青年は、稲葉山の向こうに輝く西日に、ぼんやりと目を向けた。喜びとも悲しみともつかない、はかとない笑みを口許にたたえ、まばゆさに瞼を細める中のその瞳は、夕差しの光によって茶色に溶けていた。

「でも、毎日、整理ばかりをする必要はないでしょう。むしろ、寺で巣ごもりばかりだと体に毒ですよ」

太郎はそう言うと腰を上げ、

「たまには我が屋敷で夕飯でもどうですか。もっとも、簗田家は主人や客人の垣根がないので、本多殿の性には合わないかもしれませんが」

弥八郎はうつむいた。

「御免つかまつりました。お忙しいですものね」

「いえ。拙者は流浪人ゆえ、忙しいことなどありませぬ」

ぼそぼそと口に出した言葉が、弥八郎流の精一杯の謝辞であった。

太郎は微笑んだ。

「じゃあ、早速行きましょう。客人が来ると、母上がたいそう喜びます。ただ、一つだけご注意ください。たまに父上が母上に折檻されますので」

「いや、それだけは適いませぬ。奥方の恐ろしさは簗田殿に伺っておりますゆえ」

弥八郎の冗談に、太郎はうんうんとうなずいた。

それぞれの夕日～伊丹城にて

摂津の小覇王。

自城の勝竜寺城に戻る道すがら、細川兵部大輔はそんな文句をふと浮かべた。

荒木信濃守村重のことである。

茨木城の転覆から始まった反乱劇は留まることを知らず、高槻勢を組み従え、かつての主君池田九右衛門をその圧力でもって池田から放逐し、残る有力豪族であった伊丹勢を滅ぼし、今や二十万石以上を領するまでになった。

坂本の十兵衛、長浜の羽柴藤吉郎に匹敵、いや、自前の動員兵力はおそらく一万を越えており、もはや大名である。

もちろん、それらの事実は勝竜寺城からの監視でも把握しており、信濃守の膨張を苦々しくは思いながらも、後々を濁すことになるような深刻な問題とは捉えていなかった。

確固たる疑いを持つようになったのは、信濃守の新たな拠点である伊丹の地に足を踏み入れてからである。

伊丹城の改修に励んでいるということは事前に知っていた。ところが、伊丹台地に築かれ始めている大規模な城郭を目の当たりにして、兵部は信濃守の並々ならない野心を感じたのだった。

常人の考えではない。

城下町の四方が土塁で固められ、町中に入れば、勇ましい大工普請を傍目にしながら行く道々は綺麗に区画されていた。それは明らかに町全体を城郭と変貌させる区画整理であり、実際空堀が掘られている場所もある。

本丸は町中の奥、石垣にぐるりと巡らされた向こうに聳え立つ天守台であった。

本来、城郭は山を切り崩して築き上げる。名城は古来から天然の要害を活かして攻め手の意気を削ぐ。小谷城も岐阜城も山の一部と

化しているし、松永弾正忠も連なる山々の一部に城を築いた。
信濃守は山城の池田城を捨ててまで、のっぺらな伊丹台地に一大要塞を築き上げている。
道楽か、とも思う。なるほど、突如として現れる天守は厳めしくもあって、楼閣のごとく華もある。
ただ、茶碗や刀の道楽ならいざ知らず、人々の日常の上に巨大な建造物を創造するこの道楽は、確実に何かを誇示するかのようで、凄まじい顕示欲の表現方法に他ならない。
いやいや、いくらなんでも疑いすぎではないかと兵部は自嘲もした。天下布武を掲げている織田軍にとって、北摂津は重要な要であり、石山の本願寺対策は当然ながら、西国侵攻も視野にあるのだから、守将である信濃守が要塞を築くのはなんら怪しいことではない。
そういうことで気を安らがせながら兵部は信濃守に面会した。
「遠路はるばるご苦労でした」
兵部を茶室に誘い込んだ信濃守は、頬を満悦そうに緩めてそう言った。兵部は頭を軽く下げながらも、広間では口数少なく澄ましていただけの信濃守を怪しんだ。もしかして、自らのどもり癖を意識し始めたのではないか。
「今年は実に意義のある一年でありましたな。上総介殿は長島の憂いを断ち、摂津にも残るは石山本願寺ぐらい。織田の来年はこの伊丹を足がかりにして更なる飛躍を遂げましょうぞ」
ああ、やはりこの男は織田家臣のつもりでいないんじゃないのか。長島討伐を他人事のように言ったばかりか、上総介をおやかたと呼ばなかったのだ。
無論、兵部はそうした怪訝をいっさい顔に出さず、皮肉混じりの笑みを浮かべた。
「左様ですな。聞けば正月には官位受領の恩賞が信濃守殿にもあるそうで」
「とは言っても、信濃守から摂津守になるだけです。もっとも、信濃守は父の代から自称してきただけですから、上総介殿のお心配り、

ありがたいことこの上ありません」
やけにすかした表情であった。しかし、高尚ぶった面の皮一枚剥がせば、地に這いつくばって饅頭にむさぼりついた、あの男なのである。
歌を詠み、剣術にも研鑽を欠かさない兵部からすると、気取っている彼は醜くかったし、薄ら寒かった。
「兵部殿。茶を点てましょう」
信濃守は傍らの茶道具に手を伸ばした。
「いえ、結構」
親しみのかけらも失せている兵部の物言いに、信濃守は手を止めてちらりと向いてくる。かといって、信濃守は兵部の拒絶をどうあしらってよいものかわからない、いや、起こっている出来事が理解できず、時間から取り残されてしまった者が浮かべているような、無表情であった。
さすがに兵部は、己のしようが率直すぎてまずかったと思った。
「拙者は茶の湯の礼に不得手なため」
「まさか」
と、信濃守は安堵したように苦笑し、茶道具を手前に引き寄せる。
「以前に信濃守殿や簗田左衛門尉殿にたしなめられましたゆえ、貴公に茶を頂戴しても、かえって不愉快にさせるばかりでしょう」
「はあ。そのようなことがありましたかな」
白を切っているのか、本当に忘れてしまっているのかは不明だが、これ以上言うと、自分自身の器を小さくさせてしまいそうな気がしたので、兵部は笑ってごまかした。
「いやあ、信濃守殿が差し出される茶碗は名物ばかりからか、拙者も肩がすくんでしまったのかもしれません」
「なるほど。それはいけませんな、兵部殿」
すると、信濃守は茶を打ちながら、いろいろと語り始めた。やれ、茶の湯の世界はどうだの、やれ、茶碗とはなんぞやと、聞き流すには十分な持論を展開し、結局、兵部の前に茶が差し出されるまでに

はひどく時間がかかった。

この男は欲望に忠実だ。つまり、無邪気に近いのだ。こうした者に所領と軍隊を与えたのは間違いであった。子供に出刃包丁を持たせているのと一緒だ。

「結構なお手前で」

しかし、出刃包丁と軍隊では脅威の度合いも違うのだった。

自在に扱えれば危惧することは何もないが――。

兵部は馬を留めると、六甲から吹き下ろされる冷たい夕風を浴びながら、黒い影となっている伊丹城に眺め入る。

このままにしてしまえば、取り返しがつかなくなってしまうかもしれない。上総介も簗田左衛門尉も、信濃守を見くびって摂津の地に野放しにしてしまっている。

欲望への忠実さとは、単なる狂気に他ならないのだから。

それぞれの夕日～稲葉山にて

稲葉山の頂上、本丸のふもとに用意されている犬の屋敷は、一門衆や重臣などに与えられている屋敷に比べて手狭だが、未亡人の女一人が、数名の侍女、奉公人たちと暮らすにあたっては十分すぎる広さであった。

ここにときたま、兄の上総介がやって来る。馬駆けや水泳、鷹狩りなど、岐阜の城下を少年のように巡ってきた帰りのついでで、髷もほつれたまま、着物をはだけさせたまま、織田軍の総帥とは思えぬ出で立ちで庭先に上がりこんでき、

「犬！　犬はおらんかあっ」

などと、おらないことはほぼ無いというのに、甲高い声を鳴り響かせるのである。

年の暮れが迫るこの日も、予告なく現れ、奉公人たちが無礼のないようにとあたふたする中、犬は庭先へとにこやかに足を運んだ。

「お呼びでしょうか」

「呼んではおらん。一休みに寄ってみただけだ」

そう言いながら、上総介は縁側に腰掛け、腰に巻き付けている瓢箪を取り外す。開いた大口目がけて瓢箪をひっくり返し、その中身がこぼれるのもかまわず飲み干すと、空になった瓢箪は庭先で平伏している従者に放り投げて、

「野を駆けたあとの水はうまい」

口許を腕でぬぐいながら笑みを浮かべた。

犬は上総介の背後に両膝をついた。二重に流れる瞼を兄の横顔に向けながら、女童のように小さい唇をやわらげて、ほのかな笑みを浮かべる。

「今日はどちらにお出かけに？」

「まあな」

と、上総介は答えになっていない。

犬の長兄はこういう男であった。常に頭の中を回転させており、特に思案を巡らせているときは、凡庸な話題の相手はしない。というよりは、女子供は凡庸な話題しか出さないから、はなから相手にしない。

それでも、凡庸の代表格のような自分を訪ねてくる兄が、犬にとっては可笑しい。「まあな」と言って、庭先の枯れ木をぼんやりと眺めている上総介を前に、犬は、白桃色の袖を手元に引き寄せながら、くすくすと笑った。

「何がおかしい」

「だって、兄様が何をしに来られたのかわからないんですもの」

「言っただろうが。一休みに来たのだ」

上総介の住処の本丸は目と鼻の先である。

上総介が犬の屋敷を訪ねる目的は、市の様子が気になって仕方ないからである。浅井家を滅ぼして以来、上総介と市の間は仲違いをしているも同然で、行事などでは顔を合わすものの、会話をしても一言二言なのである。

そのため、気心の知れた簗田左衛門尉を使わしたり、姉を訪ねている犬に近況を探ったりと、はっきりと口にはしないが、誰がどう見ても市が心配でたまらない兄なのである。

この日もやはり、

「市やその娘たちはどうなのだ」

と、ぼそり訊ねてきた。

「何も変わりはありません」

「そうか」

世間の衆たちに魔王と呼ばれるほどの残虐な行いを働き、実際、先頃の長島のいくさでも二万人以上の女子供を惨殺したという兄だが、多分、それは、別人格の織田上総介信長がやったことであると、犬は思うようにしている。

なにしろ、上総介は犬の前では一切、長島のことを口にしない。亡き夫の最後の場所だからだろう。

妹たちの心情にそこまで繊細な兄が、魔王になってしまうのは、きっと別の人格がいくさの折りには宿されてしまうからなのだ。

「まあ、息災なら構わんが、しかしだな」

と、上総介は背後の犬のほうへちらりと視線を向けてきた。この男に似合わない詮索の眼差しである。

「お前、市の下を訪ねるのは他に目的があるんじゃねえだろうな」

一瞬にして、犬のおっとり瞼が見開いた、

「えっ！　そっ、そんなものはっ」

彼女は驚きを表すとき、あたかも泣き出すような顔になる。薄い眉根を八の字に持ち上げ、瞳は瞳孔を大きくさせるせいで潤みが増し、唇をぱくぱくさせる。織田家臣風情ではなかなかお目にかかれない、少々滑稽な表情ではあるが、犬は、あざとさを持ち合わせていないのである。

多少のことでもあわてふためき、声まで失ってしまう彼女の様子を目の当たりにすると、たいがいの人間は、犬が本当に泣き出すのではないか、と次第に思うようになってしまい、やがて、可哀想なぐらいに健気な彼女を驚かせてしまった自分が、ひどく嫌になってきてしまう。

上総介も例外ではなかったらしく、顔に苦味を走らせながら、犬から視線を背けた。

しかし、言わずにはいられなかったらしい。

「やめておけ。奴だけは俺にもどうにもならん。そのうち、見所のある嫁ぎ先がまた出てくるだろう。やめておけ」

上総介は腰を上げると、逃げるようにして立ち去っていった。

従者たちもいなくなり、庭先はがらんどうになったが、犬はまだ口を開けている。

太陽のくだりはゆるゆるとして早い。

奴とは一体誰のことを指していたのだろうか。やはり、左衛門尉のことなのだろうか。

すると、胸が急にぐっとしぼられた。呼吸が詰まったかのような

錯覚さえあった。苦しさのあまり、やや屈みがちになって両手で胸元の襟を握り締め、この落とし所のない息詰まりがとても辛くて辛くてたまらなくて、目頭が熱くなっていく。そうして、もう、我慢ならなくなって声に出してしまう。

「左衛門尉様」

声にしてしまったら、とても悲しいものだった。

犬は魂が抜け落ちた眼差しで、空を眺めた。

「旦那様。恋とは、運命なのですね」

出会うのも、別れるのも、適わないのも。

「許してください、このうつけな犬を。子供たちがいながら、殿方を考えてしまっているわたくしを。でもね、旦那様。犬は今、一人ぼっちなのです」

犬は細長い鼻をすすりながら、冬の夕空にたゆたう雲を眺める。なんだか、あのゆっくりと流れている雲のように、夕映えに染まりたい。場所も、時間も、記憶も超えて。

「あ、あのう」

庭先の陰から聞こえてきた声に、犬ははっとして目尻を袖でぬぐった。

「家の人からこちらに回ってみればって言われたもんで」

背高の体を屈め、胸に何やら抱えながら、のそのそと御用商人のように現れたのは、愛し簗田左衛門尉だった。

「え、あ、あ」

犬はまた、例の泣き顔の驚きを見せた。唇は震えてしまっていた。どうしてこうなっているのか、どうしたらよいのか、推測も判断もできないで、犬は、ただ言葉のおもむくままに、

「どうして……。どうして……」

と、訴え、戸惑いの震える声は、夕暮れの寂しさのうちに、ただただ吸い込まれていった。

落ち着きのない犬に、左衛門尉は受け流すようにしてしばらく無言のまま視線の先を縁側の下に沈ませていたが、ややもすると頭だ

けを軽く下げてきて、
「お市様にこれを届けてくれと言われたもんで」
と、反物を差し出してきた。
「あ、姉上様から、ですか……」
寂しさが心の隙間を抜けていった。
それもそうだ。左衛門尉が用も無く訪ねてくるはずがない。先ほどの今で、どうして左衛門尉が現れたのかといえば、それはただの偶然であり、決してこの寂しい思いを救いにやって来てくれたわけではない。
何を期待していたのだろう。
「それはわざわざありがとうございます」
と、犬はようやく笑みを浮かべた。しかし、姉の市ほど気丈にはなれず、彼女自身、何を視界にしているのか、まったくわからなかった。
左衛門尉は縁側に歩み寄ってくると、一度、両膝を地につけて、反物を両の手で仰々しく掲げながら、犬の手前にそっと置いた。
「じゃ、じゃあ、あっしはこれで」
「あ……」
と、手が勝手に伸びた。細い指先が勝手に左衛門尉の背中を追った。
後ろ髪を引かれたのだろうか、左衛門尉は立ち止まると、ぎこちなく横顔だけを振り向かせてくる。
「さ、左衛門尉様」
「い、いや、お犬様。あっしなんかを左衛門尉様だなんて、だ、駄目ですって」
そうして、左衛門尉は顔を戻し、立ち去ろうとしてしまう。
「ま、待ってくださいっ！」
左衛門尉は立ち止まった。今度は体を向き直すと、視線は合わせないままに地に深々と平伏した。
「あ、あっしは、これから、その、家に帰って、馬の世話をしなく

ちゃ、いけないんで」
「違う。違うのです」
離れたくなかった。
「わたくしは、ただ」
亡き夫は、愚将の評判ばかりであった左衛門尉を高く評価していた。世間には侮られているというのに、どうしてだろうと思っていた。
そうして、犬は、市の屋敷で初めて左衛門尉を見かけたとき、すぐに疑問を解決した。
何事にも一生懸命な男だった。いくさや政治に対してどうかは知らない。でも、市に対して、茶々や初に対して、左衛門尉は不幸な彼女たちを、一生懸命に不幸を忘れさせようとし、喜ばせようとしていた。
「わたくしは、ただ」
亡き夫は、左衛門尉がいつも忙しそうにしていて声を掛けられなかったと言っていた。左衛門尉は、いつも周りにうるさい連中がいるから、掛けづらかったのだろうと言っていた。
犬には、和気藹々と仲間たちに囲まれている左衛門尉が見えた。
「わたくしは、ただ、左衛門尉様をお慕いしているだけなのです」
日暮れを知らせる鐘の音が、夕風に乗って城下から届いてくる。
「あ、あっしは織田家臣、簗田左衛門尉です」
犬は現実をよみがえらせた。涙がとめどなくこぼれた。嗚咽をこらえるせいで唇がひどく震えた。左衛門尉の言葉の残酷さ、そして自分が放った言葉の残酷さこそが、まるであの夕日の赤さのようであった。
「でも、お犬様。あっしも、あっしも、お犬様を、お慕いしています。好いています。ほんとに、ほんとに好いています。大好きです」
犬は泣いていたけれど、驚いた。
「あ、いや……、今のは、えと、その……、ごめんなさいっ！」
左衛門尉は立ち上がりざまに走って逃げていってしまった。

犬は涙に瞼を腫らしながらも、良かったのか悪かったのか、嬉しいのか悲しいのか、結局はわからなくて、一人静かに微笑んだ。

それぞれの夕日～甲州愛宕山にて

「今年も好機を逸したか」
白雪にすっかり冠した赤石山脈の山々を眺めていたら、ふいに隣の馬場美濃守が嘆くように、そう呟いた。
「わしが生きているうちに京の都に菱の旗を立てられるものかなあ」
「弱音など馬場殿らしくありますまい」
と、山県三郎兵衛尉は叱咤するように語気を強くしたが、馬場美濃はどこか力なく笑う。
「そうは言っても、わしもかれこれ六十になるのだぞ」
「馬場殿」
三郎兵衛は徳栄軒の死以来、どこか枯れてしまっているこの猛将に視線を据えた。
「拙者どもが殿を支えずして武田の生きる道はありましょうか。それは亡きおやかた様の遺言でもあらせられますぞ」
「それもそうだが」
馬場美濃の溜め息が愛宕山に吹き下ろす木枯らしに飲まれていく。
「殿にとって、わしらは疎ましい老人に過ぎん」
「そんなことありませぬ。いずれ、拙者どもの思いを理解してくれるはずです。今はただ、奸臣の戯れ言に惑わされておりますが、いずれ、いずれは」
「いずれは、な」
愛宕山に登ろうとはどちらから言い出したわけでもないが、三郎兵衛もなんとなく市中から離れたい気分であった。宿老同士のやましい密談でもなく、ただ、なんとなく。
年は暮れようとしている。
春に東美濃長山城、夏には高天神城を奪い取った功績は、武田軍にとって大きなものであったというのが家中の見方である。
だが、

明日は瀬田（大津）に旗を立てよ

と、徳栄軒の言葉を託された三郎兵衛には、遠江の一支城の奪取は今更感が否めない。

馬場美濃もそれは痛いほどにわかっているのだろう。だから、好機を逸したという嘆きが口から漏れたのだ。

上洛こそが亡き主君の大きな夢であった以上、三郎兵衛はまだ諦めていない。いや、諦めない。

しかし、この一年、武田の戦略は何も進まなかった。

いや、大膳大夫勝頼や、その側近たちにとってみれば、長山城と高天神城の攻略は大きな前進であり、今まで彼らは武田全軍を率いてこなかったこともあって戦果に浮かれてもいる。

宿老たちにしてみれば甚だ笑止なのだが。

長山城、高天神城を失った織田徳川だが、それ以上の被害を彼らに与えられただろうか。

むしろ、織田に至っては長島一向一揆を壊滅せしめ、兵力は日増しに増強されているのだ。

時が過ぎていくごとに不利になっていく。それが真実だ。

「もはや、不識庵に泣きつくしかないのかもしれんよ」

馬場美濃は唇を噛みしめ、老齢らしからぬ悔しさをにじみ出した。

三郎兵衛は何も答えずに視線を落とす。

今年、好機はあった。織田軍が長島に総力を結集させている一報は当然ながら甲府にも入っており、間隙は十分に突けた。

が、下準備、いわゆる調略が大膳大夫の頭には無かった。石山本願寺と連携するか、さもなくば織田領内に今もくすぶっている反抗勢力をたきつけるかして、長島一向一揆衆をもう少し永らえさせれば、農政期の過ぎた晩秋、武田軍は一挙に西上作戦を再開できただろう。

結果は間に合わなかった。というよりも、そうした三郎兵衛の進言に大膳勝頼はまったく聞き入れなかった。

どうして、ここまで効果的でわかりやすい薦めにも耳を貸してく

れないのだろうと、三郎兵衛は年甲斐もなく涙を滲ませたが、実のところ、大膳はただ単に耳を貸さなかっただけでもないらしい。

「馬場殿、これは小耳に挟んだのですが」

そう言いながら、三郎兵衛は馬場美濃に顔を寄せる。

「殿は織田の重臣と内通しているそうです」

「内通？」

馬場美濃は眉をしかめながら苦笑した。

「今の織田に我らと内通する者が現れるわけなかろうが」

「左様。しかし、拙者が思うに、殿はどうやらそれを戦略の基礎にしているらしく」

「信じられん。一体、その内通者とは誰なのじゃ」

「わかりませぬ」

馬場美濃は落胆ひとしおにかぶりを振った。

「それがもし本当であれば、上総介のはかりごとじゃ。殿は上総介にまんまと嵌められていることすら気づかぬのか」

「気づかぬどころか、この冬に兵を進めようとしなかったのも、その内通者との関わりではないかと。その者が、今は時期ではないと、殿に伝えてきたのかもしれませぬ」

「言葉がないわ」

寒風が二人の羽織をはためかす。

内藤修理亮、高坂弾正忠とともに武田四名臣とかつてはもてはやされたこの二人だが、三方ヶ原の活躍もなんだか遠い昔の思い出となってしまい、今では家中の中枢で何が起こっているかも存ぜられなくなってしまっている。

急に馬場美濃が目頭を押さえ、嗚咽を漏らし始めた。

「馬場殿」

三郎兵衛は馬場美濃の肩に手をかけた。掌の感触が骨と皮だけの老体のようだった。

「どうしたのです、馬場殿」

「すまん。申し訳ない」

馬場美濃は鼻をすすりあげ、一つ大きな息をつくと、赤い鼻のまま甲府を囲む山々に視線を持ち上げた。

「おやかた様のお顔が思い浮かんでしまってな」

「馬場殿。よしましょう、昔を偲ぶのは。もう、おやかた様はこの世になく、その思いだけが拙者どもには残っているのです。拙者どもが力尽きてしまったら、武田に明日はありませぬ」

馬場美濃はただただ目を閉じながら、冬の澄んだ空を仰いだ。

武田に明日はない、か。

三郎兵衛は自分で言っておきながら、それを口にしてしまうところまで追い詰められていることを実感した。いまだ総兵力五万の軍勢を保っているにも関わらず、どうして危機感をぬぐいきれないのか。

理由はただ一つ。武田徳栄軒信玄という絶対的安泰が無くなってしまったからだ。

まして、向かう敵は底知れぬ力と運を併せ持つ織田上総介信長。彼は、確かに、静かに、武田の駆逐を狙っている。

もう一度、包囲網を組むしかない。それ以外に勝機はない。徳栄軒でさえ、したたかにそのときを待ったのだから。

「年が明けた年賀の挨拶のさいには、再度、殿に詰め寄りましょう」

「源四郎」

馬場美濃は目を閉じたまま、三郎兵衛をかつての幼名で呼ぶと、吐息混じりに呟いた。

「あまり言いたくはないが、わしはもう疲れてしまった」

「何を言っているのです」

「すまん」

うなだれるように頭を下げてくると、馬場美濃は背を向けてとぼとぼと去っていってしまった。

取り残された三郎兵衛。一人、拳を握ってうつむく。

甲州に吹く風はいつの日でも寂しい。峻険な山々に囲まれて、まるで華やかな外界から閉ざされてしまっており、（かつて遙かなる

京を目指したことのある）勇猛果敢な武者にはことさら身にしみた。

「おやかた様――」

そう呟きながら甲府盆地に広がる夕空に目を向けるも、返ってくるのは、冷たい風に吹かれる草木のさざめきだけだった。

出羽守

すえとたまの姉妹が庭隅の板塀沿いにしゃがみ込んで何かをしている。

彼女たちの背後では幾羽の雀が跳ね回って地面をついばんでおり、姉妹が声を立ててもまったく動じない。

縁側に座り込んでそれを眺めていた牛太郎は、不思議になった。雀は姉妹を知っているのだろうか。まるで、すえとたまが連れ添っているようにも見える。

「何をしているんだい」

牛太郎が声をかけると、姉妹は振り向いてきて、花を植えているのだと言った。

「姉さんがどっからか摘んできたんです。根っこごと」

「川。いつもの川にあったの。ねえ、お父ちゃんもやって」

すえからすると牛太郎はお父ちゃんらしい。無論、弥次右衛門もお父ちゃんなのだが、牛太郎に対してお父ちゃんと呼んでいるのはどういう意味合いからなのか、誰にもわからない。それにすえが言っていることなので、誰も咎めない。

相変わらずのぼさぼさ頭の下の顔をにたにたとさせながら、すえは縁側の牛太郎に歩み寄ってきて、花を一輪渡してくる。確かに根ごと引き抜いてきたらしく、土くれが着物にこぼれた。

「ああっ、もうっ、姉さんったら！」

たまがあわてて駆け寄ってきて、懐から手拭いを取り出すと、それで牛太郎の股の辺りにこぼれた土を払っていく。

「申し訳ありません、旦那様」

「いいよ、大丈夫だから」

牛太郎は掌に花を乗せたまま腰を上げ、

「すえ。どこに植えればいいんだい。あそこでいいのか」

「違う。やっぱりこっちこっち」

すえに手を引かれていくと馬屋のほうだった。栗綱と黒連雀が突っ立ったまま眠っていて、二人が近づいてきたものだから、栗綱はちらとだけ瞼を開けた。ただ、一回りしてこちらに尻を向けてしまった。黒連雀は頭を出してきて、すえに構ってほしそうに鼻を鳴らす。

「ここ。ここ」

すえが指差したのは馬屋の前、黒連雀の足元だった。

「ここにあげればクロスケとクリツナ、いっつもお花見れるよ」

「ここじゃ、こいつらが踏んじゃうじゃんか」

「だめ。踏んじゃわない。ここ。すえはここがいいの。ねえ、クロスケ」

すえが黒連雀の鼻面を撫でると、黒連雀はお返しにすえの頬を舐めた。

「わかったよ」

牛太郎はすえから鋤を受け取ると、土を掘り返す。

「旦那様」

たまとすえの三人で屈んでいたら、貞が草履をぱたぱたと鳴らしてやって来た。

「前田様がお訪ねに参りました」

「前田？　マタザ殿か？」

「はい」

「じゃあ、ちょっと先に通しておけ」

牛太郎は花を植えると、手を払いながら腰を上げた。

「お父ちゃん、またどっかに行くのお」

「いや、どこも行かないさ」

牛太郎は井戸からくみ上げた水で手を洗い、衣服の土を払うと、庭先から縁側に上がって、広間に顔を出した。

「よお、羽州。急に押し掛けてすまんな」

又左衛門はにこにこと右手を掲げてきたが、牛太郎は首を傾げながら向かいに腰を下ろした。

「ウシュウってあっしのことスか？」
「何を言っている。お前は出羽守じゃないか」
正月も過ぎて落ち着きが戻ってきたころ、上総介のはからいにより、織田家臣団のおもだった者に拝官褒賞があり、牛太郎は新たに出羽守の官位を朝廷から賜った。
牛太郎以外の家臣だと、
丹羽五郎左衛門長秀が越前守に。
羽柴藤吉郎秀吉が筑前守に。
明智十兵衛光秀が日向守に。
滝川彦右衛門一益が伊予守に。
塙九郎左衛門直政が備中守に。
これまで信濃守を自称していた荒木村重が摂津守に。
簗田左衛門太郎広正は右近大夫を叙官した。
更に上総介は明智十兵衛、塙九郎左衛門、簗田左衛門太郎の三名に名族の姓を与えるよう朝廷に働きかけ、十兵衛は惟任姓を、塙は原田姓を、太郎は別喜姓を拝領した。
この家臣の面々の中に牛太郎と太郎の二人が揃って入っているのは異様であった。おやかた様はよほど簗田親子を気に入ってらっしゃるというのが家中の人々のもっぱらの見解であったが、当然ながら、簗田家は二人の叙官を祝わなかった。皆が皆、慎ましく笑っただけであった。
名前が変わったというだけで、何かが変わったわけではない。得られたものは糞の役にも立たないような名誉である。実際、家中の人間のほとんどは、今まで通りに、牛太郎、左衛門太郎と二人を呼んでおり、拝官を朝廷に奏上した上総介でさえ、牛、こましゃくれ、である。
それでもたまに、又左衛門みたいに田舎武者からの脱却を目指す進歩的発想なのか、ただのごますりなのか、簗田出羽守殿、別喜右近大夫殿などと、いちいちかしこまってくる者もいる。
「どうでもいいッスよ。んなの。今まで通り、牛とか太郎で」

「まあ、そう言うな」
又左衛門は無官である。藤吉郎や牛太郎に先を越されているにも関わらず、この男にしては妙に落ち着いていた。清洲時代の若かりし又左であれば、嫉妬のあげくに発狂して槍を振り回しかねないというのに。
羽州などと呼んできて、昔なじみの叙官を我ごとのように受け入れている又左衛門の懐の深さが、牛太郎には薄気味悪い。
ただ、それは又左衛門なりの遠慮であったことは、すぐにわかった。
「駒のことだが、残念だったな」
又左衛門は視線を落としつつも、湯呑みを手に取って、無言の間を取りつなぐようにずるずると煎茶をすすった。
もう、半年近くが経つ。その間、数々の人間から慰めや励ましの言葉を頂戴したが、いまだになんと答えていいのか牛太郎はわからない。駒という孫娘があたかも最初からいなかったように振る舞ってはいても、記憶のどこか、胸のどこかには、あの子の声が残っている。
ただ、実の父母である太郎とあいりを考えれば、いつまでも空虚な心持ちでいてはならないと、近頃は思うようになっていた。あの二人の夫婦は昔から変わらぬ明るさで日々を送っているが、太郎とあいりのことだ、二人きりのときは悲しみに暮れているに違いない。
彼らを励ましてやれるのは、父親である自分しかいない。
「実はな、今日来たのはだな」
と、又左衛門は湯呑みを床に置きながら言う。
「まあ、俺のところは何に恵まれたのか子供だらけで、去年もまた一人産まれた。女なんだがな」
「お豪でしょう。この前、会いましたよ。おまつさんがうちに遊びに来たときに連れてきましたから」
「あ、ああ、そうか、そうだったな」
何をあわてているのだろうと、牛太郎は瞼を怪訝に細める。

「いや、実はだな、まつとも話したんだが、俺のところはもはや子供を養うほどの扶持がなくて、どうしようか悩んでいたんだが、その、まあ、牛のところは子供がないしな、近所でもあるし、豪をお前のところにもらってもらわないかということなんだ」

まさか、織田の中堅将校である又左衛門が女児一人も養えないなど有り得ない。おそらく、牛太郎に対する又左衛門なりの精一杯の励ましであり、友情なのだろう。

牛太郎は静かに微笑んだ。

「ありがたいことですけど、あっしには太郎がいますし、太郎とあいりんもまだ若いんで、またいずれは子供ができるでしょうから。だから、あっしなんかよりも、藤吉郎殿にもらってもらったらどうなんですかね」

「藤吉郎？」

又左衛門はあからさまに眉をしかめたが、藤吉郎の庶子である石松丸が先年の十一月に夭折してしまったのは又左衛門も存じているはずだった。

「あっしのところには太郎がいますけど、藤吉郎殿と寧々さんのところには一人も子供がいませんじゃないですか」

「まあ、そうだが・・・・・・、そうだがな・・・・・・・・、まあ、藤吉郎は好色だしな・・・・・・」

牛太郎はさすがに笑うしかなかった。

「いくら藤吉郎殿だからって、赤ん坊に手を出すはずないじゃないですか」

「それはそうだが、うーん。でも、育てたあとに手を付けるなんてことも」

「寧々さんがいるから大丈夫ですよ。それに藤吉郎殿は織田の出世頭ですよ。養女にしてあげれば、お豪のためにもなるでしょ」

「うーん。しかし、あいつは昔からまつなどにも色目を使っていたような気がするし、豪に限らず、うちの娘は皆、まつに似ていて、俺が言うのもなんだが、なかなかのものだから、藤吉郎などに渡し

てしまったら」
牛太郎は呆れた。昔の乱暴な又左衛門は嫌いだったが、今の親馬鹿な又左衛門はかぶいていたころのほうがましだったのではないかと思えるほど、武者ぶりが削げ落ちてしまっている。
「そんなことよりも又左さん。今年はいよいよ武田との戦いですよ」
心配になって、少々たしなめる具合で言ってみたら、うんうん唸っていただけの又左衛門は突如として眼光を鋭くさせて、牛太郎に持ち上げてきた。
「わかっておるわ。お前こそ首尾よく整えられるんだろうな」
ははあ、と、思わず唸りそうになった。どうやら、槍の又左は、親馬鹿の又左衛門を隠れ蓑にして、刃を研いでいるらしい。
牛太郎は笑う。
「当然ですよ」
フン、と、又左衛門は鼻で笑いながら、湯呑みを手にする。
「お前、清洲のころから比べれば、ずいぶんと逞しくなったな」
「出羽守ですから」
「ほざきやがって。今にお前を出し抜いてやるわ」
又左衛門はもう一度鼻で笑うと、目尻に皺を寄せたまま煎茶をすすった。

傀儡師

「お主は牛太郎などというふざけた面を被った傀儡師じゃ」
佐久間右衛門尉はそう言いながら、平伏する牛太郎の前に書状を放り投げてきた。
「己の立身出世のためだけに、玄蕃允や勝蔵のみならず、わしや権六までをも人形のように扱って、さも可笑しげにおやかた様に披露する長良川の河原乞食よ」
佐久間は手にしていた扇子を、苛立たしげにぱちつかせながら、無言で頭を下げているだけの牛太郎に嫌気のさした眼差しを据える。
「孫娘に逝かれてしまったのも、お主の日頃の行いからではないのかあ？」
悪口をついて、ちょっと気が紛れたらしい。佐久間は扇を広げ、垂れ下がるあごひげを風に揺らした。
「右近大夫も不憫なものじゃ。奴のような若武者はそうはおらんというのに、父がお主ではな」
「お言葉、しかと胸にとどめておきます」
書状を懐におさめた牛太郎は、佐久間の前からさっさと退席した。
武田に内通者に見立てられている現状が我慢ならないと佐久間は言っているが、実際のところは、ただ単に牛太郎に持ち駒として扱われていることが気に食わないだけなのだろう。
器の小さい男だ。そのくせ、先日の拝官褒賞の折りには、叙任した家臣団の中でももっとも位の高い官位が与えられるという話だったのに、それを蹴った。というのも、上総介が、家臣団より低い「従六位上総介」にも関わらず、上総介の呼称が気に入っているからという理由で官位を上げず、佐久間と柴田権六郎の二人も、上総介の奇天烈になぞらって、叙官を辞退したのであった。
あぐらを組んでいるだけの田舎武者野郎が言いたいこと言いやがって。牛太郎が鼻息を荒くしながら門をくぐり出ようとすると、

「旦那様」
と、於松がいつのまにか背後にいた。於松は監視のために佐久間屋敷に奉公させており、それも上総介の了承を得てのことだった。不気味な老人に居着かれているのも、佐久間にしては憤慨やるせないのだろう。
傀儡師と牛太郎を揶揄したくなるのも、もっともなことではある。出自も謎で、珍奇衆という得体不明な役職で上総介に取り入り、今では家中の人々を操ってやりたい放題。見ようによっては、簗田出羽守は君側の奸臣である。
とはいえ、
「ここに来たときは、いっつもおもしろくなさそうに帰っていきますねえ」
と、於松が顔色を指摘したように、牛太郎には織田家を掌握する気などさらさらない。
牛太郎は佐久間の悪口に気分が悪くなりすぎて、見慣れた於松の醜い面も鬱陶しく、奥歯を軋ませながら門をくぐり出、稲葉山の坂道へと入っていく。
「おやかた様の一番家来なんだから、いい顔しておいたほうがいいんじゃないんですかねえ」
「黙れ、クソジジイ」
「中身は御覧になられたんですかい？」
ちっ、と、舌打ちし、牛太郎は足を止めた。於松の歯抜けの笑顔を傍らにして、懐の書状を解いていく。
差し出しの主は武田大膳大夫勝頼の側近、長坂釣閑斉であった。
佐久間右衛門尉が武田家に寝返ったさいの待遇などについて記されている。
「ずいぶん気が早いことだな」
フン、と、この謀略家は鼻で笑った。書状を於松に手渡す。
「いつもみたいに燃やしておけ。あと、さゆりんに返書を出すように伝えておけよ。ありがたき幸せとか書かせておけ」

「ししし」

書状を受け取った於松はのそのそと引き返していった。

木漏れ日が落とされている小怪に、鳥の地鳴きがかすかに届いてくる。従五位下出羽守として、文句なく織田の重席に列している牛太郎の歩く道は、前から来る誰もが譲っていく。荷駄持ちや使い番は当然として、岐阜城と城下を行き交う奉行衆も、どこかの家の子弟も、道の端に体を退けて、牛太郎が前を通り過ぎるまで頭を下げ続ける。

だが、牛太郎はその優越に浸ることなく、次を見据えていた。

正月、息子を喪って憔悴する藤吉郎とともに、珍しく竹中半兵衛も岐阜にやって来た。半兵衛は一度、実家の菩提山に帰ったが、ほどなく岐阜に戻ってきて、牛太郎に設楽ヶ原にて決戦を引き起こさせる奇策を口上した。

きつつき戦法。

武田軍が東三河に侵攻してきたさいの大目的は、玄関口である長篠城奪還であり、ここを取り押さえられたら、先年、東美濃長山城を落とされたように、決戦以前の問題であった。織田軍、ひいては牛太郎の課題は武田軍を設楽ヶ原まで引きずり出してくることである。

半兵衛の奇策とは、きつつきが木の幹を叩いて虫を這い出させるようにして、長篠城包囲軍を、街道から迂回させた機動部隊に叩かせて、設楽ヶ原に押し出させるというものであった。

そもそも、このきつつき戦法は、半兵衛の考案ではないと言う。

かつて、武田徳栄軒と上杉不識庵が川中島で戦ったさい、山に陣を敷いた上杉軍を叩き出すために、徳栄軒が機動部隊を山の裏手に差し向けた。山から叩き出された上杉軍を挟み撃ちにするため、徳栄軒本隊は前進を開始したが、軍神不識庵はこれを悟って、霧に紛れて密かに下山し、突如として徳栄軒本隊の前に出現したのだった。

思いもしなかった上杉軍の急突撃に、武田本隊はさんざんに打ち負かされて、迂回していた部隊が戻ってきたために窮地を脱して引

き分けとあいなったものの、武田家はこの戦いで大多数の有能な将たちを失った。

つまり、きつつき戦法が失敗したという過去が、武田軍にはある。織田徳川軍が同じことを行った場合、武田軍はどうでるべきか、大膳大夫にさまざまな思惑が交錯するであろうが、その思惑を設楽ヶ原の決戦に向かわせることが、

「簗田殿のお仕事です」

さらには、きつつきを試みる機動部隊は、東三河の山間を把握しており、かつ、武田軍と渡り合える屈強な兵たちでなければならないとも半兵衛は言った。

「織田の兵にこの役目は成し遂げられません。やれるのは三河勢だけです」

牛太郎は、再度、浜松を訪れなくてはならない。設楽ヶ原の作戦の全容を伝えるためにも、面会の相手は三河守自身だと思った。

明日にでも岐阜を出よう。と、麓の屋敷町まで降りてきたところ、登城してくる佐々内蔵助成政に出くわした。内蔵助は馬に跨がっていて、下人を三人従えており、もちろん、この男が簗田出羽守に道を譲るはずがなく、牛太郎のほうが道端に押し返された。

横切っていく馬上の内蔵助を、牛太郎はじっと見つめる。筋肉質に盛り上がった肩をゆうゆうと揺らす内蔵助は、作夏、嫡男と死別した。

長島討伐で初陣を果たした佐々松千代丸は、中州への突撃戦のときに流れ弾を食らってしまい、十三年の生涯を終えている。

息子がいたのか、と、それを聞いたときに初めて知った。牛太郎の中での内蔵助は、寧々の尻を追いかけ、部下を蹴り飛ばし、ちょっとでも火種があれば喧嘩ばかりという、傲岸な印象しかないが、一体、どんな父親だったのだろう。

顔を合わせれば悪態をついてくるはずの内蔵助だが、目も合わせないまま、牛太郎の前を通り過ぎていった。

太郎の話によれば、又左衛門とともに鉄砲奉行に付けられた内蔵

助は、長島討伐以降、余計に鉄砲隊に厳しい訓練を施しているらしい。

武田との決戦に向ける諸将の意気は、これまでとは格別に違う向きである。ただし、それは戦略上、武田の情報機関を出し抜くために、ひそかに、静かに、燃えたぎっていた。

「おい、牛野郎」

振り返ると、内蔵助が馬を止めて横顔だけを見せてきていた。脂ぎった顔を仏頂面にさせている。

「首尾よく運んでいるんだろうな」

「当然ながら」

内蔵助は顔を戻して稲葉山の坂を登っていった。

すなわち、織田が動く

「明日、昼前に岐阜を出て京に向かうから、お貞、支度をしといてくれ。助さんと利兵衛と鉢巻きもな」

牛太郎が米をかきこみながら言うと、家の者たちは一瞬静寂し、隣同士、顔を合わせた。

長島から帰ってきて以来、牛太郎は何かが抜け落ちたように温和な家長となっていた。以前のように勝手気ままな行動で家の者たちにおかしなことを強要することもなければ、声を荒げることもなく、あれだけ不審がっていたたまにも優しく接している。一同が同じ床に並ぶ夕飯ともなれば、今日の魚はどこで釣ってきたのかと栗之介に訊ねたり、山内千代に最近は会っていないが元気なのかとあいりに訊ねたり、手ごねの茶碗を作る者が堺にはいて、その碗が実に見事なのだと梓に話したり、毎日毎晩、牛太郎は、家の者たちから見ればなんだかその健気さが悲しくなるほど、場の話題を作るのに懸命だった。

ただ、出立を口にした今晩の牛太郎は、無口で、目つきもどことなく厳しく、背後にはほどよい緊張感が漂っていた。

さすがに、家の者たちは、牛太郎が動くことすなわち、織田が動くということを、薄々感づいてきている。

実際、上総介が近々上洛する。旦那様はおやかた様に先んじて上洛し、朝廷か各将に働きかけを行うのだろう、というのが、家の者たちの見方であった。

本当は浜松なのだが。

「だ、旦那様。なんで、今度も俺は連れていってくれないんですか」

七左衛門が泣き言のように顔を上げてきた。

「お前には他に役目がある。飯を食ったらおれの部屋に来い」

「えっ？　や、役目ですか」

七左衛門の驚きに、牛太郎は何ら反応せずに味噌汁をすする。

以前の、簗田家の暴君であったころの牛太郎の言葉であったら、皆、裏に何かを秘めている七左衛門への「役目」に、眉をひそめて怪しんだであろう。

ところが、長島以来、いや、駒の喪失以来、穏やかな人に変わってしまった牛太郎からは、以前のような私利私欲がまるで見受けられないので、裏のある「役目」とは、この巨大組織の織田家に関わること、簗田家の奉公人たちにとっては途方もないこと、言葉の緊迫と恐ろしさに沈黙せざるを得ないことであった、

皮肉にも、牛太郎が以前に望んでいた、たるんだ空気を引き締めさせることに成功したのだが。

「亭主殿」

重苦しさを和らげるように、梓が笑みを浮かべながら言った。

「暇があったらでよいから、先日に話していた手ごねの茶碗を土産にしておくれ」

牛太郎は思わず箸を落としてしまう。あわてて拾い上げ、あわててあいりに交換してもらう。

「なんじゃ」

「い、いやっ」

と、緊張を作り上げる家長になろうとも、相変わらずの恐妻家であった。この主人の仕草に、家の者たちはようやく眉根をひそめる。

「そ、そうは言っても、その茶碗は、結構な値段がしますんで、ま、まあ、あきらめてください」

「話だけを聞いていたら、その職人とは友人かのような口ぶりであったではないか」

「そ、そんな、滅相もないっ」

そもそも、向かう先は畿内ではないのだ。

「まあ、母上。父上は忙しい身ゆえ、茶碗どころではありますまい」

太郎の言葉に、梓は不服そうにしながらも矛をおさめ、その隙に牛太郎は急いで夕飯を平らげると、自室に逃げ込んだ。

ほどなく七左衛門がやって来る。座らせると、七左衛門の手前に、

金の小判を二枚、置いた。
七左衛門が大きく見開いた目玉を右往左往させる。
「格さんが、おれらの目を盗んで遊び回っているのは知っているんだからな」
「えっ。い、いやっ、でも、お、俺はてめえの禄だけで遊んでいて、旦那様に取り立てがいくようなことはしてませんって」
「違う。これはくれてやるんだ」
「へ？」
「遊女をとっかえひっかえ、しこたま遊び回るんだ。それでもって、遊女に吹き込んでいけ。信長様と佐久間右衛門尉の仲が悪いってな」
七左衛門は小判を見つめたまま呆然として固まり、当然ながら事の次第がまったく飲み込めていない。
牛太郎は理由を説明してやった。遊女の中には武田のくのいちが扮装している可能性があり、彼女らをだますことによって、甲府の首脳たちもだませる。来たる武田とのいくさで有利に運べる。
「どうしてそんなことを格さんが知っているのかって訊かれたら、主人の簗田出羽守が信長様に告げ口をしているって答えるんだ。出羽守はおやかた様に気に入られているから、いずれ、羽柴様を追い越して出世頭になるに違いねえとかなんとか、うすら馬鹿が自慢している感じで振る舞え」
その天性の馬鹿さ加減を期待したうえでの役目だというのに、七左衛門には壮大すぎたのか、まだ固まっている。
「嫌なら助さんにやらせるけど」
「や、やりますよっ。てか、あいつなんかには、こんな大任をこなせませんって！」
七左衛門は小判を引ったくって懐に押し込めると、若干のにやつきを浮かべて退出していった。
利兵衛を呼んだ。
「明日、弥八さんのところに行って、浜松に行くけれどどうするか

訊いてこい」
「やっぱり、京じゃなくて浜松なんですか」
ハア、と、利兵衛は溜め息をついた。
「京に行ったって、何かをするわけじゃないだろうが。何に憧れているんだか知らないけどよ」
「田舎で三年勉学に励むよりも、都で三日寝ていたほうが、身のためになると言います」
「誰がそんなことを言ったんだよ」
「私の見解です」
「どうでもいいわ。そんなことより、家康殿に会うかもしれないからっていうことを、弥八さんに伝えろよ」
「本多殿は行きませんよ。追放された身なのですから」
「一応、伝えておけ」
利兵衛は面倒そうにうなずくと、戸を閉めていった。
一人になると、牛太郎は机の前ににじり寄り、燭台のもとに和紙を広げると、腕を組んで、じっと考え込んだ。
惟任日向守こと、坂本の明智十兵衛から文が届いており、返書しなければならなかった。
先頃、細川兵部大輔が坂本にやって来て、伊丹城の荒木摂津守の目付を滞ることなく行うよう、牛太郎に伝えてくれと言っていたらしい。
なんでも、摂津守は伊丹台地に一大城郭を築いており、有岡城などと勝手に命名したほど増長しているという。
兵部は元来、物思いにふけることが多い男ゆえ、と、十兵衛も書面で一笑しているが、しかし、摂津守が本当に増長しているとしたら、災いの種になりかねないとも述べている。
実は牛太郎、伊丹城の改修に一枚噛んでいる。長島から帰参してからすぐのこと、田中宗易からの文で伊丹城改修事業の計画を知った牛太郎は、摂津守に文を送って、伊丹は畿内と西国を繋ぐ要所であるから、頑強な要塞を築城するようあおった。さらに堺の四郎次

郎に早馬を出し、摂津守に借財の誘いを持ちこませ、改修工事にかかる人夫や材木も、堺会合衆と摂津守の間を取り持って斡旋するよう命じた。

なので、十兵衛や兵部に煙たがられては困るのだった。

牛太郎は筆を取り、和紙に書き連ねていく。

荒木摂津守は確かに増長しているかもしれないが、生来気の弱い男であり、信長様の恐ろしさも存じているから、織田に弓引くような真似は考えられない。築城も所詮は道楽の延長であり、気を揉むほどでもない。と。

家長としては穏やかに振る舞うようになった牛太郎だが、事が銭儲けに至るとなると、相変わらずの貪欲な利己主義者であった。

「ヘタレ村重には稼がせてもらわないとな」

にたにたと笑いながら、牛太郎は文を折り畳んでいく。武田家工作に日々追い立てられ、成長を楽しみにしていた駒も喪い、香りを楽しめる衣服も梓のものだけで飽きてきた。今の牛太郎が牛太郎らしくいられるのは、蓄財への情熱しかないのかもしれなかった。

無用心

尾張沓掛に栗綱と栗之介を置いていき、例のように旅人風情の目立たない姿で三河に入ると、事前に文を出していた松平善兵衛と再会し、遠江の地を踏んだ。

さて、どのようにして徳川三河守と接触するかであるが、やはり、牛太郎は武田の忍びの目に怯え、浜松城への登城はためらった。

「前のように、本坂街道沿いの茶屋で落ち合うのはいかがかと」

善兵衛が提案した。

「おやかた様は野駆けのついでに、あそこにたびたび寄られているようなので、不自然ではないでしょう」

「そっか。だったら好都合だな。じゃあ、早速、家康殿に日取りと時刻を訊いてきてくれ」

「でも、殿」

と、利兵衛が口を挟んできた。いつもの出しゃばりかと牛太郎は苦々しくなったが、

「野駆けや鷹狩りのついでとあれば、使いの従者を大勢連れられているはずです。それではかえって目立ちますし、その中に間者がいないとも限らなくありませんか？」

利兵衛らしくないが、確かに、もっともな意見だと牛太郎は得心した。

「そういうことだ、善兵衛」

しかし、善兵衛は眉をしかめた。

「いや、万が一を考えたら、一人か二人の警護でおやかた様を城外にお連れすることはできかねます。今の武田と徳川の情勢ではなおさらです」

「平八郎がいるから大丈夫だろ」

「そんな」

「天下の三河武者が、武田怖さでお散歩もできないって言うのかい

？」

「そ、そんなわけありませぬっ！　いくら簗田殿とはいえ、口が過ぎますぞ！」

「ああ、失敬。ということで、段取りのほうよろしく」

善兵衛は、血色豊かに床を叩き踏んでいきながら、宿を出ていった。

「殿。あのような口を叩いていいのですか」

「いいんだ。ごちゃごちゃ言い争っていたって先には進まないだろ。もう、ここまで来たら躊躇している暇はないんだ」

慕ってくれている善兵衛をけしかけてしまって気分の良くない牛太郎は、大きく鼻息を抜くと、床の目をぼんやりと見つめる。

責務であった。

決戦地を設楽ヶ原と定めたそのときから、およそ一年。

牛太郎は、人々が営む時空の流れに、設楽ヶ原作戦という川を作った。そうして、牛太郎は、竹中半兵衛ら、智謀家たちに川を広げる手段を授かり、又左衛門や内蔵助にここを掘らせ、そして、上総介が水を注ぐとき、大河となるであろう。

天下布武の大海へと注ぎ込まれるこの流れは、山県三郎兵衛尉への復讐や、三方ヶ原の借りなどといった、一個人の心情で堰き止められるものではない。

一蓮托生、織田家数十万の流れなのである。

「利兵衛も、助さんも、覚悟しろ。そして、誇りに思え。裏方は名前を残さないかもしれないけど、おれたちがやろうとしていることは、千年経っても二千年経っても語り継がれるからな」

三河守の返答を待つ間、そういえば、と、牛太郎は急に起き上がった。

「おい、利兵衛。今から手紙を書くから、お前、それを大久保ナントカって人のところに持っていけ」

「ナントカってなんでしょうか？」

「ほら。弥八さんが子供を預けているっていう人だ」
「ああ、確か、大久保新十郎殿とか言っておりました」
「そうそう。新十郎さんだ。今から書くから、ちょっと待ってろ」
「なにゆえ、その大久保殿に文を」
「弥八さんの子供を世話してもらっているお礼だ。あと、弥八さんは元気だとか、子供に教えてやとっけよ。お前は弥八さんになにかと世話になっているんだからな」
利兵衛は、治郎助と顔を見合わせて、首をかしげながらもひそかに笑った。
「殿はお節介を嫌っていたはずですが」
「おれが嫌いなのはお節介じゃない。お前がよくやっている押しつけだ」
「私は押しつけなどしておりませんよ」
「よく言うわ」
牛太郎は大久保新十郎宛てに面会を求める旨の書状をしたためると、それを利兵衛に渡した。
「くれぐれも粗相のないようにな」
「今から行けとおっしゃっているのですか？」
「なんだよ。何が不満だ」
「だって、大久保殿の所在を私が知っているわけないではないですか。松平殿にお願いしたらよろしいではありませんか」
「馬鹿野郎！　弥八さんは追放されてんだぞ！　善兵衛に頼めるわけないだろうが！　うっかり間違えれば、善兵衛に迷惑かけるだろうが！」
「そんなことおっしゃったって、私は大久保殿の所在を知りません！　松平殿に所在をお訊ねしてからでよろしいではないですか！」
「ま、まあ、利兵衛殿」
と、治郎助が利兵衛をなだめるが、急に怒鳴られたのが気に食わなかったのか、利兵衛は鼻の穴を膨らませて、牛太郎をてらてらと睨み据える。

利兵衛の言うことはまず間違っていなかったが、牛太郎はその態度に憤慨した。

「だったら、自分で探してこいやっ！　町中で聞き回ってこいっ！　このくされまんじゅう野郎っ！　なんでもかんでも楽しようとしてねえで、とっとと行けっ！　さもないと―」

牛太郎はおもむろに柴田権六譲りの太刀を引き抜き、刃先を利兵衛の鼻頭に突きつけた。

「叩き斬るぞっ！」

利兵衛は顔を青ざめさせながら、逃げ出ていった。口は達者だが、凶器を突きつけられるとすぐに震え上がる臆病者であった。

「まったく、あの馬鹿がっ」

太刀を鞘におさめて、治郎助は苦笑い。

すると、逃げ出した利兵衛と入れ替わるようにして、善兵衛が戻ってきた。善兵衛は利兵衛とすれ違っていたらしく、

「さきほど、簗田殿の小姓が泣きながら飛び出していきましたぞ」

と、不可思議そうな顔だった。

「ほっとけ。あいつは泣いているぐらいがちょうどいい」

「はあ」

「そんなことより、家康殿はどうだったんだ」

「ああ。ええ。おやかた様は簗田殿がお見えになられているとのことなら、今すぐにでも支度をするということで、例の三方ヶ原の茶屋で落ち合いましょうと」

「さすが、話が早いじゃんか」

と、牛太郎は腰を上げた。

「でも、簗田殿、万が一のことを考えてくだされ。おやかた様に何かがあれば、我ら三河勢は終わりなのですから」

「善兵衛。あんまりそういうことばっか言うとな、本当にそんなことになりかねないんだから、あんまり口にするな」

善兵衛は不服そうに口をつぐんだ。

牛太郎は治郎助とともに、本坂街道を上っていき、例の茶屋にやって来た。相も変わらず野原へと朽ちていくようなあばら家で、中を覗き込んでみると、老婆は薄闇に溶け込むようにしてぼうっと腰掛けており、健在であった。

「いらっしゃい」

老婆はしわがれた声とともに、白目だけを薄闇の中でぬうっと持ち上げてきて、治郎助が後ずさりした。

勝手知る牛太郎もさすがに寒気がしたが、

「女将。小豆餅と茶を二つずつ頂戴」

「あいよお」

老婆が奥に消えていくのを見届けて、治郎助とともに軒先の濡れ縁に腰掛けた。

「ほ、本当にこちらなんですか」

「まあ、騙されたと思って食べてみなさい」

と、被っていた傘を外しながら、悠々自適の隠居風情であった。

昼中ののんびりとした野原に温かな日差しが注ぎ込む。季節のわりに風も穏やかで、衣服を着込んでいるには暑いくらいであった。

「あいよお。小豆餅」

急に現れてきて、びくっと肩を震わせた牛太郎と治郎助。老婆は欠けた歯をにやにやと覗かせながら、屑茶と小豆餅を濡れ縁に置いていき、また、ひんやりとした居場所へと帰っていった。

治郎助が、睫毛の先を小豆餅にじっと落としている。

「食べてみろって。それとも、助さんは甘い物は駄目だったのか」

と、牛太郎は小豆餅を手に取って、二つに割り、片方を口の中に放り込んだ。甘味が喉の奥まで染み渡り、鼻から抜けていく。突き抜けるような甘さに思わず瞼をつむってしまうも、糖分に不足がちな体を潤していくようであった。

「いやあ、うまいっ。土産に持って行きたいぐらいだ。あずにゃんやあいりんにも食わせてやりたいよ」

舌鼓を打つ牛太郎を、治郎助はじっと眺める。

「食ってみろって。いらないならおれが食べちゃうぞ」
「あ、いや」
治郎助はようやく手に取った。そして、食べた。
「どうだ」
「あ、う、うまいです。でも、うーん、やっぱり彩さんの団子茶屋のほうがうまいかも」
「なんだと？」
「い、いやっ、そういうつもりではなくて」
あわてしきって屑茶を口につける治郎助をじいっと睨む。そうして、深々と溜め息をついて、牛太郎も屑茶をすすった。
「まあ、お前らは美男美女でお似合いなのかもしれないけどな」
と、背中を丸くして小さくなっている。
「どこまでの仲なのかは知らんけど」
「いやっ、旦那様、そんな仲ではありませんって」
「でも、惚れてんだろ？」
と、牛太郎は傍らの治郎助に目を持ち上げたが、その視界に怪しげな釣り目の少年が入った。わりと離れたところではあるが、いつの間にいたのか、手ぬぐいを頬被りした百姓風体の大柄な少年が、姿に似合わぬ小綺麗な杖を携えていて、こちらを凝視してきている。
「助さん」
牛太郎は声をひそめた。
「やばいことになった」
治郎助が振り向いた。と、そのとき、少年は右手に支えていた杖の端を左手で握り締めた。
仕込み杖だった。
武田の忍び――。
牛太郎と治郎助は濡れ縁からおもむろに腰を上げる。牛太郎は脇差しも太刀も備えてきていない。が、治郎助は懐に短刀を忍ばせていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4968s/

ふりちりすべる

2011年11月5日20時45分発行